

風俗草紙臨時增刊號

秘蔵版

風俗草紙



秘蔵版

風俗草紙



風俗草紙臨時增刊





ヒュッ、ヒュッ、ピシッ！ 虚空をきって飛びうなる鞭の音。まあるく盛りあがった白いヒップに、音とともにまつわりつく鞭。女は痛みと苦しみのために、白蠟のようなからだをくねる。「アッ、アッア…」うめき声は、鞭打つ女の快感を、いやが上にもかきたてる。圧倒的に同性愛が多いといはれる外国人の逞しく力強い性愛！これは米国版同性愛女性のサジ的写真である。

編集後記

本誌「風俗草紙」は発刊以来、既に七ヶ月を迎えたが、その芳淳な媚酒、強烈な麻薬の如き魅力は月毎に怒濤の絶頂を浴び、遂にこゝに、数十万愛読者の熱狂裡に、「秘蔵版」の発刊を見るに到った。

この秘蔵版は、本誌が発刊以来、数ヶ月に亘つて秘かに想を練り莫大な費用を投じて、現代一流の執筆家を網羅して結実した、内容体裁ともに古今未曾有と斯界に自負する豪華版である。一面、アブノーマルな耽美の世界に酔溺するマニヤの心の糧となり、一面異常性心理を犀利に解剖して、文字通り「秘蔵版」の名に恥じざることを期したものである。

しかし、かゝる豪華な企てが見事に結実したのは、ひとえに執筆諸先生方の理解ある御協力によるものであって、その点衷心よりの感謝を捧げて止まない。

さて、本書の内容について、少々贅言を尽させて置くと、開巻第一頁を飾る、折込八色口絵「灼熱の虐なみ」は、今年度本誌が送り出した異色の新人中川彩子氏の素晴らしい力作である。この迫力に満ちた絵はサチ・マニアの垂涎の的となろう。「現代一線画家責め絵豪華画集」も、知名の筆者を輯めて見事なパラエティを盛り得

たし、本誌の為特に秘写した「悦虐大写真集」は、その妖美な雰囲気、恐らく息を呑み、戦慄を感じる方が多いこと、思う。「男性ヌード」「変態美術館」また多言を要しまい。

また、本文に移ると、これ又綺羅星の如く並んだ一流大家、ハートに訴える魅惑の題目に、どれから読むか、迷われる方も多いこと、思う。高橋鉄氏の「裸体アブ・ラブ」は特に本誌の為に、秘材を投入した好エッセイ。斎藤昌三氏の「奇書物語」は豊富な造詣を傾けた論稿、龍膽寺雄氏はレスボス党の狂喜すべき一文を執筆された。

以下藤沢博士、伊藤画伯、武野東雨叟、坂ノ上言夫、平野威馬雄、正岡容、三宅一朗、日夏由起夫、岩堀光、喜多玲子、鹿火屋一彦等々、数十氏の全頁に充実した絢爛たる文章は、再読三読に価するもので、繰述するも愚であらう。

「秘蔵版」編集の特色としては、サチズム、マゾヒズム、フェチズム、ソドミイ、レスボス、その他すべての変態的セックスの世界を一堂に会し、あらゆる角度からその真態を把握しようとしたことである。いわばアブノーマル・セックスの一大交響楽である。こうした企ては、先にも記したように、本誌をもって嚆矢とするもので、これを完成させるに当って当社の払った労力は誠に筆舌につくしがたいものがあり、出来上った本誌を手にして社員一同誠に感慨の深

いものがあつた。

何卒、本書記載の内容についても愛読者各位の慎重なる御検討に依つて、御意見をお寄せ下さることをお願いすると共に、この努力の結集によつて、本誌が愈々完璧を期せることを念願して止まない次第である。

昭和廿八年十二月 五日印刷
昭和廿八年十二月十五日発行

風俗草紙 臨時増刊

秘蔵版 風俗草紙

定価 五百円 (送料五〇円)

編集者 氏 家 富 良

発行者 野 村 佳 秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十三番地

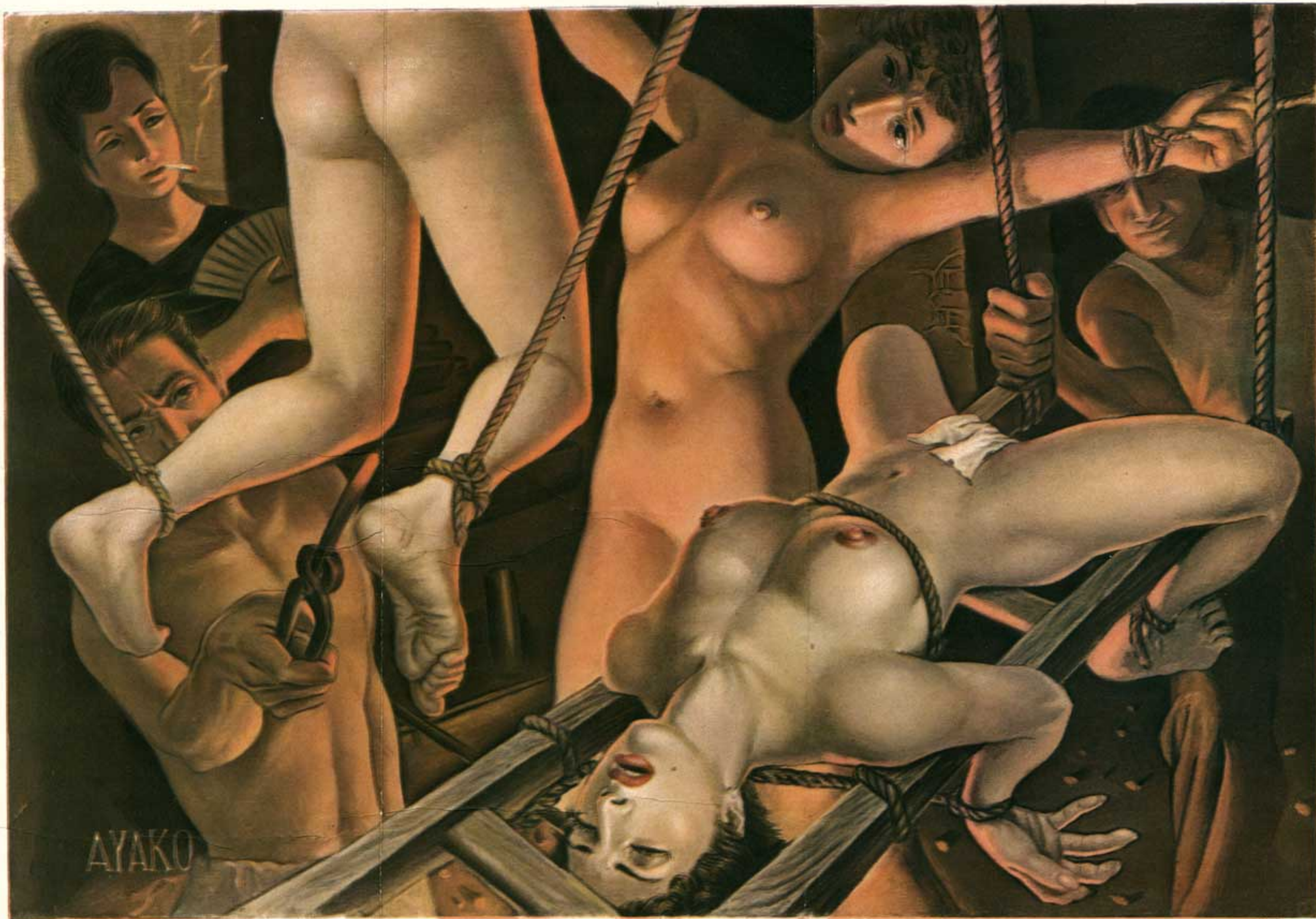
発行所 日本特集出版社

電話九段(33)三四二七番
振替 東京 二四二五一番

灼熱の虐なみ

中川 彩 子画

火勢が強くなつて炎の舌がのび上ると、梯子の上の娘が絶叫をあげ、グウッーと胸を反らし、両足首を踏んばり、あられもなく腰を高く持ち上げる。炎から少しでも遠れようとする果敢ない抵抗が、グルリを取巻く悪魔共にはこの上ない見世物なのだ。「アッ、救けてッ……」火の前の娘はどこを炎に紙められたのか、羞恥と苦痛にうめく。「フッ、耐まらねえ……」悪魔は舌舐めずりして、又も宙吊りの娘の足裏に真つ赤な焼ゴテを近づける……



現代線
豪華責め繪大画集



美女の逆吊り

神保朋世画

戀の嫉刃

由岐葵画



「太夫！ よくも妾をだましておくれだね。あんな小便臭い小娘に見返えられて、この姐さんが黙つて引つ込んでいちやあ世間のもの笑いだ。サア、今夜は太夫の躰を散々オモチヤにして、その綺麗な顔に白狐のお蓮の怨みをちよつぴりつけてやる、観念おし！」

葵



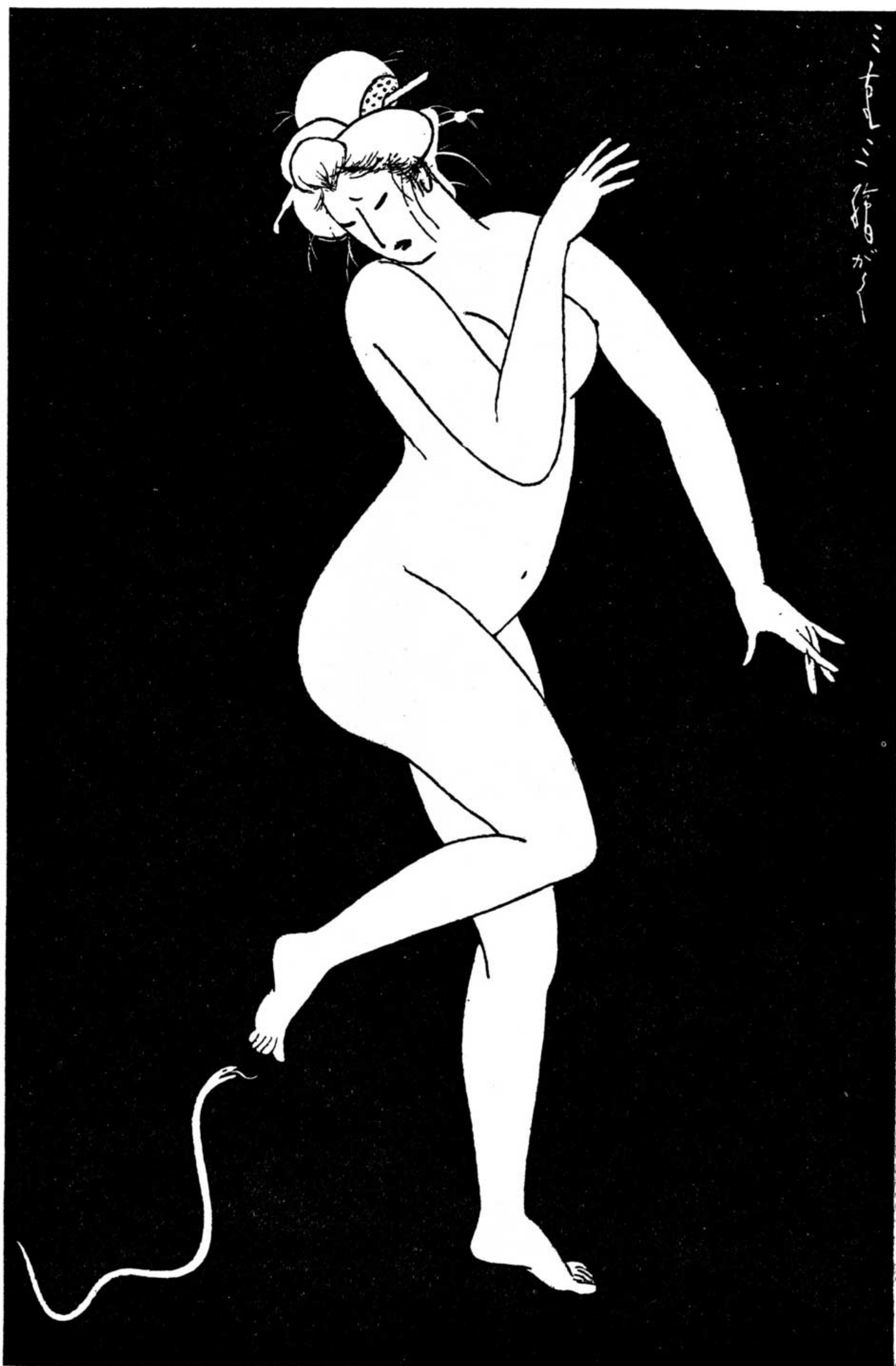


三
重
三
画
の
姿

む ち

清水三重三画

へ び





「いたつ、いた……七さん、止めて、ねえ、もう勘忍、いたつ……」身をもんで逃れようとする娘の体からムツとむせ返るような女の匂い。まつ白なぬめ肌にプツプツと吸き出る血の色が男の嗜虐心を一しお煽つて、「くそつ、静かにしろい！ 濡れぬ先こそ露をもいとえ、昨夜散々俺の自由になつた癖に往生際の悪いアマだ！」



いれずみ

三谷一馬画

羞花二題

喜多 玲子 画

妬(とじゅう)獸

「よ、よし子。あの男は一体君の何だ。此の僕と結婚すると約束しておきながら、あんな男と……。さあ云え。云わないか」

云わないか、と責めながら、彼はよし子の口から猿轡はとらないのだ。焰のように燃え上る男の妬心は、もうそんな不合理さえ気が付かぬほど狂っているのかもしれない。

「……調べてやる。か、からだを調べてやる……」

ひし／＼と縛り上げる縄目の強さに恨みがこもって男は獸と化していった。





——賭(かけにえ)様——

となりの部屋で、勝負を争う男達の荒々しい下卑た声が一きわ高くなる。

賭けられているのは、彼女たちのからだなのだ。半ば開かれた襖越しに時折、ちろちろと賭儀かけにえの女たちを見る彼等の眼は、狂ったけだもののように血走しついていた。

「さあ、四番まではかたがついたぜ。あとの二人が飛び切りの上玉だあ！」

「よしッ、勝負だッ」

今にも引きづり出されるかも知れない羞恥と恐怖に二人の娘は身を震わせた。





股の紂王は姐妃のすゝめによつて、孕み女の腹を裂いて子供を見るのを楽しみにしていたが、ある時女の腹を裂こうとすると、忠信雷震が飛んで来て之を止め、これがため姐妃は狐の正体を現はして、日本に渡つたといはれる。

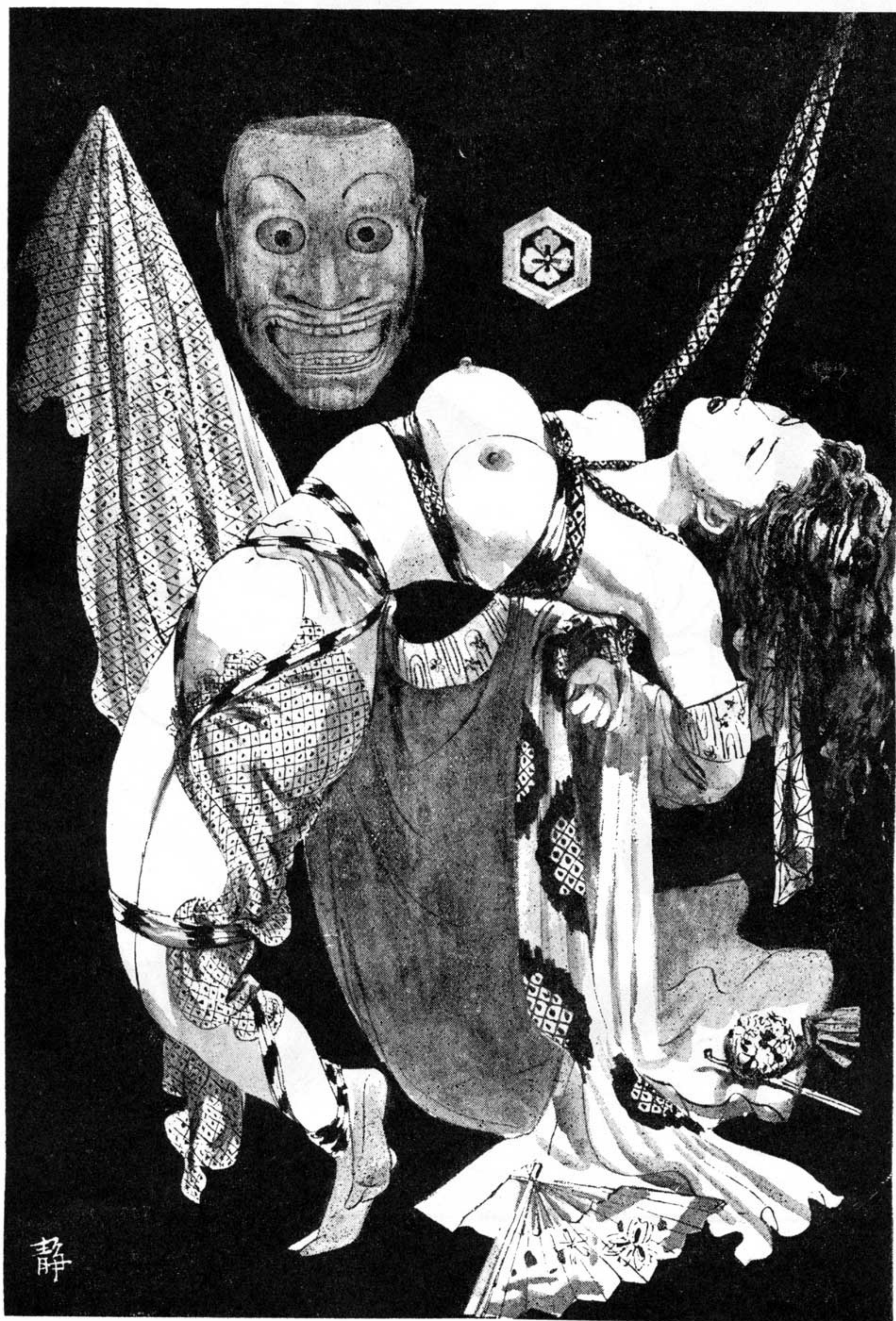
腹裂き二題



阿部の貞任の母いばらは、八幡太郎を呪い、孕み女の腹を裂いて取り出した子供を滝壺に封じ込めて旱天の祈りを龍神に捧げ、天下を乱さんと計るのを、殺された女の良人によつて見現はされ、八幡太郎のために亡ぼされる。奥州安達ヶ原として芝居に伝はる一幕。

面能う 囃

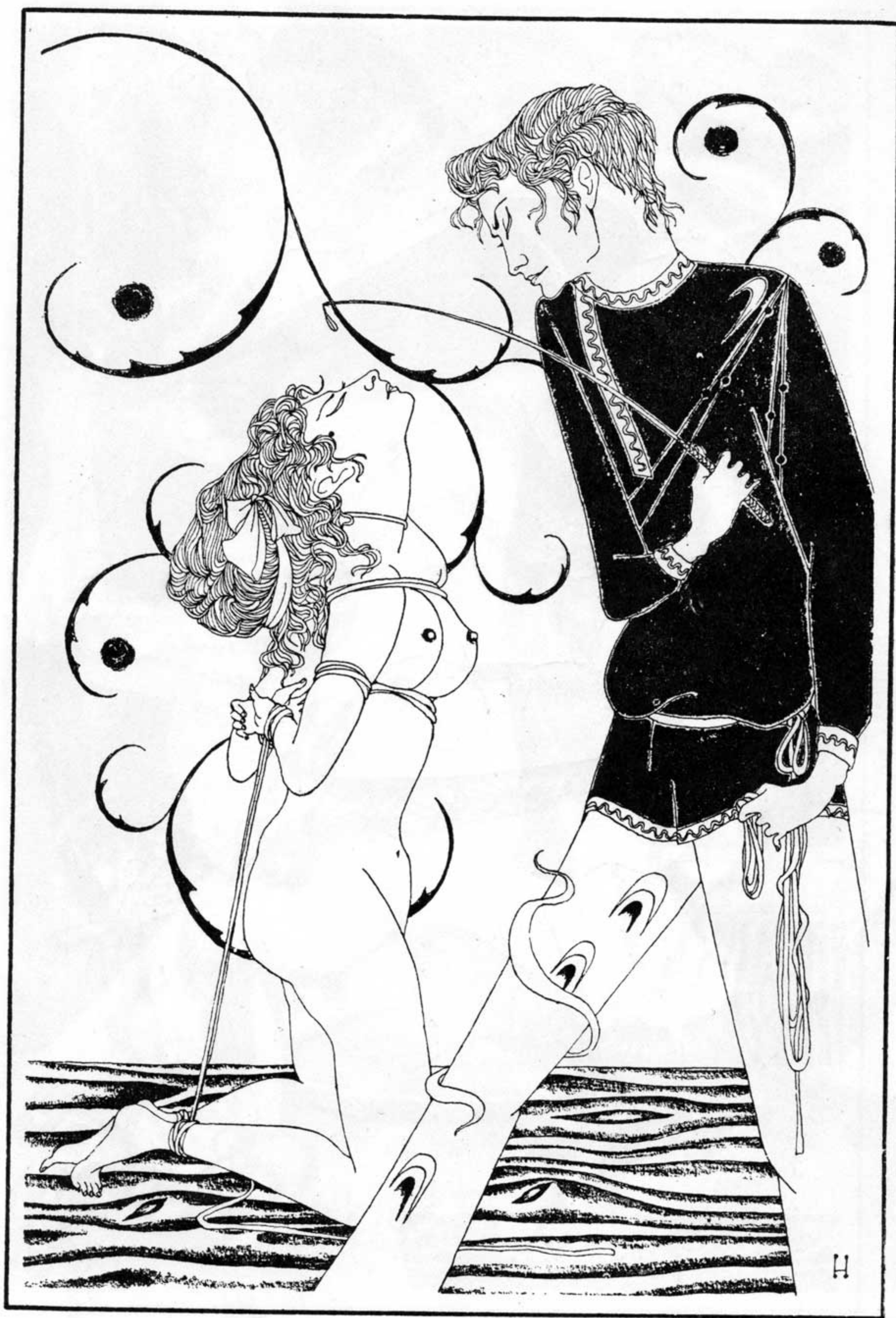
面男静木八



静



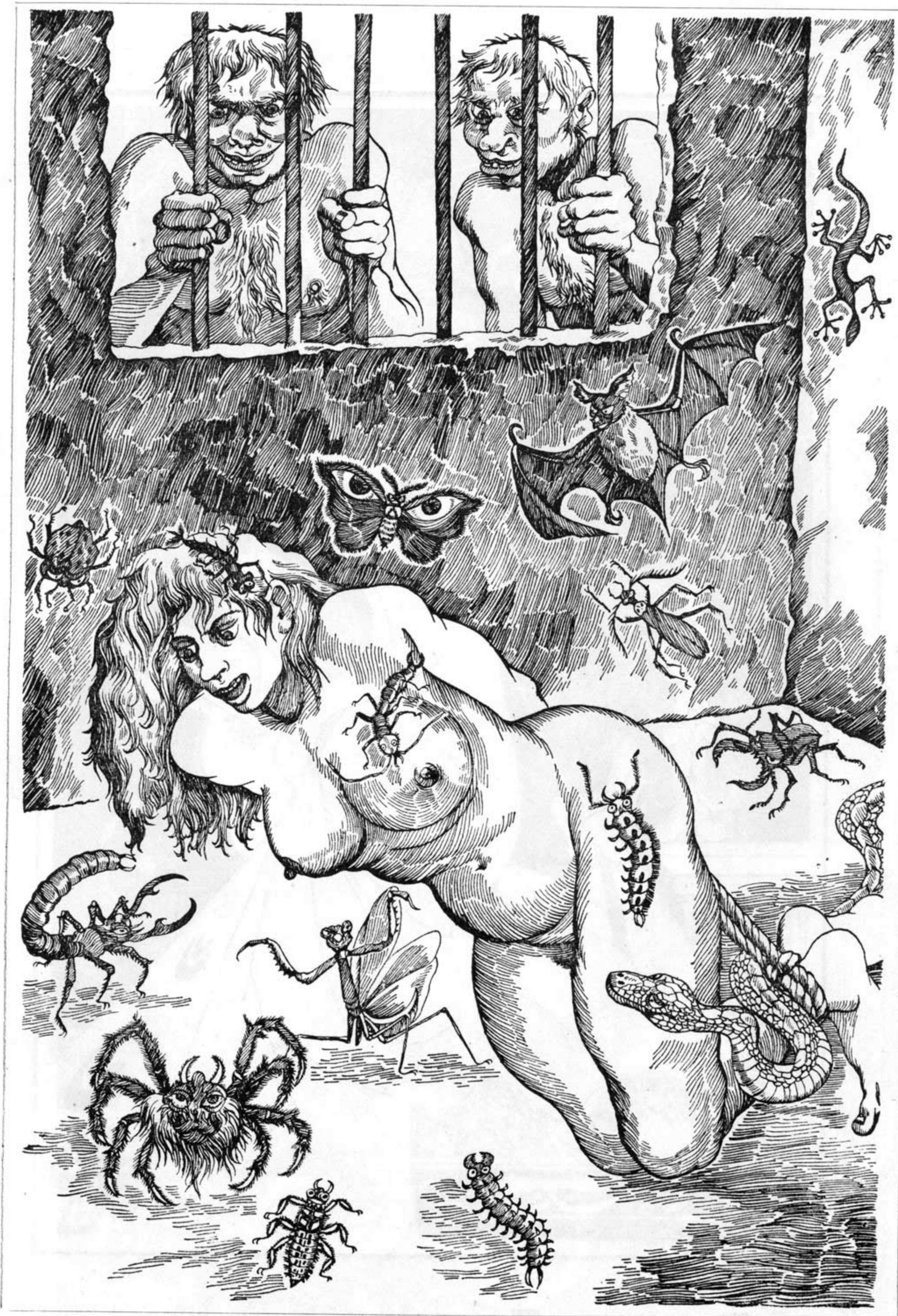
いけにえ料理



濱田 稔 画



鞭 二 題

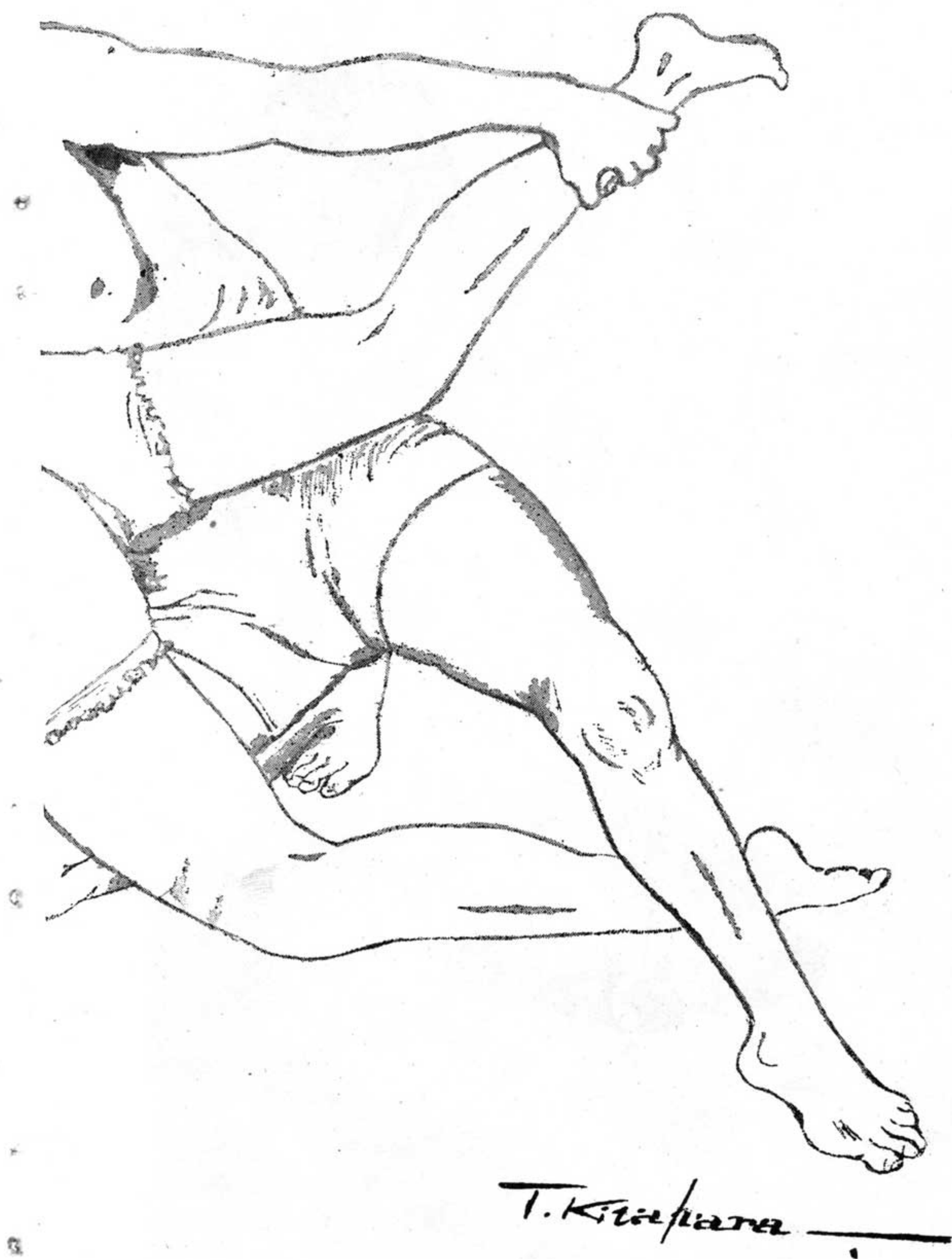


妖蟲の部屋

大橋 彌生 画



蛇の穴

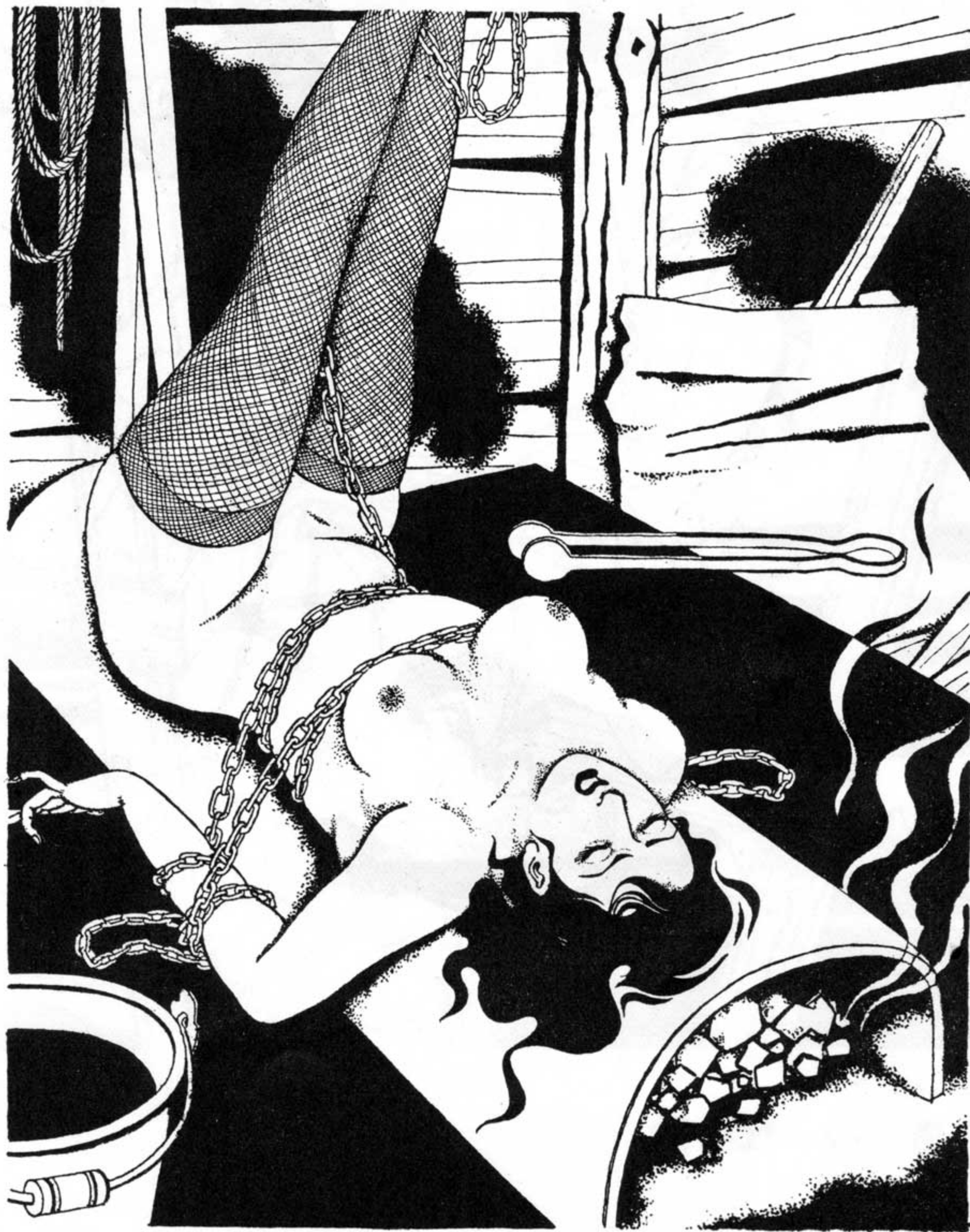


愛の虐^{さい}なみ



灼かれる女體

古庄英生画





血の仕置

醜鬼迫る



水澤深雪画



悲鳴も盡きて……

「どうだお嬢さん、苦しいか。下男のくせに……と、その赤い唇で云つたぢやないか、えゝ、さあもう一度云つてみろ。」

高い梁に吊られた傷だらけの女、今はもう悲鳴もない。だが、ガランと広い旧家の納屋の底から、執念に青く燃えるような男の声が、まだ執拗に這ひ上ってくる。



羞恥の悶え

野崎耕作画

集 眞 寫 大 虐 悦

蛇

淫

百

景

眞 々 寫 特 誌 本



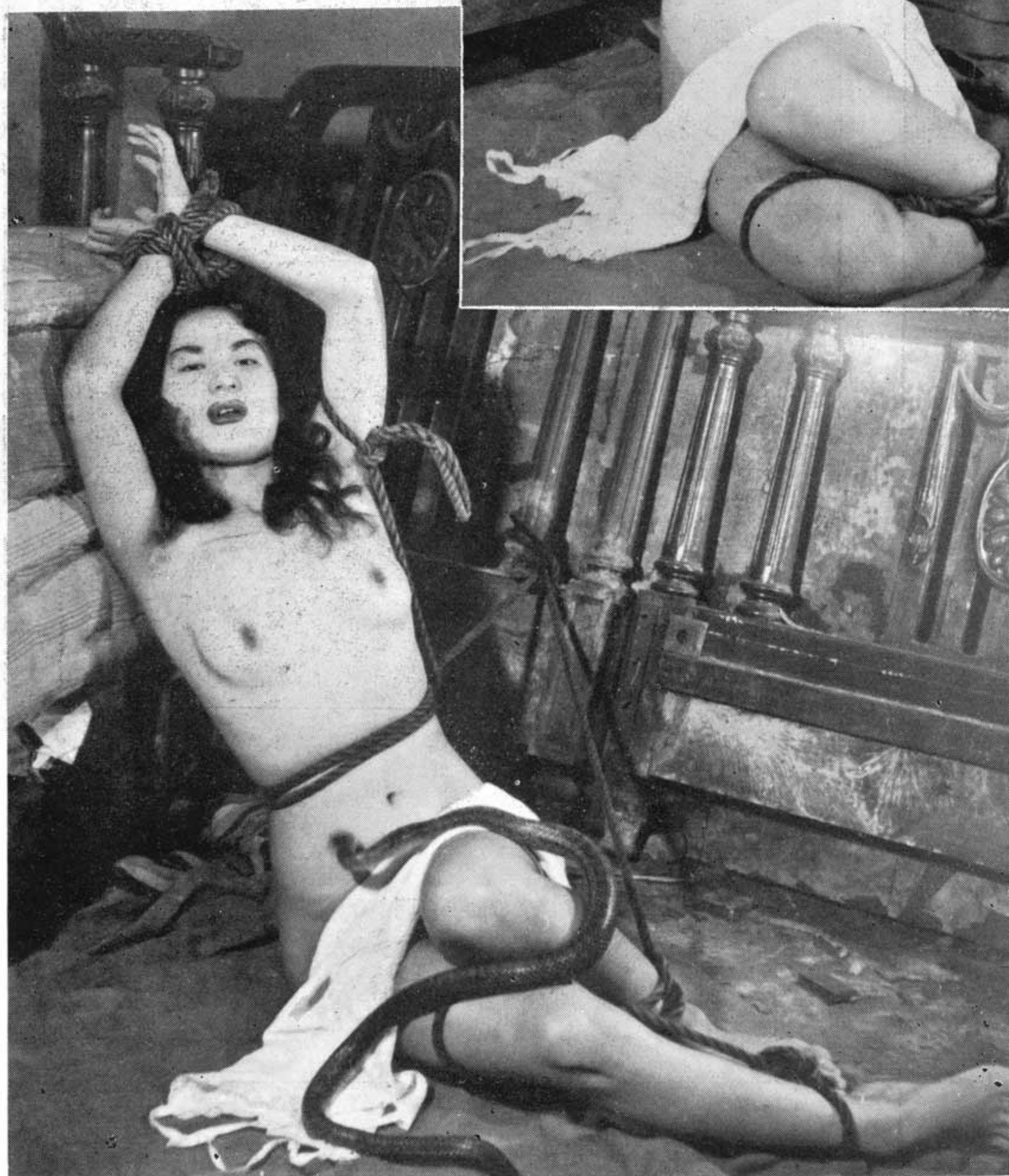
き 呻 の 怖 恐



肌の温みを求めて……

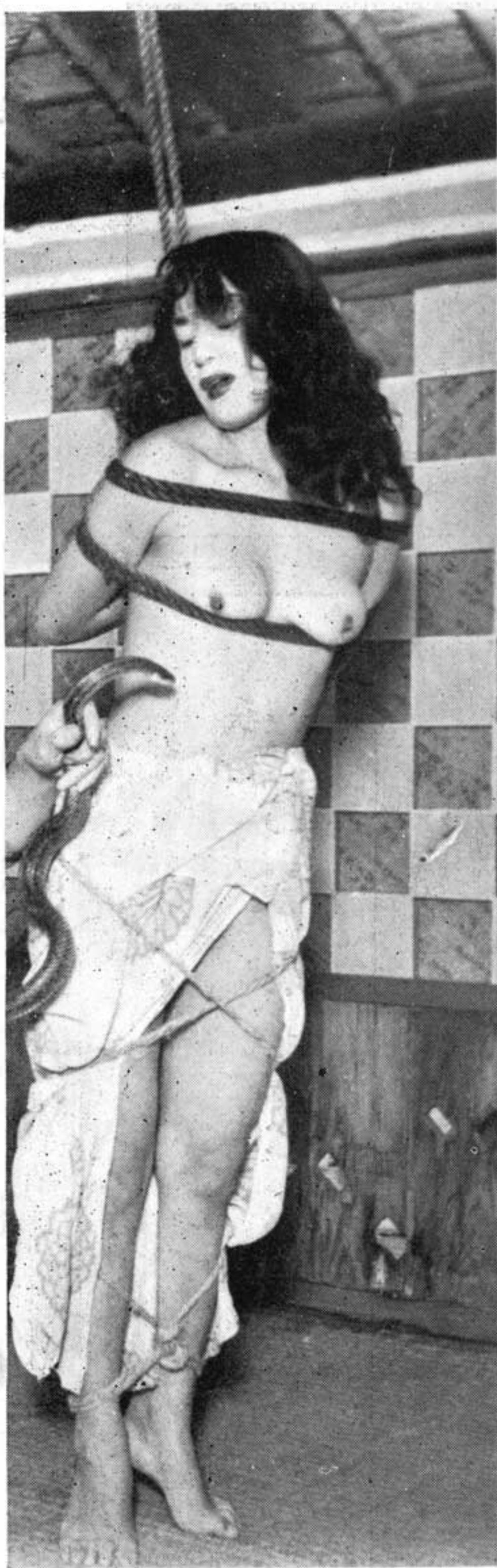
荒れ果てた洋邸の一室。床を這うさらさらという毒蛇の忍びよる音。脂粉匂う女体を求めてやがてベットへ——
「あつ！ いや、いや」女は叫べど、誰とて援けは来ない。

狙^ね
う
鎌
首



悲
鳴
も
果^は
敢^か
な
く
……

威 嚇



「おい、いい加減に言うことを聞きな。悪くはしないよ
この可愛いやつが、お前のその小さな赤い唇を吸いた
いとさ。それとも、その白い頸に巻きついてもらうか？」



乳房にうごめく

魔手



みだらな偵察



攻撃寸前





攻 撃



恥辱と恐怖の涙



風に曝されて.....





囚獄の處女

集 眞 寫 大 虐 悦

繪 獄 地 娘

集 眞 々 寫 特 誌 本



肌 女 也 た れ か む



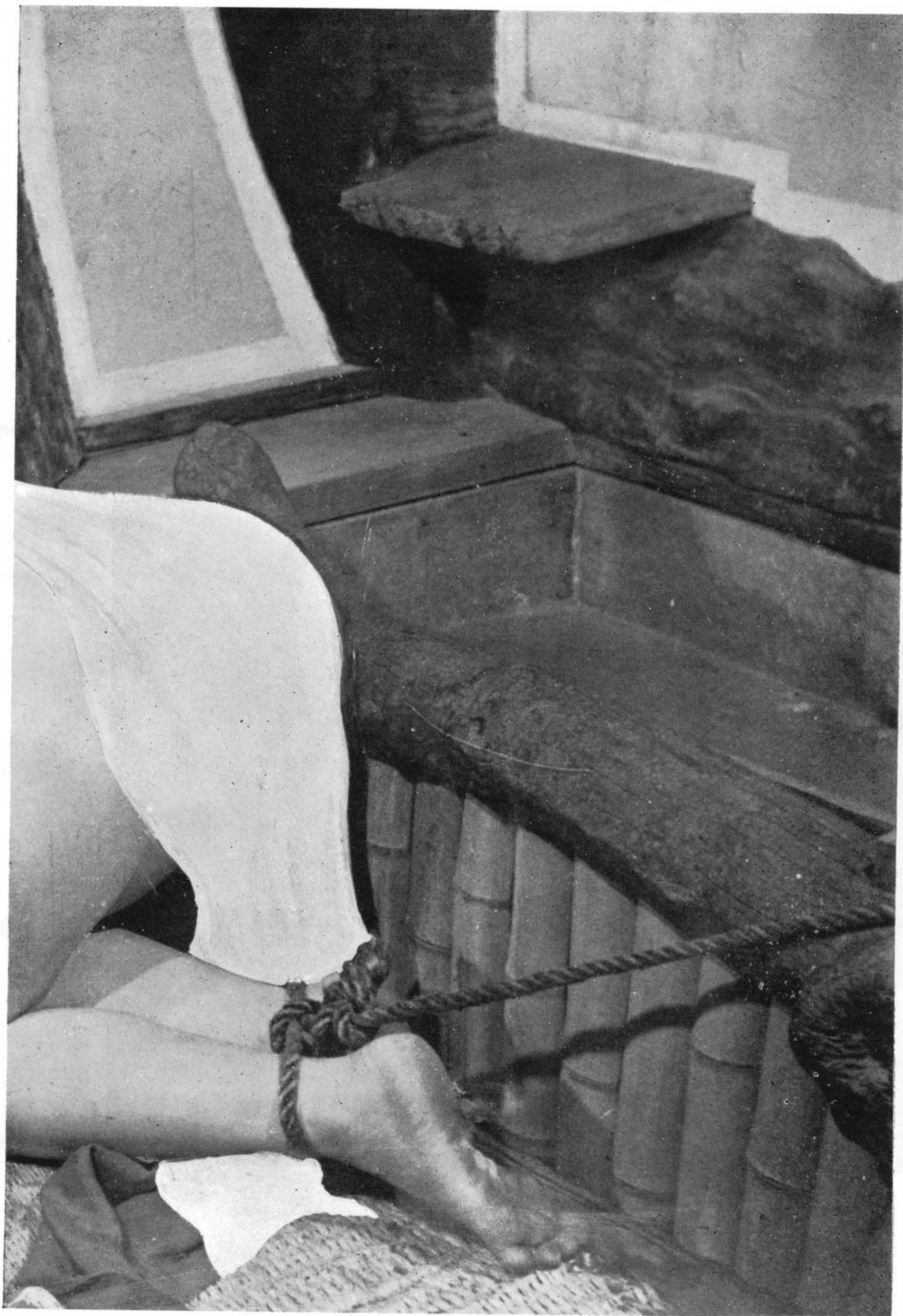
人魚責め

着物をむかれて全裸になった人魚。その餅のような白いやわ肌を喰い込む縄。魚は羞恥に身をくねらす、すると手脚の縄は情容赦もなくきりきりと締めつけるのだ。





括　り　猿





羞 恥 地 獄

繩 入 り 食





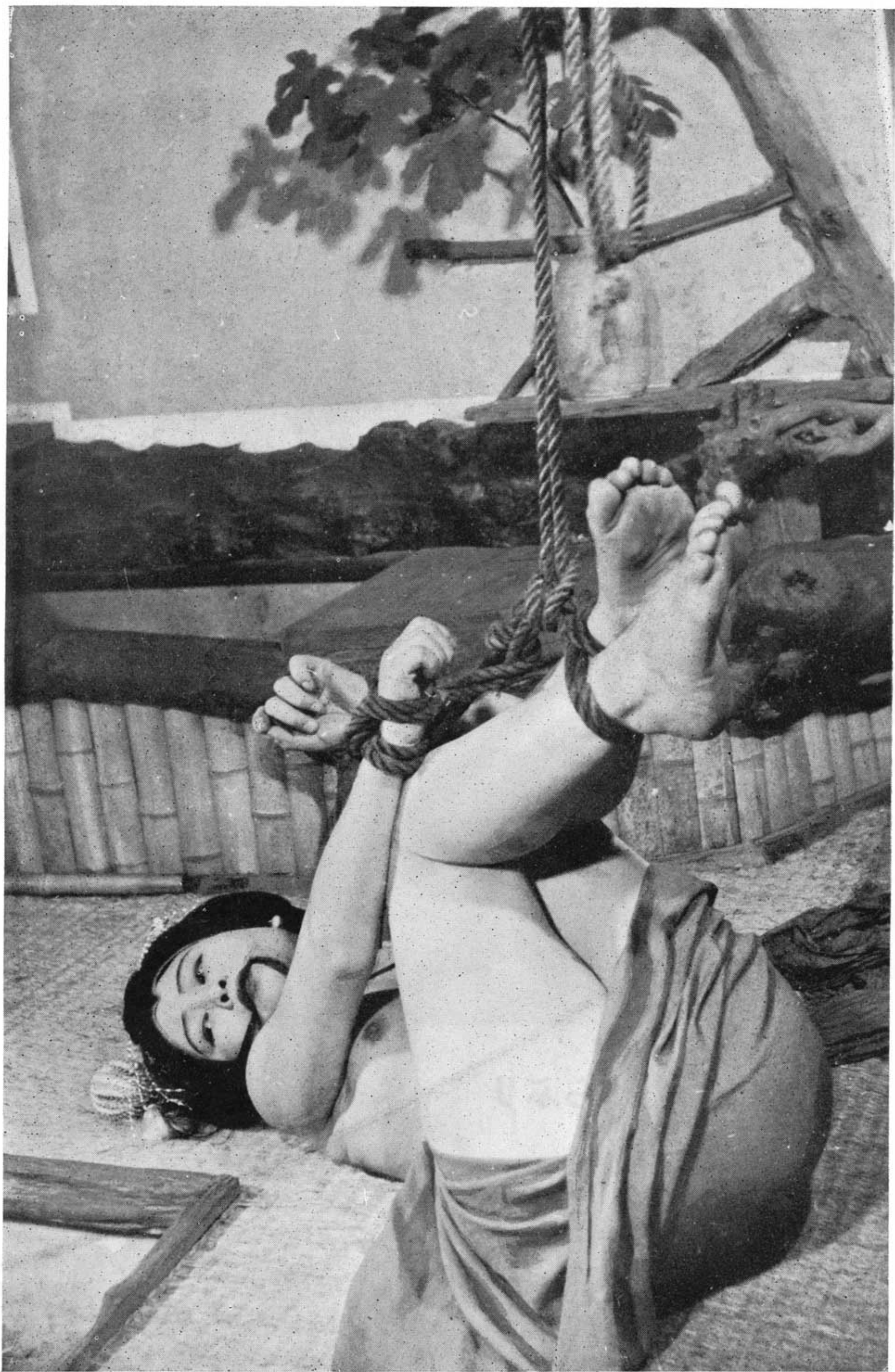
無慘・棒責め





無惨ないたづらぶり

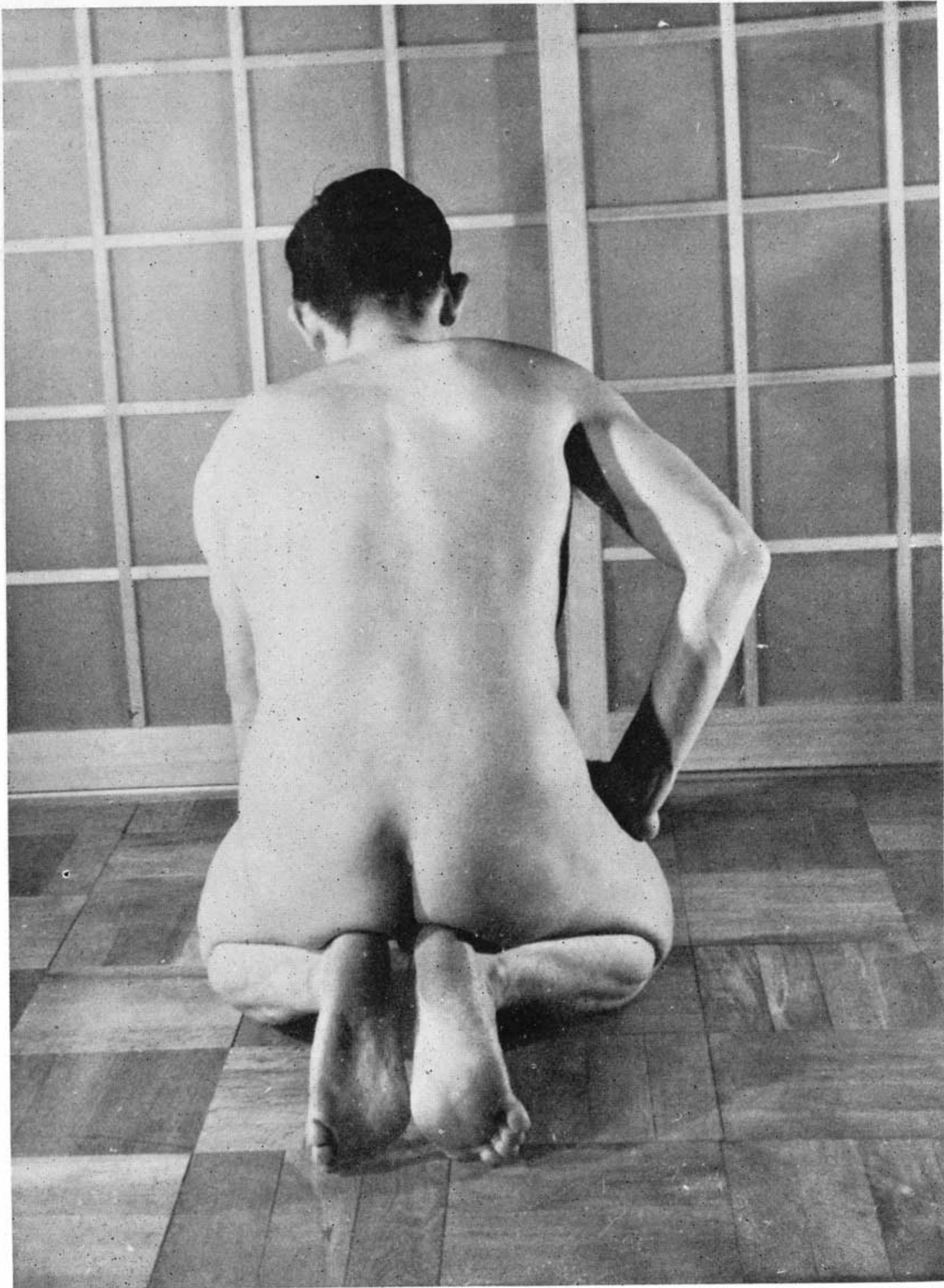
「さあ思い知ったか！ 素直に俺のいうことを聞かれねえ
あまつちよなら、えい、こうして縛って、俺の思い通りに、
可愛がつてやらあな。泣くとも叫ぶとも勝手にしな」



亂れる腰巻

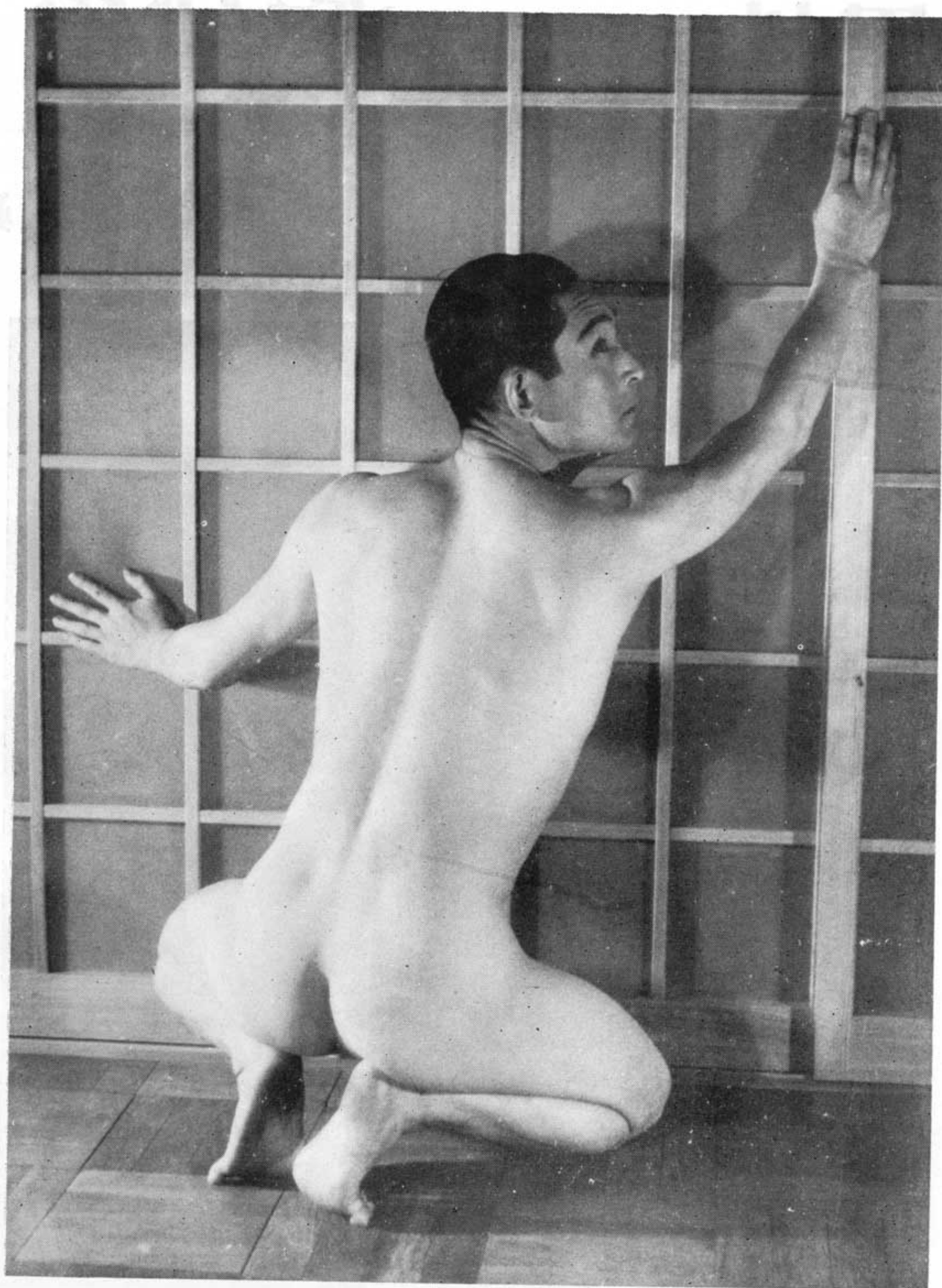
男性ヌード緊縛集

本誌特寫々眞



靜

思

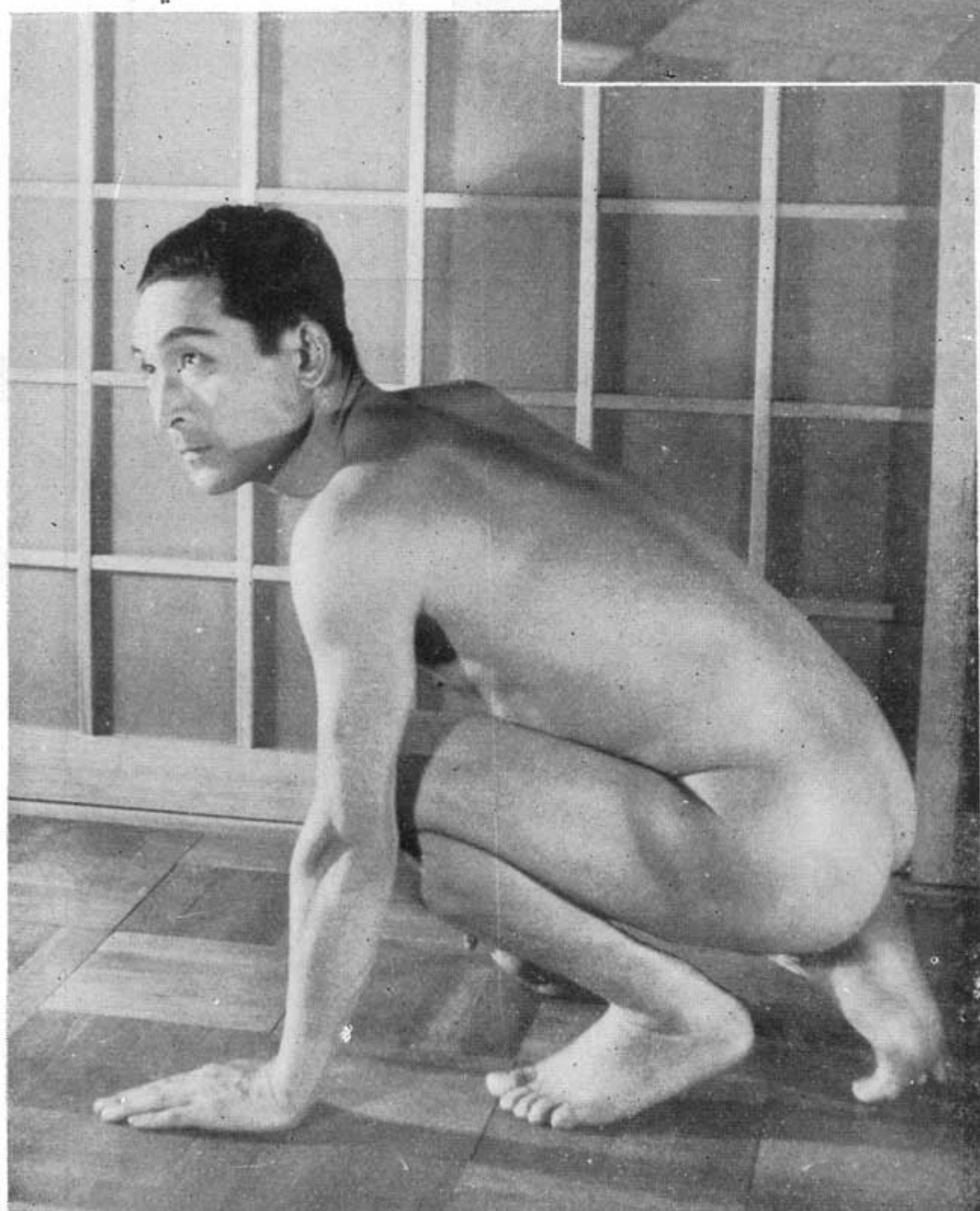


燃ゆる想い

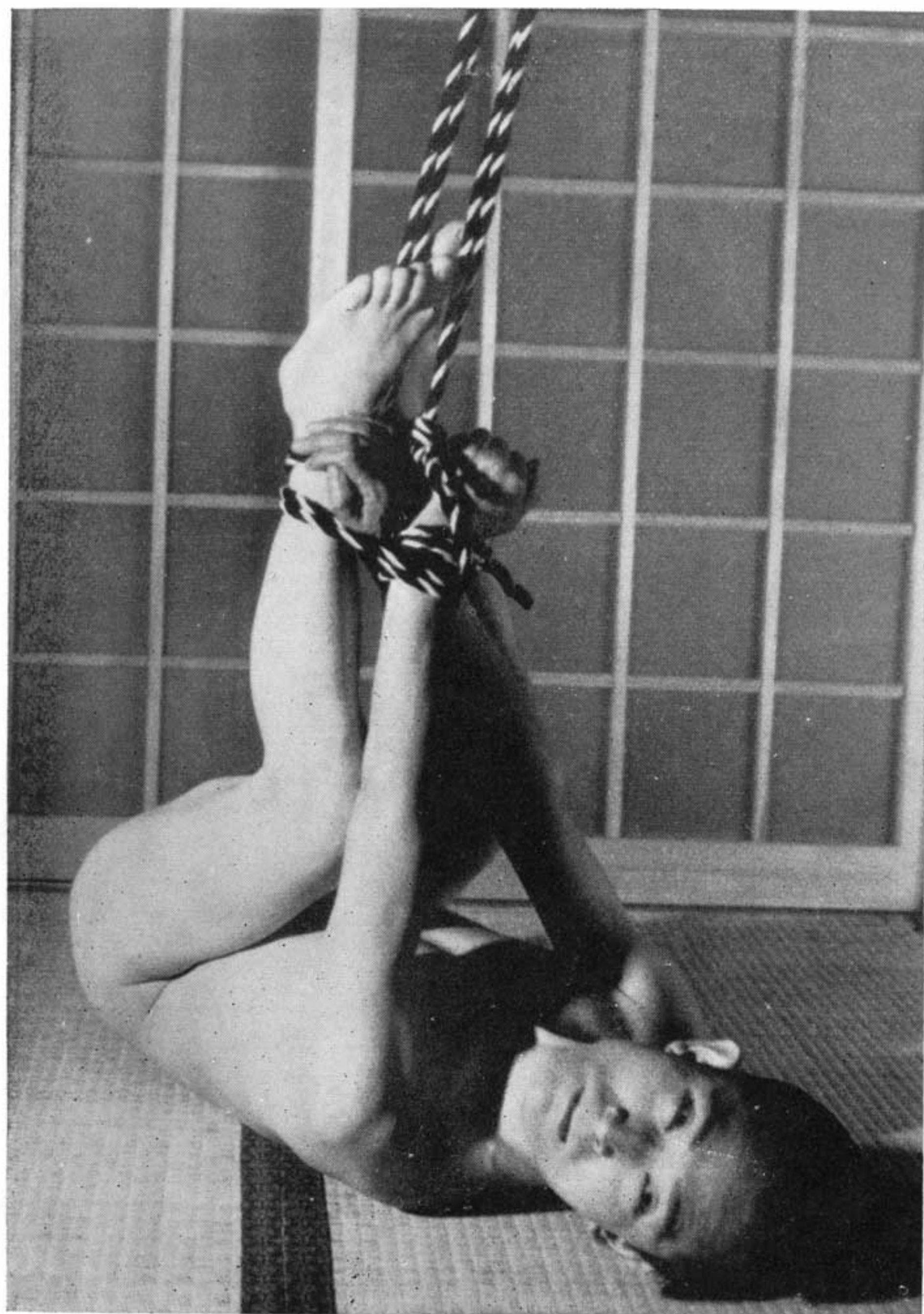
情
熱



戀
慕

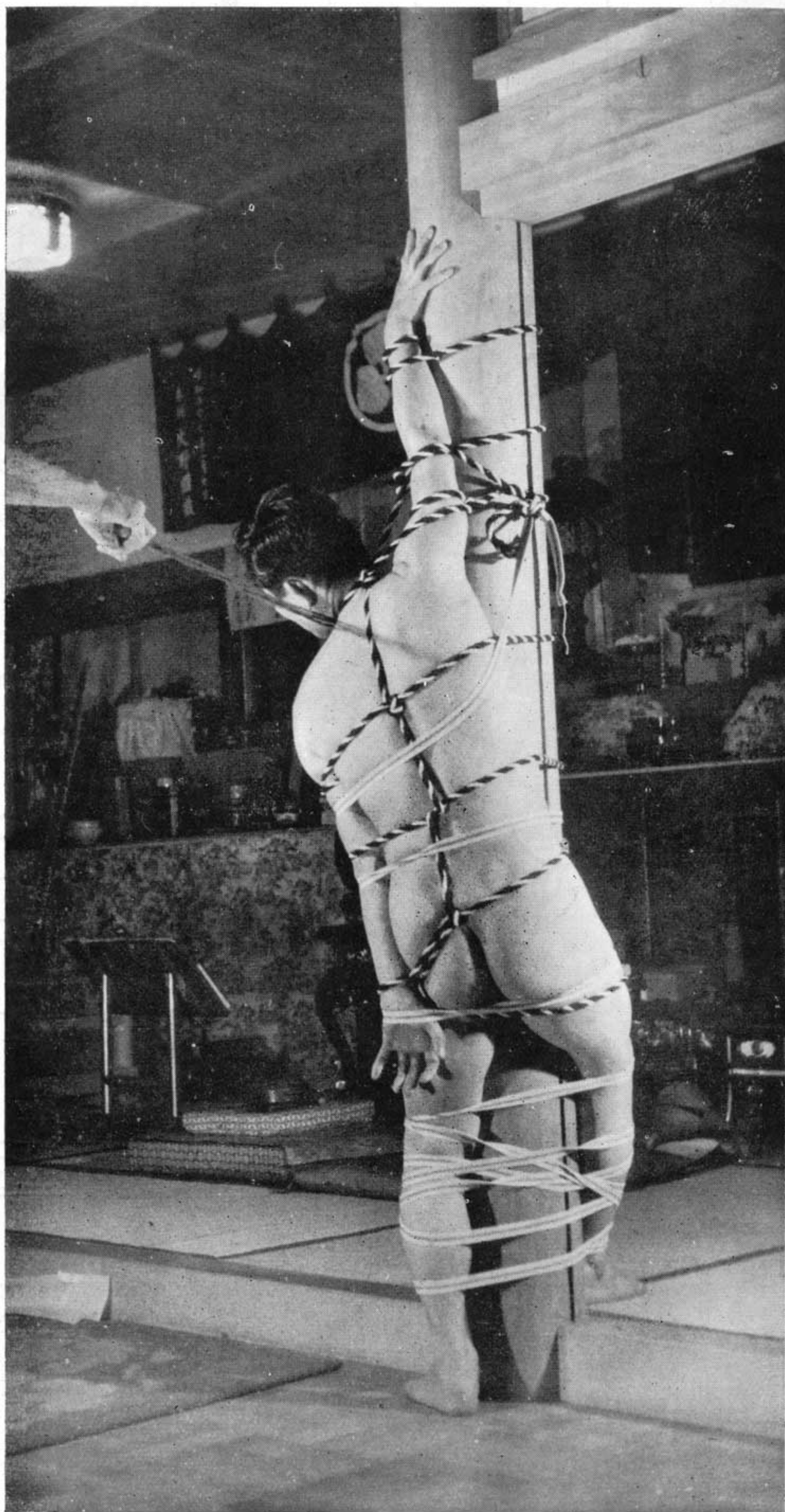


括られて……



翻
弄





虐 嗜 の 愛

女間者 雪肌地獄曼陀羅

神島裏什
冷たうさる



『さあ早くご用意遊ばせ、その湯文字もとつてしまふのですよ。』

老女はもちもちしている女中たちのお尻を叩くように邪剣にいつた。

雪も今は拒むこともできなかった。これも殿さまのため……そう思つて、湯文字の紐をかむようにしてとくと、たてた膝頭で、わずかに下腹をかばうようにしていた。

『さあみんな並んで……上さまがお待ちかねでございますよ。』

老女はなんの感興もわかぬげに白い顔を、女中たちにむけた。

——御意に入る筈奥さまも柳腰——
——鮫肌へ百萬石の墨がつき——

そんなザレ言が一般の口につたわるほど、將軍綱吉は柳沢吉保の屋敷にしばしばでむいた。吉保の妻お鮫どのがはたして將軍の夜伽をつとめたのか、また、吉保の子吉里に將軍が百萬石の墨附をやつたのは、吉里が將軍の實子であるためなのか、それとも、いちぶに傳えられているように、ほんとうに、綱吉將軍が性的不能者で、前になくなられた愛妾お伝の方の子は、事實は柳沢吉保の子なのか、反柳沢派の間にはなにも一つまだ真相がわかつていなかった。お雪はそのために、反柳沢派の主將甲府宰相綱豊と、その参謀新井白石の密命を受けて、柳沢邸に奉公にでていた。はたして、柳沢吉保の腹に、將軍家乗取りの野心があるのかどうか、その真相を探りだし、吉保を失脚させる材料を掴むために。



雪たちは、はだかのまま一例にならんで、奥座敷につれていかれた。

將軍綱吉も柳沢吉保も面白そうにぞろぞろならんでくる女中たちをみていたが、女中たちが、お乳を蔽うようにしてたたみに手を

き、一礼するのを見ると、吉保がいった。

『みなのかなに、おそれ多くも將軍家や、この吉保の動きを探り、野望を抱く某家の人にあらぬことを伝えようとする間者がいりこんでいるそう。たとへ神の眼はごま化されて

も、將軍家の御威光の前に、そやつの正体かくしおおせるものではない。みなのかのたれがそうか、わかつているが、ただ、そやつをひきだしただけでは趣向がない。ただ今から將軍家が、この座敷を海にみだてられて、

網をうたれる。そのほうたちは、人魚じや、投網にはいったものは思うさま料理される。そやつが間者であることは、尊い將軍家の網にかかるだけでも、あきらかであろう。』

女中たちはそんな勝手な分はないと思つたであろう。だが、身に覚えなくとも、網にかかりたくないのが人情、綱吉がおかしげに投網をもつて立上ると、きやッ！と、逃げ去つた。ましてお雪は必死だつた。まだ十七歳の娘には、心の動揺をかくすすべもない。蒼白めた顔色はひとめで、吉保のような老獪なものの眼にはあきらかだ。

『あれえッ！』

『いやでござりまする！』

二十数名の裸女が、さまざま恰好で逃げる、朋輩同志が、投げられる網をかわそうとしてぶつかりころげる。お雪も、ちょうど網のはしが背に當りそうになつて、思わず横に逃げたとたん、倒れている朋輩の足につまづいた。前にのめりそうなのをこらえて、逆に後ろに倒れ兩足をはね上げる恰好になる。(しまった！)

と、立ち上ろうとする上に、土ぐもの脚のようにひろがつた網が落ちかぶさつてきた。

『あれーッ』

網の目をくぐりぬけて逃れようとあせるほど徒勞なあがきをを繰返した。

綱吉と吉保は、面白そうに、雪の肌が網の目の中ではねるのを、わざと把ツ手をのぼしたりゆるめたりして眺めた。



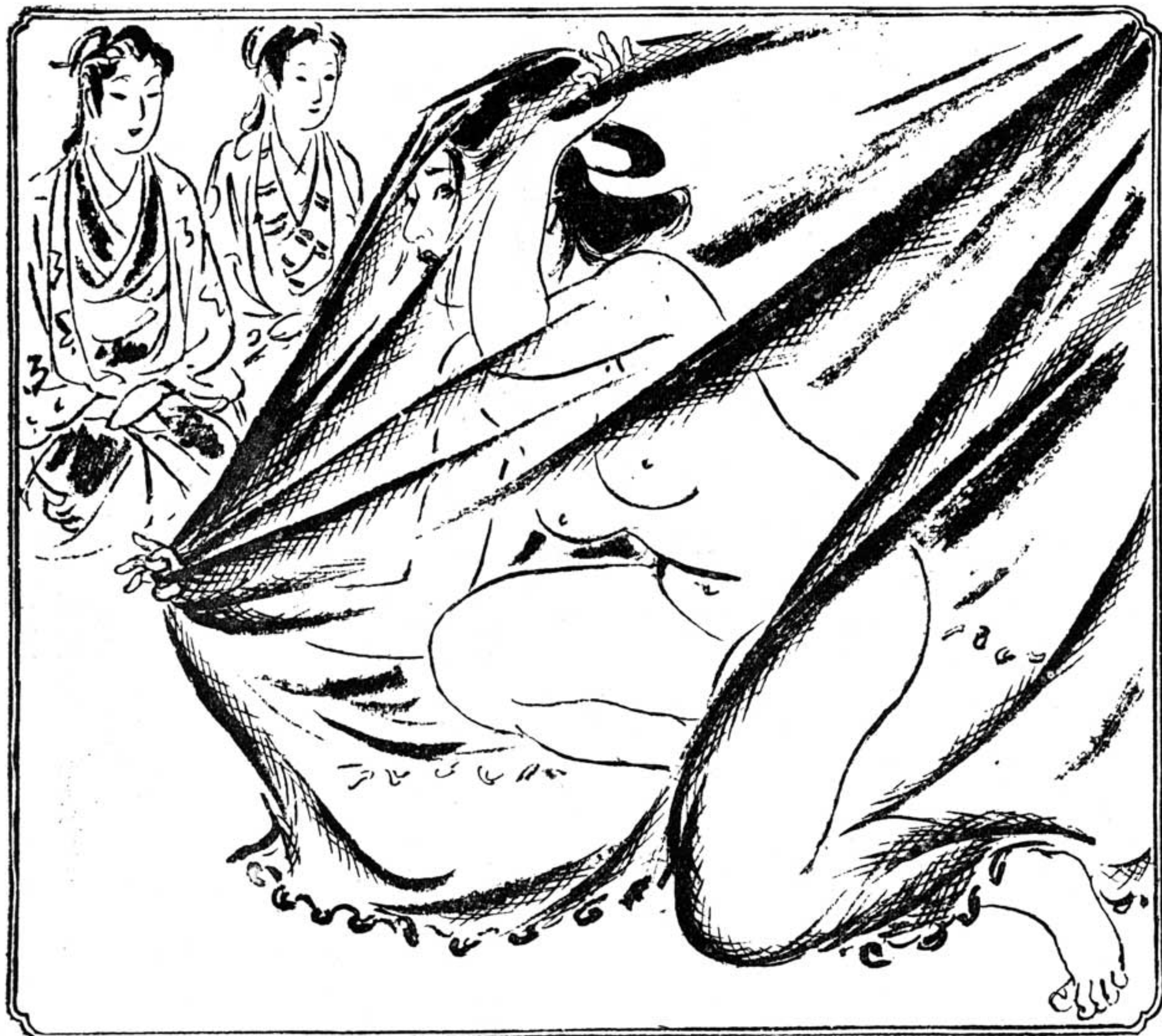
もう百回近く雪は、將軍や吉保、その近臣たちの、どんらんの眼の前で、はしごを上ったり降りたりしていた。

はしごは広間の天井のほりにかけてあつた。雪があくまでも間者でないとこぼむと、吉保は、はしごをただ降り降りしてみよと命じたのだ。

父や兄の眼にすらさらしたことのないわきの下や、脚の動きにつれてかたちのかわる姿態を、雪は、あらわなあざけりと情慾をしめした男たちの眼にさらした。

二十回、三十回と、登りつめては降り、また登る動作を繰り返している、ふともものすじは張ってくる。ともすれば足の裏が、すべつて、また深く、横木をはさむようになる。眼がくらんでくる。たえず吉保の家臣が、雪を追うようにして、時には下から弓の折れで、お尻をぶちながら、『白状せい、だれにたのまれた!』と叫んだ。

水を張った風呂の中で、雪は手足をもがいていた。二人の男が、ゆたなく、雪の動きをみつめていた。彼等は手に六尺棒をもつていて、雪が浴槽の手すりにつかまろうとすると、棒で、その手首や浮き上った腹やお尻を叩いた。
『うッ、あッ、ぐッ!』



雪はなんとか水をのんだ。しだいに、意識がぼやけてきた。時々、身震いした。必死にこらえているのだが、それがこらえきれなくなつて、水を張つた中に、ひとりでもいつもは隠し場所でもたす要求をみたしてしまつたりした。それをまた、呑みこむようなことになつたが、もう、雪には、嫌悪感もなかつた。

やつと水中から引上げられたのは失心直前だつた。床の上に、あうむけに寝かされても、笑つて、じぶんをみつめている將軍家や吉保の眼から、からだのどんな部分も蔽う意志もうしなつていた。

『どうだ、誰にたのまれ、なんの目的で、將軍家の身邊に近ずいたかいうてみよ。いえば、許してやろう。』

吉保がやさしげにいった。

『雪は誰にも……ただ、行儀見習いに。』

雪は齒の間から押出すようにいった。彼女の若々しい肌は、せつかんのために、あわだつていた。

『寒い?』

『は、はい』

『うむ、吉保は慈悲のある男だ。あたためてやるぞ』

雪の両足首、両手首に刀の下げ緒がむすびつけられた。四方から、女中たちが、それをひっぱった。雪は大の字になった。

『用意のものを。』

吉保が命じると、老女が二人、雪の側にか

がみこんだ。両の手に、それぞれ鳥のひな毛をたねたものをもっていた。

『どうするのじや。』

將軍綱吉が吉保にきいた。

『あのやわ毛のさきで、雪をあたためてやりまする。』

『おお、早うせい!』

綱吉はのどの底からつきあがるような声でいった。

老女たちはちよつと將軍のほうにえしやくすると、ひな毛をお雪の肌にあてはじめた。

『うッ!』

『ひ、ひッ!』

端正なお雪の顔は、今までになく、奇妙に

曲んだ。ひな毛が彼女ののど、わきした、手

のひら、お乳のまわりや先のほう、腹、ふと

ももや、それとそれとの小山の谷間、あしの

うらを間断なくはいだした。

『うわッ! くッ、くくッ!』

まるで雪はたのしいことでもあるような声

を洩らしたが、ひたいや、むねに、油あせが

にじみでていた。

四方からひもをひく女中も老女も、雪の感覚がのりうつたようにあせをかき、かがんでいる足ひざを痛いように合せると腰をもじもじひねった。

『うはッはッ』

綱吉も吉保も、狂ったように笑った。

雪はなんどか、床からとび上るようにはねた。そのたびに、ぐつたり、全身の力をうしなつたが、また、

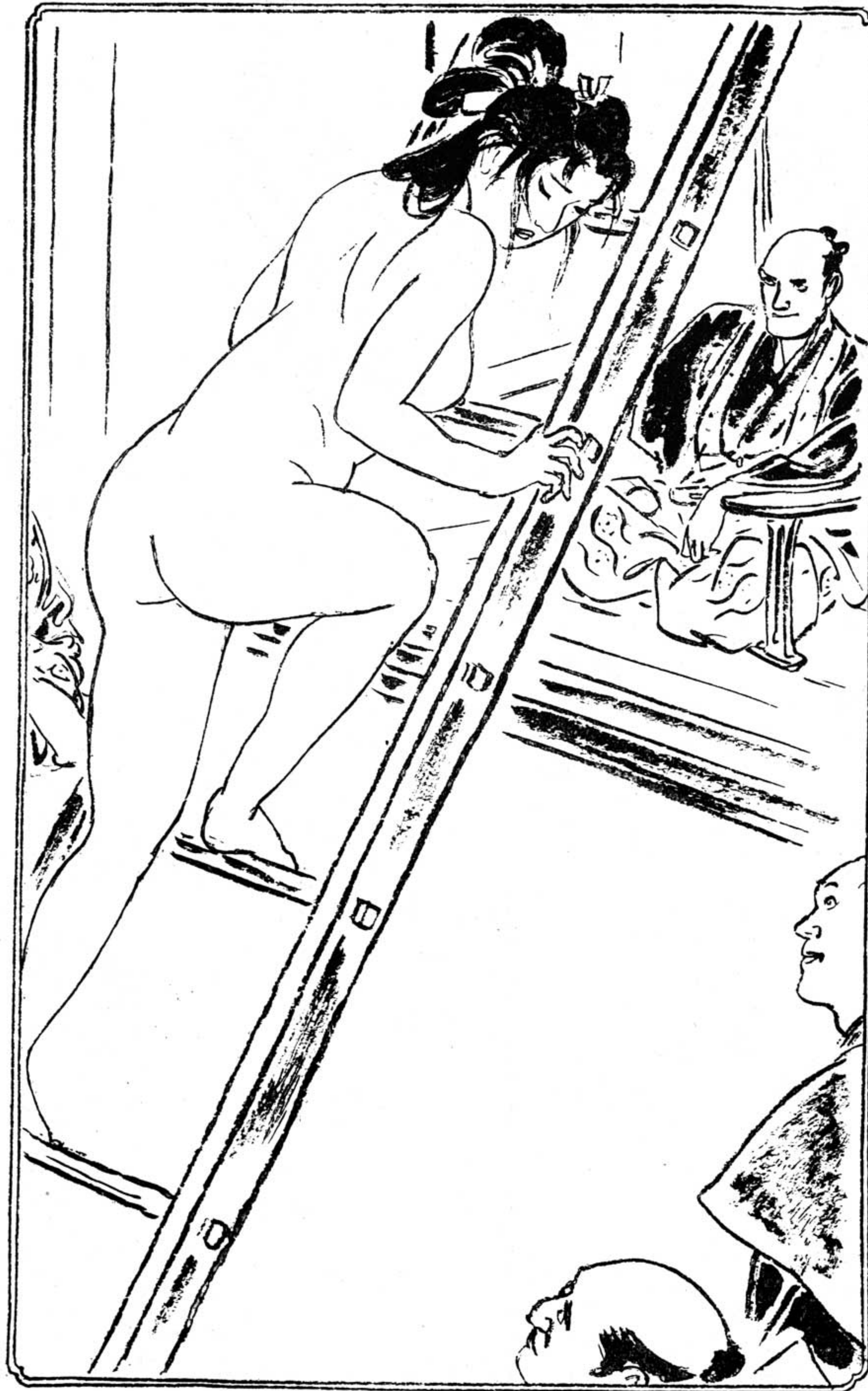
『くッ、苦ろしい……ウッ、死ぬ……』

と、叫んだ。

雪が、救ひだされようとしたのは、捕えられて五日目の夜である。

『もし、雪殿』

裸のまま座敷半に転がつた彼女に声をかけた女中がある。その背におぶわれてみて、はじめて雪は相手が美しい若い男なのにきがかった。彼女は男の背で



身をもんだ。おんぶする相手の両手が、彼女の重たげな山肌にかかっていたからである。

『辛棒なされませ!』

女装の男は声を殺していった。

二人は柳沢邸の奥庭を横切つて、裏塀を越

えようとした。

『曲者!』

と、その時声がかかった。



『まあ、芝居者のようないい男。』

女たちの間から声がした。

『可愛がつてとらそうぞ』

厚い座布団に、吉保の妻お鮫が將軍家と並

んで坐っていた。

雪をたすけようとした男は両腕をつり下げられていた。素裸である。その前に同じように、なにもみにつけない雪がころがつてい

た。

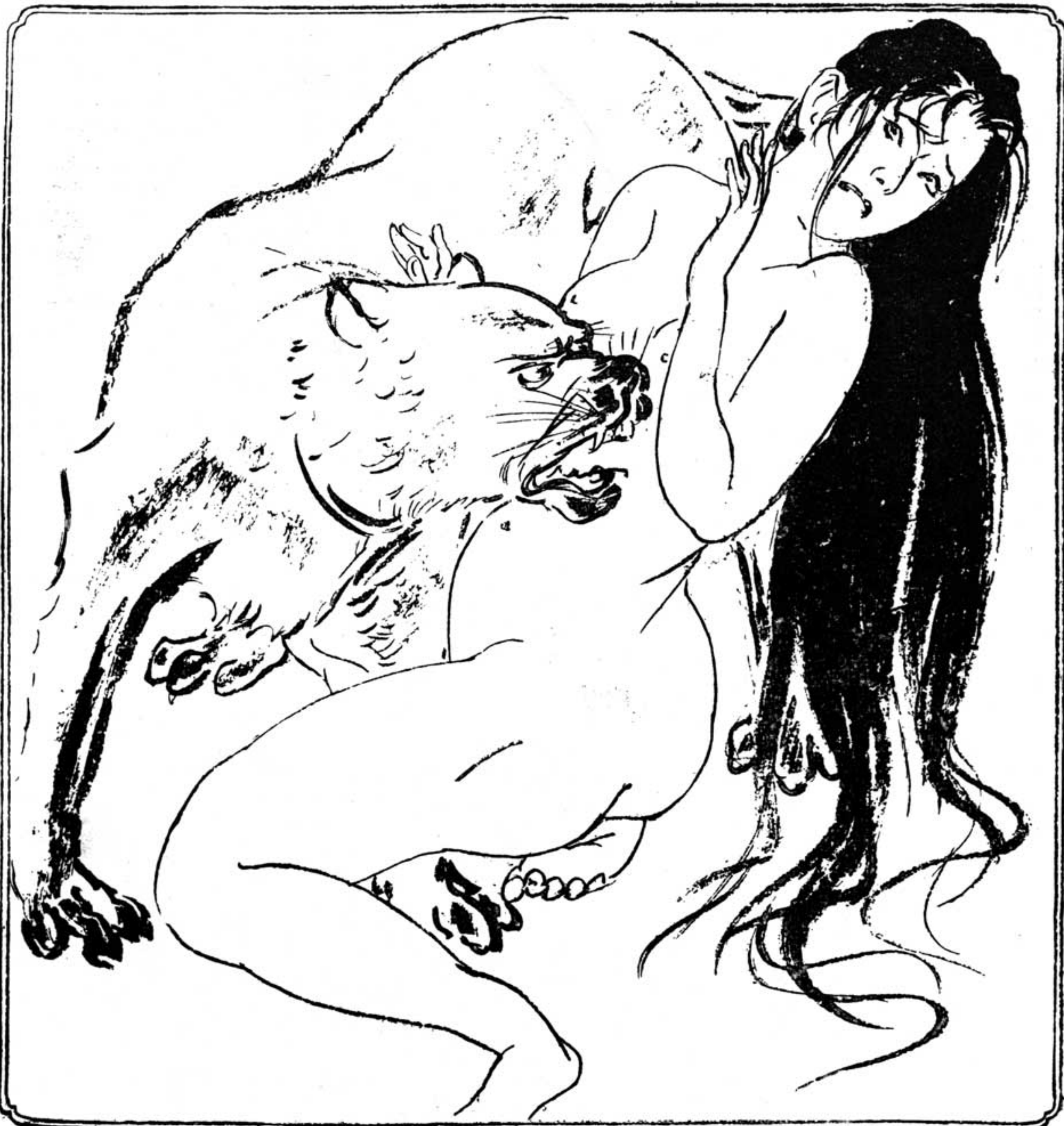
將軍家のことを世の人々は別名犬公方といった。今も、その將軍の好きな犬が、女中たちに、なでさすられていた。

『そこなよい男。そちがたすけようとした雪はな、そちより犬が好きじゃ、とな。』

お鮫は將軍のほうを媚びるように流しみていった。

『みているがよい。雪の晴れの婚礼を。將軍家お声がかかりじや。主家を裏切り、その秘密を他家に売込むような女は、犬じや、犬の仲間じやぞえ。』

『あれッ！ お許しを！』



雪は叫んだ。彼女のまわりには、煮魚をのせた皿が運ばれ、その汁に、筆がつけられると、女中たちは、それを、雪のからだにぬりはじめた。

そのうまさうな匂いに、人間ほどもある土

佐犬が、ともすればお犬がかりの手から、雪のそばにはしりようとした。

全身に魚の汁をぬられる筆の感じに、雪は身もだえた。やがて、一匹のサバの丸煮が、お雪のからだのなかに、尾をわずかにだして

いどに、押入れられた。そのため、彼女はひと頭をあわすこともできないでたたみころがつていた。

『それ、好物を、おいただきあそばせ』

お犬がかりの女中の手から、土佐犬ははなれた。

『あれッ！』

雪は逃れようとした。お犬さまの足が、雪

のからだを押へた。そのお口からながい舌がはあはあ、あえぐいきとともにたれでると、雪の肌をへろへろなめはじめた。

『うッ、くッ。うッ、ううッ』

雪の苦悶をみていて、天井の方に両手をつられた男のからだは、まず、反応をしめしはじめた。

『まあ！』

さすがに、お鮫やほかの女たちは面を伏せた。

『憎い奴！』

將軍綱吉は立上ると、男のそばによつて、いになり刀を抜いた。

『めざわりな、消せおろう。』

声と共に、サツと刀身が、男の腹の皮すれすれに、足もとへと打おろされた。

『ぎやッ！』

男が叫ぶのと、その血をあびて、からだを眞赤にした雪が

『うッ、ひいッ！』

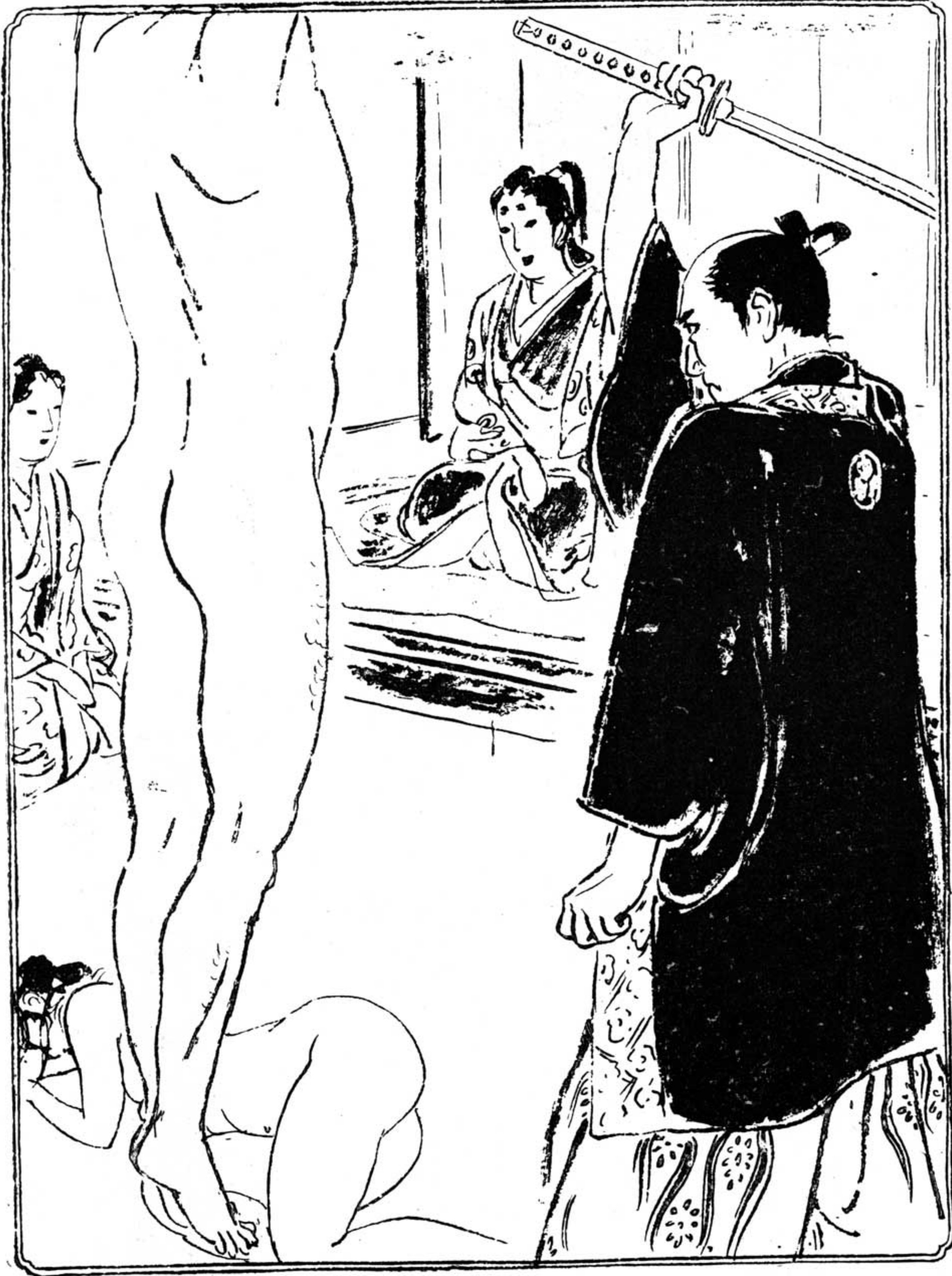
と、腹からも高く反り上げるのと一緒だった。

ちようど、お犬さまが、雪のからだのなかから、好物の煮魚を引きだそうとして、歯で舌で、懸命につとめはじめたのである。

その唇が血だらけなのは、男だけのものではなく、魚の骨とお犬さまの歯にきずついた雪の、いちばんやわらかな肌のためだった。

柳沢吉保が、甲府綱吉のために失脚させられたのは、將軍綱吉の死後だ。

吉保の子吉里は、父の失脚にもかかわらず、従来の碌をそのまま与えられた。やはり將軍がお鮫と密通して生ませた子かもしれないと、人々はうわさしあつた。





いた ずら
悪 戯 の こ ら し め ↑

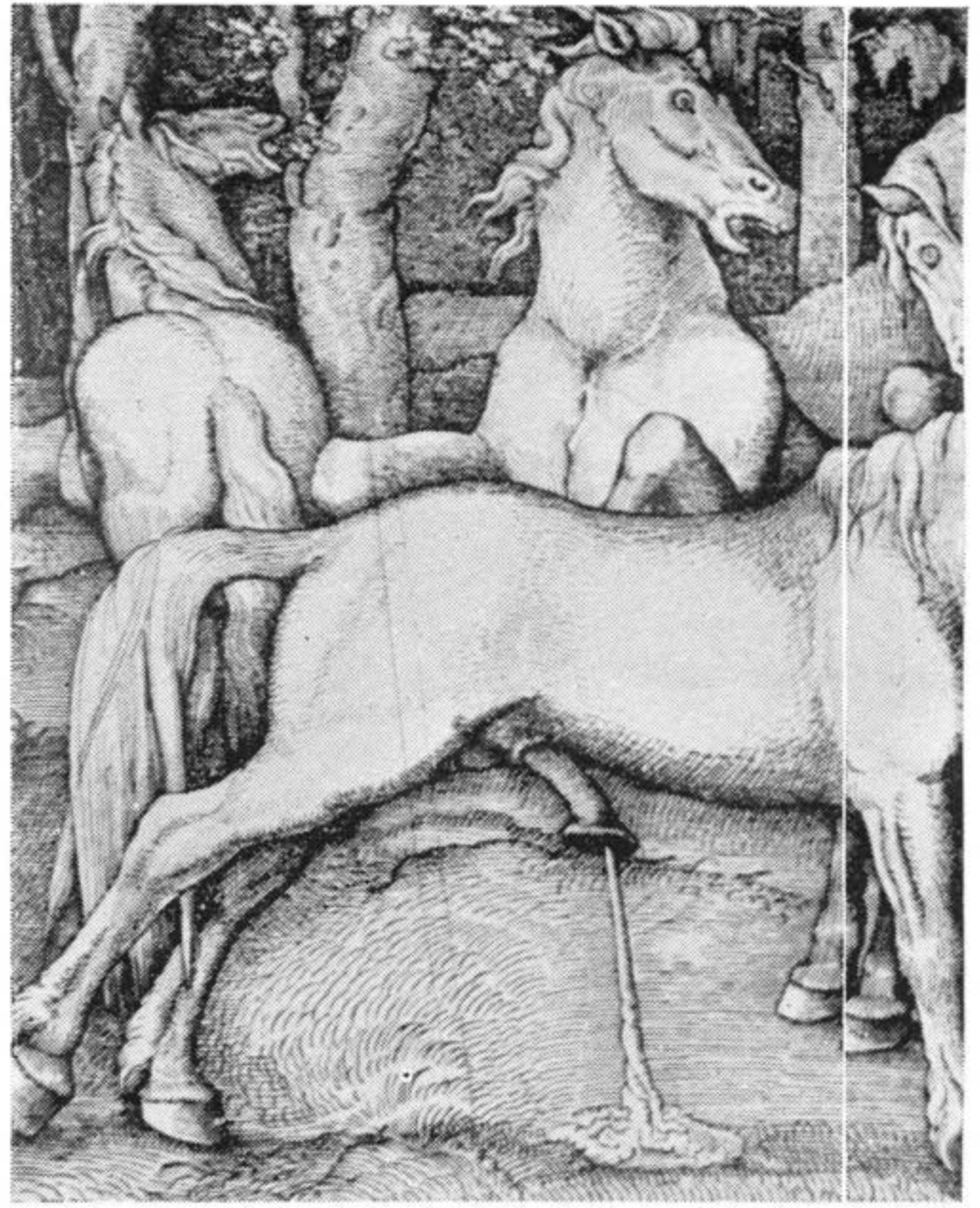
亭 主 馬 車 ↓

「さあ、もつと力をこめて、曳きな、曳きな、鞭が見えないの！」





↑ 姦婦姦夫への仕置



↑ 猛る勇駿の群

自 轉 車 の 戯 れ ↓



強きもの、それは女！ ↓



→

わ
た
し
の
犬

「もつと、元気よくお歩き！ 吠えてごらんよ！
ぶつわよ、ききわけがなければ、むちがなるわよ。
お歩き、さあ、わたしのポチ！」



↑

む

ち

「いい、ここをぶつのよ。皮が裂け、肉が破れて、血が出るくらいに！、
意気地なし！ 打つて、打つて、思いきり強く打つて、いいこと？」

半
獸
神
の
戯
れ



古代から西洋に伝わる絵で、半獸神の男女たちにおいても、絵のような、サジステイックな戯れが行はれていたのである。

亡
國
の
仕
置



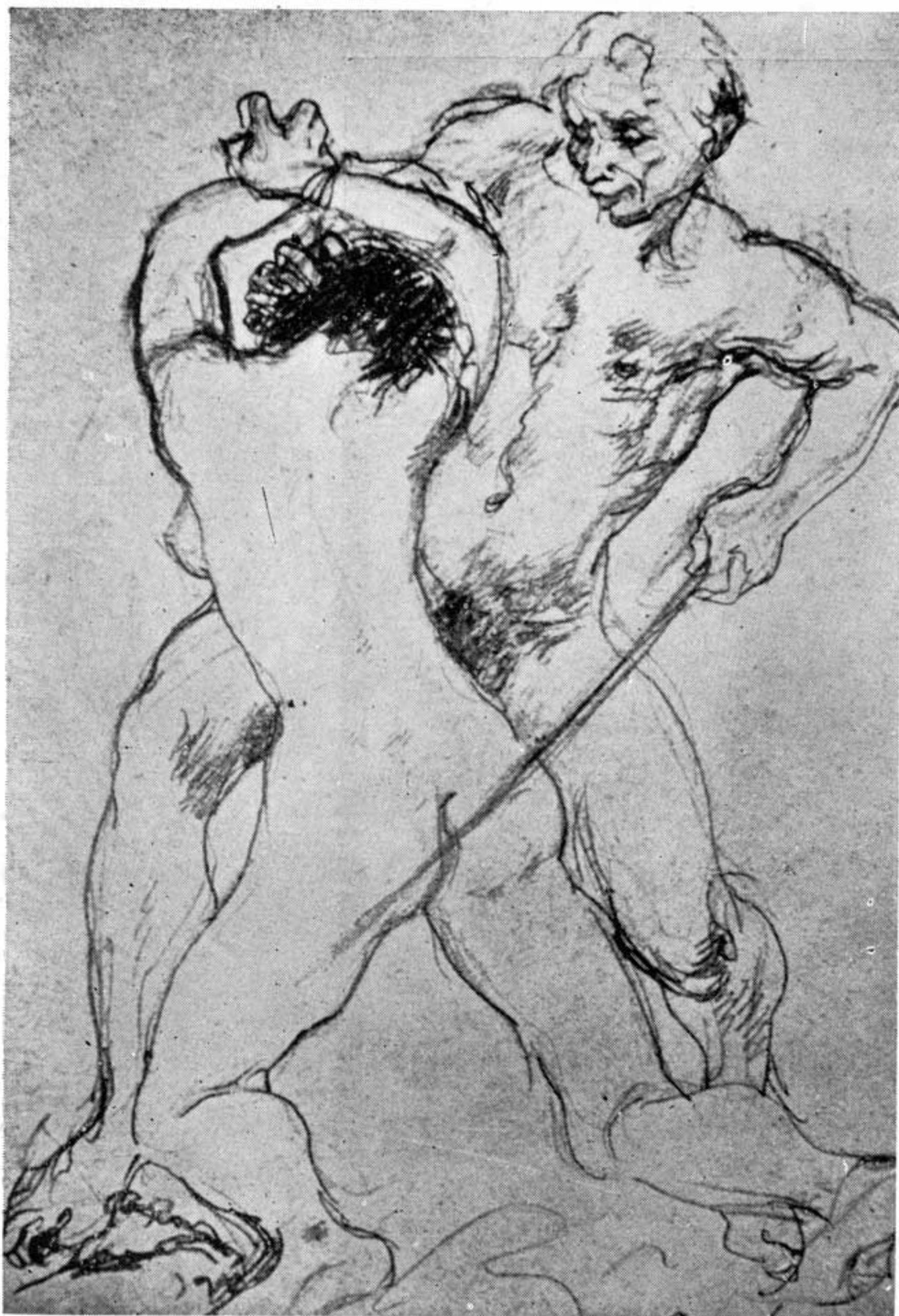
美女の一笑は数万の軍隊よりも強い。彼女の目ばたきは、一夜にして、その国を無防備にさえした。女には用心せよとのカルカチュア



冷
酷
な
鞭



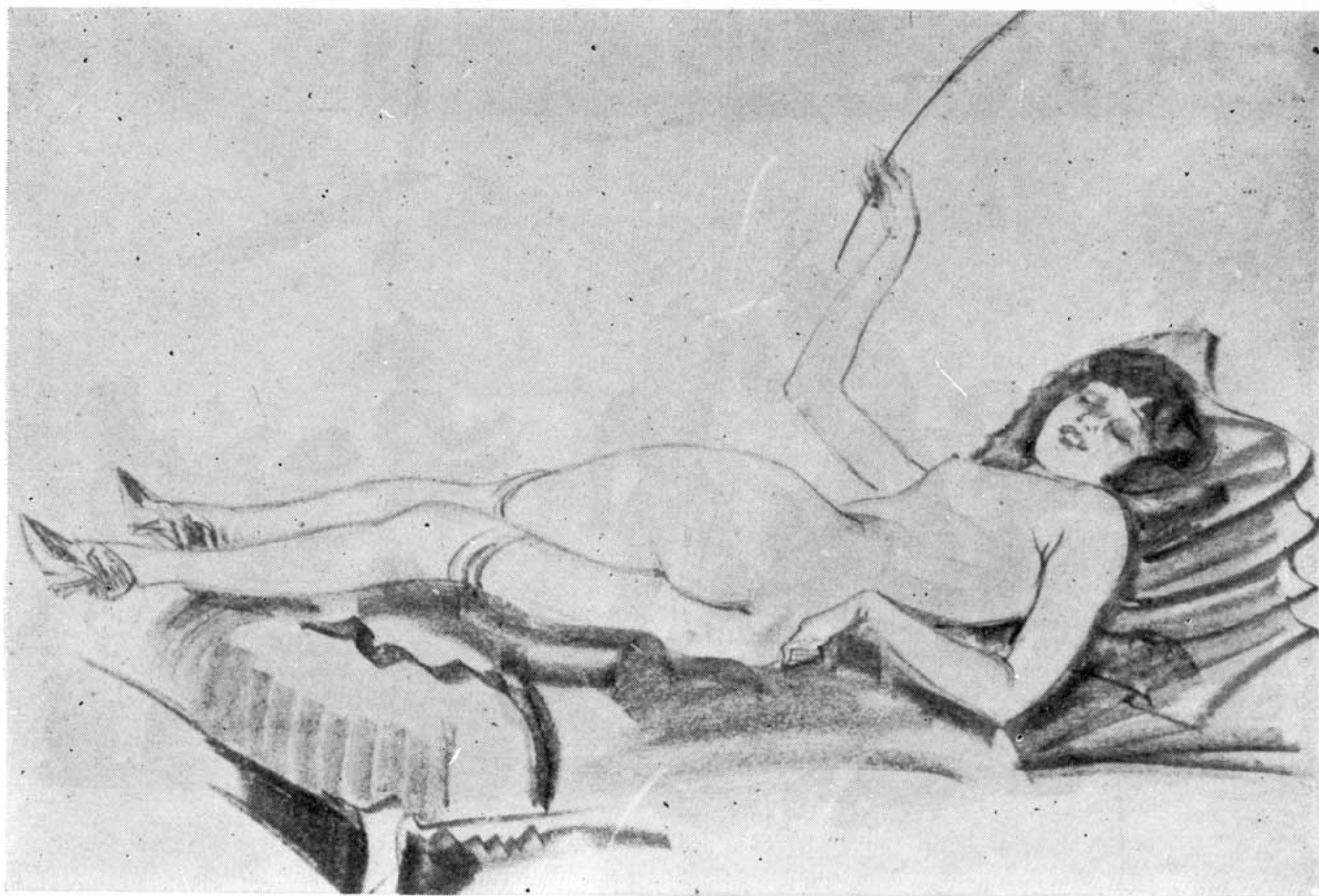
屈強な大男の鞭が、容赦なくやわ肌の乙女の尻にとどぶ。そこはみるみる赤く色ずんで、女はもたえ叫ぶ！ 絵は尻打ちの力強い一場面のデッサン



自
虐
の
鞭



ひゆる、ひゆる、としなやかな皮の鞭が生きもののように、ぶつくらとした女の尻にまつわる。彼女はその痛みに自ら蕩然とした興奮にかりたてられる！



秘蔵版・風俗草紙・目次

(八色折込) 灼熱の虐なみ……………中川彩子画

現代一線画家豪華責め絵画集

神保朋世・清水三重三・三谷一馬・伊藤晴雨・喜多玲子・野崎耕作・水沢深雪
由岐 葵・北原 環・浜田 稔・八木静男・大橋弥生・古庄英生

悦虐大写真集 (第一部) 蛇淫百景 (第二部) 娘地獄絵……………本誌特写々真

男性ヌード・緊縛集……………本誌特写々真

秘女間者 雪肌地獄曼陀羅……………(文) 野崎耕作 介

変態美術館……………特選名画集

表紙 秋吉 巒・目次 絵大橋 弥生

変態奇書物語……………斎藤昌三 142

「裸体」異常愛……………高橋鉄 80

(現代レスボス 風俗) 双刃の劔に血ぬる……………龍膽寺雄 90

★嗜虐女性傳★ 千姫行状記……………藤沢衛彦 85

国周るがく女の責場……………伊藤晴雨 148

(ぐろてすく よもやま話) 私刑と拷問と……………正岡容 182



鞭打ちの歴史

平野威馬雄 176

(女の性愛心理分析) マゾ女性の四つのタイプ

日夏由紀夫 194

悦虐の女百態

(絵と文) 喜多玲子 124

性技巧としてのサヂズム四法

武野藤介 162

(座談会) 変態風俗縦横談

出席者 式場隆三郎・矢野目源一・原比露志・三味線豊吉

東西マゾヒズム文学ダイジェスト

三宅一朗 155

レスボス・テクニイク

園村恵子 214

鞭打ち実験記

高野利夫 278

ソドミアにおける交情の生態

かびや・かずひこ 268

川柳変態性慾志

原比露志 130

女子同性愛 艶本めぐり

柴田敏 294

監獄の変態性慾

山本馬 283

屍姦 今昔譚

広瀬晃一 230

色情犯罪に現れたサヂズム

三谷祥介 118

(殺戮実史) 沙具沙尤の血

吉田参伍 254

現代春本に登場する変態趣味

稲田誠 234

横行する露出症

山崎和夫 138

(江戸変態風俗) 邪淫教秘話

中野栄三 208

映画に現れたグロテスク

高橋晋 224

女子同性愛の断層

堀内得郎 288

天皇虐殺実録 大悪残虐記

岩堀光 200

(男性マゾヒストの) 牝犬になった男

野守孫市 249

獣毛蒐集放浪記

納田千之 305

性毛蒐集放浪記

西沢晃 219

そごみあ風土記

藤井 188

嗜虐マニヤの手記

安田富士夫 261

黒髪地獄

衣川美佐子 264

サチズム
テクニイク

嗜虐淫の手法いろいろ

95

ソドミアの夜の手記

夜愛少

の

慾年

女

装

男

坂

本

芳

男

314

通裸

信

櫛

原

幸

彦

316

像

加

賀

正

治

319

女性マゾヒストの手記

妓

楼

に

蠢

く

中

野

けい

子

242

あ

る

妻

の

告

白

市

瀬

紀

子

245

窃

視

症

の

心

理

秋

山

悠

介

274

(外国人の男色)

異

国

衆

道

談

義

柳

生

欣

亘

300

変態

迷

信

諸

国

め

ぐり

近

藤

欣

也

308

アブノーマル
官能小説

恋に灼かれて

松井 籟子

168

長篇読切
残虐小説

ダイナマイトとマドレーヌ

F・J・バ
松戸
タ
厚
イ
ユ
訳

321

本誌執筆画家

(順不同)

伊藤晴雨 古庄英生 喜多玲子 大橋弥生 浜田稔 滝川共
中川彩子 陳重晴 益田修二 野崎耕作 水沢深雪 牧一
秋吉 小田明男 八木静男 正木丘陵 山中青児 祐一郎

風俗草紙臨時增刊

秘藏版・風俗草紙



1954

裸體異常愛！

高橋 鐵

中川 彩子 画

★雄大なお臀をユサリユサリと揺つて歩くモン

ロー。女尊男卑米人は、その後姿を見ているうち

に吃度その重量感ある肉に押しつぶされて、いわゆる

尻に敷かれるというマゾの快感を空想して、ソクゾクする

のである。ムキダシのお臀を、自分の顔へベタツとおろし

て、顔がひん曲りそろになつた時、肉の重厚で性感に蠢くのだ★

露出症と隠蔽の女達

近代ロシアの作家カメンスキーの小説「レ

ーダ」の女主人公レーダは、高い教養をつけた令嬢なのに、男たちを招待して宴会をひらくときには、一糸も身につけない素ッ裸の肉体へ、





が堅琴を弾くときなど、
胸衣をぬがしてやつたり
寝る前などにはスカート

「文豪ゲーテの名作『ウィルヘルム・マイスター』は彼の自叙伝的小説だと云われているが、その中の男は、豪壯な邸をぬけ出しては貧しい美女マリアンネの部屋を訪れる。そして、彼女

たゞ金色のスリッパをつツかけて接待する。男どもがわくわくと身顫いしてそのレーダの肌に触れようとすると、彼女はすさまじい嘲笑を浴びせて、男どもを馬鹿にする。臆病な癖に情慾をもてあましているブルジョア男どもめ……というのである。そして言葉を浴びせる。「人間は肉体を布の袋に包みこんで、閨房へ押し込めたまゝ、卑しい禁断の好奇心だけに狙わせてしまったんですわ。私は、下劣な寝室の中のやりとりを軽蔑するわ。型にはまつたコセコセした放蕩を軽蔑するわ」そう云つて、肉体の解放を誇るのである。男を悩ませ、もがかせる女性的サディズムの一つのやり方に相違ない。女性というものは、本質的に、露出症なのである。男のように肉体の中心となる露出地帯がなく、前面には乳房、背面には臀部という双対の丘陵があるので、女性は全身を見せびらかせたいのである。

や下穿まで自分でとつてやつたりする。マリアンネは、羞しがりもせずに肉体をさらけ出し、前も隠さずに行っている。彼の前でオシッコをしてみせたりする。それで「彼はつくづく考えた。考えたに相違なかつた。自分は目に見えない糸で彼女に縛りつけられてしまつたのだと」スピンバインが書いたという艶本「フロッシ

ー——十五才のヴィナス」にも、一眼で恋したジャックが十五の美女フロッシーを初めて訪問したとき、フロッシーは真裸になつて、直立したまゝ、

「わらわこそはガマハッチ島の女王なるぞ」と名乗り、ジャックにも二十秒以内に全裸になれと命じ、玉座に腰をおろすと、象牙のような両腿をひろげて礼拝さす——という場面が綴られている。

いや、現実にも、いろんな女性が裸身を性器を露出してみせたがる例、数限りない。

婦人科医に「内診」してもらいに来る老嬢たち。精神衛生を指導している筆者のところへ訪ねて来て、「みて頂けないでしょうか」と帶をときかけたりする女性も時々あるくらい。

酔ッ拂うと、テーブルやソファの上へひっくり返つて股をひろげる女給。

わざわざ、靴下を引上げるふりをしたり、両脚を組み直すふりをしてズロースをちらつかせ、男たちの視線を盗み見て喜んでる娘さん。

——皆、その好例に他ならない。しかし、それと同時に肉体の隅々を見せると

男が猛りたつたらうと心ひそかに思い込んで、極端に肌を隠す心理も発生する。こういうのを、H・レワンドウスキーなどは「隠蔽症」と名づけている。

しかも、此の隠蔽症は、大概の女性が持つていて、心の中で、露出したい願望と隠蔽したい願望とが闘つているものである。

ところが、男には、隠蔽症は少く、露出症が絶対多数である。

たとえば、極端な例としては、人に自分の勃りたつたリングをみせたくて仕様のない紳士を知っている。彼は、そのために、銭湯や温泉や海水浴場へ絶対に行かれないのである。人々が皆、自分のを視ていと思うので、そういう場所へ行くと、彼は忽ち勃起してしまふからである。

そして、男の場合の隠蔽症は、自分の愛するワイフや愛人へ転じて現れ易い。

トルストイの傑作「クロイツェル・ソナタ」の中で、或る良人は、細君が病氣になつたのに、医者に胸や腹部を診せるのも、いやだと拒む。

「彼女の蒲団を遠慮なく捲り上げて、アノ身体中を到るところ手で探り廻す医者に、なんで俺が感謝したり金を拂つたりすることがあるのか？」

とその男は云つたのである。

こういう男の隠蔽症も珍しくはない。

私の知つてゐる或る画家は、一人のモデル

嬢を愛し、遂に結婚するや、ワイフの裸を多くの友達や何かに見られているのが嫌だと、彼女を連れて関西へ移転してしまつた。これなども隠蔽症の変型である。

このように裸体を見たい見せたいという烈しい願望は決して「異常」とは云えない。

法律や旧来の道徳が、寧ろ異常なほど、此の自然な秘願をダンアツしているだけである。そのために、世界中の「文明社会」ではいろいろと合法的な手段を工夫して来たのだと云えよう。

肉感的な「無袖」の夏服や海水着・無背のイヴニングドレス・乳房誇張器、さては、海水浴、混浴温泉、「家族風呂」、ヌード撮影会、ヌード寫真、裸体画や彫刻、……等々。

それだけでは満足出来ないの、歐米では、合法的な「オルギー」という秘戯がさかんに開かれているのである。オルギーとは、ちよつと訳しようがないが、無礼講の寢室宴会とでも云つた意味である。

親しい友人同志などが、男女いりまじつて真裸になつたりしながら、大いに酔つて、雑

魚寝・乱交に及んだりする。これは、どうも法律の干渉出来ない私事らしいから。

さて、こゝで私が「裸体」異常愛というのは、もつとく奇妙なことで、変テコな裸身の一部



に惚れこむフェチズム(変痴崇物症)である。その代表的なものを、紙数の許す程度、ならべてみよう。

文身狂

現代モノの艶画としてひそかに流布されている數十枚のシリーズがある。大衆的な挿絵式タッチ、なかなかの密画ぞろいだが、私は、不感症・勃起不能症・早漏症・陰痿症などの患者に、この種のものを示して、その人の心の原因

を掴む心理試験にすることがある。

廿枚ばかりの一组をサツサツと見せて、後で、どんなのを一番おぼえているか聞く。すると、その人の性慾傾向がわかるのである。

たとえば、同性愛の図をまず思い出す人にはその傾向が強く、そのために普通の性生活では興奮しないという事実がほと判る。

この試験法はタカハシ式T・A・Tとしてアメリカの精神分析学界にも関心をもたれているし、日本の精神衛生法でも認められている。

ところで、前記のシリーズ中に、全身、龍の文身をした男とシトヤカな美女とが背座位の姿勢をとっている図がある。それを、不思議なことには、煩悶を訴えて来る御夫人連の多くが一番おぼえている率が高い。

これによつて、多くの女性の心の中には、すさまじい文身に魅かれる傾向(少くとも、好悪に拘らず印象深く感じる傾向)が強いと云える。

男にもそういうのがある。——私が扱つた事例にも、一度、すごく伝法な女性の裸を見た結果、文身のない女では全然興奮しなくなり、不良少女とか海千山千の商売女の中でクリカラモンモンの入墨のある女ばかり求めて金を入れあげ、今では、好きな女性に本物の文身をさせたり、或いはソックリな絵を肌を描いたりして、初めて興奮の極に達するといふのである。

無毛に憑かれた男

ヨニの叢がないために結婚出来ない娘さんや、離縁された土器夫人は世間に少くない。それが無いと、妙にサマシク見えるため、カタワ扱いされるのであろう。

「かわらけはさつぱりとした片輪なり」「毛をぬくと、とんだ大きな孔に見え」などという古川柳でも察しがつく。

ところが、それと反対に、江戸時代、神田の与吉の女房と云えば、それだけで有名だった女もあつた。非常に美人で、味もよかつたという。それと好一对なのは、土器お伝という稀代の妖婦で、彼女も無毛だったのに拘らず、当時の名優だった坂東三津五郎と瀬川菊之丞の二人に愛され、その他、清元延壽太夫や七代目団十郎など、時の芸能界のスターをナデギリにしたものである。大変なカワラケ争奪戦だったのである。

こういう無毛の魅力は、異常と云えば云えるが、そのサツパリした初々しさは、たしかに昔から悪くなかつたらしい。

古代ギリシャでも、その毛を剃つたり焼き落したりしてツルツとさせるのが美人の資格であつた。又、日本の大江戸の花魁も、陰阜の所だけ



残して、後は綺麗に除毛していたものである。現代でも或る政治家が、

いわゆる半玉趣味で、自分と五十も違う十五六の雛妓ばかり漁り、もし相手の少女が早熟だったりして毛が濃いと、自分で脱毛剤を塗つてやると伝えられている。

大臀狂

マリリンモン・ローの初お目見

得の映画「ナイアガラ」を試写して見せられたとき、筆者は、「なるほど。これが現代アメリカ人の憧憬のマトカ」と感心したものである。

雄大なお臀をユサリユサリと揺つて歩くモンロー。女尊男卑の米人は、その後姿をみているうちに、屹度、その重量感ある肉に押しつぶされて、いわゆる「尻に敷かれる」というマゾの快感を空想してゾクゾクするのであろう。

日本では「一かゝへ、あれど柳は柳かな」「わ



が尻を云わず盟を小さがり」「聾えらびするうち柳、白になり」等という句のとおり、白のような大臀はかんばしくなかつたものである。

ところが、ホッテントットやブッシュマンの美女は、まるで河馬か象のように大きく突き出た肉塊でなければならぬ。しかも、中にはパプア族のように上下左右に動揺する歩き方を、少女の頃から練習させられるところさえある。

そして、日本でも最近では、その豊かさや揺れ方の凄い女性だけにのぼせ上る大臀フェチシストが少くないようになって来た。

彼等はそういうお臀をみるとたまらないのである。駅やデパートなどの階段を遠くから見つめて、いろいろ空想を逞しうし、遂にはアクメにさえ達してしまうという。

紅燈の巷へ出掛けても、こういう大腎狂は実際に「遊ぶ」よりも、たゞ頼む。——ムキダシのお臀を自分の顔へベタッとおろして、押しつぶすようにしてくれと。そして顔がひん曲りそうになつた時、肉の重厚でカタストロフィの性感に蠢くのである。

尤も、昔から、女性の大臀を崇拜して来た歐米では、彼女達のお臀を「第二の顔」と呼んでいる程だから、その顔への接触は、頬寄せてのキスと変りないくらいであろう

變つた「踏まれ男」

外国では、女王様と騎士の昔から、さかんに女の足に接吻する。ところが、先般、大阪の鴈治郎と扇雀が演じて絶讃を博した「曾根崎心中」では、縁の下に忍んでいる男が、縁に腰をおろしている愛人お初の実白な足をおし戴いて、頬ずりしたり唇を寄せたりする、濃艶なラヴシーンをみせてくれた。

こういう女の足の愛撫は、大体に於て真白な寶玉に似た足へ浴びせられるものである。

以前の中國で、足を締めさせた纏足が愛されたのも、実は、纏足にすると腔がシマリよくなるとか、陰阜と陰唇が発達するとかいう効果だけでなく、閨房などで、そうした纏足を男の掌中へやわやわと握りしめていたいという異常愛のためである。ところが、性心理学の権威ハヴロック・エリスの報告による

と、C・B氏という三十八才のインテリは、ゲニ不可思議なアブ・ラヴに憑かれていた。

彼は、立派な肉體をした盛装の淑女に、足だけあらわに出して全身を踏んづけてもらいたいという願ひをもつていたという。まづ、胸から腹部、鼠蹊部股(のつけ根)、最後にPを何分も何分も、傷になるまで踏まれる……と、エレクト



トし、絶頂に達する。

彼は、十四才のとき、隣家の廿才ぐらいの豊満な娘に踏まれて、初めて Ejaculation を知つたのである。しかも、彼女も彼の絶頂の瞬間、ハイヒールの靴底に彼のアクメに伴う強い律動を感じ、眼が輝き、頬を紅汐し、唇をわななかせるほど興奮したという、

この狂熱を味わうため、彼は百人もの女性に踏まれたのであつた。

お傳型のヨニを求める男

高橋お伝は、萬引をして明治初年の物凄く大型な金時計を、いつもそのヨニ中へ隠したと伝えられている。それほど総てが大柄だつたという訳であろう。

事実、現代まで保存されて来たお伝のそれを調査計測した清野謙次博士の発表によると、全体に大柄だが、特にその小陰唇は蝶の羽根のように左右に拡がり、普通の日本女性の二倍(二五—二七糎)だつたし、腔の深さも、数糎大きかつたのである。

お伝に迷つた幾人かの男たちはこれによつて、文字どおり「舐められ」ていたのに相違ない。

しかし、こういう壯觀さは、決して日本の妖婦だけに限つた特徴でもないのである。

西アフリカ・南アフリカ、殊にホッテントットの女達は、幼い頃から、陰唇や陰核へ錘をぶら下げたり、手で引っぱつたりして、年頃になるまでには、お伝そののけなくらい発達させるのである。

そして、その威容を呈さなければ、男は寄りつかない。

「タデ喰う蟲も好き好き」とやら、肉體の魅力には千差万別があるではないか。ヨニにしても、東アフリカや露領内のスコプツェン派の女性達は、大切な陰核を根元から切除したほうが美しいとされているのに——。

千姫行状記

— 嗜虐女性傳 —

……かねて疑っていた千姫は竹尾を蹴倒し、彼女の黒髪を容赦なく、くるくるわが手に引きからみ、火鉢の燃える火を火箸にはさんで、額を一二ヶ所焼けた

だらした。「主の男を寝るとは不届もの……」と

藤澤 衛彦

野崎 耕作画



まえがき ○

お馴染の丁稚久松を土蔵の中で殺した、油屋のお染。吉三に会いたいばかりに、わが家に火をつけた、八百屋於七。手代と通じ

て夫を謀殺しようとした、白木屋のお駒。みんな、丙午の代表的淫婦だと伝説されていますが、なかにも名高い、大阪陣に、豊臣秀頼を備倉の中で腹を切らした、夫人千姫は、丙午生れの女性サジとして専らの評判です。

○ 本 傳 ○

徳川三代將軍家光の時、江戸五番町旗本御小姓組が五人居住していた二千五百坪の地を召しあげて、御小姓組屋敷を赤坂に下されま

した。
「どうしたことだ、あの屋敷が召しあげられたそうなの。」

「うん、それについては、けつたいな話がある。」

「三十後家はおらずの姫さま、おうつりのうわさか。」

「しつ、声が高い、男もてあそびの一件だが、」

ひそ、ひそ。」

当時、江戸八百八

丁、よるとさわる

と、ひそ、ひそ

噂さの種は、五

番町旗本御小姓

組頭吉田大膳亮

の屋敷跡へ、竹

橋御淫乱の千姫

さまの御守殿が建

てられるということ

でした。吉田らの住

んでいた二千五百坪の

空地は、むかしからの通り

名「吉田屋敷」の名によれば

そこへ、將軍が妹のために御守殿を

建築し、やがて落成、その邊を御守殿門前小

路町といわれるようになったも、千姫さま

(天樹院殿)の御守殿と呼ばれず、吉田御

殿の名でよんでおりました。後になつて、

吉田通れば 二階から招く
しかも鹿の子の振袖で。

と語いはやされた、おそろしい好色御殿がそれです。

千姫は、幼名を、千代姫といい、後太姫、次

で千姫と改めた。二代將軍

秀忠の息女で、家康の孫

として甘やかされて

育ちました。慶長

二年(一五九七)

四月十一日伏

見に生れたと

いうことす

から、ほんと

うは丙午生れ

ではありませ

んが、あんまり

男性を嗜虐殺し

たので、丙午の迷

信に結びつけられ、

いつか丙午生れの代表

のようにいいふらされたの

でした。

慶長八年七月二十八日、わずか七歳

で、豊臣秀吉の子秀頼に典人となつたのは、豊

臣徳川両家と親のための政略結婚の槍玉にあげ

られたので、これが、サジ性界に墮ちる因を作

つたのでしよう。淀君を母とする秀頼と結んで

大阪城におること十三年、元和元年五月七日

秀頼滅亡の折、坂崎出羽守孝親に再嫁の約束

で救援されたのが十九歳、半焼の孝親に抱え

られて大阪城を遁れたこと(大野治長助勢)

も、性格を自堕落させたことだつたらうと考

えられています。元和二年(一六一六)、坂

崎への再嫁を裏ぎつて姫路城主本多忠政忠勝

の子の長子忠刻に再嫁ときまると、坂崎出羽

守は姫を奪おうとして憤死した事件が生じま

した。でも、千姫は、後家もおせず、その

年の九月二十九日に、再嫁を決定しました。

これは、忠政の妻は家康の長子信康の姫であ

つた關係から、家康の病氣を駿府に見舞つた

時、病床に就いて、わが子忠刻のために、切

に千姫の再嫁を請うたので、家康から許され

たということ、そのため、忠刻は大手前に

邸地を賜い、千姫には湯沐の代として十萬石

を賜うたということが、千姫のおごり心に輪

をかけて、それが、あの流行歌に、その頃は

贅沢の骨頂の鹿の子の振袖を衣料とする華や

かさを諷わしめるまでにしたのでありまし

う。

その後の十年、忠刻千姫の性生活は、ただ

火のようなとばかりで確かではありませんが

寛永三年(一六二六)五月七日に、忠刻が卒

去してから寡婦生活が、大へんなものとな

ります。

夫の忠刻が死んだ当座の千姫の悲しみかた

は、大それたもので、三七日の忌に黒髪を落



して、天樹院と稱え、江戸竹橋内に念佛三昧に暮しているようでしたが、根が好色の千姫は、やがて男恋しやの色情をもやして、遂にサジ性を暴露します。

その頃、吉田屋敷の新たな普請は出来上りました。御守殿の華やかさは善美を盡し、とうてい若い尼さまの生活するような環境ではありません。女ひとりで十万石の生活、飛ぶ鳥も落すばかりの権勢は、將軍の御威勢を笠に、幕府の待遇もいと厚く、諸人ちややほやのお追従は、千姫の天樹院をたぶらかして、つい色好みの本性をいらだたせ、黒髪を少しづつのばす楽しみは、空闊を嘆つことのたかぶるのをどうふせぎようありません。

それは、寛永四年の春のことといえ、夫に先立たれてから、やがて一年、庭の紅梅がふんわりふくらんだ蕾をちらほらほころびかけたというので、天樹院は、ふと、軒ばにかかると、寛の源がみきわめなくなり、侍女を案内させて、はじめて庭にとりいれた流をつたつていつてみました。

春の水は、どこまでも陽和の氣が浮んでいます。流れに配した石の容も、なんとなく春めき、そこらに植えた老龍のような白梅の蕾はまだ堅いが、早咲の紅梅ばかりが、濃艶な姿をほこっています。

「梅は、濃くも薄くも紅梅。」

と、学問ある侍女の一人が、「枕草子」の一句を口ずさみますと、

「人は？」

と、誰やらがいつて、〃ほほ〃と笑うのも、この頃の御守殿に佛くささのとれたしるしでしょう。

「この梅は、もとの植木か？」

と、千姫が、もの珍らしい見あげられますと「いえ、新らしい植えこみとのことでございます。」

と、侍女のへんじ。

「おや、いずこの紅梅殿やら。」

と、ふと、菅公遺愛の紅梅を偲び出したらしい學問侍女のおせつかいに、千姫も、何となくその紅梅の身元が知りたくなりました。

櫻より色はさこそは深からめ

香さへ異なるくれなるの梅

あまりに淡泊な淋しい花よりも、むしろ美しい熱烈な花に着するという、この歌の作者和泉式部の趣味に、どこか一致する、千姫は、

「たれぞ、この紅梅の由来知るものに褒美とらしよう。」

と、まどうきうきと、ただされるのでした。

「その紅梅のことなれば、花井壹岐どの、ごぞんじのはずでございます。」

「たれぞ、花井壹岐を呼びまいれ。」

「いえ、それはなりません。」

と、一人の腰元が取次に立とうとするのを止めた、老女は、

「花井壹岐は、お目どおりできぬ表役の若者にござります。」

と、千姫の方を見て、もうしあげますと、

「よぎない、さらば、垣ごしに、話をいたすよう、とりはからいなさい。」

と、千姫がいわれました。

花井壹岐は、まだ二十歳の若者でした。きゆうのおめしで、垣根ごしに、紅梅の話せいのことでしたが、その頃は女中方とお話法度の御守殿でしたから、壹岐は、〃梅の由来〃を、さらさらと、料紙に認め、竹にはさんでささげてゆくと、お待ちかねの千姫に、垣根ごしにささげました。

千姫は、八重垣のむこうに、ちらちら若者の衣装の揺れるのを眺めになり、

わが園に梅の花散る久方の

天より雪の流れ来るかも

と、口ずさまれました。まだ梅も散かない早春なのに、〃梅散るとは〃と、古歌とは知らなかつた花井壹岐は、

新らしき唇と梅の初花と

いづれか春を流れゆくらむ。

と、かえしました。

千姫は、その時、じつと、花井壹岐を垣間見されたということで、それから、思慕に堪

えず、侍女に命じて、ひそかに艶章を、壹岐におくられました。

壹岐は一日二日まよいましたが、重ねて、ひそかの、お召があるにこたえて、侍女におくりむかえされて、千姫の天樹院尼と契りをおこめるようになったということです。

元来が、文弱の若者でしたから、壹岐は、千姫になれるにつれて、おくりむかえの侍女とも、ほほえみかわすほどになりました。ある時、その笑顔を、ちらと見られた千姫は、嫉妬の情に胸を焦し、その夜、壹岐を打擲したのが、サジ性暴露の直接原因となり、壹岐は、めされてはさいなまれ、さいなまれては寵愛される幾夜幾夜に、同情ともつかない慰めを、千姫近侍の少女竹尾からうけるようになります、やがて、恋をささやく仲となりましたある夜のことでした。この幾日かは、千姫お召よりは、すこし早く忍んで、竹尾と恋をささやいているその席へ、かねて疑っていた千姫が駆け入って、やにわに竹尾を蹴倒し、彼女の黒髪を容赦なく、くるくるとわが手に引きからみ、わが部屋にひきずって、その火鉢の燃える火を火箸にはさみ、主の男を寝るとは不届ものめ、思い知れ。」

と、竹尾の額を一二ヶ所焼けただらし、たけり狂ったので、何事ぞと、侍女たちが寄つてきましたが、ただ膽魂を失うばかりでおとめすることもできない、壹岐も気を転倒

さす驚きで息もできないありさま。ただ怒りごえにののしるは千姫でした。

「壹岐も、ちこう、その方の不義の罪は重い自らが情をかけしに、外へ心をうつし、わが目を盗みしは不届、いま、その恋路の綱を切つてやる。」

と、長押の長刀をとるより早く、鞘をはらつて、あわやと見える形相は、いつもの嗜虐とは全くちがう様子に、壹岐は、南無三寶なりと、庭前へ逃げ出しました。ところが、千姫はなおも本気で、

「おのれ逃げるとも、逃がしはすべき。」

と、跣足で追いかけて、あの紅梅の下まで追いつめ、さつと一薙、壹岐を斬りはらいました壹岐が息をひきとつても、千姫の怒りは止まず、葬いもなく、侍女に命じて死骸を御守殿の北の井戸の中に投げ込ませ、竹尾はなぶり殺して、同じ井戸へ投げ込ませました。

それから千姫は、まるで、悪鬼のように、謀略をもちいて、御守殿門前をゆききする若侍や町人の若い美しい男を御守殿のお部屋にさそい、弄びさいなんで、さて、あき果てると、斬り捨てて、井戸に投げ込み、井戸は、男で埋まると、後には専ら評判せられたほどでした。

「藩翰譜」によると、千姫の天樹院は、寛文六年（一六六六）二月六日、享年七十の天壽を全うして死んだというので、五六十歳の頃から何を感じつたか、弘経寺を信じることあつく、寛永十九年、東西十二間、南北九間、箱棟には

黄金葵の紋章のついた本堂を建立して寄進し下馬札をも立てさせ、翌年には、遺言して、御守殿台所にいたるまで、同寺に寄附して、永く菩提所と定められたというので、生前実行され、御守殿を毀ち、その材木を、今の茨城県結城郡豊岡村飯沼の壽龜山弘経寺に移しました。こうして建てられた弘経寺の方丈の間の天井は、永く血天井と呼ばれ、支院の天井には、寵愛壹岐の血痕の足形が、明治三十九年（一九〇六）に火災にかかつて焼け失せるまで、残っていたということです。方丈の支院には、こうしたわけで、後、天樹院を賜号され、城内には、天樹大姫祠堂の碑を存していますが、本葬は、死歿の年（寛文六年）小石川の伝通院で行われ、法名を、天樹院殿榮譽源法杉山大姉を諡したということです、今も、伝通院に、その墓があります。

御守殿が移されても、千姫の嗜虐乱行の噂さは、あとをたたず、廢墟の吉田御殿に小雨降る夜半など、青く光る妖火、その井戸から燃えいでて、消えては燃えあがること度々であるといわれ、その評判は、江戸市中に、広がっていたので、御守殿の跡は、永く妖怪屋敷と呼ばれて、その更屋敷（建物のとりさられた更地）の拜領を願う者などありませんでしたでも、江戸繁盛につれて、段々市井の空地なども少くなり、武家の拜領屋敷の場所も無くなつてきたので、よんどころなく、吉田御殿の二千五百坪の更屋敷の地に、旗本衆三人の

屋敷をくだされたけれども、例の怪しの井戸のある辺ばかりは、さすがの強気の旗本三人の誰もが、頂戴するといわなかつたので、その辺一帯の構えは、なお、井戸を中心にして七百坪ばかりが空地となつていました。

しかし、五年十年経つうちに、天樹院御常住のお屋敷も不明となり、漸く、吉田御殿化粧の沙汰も遠のいた頃、新たに、御用につきき道三河岸の屋敷を召し上げられた旗本衆のうち、



何の因果か、この井戸こそ、名高い皿屋敷お菊の井戸として、新しい斬害事件を記録する怪談皿かぞえの井戸となつたものです。青山家には、主人が秘蔵の伝来高麗焼の皿というものが十枚揃つてありました。とある日、お菊という美しい腰元が、あやまつて一枚の皿を碎いてしまいました。青山氏の内室は、常々から、お菊の美しさを妬んでいたので、このお菊の過失を幸い、讒言して、お菊の指ことごとくを切り取つて、一間のうちへとりこめておいたところ、お菊は隙をうかがつて忍びいで、井戸へ身を沈めてしまいました。あわれ、お菊の亡霊は、その夜から現われ出て、かすかな悲しい声で、皿の数をかぞえます。

「一枚……二枚……三枚……四枚……五枚……六枚……七枚……八枚……九枚、かなしやなア。」

と、十はかぞえずに泣き叫ぶ、この皿屋敷お菊の皿かぞえ伝説が、吉田御殿の更屋敷に起つたとは、どうです、奇々怪々というか、偶然の出来事というか、それは皿屋敷伝説を再検討してわかるであろう後の問題であります。

(了)

× × × × ×

ぬる……

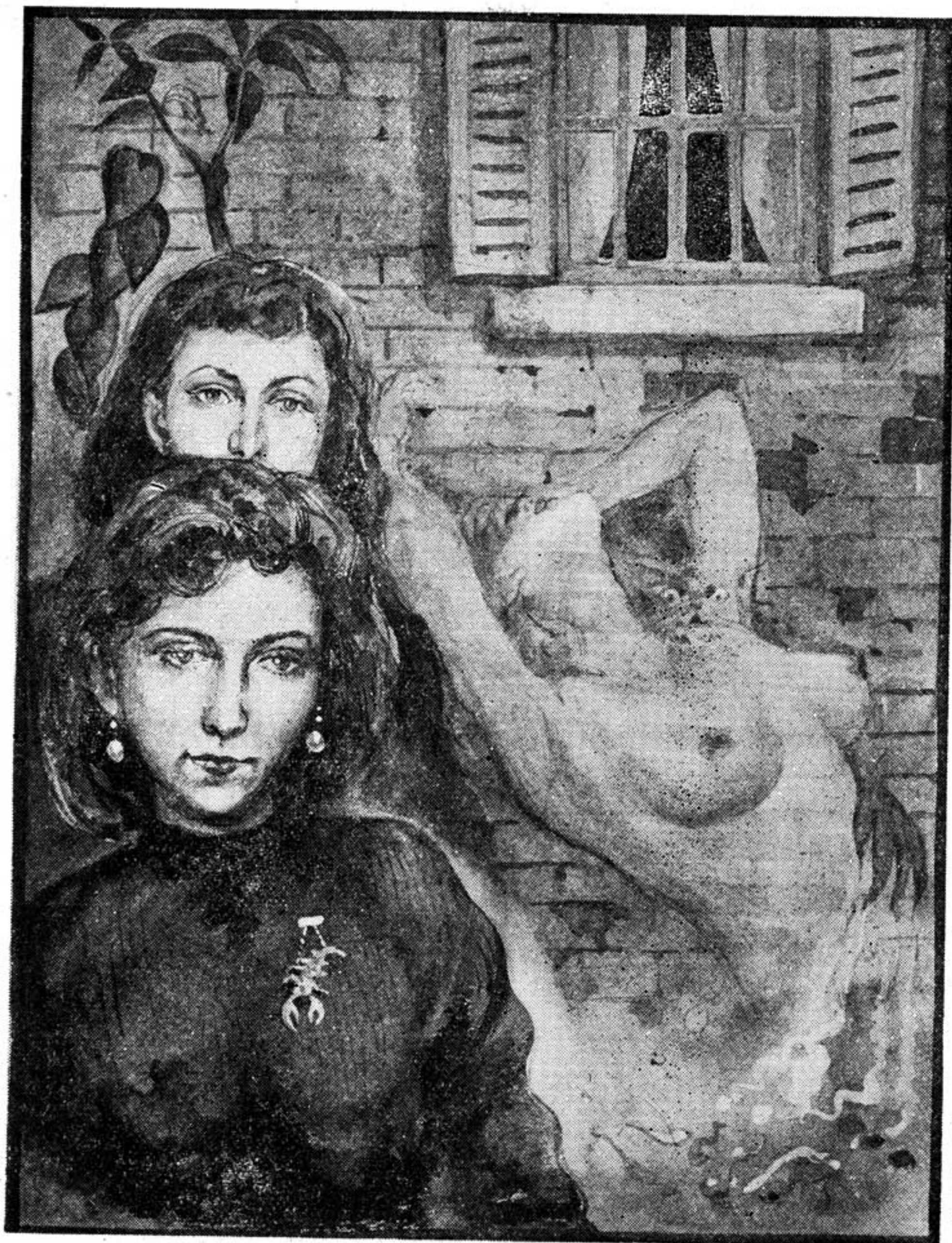
雄 寺 龍 膽

秋 吉 巒 画

『情炎のサロメが、ヨカナン』の首を切つたあとで、赤インクの血をしたゝらせた双刃の剣を手に、投射光線が眩しく幾すじか交叉したストリップのエプロン舞台上、透かしのはいつた黄金の唐草でわずかに下腹部を覆うただけの裸かで、燐色に光る豊麗な肢体をクネらせて踊つた時の、あの凄惨な血の色の華やか美しさが、今でも眼に残っているが、血ぬられたワイセツがまた、その凄惨な極致において、新しい『美』のケースにはいるものであることを、その時以

来私は識つた。――

若月早苗と杉野ユキ子とこの二人の不思議な女性を私が識つたのは、いきなり彼女たちから次のような手紙をもらつて逢引(?)に呼び出されて、會つた時だつた。



未知の女性から、ぶしつけにこんなお手紙差上げる失礼を、おゆるし下さい。私たちは先生の愛読者ですが、F誌の先生の連載小説『淫蕩の市』の中に描かれた二人の主人公若月早苗と杉野ユキ子の同性愛にとっても共鳴して、毎号むさぼるように読み入っているのです。そしてとうとう二人の主人

現 代 レ ス ボ ス 風 俗

双刃の劔に血

……これで、杉野ユキ子は全く一絲まとわない裸になった。「寝臺よ ごれるわヨ」
手のひらで顔を隠して、ユキ子がいつたので、私は氣がついて、椅子から立つて、
壁の釘にかかっていた大きな浴用タオルを取つて、フワリと彼女の裸體の上に投げ
てやつた……

公の名前を、先生のお許しも得ず、そつくりそのまゝ無断で頂戴して、二人で名乗ることになりました。実は今までも幾度か、先生のおゆるしを得ながらお目にかゝりに、先生のおもとへ伺おうと思ひながら、何となく先生のお宅をはゞかつて果たせませんでした。今日は二人で相談して、大そう失礼ですけれど、先生をお宅の外へお呼び出して、お目にかゝり、無断でお名前借用のおわびや、そのほか色々お話伺いたくて、このお手紙差上げることにしました。もし御都合よろしかつたら来る△月△△日午後二時に、中央線信濃町駅のホームにおいて願えませんか、二人でお待ち申しております。ではどうぞ。熱心に熱心に熱心に切望。
△月日△

若月 早苗
杉野ユキ子

先生

この手紙の最後の『熱心に熱心に云々』という言葉に動かされて、お尻の重い私は、指定された場所——信濃駅のホームへ、指定された時間に出かける氣になった。

そこで私は、この二人の不思議な女性に会つたワケだ。

会つて一と眼でわかつたのは、若月早苗の方が明瞭に *Efeminatio* (男性化女性) であることで、これも私の小説の主人公と同じだった。髪をウンと短かく襟脚のところでお刈上げ、い

わば、いくらか髪を長目にした男の子、といった感じ。キリッとした細く締つた頬が、浅黒く小麦色して、黒く光る涼い瞳と、細く高く通つた鼻すじと、これもヘンに男の子のような締つた口つきをしていた。

それが、栗色と白のダンダラのセーターを着て、よく見かけるアメリカ既製仕立ての、藍色木綿の男の子が着るジャンパーを裾長く着ていた。スラッとした背丈で、さすがにセーターの胸のところに、軽いお乳の膨らみがなかつたら優さ型に華奢に出来た典型的な美少年だった。それに反して、杉野早苗の方は、色の白い丸顔の頬が柔らかくフックラして生ぶ毛が光る水蜜のような桃色の肌にボウと血色がさし、細い弧状を描いた薄い眉と、少し両側へ離れすぎた優しい一と皮喰の眼、頭のところがガラスに押しつけたようにいさゝか平べつた鼻、ちよつと吸つたら血がにじみそうな柔らかい唇、立派に一人前の女に盛熟してムックリ盛りあがつた乳——肥り肉でドッシリと重そうなからだなど、いかにも柔らかい女らしい感じだった。それが白に近い銀ネズと派手な臍脂の、大柄な縞のセルに、パツと紅く牡丹を刺繍した帯を結んで、まるで青春の血が全身にウズいているよう。

神宮外苑の鋼鉄のようにピカピカ光るアスファルトの道を歩きながらも、二人は手を取り合ひ、肩を押しつけ、足と足がモツれるばかりにして、もたれ合つて、私一人圏外に、ほつたら

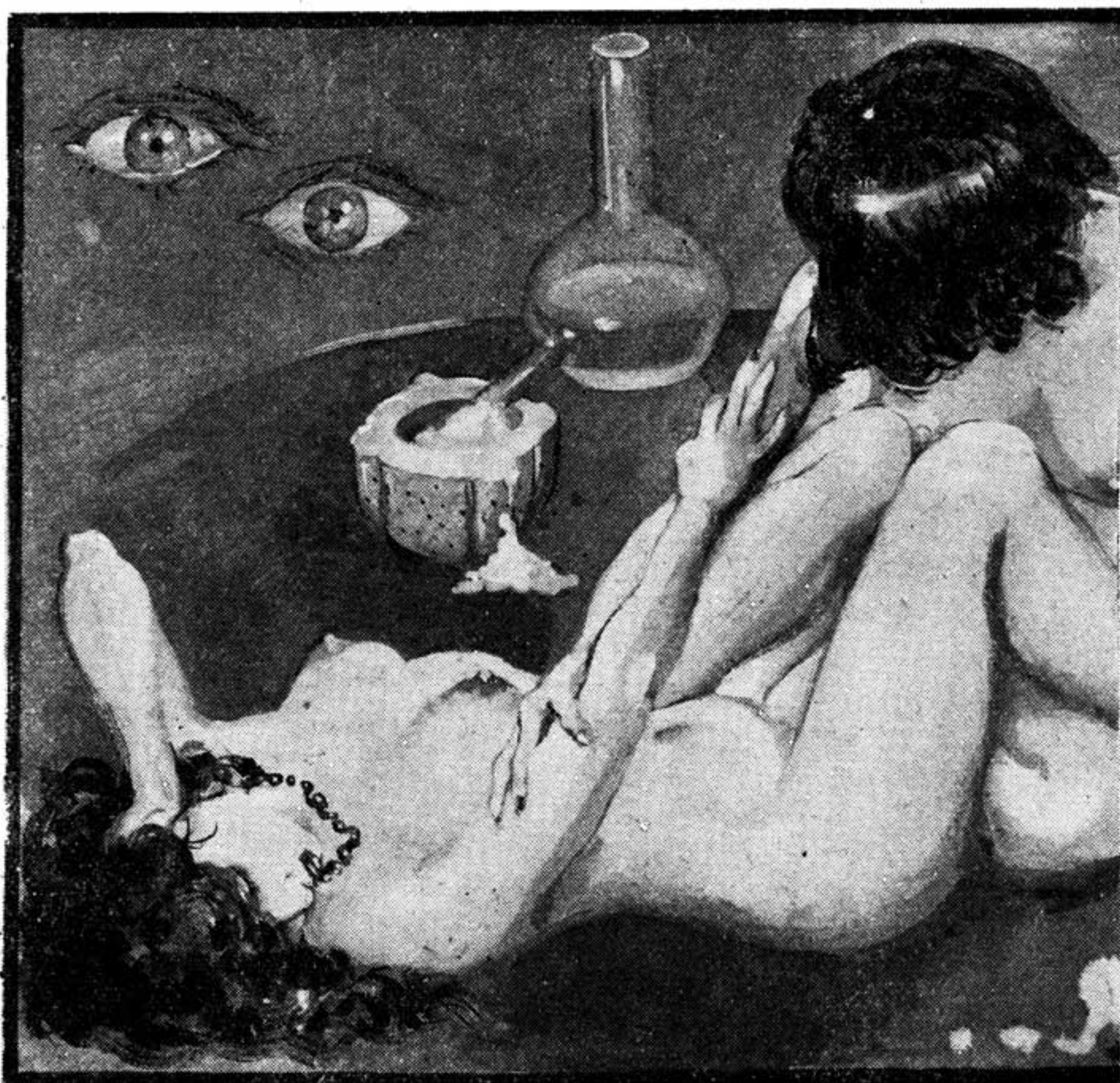
そこに籠ることにしている。

もつとも、せいぜい通算して、月のうち十日程度だからあとの廿日はあいている。ごく簡単な食事の仕度ぐらひは出来る材料の貯蔵や設備もあるし、ちやんとしたベッドや夜具寝巻の着換え、大体の日用品のたぐいは用意してあるので、まア、ちよつとした贅沢な環境がそこに出来ている。

時折、親しい友人のアプレ青年や少女が、ホテルか何かのつもりで、こゝへ籠つて逢引に耽けつたり、まア、たゞあけて置くのももつたないので、適宜利用させているのだが、この秘密の隠れ家を提供して、若月早苗と杉野ユキ子の Graterbera 実験の場所に使用させてやることにしたら、是非先生も立ち会つて、自分たちの同性愛行為がどんなものなのかそのナマナマしいところを一度、研究のために御覧にならないかという。

たしかにこの変態は、こうなると一種の露出狂ともいべきものだ。

指定されたのはそれから十日ほどしたとある土曜の夜だった。



ナマぬるい南風の吹く初夏の晩で、低くたれた梅雨空に、夜の東京の街の灯が赤く濁つて反映しているのが、開け拂つた窓から覗け、かけ換えたばかりの白いレースのカーテンが風にひるがえつて動いていた。

見かけよりは年が老けている若月早苗は二十四で、神田の簿記学校でタイプを習い、丸ビル五階のある商事会社で、幹部の地位にいる。

杉野ユキ子は高等学校の時早苗の下級生で、こちらは裕福な家庭の娘だが、横浜の伯母さんの家へ家事見習いに行つていたので、こういう外泊には、ちよつと向島の実家へ帰つて来るというもつともらしい口実を使うらしい。

二人がアパートへやつて来たのは、夕飯もすんだ九時過ぎだった。

どうやらこのまゝ、二人はこゝへ泊る気がしいるが、ベッドに二人は寝られるとして、三人となると、——一人は床へ寝なければならぬ。

「これはどう？」

ウイスキーを出す、

「あ、ユキちゃん大好き！」

そういつて、若月早苗はすぐにグラスへ、その濃厚な琥珀色の液体を注いだ。意外にも早苗の方は、酒類は一切きらいなんだという。

「外から覗かれないかしら。」

緑色のビニールの大きな笠をかぶつたスタンドの灯りに、もう一枚桃色のビニールの風呂敷をかぶせて、寝台の横の側卓に置いたので、室内はその艶めかしい桃色の薄明りで柔らかに照らされ、寝台の脚の方にあたるところが頭の位置よりもいくらか明るくなつた。

それを眺めて杉野ユキ子が、ちよつと、開け拂つた恋を気にしていつた。

「いゝじやないの！」若月早苗は乱暴に、

「覗くヤツがいたら、覗かせてやればいい。」

アルマイトの鍋に入れてゆでたガタペラの塊根を見せると、早苗とユキ子は好奇の眼を光ら

せ、唾をのみこんで、熱心にそれをいじつたり調べたりしていたが、やがて私からやりかたを教わつて、ナイフで皮を剥き、長さ十二三センチ、太さ指三本ほどの、両端がまるく球になった棒状のものに削りあげた。

「ア、何だかムズムズする感じがする！」

粘液で織い指をヌラヌラさせて、若月早苗がびつくりしたようにいつた。

「じゃ、先生ごめんなさい。」

「アム、いムヨ。」

私は素肌タオルのガウンをきて狭い部屋の窓際の腕椅子にかけた。

窓を背に、内がわへ向くと、すぐ正面が、クリーム色の壁にくつつけて据えた寝台で、すべてのものが、柔らかい薄桃色の灯りに包まれ、夢幻的な雰囲気をかもし出していた。これからそこで演じられるはずの露骨に淫蕩で猥褻な演戯さえ、この雰囲気の中では、美しい夢幻的な情緒を帯びて眺められそうな気がした。

若月早苗はれいの素朴な男装で、杉野は今宵は大きな蝶模様を白く桃色に抜いた明るい水色がかつた銘仙の一重に、黒い博多帯を締めていた。その帯を、寝台の前でグルグルと早苗は解き、そのまゝ男のような腕力でユキ子のからだを、着物ごと抱き上げて、ドサリと仰向けに寝台の上に寝かせると、グイグイと乱暴に着物の前をひろげ、色白いボツテリした裸かを、灯りの中にムキ出してしまった。

ピシッという変な音を立てて、何か妙なものを

を彼女の下腹部の辺からハギ取つたので、よく見ると、薄いゴムのバンドに金具がとりつけられた月経帯だつた。

私の方を見て、若月早苗がいつた。

「この娘いま月経なの！」

「イヤよ」

ユキ子は肩が半分脱け出した着物の袂を掬いあげて、それで顔をかくそうとしたが、早苗はゴロリと彼女の裸かを向うへ轉がすようににして彼女の白いからだの下に皺んで敷かれていた着物を、邪慳な力で引つぱつて取つてしまった。

これで、杉野ユキ子は全く一絲まとわないう裸かになつた。

「寝台よごれるわヨ」

手のひらで顔を隠して、ユキ子がいつたので、私は気がついて、椅子から立つて、壁の掛け釘にかゝつていた厚い大きな浴用タオルを取つてフワリと彼女の裸体の上に投げてやつた。

私はスタンドの灯のすぐ下へ、膝の上に夕刊を拡げ、時折その文字をたどつたり、また眼をあげて、すぐ鼻先の寝台の上の様子を眺めた。

杉野ユキ子は桃色の花模様のついた浴用タオルを、お尻の下に敷いて、裸かを仰向けに寝台に横たわり、若月早苗は着のみ着のまゝ寝台にあがつて、彼女に添い寝するようにして身を横たえ、ユキ子のからだのいたるところに接吻をしたり、抱擁したり、だんだん自身の情熱に忘我的になつていつた。やがて、寝台から身を起こして、スイーターをはぎとり、ジャンパーを

脱ぎ棄て、シミーズをハネのけ、ズロースを脚の先へこかしてしまつて、男のように肉の引き締つた皮膚のやゝ浅黒いからだを、ムキだしに裸かにして、ユキ子の白い柔らかいからだと重なるようにして抱き合うのをジツとだまつて、唾をのみ込むのも遠慮して私は見つめていた。

「先生、ガタペラ頂戴。」

「ヨシ。」

早苗の手にガタペラが渡り、彼女はユキ子の顔に顔を重ね、唇に唇をかぶせたまゝの恰子でヌラヌラ滑る塊根を持つた手を、裸かの足の間へ持つて行つた。

三十分程の間、私は部屋の外へ露骨な呻き声が漏れるのをハラハラ気兼ねしながら、ガタペラの效果の凄まじさに、今更ながら息をのんだ。それから、失神して屍骸のようになってしまつた二人のからだを少し動かして、骨を折つて、ガタペラを取出した。あまり長く粘膜に接触して置くと、炎症を残すからだ。

ガタペラの塊根は、赤インクで染めたように濡れて、真つ赤な雫をたらしていた。

まさに、情炎のサロメが手にしていたあの双刃の剣だつた。

そこらは一面に、ケシの花びらをムシつて散らしたように悽愴をきわめ、鉄くさいナマぐさい臭いがたちまち部屋いっぱいになり籠めた。

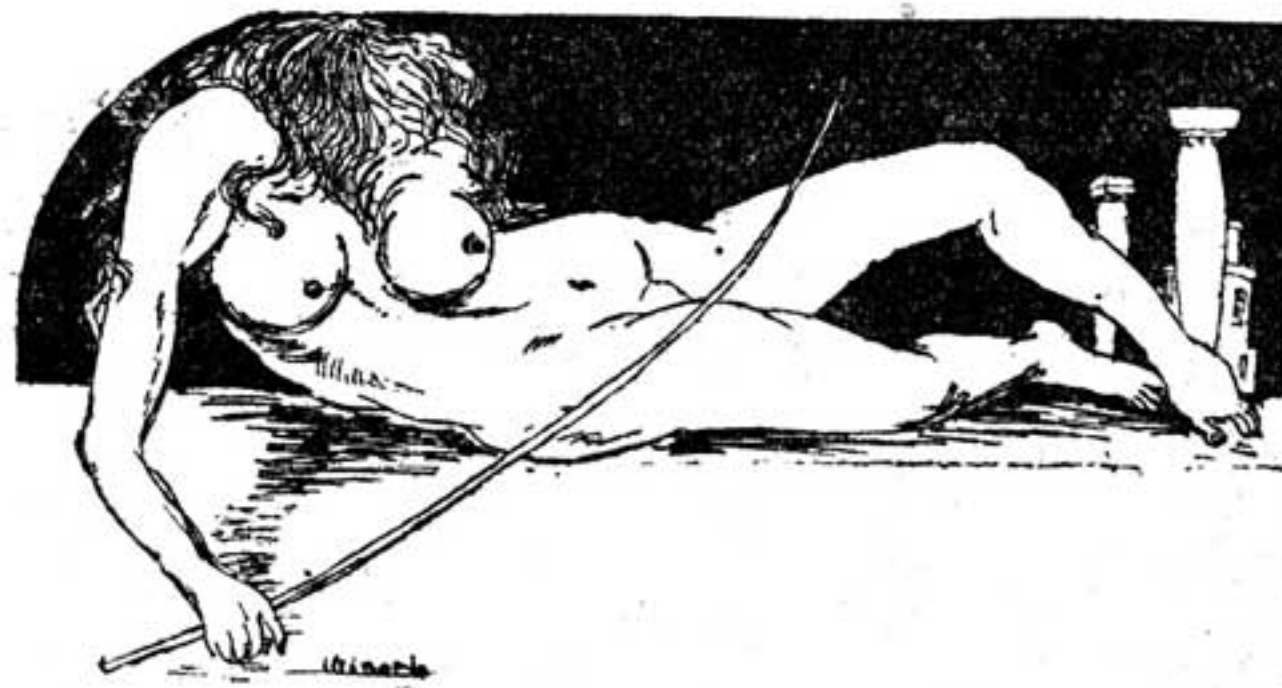
ワイセツの極致にある新しい美が、そこにあった。

サチズム・テクニイタ

アル ゴラ グニア
嗜 虐 淫 の 手 法

い ろ い ろ

刺傷には當然出血を伴う。その赤い血がまた彼の衝動をみたすのである。小刀を握り、或はただ眺めるだけで強烈な淫情を催し、五十人もの女を刺傷したという男のケースをエビングが報告している……



坂ノ上言夫

精神的に——特に肉体的に、痛苦をあたえ、痛苦をうけることによつて(のみ)、性的興奮が誘はれ、その欲情がみたされる。一般に、われらがそれを変態性欲とよぶ異常な状態は、シュレンク・ノツツイングの命名としてアルゴラグニアといふ言葉で示されてゐるが、これは痛苦を意味するアルゴスと、性興奮を意味するラグノスとの、二つの言葉をむすびつけたもので、性興奮のためには、痛苦を伴はなくてはならぬといふことの異常な状態を、そのものズバリに表現したのである。

被虐者においての痛苦は、單に性感を誘ひ出す刺激だといふのみではなく、それがそのまゝ快感となる。だから、すくなくとも、彼自体においては、痛苦が痛苦でないはずだが、しかし生理的に正常な感覚の上には、ぜつたいに、いはゆる痛苦でなければならぬ刺激のみが、はじめて彼と彼女に性興奮をよび生ける。この場合虐待者においてはもちろん、相手がそれを快感のいづれにうけとらうとも、じつさい彼に「痛苦を与へてゐる」といふ暴虐の意識だけでたくさんなのである。(もちろん、それが本当に苦痛である場合は問題でない)。

大体、快感の極致に示される肉体の表情は、苦痛の場合のそれに通ずるのだから、歪む顔、もがく肢態、のたうちまわる五体の痙攣などだけで、けつかう、反應するであらう。

かくして、「性快感が痛苦と共にある」といふアルゴラグニアの定義に従へば、われらはそ

ここに、受動的なものとしてのマソヒズム、能動的には、サヂズムとして、その固有な領域を理解するのである。学者はこれを端的に、『疼痛性淫乱症』ともよぶが……では、さうした嗜虐淫における領域で、いかなる手法の形式が、廣くデエタの上にながめられるのであらうか。

◇ ◇ ◇

元来が、人間はその生物的自然の素質の上に、すでに性的な嗜虐の傾向をもつてゐるといはれており、或る程度において、性には、刺戟としてのそれが不可欠の要素乃至條件になつてゐるらしい。従つて、正常には、たえがたく不快な苦痛を伴ふものでないかぎり、愛虐の行爲はきはめて普通なもので、エリスのいはゆる「性愛の象徴形式」におけるプリミチヴな意義を含蓄するものとして、愛

に、その愛虐の行爲もが、深淺輕重の傾向を異にして持つてゐる。従つて、客觀的に、その正常と異常をわかつことはデリケートに困難だ。その行動と方法、標準の上には、格段な輕重があつて、固有な形に複雑するので中には、方法の形式でなく、程度だけで判断せねばならぬものもある。仕方がないので、或る学者などは、その反社会性にポイントを置いて「自他の社会生活に甚だしい不利益とか危険とかを生ずる程度の性欲を異常性欲とするが適當と考へられる——異常性欲の分子は誰れでも持つてゐるが、その程度が自他の社会生活に甚だしい支障を及ぼさない、むしろ、軽い異常性欲は、その組合せ具合がいろいろ、和合の完全な土台となる」といつてゐるが、さういふ見方を否定する理由はないけれども、これでは性欲そのものの本質的な正異

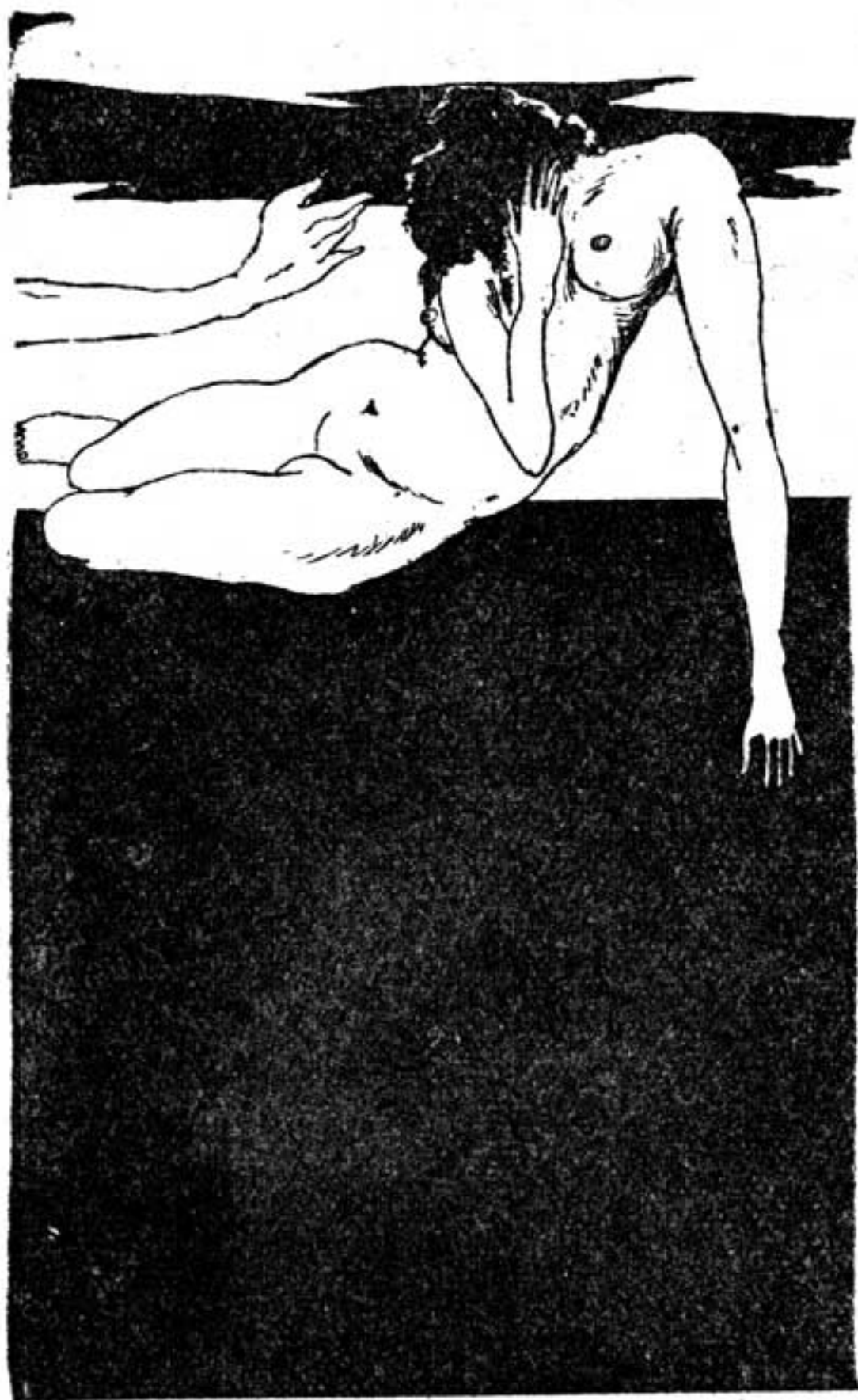
の區別にはなつてゐない。單に秩序の反社会性から見た形式觀でしかない。便利で説得的だが、本質的ではない。大体その本質はつかめないものなんだらう。けつきよく、大まかな常識で、その刺戟閥をデモクラチックに考へる外はないのかもしれない。しかも、刺戟といふものは、個人の上に慢性化して進んでいくから、じつに仕末がわるい。

性欲は、遺伝因子によつて親から子に、そのまゝあらはれる形質型のもの「たとえば種族保存本能として發達する素質がそれだ」と、環境の影響で、親とは異つてあらはれる現象型のそれによつて發達せしめられた素質との、二つから組立てられてゐるといはれてゐる。だから、生得生理的に正常だつた性欲も、偶然の、或る環境的な刺戟が、本然の傾向に目ざめて、遂に常識の領域をこえた後天的なアルゴリズムになる場合もある。たとえば、戦争や刑罪などにおいての、單なる殘虐行爲が遂に淫虐行爲に転落するが如きそれである。

とにかく、刺戟というものは、じつに摩訶不思議なもので、それが生理を變調させ、心理をあやつつて行くのだ。

◇ ◇

かくて、刺戟の叢は錯綜して、苦痛の國は無限に広い。そこには



の表現的な——或は実行的な技巧にさへなつてゐるのだ。犬もくはないといふ夫婦喧嘩がすでにそれで歌の文句ではないが、「けんかするほどあつくなる」のだ。で、クラフト・エビングがいふ「淫樂においてする虐待の、生理的にすぎない場合は、意識の内に、ほとんどその痕跡をのこさない」と。ところで、性欲ほど個人差の大きいものはないといはれてゐる。だから、みんながこの生理性の上

多彩をきはめるいろいろな茨の花
がみだれ咲いてゐる。が、アルゴ
ラグニアの現実的なデエタに拾ふ
かぎりは、大体の見通しがつかぬ
こともない。

クラフト・エビングによると、
淫乐的に昂じると、相手を殴打し
咬み、損傷し、或は接吻 無意識
に咬嚼にまで移行する。喧嘩した
り、搔乱したりするが、これらは
この場合、生理的自然に起る成行
として、必らずしも倒錯でないといふ。性的な興奮に伴ふ自然的な
ものとして、さうした行爲が、淫
交にむすびつくそれ自身の目的を
もたない限りは、倒錯でも病的で
もないのであらう。相手を裸にした上で無残

にしぼりあげ、折鑑し、脅迫し、密室に監禁
するなどといふことは、淫行自然の成行とし
ては、容易にうけ入れがたい。そこに倒錯的
なものの暗影を投射しないであらうが。とに
かく、その行爲には、意識的にせよ、無意識
にせよ、それが淫行にむすびつく、それ自体
の目的をもつことが倒錯を条件づけるのであ
る。アルゴラグニアの本質は、かういふ風に
考へた方が適確かもしれないとおもふ。

嗜虐淫には、大体においてマゾとサヂとサ
ヂマソヒズムの三態が觀察されるが、これに
おいては、その方法や程度に従つて、いろいろ



るな種類がある。でまづ最も単純なものから
見ていくと、言葉なり、行動なりにおいて、
相手に恥辱の苦態を与へやうとするそれがあ
る。いやがらせ、あてこすり、軽蔑、侮辱、
暴言、叱咤がみなさうだが、いちめて泣かせ
てよろこぶ——それで淫性がかきたてられる
のだ。いやがる行動を強制する。裸にした
り、しばつたり、折鑑するものもそれだ。わた
しが知つてゐる若い新婚の二人が、アベックで
銀座の夜を散歩したが、その花嫁が、「あた
し、あなたの愛情の深さをためすわ」と宣言
して、團丁目から八丁目まで、わざとピッコ
のまねをした。そして、困りきつた亭主の顔

を享樂するやうに、ニヤニヤしな
がら、ひどい片ちゃんばでシヤアシ
ヤアあるいて行く。これなどは、
多分にサヂの傾向がある。いやが
らせの典型的な形だ。すべてサヂ
スチックな行動では、相手に抵抗
を求め、そして欲情を強める心
理だろうがその結果は、強姦的な
意欲において、妻に対する強迫性
交をよろこぶことにもなる。良識
で妻が性交をいやがる場所たとえ
ば、牧場の叢中で、旅行中の汽車
の内で、或はトイレで、公園など
でいやがる妻に暴力を揮つてや
つつけるのだ。まともな、寢室の
ベットの上では興奮しない。クラ
フト・エビングは、さういふ男のケースを語
つて、女が躊躇し逡巡するその抵抗の中では
男のサヂは特に猛然と目ざめると書いてゐる
が……

女を軽蔑したり、圧迫したり、いやがらせ
る倒錯的なサヂの衝動は、女を更に更に、そ
れ以上にいやがる目に合はせようとする要求
において或は「汚瀆」といふ方法を取る。す
なはち、不潔なもので汚してやろうというの
だ。

Xといふ男に情婦があつた。その男は、女の
手を炭や煤で黒くぬり、女を鏡の前に座らせ
る。鏡にうつる女の手をじつと見つめて、そ

れで満足して帰つて行くといふ變つたのがあ
 るかと思ふと、二十九歳の商人で、嘗ての恋
 人がつけてゐたのと同じ白色の型のエプロン
 を、偶然子守娘から盗み取つて、その中で手
 淫してから、白いきものに魅力を感じて、町
 で出会ふ白衣の女にインキをぶつけてやろ
 うといふ要求がしきりに起り、それがしかも
 淫好的にはげしくなつていつたといふ例があ
 り、これはサヂにフェチズムが結びついて
 るらしい。今一つの例で、三十一歳の男は
 やはり白衣へのフェチズムをもつてゐたが
 二十五歳ごろから、女が白衣をつけ、それが
 街頭のはこりにまみれて汚れたのを見ると、
 とたんに色情的な興奮を感じたので、それか
 らは、婦人の衣服に対する汚瀆の性的病癖を
 昂じて、遂に塩化鉄液やインキで汚すことに
 より満足するやうになつた。この際、もちろ
 ん、色情興奮に伴ふ射精があつたといふ。

密集する男女雑居の人中で、ひそかに手淫
 し、射精し、その精液で一張羅の外出着を汚
 され、ペソをかけた女の哀話はよく聞くとこ
 ろであるが、腐蝕性の劇毒物、特に硫酸や塩
 酸を投げつけるといふ方法は、ヴィトリオラ
 アゲとよばれて、三百年以上も前、フランス
 ではルイ十三世の時代から流行したけれども
 しかしこれは顔や五体にぶつかけるので、憎
 悪か怨恨にもとずき、性欲的なものではな
 かつた。結局腹いせなのだが、性欲的な汚瀆の
 それでは、着物にかけるので、それも盛装の

ものに限り、分量も比較的少量で最も特徴的
 には、本人が知らないやうにソツとやる。昭
 和の初め、新潟のDといふ二十九歳の青年は
 町を徘徊して家々を覗きあるき、寝みだれた
 女をねらうので、その陰部に、窓などから手
 をさしこんで、携えてゐるコウルタアをぬり
 つけることによつてスリルの淫情を満足させ
 たといふケースもある。汚瀆症は元來が攻撃
 的なサヂなのだが、金がなくて充たされな
 かつたり、勃起不能の無能力者によくあらはれ
 るのだといふ。一の代償満足なので、單に
 「汚す」のではなく、「傷けて汚す」意識の下
 に行はれるのが、いわゆるスカアト切り、袖
 切り、帯切りである。この場合は、決してそ
 の肉体を傷つけるのではない。

この種の、比較的單純なサヂの一つとして
 象徴的サヂズムといはれてゐるものがある。
 それが、アルゴラグニアの衝動からでない場
 合は、外観上全く他愛もない兇戯に類する方
 法で行はれる倒錯であつて、次のやうな例が
 ある。

一人の男、月一回一定の日に情婦のところ
 へいつて、女の額にかゝつてゐる髪の毛をチ
 ヨツピリ切りとる。それが、それだけでこの
 男には強い淫好がおこり、満足して帰るのだ
 かつた。今一つのケースは、ウインの男で、し
 きりに娼家に行くのだが、まともな性交はせ
 ぬ。そしてたゞ、女の顔に石鹼をぬり、それ
 に剃刀をあてて、ひげを剃るまねをする。そ

れだけで烈しい淫情を感じると共に、遂に射
 精までするのであつた。

◇ ◇ ◇

かうした單純なサヂが、色情亢進を伴ふに
 従つて、手段も方法も段々辛酷になる（この
 場合、悖德狂もが、その條件になること勿論
 である）。その初程のものとして、いはゆる
 肉体刺傷があらはれる。これは汚瀆からの直
 接の進行と見ていゝが、スカアトや帯やで満
 足せず、肉体にまで及ぶもので臀切り鼻そぎ
 がそれだ。特に美しく化粧した鼻を切る、も
 ちろん危険を伴はぬ程度にやるので、前述新
 潟のDといふ男は、ホテルの婦人便所をのぞ
 きこみ、用便中の女の陰部へ竹の棒を突きさ
 して逃亡するといふ變つた男だつた。

刺傷には當然出血を伴ふ。その赤い血がま
 た彼の衝動をみたすのである。小刀を握り、
 或はたゞ眺めるだけで強烈な勃起を伴ふ淫情
 を催し、五十人もの女を刺傷したといふ男の
 ケイスをクラフト・エビングが報告してゐる
 が、ボウツエンにおける三十歳のHといふ男
 は、しばしばナイフで女の腹を刺し、好んで
 陰部に負傷させた。刺傷の瞬間において、十
 分に、交接と同様な満足を得たといふ。若く
 美しい処女の陰部を刺して、血が双から流れ
 出るのを見ると無精にうれしがつた。

Yといふ二十五歳の男は、はじめ「十歳ご
 ろ」自分の指から血が流れ出すのを見て色情
 を感じたといふが、成長するに従つて、婦人

の流血を眺めたい淫好的な要求に変わり、従妹や女中を傷けた。遂には、出血を想像するだけで射精した。正常な性交においても、女の指から出血することを想像しなくては勃起も起らずむろん射精しなかつた。

Mといふ老人が、針と麻のハンカチと鞭を

手にして、女にその針(約百本)を刺し、なほ二十本ばかりの針のついたハンカチを胸にあて、陰毛をぬき、鞭打するものについてはすでに「淫虐の終点」で語つたが、女子の臀部を外科用のメスで刺すか、切つて出血を見なければ興奮射精しないドクトルについてですでに語つた。中世紀魔女への拷問制裁において、エルスベツト・ルウルといふ若い美人が行はれたそれは、何十本かの針で、全裸の五体に乱刺されたといふのでこれは異端糾明における責めの一方法だつたが、しかし、かくして、そこには宗教的・サヂズムの一端がうかがはれる。(因みに、すべての残酷な刑罰拷問においては、同じ意味でのクリミナル・サヂズムがある。或は自然にそれに転落する。)

理刺戟から、肉体上の刺戟要求に進んでいくと、前述のやうに刺戟流血といふ形式にその方法が変つていくが、これには多分、汚濁につらなるフェチズムが潜んでゐる。ところでそれが暴行苛虐といふ一方的な気持と要求に分離して傾倒する場合、端的にはまづ鞭打



でと否定されるのではない。打つことによつて性興奮の絶頂に達しうるもの、即ち鞭打サヂストと、うたれることを求める者、即ちマソヒストの両性があるわけだが、これに関する古今東西のデエタは無数にある。それだけ單純なサヂで、エリスがいふやうに、「鞭打つ熱望は、たまたま鞭打を求める人と知合つたために誘發されることがある」と共に、偶然の受鞭が、それをポイントに、彼のマゾを誘ひ出す場合もある。

Kといふ四十代の男があつた。手広くやつてゐる製造業者だが、常識人でもつとも異常なところはなかつた。しかるに新しく雇入れた若い

女が、愛嬌たつぷりなくせに、なまけもので軽卒で、手をやいて、思はず一撃をくわせると、彼女はとたんにとび上つてよろこんだ。「今まで叱られさうなことばつかししてたのは、こんな風にうたれたいからだつたのよ、もつと打つてちょうだい」といふ。さういつて真裸になるので、よしづつてやると調車で

となるであらう。これは尤も卒直に肉体的な反應をよび生けるもので、刑罰や拷問においても、それは最も簡單で、素朴で、直截な方法として、さかんに用ひられたが、しかし、この方法の上にこそサヂズム本来の形態がある(だけど、それが、フェチではないが、フェチ的なものと、結びついた心理機制がこゝ

打つてやると、いはゆる「充血した紅潮と、痙攣の動きと、楽しさの羞らい」を見せて悶える。それが彼の淫情をそゝつてその場で肉交した。しかも、それがモメントで、Kもだんだん引つこまれ、遂に立派なサヂストになつてしまつたといふ話もある。

宗教的な信仰鞭打といふものがあるが、元來は性的な興奮のためのものでなく、克己節制のための苦行の一方方法なのだけれども、前例のやうな成行でマゾになり、サヂになり、或はサヂ・マゾ（自虐）になる。エリザベス・ゲントン尹の話はよくこの引合に出される一例だが……

はげしい鞭打は、性交の代償ともなるが、大抵は前戯として行はれる異常刺激である。そして、鞭打から更に進んだ責め折檻といふ形式の上に添加される。責め折檻の最も普通な形は緊縛は、自由の完全な拘束にあるから無抵抗と絶対屈従への要求が主体となつており、屍虐屍姦の心理機制につながるものだがそれに、しかし尙ほ、ひどい緊縛に伴ふ痛苦への要求もある。色々なしほり方が工夫されるのは、完全な拘束といふよりも、痛苦への要求にもとづく加虐の智巧である。つまり、それで苦しめることが主になつてゐる。

エビングは、棍棒とか鞭打とかいふ言葉をきいただけで烈しい性興奮をおこす二十一歳の処女について語つてゐるが、また、手枷足枷をはめられたと空想するだけで、性興奮す

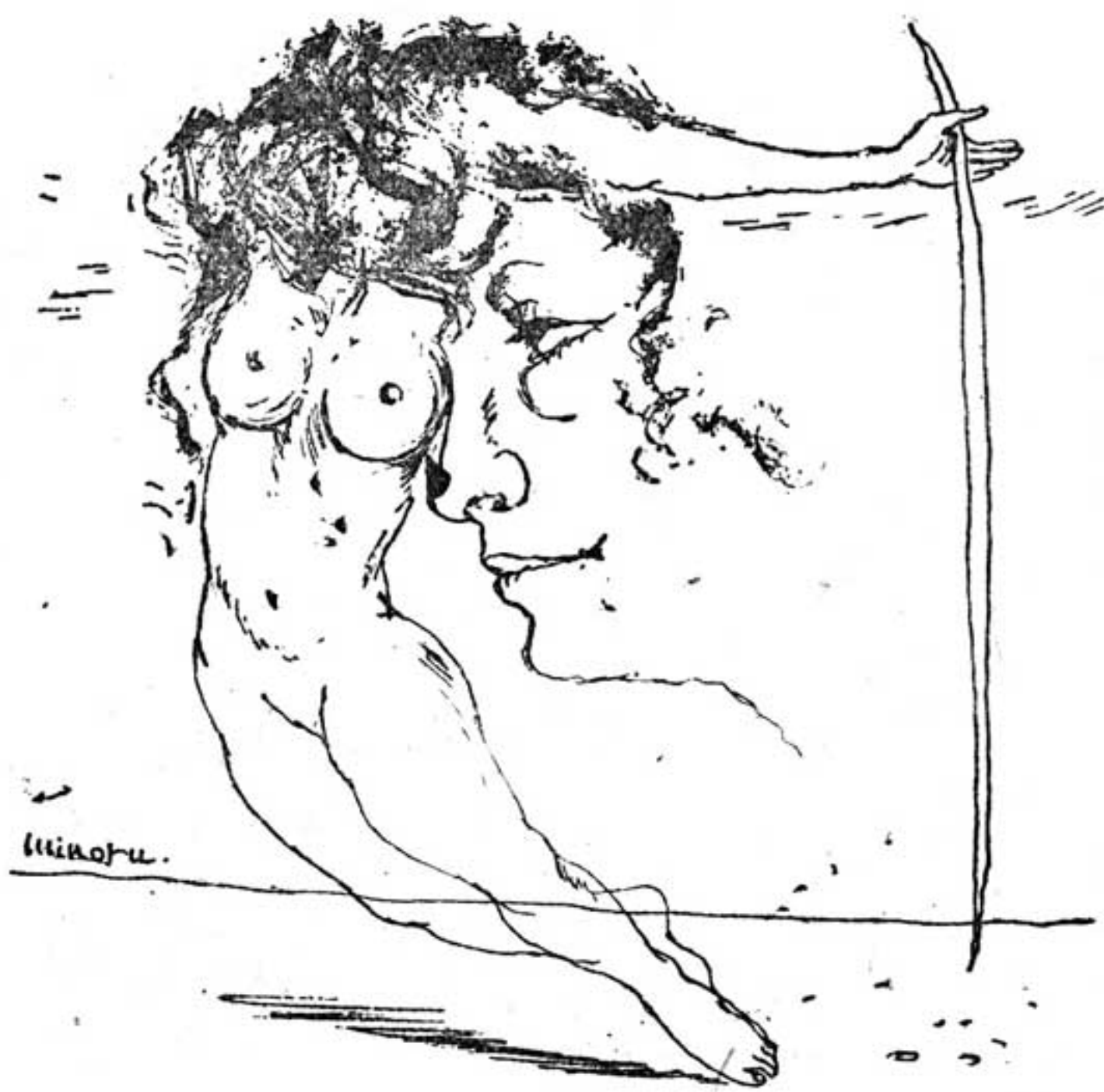
る女性、愛人の両手両足をしばりあげた瞬間に、射精するといふ一男性の記録も報告してゐる。

いわゆる責めにおける手法の多殊なる形は刑罰特に拷問のそれにそのままそっくり通ずるわけで、多彩な形容をもつてゐるが、刑罰を意味するパニ

ツシユといふ言葉は、元來が痛い目にあはせる」といふ意味をもつてゐる。

だから、刑罰史は、さういふ意味での、あらゆる苦痛の集成であり、したがつてその智巧の体系たることを示してゐる。で、いふまでもなくそれがまたそのまま嗜虐淫にお

ける淫虐の体系にもなりうるわけであるが、しかし、さうだからといつて、その拷問史や刑罰史にあらはれた「痛苦」の手法を、こゝに旁説する余裕はない。けれども、たとえば「ジュリエット物語」の挿絵にあらはれる「吊し責」に鞭打を加へるサヂは、吉原遊廓古代



でのリンチとして、「ブリブリ」といふものと同じである。そこでは、いはゆる「駿河問状」に似た吊し責も見られ、海老責みたいな縛りのサヂも見られる。惣じて、フィツシヤアなどの拷問に通ずる圧迫拷問としての搾拇或は一聯の鎖拷問、ベムベルク責、伸ばし拷問、ろくろ責、木馬

水車責。或はチベツトでの石冠責、乃至は鉄箸、火斧、鉄手責等々、火刑、水責いろいろのその方法が、みな嗜虐淫の、方法にならざるはない。そして、それらは、どこかで、誰れかによつて行はれたにちがひない。反対に、どういふ淫虐の手法も、刑罰や拷問方法の体系の中に見出せないものはないのである。

ところで、責めや拷問においては、被虐者を決して殺さぬのが原則である。自然の結果で死ぬことはあつても、殺すのが目的ではない。むしろ殺さないように苦しめるのが目的である。そのやうに、これら苛虐方法が、嗜虐淫で行はれる場合も、決して殺淫ではな

い。そこにこの段階におけるサヂの限界があるのであるが、しかし、色情亢進の烈しい脈動の中で、この残虐性がむすびつく最も徹底した様相と行動にあらわれると、そこでは遂に無残な殺淫（殺す、死にまで傷虐する）や喰肉淫が起る。

◇ ◇ ◇

殺淫については、すでに前に説いた「淫虐の終点」から詳説をさけるであらう。要するにそれは、殺戮が性欲と結びつき、性感と結びつき、性交とむすびつくすべての場合であるが、その段取は、はじめから虐殺傷虐に徹底して遂に死にまで享樂するものがあり、一氣に殺すのがあり、殺してから屍体加虐に及ぶものあり、これに性交を伴ふもの、それは閑却するもの等色々だが、殺し方の最も普通な形は絞首乃至扼殺である。悶絶して死んで行く窒息苦の状態なり表情が、全く、「死にます、死にます」と嗚叫する、あの時の、絶頂性感の状態と表情を、そのまま、そくり髣髴するので、聯想的な（或は錯覚か幻想の）魅力を感じるであらう。有名な大米龍雲が強姦中に絞首した被害者の全身にケイレンがきたとき、性器にもこれが波及して快感を覚えたので、その後、それを反覆実行したといふやうな状態への魅力も確にあるに違ひない。死にまで傷虐する手段としてはフオイベルバツハが示したアンドレアス・ビツヘルがしたやうに、大抵相手を裸体にして、乳房を切

り陰部を抉り、股や臀等性感帯を手はじめに五体を寸断する。或は腹部を割いて内臓を抉出し、性器は特に大事に切りとつて之を眺めてたのしむのである。

かくして、殺淫や屍虐は、遂にその肉を食ひ血を吸ふに至つてきはまる。これは、多分フェチズムによるものだらう。一の狂崇態である。殺戮のあとでよく陰部だけが行方不明になるが、これはたのしみに取つて保存しておくので、あきらかにフェチだ。カンニバリズムは、愛情の最も原始的な野蠻人的表現形式だとフロイドはいふのであるが、たしかに、原始人においては、それを食ふことは、そのの生命との交流合一を意味するものだった。（拙稿「性の饗宴」に詳説）

以上縷説の、サヂを中心として見た嗜虐の種々なる手法は、もちろんそれが受動化するることによつてマゾの技巧となる。受動鞭打もさうだバグニズムもさうだ。あらゆるそれが裏返しにそのまゝマゾに通ずるのである。と

◇ ◇ ◇

加虐の対象を屍体に取り、いはゆる屍虐における淫好の觀念が、人ではなく、しかし人格的なものへと結合すれば、肖像姦にあらはれる。けれども、この場合は大抵汚穢である。残虐の対象を動物に求めるサヂもあるが手法の上には格別の違ではない、自らは手下さず、單に加虐し成は残忍な場面を視るのとだけによつて満足する物臭さなサヂストも

あるが、これは、いはゆる架空のサヂズムにつらなるもので、脳底におけるだけの悲愴なサヂである。成はマゾである。

想像的な觀念上のものだけに、これこそ、その嗜虐は、われらが考へうべきあらゆる手法をつくして、自由奔放の地獄絵を脳底に描き、魔幻の夢に酔ふのであつて、サドの著作の集成といはれる「ソドムの百二十日」といふ淫虐物語では、六百に達するその技巧が行動的に描かれて、まさに悪徳の聖（性）典であり、地獄の大体系が示されてゐるといふが……それを読むだけで興奮するサヂである。

さて、われわれには、かくしてまさに地獄ででしかないその苦痛の世界こそが、アルゴラグニアのパラダイスであり、地獄が享樂の至境だといふ、このおどろくべきアイロニーは、いかに解かるべきであるか。

クラフト・エビングにいはせると「あらゆる闘争と破壊の衝動は、のちに至つては犯罪（だから悖徳）としての意義しかなくなつたが、残虐は色々な源から流れ出るもので、原始人には極く自然なことだつた」といふ。さうだとすれば、それは單に、この原始性への肉体的な郷愁を示す先祖返りの表現だといふ以上に、実は「性は、徹頭徹尾、その原始的な自然性を、自らにうつちやつてしまうものではない」といふことを、身をもつて抗議してゐるのかもしれない。



大座談會 変態風俗縦横談

出席者 (發言順)

醫學博士 式場隆三郎
性評論家 原比露志
佛文學者 矢野目源一
三味線 豊吉

本誌記者

昭和28年11月15日

於 日本橋芳町流球料亭なは

平手打ちは嫌や

鞭でね

式場 今日の話は、
変態風俗縦横談とい
うのですが、大體こ

のころはセックスだけでなく政治でも、文学でも要するに社会全体が皆変態なので、そのことをまず初めに云っておきたいですよ(笑)。ぼくはこの雑誌をみておどろいたのだけれども、初めから変態ばかり狙っているのですか。
本誌 えゝそうです。しかし低級なものを狙つ

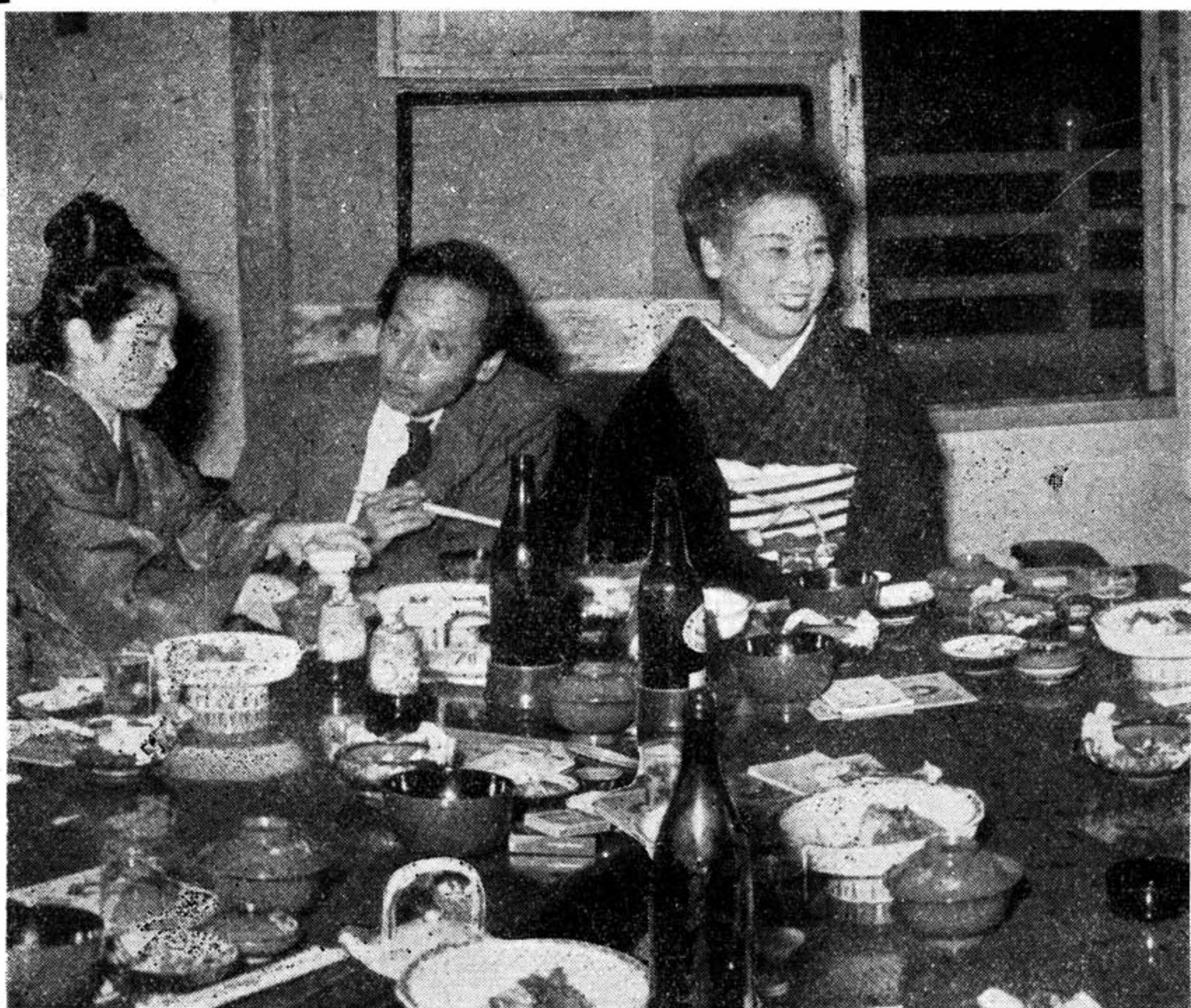
写真 は右より

式場隆三郎

矢野目源一

豊吉

原比露志の各先生



たのではありませんせん。例えばそんなにエロを強調しなくとも、マニヤに喜ばれる読物や絵があるもので、そんなもので押して行こうと思つたのです。この考えにあやまりはなく、お陰様で毎号凄い売行です。

式場 原さんの方の新聞なんかは、どういふところを狙つているのですか、変態はやらないのでしょうか？

原 やらないことでもないで、このごろはやはり変態が多いのです。
式場 ぼくなんかは變態などにはあまり馴れちまつていて、それほど感じないのだけれども、一体このごろどういう傾向なのだろうか。
原 とにかく変態と

いうことを、皆が非常によく知ることになったものですから、自分も變態ではないかという質問の投書なんかがありあいに多くくるのです。
式場 やはり變態に興味を持っておりますか。
原 持っていますね。

式場 矢野目さんなんかどう思うかなア。

矢野目 ぼくは、ぼく自身が變態だと自称しているんだ(笑)。第一フランス文学者がフェンシングの家元で、そのほかに料理もやるし、性生活にしたつて、非常に若い女房——二十七ですが——を持つているし、それでまアなんとかごまかしてしているとすれば、一番變態の典型的な野郎といったらば、まずぼくなんか白羽の矢が立つのではないかと思いますね(笑)。

式場 なアに、われわれから見ると、あなたなんか大して變態ではないよ。

矢野目 だから、ぼく自身も安心してゐるのですがね。

原 むしろ世間の方が逆に變態なのでね。

矢野目 風変りな生活や性格を變態と名付けるのなら、手前なんかはそうだと思つてゐるのです。

式場 今日の座談會では、もつとすごいやつを扱うのではないですか。この雑誌をみると、サジズムをひどく強調しているけれども、やはり變態の中ではそれを一番おもしろがるの？

本誌 お色気と一番密接につながっているものですから、読者から喜ばれるのです。ただ読者からの投書は、男性の同性愛、その次に男性の

マゾヒズム、三番目にサジズムです。けれども、サジズムというのは、ほかの先生方にもよくいわれますけれども、簡単に女を買ったり遊んだりしてすぐ満足できるものですか、わりあい投書したりなんかしなくても解決するのだろうと思うのです。

式場 大体サジズムというのは、女の人我慢していることが多いのと、もう一つは、馴れてしまうと苦痛でなくなるために、よほど虐待したり殺したりでもしないとあまり表にはあらわれないものなのだ。そうだとすると、実際にはもつと強くなっているのではないか。

本誌 どうもサジズムが読者の六十パーセントで、あとの四十パーセントをマゾとか同性愛が分け合っているのではないかと思われま

矢野目 私が読んでいるのは、大体フランスの文献ばかりです、こういうものの中に出てくるやつは気狂いと変態との区別がハッキリつかないのです。

式場 ぼくなんかよくきかれるのは、お宅に変態性慾の患者が入院していませんか、ということなのだけれども、それだけで入院するということは滅多にないので、ほかにも変なところがあつて入院しているのです。だから、よく色気狂いなどというけれども、エロのすごいやつは、精神病的にはまだ大丈夫なので、ほんものの精神病になつてしまえば、

エロの方はもうダメになつてしまうのだ。
矢野目 足の裏をなめたり、精液をなめたりするというのは、何か変態がついているのではないですか。

式場 普通のセックスでは満足できなくなつて、もう少し刺激が強くなければ性的に昂奮しなくなるのだね。だからストリップなんか、初めは非常におどろいたけれども、今ではもうそれほどの刺激にはならなくなつてきていて、おそらくもう少しサジズム的な傾向が出てこないかと、満足できないようになるだろうね。つまりサジズムとかギニョールみたいな非常に惨虐なことをしなければもう昂奮しないようになるのだね。

矢野目 だからストリップでも今は蛇を使つてみせるのがありますからね。

本誌 それで、うちの雑誌なんかも、相当有名なボードビリアンで購読を申込んできている人もありますが、つまりそれを使おうとしているらしいのです。

原 つまり技巧をつまに使うとして、ただけれども、そのつまだけとりあげられてしまったというふうなわけでしょう。

本誌 うちの雑誌でも女を縛つた絵をよく出しますけれども、実際に女を縛つた方というのは伊藤晴雨先生や少数のサジストや緊縛マニヤだけで、恐らく非常に稀なものだろうと思います。

式場 ぼくはサドの伝記を書いたり研究した

りして、サドの研究家になつていなければならないサドつていうのも当時は非常に浮名を流しただろうが、今だつたら大したことはないね。

ところで、最近のそういうやつを例を挙げてみると、まあ戦後のサジストといえれば小平が一番すごいやつだろうね。あれなんか殺人淫楽症というか、とにかく殺さなくてもいいのに殺してしまうんだな。原さんの新聞なんかで扱うサジストのすごいのはありませんか。

原 最近の記憶に残っているようなものとしてサジズムというのは一つの病氣としての症状ですね。たとえば、この間の小学校の女の先生なんかの場合は、別にサジストではないわけでしょう？

式場 あれはサジストではないね。サジストというのは、やはりそれによつてセックスの喜びを感じて、次々にそういうことをやらすにはいられないというのでなくてはいけいないのだ。ただ殺してしまうだけとか、暴力でやつてしまうというだけでは、サジストではない。

本誌 それから毎年あることですが、股切りなんかというの……。

矢野目 あれは捕まつたでしょう。

本誌 しかし、だいぶ長いことかかりましたね。

式場 あれなんかもサジズムの一種かも知れ

ないが、しかし、ほんとうのサジズムというのは、もつとすごいので、相当長期にわたって女をいぢめて快感を感じるというやつなのだ。

本誌 サド公爵というのは、主に閨房で……。

式場 閨房だけではない。監獄へ入れられてからでも、奥さんがあんなに純情を捧げてきているのにそれを無視したりしてやつているのだ。あれは文学者だから、一つには材料にしたのだろうね。

本誌 矢野目先生なんかずいぶん……。

矢野 大体、自分の趣味としてはサジズムやマゾヒズムは好きではないのです。だから私が、変態の人間に関して読んだりしたものといつても、それはおかしみのあるやつなです。たとえばフランスのリヨンに、非常な金持ちの女がいて、自分の家を大きな性器の形につくつて、胎内の幻想というか、おつ母さんの腹に入つて寝ていようというので、六十四才で死ぬまで一步も外へ出ないでそこに住んでいたというのだ。

式場 子宮の中に寝ているというわけだな。

矢野目 つまり非常にでかい門があり、自分の寝室はその奥にあつて、その中に寝ていたんだね。それで、壁もしめらせておかなければ



も、大したことはないのだ。

ところで、日本では例のお定さんなんかはめずらしいね。一人でいろいろな要素を持つているからね。サジズムもあればマゾヒズムもあり、日本の女としてはちよつとめずらしいタイプだろう。

矢野目 追隨者が出て一そう名前があらわれたね。なぜお定が当時でもあんなに有名だったかという、ちよつと、二・二六事件などのあつた時で世の中が暗い所へああいう事件だったので、世の中がちよつとホッとした、というとおかしいけれども、とにかくそういう気持ちだったのだね。そこへまた最近になつてそういうのが輩出したものだから、なをさら

有名になつたのだ。

式場 女があつて、これを切つたりするのは、かならずしもサジズムではない、一種の愛撫だと思ふね。

原 フェティシズムでしょうね。

式場 というか、とにかく何か好きなのだ。だから相手の一番大事な所を切り取つて持つていたりしようということになるのだ。

本誌 どうも閨房などで残虐にいちめて昂奮するというのが実は案外少いと思うのですね。そういうのがあつても、秘密にかくしているからかも知れませんが……。

式場 そう、秘密にしているのだ。

矢野目 あれは、初夜の印象の再生というか

幻想というか、そういうものとみななければならぬものではないですか。

式場 そういうものよりも、とにかく強く昂奮したい、それから強いショックを与えたいということなのだ。だから、女もまた喜ぶということもある、つまりいぢめるのではなくて、愛する形なのだ。

矢野目 ところが、平手打ちはいけないそうで、それは女がいやがるという。鞭で叩くのはいいというのだそうだけれども……。

式場 平手打ちというのは、非常につれないからね。

矢野目 つまり侮辱に対しては怒るが、愛撫の器具としての鞭は喜んで受ける傾向はあるかも知れませんね。

式場 しかし女だつて噛みついたり、ひねつたりして喜ぶのもあるから、これもサジズムとはいえない。

本誌 外国には？

式場 外国の春画なんかの例をみると、日本なんかのものとはちがうんだ。ことにドイツ辺りのエロ本などというのは猛烈なもので、ことに第一次大戦後のドイツのエロ出版物などというのは、サジとかマゾとか大変なものばかりなのだ。やはり戦争のあとにはそういうすごいものを求めるようになるので、日本人かでも、戦争直後はただのエロだつたのがこのごろになつてから、すごい変態のものを求めるようになったのだと思うね。

矢野目 西洋でよく竹箒みたいなものがあるけれども

あれはサジズムと関係はない。あれは刺激を与える手段であつて、云つてみれば健全なる刺激の方法らしいね。

式場 フロイドに云わせると、子供の鬼ゴッコなんか

も一種のサジズムとマゾヒズムだといふんだね。たとえば男の子が女の子をつかまえてやれという気持ちで追つかける、女の子もまた逃げればいいものを、つかまえられるて喜ぶというように、小さい時からそういう傾向はあるというのだ。

本誌 今、おつしやるように日本の春画春本の古いやつをみてもあまりサジズムみたいなものはありませんね。

原 国芳がそういうのを少し描いているくらいなもので、あとはほとんどないですものね。しかし、雄略天皇がはらみ女の腹を割つたとか、織田信長とかいふのは……。

式場 織田信長というのは森蘭丸の方だ(笑) 雄略天皇の方はサジストだがね。



原 ただその場合、性的快感まで味わつていたものか、それとも面白半分にやつていたものなのか……。

式場 サジストというのは、自分自身では何も意識していないのがたくさんあるからね。

原 実際のサジストというのは、あまりいないのですか。ヨーロッパでは、鞭打ちがはげしかったようですけれども、そういう點は、体力的に何か関係があるのでしようか。

式場 一つには、日本の女はおとなしく云うことをきくからだよ。

矢野目 体力的に日本の男が弱いということについては一言云わせて貰いたい。絶対にそ

んなことなし！ 外人の男なんかクソくらえだ。

原 だけれども、考え方が非常にアッサリしているのは……。

矢野目 イヤ、アッサリしていない！

式場 いつくなくなってきた点は外人に似てきたよ(笑)。

本誌 日本の女はおとなしいという話ですがマゾヒストの男たちは、実に男性的な女性を求めていて、どこかに自分をいぢめてくれる女はいないかというので、うちの雑誌などへも悶々の手紙を送ってきたりする人があります。

式場 そういう人は、アメリカへも行けばいいよ。そこへ行くと、沖

縄の女なんか実に男を大事にするからね。しかし、日本人

も矢野目源一その他強いのもいるけれども(笑)

平均すればやはり弱いなア。

矢野目 ぼくは日本人の名譽のために広言したい。西洋人は航続力は弱いのではないか。

式場 しかし全体の体力というものは、向うの方が強いね。

矢野目 そこで我田引水で、ぼくは、話を餌



式場先生

の方へ持つて行くのだが、やはり食い物がしつかりしていれば同じだと思うね。

人間みんな變態だ

本誌 ところで先生、又近頃うちの雑誌などに男色者の投書が山積しているのですが、そういう傾向は？

式場 同性愛がふえたことは世界的傾向なので、その点では日本も

少し大人になつたというのではないかな。文化の進まない

未開民族には同性愛はないからね。しかし、そういう投書が

このごろさかんにくるのかね、原さんの方の新聞へもくるで

すか。

原 きますく。

矢野目 日本でも、元祿時代には多いですね。

式場 とにかく文化が進まなければ、あんなものはないのだから……しかし、日本の終戦

後の男娼などというのは、かならずしも變態ばかりではないのだ。上野、本郷、浅草あた

りの男娼を調べてみると、一つは戦争中、兵隊に取られてどこか南方の島などへやらされ

て、女氣のないところに長くいたために、そこで、女の代理をさせられて、そういうこと

をおぼえ、帰ってからそれで稼げるということになつたものだから、金儲けにやつている

というやつ、もう一つは、女形その他女の稽古をして、女の技術を持つているやつ、もう

一つはほんとうの變態です。それぢやあそういう男娼の所へ行く男の方はどうかというところ

一番滑稽なのは、相手が男娼だということを全然知らずに女だと思つてゴマカサレちまつ

て引つかかるやつ、それからもう一つは、もうノーマルなことに飽きてしまつたやつ、そ

れからもう一つは、ほんとうの變態のやつで普通の女では絶対に喜びを感じられないとい

うやつ——この三通りです。

原 それからもう一つ、軽度のやつはないですか。つまり、やがて女の方へ移つて行くか

も知れないというやつです。これは、われわれの学生時代にはたくさんあつたのですけれども……。

式場 それは若い時は大体みなそうなので、同性愛から異性愛へ移つて行くのは普通なみ

で、それがそういうように移つて行かないやつが變態なのだ。

原 投書なんかで云つてくるには、それが非常に多いのです。自分は今二十才だけれども女には一向感じない、男同士でないとどう

も感じないといつてきますけれども……。
式場 内気な男で、女がこわいというようなやつだ。しかし、男女同権になると、男の方で女がこわくて近寄れないようになるということがあるのだ。アメリカに同性愛がふえたのは、向うでは女があまり威張っているからだね。

〔豊吉氏出席〕

矢野目 式場先生は男色のご経験は？

式場 ないね。ぼくは至極健全だ。男なんかに興味はないよ(笑)。

矢野目 ぼくもないですね。

式場 豊吉さんね、今、変態ばやりだという話が出てね、矢野目君は、自分がまず変態だと自任しているところなのだけれども、豊吉さんはどうかね。

豊吉 あたしですか、女のようにもあり、男のようでもあり、変なのですけれどもね。だけれど先生、文明になればなるほど変態になるんではないですか。変態ツていうと、ことは悪いですけどもね。



矢野目先生

式場 なにしろ、みんな変態になつちまつたんでね(笑)。

豊吉 だんだん強い刺激を与えなくては感じなくなつちまつたんではないですか。自分で自分に刺激を与えることもありますし……。

式場 しかしこのごろ人間の壽命も延びたね。とくに四十代から五十代の女の若くなつたこと！ それからだ着物のハデさだけでなく気持ちでも態度でもとても若々しくなつたがよいことだよ。

矢野目 だから今までみたいに五十で踏み切りをつけないで百までだということになれば、まだ先がだいぶあるということになるからね。

式場 今までは、更年期が女の終りだと思つていたけれども、このごろぢやあ、それからがおもしろくなるということになつてきたよ。

豊吉 あたしなんか「豊吉さん幾つ」なんてきかれた時に「あたし、実は六十八」なんかと逆に行つてやろうかと思つてます(笑)。
式場 そうく、七十五ぐらいに云つて置き

なさいよ。

豊吉 そうですわね。

式場 一体、日本人みたいに人の年をきくやつはないよ。とくに女に対して年をきくのはぼくは実に失礼だと思う。フランス辺りではとくに芸能人なんかには年をきかないし、また死ぬまでは発表しないということになつてゐるがね。

矢野目 それで一定の年令に達すると、「年がいもなく」なんて云われちやつて……。

豊吉 「老いらくの恋」なんかつていわれるとシャクにさわれますわ。「老いらく」なんてもつてのほかですよ。この間の芳沢大使なんかね……。矢野目先生なんかもいつもお若くてね。今日はお洋服が大変じみぢやありませんか。

矢野目 ぼくは今日は真ッ先に名乗りをあげてゐるんだ。われこそ変態なり、といつてね。

豊吉 いつでしたか外国に、百六十何才の方が、百四十くらいの方を後妻さんにおもらいになつて、一番末の坊つちやんが五つだとかいう人がありましたね。それで、その奥さんが、「うちの主人はこの二、三年は大変弱りました」といつていたそうですよ。それをきいてあたしは「まア、すてきだ」と思ひましたわ。

矢野目 百四十くらいまで生きなくちやあ……。

豊吉 生きましようよ。こつちも今までずいぶんギセイにされてきているし、こつちもギセイにしましたから……(笑)。まア今まではテストみたいなものですよ(笑)。

式場 これからおもしろくなるんだよ。

矢野目 このごろ私の所では、若返り料理といつて、若くなるような食べ物を選んで食べさせて、元気になるたい人はいらつしやいといつているんだが……。

変態食物のあれこれは？

式場 それぢやあ一つ食い物の変態話をしようではないか。

矢野目 イカもの食いというのは変態でしよう？　ところが、おいしいものを好きな人はずいぶんイカものを食べると思うね。たとえばナマコなんていうやつもそうだが、あれを最初に食べてみた人の勇気のほどには感心するな。

式場 ナマコでなくてもカニでもタコでもそうだよ。

矢野目 ああいうものは最初おいしいから食ったのか、食つてみたらばおいしかったのかどちらなのだろう。大体、人類がああいう妙なものを食べ始めるのは、まず子供からだつたと思うな。子供というやつは、こわがらずになんでも口に入れてみるが、それで別にあたらなかつたりなんかすると、はじめて大人もそれを食べてみるというようなことだつた

のではないか。

式場 ちようど家畜と同じだな。

矢野目 乞食にフグを食わせるという話と同じだ。

本誌 食うものがなくなつたので手当り次第に食べたというわけではないのですか。

矢野目 そうではない。美食の果てに食つたのだ

式場 そうなのだ。

本誌 美食の果てとなると変態です。

式場 サドなんかの場合は普通のやつに飽きちまつて食べたんだね。

矢野目 それから、あの方に效くというので食べるやつがある。たとえばイタリーの婦人が豚の膽へチョコレートを塗つて食べるとい

うのがあつて、これは效くかも知れないが、



考えてみるとちよつと気持ちが悪くて食えないでしよう。大体、血をすすつたり、飲んだりするのは変態だと思う。それに血だけすすつても養分にはならないのだ。

式場 あれはただ一種の迷信なのだ。

矢野目 あれは肝臓酸というものと一緒に入れないと、血液の中のカルシウムが自分のものになりませんからね。

式場 輸血ならば效くけれども、そうでなければダメだ。

本誌 蛇の血というのは？

式場 ダメだ。

矢野目 そうだつたらカロチン色素の方がいいだろう。

式場 まア気持ちの上から行くと、血というものは人間の一番大事なものだからそれを飲めば效くと思うのだから。

矢野目 それから妙なものを食う趣味もある。たとえばネズミの腹児だの……。

式場 そうく、ハチの子だの……。

矢野目 フランス料理で有名なカタツムリなんていうのもあるしね。それからよく台所なにかにいるナメクジをつかまえて水へ入れて

吞んでいるという人があるけれども……。

式場 豊吉さん、どうですか、それは声がよくなるというが……。

豊吉 そうですね。ヘッヘッヘ。

矢野目 ところがあのナメクジは非常に蛋白質に富んでいるらしいので、あの方に非常に効くんだ。「あれを呑み始めてから毎日……」

なんかと云っている人もあるよ。

本誌 原先生、食べものの方は……。

原 全然ダメです。

式場 「イワシの頭も信心から」で、どんなものでも効くと思つて食わなくてはダメなのだ。

矢野目 ぼくの所では、マタタビを焼酎にぶち込んで、氷砂糖を入れて、精力酒といつて出しているが、そうするとわれもくといつて飲むよ。あれは支那の薬の中にもあるけれども……。

式場 いや、猫におけるマタタビくらいに人間に効くものがあるは大変だ。猫に限らずライオンでもそうだが、要するに猫属の動物はあれの匂いを嗅いだだけでもう皆喜んでしまうよ。

矢野目 そうでしょう。ぼくがあのマタタビを薬種屋で買つていたら、そこら辺から猫が一ぱい集まつてきたから、薬屋に「お宅の猫か」ときいたら、そうぢやあない、その辺の猫がみんな寄つて来たのだというんだ。

式場 あれを燃やしたら、それこそ何町四方

の猫は皆集まつてくるよ。よく惚れ薬ということというけれども、あのマタタビくらいに効いたら大したものだ。昔は日本ではジャ香というものをよく女の人が帯の間などにに入れていたがね。あれは

牡鹿のホルモンなのだが。今やはりああい

うものがありますか。

矢野目 あります。

抽出して使います

が、一匁二千円で

す。しかしジャ香

そのものはいい匂

いではないのです。

アルコールか何か、と

にかくあれを発散させる

ものがなかつたらダメなの

です。

式場 とにかく香料というものには、男は惹

かれるね。

豊吉 イモリの黒焼きなんかどうでしょう。

式場 黒焼き屋には怒られるかもしれないが

あんなものは迷信だよ。いくらホルモンとか

分が惚れている相手に粉末をふりかけると相手が自分の方へ来るといふのではないですか。

式場 いや、こつちが薬を持っていって、そこ

へ相手を惹きつけなくては……。

豊吉 粉をふりかけるといいます

けれどもうつかり

風向きが變つてち

がう人にかかつた

もんだからあがう

相手がやつてきた

りして「お前ぢや

あないよ」なんか

つてね落語ですよ

(笑)。

式場 ところで豊吉さん、もう死

んでしまつて時効にかかつているよう

な芸人とか役者とかの變つた話はないかね。

豊吉 そうですね、まだ私が抱えの若い時分

のことなのですが、旦那さんが私に、実は豊

ちゃん、わたくしの友だちの奥さんと一緒に

どこかへ行つてくれないか、そのご主人も了

解ずみなのだから、というので、私も、多分

ご主人が忙しくて奥さんを喜ばせられないの

で、それで私にでも一緒に行つてくれという

のだろうと思つて、それから一緒に箱根の福

住へまいりました。いよいよ夜になつて寝ま

したところが、その奥さんが、こつちへ来な

さいというから、私は寝相が悪いからこちら



原先生

の方が結構ですといったところが、どうしても傍へ来いというのです。行つたところが、「あなた」とかいっていきなり抱きつかれてもうすぐ××手を入れられてしまった、さアこつちはびつくりしちまつて、どうするんですか、まちがえないでくださいといったところが、あなた、主人からきているだろうけれども、というから、いいえ、別に、ただこちらへ一緒に行つてくれといわれたから来ただけですといったのですけれども、とにかく向うは私のことを男だと思つていたのですね。

式場 上野の男娼の所へ夫婦連れでやつてきて、一緒に遊んで、それで結構楽しんで行くということだが、そうするととにかく三人でやるわけだが、ふしぎな話だ。

矢野目 豊吉さんの今の話は、西鶴一代女の中の、三十才くらいの女が老女に抱えられたという話みたいなものだ。

豊吉 それで、その奥さんというのが、パリッとしてるんですよ。

矢野目 その人は、男のパートを持っていたんですか。

豊吉 あたしを男だと思つていたところが、あたしが女だったものだから、こんどは向うが男に変わるのです。

式場 同性愛というのは、一方が男に変わらなくてはね。

豊吉 私もその時分だし、馴れないので、た

だふるえるばかりでしたよ。それから、これは男の人で変な人にぶつかつたこともあります。もういないだろうと思いますが、当時五十二、三の人でしたが、もうお金はいくらでも出す、ただしハウヅキぢやないけれども全部赤にして、長ジューパンを着て寝ていて呉れさえすればいい、その代り、向うのすること、は絶対に見てはいけないという約束なのです。さアいよいよお床入りになりました。そうすると、こうしろというから、こつちはへイ、ああしろというからへイ、股を開けというからへイというわけで云う通りにやつていたのです。けれども、見てはいけない、声を出してはいけないというのですけれども、どうも好奇心で見たくなつたので、そつと見ると、壁の方へ向つて、何かモソ／＼やつてゐる。みるとなんだか恐ろしく立派に見えたので、だから、機械が合わないのではないかと思つたんですがね。

矢野目 それは斜めにみたからだろう。

豊吉 あたしも最初はどんなことになるだろうと思つてガタガタふるえていたのですが、いよいよになつてみると、その人は自分で満足してそれでおしまいなので、何もしなくてもいいのですから、こつちは楽なのです。それでこつちの頂くものも普通の三倍も五倍も頂いたのですからね。その代り公言しないでくれといつていましたけれども……。

式場 神楽坂に男だけの待合があつたという

ことだが……

豊吉 ええ、浅野屋でしょう。あたしもあそこを好きでしてね。

式場 私の病院へそういう人を預かつたことがあるのだ。なんでも息子ももう大学へ行くという年輩なのに、その人が神楽坂の男だけのクラブがあつてそこへ行つてばかりいて困るから、なんかしてくれとその家の人からいわれてね。

豊吉 あすこは、「アラいらつしやい」といつて出てくる子から何から全部男で、十四五の可愛い男の子がいたりしましてね。浅野屋さんの主人というのは、青ひげをはやした立派な男なのですけれども、それで動作は全部女なのですが、その色ツぽさといつたらば、なんともいえないのです。たとえば先生なら先生が旦那さんだとおぼしめせ、その旦那さんがまア一ぱい飲めなんかというのと、「いや、あなたのお口からちようだい」なんていつてしなをつくる、そうして「まア、うれしいわ」なんていう色ツぽさなんか、女以上です。それで殿方のトレイなんかには「アラいやだわ、男の便所……」なんていつて、入らないのですからね。そういう人はなんでも前に役者で、役者で食えなくて、そういう方へ固まつてしまつたらしいですね。

式場 上野の男娼なんかやはりそうだね。部屋なんかへ行つてみると全部女の部屋だ。けれども銭湯はどつちへ入るのだときいたら

頭へ手ぬぐいをかぶつて男の方へ入るといつていたがね。ぼくは自分の娘を連れてそこへ行つたのだけれども、ぼくの娘の方が、ズツと荒つぽいよ。

豊吉 とにかく同性だから男の急所がよくわかるでしょう。だから女より手が届いていいということですね。

矢野目 そいつはどうかナア。

豊吉 そうですツて！ もう一人あたしが知つていたので、ある旦那に地所や家を買つてもらつて囲われていたそういう人がいたけれども、そのうち若い大学生とできちまつて、旦那からチョンになつてしまつたなんていうのもあります。

原 今、同性愛の話が出ましたが、ちようど震災後谷崎さんの「田」が出た時分、ぼくが学生時代で素人下宿にいた頃ですけれども、ぼくの部屋とふすま一枚へだてたとなりの部屋へ大阪の金持ちの奥さんが女中を二人連れてやつてきたのですが、これが夜になると始まるのです。その頃はぼくもまだその方のことはよく知らなかつたのですけれども、とにかくあれがサジズムというのか、とにかく最初はその奥さんと一人の女中とがやる、それが済むと今度は二人の女中同士がやるらしいのです。それで奥さんと女中との時はあまり大したことはないのですが、女中同士の時は、同輩だからでしょうか、これはしつかりしろという意味か、なぐる、つねる、実にす

ごい。そこへこんどはその奥さんの色男が何か時々やつて来て、その男は男で、その女が三人いるところで、その奥さんちやんとかたずけて帰つて行く。その間、女中二人もとにかく八疊一間だから、そこに一緒にいるのでしようけれども、そういうのがありました。こういうのは一体どういふものなのか、未だにわかりませんけれどもね。その連中の風体というのと、まず奥さんというのは、不美人ではないが背の高いヒステリックな、男性的な人間、それから女中は色の黒いケン骨の高い人間で、三人が三人ともわれわれがみれば別に色気を感じるようなものではなかつたのですが、とにかくあの騒ぎというのは相当なものでしたよ。隣に私がいることも知つてい

るのだけれども……。

本誌 嬌声は発するのですか。

原 発します。

日本のストリップは世界一

式場 西洋にはノゾキというのがあるね。東洋では中国の上海なんかそういうのが相当あつたし、それからこのごろ、日本にもあるけれども大体終戦後、皇居前広場とか新宿御苑とかで、人にみられても平気でやつていて図々しいというけれども、別に初めはそうではないのだ。終戦後住宅難ということもあつて、やむを得ずああいふところで始まつたことなのだけれども、それからだんだん発

達して行つて、こんどは人のエロ本なんかみるのよりもつと昂奮するということになつてきたというのが現状なのだ。大体、日本という国は、エロからいえば非常におくれている国なので、今ひどい／＼というけれども、やつと今、世界的水準に達したのではないかと思う。

豊吉 私もアメリカのロスアンゼルス、ロンドンのグビーチというところへ行きましたが、十セント入れて二分か三分みるのがあつて、全部ストリップになつていふのです。それを子供なんかも平気でみてゐるし、ちつとも笑う人もないんですよ。あたしだけは笑つてみてゐましたけれども……。

式場 アメリカでは、フィルムで本物と同じ立体感のあるやつがあつて、初め本物かと思つておどろいたくらいだ。ロスアンゼルスにもシカゴにもあつてね、酒場なんかで一杯飲みながらのぞいてゐるのだ。

しかし、小林一三も向うから帰つてきてから、ストリップでは今、日本の世界一だといつてゐるね。日本は一番おくれだといふのは、今では、ストリップに出てゐる女の子にしても身体はいいし、西洋の女に負けないというんだが、それは西洋では、そんなきれいな女ならば皆ほかの方へ行つて、ほかの仕事をやつてゐるので、日本ではなぜあんなきれいな女がストリップをやつてゐるのだらうといつて西洋人はふしぎがるということだけ

れども、まア日本には女がたくさんいるからだろうね。

本誌 そうすると、ストリップだけは我慢できるところですね。

原 われわれは今までずいぶん我慢していたからね(笑)。

本誌 隠忍自重ですか(笑)。

式場 つまり日本にはまだずいぶん女があまつているのだと思うよ。もしほかに金を取ることがあれば、あんなことはないね。ところで、豊吉さんは、ストリップはみた?

豊吉 丸ノ内のはみましたけれども、浅草のはまだみません。ですけれども、あたし同性のせいでしょうかみても昂奮しませんね。

矢野目 同性でもずいぶん昂奮した人もあるよ。

豊吉 こつちは、「花電車」なんかを知っていますからね。

矢野目 ぼくは、あれに「忠孝」という字を書いてもらつたことがあるよ。

豊吉 皆で行くと団体扱い

でね。「ダンちゃんおいで」なんかといつて、ピンポン球をころがして、「取つてちょうだいよ」なんてお客に云つたりしてね。

式場 あれは一種の性的忍術だと思うよ。



豊吉さん

矢野目 あれはピンポンにそれからバナナを食つてゐるからね。今はもう死んだが早稲田のある教授で、そのバナナを食べた人がいるよ。

式場 それはワイルドを訳した矢口達という人だよしかし、なめるやつさえいるのだからバナナを食うくらい、なんでもないよ。

豊吉 でもね、自分の好きな人のならばとにかく……ちよつと具合が、ね……(笑)。

矢野目 ところが今、「花電車」的になる機械を、大阪の方のあるメーカーが売つていますよ。

式場

ぼくは誰かにきいたのだが名右屋の芸者でマダを結つて逆立ちするのがあるというけども

矢野目 それで

脚をどうする?

式場 要するにそういう格好で逆立ちをするというのが自慢なので……日本髪で帯をしめていて逆立ちするところがちよつとお

もしろいだけだろう。

矢野目 神田駅の下にキャバレーがあつて全ストのアクロバットをやつてみせるが、これはちよつとグロだね。写真道楽の人が皆行つてランプをつけてパチパチ撮つてゐるけれどもね。

式場 全ストというのは、おもしろくないね。

矢野目 普通の全ストならばいいんだけど、全ストのアクロバットというのはいいね。しかし、いくら警察につかまつてもやめないでやつてゐるが、それでお客も入つてゐるよ。

式場 ストリップをみに行く心理を分析するといろいろあるね。大体、中年以上のもうダメになつたやつが刺激を受けに行くのだというけれども、そうばかりではない。若いやつも非常に見に行つてゐるが、そういうのは気が小さくて女に近付けないやつとか、それから金がなくて女の所へ行けないであれをみて我慢して帰るといふやつがあるのだ。

矢野目 五百助みたいに、奥さんに脅かされて突き出されて外へ出て、あれをみてようやくなんとかなつたというのがありますよ。

本誌 結局、広場でおたがいのやつてゐるのを見るとか、ストリップをみるとかというのは露出症とノゾキの両方ですね。

今やエロの秘術盡し

式場 エロというやつも、戦後なかなか変わってきたし、複雑になつてきたね。今まで日本のエロというのは、変なやつもいたことはいたにしても、まあ少なかつたがね。

豊吉 よく一号さんと二号さんと一緒に寝る方があるでしょう。それが習慣になつたらばこんどは一人ぢやあ満足できなくなつたということがあるね。

式場 そういふのは、競争心なんだ。

矢野目 最近、目で見るとシロシロとかシロクロとかいふのがあるけれども、耳に聞かせるテープレコーダーのはすごいね。実に台本が良くてね、ぼくたちみたいないなスレッからしいが耳だけで興奮するね。電気を消して、あのレコードをかけて、からかみのこつち側にいた日には、全然感じが出ますよ。

式場 何か変つたことでない、もうダメだということなのだね。

矢野目 とにかく、浅草辺りのしげい宿屋でビクビクしながらシロクロをみているよりは、あのテープレコーダーを自分のところできている方が貴族的だよ。

式場 昔、ロシアの坊さんにラスプーチンというすごいのがあつて、日本でも「怪僧ラスプーチン」という本も出たが、こいつは、巧妙なマッサージをやるのでこれにやられた皇后さんまで参つてしまつたのだから、とにかく大変な奴だつたらしい。つまりエロといつても、いろいろな手があるので、ちよつと触

つただけでもう女が参つてしまうというやつもいるわけだが、こういうやつは、静かなるサジストだ。日本にもそういうのはあるだらうなア。

矢野目 あります。電気器具を売っている店のおやぢで、自分の家へくる女中は全部やつちまつたというのがある。それは、初めに女中にマッサージをおぼえ込ませて、自分を揉んでくれといつて、女に揉ませて置いて、こんどは自分の方で女中を揉んでやる、そうすると、揉まれているうちにだんだん怪しくなつてしまつて、百発百中！

式場 熱海のアンマというの……。

矢野目 「普通ですか、特別ですか」ときくから「特別をたのむよ」というと、療治が済んでから、布団の中へ入つてくるのです。
式場 それぢやあ別にマッサージでエロをやるわけではないんだな。そんな平凡なことではつまらないね。

本誌 ところで、動物の方はいかがですか。
式場 動物で一等すごいのは、魚と人間のやつだ。これは広重なんかにあるが……あれは赤エイか……。

矢野目 あれは体温が女と同じだというね。

式場 これはやはりソドムが一番すごいやつだね。沖繩にはすごいやつはないか。

矢野目 海蛇があります。

式場 動物と人間の愛情濃やかな話はないかね。

豊吉 アメリカの話をするわ。なんでも若いころ向うへ行つた人だそうだけれども、牧場へ行つて、山羊とやつてしまつたというのですが、その山羊が夜中にきて角で戸を叩いたというんです。あとできいたら、皆やつていらしいということだけれども。

式場 日本では狎だらう。

豊吉 とにかく、もう山羊の眼まで変つてしまつてね、別れる時に「メエメエ」と鳴くそうです(笑)。

式場 こうなると今日、小野佐世男がいなのは残念だね(笑)。

矢野目 あれは鷺鳥に惚れたんだからね(笑)。

本誌 今、山羊が戸を叩いたというお話がありました。やはり日本の兵隊がやつたそうです。そうすると翌日皆で整列している時、その男の前へ立つて、「メエメエ」と云つたそうです。

ところで矢野目先生、この琉球料理は、ほんとに精力がつくような気がしますね。

矢野目 私のところでは、今スペイン、メキシコという辺りをやつているのです。

式場 ぼくも、アメリカでずいぶんメキシコ料理を食つたが、えらいものだなア、あれは……。

矢野目 あすこは熱いところで、食欲が落ちるから、少し食べてもいいような料理になつているのですよ。

式場 しかも量的にもずいぶんあるね。スペインもそうだけれども……。とにかくあすこは夜深しのところで、夜の楽しいところだ。夕飯なんか早いところで十時で、たいがい朝の三時ごろまで騒いでいる。

本誌 いつ働くのですか。

式場 だから、働く時間が少なくて済むのだ。

男のもてる琉球

ところで、世界の美人はどこだろう。

矢野目 スペイン辺りだろうね。

式場 ぼくはイタリア、その次がスペインだと思う。イタリアは身体つきはいいし、顔つきはいいし、ことに髪の毛は黒いし、日本人にはとくにいいね。フランスでも、きれいなのは皆イタリア人なんかとの合の子で、純粹のフランス人はそんなにきれいではない。それから女で背の一番高いのはスウェーデンでこれは背の高いことはすごいものだ。

矢野目 さつき式場先生がいらつしやる前に



ぼくは自分の二十代における琉球乙女とのロマンスについて語ろうとしていたのですが、それでぼくは「天川」や「谷茶前」というのを知っているのです。

式場 それを今日、あとで観せますよ。琉球というのは、日本の中で一番女のいいところだ。こんなに男のもてるところはない。

豊吉 それぢやあ、あたしは行かないわ(笑)。

式場 琉球では那覇に辻というところが一軒だけあつて、そこに女が三百人くらいいるんだが、その女は実に情が深くて、もう三日もいれば夫婦取りで別れを惜しむというところだ。アメリカがいるというのも、一つは

そこにもあるのだね。

本誌 外国の女の話が出ましたが、向うの女は精力も旺盛だろうし、それがもし変態なんかになつたらすごいでしょうね。

式場 すごいのが案外少いのだ。こんど日本を外国人が占領して長々といたというのは、日本の女がよくしたからだろう。とにかく黒ちやんの子供まで生んでくれたのだから、黒ちやんなんかには天國だろう。日本の女も大変なサービスをしたものだよ。

矢野目 黒ン坊なんかというのは、黒いのが出るんだと女学生なんか云っているけれども……。

本誌 ほんとうですか。

矢野目 ウソだよ。

式場 イカみたいにシミを出したりしてね

(笑)。

矢野目 ところがあれで、掌は真ッ黒ではありませぬね。

豊吉 だから気持ちが悪いですよ。

式場 しかしああいうのを好きになる女というのは、一種のマゾではないか。普通ではあはの黒いのがくらやみからあらわれたら、恐ろしくて大変だよ。日本の女も少し平凡な恋愛に飽きたのではないかな。

豊吉 あたしも商売している時分、どうせ一人やるのも百人やるのも同じだし、一ぺん青い目の男とやつてみようと思つて、たのんで置いたですけれども、サテとなつたら、する

気がしませんでしたね。

式場 そりやあ生理的にも体質が合わないよ。だから、こんど占領下でいろいろな悲劇が起きたけれども、一つにはそういうことも相当あるわけなのだ。なんといつても同民族というのが一番いいので、ちがつたやつと結婚するということは、余程の場合でないとうまく行かないね。しかしまた中にはいかもの食いの女もずいぶんいて、ほんとうに惚れてしまったものいると思うけれどもね。

豊吉 何かの雑誌でみた

ことがあるけれども、子供ができてしまったので、その子供に手紙を付けて自分は姿を消したらしいのですが、その手紙に、お前のお父さんとお母さんとは一緒にいる時燃えるような愛で許し合つて、その間にできたのがお前なのだから、お前は愛の結晶であるという誇りを持つてくれと書いてあつたそうです。そういえば子供というものは皆誇りを持ちますわね。

矢野目 そりやあ皆「愛の結晶」だよ。



これからの変態とは……

式場 そこで、将来あらわれる変態というのは、どういうものだと思いますか。

原 私は同性愛だと思います。今よりもっと出ますね。

矢野目 ぼくは一つのお座敷で同時に幾組かがやるというやつが出てくると思うね。ギリシャローマの文献によると、世の中が爛熟するとみんなダブル……

式場 だからそれは最近の傾向としてもうす

でにあらわれつつある。現在は芝生の上でやつていることを疊の上でやるようになるということなのだ。西洋にはカルテットとか、ロンドとか、なんとかシンフォニーとかいつてねえ大勢のがありますよ。

しかし、これ以上変なやつばかり出てきた日には、ぼくなんか商売あがったりだよ(笑)。そうなたら、誰もわざわざ入院させてください

なんていうやつはなくなつてしまふからね(笑)。そうなたらオレのところへは、普通のやつだけ入れるようになるか(笑)。

豊吉 普通の人はい「あいつなんだかおかしい」なんかと云われちやつたりしてね(笑)。

本誌 そうなれば、うちの雑誌なんかは健全雑誌になつてしまふ(笑)。

原 とにかく同性愛は、はやると思いますね。つまり両性動物がもつと多くなるのではないですか。ぼくなんかどちらでも結構です。

式場 ぼくなんかは、絶対同性愛などという

気はしないがな。世界中に男はオレ一人ではいけないが、まア三人くらいでいいと思つてゐるね。

豊吉 ワーッ、ハハハハ。

矢野目 ご婦人の同性愛というのは今よりもつとふえると思うけれども、男の同性愛はこれ以上ふえるとは思わないな。だつて、そこまで日本文化は進んでいないんだよ。

式場 だけれども、やはりパチンコ文化的な同性愛はもつと進むよ。

矢野目 そうかも知れないア。

本誌 男より女の方が率がいいわけですか。

矢野目 女の人にかつてマスターベーションをやつたことがあるかときくと、九九パーセントまでの人が「ありません」というね。現在夫婦生活をしていて、もうそんなことを云つても一向差しかえのないような人まで、皆否定するが、何かよほどいけないことのように思つてゐるんだな。

式場 その点、アメリカのキンゼイ報告などには、わりあい正直に出ている。

原 キンゼイ報告によると、アメリカでは動物とやるやつがわりあいに多いでしょう。

式場 それは、文化が相当円熟しているといふことと、女が大事にされ過ぎていて、男が近寄れなくなつてゐるために、男は健康なのだけれどもやむを得ずそういうことをやつてゐるという場合があると思うのだ。

矢野目 そういう時に、男性的魅力を發揮す

るやつがいれば、そんなに女を威張らせないと思ふのだけれどもね。

本誌 だからマゾ的男性もだいふえるのでしよう。

矢野目 むろんそうだ。最近非常に唱えられてゐる女上位なんかというのは、まさにそれなので、それでうれしがつてゐるやつがいるのだ。昔は、川柳にだつてあるように、よほどたのまなくてはそうしてくれないということだつたのだけれども、今は専ら。たとえば結婚する娘に親が、「お前は、今日初めてなのだからよく考えなさい」といつたら、「私は今ラーゲのことを考へてゐるのよ。私は松葉くずしでやろうかと思つてゐるの」といつたとかいふので、三木鶏郎が「こういうのがありますよ」といつておどろいていたけれどもまつたく松葉くずしなんかというのはおつ母さんだつて知りやあしないよ(笑)。ぼくが熱海の宿屋へ新婚旅行のタネを取りに行つてきいてみたら、このごろの新夫婦は、六時ごろ宿屋へお着きになるともう、お布団なんか敷きにならなくてもよろしい。スーツケースなんかをおつぽり出して、ご飯がくるまでにはもう済んでゐる。そうして家族風呂で二人で水をぶつ掛けつこして遊んでゐるそうだ。

式場 それはもう、結婚する前にいろいろ親しいのだからね(笑)。

本誌 女の下着の蒐集狂というのは多いようですが……。

式場 フェティンズムのすごいやつは多いね。女の毛を集めて座布団をつくるとか、パソツ、腰巻を集めるとかね。しかし、その軽度のことは誰にもありますよ。長谷川一夫のハンケチを欲しいというのは女一般の心理だからね。

原 天皇陛下の勳章を欲しいのと同じことだ。

本誌 これからもつと気狂いはふえますか。

式場 今一番多いのがアメリカで。人口一億五千万のうちの十パーセントというから一千五百万人の気狂いがいるわけだ。日本ではわれわれの判断のつくのが三百五十万人……。

矢野目 それは梅毒で?

式場 そんなものは、ペニシリンやズルフォン剤のために減つてしまつたよ。

矢野目 なんのためにふえたのですか。

式場 それは社会がそうさせるのだ。とにかく札つきが三百五十万人いるほかにまだあやしいやつがどれくらいいるかわからないんだからね。そういう変なものと一緒にいると、うつつてしまふよ。オレなんかはうつらないけれども……。なにしろ電車に乗ればかならず一人くらいはいるからね。しかし、気狂いといつても、世の中のためにいいことをしてゐるのがどれくらいいるかわからないのだから、それを全部治してしまふことは考えものだよ。

本誌 では、この辺で……。

(終)

色情犯罪に現われた

サディズム

三 谷 祥 介

大 橋 彌 生 畫

女の局部に青竹を突き刺した瞬間には、びくつと手ごたえがあつて、あたかも釣師が魚を鉤にかけたときの快感味と同じであるというそれによつて全身に電撃的ショックをうけた。



どんな悪党でも刑事に捕まつて職務質問をうけ、やがて身柄が留置場へさげられると、人の性は善だから悪いことをしたと考える。つまり良心の呵責がつきものである。ところがスリを働く人間はぜんぜん悪事をやつたとは思わない。運が悪かつたとか研究がたりなかつたとか——ひどいものになると検挙した刑事を逆恨みして仇をするものがある。拘摸係りをやつていた笹原刑事の三女たみ子(9)を誘拐して、スリの江渡直三が荒川の土手で絞殺した事件はあまりにも有名である。

私は多くのスリを逮捕して取調べたが、彼等はゆきずりに、これと思う自分の好きな女からモノを拘った瞬間に、射精することがあると供述した。拘られた女があとで気がつき、くやしがつて涙を流す有様を連想すると、たまらなくなつて昂奮し、快感味をいやがうえにも助長するものだそうである。

普通の常識人が考えると、たとえば自分の愛人や好感の持てる相手に、モノを与えて悦んだり、性的昂奮をおぼえるのがあたりまえだが、くやし涙を流し胸のうちを掻きむしられるような思いを相手にさせて、ひとり欣ぶというのはたしかに異常である。

しかしモノを与えて愉悅にひたつても、拘り盗つてそれが快適であるにしても、性的昂奮にもなう感情の発露にかわりがない。スリを働く人間をたゞちに変質者として取扱うことは出来ないかも知れぬ。

スリの常習者はいくら大きな仕事をして、ハデに酒を飲むとか女遊びをやつてうつゝをぬかすようなことはほとんどない。日常の生活はまことに地味で、いつ検挙されるか知れないセイでもあるが、妻子のあるものはきわめて少く、ヒマさえあれば相手を苦しめるスリの手口を考えて、これに腐心没頭する態度は、あたかも勝負師に似ている。彼等はスリを働いて日蔭の生活をするに、むしろ満ち足りた悦びがあるようだ。それゆえにスリの常習者が悔悟したという例はいまだかつて聞いたことがない。私はこの心理を加虐淫乱症状だと観察し、スリの犯行もまた色情犯罪に現われたサディズムだと考えている。

身近にいる弱いものを責めさいなんで、ほのかな愉悅にふける気持は、何人も心の奥底にたくばえている。『愛と憎みは裏表』だという言葉があるが、戦前の日本の軍隊が、天皇陛下の名において、必要以上に新兵をいじめぬいたことは周知の事実であるし、軍隊ばかりでなく監獄もヒドイものだ。ことに栃木の女囚刑務所にいたつては言語に絶するものがある。ところが実はこれがすべて同性愛に基因する加虐淫乱症状であつた。私等は師匠だとか親方だとか言われる人物が子弟を虐使して、ときおり、むごたらしく取扱う光景を見せつけられることがあるが、これもやはりサディズムの現われだと解

釈しなければならぬ。

まだ理非をわきまえぬ幼いころからやがて物心づく少年期にかけて、打つ擲る蹴るといいういゆるスパルタ教育の乱暴を繰りかえし、シツケというものをされた者は、いつの間にかそれが昂進して、サディストでなければマゾヒストとしての性格を身につけるものである。このことは警視庁が犯罪者の生立ちを取り調べ、その統計によつて證明していることだ。

都内の小山町を中心に、トイレットの汲取口を覗いて、女が便所へやつてくると、いきなり青竹で局部を突き刺す犯人が現われた。およそ世の中にこんな物騒なエロ犯人はないので、警察は血眼になつて捜査につとめた。蒼くなつて驚いたのは附近の居住民で、にわかに汲取口を二重扉にしたり鐵格子の錠前つきにするような騒ぎになつた。都内の新聞は何十人もの婦人が局部を突き刺されたように報道したが、被害を蒙つたものは六人であつた。けれども社会的にはこれに輪をかけて騒ぎが大きい。たとい汲取口をどんなに嚴重にしておいても、頭にこびりついた恐怖心はどうしようもなく、便所へ入るたびに家族のものが見張りをするという有様だつた。この事件のために寢食を忘れて捜査をつづけたのは、荏原警察署の杉本善治という刑事である。

彼の苦心はようやく功を奏して、犯人を逮捕することが出来たが、捕まつたのは螺旋を製造する町工場の小僧職人で、年齢わずかに十三才——浦野榮太郎という少年だつた。

「質の悪いイタズラだが、まだ子供のことはあるし、面白半分にふざけていたろう」と高を括つてはとんでもないことだ。この少年は乾き切つた藁束のように、カサ／＼した嘎れた声で、すでに声替りがしていた。

宮迫捜査主任は犯人が少年のことであるから、ものやわらかに職務質問をはじめた。

「お前は釣が好きかい。それとも蟬なんか捕つたりすることが好きかい？」

「刑事のおぢさん僕はもう子供じゃないよ。モチ竿で蟬なんか追ッかけたつて面白くねえや」と平ちやらかな顔つきだつた。

「なぜお前は、女の人に変な真似をする氣持になつたのか」という尋問には、さすがにこの早熟な少年も、顔を赦らめて羞かんだ。しかし、それは、婦人の局部に傷害を加えたという罪悪感ではなく、すでに数カ月まえから自慰の快感を味わうようになった少年は、人前においてずけ／＼と、刑事に性慾の秘事を暴露された羞恥心のためであつた。

この少年が捜査主任の前でたど／＼しく供述したことを綜合して説明すると、女の局部に青竹を突き刺した瞬間には、びく／＼と手ごたえがあつて、あたかも釣師が魚を釣にか

けたときの快感味と同じであるという——それによつてこの少年は、全身に電撃的ショックをうけた。同時に女が局部の苦痛にたえかねて悲鳴をあげると、父を置いて家出した母を連想するといふのであつた。

浦野榮太郎の父は工場で働く旋盤工だつたが、酒に酔つて帰ると必ずクダを巻き、しつこく酒をねだつて酔狂した。そのはては妻の尻をまくしあげ、局部をびし／＼擲りつけるという狼藉だつたが、こうされると榮太郎の母親は、

「お父ちゃんお尻がヒリ／＼痛いよ。介抱して介抱して……」と泣き叫び、首ツ玉に兩腕を巻きつけて寢床へ連れこむのだつた。どうなることかとオロ／＼しながら、榮太郎はそツと兩親の寢床を覗くのであつたが、そこにはこの少年が想像さえしてみなかつた情交の場面がくりひげられていたのだ。

榮太郎は齒の根が合わなくなつて、たゞガタ／＼顫えたが、そのことの意味は、この少年にとつては、両親が情慾をむさぼる嚴肅なタワムレとしてではなく、自ら体験した最も大きい羞恥であつた。彼はこのタワムレに息もたえだえにあえぐ母親が苦痛ではなく、熱狂的なヨロコビであることを識ると同時に、

全身がわけもなくワナ／＼顫えて心臓が痺れていた。それが少年の性の目覚めであつた。

二月十七日の大雪の深夜であつた。降り積む雪を押し分けて、一台の自動車が三田警察署の正門で停つた。車内からオーバーの襟を立て、現われたのは沼部登志光という医者だつた。

「ちよつと刑事さんにお目にかゝつて、お話ししておきたいのですが……」

どこの警察にも古参の腕のできる刑事が必ず宿直している。その日はデカ長の鶴岡刑事が泊り番だつたので、受付の巡査は沼部医師を地下の刑事部屋へ案内した。

「あとで警察からいろいろ取沙汰されるのが嫌ですから、一応お届けいたしておきますが、管内の赤羽に住んでいる小美戸の奥さんが急に重態だということ、あの家の書生さんが僕を迎えに来ました。とりあえず自動車を乗りつけて診断してみると、心臓麻痺というやつですね。手のつけようがありません。ともかく注射もやり医師としての任務をはたしましたが、この夫人は一糸もまともな真ツ裸で夜具にくるまつて



いました。のみならずカラダ一面に疵がある。ことにひどいのは内股の疵で、皮下に斑点がありました。この疵はもちろん死因に関係ありませんが、なにかのショックで、心臓麻痺を併発したことは明らかです」と話した。

鶴岡刑事は三田の警察署で十八年の長いつとめをしてきた。彼は管内の居住民のことなら手にとるごとく知りつくしていた。そこですぐ頭にかんだのは、夫人が急逝したという小美戸の家庭である。

亡くなつた夫人のよし子は三十九で——妙な言い廻しだが目立たない美人。彼女は謡曲の師匠をしていた。主人はもと国鉄の技師で、二十五年の勤続者である。また停年ではなかつたが、退職の理由は脳溢血で仆れた爲だ。彼は右半身が不随意となり口も利けなければ歩行も困難。まことに手数のかゝる病人で寝たきりであつた。

もと／＼この夫婦には子供がないので、なかば道楽半分に学生を下宿させ、金銭づくではなく面倒を見ていたのであるが、退職金と恩給で生活するようになると、ズツと前から趣味ではじめたよし子の謡曲師匠が、弟子たちの謝礼金をアテにするようになり、今はもう道楽どころではなく、大学の夜の部へ通う苦学生を二人おいて、晝間は病人の世話をさせたり、すすぎ洗濯や勝手向きの用までさせていた。

鶴岡刑事は沼部医師の届出もあるし、法の定めるところによつて一応は変死者同様の取扱いをすべきだと思つた。彼は雪の中をまるで泳ぐ

ようにして小美戸家を訪ねたが、迎えてくれたのは二人の書生でいずれも若い。岩手県から出てきた大木義夫が十九。出身地が秋田の老方村だという横尾清作は十八であつた。肝心の主人は病人だし、彼等二人はよし子の死体をどう処置すべきか勝手がわからずたゞまごころして、

雪の夜が明けるのを待つていた。

鶴岡刑事がよし子の寢室の死体が横わつていゝる階下八疊の間に通ると、沼部医師が言つたように死体のありかたがいかに不自然であつた。だいいち腰巻もせず真ッ裸で寝ていゝるといふことも異様だし、背中や乳房の噛み痕。内股には紫色の斑点がある疵跡。のみならず、陰部もおかしい、ここにもところどころ溢血した大豆型の斑点が認められ、加虐の跡が歴然としていた。

しかるに二人の学生は、二階に寝ていゝる病人のそばで、いついかなるときでも看護が出来るような体制で寢床をならべて休んでいたと言ふのである。前後の事情を総合すると、よし子が寝ていゝる八疊の間へ、何者かひそかに忍んで



きて（それは彼女の情人かも知れない）情交中の出来ごとではなかつたかと、考えられるフシがある。そこで鶴岡刑事は、二人の学生につき夫人の情事を追及した。ところが彼等はそんな事実はないと否定して相手にならない。

和姦か強姦か？ そのいづれとも判断がつかないけれど、生前によし子が侵されていゝることは明らかだ。しかし主人は足腰立たぬ病人であるし、そのほかにはこの家庭に学生が二人しかいない。いったい何者が夫人を凌辱したか？ このことは警察として当然たしかめなくてはならぬ事柄だつた。

捜査科学の発達した今日では、卷タバコの吸殻に附着した唾液や、女の膣内に射精した精液

などから、血液型をはつきり判定することが出来る。そこで夫人の膣内から精液を滴出し、鑑識調査をすゝめるとA型が現われた。さらに二人の学生の血液をしらべると、兩人ともA型だつた。かくして鶴岡刑事の職務質問は、鑑識科学にモノを言わせて、二人の学生の身辺に迫つた。さすがに彼等はその真相を白日させざるを得ない破目に追いこまれた。よし子は典型的なマゾヒストで、情交中に責めを好んでつゞけていたことがまず明かとなつた。それにはぜひ二人の男が必要だつたので、経済的には豊でないにもかゝらず、女中がわりに二人の学生を雇い入れ、夜になると替るがわるに情慾をみたまふ相手にしてゐたのだつた。そこで一人はところかまわず、まるで仔犬が親犬にタワムレるかのように彼女の肉を噛まねばならなかつた。噛んでいゝうちに、しだいゝに彼女は情慾を昂進し、やがて頂天に達したあとは、波状型の快感に酔つた。そして局部の『噛み』の嗜虐をもとめてやむことがなつたという――

二月十七日雪の降る深夜は、二人の学生がいつものように、よし子の寢室で、飽くことなき女の加虐淫乱症状を満足させていた最中の出来ごとであつた。

私は鶴岡刑事にこの話を聞いて、めずらし

い出来ごとだと思つた。なぜかと言うに、女が男と情交中、いわゆる『ショック死』をとげたという事例は、私の長い刑事生活のあいだにもかつてなかつたことだ。しかし男の場合はこの事例が非常に多い。たいていは情交中の心臓麻痺か脳溢血による頓死であるが、一般には『腹上昇天』または『玉門往生』と言われている。

陸軍大將であり総理大臣だつた田中義一は二号さんの腹上で昇天した一人である。その死は男子の名譽であり羨望に値するかのようによろめられた。けれどもたいがいこんな男は、妾の腹上昇天か、待合の四疊半なんかで芸者をだき、玉門往生をとげる類で、相手が正妻であつた場合は、ほとんどない。ともかく変死者に相違ないので、警察へ一応は届け出ることになつてゐる。刑事たちは医師の診断にまかせ、腹上において昇天した事実をたしかめると、死体ではなく重態の患者として自動車に乗せ家庭へ身柄を送り届けるのであつた。

腹上昇天される方は、財産もあり社会的に地位のある身分の人が多いが、こんな目に遭つた女は、不幸な生涯を送つてゐる。これは決して迷信ではない。

赤坂の待合の女中で、人気のあつた福春という愛嬌者が小金を貯め、白山の二業地で待

合を開業することになつた。白山は赤坂とちがつて場末であるし柄もよくない。そこでごく親しいお客がたまに来てくれるくらいであつたがその中に航空会社の伊藤喜一郎という重役がいた。この客は小説に出てくるような三等重役ではなく金ばなれもいいし言葉かずもなく、おツとりとりすまして芸者の三味や唄を聞いていた。彼はときおり、

「いい妓だね」と、ご意あそばし、にた／＼意味ありげに笑つて、所望されるとどんな芸者衆にも、ブルようなことなく盃をお下げになつた。申分のないお客さまだが、福春はいい客筋だとは思つてゐない。妙に嫌らしい遊びをする癖があつたからである。それは芸者衆の勝負ごとをして『責め』の賭をすることだつた。シッペ打ちくらいのことなら座興というものが、伊藤重役は芸者を裸にして責めさいなむので、勝負に勝つていくら金をもらつても、負けたときのことを考えると怖ツかなくなり、相手になる芸者は一人もなかつた。しかし白山のようなところで待合を開業した福春は大事なお客さまとしてもてなさなくてはならない。

ある日女將は、

「ぜひそのお客さまのお相手になりたい」という君鶴を座敷へよんだ。

これが縁となつて、伊藤重役と君鶴が結ばれたワケだが、

「女將、僕はとうとう気に入つた芸者を見つけ

たぞ。君鶴だつたら二号にして面倒を見てもいい」

彼はまつたく心から満足してゐるらしいかつた。伊藤重役が白山の待合へ泊つて、君鶴を相手にした晩は、女將は一睡することも出来ない有様だつた。

座敷にはハンモックを吊り、君鶴の裸体を結びつけて責めにかゝるので、福春の待合は地震のときの揺れる騒ぎだ。

いつの間にか「飛行機さん」というのが伊藤のアダ名で、たちまち界隈の評判になつたが、君鶴のカラダにいくら疵がついても、そこは自前で自由な身だから、文句を持ちこむ抱主はなかつた。

「君鶴さん、あんたそんな無理して、もしものがあつたらどうすんの？」

女將は心配して注意することもあつたが、伊藤の加虐的な淫乱で、君鶴は満足してゐるのかようだつた。

こんなことが三カ月ほどつゞいて、やがて花の便りを聞くようになつたが、その三月十六日の朝がた、伊藤重役は君鶴の腹上で昇天した。福春の待合からこの届出をうけた私ら刑事は例によつて一広立会う必要があつたので現場へのぞんだ。ところがすでに待合から迎えをうけた浅尾という医師が来ており、

「死因に納得の出来ない点がある。自分ひとり

では誤診があるかも知れないから、ほかの医師にも診断させてほしい」と言うのであつた。

「先生、これまでのわれ／＼の経験では、心臓麻痺によるものか脳溢血によることが多いのですが、お見立てはいかゞでしょうか」と質問すると、

「陰囊がひどく圧迫されているようだし、口と鼻を被つて、呼吸を困難におちいらしめたような点もうかゞわれる」と言つて不審した。

そこで他殺の疑いが濃厚となり、とうぜん君鶴に嫌疑がかゝつた。

しかしどう考えても彼女が殺人をやつたとは思えない。君鶴は私刑の前で、伊藤があゝもしたこうもしたと涙ながらに物語り、所望すれば実演もして見せるほどで、隠し立てしているとは思えなかつた。

ハンモックを利用する伊藤重役の責めは、君鶴の話を聞いている私刑が身の毛も戦慄つほどで、ここには風教上弊害ありとして公開をはゝかるが、慾情をいやが上にも昂進した伊藤が、いつものように責めのあとの情交中、とつぜん君鶴の腹上において頓死したという彼女の申立ては、医師の診断による伊藤の死因が、納得のゆくように説明をしてくれなかつた。

私刑は前にも言つたように、君鶴を殺人犯人とは考へなかつたが、彼女と痴情関係をもつ影の男があると睨んだ。

かくして犯人の捜査は、その線にもそつて一

意専心にすゝめられたのである。ついに三日目に、地廻りのヤクザで大岩時雄を眞犯人として逮捕するにいたつた。

大岩はその夜、界限の評判があまりに高いので、事実をたしかめようと決心し、待合の福春へあがつて酒を飲んだ。

彼はひそかに奥まつた小座敷を覗いたが、そこには君鶴と伊藤が地獄絵を見るようなハンモック責めの光景がくりひろげられていたのだつた。大岩は驚いていきなり部屋へ飛び込むと、伊藤の陰囊を締めつけ、口と鼻を手をもつて塞ぎ、ついに死にいたらしめたというのが真相であつた。

福春のその夜の客は、まだほかに三人あつたが、女將は犯人が逮捕されるまで、客のことはいつさい話さなかつた。待合なんかの営業をするものは、客の名譽のためにもそうすることがあたりまえかも知れないが、それによつて迷惑を蒙つたのは私刑前であつた。

犯人の大岩は警察へ自首しなかつたことを心から悔んだ。彼は地廻りのヤクザに相違なかつたがあるひとつの正義観を持っていた。

『芸者なんかどうせ遊び道具だ、ひッぱたいた方が実感が出て面白い』というような客は、殺してしまつて一向さしつかへがないと考へ、彼一流の人道主義で割り切つていた。

とかく世間からはさげすまれて、箸にも棒にもかゝらないと批難されるヤクザの地廻り兄ちゃん、花柳界の巷で稼ぎをする淫乱芸者に、思いもよらない純情をささげ、生命がけでサディストの手から彼女を救い、鼻たか／＼と得意になつてゐる姿は、さむざむとして哀れであつた。

と言うのは、私刑前が、犯人の大岩時雄と、芸者の君鶴は痴情関係ありと睨んだのが間違いで、たゞいちどの情交すらなく、垣間見る恋情にすぎなかつたことを知つたからだ。

君鶴は私刑の前で、ひたすら伊藤重役の死を嘆き悲しんだ。

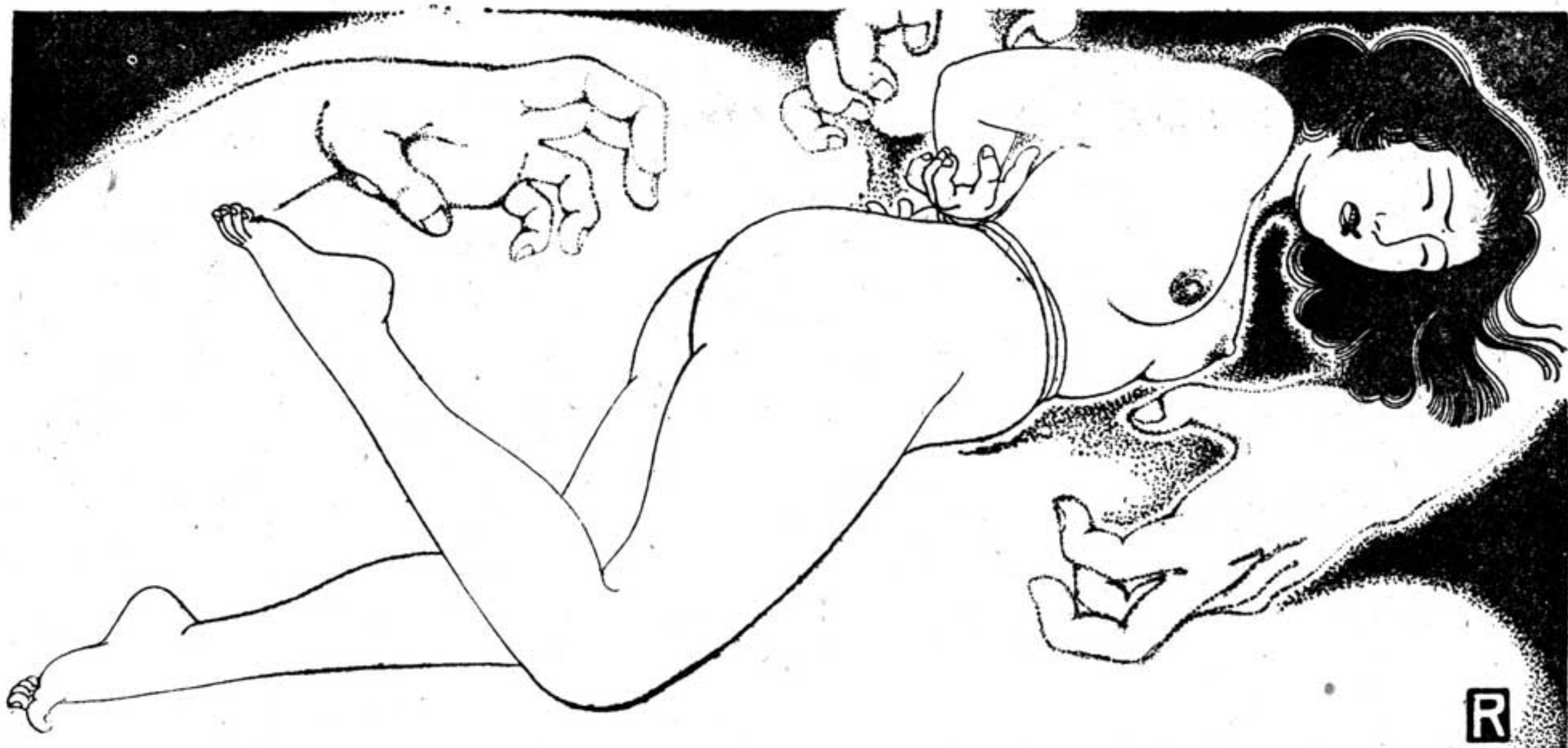
伊藤が君鶴の腹上で昇天したごとく見せかけて、あたふたと警察へ届出た大芝居は、たぶん福春の女將が仕組んだ筋書だつたと思われる。

犬も喰わない夫婦喧嘩や、親が子供を折檻する仲へ立ち入つて、もの識り顔に意見にするヤツは馬に蹴られて死ぬがいい。

色情犯罪に現われたサディズムの一篇を読めば、しぜん理解されることである。

(了)

× × ×
× × ×
× × ×



|| 玲 子 夜 話 ||

悦 虐 の 女 百 態

軽い痛みというものは、擦つたいものなのです。クク、ク……と、のどをならしながら、その痺れるような波紋のなかに眼を細めて、柔肌をくねらせる奥様のからだのほてり……それが旦那様に電流のように、キヤツチてきないわけありませんでした——

繪 と 文

喜 多 玲 子

いれずみ

その奥様は、自分の肌が美しいと云うことを自覚していました。豊かな脂肪の層をなだらかに包む、その膚の色は白くて、どうかした光線の具合で、絹地のようにつややかに光るのです。御主人の愛撫にまかせる吾が肌が美しいと自覚出来ることは、女の身として幸福なことでしたらうけれど、結婚後六年経つても子供が出来ない二人っきりの生活の空虚さが、だんだんその夫婦の夜の生活を異常なものにしていったと云うことも私には或る程度うなずける点もありました……。と、だしぬ

けに、こんなことを書き出しても訳が判らないでしょうが、これは極く最近に逢つた或る夫婦の話なのです。

私が十一月号に「縄と刺青」の口絵を描いたことが、此の人達から最初に手紙を貰うきっかけになつています。

女にも男にも独占慾と云うものがあつて、お互に愛し合っているものを占有しようとする意識が多かれ少なかれあるものなのですが、此の夫婦の間に縄と刺青の遊戯が用いられたのも、そのような独占慾が最初の現われだったのです。小口末吉が自分の妻の肌に焼火箸で「小口末吉の妻」と数箇所書き入れた話は有名ですけれど、

「あの話を、雑誌で読んだことが最初の動機でした」

と旦那様は仰言るのです。

しかし焼火箸を使ったり、本當に刺青をしたりすることは、洗練された社会人である此の夫婦には馬鹿氣なことなのです。第一銭湯などに行つても恥しい思いをしなければならぬし、自分たちの秘密が近所の人達に公開されるものなのです。其処で、面白半分には赤インクと青インクで、その美しい奥様の白い膚に○木○雄の妻と書いたのです。

チクチクと尖つたペン先で、膚をつゝき廻される感触は、それが辛棒の出来ないような痛みではないだけに却つて官能を刺激することになつたかも知れません。異様な興奮がその場所から身体全体に波紋のように拡がっていきました……。と手紙に書かれてあるのも本當の実感でしょう。

軽い痛みと云うものは、擦つたいものなのです。クク、ク……とのどをならしながらその痺れるような波紋の中に眼を細めて柔肌をくねらせる奥様のからだのはてりが、旦那様に電流のようにキヤツチ出来ない訳がありませんでし

た。

そして……。

そのお互の悦びが、此の夫婦の飽和状態の夜の生活を新しいものにしたこと事実はたつたろうと思います。

その頃から、赤インクと青インクと尖つたペン先とは、独占欲のお芝居とは切り離されてしまつて「閨房の遊戯」になつてしまつていたのです。小口末吉の妻、から出発してあの陰惨なものとは全然違つた悦虐の樂しみを此の人達は探し出し、いつの間にか自分たちのものにしてしまつていたのです。

そうなつてくると当然、繩が必要になつて来ます。○木○雄の妻、などと云う最初の頃は違つて、だんだん執拗になつて来る旦那様の愛撫がより以上に感度の高い場所を狙つて、奥様のからだに火をつけるのです。だから、白い裸身に書かれるものは絵でも字でも構わなかつたのでした。その代り、チクチクとまさぐるように責めたる淫らなペン先の攻撃に、奥様は必死にシーツの端を噛みながら、押し殺したような呻き声をあげたことでしょう。また、あまりにも官能を刺激する愛撫の手から逃れようと身

をくねらせ、もがいたかも知れませんが。悦びは悦びとしても、あの尖つた悪魔の先が、何十回も何百回も、チクチク、チクチク、強く弱くつゝきまわす擦感の妖しさに、じつとして耐え切れる女性が何人あるでしょうか。或る時は腋の下に。或る時は乳房に、そして背に、腰に、腹に。

「……あゝ、ああッ……」

海藻のように乱れる濡れ羽色の頭髮の先端から、すらりと伸びた足の指先まで、ピリピリと断え間なく伝わる悦虐の伝波……。

奥様は裸身をくねらせ、もがき、思わず声を挙げるのです。ヌレヌレとしとに濡れた素肌の下にはほのぼのと温かい血が、香り高く逆流していったことでしょう。

旦那様が考えたことは、どうして此のくねり廻る妻のからだを、じつとさせておくか、と云うことでした。そのことの爲につややかに輝く奥様の裸身に蛇のようなうねりを見せて、いくすぢものの紐が巻きつき喰ひ込む結果になつて来たのです。

身動きも出来ない羞恥の姿態は、夜毎行われるこの二人の間の遊戯に一段と新鮮な興奮を呼



び起したことでしょう。妖しい攻撃は、それが避けることが出来なければ出来ないだけ、数倍の刺激となつて奥様の血をかき廻し、もたえさせるのでした。

「助けて……。あゝ、ゆるして……。」

チクチク、チクチク。妖しい絵が絵絹のような素肌にとろろ嫌わず染め上げられてゆくと、身動きもならず縛り上げられたからだを芋虫のようにのたうたせながら奥様は耐えきれず悲鳴を洩らすのです。無理矢理に官能の淵の中に引きづり込まれてゆく血のうずきが、逃がれようとしても、襲いかゝる波のように間断なくチクチクと責めかゝつて、七色の虹の中に意識はとけ込んでいったことでしょう。

且那様の耳には「助けて……ゆるして……」

と云う妻の声は、もつと、もつと、と聞こえたかも知れないのです。

「だから……。」

と、二人は私に話しました。

「だから、私たちは、現在でも愛しあつていま



すし、非常に幸福なのです。」

その人達の照れたような笑顔と、濡れてゐるような眼の色に私はため息をつきました。

ひげ

条件反射と云うことがあつて、たとえば犬や猿などに食物を与える場合に、必ずその前に鈴を鳴らしてから与えることを毎日反覆していると、今度は鈴を鳴らしただけで、その犬や猿が涎を流すものだと言いますが、或る未亡人は恰度それと同じ理窟で、タワシや歯ブラシや、ヘヤーブラシのような、硬い毛が一杯束になつてゐるものを手にすると、ぞくぞくと身体中の血が、こう何となく熱くなつてくるのです。

数年前に死に別れたその人の主人が、非常にひげの濃い人だったそうで、ひげの濃い男は女に親切でその上どうかすると女泣かせだと巷間云われているだけあつて、彼女は常に、その硬いゾリゾリとした頭で身体中をなで廻され、悲鳴を挙げながら七色の虹の中に浸つていたのです。

そんなことが反覆しているうちに、ひげと快感とが結びついてしまつて、彼氏の死後は硬い毛の生えたものが彼女の血を沸かせることになつてしまつています。これは、もう追憶とか連想と云つたものではなくて、そんなことを通り越した一種の反射なのです。

生活の爲に現在家政婦をしているのですが若い割に再婚の話に耳を藉さないのは、タワシやブラシが彼女のからだから離れないからで、若しこのような彼女の心理を知つてゐる男性が現れたら、一度に彼女のからだは崩れてしまふかも知れません。

銭湯に行くのは、いつもおそくで三助が仕舞湯の掃除に来る頃なのですが、大きなタワシを握つた三助が、タイルの上をゴシ／＼とやり出すと、もう真赫に上氣した頬をしてたまらないような眼付きをして、こすり上げられてゐる白いタイルを見ているのだそうです。関西には悲しいことに流しと云うものがないので、若し出来ればそのタワシで自分の肌をこすり廻してほしい、と云うのが彼女の本当の氣持なのでしょう。

マゾヒズムは多分にあるので、勿論縛り絵にも興味があり、そう云つたものを見ると、女を鞭撻つてゐる男の手に、鞭の代りに大きなタワシを持たせてほしいと彼女は云うのです。

若し読者の中で、ボクはひげが濃い方だ、などと思つて居られる方、または縛られた裸女を鞭の代りにタワシで泣かせてみたいと仰言る人がありますなら、私が……。

視線の鞭

悦虐と云う言葉を、最初に使い出したのは私であることを御存知の方は少いかも知れませんが、これは「責め」と云うSの側から云つた表



現を「責められ」側のM方から受け止めて、それに悦びをつけ加えたもののなのです。だからマゾヒズムの表現のつもりなのですが、或る人に手紙で此の意味を聞かれた時、このことを云つたら、

「あなたは、虐げられる悦び、だと云うけれど、虐げる悦び、にも通じるじやないか。だとしたら、悦虐と云う言葉は、SとMとのお互の悦びと云うことになりますね。」

こう云われてみると、成程びつたりで、それなら尙更結構なのですし、つまらないことを云つて、いらぬ恥をさらしたようなものでした。しかし、被虐だとか加虐だとか云う表現はいやですね。何かロマンがないように……。

ところで羞恥と云う感情は、男にもあるのですが、特に女にはそれが強くて、異性からだを見られる羞しさはよく云われているように、消え入りたい、とか、身も世もない、ような羞恥に襲われるものなのです。しかしそのくせ女にはナルシスのようなものがあつて、若い女性であればあるほど、自分の青春の肉体を異性の前に誇示したい潜在意識があります。

自分はこんなに美しいのだと誇示したい欲望と、見られることは羞しいと云う羞恥の感情とが、異性の視線で虐められると悦虐になるのです。

或る青年が、こんなことを話してくれました。戦後の軟派本ブームの時、X X読物と云う雑誌に載つた或る小説の中に、無理矢理におどかして裸にした娘さんを、男が今言つた視線で

虐める場面があるのを、遊び半分に自分の戀人を捕えて同じようにして見たのだそうです。

その青年の話はとても詳しくて、そのまゝ書くとも面白いのですが、そんな訳にもいかないし、またそんなことを書かれたら、その戀人である娘さんも可愛想なので、恰度その場面だけ小説からピツクアップして想像して貰うことにします。

この青年がヒントにした雑誌と云うのは、私も、話を聞いていたうちに、ハハア、あのことだなと思ひましたので、早速ゴツチャになつた本棚を探してみました。私自身、そういうたものは確に見たこともあり、残してある筈だつたのです。

B5の本で、その小説の題は「淫魔」。連載で長いのですが、その青年が話したところはこのうちで懐中電灯を男が使うところなのです。以下はそのくだりです。

(私は次に、例の小説家すらもやらなかつたやうな、とてつもない悪戯を始めたのです。私はフツと灯を消しました。真の闇です。途端に彼女の動悸が、ひとしお劇しくなりました。愈々最後の恐怖が来たと思つたのでしよう。今にも



私が弾丸の様に飛びかゝつて来るものと思つたのでしよう。何とかして両手の縛しめを解こうと悶える気配が、闇の中でも明瞭でした。何か今まで聞えなかつた啜り泣くような声までも洩れて来ました。

此処で、男は用意していた懐中電灯をともします。説明しておきますが、これは人家を遠れた空屋の中なのです。娘さんは素つ裸で後手に縛られてしまつています。

懐中電灯はレンズの加減によつて光の輪を小さくし光度を強くして、目標をはつきり照し出せるように出来ているものなのです。

さて……

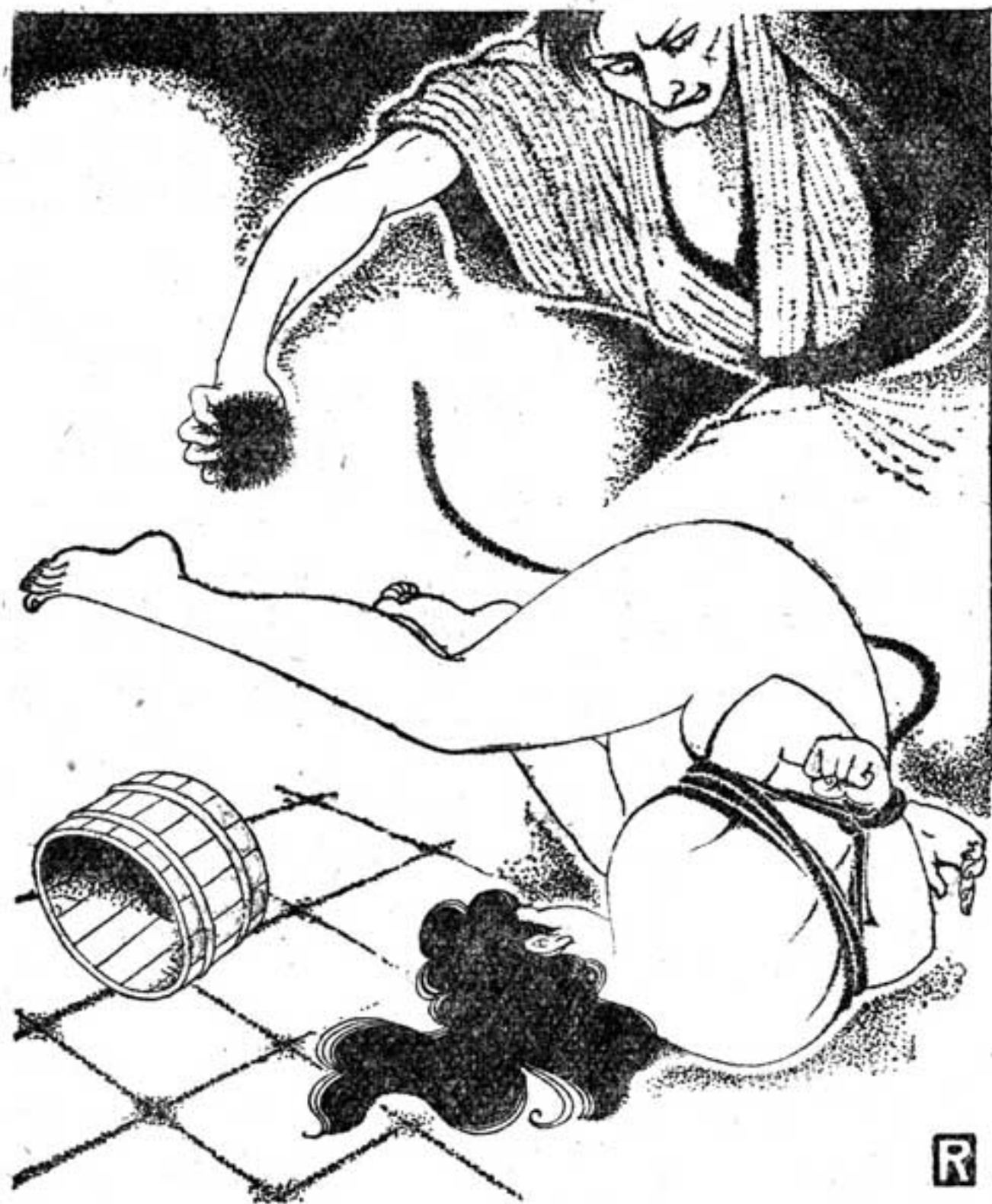
(私は懐中電灯を灯しました。そして、その明りの大きさを、経八寸位にして先ず、彼女の顔を照し出しました。彼女は一瞬上げた顔を如何にもまぶしように直ぐ伏せてしまいました。次に私はすんなりした肩から乳房を照しました。彼女の処女美の象徴である乳房は、云う迄もなく、ローソクの場合より以上にはつきりと浮び上りました。そして、その乳房は、妖しい感激にふるえる私の手から伝る電灯の加減ばかりではなく、明瞭にふるえているのが認められました。続いて胸……中略……。光が段々移つて行くにつれて彼女はようやくこの悪戯の意味に気がついたのでしよう。光の輪が、腹を中心として、グルグル廻りながら徐々に移つて行くのを知つた時、狂気のようになりました。次の目標が……云い様もない恥しさを想像して耐らなく

なつたのでしよう。私は一向これにかまいませんでした。丸い光の輪はやがて……)

やがて、それからどうなるかは、このまゝ続けてゆくと、あとのところは大阪の本の一頁を全部書かなければならないので、大變ですからよめますが、ともかく此の美しい令嬢は狂気のような惱乱のうちに、男の視線のいたずらでもてあそばれるのです。

視線の鞭。そんなものかも知れません。

此の懐中電灯の悪戯をヒントにして、可愛い恋人を下宿だかホテルだかに連れ込んで実行した青年は、感激に胸が震えたことでしょうけれど、小説の中の令嬢のように、光の輪の中で羞恥に身をくねらせた可愛い娘さんは、どの



ような思いをしたことでしょうか。その心理は残念ながら聞き洩しました。

悦虐の十字架

映画や演劇の中で縛りや責めはいくらも出て来るのですが、それはあくまで「責め」や拷問の場面で、虐げられる悦び、ではなかつたようです。しかし、私がさる大家の紹介状を戴いて、大阪朝日会館で公演された「青銅のキリスト」の楽屋を訪ね、あの大詰の幕を見せて貰つた時には、しみじみとそれを感じました。

あの、薪に火を放つてから、ムクムクと立ちのぼる白い煙が、赤い光線の効果で、徐々に焰のようになつて十字架にかけられた吉利支丹たちの白衣に燃えうつるところなどの、

R

装置のよさも流石でしたけれど、神の名を呼びながら焰にむせてこと切れるまでの吉利支丹たちの苦悶の中の法悦は、何かぞくりとするものがありました。

花柳小菊と云う人は、美しい上に尙美しさが増したように思われました。あゝして、白衣を着て髪を長く垂らし、十字架に縛りつけられ、メラメラともすそをなゆる焰に身をくねらせるあたり、そして、あの眼、あの唇。映画ならば、たいてい黒白ですが、あの場合は色彩は生だし、おまけに舞台のそでから見ているので表情だつてよく

判ります。正面からも見たかったので直ぐ客席の方に廻りましたが、そんなことをしていてもゆつくり見られる程の永い場面でした。

スケッチブックは持つていながら、終つて幕が降りるまで恍惚となつて見とれてしまったことを覚えています。

ぬめはだ

色街の女には、マソが多いのでしようか。

よくそのような話を聞くことがありますけれど。尤もあゝいつた生活の中に飛び込んでゆくこと自態が、それはいろいろの事情もあるでしょうが、大体自虐的なんですね。

或る知人が素見しに行つたと思つて下さい。所は京都の島原。あまりはつきり書くと差しさわりのあるので困りますが、恰度、其の道すがらに本屋があつて、『風俗草紙』の新刊が出ていたので、常々からの読者だつたものですから買つていつたと云う訳です。

あちらこちら素見しているうちに、○徳と云う家で一人の女が彼の懐の本をスツと抜き出したのです。

「ねえ。上つてちようだい」

女はその本を、よく子供がするように背後にかくして片方の手で彼を引つぱるのです。

あがつてくれたら返してあげる、と云うあの手だろうと私の知人は思つていたそうです。しかし彼が興味をひかれたのは、次に女が彼の耳に唇を寄せて云つた言葉でした。

「縛つて。ねえ、いぢめて」

サービスするわ。とか、可愛がつて、とか云うのならありきたりで、またそれほど魅力のある女でもなかつたのだから、本を取り返して振り切つてでもその家を出て来たことでしょうが。

「縛つて……」

こう云われて、さようならをするのは吾党の士ではない筈です。

彼がその時浴衣を着ていたと云うのですから夏のことでした。女は、他の女がワンピースを着ていたり、シュミーズ一枚だつたりするのに、着物を着ていたそうです。

そして、二階の四畳半。(三畳かも知れない)空解けの、帯をそのまゝ。彼に縛られた女は後手の不自由な姿で転つていました。

煙草をくわえながら女のからだをまさぐる十

本の指。一枚一枚剥がしてゆく下から汗ばんだ素膚が露わになつて……。案外、白いヌメヌメとした吸いつきそうな肌だつたそうです。女は燃えていた、と知人は断言しました。玄人で、そしてあのくらしいことで、あんなに燃えるのはたゞの表面だけのテクニクじゃない、この遊蕩児は云うのです。

彼の感情も冷静ではなかつたでしょう。腰布の赤が、しわになつたシーツの上に投げ捨てられる頃。

「……猿ぐつわ……を。……」

こうその女が云つたと云う。

整理箆笥の上の京人形の入つたガラス箱の横に、同じ本が二冊あるのに彼が気がついたのはむせかえるような悦虐の時間が済んでからのことでした。

一冊は女が彼の懐から取り上げたもの。そして同じもう一冊は彼女が買つてきたものの。

えゝ、それからと云うものは通いつめましたね、氣に入つたと云うんでしょう。偶然の出会いと云うものはあるものです。

あゝ、本がとり持つ縁かいな。

(完)



川柳變態性慾志



うむときはどうするものと我慢させ

もうなきはせぬからよくと女房いい

ここはまだ生きてござると女房泣き

原比露志

人間の生活の中で、どこまでが常態で、どこまでが変態かと云うことはなか／＼判らない。医者に診て貰うと、丈夫だと思つて自分の身体にもちやんと疾患がみつけれられるように、心理の方も、常態だと思つている中にちやんと変態の分子はあるものなのである。

誰でも風呂屋で女湯がみえれば、ちよつと覗いてみたくなるものだし、恋人のラヴ・レターには唇をつけてみたくなるものだ。それを窃視症とか嗜物症の症状だと云われては少し腹もたとう。併し、ヴォアイヨ（窃視症）とかフェティシズム（嗜物症）の萌芽はそこに確かにあると云えるのだから、問屋はヤヤコシイのである。

神経質に考えると、一応は誰でも変態性の要素をもっていることが、自らを変態性慾患者だと思ひこませることになり易いのだ。雑誌や新

聞の相談欄をみると、よくそう云う例がある。自分は出歯亀じやないだろうかとか、先天的の同性愛者じやないだろうかなんて云う類いである。

実際に我々の歴史をみてゆくと、日本人は気が溫和だつたり、島国だつたりする関係からあまり激しい性質はもっていないようだ。食物にしたつて淡泊なものを好み、趣味も簡素を撰んでいる。

それで、勿論、サディストとしての雄略天皇や武烈天皇、織田信長、千姫なんて云う人物もいるにはいたが、それらは長い歴史の中から僅かに拾い上げられる程度のものだ。

また裸体画こそ発達しなかつたが、平気で人前で胸をあけて赤ん坊に乳をやつたり、混浴を避けなかつた我国では、そう強いて女の裸体を覗き廻る必要もなかつたらしい。女の白い脛を

みて天界から墮ちた久米の仙人や顔世御前の湯上り姿にみとれた高師直などは、笑い草として伝つていただけである。

人間に個性と云うものがあるとしたら、みんな杓子丈規のタイプでも面白くあるまい。そこで多少の性格の薬味として、所謂変態性の芽がそこに混つているのも、案外にいいのかも知れない。信仰心が篤いとか、蒐集癖が強いなんてのも一種の変態性の表れをみるべきなのだろうから。

さて、前書が長くなつたが、こゝで表題の川柳からみた変態性を眺めてみよう。併し、洒脱なユーモアを主体としたこの十七文学には、そうドギツイものはなかつたようだ。あつてもそれは殆ど笑いのヴェールをかけられてしまつて

窃視症

他人の秘事を覗くことは、たゞでも優越感を抱かせることでもあるが、こゝでは特にみること自体に性的な快楽を覚えるものと云うべきだろう。即ち、出歯亀こと池田亀太郎君が女湯を覗いて廻つたというあの心理であり、今日のストリップダンスの繁栄する理由の根源でもある美人の裸だからみたい、裸美人をみたから自慰を行うというのでなく、みたことそれ自体が自慰やコイトス以上に性的満足を得るとなれば、もう本格的なヴォアアイヨー患者だが、そう云う人はあまりないのじやあるまいか。

女風呂を覗くことは、自慰やコイトスの刺激になるというだけなのだろう。さて川柳をみる

と何と云つても、覗きでは久米の仙人が一番人氣がある。久米仙人は用明天皇の皇子で、聖徳太子の弟と云うことになっている。仙術を學んで天上に飛んだが、たま／＼下界で洗濯をしている女の白い脛をみてふら／＼したので通力を失つて下界へ墮ちたのだと云うのである。

仙人の目にちらつた雪の肌

久米の仙人は遠目の利く男

仙人も故郷は忘れ難く落ち

おやかして洗濯をする傍へ落ち

脛ですらこの位だ。

黒いとこまで見ようなら久米即死

女湯の番をしたなら久米即死

目の前に落ちられては女の方もあわてる

仙人様アと濡れ手で抱き起し

仙人を生捕りにする洗濯場

その後は久米の来ぬ間に洗濯し

久米仙事件は誰知らぬものなきことである。

だから、久米は覗き手の代名詞にもなった。

嫁の洗濯仙人が落ちやすぜ

仙人も落ちてきそうな汐干瀉

嫁汐干船頭の久米ころげ落ち

早乙女を見てのめりこむ村の久米

久米仙につゞくのは塩冶判官の妻顔世に恋こ

がれて、その湯上りのしどけない姿を庭に忍ん

で盗みみたと云う忠臣蔵の敵役高師直である。

毛際までみたで師直病みだし

昔はズロースがなかったから、洗濯に蹲んだ

りすると頗る危い。

洗濯のそそう内陣拜ませる



洗濯の向うへ廻り拜むなり
汐干狩や田植も女の白脛をみるには絶好のチャンスだつたろう。

見遠しにゐるのに汐干母案じ

五月女を後からみておやすなり

勿論、風呂や行水は、まる／＼の素つ裸だから申し分なしだ。それで

行水に寝るほど嫁はかこわせる

人をみな盲にごぜの行水し

そこをよくたてやと嫁の手水なり

女湯を覗きがてらに小便し

垣間見は尻をつめつて替りあい

壁に耳あり、戸に節穴ありで

節穴をやたら気にする新世帯

露 出 症

覗くのと反対に見せたがる心理もある。狂人病院にゆくと、男の姿をみるとすぐ前を捲つてみせたがる女の患者がいるが、入院までしなくとも人通りのない往来で、女学生でもきかゝると自分の性器を露出する中年者のエキスピシヨニスト(展覽狂)があるものだ。尤もイヴニングドレスの背中の露出やショートスカートの腿の露出、腰のくびれやおっぱいの大きいのを示す服装もこの傾向の表れには違いない。便所の性的楽書なんかも、この性癖が内攻したものだといえるかも知れないのだ。ストリップパーなどは、嫌でも商売柄露出症的にならざるを得ないだろう。

屋根葺きの出したで騒ぐ長局

御殿女中のいる奥殿で、屋根葺きの男がちよいと悪戯をしてわざと禪をゆるめたのである。女護ヶ島での珍品だから大騒ぎも無理でない。

緋縮緬少しは風も吹かせたし

裏模様脛の白さをみせたそう

歩きたびつけねのみえる憎らしさ

はで娘江戸の下から京がみえ

いゝ縮み嫁の乳首が透いてみえ

この程度に女の誰でもがもつお色気で、何も露出癖とまでは云わなくてもいゝだろう。

嗜 物 症

異性の肉体の一部や所持品に対して特殊な性的興奮を感じるフェティシズムである。恋人の写真やラブレターに異常な愛着をもつのは、その身代りとしてまず一般的なことだが、唇、乳房、髪、毛、脚、恥部などの人体の部分やハンケチ、靴下、靴、ズロース、長繻絆、腰巻、などに触つたり、弄つたりして性的快感を満足させるとなると異常になつてくる。

よく腰巻をあつめてこれにくるまつて性的恍惚に耽つたり、ズロースを抱いて、寝たり、靴下を噛んだり、靴を嘗めたりするのがあるが、それで射精をするようなのは本格的だ。

阿部定女史のハントロン包みの男根などは立派な男根フェティシズムである。昔はよく役者がかんで捨てた鼻紙を拾つて悦んだ娘がいたそうだが、当今のレヴェニューガールのハンケチを貰

いたがる女学生、映画スターのズロースを欲しがるファン氣質と同じ、この傾向の代表例である。それらが使い古しの汚れたものであればあるだけ有難味がありますので、もつと病的になると糞尿に対するフェティシズムも起きてくる。

けれど古川柳にはどうも、そう云う猛烈なものはないようだ。それでこゝでは、多少関連のありそうな句を拾つてご勘弁ねがうしよう。

恋の文へそと湯文字の間におきおき
肌身はなさずという気持であらう。

接吻は口へのフェティシズムとは云えない。併し、日本人は平常生活ではあまりやらないことと云つたことは有名だ。併し、ないなんてことはない。枕絵ではザラだ。川柳でも

口を吸うとて鬼灯ほうきつかのみ

唇がはれたと袖をとつてみせ

女性の恥毛は、三本あつてもつていと弾丸除けになると云つたそうだし、これをあつめて布団を作ると不老長壽のまじいになるなんて迷信がある。毛はとにかく女性の、特に性器のシンボル然としている。以下の句も余り、フェティシズムに直接とは云えないが

毛を脱かばいやと踊り子さぐらせる

生えていやすよと手ぶし叩きのけ

およしなと額際にてとかまえる

馬鹿らしうありんす手をばのけなんし

馬鹿にしなさるなと女房おつぷさぎ

陰毛のコレクションをやっている人物は、今でも時折りみかける。
下着や靴に対する嗜物的な句はどうも思いつかない。そう云うしつっこさは日本人にはどうも不適きだつたようだ。

加 嗜 症

フランスのサド侯爵がこの方の代表的人物だと云うので、サディズムと名づけられている。異性の肉体に苦痛を与えることによつて快感を覚えると云う甚だ野蠻な心理でもあるが、結婚の歴史をみると掠奪始というのもあり、処女膜を破る処女性を尊重することなども、多分にこの傾向を含んでいそうだ。

婚礼は親も娘も痛いこと

恋聲がきて薄紙を引つpegし

うむときはどうするものと我慢させ

鎗でもつかれるように嫁案じ

花嫁の忍苦が花婿への無二のお土産という訳なので、これなどは万人にサディステイックな傾向がある證據だと云えよう。

雄略天皇が孕み女の腹を裂いたり、惨虐な昔の殿様が雪中に裸女を吊し上げたりしたのもみんなこの趣味で、きわめて単純な表れとしては

夫婦喧嘩をすることで性的慾望を刺戟し、泣き叫ぶ女の状態に性感を昇進させられたりするこ
とである。

小平義雄は強姦に和姦と違つた快感味を交えたのだから、道楽をしつくした老人で、女を抱くのわざ／＼強姦の形をとらないと承知しないのがある。

女房の股まであける猿轡

女房をみていてされる猿轡

してゆくはよく／＼好きな夜盗なり

股倉まで押しこみに女房あい

女房をしぼつて奈良茶のんでいる

女の家に入つた強盗で強姦をしないのはないと云われたが、夫婦者の家に入つた奴でも、亭主の前であることが一層効果をもつて行われるのである。

寝ごい下女車が／＼を夢のよう

ねごい下女されたも夢中作左衛門

かつがれた下女ひんそうのかさねどき

おり重つて下女をするむごいこと

手も足もはなしてしなと下女は泣き

ねじ藁をかえと四五人おやしかけ

八九人べえきましたと下女は泣き

かつがれた夜はぶつかけを二つくい

所謂集団強姦即ち輪姦である。車が／＼とか、つぐとか云われている。被害者は下女ばかりでなく

四五人でえらい目に逢う時参り

丑の時参りなどの女も深夜の獨り歩きだから、被害率が高かつたのだから。嫌がるのをするとところに加虐的な快樂がある訳だ。

口説く聞かなくて理不盡つかまつり

と娘だつてそういう危険には曝らされているのである。併し、妻の心得として、馴れても常に羞恥心を失うなというのは、うい／＼しさを保つと云うばかりでなく、一面男性のサディズムへの媚態をもてと云うことにもなるのだから

被 虐 症

サディズムが男に多いのに対して、これは女性に多い。ドイツのザッヘル・マゾッホの名に因んでマゾヒズムと呼ばれている。歐米では性的技巧に鞭で打つことが非常に悦ばれていて、文学の中にもよくで／＼くる。打つ方はサディスト打たれる方はマゾヒストで、ともにその行為に快感を感じるのである。

殴られて快感を感じるのは常態ではないが、性行為に於ても受動的（パッシヴ）なのは女性





で、これがひとつのタイプとしてマゾヒズムを生んだのではないだろうか。

息もとまるほど抱きしめられたりすることが嬉しいというのは、やがて頸をしめつけられる快ちよさにも通じるに違いない。愛する者の命令には何でも服従することの悦びが人間にはあるし、快楽の絶頂に生存を否定する死を呼ぶことも世界共通の現象だ。死ぬほど辛いことが、死ぬほど嬉しいことに結びつき、性の歡喜が苦樂を絶した「死」を想うのだ。一種の自虐的心理ともいえよう。

思うさま泣かせておいて仲直り丸寝していた帯をとく仲直りその顔で仲直りとは恥しき仲直り鏡をみるは女なり

鼻息で知れる隣りの仲直り

夫婦喧嘩を夫婦の性生活の薬味にたとえる人もあるが、まさにサドとマゾの普及版現象だ。パッシヴな女性の気持は敗北の中に快感を発見す。だから「もう駄目」「もう嫌よ」という否定語の中に感極つて死を叫ぶと同じような感情の盛り上がりがあるのである。泣くという異常な衝動的な表現が表れるのだ。

しつぺたでふとんをえぐりく／＼なき

堪えがたやとは上品なよがりようよがりなき甚だしきは亂となり
悪いくせ女房よろこびなきをする
もうなきはせぬからよやと女房いゝ
女房やらんとすそのな悲し
女房いかんとするその声よし

目ざましさよがり隣りで憤り

とんだよかりよう伏を吹きいだし

男性は女性の敗北的な亢奮に征服力をいやが上にも刺戟され、一層の快感を感じるのだ。だから鞭打ちほどの激しいものはないが、我國にだつて月並のサディストやマゾヒストは幾らでもいたのである。

同性愛

同性愛というと女学校のや上野の男娼を思い起すが、人間的な愛情を同性に向けて擬似愛愛を行う軽度のものから、異性を嫌悪し同性のみに傾投する偏質的のものまでいろいろの場合がある。

異性と隔離された習慣によつて僧侶や兵士や

娼婦達に多いが、この両性の存在を否定したような思想は、種族本能の目的とは別に東亞の古代から、文化的に高い階級にも抱かれていた。ギリシアのソクラテス、サッフオ、ルネッサンスのレオナルド然りである。

戦後の性の解放で同性愛も社會の表面に表れるチャンスが多くなつたが、これは何も今に始つたことではない。

江戸川柳は特に湯島や葎町の男娼、大奥長局の御殿女中についてこの種の異常者を扱っている。前者は主に坊主相手である。

けつはさつせいと弘法大師いゝ
させぬと尻を石にするぞと弘法
男色は弘法大師に始るといふのである。

僧正にけつをされたとき平いゝ
今川はけつをいましてめぬでほろび
幸村ももちつといるとけつをされ
裏門のほうへ重氏世をのがれ
まごつくと石童丸もけつをされ
秀次も無事でござるとけつをされ
牛若になつた若衆をきゝにやり
搦手をのぞむはみんな法師武者
精進とけつをばしなといゝ宗旨
けつの恩命なげだす關ヶ原

歴史上の人物も同性愛では盛んにこんな具合に引き合いにだされている。

芳町へ世俗にうとい客がゆき

芳町は通う佛の文がくる

芳町なればよけれどと納所いゝ

芳町の穴を後住うめている

芳町でうつは律義な和尚なり

芳町へゆくには和尚たちのまゝ

芳町の居つづけはほんの糞たわけ

芳町で抱かりあうのは不首尾なり

湯島は上野の山が近い。

天神の裏門で売る通和散

大師流にて筆太に通和散

通和散は男色用の粘液補給薬である。

武士の間に男色の流行した時代は、町方にも

その風はあつた。丁稚や小僧がその対象だ。

けつをされますと徳利とつてこず

酒買つて尻をされるは樽拾い

けつをするからと御用よりつかず

徳利が欲しかこれだとおやしてる

酒尻の小僧相手は浪人者でもあろうか。

男性はこの位にして、女性の方は例の水牛製の張形の中の互い形と云うのがあり、これを一方が腰につけて行ふのである。

部屋方の兄弟分は互先

相身たがい身とは長局

羅切してまた下になる長局

長局くじに勝つたが下になり

長局まづ重役が下になり

お局は若い女中にさせるなり

仲のいゝ角づき合は長局

牛の角もぐと女が二人出来

つまり当今のシロシロである。シロシロがコ

ンドムに綿をつめて巧妙な張形を作るのと比べ

ると、昔のお道具はなか／＼厄介なものだつた

自慰

自慰を變態性慾に数えるは異論もあると思う
キンゼイ報告にまつまでもなく、百人が九十九
人まで知っているものは變態でも特異でもない
からだ。併し、かりにこゝへ入れておく、男性
のは五人組、せんずりなどと呼んだ。

せんずりを国常立命かき

せんずりをかいてるとこへ勅使くる(道鏡)

せんずりをかくと北條とつかえる

歴史読みこみのものもあるが、

せんずりはかゝれませぬと搗屋みせ

せんずりをかけと内儀は湯屋で鳴り



女性の方は人形を遣うなど云つた。

歌舞伎みながら人形の面白さ

人形を鎗の代りによくつかい

娘の番箱人形も入れかねる

下で人形遣うのは猫知らず

併し、長局の張形は自慰の句として厭倒的に多い。とてもこゝではあげきれないし、説明もできぬから句を並べておくだけにしよう。

名作は只湯加減と長局

づないもの湯が二三合はいるなり

熱燗で楽しんでる局長

人肌にしては踵をあがかせる

湯加減を握つてみなと長局

ぬく灰がよいと局の伝授なり

長局夜食には湯を沸かさせる

湯を入れて水揚をする長局

張形へ甘酒入れる馬鹿女中

つまり張形は湯を入れるなりして暖めて用いるのである。

あれさもうくと水牛で一人云

お局のするは牛角姫始め

馬程の牛を局はもっている

細工はりゆうく牛の角馬となり

長局牛馬の道くらからず

大小はあれど値段は牛角なり

そして水牛の角で作つたものなのだ。だから長局四五本もつてそねまれる

お局は丑満頃に角が生え

牛若となづけて局秘蔵する

大原女と局は牛をよくつかい

蛸が牛くわえてひくや長局

お局は牛のよだれをたらすなり

張形は御養の物、とか箱入息子とも呼んだ。

長局くたびれ足へくしつけ

長局足をやめて快るなり

長局足ずりをして泣いている

一生奉公かゝとへたこがで

一人用は足のかゝとへ結びつけるのである。

とりかえるたび太くする長局

長いのははやりませぬと小間物屋

越前はいたし難いと小間物屋

注文に五分大きいを御宰買

小間物屋スポくさせて一本売り

出来合はおかりが低うございます

小間物屋がアルバイトに大奥へこんな器具をもちこんだのである。

近親姦

聖書のロト娘達のように親子、兄妹、それに嫁舅、姑婿の所謂畜生道と云つたものもなかつた訳ではない。川柳ではこれを田楽さしなどと云つて笑っている。

婿と姑の場合には

嫁の尻をお袋がとりあげる

御ほう美のでぬ孝行を亭主する

けしからぬこと養母が孫を生み

二た役嫁の尻実はお袋の

あじなこと養子に嫁をあてがわず

舅と嫁の場合は

息子のものを親父ばんを狂わせ

後の親を親とせず芋田楽

おかしさは芋田楽で相孕み

田楽の串に尻をつかうなり

田楽をやくたゝ中により声

親子の場合は

養子にもしろ娘だとかげで云い

後添いの内義いちといじりあい

幼児姦

多くは劣等感をもつた者が、一人前でない子供を対象として弄ぶのである。

めめつことうつちやつておきかつがれる

このマリを口へ入れてと守は泣き

猿轡はめと子守泣いている

相手に色気がないからどうしても、かつぐよ

うな無理になるのだ。

いたいことないと娘をくどくなり

小娘を頭ばかりとくどくなり

偶像姦

ギリシアの彫刻家ピグマリオンが自分の作つた女神の像に惚れこんだというので、その名からとつて、ピグマリオンズムと云っている。マ

ネキン人形にしがみついたり、絵に描いた美人に慾情するような類である。

併し映画女優のスチル写真やプロマイドを前において自慰をするのは、実在するスターへの情慾をそれで代用して受けとめさせているのだからピグマリオンズムには入らない。だから川柳にはあまり適当な句はないようだ。

絵にかいた餅を師直くいたがり（画餅）

君が姿の掛物に反り

死んだ妾に絵師の骨折り

絵にしても源氏の薙のぞきたし

自己戀愛

ギリシアの美少年ナルシスが水に映つた己の姿をみて惚れこんだのでナルシズムといつてゐる。一種の自惚れのすさまじい奴である。

色娘おとこの顔へ難をつけ

これもいゝ句の類例が思いつかないが、川柳で穴無し小町として知られている、美女小野小町などはナルシストだつたのではないであらうか。

獸姦

古代の伝説や秘話には人間と動物の交婚流説は頗る多いが、歐米のように家畜と人間の渉交は我國ではそう多くない。

歌麿の絵に辛免と女あかえいと女、清長の絵に牛と女などの絵があるが、犬や馬や牛とのソドミーはまあ川柳にはなく、伝説を扱つた九尾の狐とか葛の葉の信田の森の狐が登場したりする。

鳥羽の院くじつてみてても気がつかず

幽王のした跡をする鳥羽の院

助平な畜生唐でもしくじり

は三国伝来の九尾の狐が玉藻前となつて、帝寵を得た話だが、阿部の保名の女房葛の葉狐も同巧異曲のこんな句がある。

さて味もかわらぬものと保名いゝ

毛深いとばかり保名は思つてし

屍姦

天国に結ぶ恋の坂田山心中で無垢のヒロインの屍を掘りだして弄んだ墓掘り老人の話が有名になつたが、墓を掘りだすのは最下級の非人でも滅多にやらないことなので、川柳にはまずないと云つてもいゝだろう。

併し、死後の硬直状態を喜ぶものが歐米にはあるそうである。こうなると病膏肓に入つた悪どきである。

男性器が病的に硬直してしまつたのを腎虚と云つて川柳にはよくでゝくる。そうなると使用はできないのだから、

嫁の身になつて嬉しい腎虚なり
なんて句もある。命とりになつて

気の毒さばかりに脈があり

こゝはまだ生きてござると女房泣き

泣き乍ら女房へ土砂をかけ

屍姦とは関係がないが、似たものとしてあげておこう。

まだいろいろあるが紙数を遙るかに超過しそうですねので終りの方は充分にのべられず申訳ありません。

野崎耕作画

×

×

×





横行する露出症

山崎 和夫

男性露出症

正直な打明け話をする女性なら、大抵不躰な露出症の男に出逢つた経験談がある筈だ。

電車の中でも多い。席が空いているのにわざ／＼着飾つた女性の前に立つ。それとない様子でコートのボタンをはづす。余人には知れぬよう、その女性にだけ見えるようにカバーしながら、ペニスを露出させる。

もちろん、衝動を押えかねるほどの、強い欲求にかられて行ふのだから、この時、彼等の性器は勃起している。けだし、この種の露出常習者の醍醐味は、女性がこの不躰な男性器を認めた瞬間の、その女性全身の表情にあるのではあるまいか――。

ある常習者の言によると、この災難に逢つた女性の八十％は赤面して顔をそむける。だが、約一割近い女性は、面白くも可笑しくもないと云つた表情で、輕蔑するように露出者の顔をまともに見る。

「そんな奴は女ぢやない」と、彼等はイマ／＼しがるのだ。

その他はマジ／＼と露呈された男性器を凝視する。これは始めて男性器を見た少女に多い。それでなければ異常者だ。

先日、これは筆者が偶然通りかゝつたのだが、都内某公園で、年輩の立派な紳士の露出行爲を見た。セーラー服の少女たちが四、五

人、芝生の上に坐つて賑かに写生をしていたのである。筆者は何気なくその側面を通りかゝつたのだが、急に彼女たちの様子が変つた。顔を真赤にしてうつ向いたり、囁き合つたり、それから中の一人はピヨコンと立ち上つて、それから私にぶつかりそうに駆け出して行つた。

彼女たちが写生していた前方、約三、四米の場所に、立ちふさがつてゐる男がいる。もう白髪まじりの紳士だが、彼は両足を踏ばり、前をつき出すような格好でペニスを露呈していた。恐らく、女学生相手の露出の快感に我を忘れて、筆者と云う異分子への警戒を忘れたのであろうか。

幼は少年時代から、こうした老年に至るまで、露出癖のある男性は意外に多い。かのルソーでさえ、その強い露出願望を「懺悔録」の中で告白しているのは有名なことだ。

しかし、こうした露出願望にも、さまざまのタイプがある。その一つは、相手の女性を無意識の裡に選ぶのである。どんな女性の場合でも、と云うのは案外少い。

前記の紳士のように、無垢な少女を見ると、たまらなく露出欲をそゝられる男がいる。何も知らぬ処女だと思つと、自分の性器を露呈せずにはいられない。これなどは一種の、心理的処女姦と見てよいであらう。

美しく着飾つた女性に對してのみ、露出の誘惑にかられる男。その他、成熟した、肉感的な女性、或は貴婦人に對してのみ、又は瘦せた女

性に限つてと、種々雑多な現われ方をする。ある下町の酒屋の御用聞きだが、彼は盛装した芸者を見ると、その眼前で、これ見よがしに放尿する。

「芸者さえ見れば、放尿した直後でも、必ず小便がしたくなるのです」

と、彼は語つていたが、これも一つの露出癖であらう。殊に彼の場合は、不如意勝ちな御用聞き暮しの卑屈な心因が、反動的にペニス誇示として現われるのである。

つまり、経済的にも精神的にも、彼女たちに一顧も与えられぬ存在である彼が、その漠然たる不満から、彼女たちに対して示し得るたゞ一つのものとして、攻撃器であるペニスを露出する。反動的な優越感であるが、或は彼には、自己のペニスへのフェティシズム、又はナルシズムの傾向が存するのかもしれない。

彼等は露出する快感と共に、その相手方の動搖によつて二重の快感を味うのだが、其処には彼等の歪められた性欲が、妖しく圧縮されている。この不思議な性感の虜となつて、正常な性行為を省みない男さえある。彼等は映画館の暗がり、又は満員電車の中で、巧みに一人の女性の眼にふれるようペニスを露呈して、オナニーを行う。

それと知つた女性の狼狽、困惑が彼の快感を助長させて、遂には射精に至る。この場合、彼にとつては、その女性と性交を行つたと同じ心理状態にあるのだ。彼等の多くは、女性のペニ

ス^{ナイド}美望を、必要以上に過信している。つまり、彼の男性器が、女性の性感を刺戟し、亢奮させることを、堅く信じて疑わない。実際には、一対一の場合は別として、街や車内などでこの露出漢に出逢つた時の女性感情は、まず羞恥、当惑であるらしい。

このような露出衝動は、どうして生れるのであろうか。赤裸々な原始生活にあつては、もちろん露出欲なるものは存在しない。従つて、文化がすゝむに伴つて、露出症患者が増加すると云うのは、飛躍であらうか。

性器や其他の発情帯を蔽うことが習慣になり、それが道徳、内至は儀礼と云うワクに嵌められてゐる以上、それを露出しようとする破戒の欲望が起る。万人が蔽うかくし所なるがゆゑに、一層ダブーを犯す快感が生ずるのであらう。

自己の肉体を晒すとの、開放的な快感。それによつて、相手の性感を刺戟すると信じることに、又は確めることに、この行為は充分慰められ、報われる。

男性の露出行爲は、その多くが攻撃的男性器であるゆゑに、サヂズム的要素を及びている。それは、女性に對する精神的強姦と呼んでもよいであらう。しかし、男性露出症の場合でも、稀れにはマゾ的傾向を見ることがある。

二十五才の公吏だが、彼は非常に逞しい、男性的な同性を見ると、ペニス、及裸体を晒したい欲望につきまとわれる。この衝動にとりつか

れると彼はもうそれ以外のことは考えられなくなる。殆ど無意識の状態で、所かまわずに露出行爲にふける。相手の同性がそれに気がついた次の瞬間、射精。ついで貴い放心状態に陥入る。

この男の場合は、露出症に、多分に同性愛の要素が見られる、珍しい例である。

調査によると、これは彼の中学時代に起因することが判つた。蠻カラな地方の中学の寄宿寮の一夜、同室の上級生たちが、面白づくで一番年少の彼を押えつけ、衣類を剥いで陰部を露出させた。多勢に無勢、しかも相手は逞しい柔道部の猛者連であつたと云う。

自由を奪われ、裸体の彼はさまざまにからかわれ、なぶられた。良家育ちの彼は、死ぬような羞恥を味つたと云うのだが、この経験が、彼を複雑な露出症に育てたのだ。

男性の露出症は、しかしペニスのみに限つたことではない。夏など、すぐ下帯一つになりたがる男は、多かれ少かれ露出癖があると見てよい。

カコブ、濃い胸毛なども、彼等の露出欲の対象となる場合がある。横浜に住む電工夫某は、道路で工事中、通行の女性たちが、彼のおびたしい胸毛に眼を見はるのを知つてから、寒中でもシャツの胸をはだけていたと云うことだ。

女性露出症

露出症は、男女いづれに多いかと云うことは、軽卒には断じ難い。

最近の、女性の夏のモードを見ても、既に涼しさと云う点よりも、彼女たちの露出趣味を物語つていると、云つてもよいのではあるまいか。

例えば、昨夏大變な勢いで流行したナイロンのブラウス。これは見た目とは異り、御本人はちつとも涼しくないのだから、既に暑さとは関係がない。どんな言辞を弄しようとも、こんなナイロンブラウスを着る女は、多少とも露出の傾向があると見てよい。

彼女たちの露出願望は、ナイロンに限つたことではない。挑発的な海水着、肌もあらわな夜会服が、女性のこの欲求を雄弁に物語つていゝる。英国女王の妹君、

王女でさえも、「あまりに肌が露出されすぎ」と云う理由で、御氣入りの新しい夜会服を、メリー皇太后に禁止されている。

それではこのような露出願望は、全女性の、つまり雌の本能なのであろうか。確かに彼女たちはその美しい肉体の一部を誇示して、意識的、或は無意識の裡に異性の愛をかち得ようとする。これは決して異常ではない性本能である。

この本能から一步踏み出したものを、露出症と見てよいであらう。しかし、女性の露出症は、男性の場合とは異り、あまりに赤裸々な陰

部露出者は少いようである。これは無意識のうち、彼女たちが自分の性器に対して劣等感を抱いているからである。それに女性特有の羞恥心もあづかつて、彼女たちは、性器よりも肉体の他の部分を露出することになる。

エリスは、「女性には男性器のように、すぐ目につく外性器がないから、露出欲は性器を離れて全身に拡がる」と述べているが、卓見である。

当局の眼をくぐつて行われているらしい、例のシロ／＼の実演。吉原につたわる花電車。又はストリップパーなども、露出願望がなければつとまる商売ではない。単なる生活の方便以外に、彼女たちはこうした行爲を行うことによつて、程度の差こそあれ、露出欲を満足させ、其処から快感を味つている筈である。

女性には陰部露出者は少いと述べたが、これは男性に比較しての話で、往々こうした女性にもぶつかる。

場所も人も見境いなしに、着物の前をめくつて陰部を露呈する氣狂女は案外多い。これには多分に色情狂的な要素も含んでいるが、端的な露出行爲には違いない。

外国の貴婦人の中にも、テンカン症状を起すと、満座の中で下半身を見せて放尿する者がいるそうである。ちよつと考えられない精神状態だが、こうした女性の露出衝動は、実は内気な性格、羞恥の強い人に多いと云はれている。旧

式な道德教育を受けた女性、甚だ窮屈な礼儀作法を余儀なくされる者ほど、露出願望が強いのである。

逆説的に云えば、露出願望が強い人ほど、必要以上に神経質に肉体を包み隠すと云う。

ある富家の夫人は、非常に折目正しい人で、夏でもきちんとして身だしなみをととのへる潔癖家だったが、更年期に抑鬱症を発して、ひどい神経障害を来した。雇人や来客の前でも、発作的に帯紐を全部とき始めるのである。放置しておくとき全裸になつて仕舞うから、家人が慌てゝ阻止しようとする、夫人はひどく気嫌を悪くして暴れ廻り、とても手がつけられない騒ぎになる。そして、その発作の後ではグツタリと疲勞を覚えるらしく、陰鬱に黙りこんでしまうのである。

この主人の場合は、潜在露出願望が、激しく圧迫されて来た結果、反動的にこうした形を以て爆発したのである。

この他にも、神経質な男女は、前記の夫人のような症状を見聞すると、そのような醜い発作を、何時か自分自身が行うのではないかと恐れる。その取越苦勞が昂じると、彼等は危惧通りの症状を呈する破目になる。これは殆ど万人に



潜在する、露出衝動を物語るものであろう。

文学の鬼と云われる文壇の某氏は、その友人達と、精神病に就ての会話中に、

「俺が気が狂つたら、きつと色情狂だ。気が狂つたら、パンツの紐をしつかり結い込んでおいてくれ」と、語つたと伝えられている。

これは、神経質な男女に共通の不安である。抑圧された性衝動が、如何に人間を左右するか、興味深いものがある。

女性の露出症として、忘れられぬものに、内診の問題がある。産婦人科の内診台に於ける陰

部露出である。これは特に露出行爲とは云い難いのだが（必要上其処では必ず露出されるべきではあるが）これがどうも女性方の、ひめられた快樂だと、断じる向きが多い。

別段何処も悪くはないのに、病氣と称して産婦人科医院めぐりを道樂とする婦人がある。これはさすがに若い女性には少いようではあるが、こうなると、完全な露出症である。

女性は「内診」のことになると、印で押したように「恥しい」、「嫌ねえ」と仰有るが、その羞恥の裏側では、露出欲の満足から来る快感を覚えてゐる筈である。始めて内診台に上る若妻でも、ひそやかな快感を味うと云われている。このように、女性の露出行爲は、羞恥の感情と結びつき、一層デリケートな快感をもたらす。

古い産婦人科医の談によれば、この内診をそつてなく行く医者は、女性間にひどく評判が悪い。反対に、必要以上に、綿密に内診を行う病院には、患者（？）が押かけると云うのである。

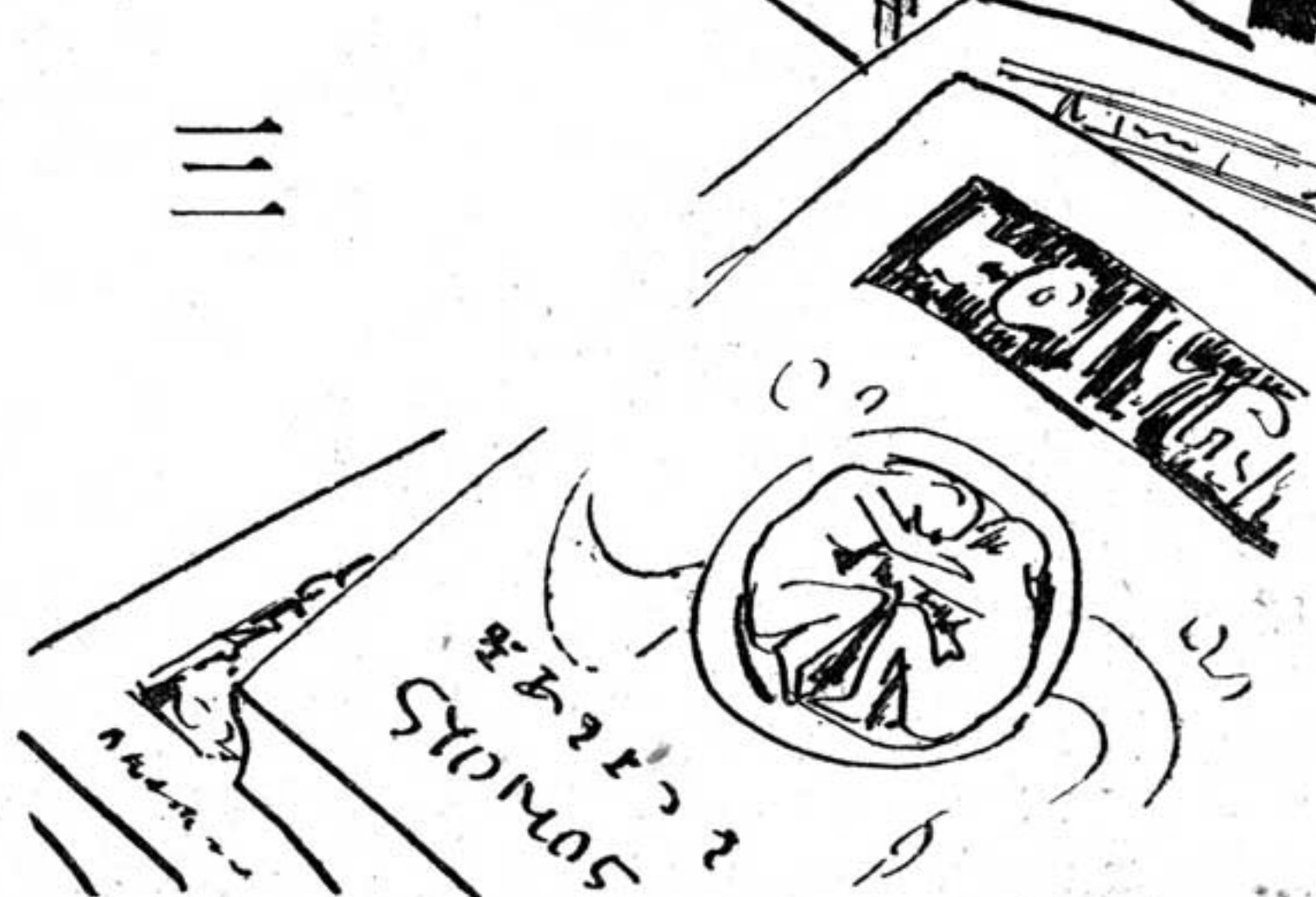
三十過ぎのママたちの会話中には、しばしはこの内診問題が提出されることがある。

「ひどいつたらないのよ。インタインだか、学生だか、まあ二人も三人も先生の後に立つて、ジツと見ているのよ。あたし、今更台の上からおけるわけにもゆかないし、真赤になつてしまつたわ。ほんとに嫌ねえ」これが、彼女の露出欲が充分に満たされた時の台詞である。こんな種類の露出症は、驚くほど多い。

變態奇書物語

……盆の上には、いまえぐり出されたばかりの私の心臓が乗っかって、わく、わくと喘いでいる。青味がかった奇怪な心臓が、苦しそうに喘ぐたびに切口が痙攣的に開いて、どくつとどす黒い血が流れる……

齋藤昌三



單に奇書といえは範圍は広いが、変態となると狭いものにならうし、勢ひエロ、グロの方面にならざるを得まい。殊に変態のエロとすれば、正当な艶笑ものでないのは明かなこととて、この方面から拾へば、弘法大師の遺風と伝へられる男色の方法も、その一つであらうし、江戸末期の畑銀鷄が記録した、当時の珍説ふたなり物もその一つであらうし、年代不詳の『手淫通』なども、その一つにあぐべきであらう。

紹介するが、取敢へず手近かの『手淫通』を拾つて見よう。

この書はいつ頃、誰の記録したものか解らないが、複本は多分物好きなき宮武外骨翁あたりが、大正末期の頃に作つたものであらう。極めて手薄いもので、半紙版四十頁、一頁が十二行詰めになつて居り、その内容項目は次の通りである。

風呂せんずり
野らせんずり
嗅ぎせんずり
人込みの干ずり
口すひ干ずり
かんがへがき
保々せんずり
雄魚寝干ずり
けつほり干ずり
こんにやく干ずり
とまりがき

往来千摺
雪隠のぞき
立ぎき干ずり
湯屋のぞき

誌面が許せば、これらの珍説を次ぎくと

以上十五項についての方法を説明したもので、所々に編者云々と挿んであるのは、恐らく外翁自身の註であらうかと思ふ。

この十五項目は大体その項目で内容が想像されるから、一々紹介するまでもなく、又公開をはぐかる辞句も多いので、解説的な編者言だけを拾録して見る方が面白からう。

先づ「雪隠のぞき」の項末に曰く、

編者知己の老人にて何某といふ人、十三のむかしより六十五歳に至るも、此の千摺の味忘れがたく、折々緞帳の芝居などへ赴き、独樂を爲すと聞き、一日草庵に訪れ、千摺考編輯の事を語り、本材を求めしに、翁莞爾として曰く、善哉子の千摺に熱心なるや、予此年に及び今は孫三人もある身の上なれど、雪隠のぞきの千摺ばかりは、何としても忘るゝこと能はず、一ヶ月に兩三度は必ず此の戯れを試めり。故に千摺のかきかたに雪隠に潜むぐあい等、多年研究して至らざる処なし。世の少年たゞく此技を爲すものあれども、前後の用心おろそかなるため、或ひは他人にさまたげられ、又は女にさとられ本意をとげず、却つて恥をかくものあり。

予少年特に千摺家のために、甚だこれをおしむとて、慨歎のけぶりなれば、編者すかさず、そは又如何なる次第なりやと尋ねしに、翁ほこりに示して曰く、

千摺の種類頗る多しと雖ども、女××を見ながら楽しむこと此の雪隠のぞきにしかず、千摺中上乘の戯れなれば、尋常の心得をもつてかき立んこと思ひもよらず、予積年後進千摺生活の拳動を見るに、片はら痛きこと甚だ多し、先づ雪隠に入り、自ら興奮の境地に入り、婦人の入り来るをまつて××××には、敢て迷ひなしとするも、思慮ならず、他人に見顯はされ、又は戸を明けられるなど、切角の上代物を見はぐる事あり。当人に取つては遺憾極りなしと雖ども、元々女の秘物をのぞくわざくれなれば、立腹するわけにもならず、泣寝ることなしとせず。幸に是等の妨げなく、程よく女入り来るとも、多くは我が目に叶ひしもの少く、あれこれとゑらむうち、舞台にて幕があき、それがため婦人も入り来らず、抛ろなくさもなきものにて、可惜目的を果すこと畢竟始終の用心疎かなるに依るものといふべく、たま／＼別嬪入り来りて、思ひがけなきよいものにありつき、待ちこがれた本懷を達することあるも、所謂萬一の僥倖なれば、之を以て例とする事は出来ぬものなり。

然れば、此の楽しみなさんと思はゞ、おのれ土間棧敷におるとき、場中をあまねく見わたし、かしこの半元服とか、こちらの島田とか、あらかじめ目的をつけおき、其の拳動をうかゞひ、それとなく用意しておくべし。

婦人によりて遅速あるも、大体二時間ごとくに雪隠へゆくは通例ゆゑ、其機会をはずすべからず、よく目をつけて居れば、此の次の幕には行くであらうといふ事のわかるものなり。又婦人連れなどあれば、さそひ合すがならひゆゑ、或ひは帯の間より紙を出し手拭など取出すことあり、是らによつても大よそはあたりのつくものなり。

さて雪隠へ潜むにも心得なくては叶はず、前にもある通り、せつかく女が来りしと思ひ、頻りにのぞきこむうち、突然他の者に戸を開けられる時は、残念ながら思ひ止まらねばならぬゆゑ、深く注意し、細き紐等にて引手の中からく／＼、急にあかぬやうになしおき、すきまより絶えず入り来る女をうかゞひ、そのうち油断なく自分のものをみがきおくべし。かくて我が目的をつけたる女、こなたへむかひ入り来るときは、其の嬉しさ何にたとへるものなく、戸を開けぬうちより、やゝもすれば、早やまることあり、惜しむべし。

女はいりしと思はゞ、右のひざをつき、左の手をはめへあて、身を平くもにしてうかがふべし。惣じて女は身たしなみよきものゆゑ、わがちようづばに入るうち、他人にあけられんことをきづかひ、戸の

引手をげんじゆうにさし、しきるにまたがり、ゆまきのはしと裾を持つてぐるりとまくるゆゑ、かれこれと手まがいりて、楽しみにつごうよく、十分に××××××、シユウ／＼と××××××××××××のなれば、容易にかきたぐるものにあらず。

尤もこのばに臨む用意は、女性の器容に依り、さまざまの事を胸中に画くをよしとす。

たとへば、年増のものなれば、その多少、その左右を見ながら、体を見つゝ、その時のありさまを考へ、又、年ゆかぬ小娘などには一もなく、××××××××××××を見なば、かゝる美しき初ものを、何ものがせしむるならん、自分のものにしたら如何あらんなど、思ひながら××××××は、いかようがまんするとも最はやこたへず、感興の頂上になれば、生涯わすれかねるほどのよい目を見るなり。されば此法にしたがひ、たのしめば、人の女房でも娘でも、たれかれのさべつなく、思ひのまゝにとりのめすこと、造作もなし云々と語れり。

次は「風呂せんずり」の項に転じ、ある人の曰く、これをなすには、其家の構造によりて一概には定めがたきも、田舎の風呂屋は、男女の衣裳をぬぐ処に仕きりなく、自由に見ることを得るものゆゑ、男子その中の女に気をかけ、××××と

思はゞ、着物を着るときなど、ひそかに女のあがり来るをうかゞひ、心を用ふべし。みうちをぬぐうときには、前をあらわすこと妙なり。また片田舎に至れば、男女とも一つ風呂に入ること、今も猶むかしの如し。これらはそれも自由にて、其人の器量にまかせ、隨意にたのしむを得れども、其内にとり、一ばん心よきは、おのれ湯の入口にしづみ、入来る女のあぶらの匂ひなどかき／＼楽しむべし。興奮することひときわすぐれてよし。もちろん女の肌にははらぬやう注意するが肝要なり。

第三は「人込みのせんずり」の末に、ある人曰く、にぎやかなるところにて、向ふより来る女うかゞひ、通りすがるふりにて、そのところへさわるもあれど、チボ、巾着きりのたぐひ、かかる手段にて金などぬきとるものあれば、剛気なる女はチボなりと思ひ、其手を握つてとがめることなしとせず。

もしかゝることあるときは、頗る赤面の次第ゆゑ、其の用心にはちいさき風呂敷包を手にはさげつゝ行ふべし。女こゝろづくも、風呂敷包がさわりしと思ひ、大体はとがめるものなしと。

第四の「かんがへがき」には、此の話につき編者思ひ出せしことあり。東京に住むなにがし、すこぶる楽しみずき

にて、さまざまの曲をなせしが、居候のかなしき、思ひのまゝにてあるくことならず、そこでふとかんがえつき、あるじ夫婦のしまつ紙をとり来り、ひそかに我部屋にてたのしまんと思ひしかど、前の京ばなしとちがひ、東京にては屑かごなどへ入れるものなど一人もあらざる故、材料をうることにすこぶるかたく、とさまこうさまかんがへしが、やうやく趣向がつき、目のあらきこふるいを用意なし、あるじ夫婦の床に入るをうかがひ、そつとおきてにはへいで、雪隠の下口をあけ、右のこふるいの中へさしいれ、一義にて女房がしまつに来るをまちもうけ、かのこぶるいへうけとめ、それを部屋へもちかへり、ぬれたこのかみを見ながら、楽しみしが、これほど気がはるく、気分のよいことはなし云々。

また、京都のすきやにて、是と同じやうなる手だてをめぐらし、ぎをんきよみづなど、さんけい人の常に多き境内の雪隠に入り、女の入り来るをうかがひ、それを見て行つたり、成ひは、使つた紙をくづかごに入れるを見て、ただちにとりいで、しみこみをる小便をすいこみつゝ、自分独りでたのしむは、この上なきたのしみとするものもありしと。また此男のはなしに、よき娘のあるうちをみとめおき、其の娘の雪隠へゆくをし



らば、あきない品を買ふにかこつけ、みせにこしうちかけ、雪隠をかりるふりにて、かごに打込みある娘の使ひたる紙をぬすみとり、人気なき方にいたりて楽しみたることもありといへり。みなく前の話と大同小異なり。

とあつて、最後に、
諸君、こゝろみて編者のまゝならざるを知るべし。

と結んである。結局十五項中編者曰くとあ

るは唯の四項目であるが、この編者言だけを見ても、相当犯罪科学の資料になるものが多く含まれているので、その他の本文中には当然さう云つた材料ともなるものがあり、変態的な行動で終始してゐるのは当然である。

然し、昔から自慰に関する文献はなほ多少存在するにしても、一冊にまとまつた書としては、本書などは唯一のものであらう。

筆次手に一寸気づいたことで附記しておきたいことは、岡田君の「近世庶民文化」第十八号

以下に、伏見沖敬君が註解『論御』を懇切に紹介して呉れているのを有り難く思ふ。ところで、この『論御』の出所が残念ながら明記してないが、これも前記の『手淫通』と同じく、大阪在住時代の外骨翁のいたずら出版であると考へられるが、それについて伏見氏の筆が洩れているので、何かの参考までに一言附記して置く。この書も当然「変態奇書」の一に加ふべきものと思ふからである。

戦後の言論解放から、相当大膽な出版物は続出したが、芸術的な創作には印象に残るほどの作は極めて少なかった。それこれと思ふ時、自己の本道に信念を以て描写した創作等は、庄野義信の『死の書』であらう。

この内容は今日でいふコント風の短編集ではあるが、どの作品もことごとく濁血の飛び散るやうな、変態性のみを扱つたもので、第一巻は昭和三年四月、第二巻は六月に刊行し、第三巻は同年九月に出たらしいが、自分は以上二冊しか見ていない。

第一冊の内容は、

常識的に破滅した人々

恐ろしき顔

エレベーター

蒼白き愛撫

孕める屍

第二冊は、

戦場の思想
フララの脚
倦怠

寝台車の女

行衛不明になつた労働者

観絵

第三第四は内容の細目が予告してあるの
で、多分出版されたものと思ふが、彼の創作
意欲は火の如くもえながらも、社会的には歡
迎されないことを自覚していたものか、跋文
の一節にも「私がプチ・ブル的な感情を淘汰
するに従つて私の作品はますます、発表の機
会を失ふに至るであらう。」といひ、「私は自
分で組版をなし、自身で印刷し、自身で製本
しなければ、作品を世に問ふことが不可能に
なるかも知れない。」ともいひ、更に「作品は私の
稚拙な習作時代の所産であつたし、またある
であらう。私の新しい理知と古い感情が混淆
して、狂燥的なジャズを奏でゝゐる。過渡期
の作品であるだらう。徒らに掲醜売恥——、
慚愧の極みである。」しかし自信と光輝とを具
備してゐるにちがひないから、老後益々大成
した北斎にも劣らぬ覚悟を持つといふ意氣を
吐いている。

この意欲と筆力を以て、自由奔放の現代に
再出發したら、相当大的な反響はあり歡迎さ
れると思ふのだが、彼は今いづこに市隱する
か、時に作品を緒くたびに惜しい天分と思ふ
のだが、えうとして生死が判らない。この方

面の編集子は彼の如きを探し出して、彼を喜ば
せ且つ読者を喜ばすことに努力してほしいと思
ふ。

左に彼の作品中の「倦怠」の一節を抜いて、彼
の作風の一端を示そう。先づ筆の起しと、最後
から抜く。

真赤な絨氈が敷きつめてある。

その真中に高栗焼の鼠色の盆。

盆の上には、いまえぐり出されたばかりの
私の心臓が乗つかつて、わく、わくと喘いで

ゐる。夥しい大小の血管に取巻かれた、青
味がかつた奇怪な心臓が、苦しうに喘ぐ
たびに、切口が痙攣的に開いて、どくつと
どす黒い血潮が流れ出る。血潮はぬらぬら
と盆の上を這つて、まるで無気味な露出さ
れた血管みたい、数條かの線をつくつて、
喘ぎながら絨氈へ流れ落ちてゐる。

盆の横には、二年間の同棲生活にすつか
り倦怠してしまつた私の妻が、緋の長襦袢
に細幅の伊達巻をだらしなく巻きつけて、



片肘をついて、横になつて寝そべつてゐる。ふつくりした真白な乳房が、長襦袢の襟の間からはみ出してゐる。弾力性に富んだ肩の線が、ふくよかな胸の上を走つて、少しねぢらした腹部のなだらかな坂を下りて、急に盛り上つた腰部に這ひ上り、胴の倍とも思はれる肉附のいゝ大腿を悩ましく這つて、長襦袢の裾からはみだした長い恰好のいい真白い白脛に消えて行つてゐる。綺麗に化粧した妻の顔が、真青な光を受けて、蒼白く凄艶に照りはえてゐる。私はこんな美しい妻の顔を見たことがなかった。

妻の横には、心臓を剥り取られた私の屍が、ぱつちりと眼を見開いて、くたくたになつて横たはつてゐる。その私の胸の上には、髪を綺麗に撫付けた、揉上の長い、若い美しい美少年が、無造作に腰を下して、香りの高いエジプト煙草を燻してゐる。

やがて、妻は静かに起き上つて、足をくずしてだらしなく坐り込んだ。長襦袢の裾がまぐれて、真白な白脛が、盛り上つた大腿までもが、真赤な長襦袢と真赤な絨氈の色からくつきりと白く浮き出てゐる。若い男の眼が淫慾に輝く。と、妻は軽く乳房を抱いた。そして揶揄したく微笑みながら、若い男に絹糸のやうな流脰をリズムカルに送つた。

妻は手を差し延べて私の心臓を掴んだ。そしてそれを手掌に乗せて、彼女の眼の高

さまで持ち上げた。喘ぎながら流れ出る血潮が、彼女の白い華奢な指の間から数條も数條もはみ出して手の甲を伝つて、次第に肘の方へ流れて行く。

「ほほほほ」

妻の痙攣した歪んだ笑ひ声が、周囲の沈黙を破つた。

「蝕んだ心臓！ おゝ厭なこつた！ 御覽なさいな、この心臓を！ こんな心臓ぢやこの夫の情熱のないのも無理もないわね。あたしには恋が必要なのよ。青い月光。甘い囁。高鳴る心臓。おゝ、それに、この腐りかけた心臓は、あたしに倦怠だけしか感じさせないのですもの……。ねえ、あんた、こんな心臓は喰べちまひませうねえ。」

その声に驚いて、眼が覺めた。夢だつたのだ。

×

それから二十分ばかりの後、私は氣を取り直してゐた。そして余りに狂燥的で、エゴイスチックであつた自分自身をいたく自嘲した。駄目だとは分つてゐても、なんとか努力してみるのだ——私はそんな氣になつてゐた。

「栄さん！」私は妻を呼んだ。

「はい。」

優しい私の声に、ばたばたと馳けて来た妻は、先刻の不愉快をすっかり忘れたやうな、

晴やかな笑顔を、唐紙の間から見せた。

妻の顔を見ると、私はこの女を心から労つてやりたい氣持が動いた。そして私の愛情を最も適切な行動に移して、愛撫してやりたいと思つた。

「忙しくはないの。」

「いゝえ。」

「ぢや、あんたも、も一度寝まないか。」

妻は唐紙を開けて這入つて来た。そして私の寢床の傍に坐つた。

「だつて……」

妻の顔にほんのり紅が走つた。娘時代の片影を見たやうな氣がした。可愛い、と私は思つた。

「なにがだつてなのさ？」

「でも、陽が照つてゐるのよ。」

妻は、初心な、はづかしやうな姿勢をつくつて、身をくねらした。

「いゝぢやないか。」

「まア、ほほほ。」

妻は嬉しうに立ち上ると、床の裾の方で帯を解き始めた。

私は蒲団を頭から、すつぽりとかぶつて、「果敢ない幸福だ、果敢ない幸福だ。」

——と、呟いてゐた。

——おわり——

×

×

×

國周えがく女の責場

一生涯に妻を換ゆること四十餘度。居を移すること八十三回。夏は綿入れ、

冬は單物を着たきりの汚れ雀。金が入れば呑んで宵越しの金を持たぬ。發作的

に畫興が起れば、縛られた女の繪を描くのが唯一の道樂という稀代の奇人畫家

國周——彼のサジステイック性は、如何にその生活と苦心を物語っているか——

繪と文

伊藤晴雨

年の暮もいよいよ押詰つた明治廿九年十二月廿九日の夕方、葉研堀のダラダラ市と云われた年の市は両国広小路の南側に羽子板店とメ飾の小屋、親代々かさつ搔や落語の「姫かたり」を思わせる商人の呼び声、昔しを今に

明治初期の憲法發布で安くなると思つた税金も日清戦争後は反対に高くなり不景氣々々の声は東京の町の隅から隅迄行き渡つて、越すに越されぬ年の瀬に羽子板の売れ行きも、縁喜棚の売れ行きも、例年より悪いと互に愚痴をコボし合うも笑止千万。数日の年の瀬に、歳暮の鮭を担いだ丁稚の姿も、今年は稀にも行く事や人の歩みも、忙がしき西両国吉川町絵草紙問屋大黒屋平吉の店先に佇んだのは、其頃俳優の似顔絵描きでは日本一と自らも許し人も許して居る豊島國周事本名荒川八十八という人であつた。

単衣物を重ねた素肌で、繩の様な平グけを締めて居る恰好は、之れが日本一の似顔絵の先生と誰れが見るだろうか。

両国広小路の大平といへば、其頃東京では一二を争う地本錦絵問屋で、現在では電車通りの裏側になつてしまつて、木版画の錦絵など見る影も歩まず、店も跡形もなくなつてしまつたが間口五間の店藏作りのガツチリした建築で月々に出版する錦絵で店頭は一杯の人集りで、今では古錦絵を売る店で稀に見掛ける「橋本周延筆の時代かがみ」や、尾形月耕の「美人名所」坂巻耕漁の能楽百番、小林清親の東京風景の横絵等は若増氏大平の出版で、木版錦絵の出版は大平に限るとさえ云われて居た（其前後に日本橋区室町の秋山滑稽堂と芝の福田熊次郎があるが出版の数に於ては大平に及ばなかつた）

角帯に小倉の前掛けを締めた小僧が飛んで出て来た。

「先生、旦那は奥に居ますよ。お上りなすつて下さい」と云うのは、國周の風俗が余りにも嫌らしく店の不体裁にもなろうという主人思からである。

「じゃあ御免よ」

無頓着な國周は、其儘揚潮から拾つた様な薄減にした下駄を脱いで素足の儘奥へユタユタ通つた。年の市の買物帰りに懷ろの暖かそうな人達が、新版の錦絵や壽娛六が升到袂まれて吊されて居るのを見て、國周の異様な扮りを不思議そうに眺めて居た。

「先生また小大橋（こたいきょう）ですか、失礼だがまだ先のおかみさんですか」

「イヤ先の鼻アは此秋口に出て行つちまやあがつた例の病氣でね、己れの病氣なんだねありやあ仕方がねへよ、無くつて七癖つてえ奴だね、時に旦那、此図柄で一つ昔し風の堅絵

の雲母刷りッてえ奴を出版して見てくれないかね」

国周は懷ろから一枚の版本を取り出して大平の主人に見せたが、其顔には羞耻の色が浮んで居るのは、画料の前借の借金とは違つて「女の縛られた絵を画く人」の特別に把持して居る心理状態なのである。

大平の主人が薄美濃に認められた版本を見ると、それは去年出版した「本朝婦女鑑」の内の、照手姫の松葉いぶしの賣物の一枚刷りよりも高尚な図柄で、十六七の美しい下町風の娘が、柱に縛られて居る結綿の島田髷は壞

れて散し髪になり、髷に掛けた緋鹿の子の布れは髷の根元から蛇の様に娘の首筋に掛つて居て色を入れれば血の様にも見えよう。娘は口惜しさに齒を喰い縛り後れ毛を二三本啣えて恨めし相に母親の顔を見て居る。丈なす黒髪はおどろに乱れて折檻の厳しかつた事も想像が出来る。娘は腰巻を抜けて内股を少し覗かせ、足には紐足袋をはいて居る。両手は勿論後ろへ廻され細い縄が腕に喰い込む程堅く縛られて居る。其側には丸髷に結つた上品な母親が、裾揃きも上品に、朱羅宇の長烟管で娘を折檻しようとして居る図であるが、一見維新前のおふな絵の形式を

備えて居る図取りである。

国周は酒臭い呼吸を吐きながら、「自分の絵に發しての羞しき、それは丁度、小娘が男に手を取られて嬉しさと羞しさと混合して居る様な、表現し得ない複雑な目附きをして、大平の主人の顔を見詰めて居るので腹の中では此版下を出版して呉れるや否やという疑念も交錯して居るのであろう。

大平は冷え切つた茶を一口口呑んで、「国周さん此絵はイケませんよ。こんな無残な絵は売れつ子はありませんよ。第一此頃の人間に、昔しの長絵の面白味なんか判る客

は居ないでしょうよ。先生にこんな事を云うのは俗にいう釈迦に説法ですが、あの長絵という奴は、昔、勤番者が折助目的に出版したもので、明治の御時世にはもう時代遅れというものですから、折角先生の傑作を彫らせても、売れッこはないから無駄だろうと思ひますよ」

大平の主人の云う所は商売の上から、云えば全く無理もない事なので、国周は黙つて老え込んでしまつた。年の瀬を越す金に困つて新婚の若い女房を縛つて



おふな

写生した苦心の版下を、彫刻に廻してくれないとなると、まさか前金を借してくれとは云えないので、壁に馬を乗り上げた様な顔をして考え込んでしまった。

此長絵という物は、昔しは一枚一朱（六銭二厘五毛）位で絵の周囲に輪廊が取つてあつて、丁度掛軸の様に上部には風袋迄描いてあつて、其儘壁等に貼り附ければ掛軸の代用となる。これを眺め乍ら、薄絵の折助や、勤番者の若侍などが不自然な自贖行為をした一種の春画で、一勇齋国芳や五渡亭国貞や初代の安藤広重迄精根を打込んで描いたもので、あぶな風なものもあれば男色を主にした蔭間を小姓姿にして描いたものが多く、これが大正時代に美術的価値を認められて、堂々たる紳士の応接間等に掲げられてあるのを見ては知らぬが佛。知つたらさぞや耻かしかうと思われるが、それは後の咄しで、此頃はまだ昔の生き残りの老人が居たから、長絵がどんな目的で出版されたのかを知つて居る者があるから、大平の主人が出版を躊躇したのも無理からぬ次第である。

国周は其頃としては珍らしい性格の画家で絵筆を握つて居る内に周期的に発作が起る事がある。其発作の起つた時は、縛られた女の絵を描くのが唯一の道楽になつて居る。

併し、次から次へと描かれて行く絵を出版して呉れる様な版元は何処にも居ないし、国周の心境を見透して呉れる女も居なかつた。

国周が役者の似顔絵を描く動機は、芝居の女形を縛るのが唯一の目的で、「モデル」などという名称が一般に知られては居ない頃であつたので、写生にかこつけて娘形の役者を縛つて、賣場の絵を描いては其縛らせて呉れた役者に遣つてしまふので、中には五日も十日も工手間を費した作品を惜し気もなく、只で呉れて仕舞うので、生活を預る女房は不平を言ふと、亭主関白の位と斗りに女房の不平を云つたのをキツカケに、荒縄で縛り上げて、それから事を行うのが例になつて居た。

其頃の生活は月に一円以内で家が一軒借りられ、引越そばも一個八厘という今から見れば嘘の様な値段であつたので、国周は時々引越しをやる癖が附いて仕舞つた。呑むのと女を縛る二つの道楽があるので、懷中は年中ビビイ風車。当時の画家仲間では国周の事をはだか国周と仇名して居た。それは国周が冬の取つ附きに単物を着、夏の取つ附きには綿入れを着て平気で歩いて居る。どうしてそんな事をするのかというと、それには極端な理屈がある、即ち冬の着物を着れば、出るにも入るにも一枚の着た切り雀で汚れようが一切お構いなし。金が入れば残らず呑んで仕舞い二日越しの銭を持たぬ裏店住居の職人氣質は、初鰹が出廻つて堀切に菖蒲が咲く頃になつても、新しい単物を買う銭が無いので仕方なく冬の着物を着て炎天を汗を流して歩いて居るといふ始末。冬は亦冬で、其通り、夏の単物を慄え乍ら我慢をして瀧の川の松葉が

成見になる単物一枚で瘦せ我慢をして居るといふ変つた人物であつた。

「己れの弟子周延の画いた中將姫の雪責だつて、能く売れるというじやあねえか。己れが一生懸命に精根を打ち込んだ図柄だから彫つて下せえな旦那」

「ですがね先生、此頃は芳年先生の一家元発売禁止になる始末ですから、こんな無慘画はどうかと思ひますよ。一番イケないと思ひますのは、自分の娘を母親が縛つて責めるといふ事が教育上よくないと思ひますね。ツイ此頃出た教育勅語が八カ間敷なつて来ましたのは流石に文明開化の世界で御座いますね」大平は四曲に縛られ娘の出版を断ろうとしたが、国周は此処が芸術の生命の瀬戸際と斗り、一步も後へは引かないで引強に押し切つた。

「よろしい成程御尤もだ。おれも江戸ッ児の国周だ。イヤだという物を強いて出版して呉れという方が此奴ア悪かつた。大平さん此版下は持つて帰りましょう。併し大平の旦那お前さんの所で一番金箱にして居なさる美人かがみと時代鑑は、慶長年間から明治迄の時代考証を、歌舞伎座の福地櫻痴先生に私がお願いをして調べて貰ひ、東京中の美人絵の第一と云われる様にしたのは、誰だと思つて居なさるか御承知の筈だね」

「ヘエ」

「先々の事ア判らねえが段々世の中が薄情に

なつて来やがつたが、此道の弟子と師匠のつながりは、また前の物質薄つペラになつちやあ居ねえ……此絵は此儘持つて帰るが、己れの子飼いかの弟子の周延も今日限りお前さんの処から縁を切つて了うがいいだらうね」

大平は乙にからんだ国周の言葉に、開いた口が塞がらなかつた。江戸の敵を長崎で打つという言葉は、人形師から出たという事を聞いているが、師匠の敵を弟子に打たせるといふのは皮肉だと思つたが、美人から美で大平は藏を建てたと、云われて性の明評と利準を得た橋本周延を引つこ抜かれては、大平の拈券に拘ると蒼くなつちまつた。

「待つて下さい先生。こりや大黒屋が悪う御座いました。謝ります。此出来栄ならキツト評判になります。併し先生世間というは妙なもので、女の縛られた絵なんて云うと縁喜が悪いといつて買う者が少ない。大平も商人で御座いますから、ソコは一つ御不承を願ひまして、此荒縄をもう少し隠して頂く訳には参りませんでしょうか」

困つたナア此娘の紫色の振袖に、反対色の黄色の縛を使つた処が味噲なんだが……よろしい。大平さんの出方が出方だから、己れも清親先生のように（出版元の注文により人形を大キク描く）なんて云う事ア書かねえで、氣違ひの娘を、慈愛の母親が折檻する処と断り書きをつけて置きましょうよ」

「丁度夕方です。商人の店先きでは何ンで御

座いますから先生、奥へお出で下さい。久し振りで一杯差し上げます」

店の大坂格子を開けて蔵前の茶の間で、国周は暮の往来の雑踏の下駄の音を聞き乍ら快よく何本かの銚子を空にした。

「時に旦那、亦私は引越したよ。長屋の奴等が五月蠅くつて仕方がねえし、それに今迄の家は田楽で、裏表から覗かれるんで女房の奴をフン縛るのに都合が悪くつて仕方がねえ。始まつたりや一の谷とね、詰らねえシヤレを云やあがつて、女を柱にフン縛つて音羽屋の髪結新三がおくまを戸棚から引つ張り出したあの意気を、そツくり行こうとすると（御免下さい、月番の行事で御座います。先生おで御座いますか）と来やがる。女を縛るのがそんなに見たけりやあ鍛冶橋へ引きあがれと、怒鳴る訳にも行かぬえので、蔵前から橋を越した今度は本所の荒井町へ引越したよ。ナニ北割下水のつき当りで、光林堂という餅菓子屋の筋向の露路のドン詰りさ。隣りが寺の塀だから家の中を覗かれる心配がなくつて、此度こそ落着いて描けると思うんだ。オット丁度おつもりとお出でなすつた」

暮の注進飾りを潜つて、大枚十円の金を懷にした国周は、大平の店を出ると傳に乗つて両国橋を渡り、横網の河岸に其頃評判の小大橋という居酒屋へ這入つた此家の名物は、鱈の刺身で厚く切るのを俗に大橋造り（タイキヨウヅクリ）という様になつたのは、此店から始まつたのだという話である。大平の御馳走酒では、氣が

詰つて甘くないので手銭で呑むのが一番身になると斗りに、磨きの掛つた醬油樽に腰を下して熱燗で飲み始めた時、表通りが騒々しくなつて「女が縛らたて居るんだとさ」「縛られた姿の土左エ門が百本抗に流れ附いてるとさ」と馳けて行く声がする。

新しい年を迎へる爲か、新しい縄暖簾を潜つて入つて来た黒鴨仕立ての車夫は、此家の馴染と見えて、

「旦那、今百本抗の藤堂様の前に縛られた女の土左エ門が流れ附いたんで、見物は黒山の様だ。年の暮だというのに閑人が多いんだねえ。旦那も見てお出でなすつちあ」

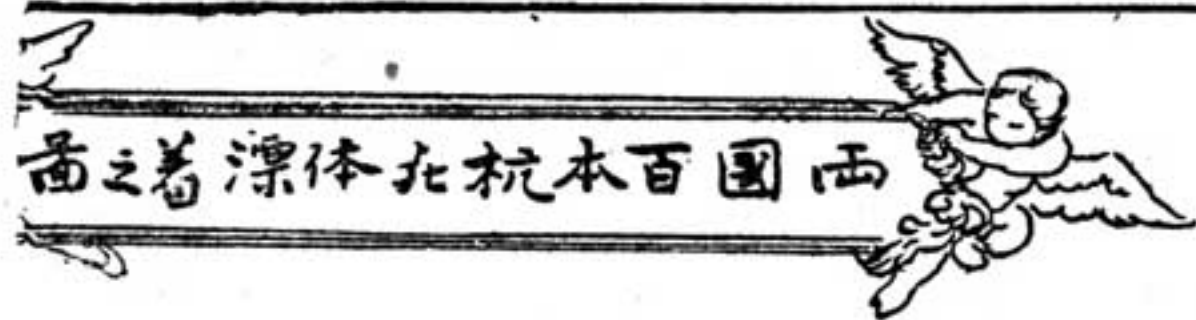
国周はこれ聞いて勘定もソコソコに飛び出すと、富士見の渡しの手前に一杯の人集りがして、藤堂邸の長屋の前にあつた巡査派出所の巡査が未だ検視の役人の来ない爲に、女の漂着死体を常備の錨の綱で繋いであつた。其周囲は、百本抗名物の寒鯉釣りや、甘酒屋や往来の人々で一杯になつて居るのを巡査が制して居る処であつた。

縛られた女が抗の間に浮んで、やや腐爛しかけた女の皮膚は、処処皮が剥がれて赤黒いというより桃色に白味を帯びは肉が現れて居る万筋の袷に凝いの関東襦子の晝夜帯を締め居る。如源と徴かに読める帯の一端が水に浮いて見える女の顔は、卅前後とも見られ、銀杏返しの根が抜けて、半ば解け掛つは鬚は乱れる藻の様に、折からの上げ汐に漂つて、

対岸の柳橋の龜清の屋根に沈まんとする、黄色い太陽の鈍い光りを死体に投げ掛けて居た。

製作意慾がムラムラと起つた国周は、写生の道具の一切を持つて居ないのを残念に、直覺した其頃の横網河岸は文房具などは松坂町辺迄行かねば無いので一寸急場に間に合わなと考へて居る内に検視の区吏がやつて来て女の死体は水から陸へ移された。縛つた縄を解かれてしまつては何もならないと、国周は考へて居たが造作は至つて妙。

播召矢立を差した八百屋が売れ残りの荷を卸して見物して居る。国周其矢立を靜かに抜き取つた。それから鼻紙を出そうとすると、これは残念にも大平で飲んで居て膳の傍へ忘れて来た事に気が附いて、一刻を争うといふより、一瞬を争う急場。目的には手段を選ばずと、八百屋の腰から帳面の紙を一枚むしり取つて吾



を忘れて写生を始めた。巡査の制止に気の附いた例の八百屋は、自分の矢立が見知らぬ異様の男の手に渡つて居るの驚いた。

「冗談しちやいけねえ。そりやおれの矢立だ。オヤオヤ帳面をこんな破りやがつた飛んでもねえ悪戯をしなさんね。こんな土左エ門の絵をかいてやがる。馬鹿野郎ッ」

「まあそうムキになんさんな。八百屋さんお

れはエカキで、あんまり此土左エ門が珍らしいから、新聞に出そうと思つて描いて居たのだ」

「へエお前さん新聞社の方かねそうして其新聞は何新聞だね」

国周ウンと詰つしまつた。出鱈目をいつて引ッ込みがなくなつてしまつた。

其頃両国の葉研堀に有つた郵便報知新聞社は、市内屈指の新聞社であつたが、紙数は恐らく二千を超へなかつたであらう。国周がウツカリ新聞記者だといつたのは、兄弟同様にして居た芳年の弟子の、これも似顔絵では日本一と認められた落合芳幾が、絵入自由新聞の社長として活躍して居た頃の幻想と錯覚からで、其頃の新聞記者といへば文字のある点を除けば、市井の破落戸と何等選ぶ所なき人も尠くなかつたので、国周の服装を見ても別に不思議とは思わなかつたのであつた。

「新聞に出た」「新聞に書かれた」といへば町内の大評判になつて、新聞紙條令何條かの正誤と取消しはあつても、それは單なる一片の辞令に過ぎず、一旦新聞に出たら最期、先入主となつてしまふので、新聞記者には家主は家を借さぬ。酒屋は御用聞きに來ない。というのが当時の実情であつた。無冠の帝王なんていう誇りはあつても、實際はユスリとタカリ花柳界の内幕を素ッ破抜いて、芸妓を無料で転ばせて、飲んだり喰つたりするものを新聞記者の役徳と心得て居た時代で、当時、

第一流の三面記者若葉胡蝶園という人が新場の子安という顔役に、腕を折られた事があつた。

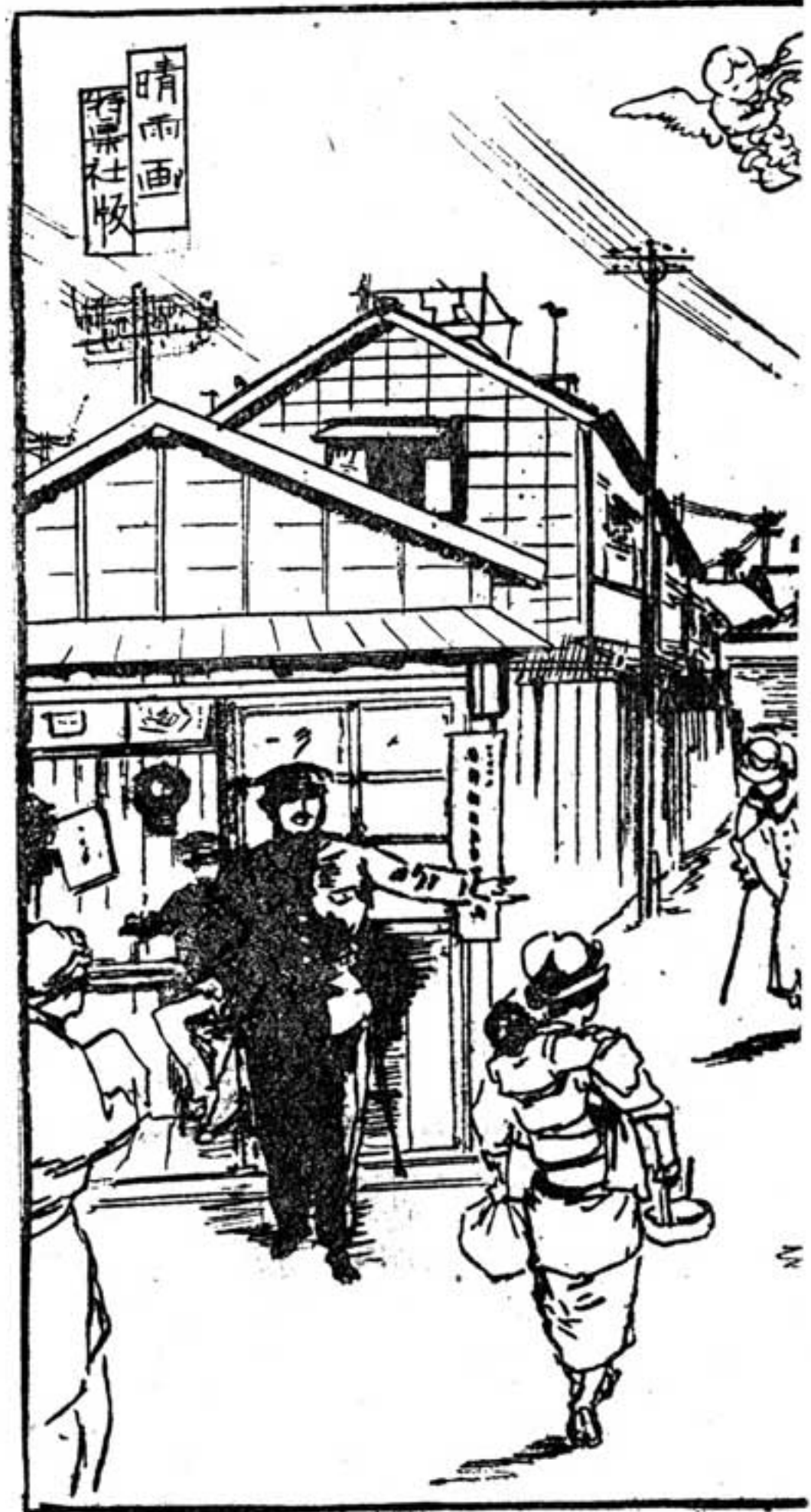
其原因は、新富座へ来た上方役者の中村宗十郎の悪口を云つた爲という事であつたが、新聞社の演芸記者が、役者から貰つた黄白の爲に、

劇評を左右された事は、其頃の方が現代より甚だしかつたに違いない。(現代にはそんなにはないと思う)ので新聞社の人々は、社会からは文字通り蛇蝎の如くに嫌われて居たのだ。八百屋が国周を恐れて居るのも無理はないのである。

「己れは報知新聞の画かきだ。これが明後日の新聞に出れば判るだろう」

国周はやつと自分の心持と自分の筆丸を取り返した様な心持ちになつて、コウ然と大見得を切つた。新聞記者と聞いて群集は皆国周の顔を見詰めた。酒臭い呼吸を吹き乍ら、国周は其スケッチを財布へ入れて逃げる様にお蔵橋を渡つて、椎の木屋敷と呼ばれた松浦子爵の河岸通るかカラッ風に吹かれて歩いて居た。

向島寺島村の秋葉神社前の尾上菊五郎の別



荘の主家(といつても茅葺きの八疊間)で、五代目尾上菊五郎と向ひ合つて飲んで居るのは国周である。

「弘福寺の鐘の音が聞えて来る様ですね。音羽屋さん、皿のやしきのお菊がこんな晩に殺されたんでしよう。私は今日、百本抗で真正に縛られた女の姿を見て来ました。日頃私の描いた梅幸百種の一枚絵に天神下の金羅宗匠の句で「暮るる鐘数へ盡せぬ皿の数」というのがありましたが、井戸に吊されて水に浸つた女の髪の毛描きの発明を、今日初めて致しました。お菊が車井戸に吊されて一旦水の中に入れられて、又、引き上げられた髪の毛はこんな風になつて居りましたよ。」

国周の写生に見入つて居た菊五郎は、ハタと膝を打つて、
「先生いい物を拜見いたしました。今迄私も

度々お菊をやりましたが、一旦井戸へ入つてから髪に水を打つて事は気が付きませんでした。幸い来年の春は歌舞伎座で、成田屋の鉄心で皿屋敷を致しますから、水入の髪を別に誂らへて用いる事にいたしました。其時は先生の写生に依りまして、衣裳も濡た心持ちにして、アンコの帯も水に入る前と水から出た後と二つ別々に誂える事にいたしました。先生の写生は全く天の授かり物で、音羽屋の家の芸として、永く後世に伝へる事に致しましょう」

音羽屋の別荘は、現墨田区須築町都電、秋葉神社前の南にあり、明治四十一年頃迄音羽屋の所有たり、六代目菊五郎が之を某実業家に売つてしまつて今は其面影だに残らないが、當時は其境内に祀られた稻荷の社から、狐火が燃えるのを筆者幼年の頃屢実見した事があつた。これは扱おき国周の事を書いたものは、邦枝完二氏の尾上松助物語の中に、僅に数行記されて居る斗りで、其他には記されて居るものを見ないので、以上の話は筆者の親友であつた、故新井芳宗翁と、先代尾上梅幸氏から筆者が親しく聞いた話を纏めたもので、此女の溺死体の犯人は不明であつた事と、其後国周の強い印象を土台として、描かれた番町皿屋敷の絵巻物は、大正六年頃浅草公園常盤座に出勤中の新俳優水野好美の所蔵となつて居て、筆者も見つた事があつた。

其彩色の精緻なる事と、縛られたお菊の髪の写真の念入りであつた事、お菊の帯の模様細密描写は、嘗て遊就館に一つ歳されて居た下岡蓮杖翁の高嶋秋帆の図と全様歌川風の粹を盡した極彩色で驚く斗りの精密さは全くの道楽仕事で、画料目当てのイカサマ芸術とは、大分の距離がある。此絵巻は水野死亡後、行方が判らなくなつてしまつた。

国周の遺作として著名なものには、梅幸百種、市川団十郎百種などあつて、三枚続きの似顔絵は、国周に限つて居た「団十郎の暫」「菊五郎のいがみの権太」「左団次の丸橋忠彌」など、何れも大首の一人立ちで三枚続き一枚に一人立ちをはめ込んで奇抜な構図と、筆力は現代の写真一点張りの画家から古いと云はれるかも知れないが、力強い作品である。

豊島国周は別号を花蝶樓一鶯齋 豊春樓米翁等と称した。

京橋五郎兵衛町の湯屋、大島九十郎の次男として天保六年に生れ、明治卅三年六十六才にして歿す。豊原周信の門に入りて学び、羽子板の似顔絵及役者の似顔絵に妙を得て、後

三代目豊国の門に入り、双方の師匠の頭文字取つて豊島といった。

歌川風の千遍一律の画風であつたが、役者似顔絵としては此人の右に出づるものなしと称せられた。

妻を換ゆる事四十余度。居を移する八十三カ所と称せられる云々（樋口弘氏著明治幕末期の版画所載）

以上の中に転居の十三回と妻を換へる事四十数回は、実に国周の被虐性が之を然らしめたと見る人が何人あつたらう。

彼が芝居の楽屋へ酒を呑んで入浸つて居たのは、若い女形と親しくして之を縛つて写生する爲で、女房を取り換へたのは、縛られた女房が国周の趣味に合致しなかつたからと見る方が正しい見方である。

何となれば被縛趣味に合致しない妻は、それが如何に貞淑な女であろうとも、国周に取つては無用の人間で、縛られた女から受ける一種の動物電気とでも云える靈妙な気分は、全く先天的なものであつた。

此の趣味の合致しない女が、家庭に居る事は国周に取つては堪え難い苦痛で、此肉体の苦痛其慰は娘形の若い役者との肉交によつてこそ始めて安の途を発見したのであらう。

国周の被縛絵を其当時の出版者がもつと親切な理解を持つて居たならば、国周はそれ程多くの女を取り換えずに済んだのであらうとは、国

周と同業である、梅堂某（香蝶樓と呼び竹内柳蛙の父）翁が、大正二年の秋団子坂の菊細工の木戸番をして居た時、私と親しく語り合つた事から此話の端緒を得たのであつた。

事の序を以て云えば、被縛の画や写真に興味を持つ中年以上の人々は、主とし妻の無理解と、肉体的の缺陷が原因をなして居るので「妻を縛る」事に興味を覚えた国周が、まだ明治時代で正しい見方をする友人も出版者もなかつたので、酒の勢を借りて、若い美しい娘形を縛つて楽しんでゐた国周の心境を知るものは、當時は一人も無く「妙な癖のある酒呑みの国周さん」で終つてしまつたのは、気の毒と云はんか、將又時勢の罪か、私は国周の爲に一掬の涙を灌がざるを得ないものである。

現今のように、勝手思うまゝにモデルを雇つて、自分の好きな形を作りだせる時代から考えると、まことにその頃の責め絵画家の苦心は涙ぐましいばかりだと思はざるを得ない。何度もいうようだが、国周に思う通りの縛りをされても逃げ出さぬ女の協力者がいたら、はたまた、時勢が国周の仕事に理解があつたら、一生を愛人、奇人としてでなく、もつと自由に大膽な仕事が出来たであらうにと、ここでまた、私は先輩国周のために思うのである。

（終り）

×

×



★東西マゾヒズム文學ダイジェスト★

美 し き 苦 痛

——おお、穢らはしい偉大さよ！ 崇高な屈辱よ！——『悪の華』——

三 宅 一 朗

一 ヴァンダの足下に

いぢめられて快楽を感じるマゾヒズムは、相手を苦しめて悦ぶサヂズムの表と裏である。相手は異性であると同姓であるを問わない。ポオドレエルは、恋愛を生体解剖に比較した『覚書』なるほど、恋愛する者は、どちらかが外科手術者で他が手術される者に似ている。

この傾向、または要素は、どんな人にも多少はあつて、それが強く現われたものをサヂストといいマゾヒストといふ。だから、古今東西の文学には、それが男女の愛情を取扱ふものであれば、多少とも、そのどちらかの要素を含まなものはない。一見、そうでないものでも、広義に言えば粹外に出ない。しかし、ここでは、とくに、その傾向の強いもの、はつきりとマゾヒズムを意識して書かれたものだけを云々することにする。

前述したように、サヂズムとマゾヒズムは紙の裏と表であるから、サヂズム文学も受けとり方によつてはマゾヒズム文学になり、被虐文学も加虐文学に受けとられる。西洋にある多くの有名無名の鞭打小説は、まさに、この両方の役目を果しているもので読者は、その嗜好によつて、どちらかを喜んでゐるのである。

しかし、作者が一方的な傾向をもつ者、たとえば

サード侯爵の小説やマゾホの作品などは、それだけの好みだけを強調しているものと見てよい。ここに、はつきりしたサヂズム文学やマゾヒズム文学が生れるが、なかにはボオドレエルや江戸川乱歩などのようなサド・マゾヒズム文学もあることを忘れてはならない。

オーストリアの作家、ザッヘル・マゾホはただ、異性に虐げられる喜びに生き、その喜びを多くの小説に書いた。彼は、ヴァンダの足に踏みじられる快楽を身をもつて書いた。マゾヒズムの元祖といわれる所以である。

しかし、マゾヒズムやマゾ文学は、何もマゾホから忽然と始まったわけではない。遠くはギリシヤやローマ、さらに古くはインドにもあつた。

古代インドの叙事詩『パンチャタンドラ』にある『女の手管』の一節には次のような話が物語られている。

ネンダ王の妃は、痴話喧嘩の末、ひどく良人に腹をたてた。王は、いとも熱心に御機嫌をとつたが、なか／＼もつて、おとなしくならなかつた。彼は彼女に言ふ。

愛する者よ、汝なくば我は生き得ず。

われ汝の足下に身を投げ優しさを請ふ。

すると、彼女は答える。

汝の口に馬銜をかませて我を乗せ、汝を責めて走らせ馬のごとく嘶けば、

われは汝を許すならむ。

これを、王は易々として実行した、とあるが

これは、まさに谷崎潤一郎『痴人の愛』の古代版ともいふべきものである。『痴人の愛』は、あまりにも有名であるから簡単に引用するが、全篇を通じて、讓治なる男がナオミといふ女に精神的物質的に虐げられ、どうしても別れられないイキサツを述べている。——二人は冗談を云つた末に、昔のやうに又馬ごつこをやつたことがありました。

「さ、馬になつたよ。」

と、さう云つて、私が四つん這ひになると、ナオミはどしんと背中の上へ、その十四貫二百の重みでのしかゝつて、手拭ひの手綱を私の口に咬へさせ、

「まあ、何て云ふ小さな女、たゞ、馬だらう！もつとしつかり、ハイ／＼、ドウ／＼！」（中略）

「ぢやあ己を馬にしてくれ、いつかのやうに己の背中へ乗つかつてくれ、どうしても否ならそれだけでもいゝ！」

私はさう云つて、そこへ四つん這ひになりました。（中略）

が、忽ち彼女は猛然として、図太い、大膽な表情を湛へ、どしんと私の背中の上へ跨がりながら、

「さ、此れでいゝか。」

と、男のやうな口調で云ひました。

「うん、それでいゝ。」

「此れから何でも云ふことを聴くか。」

「うん、聴く。」

二 ふみにじられる悦び

潤一郎の初期の作品には明かにマゾヒズムのものが多く、『刺青』以下、多くのものを挙げる事ができる。たとえば、『幫間』の主人公の三平は、梅吉という芸者に惚れていて、催眠術にかつたフリをして多勢の前で虐められて喜ぶ。

——三平は此の様子を見て、吃驚しましたが今更止める訳にも行きません。寧ろ彼に取つては、惚れた女にこんな真似をさせられるのが愉快なのですから、どんな耻かしい事でも云ひ附け通りにやります。

「此処はお前さんと私と二人限りだから、遠慮しないで、もいゝわ。さあ、羽織をお脱ぎなさい。」

かう云はれると、裏地に夜櫻の模様のある黒縮緬の無雙羽織をする／＼と脱ぎます（中略）、折角めかし込んで来た衣裳を一枚々々剥がされて、到頭裸にされて了ひました。それでも三平には、梅吉の酷い言葉が嬉しくつて／＼堪りません。果ては女の与へる暗示のまゝに、云ふに忍びないやうな事をします。

こうした傾向は、坂口安吾の一連の小説にも見られ、ひどい目に会わす女から遁れきれない話は、マゾホの作品以外に、ゾラの『ナナ』、アベプレヴオの『マノン・レスコオ』などがあり、田中英光の告白小説などもその例

にもれない。デヨルヂユ・サンドの『オソヌ・レオニ』やヤコブセンの『ニールズ・リイネ』もマゾヒズム文学といえよう。

なお、潤一郎は、『少年』で子供のマゾヒズムを扱っている。その中の狼遊びのところなどレチフ・ド・ラ・ブルトヌの『ムツシュ・ニコラ』と軌を一にしていて面白い。狼になつた子供が人間の子を食べる遊戯である。

——やがて信一は私の胸の上へ跨がつて、先づ鼻の頭から喰ひ始めた。私の耳には甲斐絹の羽織の裏のさや／＼とこすれて鳴るのが聞え、私の鼻は着物から放つ樟腦の香を嗅ぎ、私の頬は羽二重の裂地にふうわりと撫でられ、胸と腹とは信一の生暖かい体の重味を感じてゐる。潤ほひのある唇や舌の端が、ぺろぺろと撥ぐるやうに舐めて行く奇怪な感覚は恐ろしいと云ふ念を打ち消して魅するやうに私の心を征服して行き、果ては愉快を感じるやうになつた。忽ち私の顔は左の小鬢から右の頬へかけて激しく踏み躪られ、其の下になつた鼻と唇は草履の裏の泥と摩擦したが、私は其れをも愉快に感じて、いつの間にか心も体も全く信一の傀儡となるのを喜ぶやうになつてしまつた。——

ところで、この私なる少年と信一少年は、信一の姉の光子という少女の奴隷になつてしまふ

——三人は何か新しく珍らしい遊戯の方法でも発見したやうに嬉々として光子の命令に服従し、「腰掛けにおなり。」と云へば直ぐ四つ這ひになつて背を向けるし、「吐月峰^{はいづき}におなり。」と



云へば直ちに長まつて口を開く。次第に光子は増長して三人を奴隷の如く追ひ使ひ、湯上りの足の爪を切らせたり、鼻の穴の掃除を命じたりUrineを飲ませたり、始終私達を側へ侍らせて

長く此の国の女王となつた。——

レチフ・ド・ラ・ブルトヌのほうはこうである。ただし、ここに掲げる引用文は、生島遼一訳『性に目ざめる頃』からで、これは『ムツシュ・ニコラ』の抄本をテキストにしたものであるが、同作品を、十分に味わい得るものである。

——いつも暗くなるまでとつておかれる狼、ごつこには、道徳的な意味はなかつた。少くともはつきりしたそれはなかつた。地面に杭を一本植えて、それへ馬の手綱をつぎ如せて作つた長い綱を結びつける。最初の狼を掴んで（大ていみなこれになりたがつた）綱に結びつけ、眼隠しをし、遠ざかる。それから、狼をめがけて、男の子は帽子を、女の子は前掛けや肩掛けの円めたのを、はてはキャミソールやコルセットまでを、投げつける。狼は、その帽子や前掛けや肩掛けの持主をいい当てる。（中略）狼は男の子を、つかまえたときは、殴りつける。女の子だつたら、喰べてしまふ。つまり、随分大膽にかき廻す。（中略）ところが、ときどき十五から二十歳までの男の子が仲間入りをすることがあつた。そうすると色々いかがわしい事が起つた。（下略）

狼ごつこのとき、私の仲よしのエチエンヌ・デュモンが仲間入りをした。これは無邪気そのものの男の子だつた。（中略）この子が最初に狼になつた。かねがね私とマリー・フーアノルを競争していて、このときもマリーを

つかまえようとした。うまくいった。ところが、性格は争えないもので、接吻一つ盗もうとしなかつた。恋人の手と腰を抱きしめるだけで満足した。そのあと、私はわざとつかまえられた。(中略)私の喰べたいのはマリイだつたらだ。エチエンヌが大声で私をいい当てて、私は狼になつた。マリイ・フーアールはすぐつかまつてきた。エチエンヌよりも私の方を好いていたからだ。つかまえたとき、私はこれまでに経験したありとあらゆる肉感を思い起した。ユルジュール・ラモーの肌触りを、刈入れ女ナネツトの燃えるような接吻を、近くはナノン・ゴートランの柔らかい頬の触感を、そうして、これらをも一度栗色髪のマリイにくりかえしてみようとした。喰べるような真似をして、接吻した。接吻させた。手をさし入れて、彼女の太腿のあたりや、まだ成熟していない *concha* をなで廻わした。無邪気な娘はなすがままにしていた。(中略)そこで、マドレーヌをつかまえてから次にゆずることにした。これはなんでもなかつた。この娘はマリイを妬いていて、同じように喰べられたくてむずむずしていたからだ(中略)。私は咬みつくかわりに、何べんも接吻した。(中略)マリイと同じようにしてやつた。おまけに、ナネツトが乳をいじらせたことを思いだして、私はマドレーヌの乳をさぐつた。

三 ひみつの快樂

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌは、人も知るフェ

ティツシスムの大御所で、彼の作品は女性の脚と靴にたいする崇拜讃美で一貫している。これは一種のマゾヒズムであるが、ここでは前述の訳書から一例だけを引用しておくことにする。

——私は、恍惚として、狂おしいまでの愛慾をもつて、彼女の身にふれた一切のものに接吻するのだつた。そして私の慾望はこのため一そうつるばかりだつた。とりわけ、ある日、この上品な婦人がぬいだ肌着類をしまつておかせるところに入つたときには、私は彼女の魅力にじかに触れた品々を夢中で手にとつて、彼女の胸当ての上に、もつとも秘密な蔽いものと思われ

るものの上に、言葉で表わせない……熱狂をもつて、肉慾にけがれた唇をもつて行つた。

この婦人といふのは有名なパラゴン夫人で、当時レチフは印刷所の小僧、彼女は主人の妻であつた。彼の作品は二百数十巻に及ぶが、その代表的なものは、ここに挙げた『ムツシュ・ニコラ』と『ファンシエットの足』、『墮落百姓』、『墮落百姓女』などである。谷崎潤一郎の悪魔には女が洩んで棄てた漢紙を舐める男の話があり、室生犀星の『性にめざめる頃』には女の下駄を盗んで愛撫する話が書かれている。

江戸川乱歩は、その『人間椅子』で、肱掛椅子の中に人間が入れるように仕掛をした職人が色々な人が腰をかける感触を述べているが、やはり一種のマゾ文学といえよう。

——まつ暗で、身動きも出来ない革張りの中の天地。それがまあどれ程、怪しくも魅力あ

る世界でございませう。そこでは人間というもの、日頃目で見てゐる、あの人間とは、全然別な不思議な生きものとして感ぜられます。(下略)

この驚くべき発見をしてからといふものは、私は最初の目的であつた盗みなどは第二として、たゞもう、その不思議な感觸の世界に、感溺して了つたのでございます。(中略)私の様な醜い、そして気の弱い男は、明るい、光明の世界では、いつもひけ目を感じながら、恥かしい、みじめな生活を續けて行く外に、能のない身體でございます。(下略)

あるものは、仔馬の様に精悍で、すらりとした肉体を持ち、あるものは、蛇の様に妖艶で、クネ／＼と自在に動く肉体を持ち、あるものは、ゴム鞠の様に肥え太つて、脂肪と弾力に富む肉体を持ち、又あるものは、ギリシヤの彫刻の様に、ガツシリと力強く、円満に発達した肉体を持つて居りました。その外、どの女の肉体にも、一人々々、それ／＼の特徴があり魅力があつたのでございます。さうして、女から女へと移つて行く間に、私は又、それとは別な、不思議な経験をも味ひました。(下略)

私は、彼女が私の上に身を投げた時には、出来るだけフワリと優しく受ける様に心掛けました。彼女が私の上で疲れた時分には、分らぬ程にソロ／＼と膝を動かして、彼女の身体の位置を換へる様に致しました。(下略)

かやうにして、私の情熱は、日々に烈しく燃えて行くのでした。そして、遂には、あゝ奥様遂には、私は、身の程をわきまへぬ、大それた願ひを抱く様になつたのでございます。――

この奥様といふのが彼女であつて、この小説の主人公は、姿顔こそ見知らぬが、ある奥様を人知れず椅子の中から抱擁し、押しつぶされ、下敷になつて楽しむのである。ルソーの『告白』、一般に『さんげ録』といわれているものは、マゾヒズム文学の白眉とされているが、その中に次のような言葉がある。

――命令的な女主人の膝下に伏し、その命令に従い、お許しを得ることが私にとつては大へん甘美な楽しみであつた。

四 女體の惡魔

ジョゼフ・ケツセルは、フランスの大衆作家の一人で作品も多いが、その一つの『晝顔』が、妙なことに我国では非常に高級な作品のように思いこまれている。その是非はさて置いて、この小説は、医師の妻であるセヴリイヌが、簡単に言つてしまえば性的不満から良人に内緒でアイマイ屋に出入りして売淫する。そのうち、たいていの女がそうである力強い男にたいする憧れが、虐げられる喜びに変わり、不良仲間に墮落させられようとする危機一髪のとときに良人の友

人に救われる通俗小説である。堀口大学訳の同書から引用してみるとしよう。

――かかる間にも、彼女は何時とはなしに、今の彼女の職業上の技巧を、その最も秘められた技法まで学んでしまつてゐた。この修業が、彼女に与へるいきどほりの心と、自分が不潔な道具になつてしまふやうな氣持によつて、僅



温い震えた氣持だけがまだ残つてゐた。この時、彼女が快く感じるものは、実は自らの柔順さを楽しむことにはかならなかつた。(下略)

一言も発せず、男は彼女を所有した。この男にあつては、凡てが、普通の男より分厚に出来てゐた。凡てが、眼の球までが。それなのにセヴリイヌは、はからずもこの男の中に、あの粗野な熱情と、あの獸的な淫佚とを見出して、呻きの声さへ立てたのだつた。それは何のうめきとも、自ら知らぬうめきだつた。今、飽きることなく彼女のうちにその満足を求めてゐるこの男の情慾は、文化的な、巧緻なそれではなく、實にかつて彼女を追うて、このベッドに投じた、あの三人の男達のそれだつた。袋町でみたあの男、淫らがましい首つきをしたあの男、セヌエの河岸で見たあの男、あの三人の男達が、この男に乗りうつつて、その重量で、彼女を押し潰し、その節こぶだつた手足で、彼女を引き裂くばかりに攻めさいなんであるのだつた。セヴリイヌは、かつて知らないわななきが、身内を走ることを感じた。驚異と恐怖の情が、彼女の顔に現はれた。彼女は軽く歯ざしりした。次いで、急に、彼女は平和な、若々しい、幸福げな表情になるのだつた。(下

(略)

彼女はたうとう自分の怖ろしい馳足の到着点に達してゐた。然もこの到着は、同時にまた出發だつた。何ものにも較べ難い高い調子で彼女を揺すぶつたその肉体のよろこびにも増して、この時彼女が感じた精神的なよろこびは大きかつた。(中略)はじめて彼女は、盲滅法に尋ねてゐたそのものを獲得することが出来た。(下略)

シャルロットが、同情して、

——あの畜生みたいな男の相手になつて、あんな困つたでせうと訊ねた時、セヴリヌは答へずに却つて、熱のある笑を見せた。——

この女主人公にマゾヒズムを見ることは容易である。ところが、江戸川乱歩の『芋蟲』の人妻、時子には、明かにサド・マゾヒズムが見られる。彼女は、戦争で両手両足を根元から失つて奇蹟的に生きているキンシ勳章をもっている中尉の妻である。

——それはまるで、大きな黄色の芋蟲であつた。或ひは時子がいつも心の中で形容してゐたやうに、いとも奇しき、畸形な肉独樂であつた。それはある場合には、手足の名残の四つの肉のかたまりを(それらの尖端には、丁度手提袋の口の様に圓方から表皮が引締められて、深い皺を作り、その中心にぽつつりと、不気味な小さい窪みが出来てゐるのだが)その肉の突起物を、まるで芋蟲の足の様に、異様に震はせて、臀部を中心にして頭と肩とで、本当の独樂

と同じに、疊の上をくるくると廻るのであつたからだ。

今、時子の爲に裸体に剝かれた廃人は、それに別段抵抗するのではなく、何事かを予期してゐるものの様に、ちつと上目使ひに、彼の頭の所にうづくまつてゐる時子の、餌物を狙ふけだもの、の様な、異様に細められた眼と、やゝ堅くなつたきめのこまかい二重顎を、眺めてゐた。(下略)

そこには、きりくると廻る、生きた独樂の様な肉塊があつた。そして、肥え太つた、脂ぎつた三十女の不様な身体があつた。それがまるで地獄の絵みたいにもつれ合つてゐるのだ。何といふいまはしさ、醜さであらう。だが、そのいまはしさ、醜さが、どんな外の対象よりも、麻薬の様に彼女の情慾をそゝり、彼女の神経をしびれさせる力をもつてゐるようとは、三十年の半生を通じて、彼女の嘗て想像だもしなかつた所である。

五 被虐の花々

ヘンリー・ミラアの小説は、一種のダダイズムに近いが、その中には、サヂズムやマゾヒズムが混沌としてゐる。全作品を通じて、暗い、うちひしがれた、ペダンチックなモノローグである。その『バラ色の十字架』の第一部『セクスス』を伺いてみよう。

——われわれはタクシーに乗り込んだが、車が走り出すと、突然、マアラは抑へ切れないやうに、私にすがりつき、そして跨つた。車の傾ぎ、よろめくまゝに、二人は齒をがちがちと打ち合せ、舌を嚙んで無我夢中に交つた。

(中略)《夜が明けるよ。マアラ》私はやさしく離れようとして言つた。《待つてよ。待つてよ》彼女は喘ぎながらはげしく獅噛みついて、その時やつと宇頂天になつた。(下略)私の脚の上におかれた彼女の手が、ひそかに私の感情をかき立てるのを感じた。彼女の顔は和ぎ、眼は大きく見開かれて、無邪気に輝いてゐた。《みんな行つてしまつたわ。もう大丈夫》と彼女は言つた。

到底、大丈夫とは思へなかつた。われわれはいま初つたばかりなのだ。マアラ、マアラよ！どこへ私を連れて行かうとするのかい？いよいよ運命を孕んで不気味だが、私の身も心もお前のものだ。だからお前の好きなところへ連れて行くがい。引掻き、踏み潰し、引き裂いて、看視者に私を引渡すがいい。(下略)

二人は仰向きになり生暖い微風に吹かれてちよつと休息した。暫くして彼女は起き直つてヨヂウムを塗りつけた。われわれは煙草に火をつけ、坐つて靜かに話をしたが、やつとのことに行かうと決めた。連れだつて彼女の家の戸口まで行つたが、そこへ着いて互に抱き合つた時、彼女は激しい感情に駆られて突然、私をひつ掴みかつさつた。《まだあなたを帰らせたくないわ》と言ひながら体を投

げかけ、激しくキッスをして寸分の狂ひも見せず私に私の前立の中に手を入れた。今度はどこかに空地を採す苦勞もせず、大きい樹の下の歩道に二人はぶつ倒れた。けれども歩道は寝心地がよくなかった。(中略)ところが丁度、彼女の時の近くに小さな水溜りがあつたので、また少しばかり場所を變へる必要があつた。(中略)私は長いこと彼女にすがりついて持ち耐へた。彼女は突き刺された豚のやうにひいひいと悲鳴を上げ、ぶうぶう唸りながら、又前のやうに、繰返し繰返した。彼女の口はまるで淫蕩的に大きく開いて、眼は痙攣発作を起したやうに引つくり返つてゐた。(中略)彼女は苦痛と快感の入交つた呻き声をかすかに立てた。

ロオレンスの『チャタレイ夫人の恋人』にも暴風雨の中の男女の愛欲行爲の素晴らしい描写があるが、これらは特にマゾヒズム文学とはいへないものの、女の多くがもつマゾヒズムと男の多数がもつサヂズムが醸しだす通有の姿である。

サド・マゾヒズムの徹底しているのは何といつてもボオドレエルであろう。(本稿の引用は村上菊一郎訳『悪の華』による)

われは傷にして力!

われは打つ掌にして打たるる頬!

われは四肢にして引裂く車、
死刑囚にして死刑執行人!

われは己が心の吸血鬼、

——永劫の笑ひの刑に処せられつつも
もはや微笑むことも能はぬ
偉大なる敗残者の一人!

と詩人は歌ひ、さらに吸血鬼ジャンヌ・デュ
ヴァルの足下にひれ伏す。

汝の繻子の沓の下に
艶めく絹の足の下に

わが大歡喜、わが才能、
わが運命をわれは置く。

デヨルデュ・ブランは、『悪の華』の次の詩句をマゾホの陶醉に比している。

熱狂のために刑罰のさらに加はる

従順なる殉教者、無実なる受刑人、

以上、手近のマゾヒズムの文学を順序もなく羅列してみたが、もちろん、その全体が被虐的な作品でないものもある。肝心のマゾホの『毛皮のヴィナス』その他の紹介は紙数がなくなつてしまつた。これは折があつたら単独に解説すべきであると考えたからでもある。なお、これまで挙げたものは、一応、文学としてマトモに扱い得るものを主としたので、春木や好色本中のマゾヒズムを主調としているものは云々しなかつた。大正年間に出た林禮子の『男』などはべつに春本ではないが割愛した。『わが美しき答打女』『鞭打精神』『鞭打美人マルゴ』その他の準春本鞭打小説についても他の機会に述べたいと思ふ。終りに、諸家の作品訳文を借用したこと並びに、敬称等を省いたことを御諒承請ふ次第である。(一九五三・十・卅)

心理的マゾヒスト

マゾヒストは肉体的な苦痛よりも、心理的な要素の方が遙かに強い場合もある。この空想的マゾヒストは非常に多い。

高橋鉄氏紹介のクラフト・エビングの蒐集例によると、

パリに住むある男は、女世帯を訪問する契約をしてゐた。勿論契約だから金銭による雇用関係である。

彼が訪問する時、相手の女主人公は華麗な夜会服を着用し、品位ある態度で彼に接しなうてはならぬ、やがて、二人きりになつた機会に、彼はこの偽上流主人に対して、愛を打ち明けるのである。

だが、彼女をこれを手きびしく拒んで、彼の無礼をとがめる、彼は焦つて彼女に口づけしようと争う。すると、其処にそのために雇つてある家僕が飛込んで来て、彼を手荒く戸外に放り出して口汚く罵倒するのである。

これで彼は充分満足を覚え、この快感を味うために、わざ／＼彼女たちを雇用してゐるのである。この場合、金銭による雇用契約であることは、誰より本人が熟知して居りながら、尙激しい満足を覚え、あらゆる自制を棄切つて、こうした茶番劇を行はずには居られないのである。これは空想の域を踏み出してはいるが、やはり心理的マゾヒストと云つてもよいのではないか。

性技巧としての

サディズム四法

=深夜、かすかな寢息をたてている安江を、目覺ませないように、そつと寢巻の裾をまくり上げ、櫻色している太ものあたり、ろうそくのあかりで、まじまじと、舐めるが如く、見入るような仕草にも及ぶのであつた——新婚の物珍しさに、花嫁の寢息をうかがいながら、真夜中に盗み見た経験はまあるものだ=

武野 藤 介



A.K.

一、囁 る

性医学の説によると、性技巧においては、男性は積極的なサディズムであり、女性は消極的なマゾヒズムであるのが、むしろ、常道であるといわれている。その実証を、両性器の本質的な相違の実体に見ている。自然、性技法におけるサディズムを論じようとすれば、マゾヒズムに言及せざるを得ない。が、何事にも、過ぎたるは及ばずで、男性のサディズムと女性のマゾヒズムこそ、性技巧のノーマルであるにも拘らず、その程度を過すと、これが變態性慾となるのである。

甚だ卑近な例ながら、酒は百樂の長であつても、これも多飲すれば、アルコール中毒症になるようなものであらう。

元来、何人も心得ていることであるが、サディズムがサドの名前から、また、マゾヒズムがマゾッホの名前から出て、どちらも文学上の一つのテーマであつたことは、甚だ興味深いことで、わが国の近代文学においても、古くは、谷崎潤一郎の初期の作品がそれであらう。

が、戦後派文学では、まず、田村泰次郎の「肉体の門」に何人もその第一指を折るであらうが、例えば、彼の「女体溶けるまで」の一節に、

「殺してしまふよ」

「早く殺して」

寢台の上で、彼女は腕をのばして、村上の首

を抱いた。いつのまにか、服もシミイズも脱が
されていた。

「ねえ、早く殺してよ」

「中国じゃ、快死了（クワイスウラ）というん
だよ」

「クワイスウラ」

頬といわず、頸筋といわず、乳房といわず、
腹部から太腿まで、べたべたと熱い男の唇が吸
いついた。そのたびに、彼女の全神経はその部
分に凝集したように、痛烈な感覚を覚えて、彼
女は悲鳴に似た絶叫をあげる。彼女も負けずに
男の身体のうちこちに、噛みつくようにして、
赤い口紅の烙印を捺してまわった。細身の、締
まった筋肉にあらわれた青年の、白い全身には
赤い花が咲いた。刺青に似て、それよりももつ
と鮮烈な色彩だった。

「まあ、綺麗。なんの花かしら？」

「罌粟の花だな。麻薬は、その花から採るんだ
から」

「じゃ、あたしは、罌粟の花園のなかに溺れる
わ」

眞佐子は夢幻の世界に遊んでいる気がした。

本当に、血のような眞紅の罌粟の花が咲きみだ
れる花園で、彼女は裸のまま、爬虫虫のように身
をうねらせた。背骨の髄まで、痺れて、溶けそ
うであった。脳髓が電撃を受けたような感覚に
痙攣をつづけているうちに、彼女はいつかくつ
たりと死んだようになっていた。

即ち、これはスーハー式の誇張である。フィ
クションとはいわないまでも、その表現の誇張
がオナニエ的で、実感を稀薄なものにしてい
る。が、ともあれ、人間の口は、性技法におけ
るマゾヒズムの第一課であることを語っている
のが、右の一節。

人間の口には、唇と舌と歯があり、この歯こ
そは、かかるマゾヒズムの第一の武器でなけれ
ばならない。

アクメを一致させるために、その「無言の合
図」として、夫が妻の舌を、また、妻が夫の舌
を、いずれからでもよろしいが、痛くない程度
に軽く噛むのなども、この第一の武器をマゾヒ
ズム的に利用したものとして、これも一ツの性
技法であろう。

また、接吻を舌まで引き抜かれるとか、或は
「舌の根が抜けそう」などと、その激情を形容
しているのも、サディズム的であり、一方がそ
れを喜ぶとすれば、その痛さを我慢するのが即
ちマゾヒズム的なのである。左に二ツの文例が
ある。

龍膽寺雄の「美人館異聞」の一節。

「こんなものナニよ」

と、婦人の靴下を脱ぐように、引つ張つてと
つてしまったゴム製品を、いきなり、口へもつ
て行つてブーツと膨らまして風船にして、たち
まちパン！と、破つてしまつてカラカラ笑う
と、アベコベに上からのしかかつて、彦吉を抑
えつけ、猛烈に口に吸いついて、もう少しで舌

まで引き抜かれるところだった。その上、幾度
も繰返し強要して際限がないので、遂に彦吉も
かかる場合、男性が常に能動的であらねばなら
ないという宿命に、生れてはじめて呪咀の声を
放つに到つたワケだ。

また、舟橋聖一の「情婦の手帳」の一節。

「僕には、一年ぶりのような気がするよ。キッ
スしよう」

「ダメよ。今、女中さんがくるわよ」

「僕は、我慢出来ないんだ」

と、重井は、炬燵のへりをクルリと廻つてき
た。幸子も、観念して、男の引くままに、頬を
向けた。肉のあつい唇が、こちらへ、生ぬるい
感覚をねじこんできた。襟足と胸とがグイグイ
押され、幅のある重井の骨格にプレスされた。
頬の青髭が、チクチクした。強い吸引力で、舌
の根が抜けそうである。痛いといつて、抗議し
ようにも、声が出なかつた。そのうち、その痛
みが、いつもの陶酔をさそつた。ズルズルと頰
れおち、男のするまゝにぐつたりした。いつも
この手に負かされる。

二、抓る

一体、文学者ともあろう者が、サディズム的
な、強い吸引力のある接吻を、スーハー式の春
本作者のように、「舌の根が抜ける」などと、
イージーな表現をしてよろしいものかどうか。
さて、サディズムの第二の武器は手である。
指と、その爪で、「抓る」というのが戦法。里

見諍の「砂手本」の一節。

裾をおろし、襷をはずして、再び二階へあがつて来たお岸は、ひどく楽しそうな顔つきを、無理に引き緊めて、ぴたりと平面に、膝頭を突きつけんばかりに坐を構えた。

「ちよつとでも嘘いうたり、ごまかしたりしたら、うち、承知せえへんで！」

「わかりました。お岸さん！ 重々あたしが悪かつたんです。あやまります、これ、この通り手を突いてあやまりますから、どうか勘弁してください。ね？ ね？」

さげる頭は、自然と、娘の腿の付根のあたりを叩くことになった。

「知らん！ 何も、うち、あやまられることあれへん。それよか、あの晩、楽屋を出てから、あんたの言つたこと、なしたこと、一つ残らず言いなさい！……黙つていると、これやで！」

「あいっ！ 言います、言います」

「楽屋を出て、どこであの人と落合つたの？ それとも、あの人、楽屋まではいつて行つたの？ まア、言いなさい」

「あいた、あいた、あいた……」

「勘忍か。勘忍なら言いなさい」

澁る度に、腿、腕、胸、仕舞には頬ツペたまで、キリキリと捻りあげられた。

「ふん、それから？ それからどないしてん。」

「さア、はよ云い！」

どこまでも、どこまでも、一步も仮借するところもなかつた。全く同じ構への二階へあがつ

たところからは、何もかもありのままにやつて見せろ、と申し渡された。

「そうか？……」

と、いつか細川は、吊り込まれて、大阪弁になりかかつた。

「だいたい。うち、あの人、身代りになつてあげよらん。さア、何よ！ 何よ！」

こんなふう、女のほうから急ぎ込んでくれるのも、この「抓る」というサディズム的行爲が、一種の前技ともなつていゝからである。が、サディズム的なこの指のはたらきは、単に、「抓る」ことばかりではない。これまた誰しも心得ていることで、例えば、これも舟橋聖一の「老茄子」の一節。

これは旦那とお妾。

今夜は勘弁して貰おうと思つていても、最初から邪慳にもならず、いやいやながらころがされた受信機のようになつて、知らんふりをしてゐるにもせよ、ある程度の感応を示す癖がついていて、それがまた老人には、あらたかな生ほとけをいじくり廻すほどの、法悦随喜である。見え、長い時間をかけ、お茶の湯のお器拜見ではないが、眺めたりすかししたり、両手にかかえてゆるがしたり、

裏がえして、

糸じり

を見

るような眞似をして、たつぷり堪能する。

また、娼婦を書いたものでは、川崎長太郎の

「尻軽女」の一節。

そこで、話の継目が一寸切れた。北見はズボンの膝頭をかかえこみ、息を吸いこむように、暗い中へ眼をとめた。安江も所在なさそうに、腰のまわりの黒砂など、撫でまわしたりしていた。と、北見は、急に太い猪頸をくりくり動かし、あたりの様子をうかがうようであつた。疾には、人影らしいものはひとつもなく、防波堤に並ぶ細い電柱が、線香のような明りをつらねている位のものであつた。彼は、隣りの顔を見ないようにして、女の肩先へ、ぎこちない仕方、両腕をのばした。求めに應ずるやうに、安江は仰向けになり、砂の上に体をながくした。彼はズボンの釦を外しにかかつた。まる出しになつた尻のあたり、ひんやり、夜気が集つたりした。安江もうなずくやうな眼差しで、男のはつきり見えない顔を、斜めにみあげながら、帯のあたりへ白い手を廻わしていた。

その前に、次のような五六行があるのだ。

「深夜、かすかな寢息をたてている安江を、目覚ませないように、そつと寝巻の裾をまくり上げ、櫻色している太もものあたり、ろうそくのあかりで、まじまじと、舐めるが如く、見入るやうな仕草にも及ぶのであつた云々。

が、蠟燭はあぶない。古川柳にも「紙燭して見たを新造くやしがり」とある。しかし、このくらしいの



変態性は、それを「糸じり」に喩えたのも面白いが、人間、誰しも持つてゐるのである。誰しも、持つてゐることなら、変態性とはいへないぐらいのものであろう。

新婚の物珍しさに、花嫁の寝息をうかがい乍ら、懐中電燈で、その「糸じり」を、真夜中に盗み見た経験は、男なら、さして珍しい話でもあるまい。

三、縛る

このサディズムにしても、また、マゾヒズムにしても、加虐といい、被虐といい、それは単に肉体的なことばかりでなく、精神的なそれの意味してゐるとみるのが正しくはないか。即ち、精神的に、相手の「嫌がること」をするのはサディズム的であり、更に、最初のうちはそれを嫌がついていても、いつしか、それが「よろこび」となると、即ち、これがマゾヒズム的になった証拠なのである。また、これがその男女の愛情を深めていくのだ。

さて、性技法における第三の武器は「紐」である。これは「縛る」という行爲。

自作を引用して恐縮乍ら、僕の小説に整形女医というのがあり、その一節。

「何だか……へんだわ。あなた。私に何か飲ましたんじやないさつき、築地のあるところを出る時……酔い覚めの水を一杯飲んだから……」

さすがに、哲子は女医である。それがメチルヘキサビタールを含有した催眠剤であることも



る。

「一遍きり、よ。ね……約束して……」

急激に襲つてきた睡魔。口をきくのも

もう、怠儀な様子。

着換えかけたパジャマもそのまま、男の

手に脱がされてしま

った全裸のそれで、

縁無し眼鏡をかけて

いるのも、何かグロテ

スクなものだった。そ

こらあたりに脱ぎ棄てた

着物。解き散らされた細紐

その腰紐などで、全裸の彼女

は、右手と右脚、左手と左脚を

痛くない程度にいわえつけられた。

反抗もなければ抵抗もない。産婦人科の診察台の上で、開いた両股をかがめたようなぶざまな恰好だった。

(中略)

ふうつ……と眼を覚ました彼女。何だか、夢を見ていたような表情。二本の手足が、縛られていることにも、彼女は初めて気がついた様子で、

「どうして、こんな乱暴なことをしたのよ？」

「……………」

「これじゃあ……あなたに抱きつけないじやな

男の、人格が変つたような、不敵な笑顔であ

「悪いひと……」

「こうでもしなければ、これまでだつて、あなたに何遍、僕は遁げられてゐるか。最後の、どたん場まで来ていて、にがい経験をしていますからね」

察しられた。実は、それをこのビールで、祐吉のほうに飲ませる彼女の魂膽でもあつたから、いわば男に先手を打たれたも同然だった。

「悪いひと……」

「こうでもしなければ、これまでだつて、あなたに何遍、僕は遁げられてゐるか。最後の、どたん場まで来ていて、にがい経験をしていますからね」

男の、人格が変つたような、不敵な笑顔であ

「悪いひと……」

「こうでもしなければ、これまでだつて、あなたに何遍、僕は遁げられてゐるか。最後の、どたん場まで来ていて、にがい経験をしていますからね」

いの？ ほどいて、よ。もう遁げやアしないわ」
「……………」祐吉は、無言のまま、いわえた紐を解いてやった。

「夢ばかり見ていたわ」

「どんな夢？」

「あなたと……………」こうやつている夢よ」

と、どうやら、眼もはつきりと覚めたらしい彼女が、全裸の両腕を祐吉の頸に捲きつけて、下から、やわらかい二つの脚を巧みにからんでくるのだった。

「こんな気持。私、生れて、はじめてだわ。誰とも、誰ともこんなことなかつたわ」

そして、あのお上手な彼女のフレンチ・キッス。男の新しい攻撃。

この「縛る」サディズムを、八木義徳は「人気者」という小説に書いているが、その一節。

「大丈夫よ。瀬口さん、あたしなんにもしないわ」

御橋楽子は子供の頭を撫でるように瀬口の頭を撫でてやった。（このひとは、あたしが処女であることを知らないんだわ）突然、或る残忍な感情が彼女の内部に起った。（いつそ、この人にあれをやってしまったおうか）しかし、一度笑ってしまったあとでは、その感情もあとがつづかな

かつた。彼女は寝巻の紐で自分の両足を固く縛った。それから瀬口の紐で両手を縛らせた。（これは逆かしら？）瀬口に手を縛らせながらふと彼女は思った。男の手足を縛らず、自分の方を縛らせたことが、なんだかひどく滑稽に思われた。彼女はまた笑い出した。笑いながら言った。

「大丈夫よ。安心なさいな。おやすみ、坊や」

四、打



これは痛くない程度に軽く縛るのである。が足二本を並べて縛ってしまったのでは、古川柳の「女房の拗ねたは足を縄にない」で、どうにも埒があかない。両手を、頭の上で縛れば、上も下も、投げだした形となり、且つ、抱きつかれぬ焦慮が女性をじらせて、一石二鳥的な性技法の効果でもあろう。

現に、これによつて、妻の多年の不感症を治療したという人の、打明け話を聞いたことがある。

以上、わが近代文学の中から文例によつて、「噛む」「抓る」「縛る」の三法を挙げたが、そのサディズムもこの程度なら、むしろ、ノーマルと称すべきである。

今ひとつ「打つ」という行動がある。勿論、鞭、バンド、物尺などで打つのではない。せいぜい、これもあとに痕などの残

らない程度に、拳固ではなく、てのひらで撲つのだ。

音だけは大きいが痛くないという程度。

突然、前觸れもなく、あの最中に、音を立てて、てのひらで頬を撲たれて、その瞬間、はッとして、覚醒的に「勇気づけられる」ことは、これまた、誰にも経験のあることであろう。

男も撲つ。女のほうからも撲つ。このサディズム的行爲は、或時はまた、前技的にも効果があつて、小山いと子も「都会の脱落」という小説で「女にしては強い、その痛みは却つて男の情念を掻き立てるに役立つ」と書いている。その小説の一節。

「バカ」

「月代さん」

「寄らないで……」

月代は荒々しく湯を跳ねかえして岩の上に飛び上つた。五尺三寸の一条もまとわぬ女の全裸であつた。道夫は片足を岩にかけて腕を伸べた。ピシッと、月代は男の頬を打った。道夫はよろめいたが、女にしては強い、その痛みは却つて、男の情念を掻き立てるに役立つ。

男は低い呻きを立てながら女に飛びかかった。女はよく撓う足を上げて男の肩を蹴った。その肩を男は女の腿に押しつけた。女は跳ね起きて男の腕に噛みついた。男は別の腕を廻して、女の首を抱いた。女は身を反らせ両足をめちやくちやに踏みはだけて男を蹴りつけた。が、男の腕の傷から垂れる生ぬるい血が、自

分の胸に落ちて黒く筋を引くのを見ると、はッとして急にぐつたりとなつた。それから両腕をあげて男の首に廻し、しつかりと抱きしめた……

また、里見淳の「こんな男」の一節。

甘つたるい鼻声で、

「小父様ア、途中で眠ちまちやあ駄目じやないの。ねえ、しつかりしよう」

「あッ、ああ。ごめん、ごめん」

と、忽ち現実に引き戻される。その現実と幻想との開きが次第に大きく口をあけて、そこから逆落しに地獄へ……年齢と衰弱とがなんの効りもなく、男性を踏み躪ろうとした。そうなるに勝ち誇つた玉枝の女性は、逆に飽くことを知らぬ要求に焦躁り立つて、みるみる、サド風の嗜虐性をさえ帯びだした。

遂に大助は、意識的に……と言うのは、無理にでも幻想的世界を描き出すことによつて、わずかに現実の敗北を救うよりほかなくなつて来た。所詮、手にはいりそうもなく、よしんば、はいつたとしても用いようも知らない阿房のようなもの、心密かに希求する時もあつた。目をつぶつて幻想を手造りする悲しさ、肝心なところで、しつかり……お清！ お清！ と口走るような破綻も生じて、ために、ぶつ、つねる、ひつかくの折檻を受けた。

存外、それが悪くないという過程のあとでは、もうそれなしにはどうにもならない立派なマゾッホの嫡流となつていた。

右の一節は、誰にも、この男女が父親と娘のように、年齢にへだたりのあつたことが肯かれるが、この作者も、「サド風の嗜虐性」「マゾッホの嫡流」と書いていとおりで、年齢差からくる肉体的な不満と焦慮は、また、しばしばサディズム的にしたりマゾヒズム的にしたりするのだ。

が、これとても、それが悪くないという過程という限度が望ましいのである。その程度を心得ている者には、これはまた、一つの性技法でもある。

結いたての日本髪を、もみくちやにして、性的亢奮を求める老人が、僕の親類先にあつたが、その年若い妻は、顔は左程の美人でもなかつたが、いつも綺麗に、日本髪を結つていて、「水も滴る」という形容そのまま、美しく、且つ、豊富な髪だつた。これなども、性技法におけるサディズムである。

が、日本女性に、老いも若きも、洋風な断髪がこのように一般化してきては、この種のサディズムも尠なくなつたろう。

×

×

×

×

×

×

アブノーマル
官能小説

恋に灼かれて

松井 籟子
江川 脩 絵

伊勢湾の眺望が太平洋へとだんだん開けて行く長いバス路だった。

海女が遊女を兼ねるといふ島へ渡る船着場で、大勢の男達が卑猥な言葉を残しておりて行つてしまうと、バスの中はほとんど空っぽになつてしまつた。

団体で女を買いに行く人達も男なら、今、自分が苦しい程の思いで愛している加瀬章も同じ男なのだ。その皮肉を無理にも笑はうとしたが、志津子の顔は能面の様に動かなかつた。

夫のある身を加瀬に抱かれることと、妻のある男達が一夜のなぐさみに陽に焼けた肌を抱くのと、どつちが罪深いだろう。加瀬と志津子は肉体を結び合う前に、心と心で手を取り合つた。



けれど愛するということは、ただ心と心で手を取り合っているだけですむことではなかつた。肉体を持つ人間の悲しさは、お互いの肉体の奥底まで、愛情を語り合わなければ承知出来ないのだ。明日になれば顔も忘れてしまう旅の女とちぎるのも生理なら、愛している者同志が、より深くお互いを知ろうとするのも生理だつた。それは人間の喜びでもあり、悲しさでもあつた。

「志津さん」

加瀬の手が志津子の手をそつと握つた。

「今日は考えこまないつて約束だつたぢやないか」

「そうだつたわ、ごめんなさい」

「今日泊る志摩のホテルは、蠣の料理がとてもおいしいそうだよ、志津さん、食べすぎるとあつたがことだね」

加瀬はわざと志津子の気を引き立てるやうに、明るく言つた。外国で蠣を食べという言葉は、日本でとろろを食べるという言葉に似た意味を持つのだと、前に聞いたことがあつた。いつもの志津子なら

「覺悟はいい？」

とでも冗談めかして切りこむところだけれど、今日はどうしても気が重かつた。

マネキンという職業柄、志津子はよく地方へ出張した。夫は今日も出張だと思つてゐる。

「大変だね、風邪を引くなよ」

そう言つて送り出してくれた夫の言葉が、まだ耳もとに残つてゐた。

志

津子

の夫は

童話を

書いて生

計をたてて

いるが病弱だ

つた。志津子が

嫁ぐ頃は病弱がむしろ

取得で、それ故にこ

そ戦争にかり出されもしな

かつたのだが、終戦後の変動で

故郷の田地畑もほとんど失い、そ

れまでは送つてもらつたお金を反対に、故郷の

両親へ送つてやらなければならなくなつた時、

志津子は安閑と家について家計のやりくりをして

いられなくなつた。といつて女学校は出ていて

も、そろばんも出来なければ、人のものを縫う

程の腕もない志津子は、ただ美しさを特技の一

つに数えるより道がない。マネキンは美しさ故

に選んだ職業だつた。

「この向うに波切の燈台があるのだが、ここか

らは見えない。あしたバスで海岸を廻つて行く

のだよ。いつ行つても誰かが絵を画いてゐる。

絵かきの好きな風景だよ」

加瀬は窓から外を指さしたが、田舎道のさき

は藪で切れていて、そのさきに海があるとも見え

なかつた。

「偶然知つてゐる奴に合うかもしれないね」

加

瀬はいう。

加瀬も又画家だつ

た。しかし画家というよりは商業美術家という

のだらう。志津子がマネキンとして雇われてい

る成る化粧品会社の広告を書いてゐた。加瀬の

書いたポスターの女の顔が、志津子に似てゐる

と噂されながら、加瀬の志津子に対する愛情は

ひかえ目だつた。

宵から雪になつた道を、加瀬の傘で送られて

帰えつたこともある。会社の宴会で、飲めない

お酒を無理にしいられて困つた時、加瀬は自分

の情婦の様なかばい方をしてくれたこともあ

る。人妻と知られていても、女の職場で誘惑の

手は多かつた。ただ加瀬の情婦という偽装が僅



かに志津子の身を守つてくれるのだ。加瀬はそれを承知して、志津子を自分の翼の下にかばつてくれながら、手にさえもふれようとしなかつた。知り合いの製菓会社からビタミン剤を手に入れて、志津子の夫にと、心をくばつてくれる加瀬に、志津子はいつか悲しい恋心をいだくようになったてしまった。

加瀬にも妻がある。志津子には夫がある。育ててはいけない恋だつた。

ただ、男と女が淡々と愛し合うには、加瀬も志津子も若すぎた。健康すぎた。体中にたぎる血がはけ口を求めるのは自然の摂理だつた。知性と本能が戦い合つた時、奔流の様な恋情は、知性の堰がかえつて勢を強め、その堰を押し流す結果になつてしまった。

二

今日こそ別れよう。

これ以上深くならないうちに、別れなければいけない。

何度そう思つたことか。

しかし、志津子の体の奥の秘密の扉が、一つ一つ加瀬の手であけられるように、彼女は女の体の複雑さをはじめ知つた。一つ開いた扉の向うに、まだ知らない部屋がある。その部屋の扉が開くと、まだそのさきに部屋があつた。加瀬さえ底知れない泉の深さに驚く程だつた。愛情の泉は渾渾と湧いて、涸れることがなかつた。加瀬の腕の中で、しやつくりするような痙攣

を、じつと彼の胸に頬をつけて静かに受けながらも、志津子はもう今度こそ加瀬に会うまいと思つた。溺れて行く自分が恐かつた。不死鳥の様に新しく新しく生き返える自分の女体が恐かつた。自分の家庭も、加瀬の家庭も、めっちゃめっちゃに壊さなければならぬ日の来るのが恐かつたのだ。

志津子は女の体の奥底で、加瀬の露に濡れて開いていく花が、彼女の知性を花の芯にとかしこんで見えなくしてしまふように思われてならなかつた。夫では咲くことの出来なかつた花だつた。女の誰でもが咲かせることが出来るとは思えない。同じ加瀬の露を受けても、加瀬の妻はそれ程美しい開花をみせなかつたかもしれない。志津子の花のつぼみは加瀬を迎えるべく作られた花だつたのか。その偶然は知性に遠い世界だつた。男と女が、体と体で、求め合う相手にめぐり合つたとしたら、死ぬまで離れられなくなつてしまふのではないか。

志津子は恐れた。知性で割り切れない感情を恐れた。手放して溺れてしまふ寸前の恐さだつた。

「加瀬章、同志津子」

ホテルの帳場で加瀬はペンを走らせた。

志津子は悲しくそれを見た。

別れよう。今日の旅行を思い出に別れよう。

風呂場で志津子は加瀬の体の子供の体を洗うように洗つてやつた。タオルでこするにはやわらかすぎる皮膚は、手の平に石鹼の泡を立てて、

丹念に洗つた。皮膚の皺の間の僅かな垢もおろそかにしないように、指の間でもむようにして皺をのびした。口にふくんでもみた。加瀬の体は子供の様に、卒直に志津子の愛撫を喜んだ。志津子は又、その卒直さが、自分の体にひびくように嬉しかつた。すると、彼の体に異常な執着を感じ、何年か前の或る女の犯罪を思い起させた。志津子を支えてくれる知性がくずれ去つたら、その女のふんだ道に迷いこまないとどうして云えよう。

「先生……」

と、志津子は会社の人達が加瀬を呼ぶ言い方を、そのまゝ愛称におきかえてそう呼んだ。

「先生、私達、やつぱり別れた方がいいと思うわ」

一つ敷かれた寢床を前にして、志津子は溜息が言葉になつたように言てみた。

「今日はやめよう、その話は……」

「でも、いつまでもこんな関係続けていられないし……私、これ以上深くなるのこわいの」

「そんなことを今日こまで来て言い出すくらいなら、来なければよかつたんだ」

「いいえ、今夜きりの夜を、私、静かに二人になりたかつたの」

「一緒に寝て、今夜きりで別れられると思うかい？」

そう言われると、志津子も心許なかつた。

「でも、そうしなければ……。先生の家庭をこわすわけにもいかないし、私が夫から離れた

ら、夫の両親は食べる道がなくなるのですもの……」

自分に言いかけ言葉だつた。

加瀬はだまつてしまつた。そして、しばらくたつて、

「君をこれ以上苦しめるのはいけないことだね。君のいう通りに別れよう。今日一緒に寝たらその決心がぐらつく。僕は起きているから、君さきに寝なさい」

そう言ふと、志津子に後を見せて、次の間へ去つて行つてしまつた。

障子でへだてられた次の間は一段低く板張りで、洋間になり、卓と椅子がおいてある。加瀬はそこで本を読んでゐるらしく、ページをめくる音が意外に大きく夜の空気を伝つて来た。

硝子窓の向うに月が昇つていた。

志津子は電気を消した。加瀬の影が障子にうつてみえた。

窓の外の英虞湾は山の中の湖の様に静かで、波の音もしなかつた。

自分から別れると言ひ出しながら、男が別れる決心を見せると、志津子の体の中で血が反抗した。

「先生」

志津子は呼んだ。

「ここへいらつしやい。何にもしないで一緒に寝ましよう。風邪引くわ」

加瀬は志津子の横へ身を横たえたと、天井を向いて、静かに煙草をくゆらせた。月の光の中

で見るその横顔が彫りが深く、愁いをふくんで美しかった。

「先生」

志津子は加瀬の頬に唇をあてた。

「先生、別れられる？」

「もう何もいうんぢやない。ただ僕は今、君という人をほんのわずかの間でも知ることが出来たのを感謝しようと努力しているのだ。知らないより知る方がよかつた。その喜びが大きかつたのだから、この大きい悲しみにも耐えなければいけないのだと、自分に言いきかせているんだよ」

志津子は急に別れるのが厭になつた。しかし彼の家庭と、自分の家庭をかえりみる時、二人が結びつくのはあまりに多難な道だつた。

「死にたい。私、このまま死んでしまいたい」

志津子はたわむれの様に紐をほどくと、自分の首へ巻いてみた。

「ねえ、先生、こうしてしめて殺して」

「馬鹿。死ぬくらいなら壁をつき破つて一緒になろうと何故思わないのだ。僕は今、考えていたんだ。君は自分で自分に酔つてゐるのぢやないか。僕を愛しているというの何か錯覚ではないのか……」

志津子にとつて残酷な言葉だつた。加瀬への慕情に身をすりへらす程苦しんでいるのに……

「いいわ、私、ひとりで死ぬ」

ふつと反抗したくなつた。

自分の首へ廻した赤いしごきのさを床柱へ

くぐらせて輪にして両手でしつかり持つたまゝ、自分の体を下へずらした。ぐい、ぐいと咽喉がしまつて行く。力綱にしがみつく様にしごきのしを握つたまま、体をふとんからすべらした。頭がガンとして、つぶつてゐる目の奥まで真暗になつていくような気がした。

「馬鹿！」

加瀬の手が志津子の頬にとんだ。

それを反動にして、かえつて志津子の体に力が加つて、咽喉はしめつけられた。

「よせ！」

加瀬は志津子の体を抱くようにして、上へあげた。咽喉へくい入つてゐる紐がゆるんだ。

「いや！ 死ぬの！」

志津子は加瀬のがつちりした腕が自分の体にかゝつてゐるのを快く思ひながら、そう思うことに反撥した。

「冗談もいいかげんにしろ！」

「本当に死ぬの、私に死にたいの！」

加瀬は志津子の手をとると、彼女の体を転すように背を向けさせ、両手を彼女の背中ですっかり一つにおさえた。

「あばれると縛つてしまふよ」

「いいわ、縛つて！」

志津子の体の中の血がつかみ殺して欲しいと思うようにあばれているのだ。

加瀬は志津子が首へ廻してゐたしごきで、後手に縛つた。そして邪儉に彼女の体をゆすぶつた。



「どうしてそう僕を困らせるのだ」
 「知らない。私のせいぢやない」
 「ぢやあ、誰のせいだというんだ」
 「私の虫のせいでしょう」
 「よし、ぢやあ、その虫をつかみ殺してやる」
 加瀬は志津子の肌を五本の指で握りつぶすようにつかんだ。肩といわず、胸といわず、腹と

いわず、肌の下にうごめく虫を、ひねりつぶそうとするようにひつつかんだ。
 「あつ！ ううむ！」
 志津子は身をのたうつようにして呻いた。白地に紺で大きく菊の狂い咲きしている浴衣が、志津子の肌からすべるように脱げた。赤く指の痕が彼女の皮膚に地図をえがいた。

ちり合わせて縛つてしまおうと
 「いいかい、この膝で僕達のことを占ほう。どうせ道にはづれた恋なら、悪魔に聞いてみよう。悪魔が喜びそうな占いをして……」
 そう言うと加瀬はマツチをすつて、マツチの頭の硫黄がポツと燃える瞬間に、志津子の腿へ押しつけた。

「そんなに別れたいなら、あいそがつくようにしてやろう」
 加瀬は押さえていた激情が急にはけ口を求めたように、血走った眼になった。
 志津子を引きづるように床柱の前へつれて行くと、彼女の肩まである長い髪の毛を、床柱へまわして結びつけた。髪の毛が左右に引張られて、志津子の目は鬼の面の様につり上った。浴衣は後手に両手が結ばれているので、脱げ落ちもせず、乳房をあらわにして、手首にまつわりついていた。その裸の胸へ別の紐を廻して、柱にくくりつけられ、膝をくずして、志津子は柱に背をもたせかけた。加瀬に縛られることは、加瀬の愛情にがんじがらめにあうのに似て、不思議な陶酔を感じられた。
 しかし加瀬は彼女の膝をきつ

「あつ！」

と、膝を引こうとしたが、しつかり縛られて
いる体はいうことをきかなかつた。

ジジジと皮膚が焦げてマツチの火が消えた。
火傷した腿へ突きさすようにそのまゝマツチの
軸が立てられた。

加瀬は二本目に火をつけた。

「ううつ！」

と志津子は歯をくいしばる。

二本目も同じように、志津子の白い腿に黒い
汚点を残して、軸だけ立てられた。

二本のマツチの軸が、サンドイッチの白いパ
ンの山につき立てられた楊子のように、志津子
の盛り上った太腿に並んで立てられたのだ。

「ああつ！ ああつ！」

と、志津子は胸を波打たせて、痛さをこらえ
た。背がカアツと熱くなつて、油汗が浮いた。

加瀬はその二本のマツチの軸へ同時に火をつ
けた。

「熱い！」

志津子は空気を切るような悲鳴をあげかけた
が、加瀬の唇が、その悲鳴を吸いとつてしまつ
た。加瀬は柱ごと志津子を抱いて、両手が志津
子の乳房をしつかり押さえながら、ピタリと唇
にふたをするように自分の唇を押しあててい
た。

二人の荒い呼吸が、お互いの口のわきをくす
ぐるように小さな風になつた。

志津子の腿で二本のマツチは黒く芯を残し

て、まつわりつくように重つて倒れていた。

三

別れると言れたことが、言葉でかえる前戯の
様な結果になつた。志津子の体が二人の人間の
様に分離して、肉体が心にこれみよがしに加瀬
を抱いて放さなかつた。加瀬の体の血が志津子
に流れ、志津子の血が加瀬に流れ、血液が滔々
と二つの体を一に循環するかと思う時、志津
子は「ああ、又駄目だつた。到底別れられない
のだ」と、悔いと安堵と入り交つた氣持を味う
のだった。

しかし、和具から波切へ廻つて、伊勢から乗
つた電車が大阪へ近付くと、待つてゐる夫を思
つて心が暗く沈んでいった。

混み合う改札口を出ながら、「さよなら」と
そつと握り合つた手の感覚が、玄關の扉のノッ
プをまわす時にもまだ残つていた。

「疲れたろう」

何にも知らない夫にやさしく言われると、志

津子は心の苦しさに耐えかねた。

病弱ゆえに夫婦の夜の営みも、間遠くなつて
いたが、ベットを二つ並べた寢室へ入ると、夫
はいつになく

「よかつたらこつちへおいで」

と、自分の枕をずらせた。

「あなた！」

志津子は思い切つて言つた。

「別れて下さいませんか」

夫はぎくつとしたが

「そりやあ、僕の様なものに、今までよくして
きてくれたことは感謝している。しかし急にそ
んな……」

「私、あなたに感謝されるような女ではないの
です。私、あなたに不貞なことをしてきたので
す。別れて下さい」

「志津子、何をいうのだ！」

夫は志津子の肩をわしづかみにして、じつと
見すえた。

「すみません、許して下さい」

志津子は夫の目をさけるように顔を伏せた。

「本当なのか、え？ 本当なのか？」

肩においた夫の手がふるえた。

志津子はだまつてうなづいた。

「貴様……」

夫は手をぶるぶるとふるわしながら、志津子
の肩をつかんでいたが、いきなり、彼女を投げ
るようにうつちやると、よろける志津子を蹴つ
た。

「あつ！」

と言つて、志津子は床へ這うように手をつい
た。その背や腰を夫の足は犬でも蹴るように蹴
つたりふんだりした。

「俺は今日まで、お前にすまない、すまないと
どれ程心苦しく思つて来たことか。俺はお前を
天使のようにさえ思つていたのに……そうか、

お前はそんな女だつたのか、フフフフ」

夫はうつろに笑つた。

「すみません、私が悪いのです。気の済むようになさつて下さい」

志津子は言つた。夫の心の苦痛が自分の痛みのように感じられた。いつそめちやめちやに虐めさいなまれる方がいい。肉体の苦痛の方が心の苦痛よりまだ耐え易いと思つた。

「そうか、お前は天使ではなくて、ただの女だつたのか、フム、ただの女どころか、獣と同じだ。鳩さへ夫婦は操を守るというのに、お前は犬だ、猫だ。よし、人間だと思ふから腹も立つ。犬だと思はう。猫にしてやろう。着物をおぬぎ」

夫は自分で自分を嘲るような冷たい笑いを口辺に漂わせた。

「裸になれと言つてゐるのだ」

志津子は素直に裸になつた。それで夫の気が済むなら、自分の心も少しは軽くなる。

しかし、下ばきまではどうしてもとれなかつた。

「それもとるんだ」

夫は命令する。

志津子は生れたままの姿になつた。

「床へ寝ろ」

志津子はベットとベットの間の床へ、小さく座つた。

「寝ろと言つてゐるのだ。こうして寝るのだ」

夫は志津子の体をつきとばすように床へ転した。そして、彼女の手と足を別々にベッドの脚へ縛りつけた。志津子は床の上に全裸の姿をか

くす所なく上に向けて、大の字に動けなくされてしまつた。

「お前は犬なんだろう、それとも猫か？動物でもこうされると何か感じるのかい？」

夫はベッドに腰をかけて、足の指で志津子の乳首をもてあそんだ。

「動物には足でするのが頂度いだらう」

そう言いながら、片足で乳首を片足で女の



大切な場所をこすつた。

志津子は恥しさに身をよじつたが、夫の足をどける術もなかった。床に寝かされて、足蹴にされても、女の体は楽器の様に音をたてる。

「お前は動物なんだから、なにも俺に別れてくれなんて言わなくてもいいんだよ。俺は妻だと思ひ、人間だと思ひから抱きもした。これからお前のおときは動物にまかせよう」

夫は皮肉つぽく言う、志津子をそのまゝにして外へ出て行つた。

志津子は天井を向いたまゝ、床へはりつけになつたように動くことも出来なかつた。

夫はしばらくすると、片手に猫を抱き、テリヤの鎖を片手で引きながら戻つて来た。テリヤを志津子の足を縛つてあるベッドの下の方に脚へ鎖でつなぐと、今度は、志津子の乳の上から腹へかけて、タラタラと白いねばつこい液体をたらすのだつた。甘い乳の匂いが志津子の体から立ちのぼつた。

ピチャピチャと音をたてて、猫がそれをなめ出した。すると、犬は怒つて呻る。

夫は志津子の足の方へも濃いミルクをたらし、足の指の間にも、足の裏にもべつたりと白いミルクがつけられた。

ピチャピチャと、足の方から犬が志津子の体をなめ出した。

「あつ！ ううつ！ ううつ！」

こらえかねた呻めき声が志津子の唇を洩れた。

猫は時々

犬に向つて

背を丸くして、志津子の肌へ爪を立てる。しかし、いつ

も一緒に飼ひ慣らされている犬と猫は、時々お互いを牽制し合うが犬の鎖が猫までとどかないので、喧嘩にもならなかつた。それよりも、ザラザラした猫の舌で乳房をなめられ、やわらかい犬の舌で下半身をなめられて、志津子は体中の血管の中までくすぐられるような氣持がした。



「もう、駄目、許して、ああ！」

志津子は泣くように訴えた。

「ああ、ああ！」

泣くような笑うような奇妙な呻めき声がミルクの香の中に溶けていくのを、天井の螢光灯が鬼火の様な光でつゝんでいた。

(終)

罪なボール

Nと云う二十七歳の青年。昨年私大を卒業して、家柄にも学歴にも不足はない好青年だが、某大会社に就職後半年足らずで、辞職してしまつた。

原因は神経衰弱と云ふことになつてゐるのだが、実は突然彼を襲つた、不思議な倒錯心理がその真因だつたのだ。

或日彼は同僚たちと一緒に、屋上で華かにバレエに興じてゐる女事務員たちの仲間に入つた。彼等は朗かにこの軽いスポーツを楽しんでいたが、彼が日頃からひそかに愛情を抱いてゐる、ある美しい女性がパスしたボールが、鋭い孤を描きながら、真正面から彼に向つて飛んで

来た。

ハッと思つた瞬間、彼は軽い目まひを覚えて体がすくみ、ボールはモロにその顔面にぶつかつたのだ。彼はヘタ／＼と坐りこんだ。同僚たちはの間抜けぶりに声をあげて笑つたが、彼は可笑しそうに身をよじつて笑つてゐる、その美しい女性を下から見上げたまゝ、暫く起き上れなかつた。この時、彼は云ひ知れぬ被虐の快感を知つたのだ。

それから、その女性がペンを持つていれば、そのペン先で自分の全身を突かれることを空想し、雨傘を持つていれば、その傘でメッタ打ちをされることを、ひそかに願つた。

遂にはそうした妄想が昂じて、辻褄の合はぬ言動をするようになり、とう／＼会社にも居たゝまらなくなつてしまつたのである。

鞭打ちの歴史

むりやり、わが家の屋根裏に引きいれて、いやがる女をピストルで脅迫して、両手をうしろに縛りあげ、ビシビシと鞭打つた。女が血だらけになると、その傷のところに膏薬を塗りつけて縛がしておいて、こんどは翌日にはナイフでさんざんに傷をつけて、又膏薬を塗つた——

平野 威馬雄

濱 田 稔 画



「鞭打ち」という語で言い表わされている『サ
ド的』な享樂は、精神的なものと肉体的なもの
の二つに分けて考えられる。

じらす、いじめる、悲しませる、身も世もあ
らぬ心地にさせる——ことの度合いは、複雑な
精神的なトレーニングによつて濃くなる。

そこまですると、生理が必然に関与してくる
——そして、サディズムは、一応、完成するの
である。

しかし、サディズムは、『鞭打ち』によつて
代表されるような、そのような単調、原始的な
オルガニズムではない。

サディズム(鞭打ち)は、クラフトエビング学
派(?)の言うような、一種の「変態」ではあり
得ても、「先天的な」、「精神病的な」、「偶発的な」
行為ばかりではない。

現代のサディズムは、多かれ少なかれ「知性」
と「美意識」が関係することによつて、その本
質的価値を一段と、はつきりさせて来たのであ
る。

中世紀の封建時代、僧院ヒエラルキーの時代
における文字通りの「鞭打ち的サディズム」で
は、現代のインテリジェンスが満足しないので
ある。

ピエール・ラファイエットは

「正常位が行き止まった所に、体位上のサディ
ズムが芽を組む」と、言っている。

「サディズムは、対等の愛からは生れない。サ
ディズムは、たゞに相手の肌に痛みを与えるこ

とからも生れはしない。すべて、その底を流れる下剋上の微妙な心理に依存する」と、プティジャン・ド・ゴナールが声低く唸っている條理を記憶にとめておくのも誤りではない。

ここで云う下剋上とは、社会的地位が下の者（主として男性）が、——例えば人夫、出前持、乞食、浮浪者などのような——が、金持ちの娘を、或いは、醜男が美女を、或いは年令の遙か上の男が遙か下の女を——というように、サドの側がサドられる側の下位にあり、腕力や体力丈けは、すべての点で、優れていることを條件とする——このような場合の性的交渉は、事前において環境的にも関係の上においてもサディズム的なお膳立てができていくものである。

サド侯のように、てんで頭から女を憎悪したのでは、淫虐ではなく、残虐ではない。

「愛する者を得られない爲に苦しむことから、その復讐として女性を憎んだ」といわれているサドの場合は、〃鞭打ち〃行事のごく単純な形式ではない。たとえ、次のようなデータが事実としても。

一七六八年に起つたあの馬鹿げた事件、つまり、娼婦ローザケラー虐殺事件の真相は、事件そのものがもう、一つの伝説化してしまつたため、確実な事は知るよしもないが、なんでもこのケラーという女は、すばらしい肉體の美人だつたらしく、金にこまつて時おりサドのところへお小づかいをもらいに行つた。するとサドは、「よしよし、何とかしてやろう。ゆつくり

遊んでおいで」と、むりやり、わが家の屋根裏に引き入れて、いやがる女をピストルで脅迫して、両手をうしろ手にしばりあげ、ピシ／＼と鞭で打ちはじめた。

女が血だらけになると、その傷のところに膏薬をぬりつけて転がしておいて、こんどは翌日にはナイフでさん／＼に傷をつけて膏薬をぬつて部屋を出て行つた。

女は、のちに、窓から救い出されたといわれている。サドの行状記は、また角度をかえて、ケラーを未亡人、しかも若くして水もしたたるような未亡人だつたと記している。高級な売春によつて生計を立てていたが、ある時、サドは、この婦人に話しをかけ、馬車にのせてわが家へ連れてきた。自分の部屋にはすでに家来によばせておいた売春婦が二人きりで、美々しくよそおい、御馳走を山のようにならべたテーブルのところで、飲み且つ歌つていた。

この部屋で、未亡人ケラーは、いきなり、猿ぐつわをかまされ、サドの家来から血の出るほど鞭打たれ、それから他の二人の女は、のみたわむれ、あられもないしまつとなつた。ケラーは、そのすきに命からがら逃げ出して、官憲に訴え出た。サドが酔いしれて正体もなく『酒と血』のまん中にたおれているのを、捕縛に向つた人は発見したという説もある。

さらに異説もある。パリーの、とあるさびしい街路を歩いていた人が、ある家から、弱々しい女の唸り声がきこえたので、そこへとびこん

でみると、ある小さな部屋のテーブルの上に、女が蠟のような色をして、しばりつけられ、腕の脈管を切られて、血がだらだらと流れおち、胸も傷つけられ、血だらけになつていた。わけをきくと、この婦人はサドに誘ひこまれて、晩めしを一しよにたべてから、サドの家来の手でこうして縛りつけられ傷つけられたと云つた。

「はじめは何もいじめる気ではなかったのだが、あまり女が大声を立てるので、ついにこのような狂暴なことをした」と、サドは言いわけをしている。四十幾日かの拘留という御安い罰と慰藉料ですんだらしい。フランス大革命の頃、サドは世間の大混乱をよそに、十三年間（三十八才から五十一才まで）、変態的殺人者として牢につながれていたが、一七九〇年に久しぶりで日の目をみると、再び乱虐な生活をくりかえした。美しい二人の姉妹を誘惑し、二人を檻の中に入れて歌をうたわせたり、姉を裸にし、四方鏡ばりの風呂に入れて色々な姿態を眺め乍ら、じぶんは妹の方を弄びつづけたなど……かなりのまねをやつていた。

が、現代の樂園つまり近代的感觉の快感美が要求する所のサディズムは、このような、「対象の無感覚」ではない。ましてや、ギブール司祭





「おれを縛れ、馬のりになれ、もつとぶて、けとばせ……ひつばたけ！」である。「いやよ、もつときつくねじつてよ。もう一度噛んでよ。だめよ！ もつとひどくするのよ……いくじなしね……私を殺すつもりでやるの！」である。間ぬけな猿芝居でしかない。

さすがに、しかし、教祖マゾッホ氏だ！すでに十九世紀の中頃、この間の心理的推移について、次のように喝破している。

マゾッホの小説の中に出てくる女がいつも同じ型の女で、少しく単調の氣味があるという、

手ひどい批評が出た時、これに対して、マゾッホが反ばくした文章である。

批評はさらにするどく、

「よろしく、このような、きまり切った女をマゾッホ氏は自分の生活からとり去つて、書くものの中にあらわれてこないようにしなければならぬ」というのである。いつも同じ型というのは、男に対して残酷と征服をこのむ女のことだが、一方、男も、そうされることを好むあまり、その行爲をかんげいする——という、楽屋落ち的な感じが、おもしろくないというのである。

マゾッホは、この非難に対して、こう云っている。

「この批評は大事な点を間違えている。こういう女がおれの生活の中にじつさいにいるなら、けつしておれの書いたものに現われてこないはずだ。おれはこういう女を心の中で一ぱいにつけている。おれがある女を書こうとすると、それはおれのペンの中へ入ってくる女だ。おれはいつもじぶんの意思に反して書く、然し、それを書き出すと、おれは酔つたようになってしまつて、結局悪魔的な美しさに書きあげてしまう迄は、やめられない」

ここで、マゾッホが云っているように、実在しない女と、その女とのらち明けの手つき……これが、肝腎なのであり、マゾ的な扮飾の、どうにも運命的に抜け切れぬ不自然さの陥穽に読者の目が見はられなければならない点なのである。

そして、マゾは、実生活において、全く不可能な「被虐の心理」の招来を、愛する妻との談合によつて求めようとしている。

つまり、妻は、「そのような非難を二度と受けないように、どうかして、この悪魔を一日も早く、きれいさつぱり打ち捨てておしまいになつたら如何？」と、すすめるのである。すると、マゾッホは、まじめな顔つきでこう答えるのであつた。

「おまえの云うのはもつともだ。ぼくはもう止める。だが、止めるについては、おまえがぼく

をよほど助けてくれなくてはいけないよ」

「あら、あなたを助けるつて……どんなことをするのでしよう？」「お前が毛皮を着て鞭を振るうんだ」「まあ、そんなこと！」「おれを助けてくれというのは、それなのだ。じぶんの妻に虐待されるのはおれの快樂なのだ。どうかおれをいじめてくれ」そこで、夫人は心の中で泣きく、しかもいやくながら毛皮と鞭を用いた。夫は大よろこびだが、若き夫人は、

冬の日の黄昏に田舎町が雪に埋もれてゆくのを窓から眺めながら、暗然たる気もちに胸をふるわせた。あゝ、悲しい私の家庭、あまりにも暗くみじめな、のろわしい家庭……そして夫と我が子の将来を考え、幾度か子供を殺してわが身も捨てようと決心した。

諸君、こんな、ばかばかしいマゾキズムがあるだろうか？

鞭をにぎる夫人は、それで打たれる夫よりはるかに虐げられているのである。中味がサディズムで、うわべだけのマゾでしかない。

悲しい鞭打ちである。

このように、物に書かれ、脳裡に仕組まれ、さらに、実際の行動に移された既往のすべての「サド」や「マゾ」が、技巧と、虚偽と、お芝居と、嘆願、妥協以外の何ものでもなかった事を思う時、全く頼りなく、味気ない、さく然たるものを覚えずにいられないので

ある。

××

つぎに、この頃、急に「鞭打ち」的淫戯を偏重し、珍重する傾向が、出版物や、秘かな私生活の上に、えらい勢でさかになってきた現象に、おそらく気がつかぬ人は少ないと思うが、果して「鞭打ち」的なるものが、そんなに



迄、新奇で、且つ、時代的好尚を満たすのだからかという事を考えてみたいと思う。「鞭打ち」の歴史は、本能の発生とともに古く、原則的には、何の進歩も見られない。処女

を奪うことが結婚であつた東洋古代の習慣も、初夜権の発生も、悉く、そのままの形で「サド」なのである。

男が女に対することが、とりも直さず、サディズム的なポジシオンなのである。

あながち、「鞭打ち」の、ぎこちなさを必要としないのである。

ぼくは、自分の経験の、あまりにも狭く、浅きに呆れている一人なのだが、このぼくの身辺にさえ、如上の要約を裏すける幾多の例を持つている。(たくまらずしてそれ自体がサディスティックな昂奮の頂点であるような……)

一、S氏は四十六才になる農大園芸部の実習助手で終日春から冬まで花木栽培、土いじりをしていて、まつ黒に陽にやけた山男のような巨大漢だが、奥さんは楚々とした二十八才の美人。あいにく子がない。女中と奥さんは留守番だ。S氏は不潔な物や岩石土塊を操つていたので体も手も足も襟も、どす黒く、つねにその岩のような指は松笠のような隆起を盛り上げ、掌は鑪のよう粗く厚く手の脈はまつ黒な垢ではつきり地図を描いている。しかも半年に一度入浴するのもやつとで、垢と埃と泥が体を埋め、そばへ来るとむつとするほど臭い。何故入浴を嫌うのか、不思議だつた。S氏は奥さんを毎日入浴させ、殆んど家内雑用はさせぬ。手を使わせぬ。入浴以外は手袋をはめさせておく。

だから夫人の手は、一目見ただけで、うつとりする程美しい。ふつくと純白で、指は少女のように柔かく白魚さながらである。S氏は、時々独身の同僚に奥さんの案内役をさせる。奥さんにしきりとフランス映画を見せるのだ。同僚と行く時丈け氏は夫人に手袋を用いさせぬ。暗い映画館の中で同僚は夫人の有名な美しい手のほのかな香りと感触に誘われて、最初はこわごわ、次第と執拗に握ってしまう。

それ丈けでいいらしい。S氏は、その夜、朝まで、奥さんの真綿のような肌を責める。「こーうやつて握られたのか」「そうして、こーうしめたか」「こいッ！ うれしかつたか」そして奥さんは後ろ手に縛られ、縛られてねじまげられた絹の手を、咬まれ、線香で焼かれ、時として、その品のいい潤んだ指をS氏の黄門に押込まれ、尿をほじり出させられた。S氏の飽くなき永久のサドは、自分の極度に不潔粗硬悪臭にさせ、反対に美しい夫人を極度に美化させる事と共に、きわどい所まで同僚を誘って、強烈な嫉妬におののく事から起る淫虐によつて完成されるのだが、つねに、柔と硬、大と小、美と醜の『対照』から来る『下剋上』的アクメを條件としている。夢想や架空をもつてサドの極地と考えるより、手近かな皮膚的、精神的トレーニングによつて、誰もが容易に享受できる人工樂園の一例として、此の場合、夫人は、夫の意図に怖れをなしつつも映画行の妖しい感覚を、こばんだ様子がないという。

二、うちへ月に二回風呂の煙突掃除にくる職人のU君は三十三才、憲兵伍長時代さんざん外国の娘さん達を弄んだ強者。片目が引つづれた様にのつぱらぼうで、首にえらい刀痕があり、猪のように胴からすぐ顔が出ている様に見える甚だ奇怪な容貌の男だが、これもまた、この男なりに、素晴らしい手製の悦虐を楽しみ、此上もなく幸福な家庭生活を営んでいる。

U君の場合は一層短的で効果的らしい。終日まつ黒にすすだらけになつて働らき、汗と脂でたらこ光つた異様な風体で帰ってくる。妻君は、その日の出がけに、夫が、今日は映画へつれていつてやるから、せいぜい風呂へ行つて、みがいておけ、化粧もこつてりして待つてろ……と云つた言葉に、いそいそと、湯上りの柔肌に水クリムなどをなすりこんで、ふつくらとあでやかに装い、一張羅の外出着を着て鏡の前でまつ白な腕を魚のようにたわませ乍ら、おつくり余念がない。U君は、胸に一物、発情に小鼻をひく／＼させてかえつてくる。そして、「今日は止めたよ」と、いきなり、仕事着のどろろな体で、艶やかな妻君を鏡の前で引きたおし、一件に及ぶのだ。

白対黒、柔対剛、清対汚の下剋上は、こうして、くまなくすべての姿体を反映する鏡の前で夜が更けるまで、つづけられるのである。U君が「今日は映画だ」と、約束する日こそ妻君にとつて、人身御供の警告みたいなもので、ぼくは、U君が、そわそわしながら、醜怪な片目を

血走らせ、煙突をガチャ／＼いわせている姿を見ると、「ハハーン、今日がその日だな」と、わかる。

妻君の体は、京人形のように、つや／＼ときめがこまかく、時にかあいい唇が大きく紫にふくれ上つていふことがある。嚙んで吸い、小さなやつとこで内唇をねじるようだ。

おじぎをしながらも、両腕が疊にしつかりつかず、上半身が、ぐら／＼している時がある。ごぼ／＼のようにまつ黒なU君の大きな手で、他愛もなく、逆さにうしろ手のまゝ吊り上げられ、生ゴムのような笑くぼのあるか、あいい手首が、いたいたしい歯型でえぐられていることもある。

U君は、ますますきたなく、ますます気味わるく、ますますはつらつとしている。

××

サド的行事『鞭打ち』の要諦(?)は畢竟『いやがる奴をむりやりいれて、いれてなかせる籠の鳥』である。

マゾッホやサド侯の鞭打たれにしても鞭打ちにしても、『いやがる奴を』ではなく『よろこんで打たれる奴』の類型化に墮している所に生命的な缺陷がある。現代のサドは、あくまで『合意』や妥協のない『心からの泣かせ』を要求しているのだ。

× × ×



ぐろてすく藝談よもやまばなし

私刑と拷問と

★怪談、責め、殺し、と古今から語り草になる有名ぐろてす

く劇も数々あるが、ここに紹介された「小松嵐」「敷島の死」

「夜鷹の宿」などは、その内容、物語においては、なかくても白

眉で、廣く巷間の絶賛を受けているものです。又、この劇やそ

の責め場に登場して私刑に喘ぐ男たちの異様な場面の数駒は

マニヤをもつともよく興奮させ、感興を湧かせるものです。

正岡 容



齒をくいしばりて

へ殺さば殺せと馬子の時

齒をくひしばりて兩眼閉ず

耐ゆれますれば はなは冷めたく 半暖く

末はさらに覚えはなく、

おもはず知らず後への方に倒れける

せ」られ、或は烈しく「打叩かれるそのすぐあ
との、悲愁悲哀な節廻しである。

随分美声だつたくせに樂遊は、へ末はさらに
覚えはなく」云々のところになると、殊更にぐ
んぐ調子を落して語つたから、グツタリ失心
して行くお時の姿が、マザく／＼とそこに見えて
来て一そうセンジュアルな感じだつた。

いまの福島県塙町——石川郡が塙の宿と樂遊
はそう説明していたが、その町の花屋と云う暖
味宿で卑しい勤め奉公をしると強いられ、それ
をハッキリと断るので彼女は、こんな烈しいリ
ンチにもあうのである。

このあと、偶々家来権次を連れて泊り合せ
ていたわかい勤王の志士小松龍三に、氣絶し
たまゝ投げ込まれていた物置小屋から助けだ
され、かくて紋切形の剣と恋と美男美女の活
躍となる、明治大衆小説界の雄渡辺默禪の評
判作であるが、篇中やはりこのシーンが一ぱ
んのスリルもあり、煽情的でもあるからだろ
う、殆んどこの一席——この歌詞のみが全国
に喧傳され、レコードの売行もすさまじかつ
た。

「君、默禪はねえ、そのじぶん都新聞——東
京新聞の前身——の身の上相談の解答を引受

大正中世、二代目東家樂遊（先代）が一代
を風靡した「勤王美談、小松嵐」のクライマ
ックス——美貌妙齡の娘馬子お時が、「腰巻
一貫」の「丸裸」にされて、或は「水を浴び

けていてねえ、これは！と云う悩める女にぶつかるときつと私信をだしてはモノにしてしまつたもんだ。ひでえ奴だよ」

偶々責めの研究家たる伊藤晴雨畫伯から、あの童顔を微笑に崩してから云われたことも因縁で、なぜか私は「小松嵐」の責め場と云うたびに、白く悩ましいお時の肉体の幻想と共に、この話をおもいださずにはいられない。それにしても戦後の新聞の身の上相談の解答は女流作家が多いから、默禪先生の二の舞はあるまい。呵々。

敷島の死

「怪談敷島文庫」と題して默阿彌が劇化した遊女敷島の哀話はじつはそのころ大田朝や初代燕枝と拮抗した人情嘴の妙手春錦亭柳櫻の十八番「倭歌敷島譚」の脚色ゆえ、恐らくや柳櫻がしばしばその話材を仰いだは江戸中世の話術作家乾坤坊良斎の創作と見てよからう。

未だ京橋柳町に色町があつたころの物語で、薄命の佳人敷島が遊客の枕探しをした疑いで、若い者の善四郎とやり手のおかやに責め苛まれる、柳櫻の速記（明治廿二年三月版）に據ると、こうである。



『弓の折や細繩が掛けてある二間四方の責場へ連れて行かれると（中略）、

善「この弓の折でおめえの臀肉をなぐるんだがどうだえ」

善「何と云つてもあちきは知りまへん」

敷「そう強情を云やアこうだ」

と細繩を取出して敷島の帷子かたびらの上から縛つて尻を捲り薄い緋縮緬びんぎらのゆもじの上から弓の折で五つ六つ打ちますので、敷島はヒイ／＼悲鳴を

はそゞろにもう秋めいて蝙蝠がヒラ／＼、晚い蚊柱も立つていたろう。

再び善四郎は敷島の許へやつて来て、

『善「遊女屋の旦那なんてエものは鬼でございますネ、わつしは吃驚しました。ごろうじろ敷島が白狀しなければこの小刀でおめえはんの股や臀を突つつけ、股や臀は突つついても命に別條がないから突つつけてエんで』

こう云つて親切ごかしに敷島の繩を解き、殊更に短刀を投込んで行くと、ことごとく女は口惜し悲しみ、こんな汚名を着たことを、二世と誓つた重三さんに知られたら面目ないとて、その短刀で咽喉を突く。とたんにまた／＼入つて来た善四郎が、

『善「サア敷島、いまはの際によく聞け、じつはやり手婆と俺と玉遊の三人が云い合はして盗んだ金入れを、てめえの簞笥の抽出しの中へ入れて置いたはこの善四郎さんの計らいだ。地獄へなりとも極楽へなりとも勝手の方へ往け』

揚げて居りますが、どうも仕方がございません』

とのしかつて突殺すので、これから敷島の亡魂が祟り、善四郎のいろだつた玉遊の最後も物凄く、さらに累の怪談とも結び付く。蓋し、好敵手たる今度その墓碑が東京都文化史

蹟に決定した大田朝の出世作「眞景累ヶ淵」^{しんけいかさね}を意識して柳櫻、あくまで一騎討をし度かつたのかも知れない。

夜鷹の宿

同じく柳櫻の得意にしていた怪談に、例の「お岩さま——四谷怪談」があるが、このタイトルがなんと「夏柳夜半伏魚梁」(なつやなぎよはのふせやな)。原作者の良斎がなづけたのか、それとも柳櫻自らの命名か、心憎くも詩情溢るゝものだとおもう。

いつか紹介した南北の戯曲には決して見られない、訛されて売られたお岩が、本所割下水の夜鷹の宿でひどい私刑に遭う章りがありこの人情嘴許りでなく講談の「四谷怪談」に同様のところがあつて、七代目一龍斎貞山君が演ると凄惨で迫真。

しかしながら「敷島譚」の遊女屋の賣場とこの「四谷怪談」の夜鷹の家の賣場とは、部屋の感じも責め方も自ら異つてるところに、作者良斎の、演者柳櫻の、周到な用意と觀察と演出とを読み比べて頂度い。もちろん両者は責められる動機も亦それ〴〵にちがつてはいるが——

では、紹介しよう。



『藤右衛門の女房がお岩さんの襟髪を掴まえて賣場へ連れて参りました。賣場と云うのは一間四方で、下は板の間になつており、梁に環があります。これへ細引を通すので(中略)』

女房「ジタバタしねえで早く着物を脱がしてしまいいねえ」

金公「へー」と着物を脱がしたからお岩さんは裸になりました。これから細引で後手ツこにくゝし付け、踏台を持つて来てこの上に乗り、梁の環に細引を通し、金公と藤右衛門の女房と二人で細引を肩に担いでグイグイ引張りましたから、座つていたお岩さんがだんぐり立上つて来ましたが、北風がピューピュー吹込みますから堪りません。肌が千切れるようでございます。後手ツこに縛られ、ぶら下がつて板の間に足の親指が漸く付いております。これがまるつきり吊し上げてしまふと命に障ると云う(中略)。

女房「エー剛情な阿魔だ。金公殿れ」

金公「へい」とポンと打ち、足を上げて蹴ると、グルグルと廻ると、細引が振れると一たんは板の間から足が離れると、からだの重みで又クルクルとヨリが戻つてつて板の間へ足が付くと又弓の折で打ち、繩がよじれて

板の間から足が離れ、ついには後に縛つた手が盆の窪まで参ると細引が手へくびれ込んでしまひ、目口鼻から血をダラダラ流して氣絶をしたのを見て、

金公「責殺してはすみませんが、あねさん大そう鼻血がでますぜ」

女房「目を廻したようだから塩水を持つて来な」

(中略)金公が持つて来た塩水を取つてザブリとぶつかける。

岩「ウーン」と肩息を吐いている」

このあと夜鷹たちがかえつて来て女房に詫びてやり

『細引をゆるめてやるとパタリと倒れて金ツ氷のようになつております。細引がくびれ込んでおりますから繩をとろうとすると、ピリッ肉が付いて取れ、手も何も膨れ上がつて』と云うところも惨ましかれば

『夜鷹「あのネお神さん、お岩さんがお腹がすいたてえから御飯を」

女房「馬鹿なことを云うな。めしを喰い度くば稼業にでろ」』

とあるも、随分に哀れである。

かくてお岩

『翌日になつ

て刻限が来る

と』稼業を強

いられ、断る

たびに責め折

檻をされ、『毎

日々々丁ど七

度ブリ／＼に

かゝりまし

た』偶々、深田

徹氏が「遊里、

吉原の私刑、

拷問」で言及

されている吊し上げの意味のブリ／＼なる言

葉の、こゝで使われていることもおもしろい。

それにしても標題は「夏柳」でも、この夜

鷹宿の場は北風が吹荒ぶ十月末ゆえ、割下水

にはつゞく柳の並木が枯れ／＼、お岩のこぼ

す熱涙へ冬三日月が青かつたろう。

私刑の男たち

男の方が私刑を受ける物語では、先ず新内

の「玉屋新兵衛」桶伏せが、異色あるものと

云えよう。

越前の国は三国港の小女郎と云う遊女に、

魂を奪われた新兵衛が放埒の果て、青樓の私

刑を受けて大きな桶のなかへ伏せられる一節



であるが、もちろん新兵衛ひとりに限らず、

桶伏せは元手の入った恥をかき

番頭が来て桶伏せのノビをさせ

と已に古川柳にも諷われているごとく、遊蕩

費の不義理が嵩むと、昔は花の吉原でも頻々と

桶伏せの刑はあつたのである。

「エエ無念やな身はぼうふり虫同然に……」と、

桶伏せの醜態を新兵衛自ら啣ち嘆く一とふしも

さることながら、その桶へ取りすがつて小女郎

が、自分の身は西は肥前の長崎、北は蝦夷松前へ

鞍替えしても、必らずお前さまはお救いするか

ら、せめても一度お顔を見せて——とよよと泣

伏すクドキの凄艶さの方に私は多く打たれる
つい近ごろもNHKから、老練の女流新内
富士松魯遊の「桶伏せ」の放送があり、およ
そ涙ぐましく私は聴いた。

もう一つ新内の変つた私刑でなら「釜ヶ淵
雙巴」——石川五右衛門の後妻お瀧の継子虐
めがあり、永井荷風隨筆の「きのふの淵」では、
一座の新内の太夫が昔の修業は上州路あたり
のやくざの親分の許へ草鞋を脱ぎ、艶冶な新
内よりもこの「釜ヶ淵」の継子責めなどを力演
して彼らを泣かせなければその腕は上がらな
いものだつたと説くところがかゝれている。

そう云えば大正地震の前年あたり、未だ
私が十八、九のころだつたが、下谷の根岸(?)
に惨忍な継子殺しがあつてその子が、いたく
世間の同情を集め、お初地蔵と祀られたので、
松竹映画はすぐにこれを採上げ、名子役高尾
光子の売出しの端緒となつたものだつたが、
そのころさる家で知合つたさる新内語りは、
文学少年の私をつかまえては、

「お初地蔵の新内をこしらえて下さいよ」

とよく云い／＼していたのは、正しく「釜

ヶ淵」の継子責の後塵を拜さんとしていたも

のにちがいがなく、卅余年後の今日にしておも

い当る。

継子殺しではもう一つ、同じころはじめて
上京して一時は寄席に、浅草に大流行した上
州名物八木節の、堀込源太がよく語つた「継

子三次」を挙げ度い。

彼地の村落であつた実話らしいのだが、三次を殺そうと企らむ継母が、寺子屋へ持つて行く弁当へ毒を入れてやると、その飯へ蟬る蠅がバタ／＼死んで行き、そこで試みに寺子屋の師匠がのら犬を呼んで喰べさせたら

「犬はそのめしを喰うより早く

悶え苦しみ血へどを吐えてすぐにその場で命を棄てる」

と云うような歌詞があつて一たんは三次助かるのであるが、やがて母親の奸計にかかつて大釜のなかで茹で殺される。と云う一段。

ところが大円朝の「操 競女学校」にもこれに酷似したストーリーがあり、円朝は明治の文人信夫恕軒の著述にヒントを得たとあるが、何しろ「塩原太助」「安中草三郎」「伊香保湯煙」「英国孝子伝」とおよそ上州に取材した創作が多く、しば／＼上州行脚も試み

ている作者のこと、巧みに土地での見聞を採入れたものかも知れない。

かの「祐天吉松」の番町の岩田屋敷焼討な

ども、私刑の一つと云うことができよう。

吉松の養父の仇たる橋金五郎を匿まつている悪旗本の岩田の一味が、彼をおびき寄せて庭前の樹木へ縛し、代る／＼に迫害するが、一向に吉松、音を上げない。そこへ急を聞えて駆付け

満身血だらけな吉松の姿を形容して、

「蘇芳（すほう）の樽から拔出したよう」と云つた。

蘇芳は、「広辞林」をひもとくと、

『蘇芳華——すほうばな「名」絵の具の一種。蘇芳の煎汁より製したる帯紅暗褐色の泥状物表』

現し得て巧緻ではないか！

拷問冊記

講談の拷問で、最も凄壯なものとは云えば、近ごろでは誰もが演らぬ、従つて人、余り知らぬところの「青木彌太郎」だろう。

「石釜抱いて来たこの青木だア」

と云つては、出牢後、しば／＼彼、こうした啖呵を切つて世人を脅した。石釜とは、牢内での拷問に際して、強かに両膝の上へ乗せられる巨石や重い鉄板のことで、即ちひどい拷問まで受けて来た身だと云う意味である。

いまも美髯が目にくる、師の二世伯円もどきに好んで幕末明治の新聞種を自作自演し



たかの猫遊軒伯知や、同門の右門（のちに三世伯田を襲ぎ、八丁堀住吉亭の席主）その他が好演した。

幕末額廢期の御家人くづれで、本所小梅（向島ちかく）の風雅な汁粉屋小倉庵をアジトにして、その主人長次をも談らい、夜な夜な巷の富家へ押入つては物盗り強盗を擅にし、た彼、彌太郎だつたが、この怪盗の一團には彌太郎の情人にして吉原の遊女だつた仇な年増さえまじつていたとは、まことに妖にして艶ではないか。

烏羽玉の闇のいろ濃い臘夜の江戸町々をバツクにして、ギラリ光るものを手に提げた苦が味走つた目の凄い彌太郎と藍染の手拭を吹流しに冠つた白粉の香も媚かしい男顔した細おもてのおんなと——折柄ヌツと黒屏越しに枝差しいでた牡丹櫻が、夜目にも白く乱れ散つたら、正しく国貞えがく「絵」の世界だらう。

……やがて彌太郎もその女も一味と共に捕縛になるが、このとき彌太郎らに加えられた拷問ほど無惨に徹したものはなく、前にもかいたよう先ずいくつかの巨きな石、それでも実を吐かないから、今度は幾枚かの鉄板を膝の上へと重ねる。

「ウーム……ウーム」

と強情に唇を噛みつづけた末、耐えられなくなつて氣を失うと、医者が来てすぐ手当を

加え、息を吹返せば暫くは牢へつないでおき、また引張りだして来て責付ける。

ために花魁だつた情人も、盟友の小倉庵長次も獄中に死すが、ひとり頑として彌太郎丈けはビクともしない。

そのうちに徳川政府は瓦解するので、ついに証拠不充分のまゝ青木彌太郎は大手を振つて出牢、日本橋人形町樂屋新道に五林亭と云う寄席を経営したのち、晩年は東京北郊の景勝地たりし王子の料理屋榮屋海老屋と云う老舗の主人となつて、疊の上で大往生。既代の幸運児と云わなければなるまい。

おもしろいのは五林亭時代、出演者がヌク（無断休演）と、忽ち無頼児の本性をあらわして彌太郎、鉄の棒を振廻して脅し付けた。

多くの芸人たちは頼え上がったが、なかにひとり木偶坊伯麟（先代）のみはこのとき弁慶少しも騒がずで、その鉄棒を二つにへし曲げ、自宅へ掛合に來た下足番の強い男をも取つて投げた。この伯麟は優れた剣術使いの出身で、深川の住居ちかくでは口論した巡査を苦もなく河のなかへ投込んだほどの豪傑だから、流石の彌太郎も恐入つたろう。

「また一枚また一枚と重ねる石に、皮は破れて血は流れ……」

と盲の浪花亭綾太郎が悲痛に語り、代々の貞

山が得意に読む「天野屋利兵衛」も、一心太助や大久保彦左衛門が活躍する「松前屋五郎兵衛」（服部伸が常に演じ、他は先代声洲、故太田貞水、そして伯鶴）も、拷問の烈しさ慘らしさは、再び云うが、所詮「青木彌太郎」に敵わない。たゞ、前者には鑑兇の製作を頼まれた赤穂浪士の快拳を秘する苦衷があり、後者には義理ある異母弟を庇う涙があり、それが物語の根幹をなしていて興深いので、だから拷問の場の緊迫感、演者の腕一つで定まる。

「宇都宮釣天井」で城中の秘を他へ洩らした大工与四郎の拷問は、わが幼き日の小芝居では、美男の与四郎の鬢の毛が慘く痛ましくむしり取られて、タラ／＼と眞赤な血が、美しい青白い顔にながれた。

「お怨み申す本田さまアア、四つに開いて八つに散るウウウ、盛り短い朝顔の、露より脆いこのいのちイイ……」

と同じシーンで、世を呪い、深酒のため天折した関東浪曲の大才小金井太郎は、歌い尻をこのようにながアく哀しく嗚咽した。

その小金井太郎去つてはや十七年、小芝居で「釣天井」も殆んど見られず、王子の海老屋も夙に亡びた。

（終）

— 關東・關西における同性愛者の集合地帯 —

そどみあ...

社會が同性愛に理解がない——否本質が解
つていないが故に、ソドミアをして性向を
隠し、それがSEX充足の時間として、夜
間の暗黒がえらばれるわけである。

風土記

藤井 晃

ソドミアは夜の巷につくられる

ソドミアは夜つくられる。夜の巷につくら
れる。——

ソドミアのもつとも大きな悩みが、ホモの相
手を得がたいことにあることは、本誌の、〃そ
どみあ通信〃によせられる同性愛者たちの声に
よるまでもなく、よく人の知るところだ。

そこで、ソドミアの多くは、相手を索めるた
めには、みずからいろいろの作爲をなさねばな
らない。その一つに、街に出て同志を模索する
手段がある。

そして、それに夜間がえらばれる。絶対に、
夜でなければならぬ。なぜならば、ソドミア
というものは、晝間は、普通の——というのは
同性愛者でない——社會人としての顔をしてい
なければならぬ、つまりおのがミドミアたる
ことを社會に対して隠していなければならぬ
からだ。

さいわいなことに、この国は、他の二、三の
国のように、同性愛に対して法的に苛酷でな
い。これは嬉しいことだ。ただ、惜しむらくは

社會が同性愛に理解がないことである。とい
うより、その本質が解っていないのである。そ
して、徒らにそれを奇異視する。それが、ソド
ミアをして、おのが性向を隠し蔽わなければな
らぬようにさせているわけだ。それが、かれら
に、SEX充足の時間として、夜間をえらばせ
ているわけである。

夜の暗黒だけが、ソドミアたちに、心からな
る慰めを、悦びをあたえる明るくもしびであ
るとは、これは比喩というべく、あまりにかな
しい比喩ではないだろうか？

そどみあは夜つくられる。夜の巷につくら
れる。——

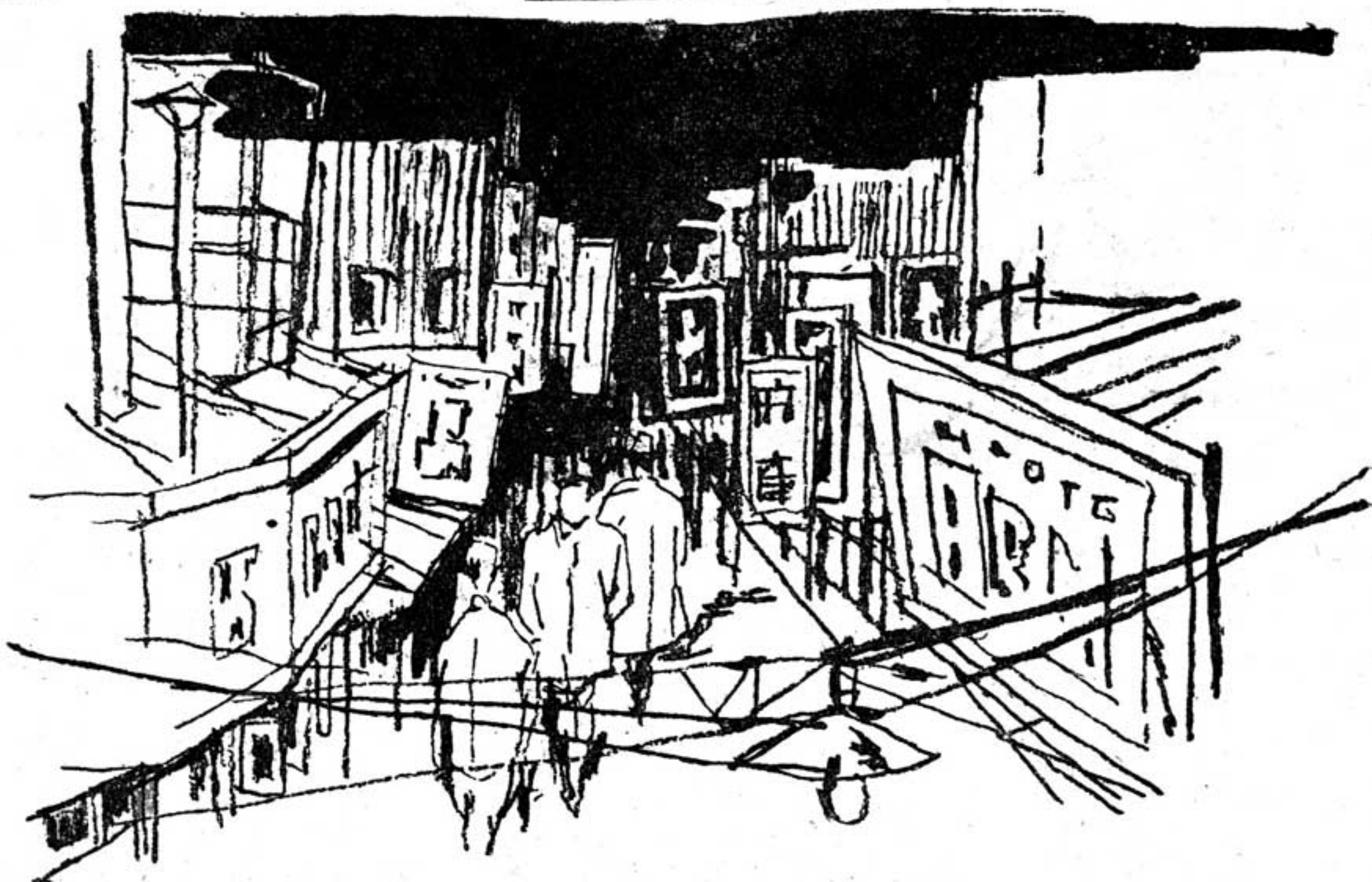
盛り場の劇場・映畫

ソドミアは、夜を待つて、巷にさまよいでる
といつても、ただ漠然とそちこち彷徨している
のではなく(中にはそのような者もいるが)、そ
こにおのずからにして、かれらだけの知る、集
合地帯が形成されている、そこへフラフラと足
がむいてゆくわけだ。

では、その集合地帯とは、どのような所であ
ろうか。これを風土記的に見てみると、まず東
京——東京は、なんといつても、各地方人のル
ツポであるとともに、否あるだけに、ソドミア
にとつても、大きなルツポである。

その個々の集合場所としては、第一に、劇
場・映画館だ。

劇場では、有楽町の日本劇場地階が、そのチ



ピカルな場所として、ソドミア間に知られている。

この客席では、特にそのうしろの方では、その場で相知つたソドミア同士が、観劇などは上の空であるいは手を組みあい、あるいは腰を抱えあい、あるいはうしろ抱きの格好に、男女の愛人同士のうしろ抱きで睦みあつてゐるさまを、そちこちに見出すことができる。

中には、相互的なブランラージュすら交しているものも見受けることもある。

又、この休憩室も、ソドミアたちに、交歓の場として用いられている。上演中の誰もいない時がえらばれること云うまでもない。

ここに集いよるソドミアは、場所柄か官庁・会社勤めのものが多い。といつても、この界限のサラリーマンとはかぎらない。否むしろ、この地帯のソドミアは、他土地の集合地帯をえらび、他土地のそれが、ここへ集つてくる。それは、冒頭で言つたソドミアの隠蔽性を知れば、ただちに納得がいくことだろう。

次に新宿の劇場・映画館では、戦前はS館などがよく用いられていたが、いまは、文化劇場と帝都座階上の名画座の二つに転移している。

夜のこの二劇場客席は、誇張していえば、宛らソドミアの集会場であることは、

知る人ぞ知るであろう。

『男色茶房』としてその名が高い新宿の『夜曲』に、夜、私が顔を覗かせると、そのマスタ―が、

「いまころは、文化劇場と名画座ではホモの方たちで押すなくでしよう」

と、よく述懐することでも、その間の事情は了解できよう。

哀しきソドミアたちに、快楽の場をあたえてゐるこの二つの劇場は、祝福されていい。

次いでまた、浅草はどうだろうか――

この大衆的な盛り場の映画館では、東京クラブと日本館とを、ソドミアの集合地帯として挙げるることができる。特に日本館は、その名が高い。

私の知つてゐる被動的ソドミアの中にも、中学時代とか大学予科時代とかの少青年時に、この二つの映画館のどちらかで、隣席にいた未知の同性から、愛撫の手を差出されたという経験をもつものが、すくなくない。

このように、ここでは、ペデ傾向のものが相手を求める場としても用いられているのである。思うに、これは、浅草という土地がもつ開放的な雰囲気因るのではなからうか。

というのは、ペデは大体において、一家をもつた中年の年配者などに多い。そのような人には、相手をもとめるべく、戦後派的な若いソドミアのような、気易い大膽な行動をとれない。どうしても、そこに体面的な躊躇が生じる。



そうした躊躇を、浅草のもつアケツパナシな雰囲気が、雲散霧消させてくれるのだらうと私は解釈する。

この二つの映画館に集るソドミアは、会社員、工員、商店員等が多く、ペデとしては店主、工場主といったところである。

街の

公衆便所

集合場所の第二は、街の公衆便所だ。それがその場かぎりのたまゆらの快楽のためか、あるいは幾月幾

年の交情のキツカケなるかは知らぬが、その愛人をもとめる場、逢初めの場が、便所であるとは、あまりにも暗く哀しいことだが、これが、ソドミアの背負っている、否、かれらに背負っていると信じられている暗き哀しさをそのまま表現しているのである。

そして、そうした暗く哀しい事実が、世人をして、いつそう男色というものを奇怪視させてもいるのだ。

だからこそ、私は、機会あるごとに、男色に理解なき世人にその本質の純粹なることを説き、またソドミアに、男色の卑下すべきでないことを強張して、男色をして人生のメーン・ストリートに堂々と歩ましく、一臂の力をつくしている所以なのだ。

が、その問題は別として、便所から一種の性的衝動を感じることは、何人も否めない事実だろうと思う。

糞尿そのものが、色情象徴の一部をなすことは、医学的にも心理学的にも証明されており、排尿行為が性的機能と関係あることも、泌尿器の間に生理的現象——性器の緊張と膀胱の緊張との間の著明な関係——を見ることによつて証明されている。

であるからには、便所とSEXとは、断然切りはなすことのできぬ事実であらう。

そして、も一つ、であるからには、ソドミアが秘密の集合場所として、便所をえらむということも、奇異でも何でもないことなのだ。

さて、東京におけるソドミア集合場所としての便所では、日比谷公園公会堂附近の公衆便所が、もつとも人に知れわたっている。

この公園に集いよる同性愛者については、前に本誌普通号に記されてあるので、ここには畷々を避け、ただ、あるソドミアの手記から、この便所の雰囲氣を書いた一節だけ、抜き書きしておこう。

「惹かれるように夜の日比谷公園へまぎれ込んでしまった。男同志の肉体の花道、併し僕は既に馴れてしまっているが、その度毎に、胸が苦しくなる。恥や見栄の苦しさは少しもない。満たされぬ苦しさが、胸一杯に拡がってくる。今日も何の爲に、と自分で問うて見て、そのはかなさが又ぞろやつてくるのだ。

公衆便所に入ると、いつものように目の血走った中年の男達の視線が、音の立つ程体中に感ぜられる。そして彼等は、用便をする僕の横に来て、体中をなめるように見定めて来るのだ。僕は強いて何食わぬ表情の儘、目差す對手を物色するが、いない。最初の絶望が、いつものようにきまつて起る」

次に、神田竹橋袂の公衆便所、ここにちかごろ、ソドミアたちが、なかなか多く集つてくる。

また同じく神田の五公園所の便所、更にまた四谷見附近くの公衆便所が挙げられる。

このように、薄暗い、人目につかぬような便所が、ソドミアたちにえらまれるのだ。

關 東

★そどみあの集合地東京

有楽町日劇地階はチビカ
ルの場所新宿は文化劇場と名畫座
は知る人ぞ知る

男色茶房としては

「夜曲」

浅草の盛り場では

東京クラブと日本館

第二の集合地公衆便所

日比谷公園は公會堂附近
の公衆便所

神田竹橋袂は盛況

神田のK公園内と四谷見
附近にも知られてる。又、映畫館の便所も、ソ
ドミア達の愛のいとなみの場所として用いられて
いる。

このような
公衆便所に共
通しているこ
とは、同性愛
者の記した落
書があること
だ。

それは、あ
るいは男同士
の交情図やリ
ンガの絵、あ
るいはソドミ
アの「相手を
求む」の文句
である。

そして又、
そのような求
人広告が機縁
で知合い、歡
を交す場合も
決してすくな
いのである。
私の許に書
信をよせて来
るNというソ
ドミアは、次
のように告白
している。
「ある三流映

画館の便所に入つたところあれの事が所嫌わず
一杯書いてあるのです。いつもありふれた落書
なので、大して気にもしていませんでした。し
かし唯一つ、男子同性愛者はX×区X×町X番
地〇〇へお便り下さいと書いてあります。どう
せ誰かのいたずらだと思い、気にもとめずにい
ました。すると或る公園の公衆便所にも、同一
の事が書いてあります。急にその〇〇という人
に会いたくなり、全く暗夜に一燈を得た歡び
で、彼に手紙を出しました。私の住所は書けま
せんので、局止めにしておきました。十日位経
つて返事が来ていました。K橋にて会いたし
とあります。とるものもとりのあえず、夜十時こ
ろ指定された場所で待つていました。すると背
後からNさんですかと声をかけられ、思わ
ずハツとなり、全身より火が出る程でした」

このような公衆便所は、その多くが、太用——
小用に對して——をたす箱と箱との境に、直
徑一寸ほどの小孔があげられている。つまり、
その孔から隣りの箱を窺つて、相手を物色する
のである。

又、も一つ、その小孔は他の目的にも用いら
れているが、それはここに記すことはできな
い。

次に、前記のN書信にもあるように、映画館
の便所も、ソドミアの愛の告白の場、時として
は愛のいとなみの場として用いられているよう
だ。

以上の事実と関連しているのではないだろう
か。

特徴的な「男色旅館」

次いで、関西におけるソドミアの集合地帯を
一わたり覗いて見よう。

その發生地的に見るならば、関西はむしろ関
東よりも、男色者を多く出していると言つてい
い。

大体、関西という土地の雰囲気、何か男色
的に思われる。江戸時代、関東出身の陰間より
も、関西生れのそれの方が遙かに多く、遙かに
歡ばれたという事実に見るまでもなく、関西の
男性は、言葉態度が女性のように柔かく円味を
おびていて、ウールニング的のものが感じられ
それが男色的な雰囲気醸しだすのかも知れな
い。

事実、現今でも、関西にはソドミアが多い。
絶対に多い。戦後、隠然としてすこぶる男色が
蔓延したことは、東京とかわらない。

これらソドミアは、単独の者もいるし、夫
婦か恋人のように気のあつた同士二人だけの者
もいるし、また、数人或は数十人のメンバーで
グループを結んでいる者もある。

そして、愛人同士、あるいはグループだけで
遊んでいるものもいるが、その多くは、新しい
刺激をもとめて、他の相手を見付けべく、街
の巷に出動する。勿論、夜陰にまぎれて出動す
るのだ。

關西

★そどみあの多い關西、

先づ大阪は天王寺公園と中之島公園。プロ男娼も多いが、カタギも多い。映畫館では、新世界界隈と道頓堀、九條方面に二三ヶ所。歌舞伎座附近のニユース映畫館。

男色茶房の代りに男色旅館が盛ん。

宿料として休憩二〇〇圓泊り四〇〇圓で風呂付、有名館として六軒あるが中でも阿部野區内の「S」と「M」が有名、

京都では

映畫館では京極の八千代館が盛ん。

公園では圓山公園が名高い。

では、その出勤場所、集合場所は、どのような所だろうか――

まず大阪を見てみると、公園では、天王寺公園と中之島公園である。

その二つの公園には、プロ男娼も多く現れているがそうでないカタギのソドミアもまた、すくなくない。そうしたソ

ドミアたちはあるいは園内の舗道を散策の態で、あるいはペンチに腰をかけて、眼を光らせながら、通りすがりの人の中

から、ソドミア独特の坎のよさで、求める相手を物色し、暗黙のうちに双方理想や情意が投合すれば、寄りそいながら闇の中へ消えていく。

すべての行動が、物柔かで、静かである。

又、映畫館では、新世界界隈・道頓堀・九條方面等に、それぞれ二、三あるが、中でも歌舞伎座附近の某ニユース映畫館が、ソドミアの集合場所として、もつとも名が高い。

大阪で、もつとも特徴的なソドミアの集合の場というべきものに、「男色旅館」である。

この都市には、東京に見るような「男色茶房」はきわめて少く、そのかわりに、この「男色旅館」があるわけだ。

それは、どのようなシステムかというところ、経営者はいずれも男同士の「夫婦」であつて、どの旅館にも、女でいえば仲居ともいふべき役廻りの男が二人――五人ほど雇われている。

この仲居男が、すなはちウールニングなのである。

かれらは、給料としてはきわめて僅少で、文字通りタバコ銭にしかならない。着物をつくつたり、好きな物を喰つたり、あるいは愛する同性に入れ揚げたりするためには、客をとらなければならぬのだ。

然る、この仲居男を目的に、男色者が集いよつてくるのである。仲居には若い男もいれば、中年の男もいる。そして、古風な好みの男もいれば、リーゼント・スタイルの者もいる。ソド

ミアの客は、それぞれ自分の気のかなつた仲居をえらばいいのだ。

仲居男の中には、外人相手の者もいる。これをかれらの隠語では「外専」という。また年配相手の男は「老け専」と称んでいる。

又、男色旅館では、正月とか花見とかの物日には、客のための余興として、男のストリップ・ショウを見せる。踊り子は、美少年ばかりで、それらナイス・ボーイの中に、氣にいつたものがあれば、客はそれをその夜の相手として望むことができるのだ。

この種の旅館は、仲居目的の客のみでなく、ソドミア同士の同伴者にも、交情の場として利用されている。その室料は、休憩二〇〇圓、泊り四〇〇圓で風呂付というのが通り相場だそう

な。普通の安ホテルよりも、ずっと格安である。これは、男同士の遊びは、男女のそれとちがつて、どこでも人目につかず行えるため、安くしなければ利用するものがないからであるという。

このような「男色旅館」が、大阪には六軒ほどあるが、中でも阿部野區内の「S」と「M」とが有名である。

「男色茶房」が東京的であるとするならば、これら「男色旅館」はいかにも大阪的であるといえよう。

戦前の集合地帯が今でも



次に京都では、映画館としては、昔からソドミアの溜り場として知られている京極の八千代館が、今でも依然としてそうである。

来ぬか」の瞬間が、実にスリル的で忘れられず、そのときには、スクリーンにどのような激情場面が映写されていても、すこしも頭に入らぬそうだ。

又、公園では、やはり、戦前からの集合地帯である円山公園が、今にいたるもその名が高い。

現在写真業を営んでいる或るウールニングの人が、こう云っている。

「以前私は或る撮影所で俳優をやっていたことがあつて、その時分に撮った、私の出ている映画が、京極のY館に再上映されたのです。そこで私が映画を見ている最中に、傍の男がにじり寄つて来るので（中略）映画が三回目のときに、その人が外へ出ようというので、一緒について出て、M公園の青空の下で遊んだのですが……」

Y館で情意投合してM公園へ——これが、もつとも多く用いられているコースらしい。

新宿の「夜曲」のマスターなども、京都にいたころ、このM公園へ同志をもとめに、よく出動したものだと言つていた。

京都では、ソドミアも、先人ののこした古い習慣をまもっているのだろうか？

さて、以上私は、現今ソドミアの集合地帯と、そこにおけるかれらの求愛の生態について、齒に衣きせることなく、あからさまに語つて来た。

要は、ソドミアというものの実態を、多くの

人に知ってもらいたいからである。実態を見極めてこそ、そこに解決の道、その他新しい進展の道が拓けるといふものだ。

事実から眼をそらし、事情に眼を塞いで、何の進展があらうか。

又、これを読んで、ソドミアとは淫靡なものであると言ふものが、若しあるとすれば、その人は、自身を顧みずして、他を言う人である。

若し、ソドミア同士の愛慾を淫靡とするならば、男女間のそれは、よりより以上に淫靡だと言わねばならない。

私が多くの人に念頭にとめていただきたいことは、前言もしたように、集合地帯におけるソドミアの哀しい求愛のすがたである。そして、その哀しいすがたがどこから来ているか、ということである。

又、人は、集合地帯におけるソドミアのバタフライぶり、その場かぎりの交情などを知つて、かれらの多情性を言うかも知れない。

然り、私もそれは肯定する。ソドミアとは多情である。その多情性はいづくに原因するかという、かれらの孤独性からだ。そして、その孤独性を更に掘り下げるならば、かれらのナルシス（自己愛）に内因しているのだが、それらの細かな解剖については、又の機会に譲るとしよう。

× × ×

＝女の性愛心理分析＝

マゾ女性の四つのタイプ

…あの手でよ。すごい、もう、…熊が人間におそいかかるように、暗い、せまいシートの上で、うしろから…
……、私、そんな、犬みたいなあつかい、着物まくられて、受けるかと思つたら、口惜しくて！口惜しくて！

日夏由起夫

八木 静男 畫



一、高貴な奥様と

お抱え運轉手

僕の知つてゐる或る奥さん。

かりに、R子さんとしておこう。

彼女の家は、自由ヶ丘にあるときい

ていたが、行つてみて、その立派なの

におどろいたのである。あるパーティで

知合つたのだが、彼女は、自分が、そんな

ブルジョアだなんて云わなかつた。

もつとも、その氣品、それから、着物の好

み。指にかざやいてゐるダイヤらしい石の輝

きなんかから、いゝ所の奥さんだろうとは思

つていたが、自家用車がある家の奥様とまで

は、分らなかつた。

そう云えば、いつでも和服をきていられる女なん

て、今時だつたら、芸者か、ブルジョアマダムしかな

いのだが。

そのR子さんが、御主人の眼をかすめて、浮氣をした

のだから、相手は、映画俳優か、KOの学生か何かだと

思つたら、案に相違して、お抱えの運轉手だつた。

それもいゝが、僕が、どんな美しい男かと思つて会つてみ

ると、ドウモウな顔つきの、體ばかり嚴丈な、男の僕からみ

たらどこがいゝか分らない、下級労働者並の男だつた。

前に、拳闘なんかした事があるとかで、手なんか、タコが

出来て、みんな親指みたいで、ガサガサになつてゐる、油じみ

た、およそ、色事なんかとは縁の遠そうな手だつた。

しかし、その手をみて、この汚ない指が、あの風にも耐えないとい

う風な、キャシヤな奥さんの……と想像したら、妙に、センチユアル

な感じが、こみ上げてきた。

それで、R子さんの軀の秘密に突あたったような気がしたのだ。そこを突込んできいて見てやつぱり、僕の想像が当たってた事が分った。

「はじめ、ちつとも、あんな男に開心なんかもつてなかつたの。……物質かなんかみたいに見無視してたの。——ところが、あるとき、あのシヨウハーが、お酒をのんでいてね、私おこつたのよ。そしたら、私の、ちよつとした秘密……アバンチュールを種に、おどしをかけてきたの。……私、びつくりしてね、真青になつてしまつたわ。おこつたり、威厳みせたりしたんだけど、何しろ、あんな男でしよう！とうとう、強姦みたい……あの手でよ。……すごい、もう、……熊が人間におそいかゝるように、暗い、せまいシートの上で、うしろから、……前へまわつた手に喰いついて上げたのだけど、そんなこと、ビクともしなくて。……私、いやしくも、人に尊敬される身で、そんな、犬みたいなあつかい、着物まくられて、受けるのかと思つたら、口惜しくて、口惜しくて！」

泣いて、その恥辱を受けたと云うのだ。酒をのんで野性をとりのどした無智な男におそわれる、上品なR子さんの姿態を僕は、心に描いて、あやしく血がさわぐのを感じた。

「すぐ、クビにする事だつて、出来たのに……」

と僕が不審がると、さアつと赤くなつて、「ええ、……そう思つたの。だけど、……出来なかつたわ。一回、二回と、そういう事が重な

ると、段々、彼が、恋しくなつて、外出するたびに、彼のそんな無法な事を、心待ちにするようになってしまつたのよ。女つて弱いものね。

——恥かしいわ。一度、軀をゆるすと、……」

しかし、R子さんが、「女だから」弱かつたのではないと思へた。彼女の軀は、マゾだつたのだ。R子さんは、旦那さまからも愛され、外の洗練された紳士たちからも尊敬をこめて愛されていた。しかし、R子さんの頭のうちには、野性的なマゾの血がねむつていたのだ。

——それが、たまたま、粗暴な運転手の、卑しい手によつて、外へふき出したのではないか。

二人の、その、外出先での、とめた車のなかでの愛撫は、どんなに、粗野で、荒々しいものだつたらう。彼女は、ダイヤの指輪なんかはめて、革草履なんかはいて、上品な奥さまをよそほつてゐるが、その男のときは、血のさけびをあげ、つかみかゝるような乱暴な欲情をしめすにちがいない。その男の油のしみたガサガサの手で、きづつけられるのがうれしいのだ。その男の鉄のような手でしめつけられ、けがされるのがうれしいのだ。美しいちりめんの長じゆばんや、お腰巻を、その男の汗で、ベタベタに汚されてしまうことが、たまらなくいいのだ。

抵抗して、掌で、張られた事もあつたと云う。そのときの、グンとこみあげてくる熱い欲情はどんなであつたらう。気位が高ければ高いほど、そんなあつかわれ方が、歡喜となるのである。

上流の娘や、夫人にみられる野性的なマゾの一つの型。

二、一人の男に仕える二人の女

僕の友人に、新聞記者をしていた田毎という男がいる。体がよくつて、女を泣かせる腕があるというのを唯一の自慢にしているような男だ。顔なんか、決して立派でないし、第一、皮膚が、どんよりとした土色で、悪い病氣でもあるんじゃないかと思うほどだが、本人は、そんな事気にしてやしない。商売女でも泣かせる事が出来ると云うのだ。

実際、彼の腕は、すごいらしい。

と云うのは、彼の奥さんと云うのが、とてつもない美人だからだ。そして、彼は目下失職して、遊んでいるのだが、そういう彼を、その美人の奥さんが、バアへつとめながら養つてゐるのである。大の男は、のらくらして、ひる寝して、美人の奥さんが、夜おそくまではたらいで、彼に、愛憎をつかさず事せず（或は、愛憎はつかしながらかも知れないが）彼のそばに仕えているのだ。

そればかりじゃない。驚ろくべき事に、彼は、田舎から出てきて、彼の所に身をよせた二十七になる、良子という娘に、手をつけてしまつたのである。

女にかけての、腕を自負する彼の事だから、どんな風に、やつたか分らないが、多分、奥さんの留守の間にいきなり何かしてしまつたのだ

ろう。

それから、夜、三人床をならべてねる。

真中に彼がねて、右に娘、左に、これはバアから、おそくかえつてきて、そのまゝ寢床にもぐりこむ奥さん。

はじめは、彼も、いんちようにして、奥さんのかえつてこないうちに、娘の方を可愛がり奥さんの方は、夜中になって、娘がねた頃を見はからつて、愛するという風にしていた。

ところが、時々、奥さんが、おそくなつて、ひどく、よつぱらつたりとてかえつてくる。

「今頃まで、どこをうろうろしてやがつたんだ」

「何さ！ 女をはたらかして。……」

「何をはたらいているんだか分るもんか。どこかの男に、サービスしていやがつたんだろ」

「云つたわね」

というような事から、云いあらそいが、おこつて、ピシヤピシッと云うような音がして、

「口惜しいッ！ 打つ

たわね。よく私を打

るわね」

奥さんが

ヒイヒイ泣

いて、しば

らくすると、

それが間遠



くなつてせきあぐるような調子になり、

イヤ。「イヤアよ。今夜はいやア。……こんなあとで……」

なんて甘い声になつて、糸が細るようなすゝり泣きになり、切迫した呼吸。

いくら、寢込んだ娘でも、三尺とはなれない所で、やられたら、眼がさめない訳には行かなかつた。石のようにじつと軀をかたくして、……でも、やるせなさに、じつとりと軀がとけるようになって、……

その気配を、彼が感づかぬ筈は、ない。

奥さんが、疲れて寢入つてから面白づくに、手を娘の方にのばした。

「許して。……いや……ネ。いけません」

だが、軀は、別な事を語っていた。

彼は、ねむつてゐる妻のわきで、そんな事をするという事に、特殊な興味を湧かして、常にあらず、情熱的だつた。妻のわきなのに、わざと声を出させるように、しむけたりしたのだ。

そんな事が

二回三回と続

くうちに、と

うとう、奥さ

んに、そ

れが気

づかれて、大騒動になつたが、それが、どう、おさまつたのか、また三人一緒に寝るようになつて、女二人は、まるで、サルタンに仕える女ドレイのように、彼をかこんで、両脇から寝るようになった。

娘の方が、ひる間は、妻のように、食事の世話一切から、おつかい、買出しまで、献身的にはたらくのだ。

奥さんの方も、バアへ行つて、せつせとかせいでくる。

こうして、妻妾を同居させて、彼はゆうゆうとして、ねそべつてゐる。彼がする事と云えば、夜になつて、均等に、二人を愛してやる事だけ。……二人は、その愛撫に涙を流しながら、彼への服従と献身への誓を新たにするというのである。二人の競走やら、角つき合いやらで、閨房の刺戟も十分。いわゞ彼女たちが、自分で、自分を催情してしまふのだから。――

そして、そんな、ひどい彼から、離れることも出来ないのだ。おそろしいことだが、彼は、その男性としての力を僕達に自慢するのだ。

娘も、髪を、あんでターバンのように巻き、顔立ちだつて彫刻的で、十人並の女だつた。

これも一種のマゾ女性なのであろう。自分が、男にいゝようにされて、ひどい仕うちをうけてると思う、その快感に酔つたようになつて、道徳も、利害も忘れて、自分からその泥のなかにしづんで行くのだ。

日本に、昔からある貞女なども、こういうマ

ゾ女性が多いのではなからうか。僕たちの周囲に一番多くいる型のマゾだ。

さんざ、遊んで、ころがして、いやになつたら棄てる気か」という女心をうたつた歌、その中にひそんでいるのは女性のマゾヒズムであろう。

三、荒唐古を喜ぶ踊子たち

あるバレエ学校の教師と酒をのんだら、こんな事を語ってくれた。

「不思議ですね、ビシビシやる教師の方が、尊敬されて人気が出るのです。なまじ優しく、気を使つて、教える先生は、だめです。よろこばれませんね。

それが分つたから、僕なんか、ムチをもつてね、ビシビシやるんです。

『バカッ、そんなナマクラな事でバレリーナになれると思うのか。俺を馬鹿にして、そんな事するんだろ！ こいつ』

つて、わざと強く、つきたおしたり、ムチで、ぶつくりしたお尻を、打つたりするんです。そうすると、緊張するんでしょう、涙を流しながら、立ち直つて、唇をかみながら、従順に、云う通りにしますね。みんな、若いきれいな娘ばかりですから、打つても、たゞいても従順に云うこときいてる、つて思うと、可愛い、です



ね。だから、抱いてやりたくありません。

大体、みんな、そうですが、そんななかでも、手ひどく、あつかわれるのが、特に好きな子が十人のうち二人位は、必ずいますね。

そういうのは、目つきですぐ分ります。

もう、僕に、ほれていて、目つきからしてすぐ分ります。僕が煙草を出すとマッチをつける。練習に立とうとすると、ムチをもつてくる。ひざまづいて、靴をはかせてくれるし、気がつくこと女房以上です。

そんなの、全く無視して、

『お前の今日のポーズはなんだ。え？ ……俺の指導をうけるのが、いやなんだろう？』

『先生、そんな。…私、今日、あれなの』

『うそつけ！ ごまかす気か』

なんて云つて、手をぐつとうしろでねじつたり、腕を無理にねじまげた辛いポーズをとらし

たりするんです。すると、目に涙を一杯ためながら、じつと、齒をくいしばつて、やつてますがね、恨めしそうな眼つきをするが、それをやつてやらないと物足りないんですな。

メンスのときなんか、とても、みんな、軀が辛いらしいんですけど、僕は、そんな時でも、よいしやせずに、ビシビシ練習させるんです。

そういう時は、一番感じやすくなっているから、よく泣いたり、しますが、また、同時に一番うれしらしいな。なにしろ、若い娘だつて、あん時は、ひどく性欲的になりますからね。髪の毛なんて、むれたように匂いますよ。

それから脇の匂い。…腕をぎゅつと、うしろにねじまげて、軀をこすりつけてやると、腰をもじもじさせて喜びますよ」

更にこの教師は、次のような、おどろくべき事を語ってくれた。それによると、…：…そういう子を選びさえすれば、モノにするのは簡単だと云うのである。バレエの教師と踊り子の間には、特殊な肉体の交流がある。

「この腹をもつとつき出して」

とか、

「この股で、こう僕をはさんで、一回転して」

とか、そういう踊りの指導で、まるで情婦をあつかうように、平気で、未婚の娘の軀をなでくりまわす。だから、もう娘の方でも、軀をゆるしたみたいになつてしまふのだ。踊りによつては、うすいタイツ一枚をへだてただけで、性交と同じようなことをする事さえ、まれ

ではない。

彼は、マゾ型の娘を見つけると、特別に教えてやるからと云つて、居残りを命じる。

そして、だれ一人居なくなつた教場で、足をもつたり、腰をおさえたりしながら相当きわどい踊り方で指導をする。娘が、十分に、催した頃を見はからつて、腕をぎゅつと、うしろにまわして、押えて、いきなり、接吻してしまう。

「あッ、いやッ……先生」

と逃げる唇をつかまえて、ふみにじるようにこつちの唇で、ふたして、無理矢理に激しくこすり廻すのだ。このときは、乱暴にすればするほど効果がある。女の意志などは全く無視するのだ。

それでも、接吻位だと、豫期していたことでもあるから、あまり、あばれない時がある。

そういう時は、いきなり、ハンカチで、背後に廻した手首をしぼつて、

「君は、君は、踊りに、色気がない！ 俺が、色気をつけてやるから、有難く受けよ」

と云つて、いきなり、タイトのパンティをずるつと、ひざの上のあたりまで、ずりおろす。

「あ、先生、カンニンして！ こんな所でいやッ！ 先生」

と云うのを、せうら笑いながら、

「男を知らないから、腰に色気が出ないのだ。」

もつと、こゝをきゅつと引いて、……男の味を知れば、もつと、こゝがきゅつとしまるようになるんだ。……え？」

と云いながら、黒いタイトの間の、雪のように白いあぶらの乗つた肌を賞味し、椅子にのつた自分のひざの上へ、かゝえ上げてしまう。

こうして、一人一人、神聖な教場で、思いのまゝに汚すのだが、それで、誰一人として、そのことを、保護者に云いつけたり、外の者にもらしたりするものはいない。みんな、営々として、汚された後も毎日、通つてくるという話だ。

芸術に精進する教師と、教え子の間の特殊な感覚の交流が、男のサジズムと、女のマゾとを、引き出す例であらう。

四、男の體を舐めて喜ぶ女

これは、浅草のある輕演劇俳優の打あけ話である。

その俳優は、別に大して名のある俳優ではない。どちらかと云うと三枚目の役者だが、ある若いレビュウガールが、この男にほれて、一緒になつた。

そのほれつ振りが、凄く、あまりひたむきなもので、かえつて、まわりでも気をのまれて、噂もあまりしなかつた位だ。

男は、この娘を、自分のアパートの部屋へ引入れてから、大変なものに仕立てあげた。

と云うのは、この男には、もともと変態的な好みがあつたからである。

まず最初、彼は、家では、わざと、パンツを





はかず、いつも、それを、娘の目の前にあらわにするようにした。ねころがつているときでも、食事のときでも、わざと、前をはだけて、いやでも娘が、それを見ない訳には行かないようにしたのである。

最初、娘は、目を、苦しげにそらしていたが、彼は、むちで、打たんばかりにして、眼を、自分の上に向けさせた。

はじめは、仕方がなしに、羞恥に頬をほてらしながら見ていたが、そのうちに、自分からじつと、熱っぽい眼で、たえず注視するようになり、食事の途中で、たえきれないようにはしを置いて、つゝぶしてしまふような事があつた。こうして、娘は、たえず、刺戟された。

そればかりではない。風呂から上ると、身体をふかせ、そのあとでは、全身をくまなく、もませる。

はじめは、恥かしがり屋の娘だったが、そんな事がつゞくと、しまいには、自分から、こらえ切れずに男のお腹の上に、顔をふせてしまふような事をするようになった。

もつとも、それまでは、彼の方は、ほとんど正常なコイツスでは、可愛がつてやらなかつたのだ。それが、術で、いわゞ御馳走を見せて、喰べさせないような、一種の慢性キガ状態にしておいたのだから、罪な話だ。

娘が、自分から、つゝしみも何も忘れて、接吻みたいに顔をつけてきたのを見ると、彼は、娘の頭をおさえて、無理にぎゅユ、ぎゅユと、それをしいた。

そして、全身に接吻をさせた。その清い唇で、自分の、何十人という女の汗と、あぶらのしみ入っている、四十男の軀を、指の又から、足の裏、尻の間まで、なめることを強いた。娘は、涙を流しながら、それをしたのだ。

それが習慣になつた、娘の舌で、全身を清め

られることがどんなに、間遠い、ものうい悦楽か、知らぬ人には分らない。

これが、彼の教育第一歩だつた。

第二は、——これは、風呂場の流しの上でだが、彼の、メイク、ウォーターを、きちんと正座した、はだかの、大理石のような、なめらかな、ひざの上へ、したたかにあびること。そのときでも、ちつとでも、いやな顔をしたり、眼をつぶつたりする事は許されない。——敬謙な態度で、神の洗礼をうけるようにそれを受けるのだ。

第三は、部屋のなかで、彼に姿を見せながら、自分のウォーターをガラスのびんに出すこと。これは、死んでもイヤ、と云つたが、とうとう、させられてしまつた。でも、ハンケチで顔をおおつてしまふと云う。

それから、しばらくつけての強姦や、他の女を呼び入れての、サヂズムの遊戯などによつて、この娘を一年もしないうちに本格的なマゾ女性に仕立てあげてしまつたのだ。

たゞ、この娘のいゝ所は、最後まで、はじらいと、つゝましさを忘れないことで、これがマゾ女として得難い色気となる。これのないマゾなど、マゾの名にも値しない。——と、この俳優は、僕に語るのだ。

天皇虐殺實錄史

大惡殘虐記

穴に埋められたクロヒコ王子は咳をした。同時に血を吐いた。ぎやつ……と叫ぶと、土に首だけ出した兄王子の眼玉が飛びだした……

岩堀 光

陳野重晴画



ワカタケ王子はもうながい間、ハタヒ姫の寝顔をみつめていた。夜殿には、いつしか朝が若葉の露にとけたような青みを含んで忍びいつていた。小さいハタヒ姫のひたいとはなの頭が、



かすかに汗ばんでいる。唇が弓の輪に開いて、またま（真珠）のように輝いた前歯が可愛げに覗いている。なんの苦悩もなげだ。

（これが、ほんとうの顔だろうか、この姫の？）

ワカタケ王子はだまされているような心のかげりを消しかねていた。彼は最近、自分以外のどんな人間の顔にも、つくりものの表情を感じる。げんにハタヒ姫も、昨夜から、彼の前で、まつたくちがつたいくつもの表情を演じてみせた。そのどれもが真実めいていて、どれもが嘘めいていた。

朝の色が濃くなつて行くのに、彼はなんとかハタヒ姫の肩を揺り起そうとしてはためらっているのも、眼覚めた瞬間、彼女がまた、なにかの表情を演じだすだろうことが、わずらわしかったのである。

恋人のカラ姫は、そういうワカタケ王子の苦しみを、神経のせいにした。『王子は野心家でらつしやるからですわ。』といった。

『それはどういう意味だ。』

『多勢の王子たちが、みんな、帝位を狙つてらつしやるようにあなたにはみえるのでございましょう？』そして女は、誰も彼もが、どなたかの王子たちに、賭けてらつしやるように……后

や妃のみ座を狙つて……』

『それにちがいはなからう？』だが、わたしのなやみはそんなものではない。もつと、人間の本性に対して、シコリのようなものなのだ。』

『深いことはカラ姫にはわかりません。けれどそれでは王子は、カラ姫の愛をも、おうたがい遊ばしているのですか？』

『……』

『カラ姫も、王子に賭けている女かもしれせん。』

『そうだろう、たぶん。』

『それだけだと思ひあそばして。』

『わからん。』

ワカタケ王子は答えたが、彼女だけは彼に嘘の顔をしない女だと、どこかで信じている自分に思い当つた。彼はサッパリした。だが、そんなことは例外なのだ。彼の周りでは誰も彼もが嘘の顔を作るのに懸命になつていた。そう思えるのも子供の頃から、王子は、あまりにあらわな人間の心をみききしすぎたせいかもしれない。

ワカタケ王子の祖父の帝が死ぬと、すぐ叔父

たちの間に帝位をめぐつて争闘が繰開げられた。まず第二王子のナカツ王子が、反乱を起して兄の第一王子に殺された。ナカツ王子は、兄の許婚の姫に恋慕して、姫と通じたためだともいわれている。

第一王子はナカツ王子と通じた姫をいちじ妻に迎えたが、やがて自分の妹を后にして帝位についた。この叔父帝の死後、その弟、祖父帝の第三王子が帝位をつがれたが、在位五年にして、ふいに死なれた。その死因はわからない。ワカタケ王子は、叔父帝が謀殺されたのだと、巷のうわさにあるときいたが、直接、耳にしたわけではない。確める心にもぶる。なぜなら、次に位をついだのが、父の帝だからだ。

ワカタケ王子には四人の兄と四人の女姉妹があつた。長兄のキナシ王子は、皇太子になつたが、妹のカルノ姫と恋愛したのを理由に、伊予に流され、あとを追つたカルノ姫と心中してしまつた。

帝位には次兄のアナホ王子がついた。

ワカタケ王子はいつか妹のカルノ姫が、彼に泣きながらいつたのを忘れることはできない。

『アナホ兄さまは、ご自分が、帝におなりあそばしたかつたのです。』

『そりや誰しもそうだろう。ただの王子で終るよりは、帝位についたほうがよい。』

『でも、そのために、肉親の兄をお殺しにならなくつても。』

『殺す？』アナホ兄さまが、キナシ兄さまを殺

したわけではあるまい。逆に大兄さまが、アナホ兄さまのお屋敷を攻めようとなさつたために、お流されになつたのだ。あなたは、大兄さまを愛しているからそんな風にひがんでとるのだ。』

『いいえ、女のカルノ姫には、年が下でもワカタケ兄さまより、大人の世界がわかります。宮廷の中は、いつも王子やそれを囲む権臣たちの欲望で、みにくくいたえぎつていのです。アナホ兄さまは、その中でも、冷めたい残忍なお心をおもちになつた野心の権化でらつしやるのです。』

『あなたはなぜまた、今日に限つて、わたしにそのようなことをいおうとするのだ。』

『あたし、兄さまが好きだからです。大兄さまも、あなたを一番兄中で愛してらつしやいました。ワカタケは、真情で乱暴な性格だが、純粹な自然の心をうしなぬ男だ。それは、ともし

れば、本来の心をうしなつて権謀術策の中で曲められがちな、王子たちの中では尊い。あれだけは、自分の心を素直に生かされる人間にしたいとおつしやつていましたもの。大兄さま、いいえ、カルノ姫の良人の遺言としてお伝えしたかつたのです。』

『キナシ兄さまの遺言?』

『そして、あなたの妹の……』

『あなたの?』

『兄が妹と通じるのがなぜいけないのでしょうか? 子が母と、弟が姉と……そうした関係は、時には自然な人間の心なのではないでしょうか。この国では、わたくしたちのご先祖、つい先の帝までは、なんの不思議もなかつたことではありませんか。それを今さらにとりあげて、キナシ兄さまを皇太子の位置から追うようになつたのは、アナホ兄さまと、その権臣の外国思想(からごころ)からなのです。いいえそれ

を盾にとつた野心から……。カルノ姫は、伊予に参ります。兄さまにも、再びお眼にはかれますまい。』

たしかに、祖父帝も叔父帝も妹を妃に迎え入れられた例は多い。カルノ姫がアナホ王子についていつた非難はあたつていなくもなかつた。

次兄のアナホ王子が帝位につくと、間もなく、ハタ姫との結婚にワカタケ王子がなんとなくわりきれない心のシュリを感じる原因になつた事件が起つた。妹カルノ姫のいつた次兄、アナホ帝の冷酷さにワカタケ王子がふれた。

○

アナホ帝が、ワカタケ王子には別に話もしないで、ハタヒ姫の許へ、王子の妻に姫を乞う使者をだしたのは半年ほど前のことだ。ハタヒ姫は、ワカタケ王子たちの叔母に當つた。父の帝の妹である。彼女は、ワカタケ王子たちの叔父彼女の兄、オオクサカ王子と共に住んでいた。ところが使者にいつたネノオミの返事では、ワカタケ王子には、姫をやれないというのであつた。理由は、『たとへ帝位についているアナホであろうと甥だ。叔父の自分に対して、まるで家臣の妹に対して強制結婚をしているような無礼は、許さぬ、と、とてもご立腹でした。』というのである。

アナホ帝は憤慨して、すぐ兵を叔父王子の屋敷に派遣した。オオクサカ王子は殺された。





『お前のために、たつた一人の叔父を殺してしまつたよ。』

アナホ帝は、弟王子にいつた。

しかし、ワカタケ王子は、いまだかつて、兄にハタヒ姫を妻に欲しいといったことはない。兄が勝手にきめ、勝手に叔父を殺したのである。兄帝が、自分の野望を隠すために、彼を利用したのである。その証拠に、兄帝は、オオクサカ王子の死後、その妻のナカシ姫を奪つて、自分の后にした。

更に、ワカタケ王子は、昨夜、ハタヒ姫から以外なことをきいた。彼は彼女と、兄帝の命令で昨日、結婚したのだが、その初めての床にむきあつた時である。

ワカタケ王子は、叔母といつても、一つ年長だけのハタヒ姫が、さぞ、この強いられた結婚に嫌悪をしめすだろうと思つた。乱暴なことが

好きで廷臣たちにも評判の悪い自分を、恐怖の眼で迎えるだろうと思つた。ところが、意外に、姫は彼を迎えて、頬を赧らめた。『すぐにほかにお通いになるのでしよう？』と、いつたりした。

『ばかな、あなたこそ、わたしを嫌い抜いていくせに。』

『まあ、どうして、そんな、姫は多勢の王子たちの中でも、あなたをたのしく思つてしまつたのに。』

いかにも心外だといわぬばかりに、不思議げな顔に姫はなつた。少しも、演技をしらぬ顔のように、あどけない顔をつくれる女だと彼は思つた。

『それでは、あなたが、父代りに仕へていらつした叔父王子を、あなた恋しさのためとはいへ殺した今のワカタケを憎んでか？』

『それは……』

急にハタヒ姫の表情が曇つた。悲しげに。そして、思い決したようにいつた。

『あなたがどうして、兄さまをお殺しなさいましょうものか……あれは、帝が。』

『兄帝は、わたしのために叔父を。』

『いいえ、はじめから、帝は、兄さまを殺そう算段だつたのです。』

『なに、兄帝が叔父オオクサカ王子を。』
『アナホ帝は前から、兄さまの妃、ナカシ姫を邪しまに愛して、歌など送られていたのです。』

それに、兄さまは、いつてみれば、アナホ帝より、帝位をおつぎになろうとすれば、先に有力なお方なのです。そのため、帝にとつては……』

一瞬だつたが、ワカタケ王子は、かつと頭に血の登るのを感じた。じつさい、誰も彼もが信用できなくなつた。

愛人のカラ姫がいうとおり、彼は他人を信じることとも、愛することもできなくなつてしまつた結果、自分だけを信じるようになった自身を感じた。ただし、カラ姫は、その時、『けれども、だからといつて、ご自分を愛することもおできにならなくつてよ。』といつたがどうか……自分だけを信じることは、自分だけを愛することにはならないのか……？

ワカタケ王子が、そうしかけりをもつているとはいえ、やはり、妻ともなれば可愛いハタヒ姫の寝顔に、ふと愛しさがつのつて、姫の肩にとりとう手をかけ、揺り起そうとした時だつた。ふいに夜殿の階段を駆け登る足音がした。
『王子、王子！』

『おお!』と、ワカタケ王子は答えた。
『帝が、帝が刺殺されなされました。』

○
アナホ帝を殺したのは、オオワカサ王子の子、マユワ王子だつた。ワカタケ王子より一つか二つ年下だつたと思う。彼は、母の連れ子としてアナホ帝の宮廷に来ていた。その日、ワカタケ王子の婚姻式後、帝は、ナカシ姫の膝に枕してうつらうつらしていた。ちょうど、母の部屋をたずねようとして廊下を渡つてきたマユワ王は、母と父の仇の濡れ場に思わず、扉のかげに身をひそめた。やがて、酔の發したらしい帝のいびきがきこえてきた。マユワ王子は、この絶好の機会を逃さなかつた。彼は帝の胸を一突きし、首をかき落した。母、いや今の皇后は別にとめなかつた。

マユワ王子はツブラ大臣の家に逃げこんだ。ツブラの娘カラ姫がワカタケ王子の恋人とはしらずに……。

ツブラ大臣は宮廷の権臣だつた。彼はマユワ王子をかくまつた。彼は娘の恋人ワカタケ王子に使をだしていった。

『臣が王に身の保護を求めた例はあつても、未だかつて、王が臣の家に救いを求めた例はききません。たぶん、臣が王子をかくまつてみたところで、戦いかてるものかどうか。しかしながら、窮鳥ふところに入ればのとへ、こうなれば、戦い死すとも王子をかばう所存です。娘も』

同じ意見です。』

『娘も……カラ姫もか。』

ワカタケ王子は、不意に背後から頭をなぐられたように感じた。

○
ワカタケ王子は武装すると、兄のシラヒコ王子の御殿に走つていった。シラヒコ王子は、ふだん着のまま、酒をのんでいた。ワカタケ王子をみると、『どうしたあわてて?』と、いった。

『兄帝が殺されたのですよ。』

『知つてゐる。それがどうした。兄帝も好きな女の膝枕で死ねば本望さ。』

『ばかな!』

ワカタケ王子はふと、カラ姫の面影を思い浮かべた。自分の猛りたつ心の底をシラヒコ王子にみすかされたように思った。

(くそ! どいつもこいつも!)

彼は心の中で叫ぶと、いきなり、兄王子の衿首つかんでひき倒した。

『な、なにおする。』

『殺す! 誰も彼も殺してやる!』

ワカタケ王子は太刀の柄を握んだ。

(やつぱり、あなたも帝位につきたくて。)

ふつとカラ姫の微笑が浮かんだ。ワカタケ王子は、兄王子の肩先に、女のまぼろしを斬り拂うように太刀を打込んだ。

『そうだ。おれは、おれだけの心を信じるぞ。おれの心のままに、なにもかもを握んでやる!』

ワカタケ王子が次の兄、クロヒコ王子を殺したのは、それから数刻後であつた。

彼は兄をひつかかえると馬に飛来り、田畑のあるところまでいった。そこに穴を臣下にほらせて、兄王子クロヒコを投げ入れた。

『救けてくれワカタケ! 帝位はお前にやる。いのちだけは救けて!』

ほえわめいて穴をはいでようとする兄王子にワカタケ王子は笑つていった。

『自分の力ででるがいい。』

彼は臣下に、一尺二尺と、土を穴になげいれさせた。しだいに土はクロヒコ王子をうずんでいった。それが胸まできた時、クロヒコ王子を咳をした。同時に血を吐いた。

『ぎやッ!』と叫ぶと、土に首だけだした兄王子の眼玉が飛びだした。

二人の兄王子を虐殺すると、宮廷の兵は、ワカサ王子の許に忠節をちかつた。

『来い、おれと共に。お前たちをいまに、王子の軍人から、帝の軍人にしてやろう。』

ワカサ王子は、自分が次第に活気のある帝王として誕生してゆくのを意識した。彼の心には、数日前までの、もやもやしたかげりの後もなかつた。

(カラ姫よ! わたしの病に、人殺しが良薬だと教えてくれたのはお前なのだ!)
彼はツブラ大臣の家を囲んだ。

大臣の家は火の中にあつた。すでにマユワ王子は首を落されていた。ツブラ大臣は数本の矢を胸に射られて、蟲のいきで庭にまろびでたところをワカタケ王子に発見された。

『姫は、姫はどこだ！』

ワカタケ王子が耳もとで叫ぶと、ツブラは力なげに、まだ火のうつらぬ離れ屋を指でしめした。

ワカタケ王子は、ツブラの頭髪を鷲掴みにすると、ずるずるひきずつていった。

『王子！ 火がまわります。危ない！』

部下が袖をひいたかワカタケ王子はふりきつて火の中に突進した。

カラ姫は数人の侍女と共に床に袖を重ね、そこに顔をふせていた。王子は、その前に、ツブラの頭髪を下げたまま突立つた。

『姫、これを見よ！』

『あッ、王子！』

カラ姫は、ワカタケ王子の衣襟（ズボン）のひざにすがりつこうとした。彼はその肩を蹴倒した。

『みろ！ 姫！ きさまの父は、つぶされた蟲のように、倒れている。ほれ！』

ワカタケ王子は、ツブラを床に投げだすとその胸を踏みつけた。

『うッ、くッ！』と、ツブラは、弱々しげな手で空を掴んだ。矢きずから血が吹き上げた。

『ああッ！』

と、カラ姫は、再び、父の胸の上のつた王

子の足にしがみついた。

『むごい！ そんな！』

『むごかろうが、なま殺しはむごかろうが、姫よ、この踏みつけるワカタケの心が、そちに踏まれた、ほれ、この足の下の血だらけの姿よ！』

『人でなし！ いつそひとおもいに、お殺しなされませ！』

『苦るしめ、苦るしめ！ 苦るしむがよい。このツブラがいのちのほのおが、まだたえぬまに愛しい姫の婚姻の嫁をみせてやりたいわい！ おのれがいのちを奪うた男の下で、裸を踊らす娘の姿を！』

ああカラ姫はよろよろと立上ろうとした。その腰をワカタケ王子は再び蹴りつけた。

『ひえッ！』と、悲鳴をあげて、カラ姫は、二度、三度床を轉んだ。

『お許し下さいませ。姫に生恥をみせないで下さいませ。お心静めて、姫をみて下さいませ。』

姫はこれまで一度たりとも、王子にそむく心になつたことはございませぬ。父がなんと申しあげましたかは存じませぬが。』

カラ姫は細い腕を振りたてて、王子の腕を拂おうとした。だが、人なみすぐれた彼の力に抗しようもなかつた。いぜんのやさしい彼の心を呼び戻すことだけが、ただ、ひとすじ、彼女を、衆人の眼にうつるだろう屈辱から救う望みだつた。彼女は、身につけたかね（物）のはがされてゆく間も、懸命に懇願した。青摺の衣が、破られた、腰の赤紐はたちまちぎり捨てられた。

ほんのわずかのすきに立上つて逃れようとする足首がもすそにからんだ。首や耳の管玉（くだたま）だけが残つていた。この腕やももにつけた玉釧（たまぐしろ）は、激しい抵抗に飛び散つた。足結（あゆい）の鈴がコロコロ、時ならぬ優美な音をたてた。

王子の身をきずかつて、追つてきた近臣たちも、勝いくさに、今は双方向のものもない気配けした顔を、あきれたように、屋の奥に向けて立ち盡していた。かあッともえ上つた炎が、室内を染めて、その影が、白い奥の人の上でわれるのに、はじめて、あわてたようにくりりと背を向けかえた。

○

ワカタケ王子は帝位についた。彼は従来の帝よりも遙かに国勢を盛んにした。つまり、戦い勝つた。養蠶を盛んにし、外国の新知識を入れ、支配力を確実にしていった。

三人の兄弟を殺すと同時に、その権臣を殺した。彼にそむくものを待つて殺していつては、自分が危ない、これが、ワカタケ帝の皇帝学であつた。

叔父帝の長子オシハ王子やその弟王子ミウマ王子、つまり彼のいとこたちを殺したのもそのためだつた。

オシハ王子にはある日、狩にさそつて、山林にさそいこみ、『猪だ！ 猪がでた！』とさそつと、射殺した。オシハ王子の臣たちが泣き哀



しむと、『猪だと思つたのだ。猪でなくてよかった。猪だつたら、従兄王子だけではなく、わたしまで突き殺されたよ。みなもよろこんでくれ!』といった。

ミウマ王子のほうは、兄王子の死をきいて兵を集め戦つたが問題にならなかつた。

ワカタケ帝は、道でも、いい女がいるとすぐ馬を駆けつて側にいった。臣下の口をして、物をいやすことなど面倒臭かつた。ある時、モノノベ大臣が、それではあまりに威厳にかかわりますという、帝は答えた。

『威厳は、氣にくわぬ奴やさしでがましい面をわたしの前に見せる奴の首を、間髪を入れず叩き斬ることゆきわたるものだ。』

そして、にやにやしなから、太刀の柄を叩いた。モノノベ大臣は蒼くなつてひき下つたが、後、人に語つて、『わが国はじまつて以来の聖帝らしい聖帝だ。外国にも例のない大惡の大君だろう。』とよろこんだという。

路傍でみつけた女の中で氣にいつたものはすぐ采女(うねめ)に召しよせた。その他、諸国からも、美しい女をさしださせた。また、誰の娘だろうと人妻だろうと、うわさをきくと夜這うために行幸した。奈良やら吉野にもそのため旅行することもあつた。

彼はきまぐれだつた。一度、クダラの王から送つてきた姫が、別に男をこしらえたということをきくと、二人を素裸にして、逆十文字に立木にしばりつけ火あぶりにした。別の時、同じように、女のひとりが、男をつくつたのをしつて、男を、折柄、建築中の棟の上にのせ、そこを渡らせた。

女が男のピンチに、蒼白になり、時に顔を蔽うのを、帝はじつとみつめていた。棟の上の男が降りて来ると、次には女の番だ。この時は、男はよう上を向かずじつにいた。帝は笑つて、『わたしが見た岩はこけむしてはいなかつたが、お前が登つてみたという岩も、どうやら同じらしいな。』といった。

女が降りてくると、いよいよ、火あぶりにさ

れるかと、当人も見物もはらはらしていたが、別になにも命じなかつた。ただ女のほうは、数日後自殺した。ひととちがつておさなげな姿なのをうわさされたからという。

ワカタケ帝には、ただ、いつの場合も、空しいなげやりの心配がうかがえた。ある日など、大工の名人マネという男が、石の上に材木をおいて斧でけずりながら、少しも刃先も石も傷つけないのをみて、『お前は、刃先を絶対石につけることはないか』とたずねた。マネは絶対に、と答えた。帝はにやりとして、マネを宮廷に連れてくると、侍女全員に、裸体になつて、庭で踊るよう命じた。マネには、石の上で木をけずらせたが、マネは、女のほうにきをとられて、石を叩いてしまった。

『きさま、わたしにうそをついたぞ!』

帝はマネを反逆罪で捕えさせた。しかし、すぐ許してやつた。人々は帝の移り気といつた。カラ姫だけは、そんな場合、淋しそうにうつむいた。

また、朝臣でタサというものがある日、朋輩たちに、妻君自慢をしているのをきいて、その女房、ワカ姫の許に、ワカタケ帝は忍んでいった。ワカ姫は拒んでいうことをきかなかつた。良人の自慢通り美人だつた。

『あなたは、わたしのやつたことを見きしなかつたわけではあるまい。この国の草の一莖すらわたしのものだ。あなただつて、わたしのものではないか。そうではないというのか。』

ワカタケ帝はれいによつて、とひざを合して固くなつたワカ姫におどし文句をならべた。

『この國の民草としてのわたしはあなたのものです。けれど、女としてのわたしは。』

『良人のものだといふのか。わかつた。わたしは、その良人をこの國から、別世界へ移そう。』

ワカ姫はないた。だが、帝の心のままにはならず、たとへ幽明境を異にしても、といつた。

ワカタケ帝は良人のタサをミマナの大使に派遣した。ワカ姫は良人に一緒に連れていつてくれと懇願した。

『もし残つているとあなたと生涯あへないかもしれせん。』

『お前はおれの出世にけちをつけたのかい。女の代りはあつても、出世のチャンスは一回ぎりだ。』

ワカ姫はタサ大使の出発後、帝の妃のひとりになつた。自分から、帝の許にいつたのだ。

『タサのはく情さゆえに愛心したのか?』

ワカタケ帝がきくと、姫は答えた。

『いいえ、あなたが帝だからです。』

帝はなんだかたまされたような顔をした。

ワカタケ帝は老年になるほど、多くの妃の中でも、カラ姫を特別に愛するようになった。月日が、ふたりの若い頃の情熱の破綻をつくろうていつたようだ。彼と彼女の間に生まれた皇女が、一夜、侍臣に犯されて自殺した事件があつたから、ふたりの仲はいつそう舊に復したようだつた。

(をはり)

◇絞殺の心理◇

若くして恋人を殺すものあり

老いて恋人を殺すものあり

快楽の手もて首しめ殺すものあれば

黄金の手もて絞め殺すものあらむ

これは「サロメ」の劇詩人オスカーワイルドの詩だが、元来情痴の果ての犯行や、暴行殺害の際には、絞殺、扼殺が最も多いようである。

別段前々から計画されたものではなく、とつさの激情から殺害に至るのだから、前もつて兇器の用意がないこともその理由の一つだが、その無意識根源は、下腹部の代償としての首、と云うことが考えられる。

美姫サロメが首を欲しがつたのは、たしかに彼女の去勢コムプレクスのせいである。その露骨な例は「お定事件」だと云える。彼女の場合は扼殺後ベニスを切斷している。

一世の毒婦とうたわれた高橋お伝の浪之助殺しが絞殺。十数名の少女を犯した吹上佐太郎も又常に絞殺。小平義雄に至つては、一人の被害者に絞殺、扼殺と繰返している。

「暴行中扼殺、さらに細紐で絞める」「扼殺後暴行中再び荒縄で絞め直した」と云うような殺害方法を行っている。これは淫魔小平の残忍非情な犯行を物語るものだが、実は彼の性的劣等感の証明でもある。彼は絞首による去勢コムプレクスの満足を味つていたのだ。



邪淫教秘話

婦人達は來會者の男達に自分の腹を打たせ、男達がやがて彼女等の上に折重なるように夢中になるまで——婦人達はそれらの男達に胸と云はず、腹と云はず股間までも露はにして見せ、遂にはその男達と愛慾の争闘を起し無數の亂行痴態を現出するのが常として之らの激情から踊りだすのだ。

中野 榮 三

性的欲求と宗教

原始民族の間では人間の生命は凡て神の神秘力の支配下にあるものとして、彼等は自然本能のまゝに生活した。そしてその本能的な生活とは繁栄と優越とであり、これを生物の

二大本能と名づけられている。繁栄本能のうちには自らの生命の保全ということと、子孫の継種をしようとする本能がその根底を爲しているのであつて、子孫を継続させるといふことも、結局は自分の生命慾の延長を意味することになる。斯くて繁栄するのであ

るが、また自然淘汰の原則によつて劣者は常に絶滅し、優者が繁栄するのは生物自然の優生学的現象なのである。

この事は実に太古より現代に至るまで不変であつて、基本的には人間社会の進化を超越した原則的なものである。従つて人間の慾望

には常に此の本能に対する魅力を断ち切ることは出来ないし、この爲にする努力には頗る力強いものがあるのである。

原始人は男女が交合することによつて、不可思議な喜悅と子供の産れることを知つたがその自分等の分身の増すことは、これも彼等にとつて大きな喜びだつた。そこでこれを神の神秘と爲し、その造物主の表徴として生殖器崇拜の思想が起つた。殊に古代女性間に於ける男莖の模造物は、多産祈願の対象たる偶像だつたのであり、神聖なる宗教的な目的で使用されたのだつた。然しやがて彼等の強い信仰心は只それを礼拝して祈願するばかりでなく、実際にこれと交つた。秘具「張形」の起原はこれからだと説くものがある。

たとへそれが宗教的に起つたにせよ、猶そこには人間の本能的な慾求とか、快樂追求のあつたことは否めないだろう。斯様に本能的な慾求が宗教に結び付いて考えられる場合もあるし、或は本能的慾望を利用して宗教を広めようとしたものも少くなかつた。

神秘的な手口

佛教ではその教えを説教する一方、大衆には只念佛によつても救われると云つてゐる。むづかしい経文は決して説教しないでは理解出来ないけれども、その説教には音楽的なリズムを伴い、衆生をして有り難がらせ、一種の快感を与えるのに充分役立っている。キリ

スト教には更に世界的名曲である讚美歌が行われて人々を樂しませてゐるのである。近代の寺院では佛教音楽とか舞踊まで採入れられているのも、なごやかな樂しみを与え信者を吸合する手段に外ならないとも云える。

かつて江戸に按腹師で久庵という者が有名になつたことがある。彼の施術が如何に上手であつたのか知らないが、同じような業者の多い中で、彼の評判は次第に高くなり、殊に上流の婦人や未亡人などが多く出入して、益々流行した。然し後に判明したところによれば、彼の按腹は單なる按摩上み下もではなくて、女体が魅力的な快感を催すあらゆる部分に秘術を用いたのであつた。謂はゞ川柳にも云つてゐる通り「座頭の坊撫でるついでに扶るなり」といつた式の施術だつたから、来る客はそれが本能的な神秘に触れたことは云わずに、次第にそれとなく評判になり、多くの女性が集つて来たというわけだつたのである。

また「見たことがあるとは下卑た口説よう」とかいつた意味の川柳もあるように、只それだけで落ちてしまつた昔氣質の女もいたのであり若嫁が一度診てもらつた婦人科医に途中で会ふと、道を避けて隠れたとの話があるかと思ふと近世には診療に来て洗滌してもらつたことが忘れられずに、それから以後は別に大したこともないのに屢々来診して洗滌してくれと頼む婦人もいるとか。そこには実に複雑な心理が働くものである。

またこんな昔咄もある。ある独身で非常に美人の巫女があつた。ところがひそかに此の巫女に想いを寄せていた男が、何んとか機会を見付けて云い寄ろうとしたが、いつもその機を逸して思ひ余つた末に、遂にある夜その巫女の寢所へ忍び込んだ。そして愈々愛情の極致を示そうとした時、巫女が寢返りを打つたので驚いて男はその体から離れた。すると今迄よく眠つていて知らないと思つていた巫女が「なにをする、この馬鹿者！」と云つたので、男は一層驚きあわてゝ逃げ出すとすると、巫女は重ねて「馬鹿奴！逃げると狐つけるぞ」と叫んだとの話がある。

も一つ別の話にも、若くて美しい尼僧が、至極行いすまして独り住つてゐた。或る時村の若者達が集つていろいろ賭け事の話が出た折に、「どうだ、あの尼さんをする事が出来るか」と云い出した者がある。「それなら己がやつて見る」と答えた若者が出た。それから様々思案した後、若者は尼僧の家を訪ねて、「実は自分の母親が年老いて永の病、もう助かる見込みも盡きたが、たつた一つの呪いはその倅と同じ寅年の女の××を百遍撫で、祈願すると必ず治ると云われたことである、そこで人助けと思つて此の願いを聞き入れてはくれまいか」と頼んだ。尼僧も人助は出家の役、「それなら、この事は絶対他言しないという約束で」とて許した。そこで男は倅の役目で十遍撫でる毎に数取りに一と突きする

と、尼僧はやがて「もうよいから、数取りばかりにしろ」と云つた。これは一つの馬鹿咄に過ぎないのであるけれども、迷信に事寄せた斯うした話は屢々行われていたのである。或る未亡人が、遊びに来ていた近所の懇意な男に「近頃は兎角上気せ性になつて困るが何んとか方法はないものだろうか」と話すと男は「そんならよいまじないがある、だがこれは絶対に人に知れないようにしなければならぬ」として、便所に入つた時に心に念じ乍ら、三度自分の吉舌を引くことだと教えた。勿論そんなことで治る筈がないから、その後男に逢つてその話をする、「でも諺にものぼせ引さね」と云うことがあると云つたものである。昔の人達はその理由も考えずに単純に斯うした諺などを信じ込んだ。

裸體と亂舞の宗教

さて斯様に性的な魅力を宗教に採入れた類は古今東西にその例は尠くなかつたけれども殊に甚しいものは所謂邪教として、やがては排撃追放の憂目に逢つてゐる。

外国でも宗教的儀式や祭典の集いに、男女の自由な遊交を許した風俗があり、宗教売淫の始まりもその儀式に随行する巫女によつて行われたと云われる。

西曆二世紀頃ノスチック教の宗派として出たアダミーンテンでは、アダムとエヴァに象つて彼等が神への奉仕には、常に男女の信者は

互いに全裸となつてその共同の下に行かねばならなかつた。その後ボヘミアに出現したタボリーテンの分派でも同じ名が用いられ、この宗派では共產主義を生性共同体にまで強調し、全裸になつて毎夜舞踊し続け、粗暴な放逸に耽つたのである。

一七三〇年に佛蘭西に起つた痙攣宗徒達は、巴里のメダルドウス教会を集合の場所と定めてそこに業々しい祈禱を捧げるのであつたが、それが如何にも狂氣じみたもので、次第に発作的痙攣状態に入り、婦人達は来会者の男達に自分の腹を打たせ、十人以上もの男達がやがて彼女等の上に折重るやうに夢中になるまで、安靜には立返らなかつたと云われている。或は斯くして婦人達はそれ等の男達に胸と云わず、腹と云わず股間までも露わにして見せ、遂にはその男達と愛慾の争鬭を起し、無數の乱行痴態を現出するのが常であつたし、時には之等の激情から自然と踊り出し、多数の人々が放埒な乱交を行うのであつたが、人々は其処に神秘的な意味を理由付けて狂信してゐるのだつた。然し遂に一七三二年に政府はこの教徒達の集会を禁じ、解散を命じたが、その後も相当に長い間、彼等の仲間同士ひそかに此の行事を続けていたとのことである。

があるわけだつた。

江戸時代の延命院事件は実に大奥と僧侶との二大禁慾生活の破綻を暴露したものだつたが、更に人間の怪しき因果を孕んで織りなされて起つた有名な物語りだつた。事件の概要は斯うである。

江戸の延命院事件

時代は天明、寛政、享和に互つて関連があるが、事件の中心となつたのは下谷の延命院。この日蓮宗延命院の七面大明神は、慶安元年大奥三沢の局が甲斐の七面山に千日の間参籠して、夢中に一枚の鱗を得たのを祠つて当社を建立したと云われ、後には新吉原、浅草、葭町、葺屋町あたりの芸娼妓、茶屋女、役者などの信仰が多かつたのである。

徳川時代に佛教が盛んになつたのは、様々な形式の外教禁止の手段として佛教に対しては幕府が特に多大の保護を与えたからだつたが、もつと直接的な原因は將軍綱吉の母堂桂昌院が特に佛教を信仰して、屢々国費を投じて巨利を起し僧侶を厚遇した爲だつた。がこの事は後に天下泰平となつてからも、加持祈禱に依頼する風習と殊に大奥の女人達と僧侶とを接近させる原因を作つたのである。

谷中の延命院も斯うした中に建立された一寺であつたか、天明の初め頃は日対和尚が此の寺の住職を勤めていて、何事もない平穩な寺だつたのである。問題の破戒僧日照は幼名

丑之助と云い、初代尾上菊五郎の子として数奇な運命の下に育つたのだつた。

初代尾上菊五郎は俳名を梅幸と云い、京都四條の尾上左門の弟子として京阪の劇界では大立物だつたが、江戸葺屋町の市村座に出たのが縁となつて、菊五郎は江戸に住うようになり、葺屋町河岸に御髪油の製造所音羽屋という小間物屋を開いていた。ところが宝暦十年十月に此の音羽屋の店から火を出して、附近数百軒を類焼させたので、菊五郎は一時憂うつな日を過したが、四代目団十郎の肝入りで再び人気を盛り返した。

そこで菊五郎は一端京都に帰り、相変らず舞台に立つて全盛を続け居たのであつたが、



そのうち縁あつて駕屋の娘お袖というのを妾にした。然しこのお袖は姪婦というか多情女というか、菊五郎の目をぬすんで、本国寺の院代で義道という法師と通じ遂に男の子を産んだ。それとも知らぬ菊五郎はこれを我が子と信じて丑之助と名付け自家に引取つて芸事を仕込んだのであるが、丑之助が十六歳になつた天明二年正月に、菊五郎は彼を連れて二度目の江戸入りをしたのである。そして丑之助の芸を江戸前に仕込むために、玄治店の住いから、靈岸島の踊りの師匠市村熊次郎のところまで通わせた。然るに丑之助はいつしか小間物屋で三河屋喜兵衛の娘お梅という相弟子と人目を忍ぶ仲となつたが、やがてそれが評判になると、お梅の店の手

代で房州生れの伝吉は、長年こゝに勤めて来て将来はお梅と一緒に此の店の跡目をつぐつもりであつた爲に、一途に嫉妬の情をもやし、いつそ丑之助を殺してしまおうと決心した。丁度天明三年十一月末の寒い北風の吹く夜だつた。伝吉は出刃庖丁を携えて市村座の附近に待ち伏せていたのである。

そこへ黒縮緬のお高祖頭巾をかぶり、男衆を従えて茶屋の女に送られながら出て来た一人の役者があつた。伝吉は直ぐさまその跡をつけて、人形町から玄治店の路次へ入ろうとしたところで、いきなり追いつがつて役者の脇腹を只一と突きに出刃を刺し込んで殺してしまつた。

だがこれは丑之助ではなくて、菊五郎だつたのである。不運な菊五郎は斯くして生さぬ仲の一子丑之助の身代りとなつて非業な最後を遂げてしまつた。丑之助が延命院の住職日対と知り合つたのは其の後のことで、五代目団十郎と共に忠臣蔵をやつた時からだつた。

艶僧日照

その後間もなく丑之助は養母からの手紙で京都へ歸つて行つた。最早丑之助も年頃になり天性の美貌の上に芸道で暮して来た彼は、立派な若衆となつていた。否そればかりではない、彼には生れながらにして妖艶な血潮が植えつけられていたのである、そして彼を見彼に接した女性は、自から不可思議な妖術に



でもかかったように、云い知れぬ淫蕩的な魔力に魅せられてしまふのだつた。

丑之助が養母の許から舞台に出ていた関係上、同じ役者の嵐雛助の後家お繁には何に彼と世話になるので屢々その家に入出入するうち遂に母親程も年の違うお繁から仕掛けられて濃艶な恋のとりことなつてしまつた。ところ

で此所でもまた先代の頃から勤めている番頭の新兵衛が、師匠への忠節心と自分さへかなえられなかつたお繁に対する恋慕心から、遂に心乱れて兩人が睦言の部屋へ鏝切庖丁を振りかざして飛び込んだが、新兵衛は丑之助を追つて出た二階の廊下から、足を込べらして庭へ落ち却つて我れと我が脾腹へ持つていた庖丁が突き刺さつて死んでしまつたのである。

これが不思議にも菊五郎が殺されて一周忌の晩だつた。何れも恋のいきさつが原因となり、思いもよらぬ事件が起り、二度までも人が死んでいる、妙な因縁と流石に丑之助も心おそろしくなり、いつそ出家して僧侶として暮そうと発心なし再び日対を訪ねて江戸へ出て来た。

斯くて三年間を丑之助は小姓として延命院に住み、二十一歳の天明七年に剃髪得道して名を道曉と改めたと伝えられる。若くして法衣をつけ頭を丸めた丑之助の道曉は実に眉目秀麗、まるで絵を見るような美男の僧であつたから、参詣の婦人達は一と目見て魂を飛ばせ、彼の姿を見るために参詣するようになつた。然し今の道曉は頗る道徳堅固に身を持して女犯の恐ろしさ

を警戒していた。

ところが此処にまた、以前妙なことから知合つた武家上りの不頼漢で、仲間と一緒に僧侶を装い乍ら所謂蓮華往生の悪計を用いたという岩田長十郎がひよつと丑之助を訪ねて延命院に來り、丑之助のとりなしで名も柳全と改めてこゝに留ることゝなつた。だが根が悪党で智恵のまわる柳全は、こゝでも悪い考えを起し、美男で妖艶な丑之助を利用して蓮華往生以上の繁昌を目論んだのであつた。これがそも／＼延命院事件の始まりである。そして当主日対和尚も彼の爲に殺され、偽の遺言で丑之助の道曉に跡をつがせ、柳全が計画通りの芝居を打つことが出来たのである。

更に惡の因縁は恐ろしいもので、かの菊五郎変死の原因を爲した丑之助の以前の情婦、三河屋のお梅は、その後世間の噂を避ける爲に現在では、牛込市ヶ谷の尾州家から中老梅村の許に差出されていたのであつた。ところが此のお梅が昔の菊五郎時代の丑之助との情事を物語つたのを聞いて、中老梅村はまだ二十三歳の女盛り、然も男子禁制の不自然な大奥勤めではあり、相手が役者だつたと聞くと妙な氣にならないわけにはゆかなかつた。ましてお梅で出来た男なら、主人である梅村が出来ないことはあるまいと、とんだ征服慾を起して延命院へやつて来た。それからあの手この手で遂に道曉を口説き落し、彼に女犯の罪をおかさせてしまつたのである。

この噂は直ぐにお梅も聞いた、それからそれへ大奥の女中達の耳へも入つて禁慾生活者の血潮を沸き立たせたのである。梅村と肩を並べる中老で、松平主税の娘として羽振のよかつた初瀬も三十二歳の大年増の身を情炎の渦にまき込まれて、無病息災の祈禱を願い出させた。供廻りもりしく立派な乗物で延命院を訪れ、多額の祈禱料を納めて道曉の祈禱を乞うたのである。勿論梅村のことも承知の上といった態度をはめかしての頼みであつたから、道曉も只「御奇特なこと……」と望み通りの祈禱に応じたのである。



の秘密の建築にとりかかつたのである。大奥御用の金文字を記した長持の底から地下室に通じた梯子が作られ、地下の密室はいくつもに区切られて、床の間の壁が廻転したり、袋戸棚の抜け穴から次の間へ出られるように作られたり、数知れぬ多くの小室が二階三階と蜂の巣のように作られた。そして綺麗な座敷には晝も明か明かと灯がともされ、日毎に押寄せる信徒のうち良家の娘や身分ある年増、金持の内儀から、美しい後家まで、祈禱に托して片つ端からは等の密室に誘い込まれた。日照初め柳全も寺侍の森山丈之介もそれ／＼腕によりをかけて、婦人の

かくして梅村も初瀬も屢々延命院を訪れるようになったし、お梅も梅村の供に混つてやつて来た。延命院は次第に評判が高くなり収入も増した。やがて道曉は日照と名を改め、中老初瀬の幹旋で大奥へも出頭して祈禱するよう仰せつかつた。年若く美男の彼が芝居道で身につけた所作をその儘に、紫の法衣、金らんの袈裟をまとつた姿は、絵から抜け出したようであり、祈禱などはどうでも只彼の容姿を見るだけで、姫君、奥女中、その他の女達までが大騒ぎした。こうなると柳全も一層野心をたくましく出して、愈々延命院

信者を籠絡した。

かくて是等の乱行と延命院の隆盛とは、享保三年奉行所の手入となるまで続いたが、遂に柳全の旧悪があばかれ、江戸引廻しの上磯刑となり、森山は一端お梅と連れ立つて逃げたが後遂に品川で情死を遂げ、日照は死罪、普請をした大工まで遠島の処刑を受けて事件は落着いたのである。

眞言秘密の立川流

流行の宗教殊に邪淫教には多少とも常に斯うした性的な神秘が利用されて来たのである。

またそれが人間本来の真道であり、そこから誠の道が拓けるとして公然と淫楽を許し合ひ、暗に布教の方法を策したような宗派もあつて、眞言秘密の密教「立川流」の勃興も事実だつたが、遂にその真相は詳かにされない儘に禁止され、その後も各地に残党の信者がひそかに小集団で会合し、邪教を行つていたとも伝えられる。

この教義では天地の森羅万象を金剛界と胎藏界との二つに分け、これを男女に配し、男女が交会することによつて即身成佛が得られると称して多くの信者を集めた。

レスボス・テクニク

「おっぱき頂戴」「吞んでくれる？」
 「汚くない」「汚いなんて、そんな……ね、頂か
 して」相手のからだのなかへ、何か送りこみたい—自分の
 なにかを相手の奥の方へ……

園村 恵子



「ばらの口づけ」

れすぼすの愛のうちで、何と云つても、一番たのしくて、同時にまた、一番むづかしいのは、何も知らない、うぶなお嬢さまを仕込むことです。

おぼろげに、愛というものが、どういふものかは知つていても、實際に、その場になると、ぶるぶるふるえて、

「こわいわ、こわいわ」

と云つていらつしやる、……そう、年齢なら、十五か、十六か、可愛い「セーラー服」もまだ、胸のところなんかは、上級生のように張つてなく、だぶだぶで、でも、もうおしやれだけは、人並に、上衣の胴を、上級生のおねえさまの真似して、キュッと、細くして、スカートの寝押しも毎晩かゝさない……そんな年頃の可愛いゝかた。

そういう子にレスボスの愛を仕込むのは、一番むづかしいのです。だって、そういう子は精神的には、もう、かなりまかせていて、「お姉さま、私、お姉さまに可愛がりたいの」

だとか、「お姉様のお顔みているだけで、胸がきゅつとしちやう」

なんて、結構一人前のことを云うのですがそれでいて、いざ、二人つきりになつて抱い

たりすると、ぎこちなく体をふるわせながら「どうなさるの、いやよ。お姉さま……離してエ」

など、顔を真っ紅にしてうつたえるのですから。……

「どうしたの？ こわいことなんかないですよ。……お手紙にだつて、こうやつて、きゅつと抱かれてみたいつて書いてあつたじゃないの？ あれ、ウソだつたの？」

など、かまつてあげると、

「うそじゃないけれど。……こわいわ」

「バカね。じつとして、お姉さんにまかせなさい」

「だつて、……」

「そんな所へ力を入れないで……ホラ」

お乳へ手を入れようとしただけで、きゅつと、海老みたいに、ちゅまっちゃうんです。

そこが可愛いわ。だつて、そういう子ほど、いざとなると敏感で、面白いんですもの

レスボスでは、異性に對するほどおそろしさをもたないようですけど、それだけに、男の恋人だつたら、本當のギセイ心みたいな心で、じつと目をつぶつてしまうことも、いややつて、我儘云うのです。

だから雰囲気、とつても大切です。うまく、そこへ雰囲気をもつて行つて、甘い、やさしい気持ちにしていると、キスでも、自分から唇をつき出してくるのです。

膝の上へ抱きあげて、赤い唇と赤い唇とを合わせるのです。若い子の唇は、ミルクの匂いがします。

眼の上にするのは、やさしい慈愛のキスです。頬にするのは、姉妹愛のしるし。

そして、のどにするキスは、可愛がりたいという欲望のしるし。——唇にするのは、相愛の告白です。

唇に接吻してしまうと大抵の子は、もうダメと、かんねんして、靜かになります。だから、大変なのは、抱いて、接吻するまでで、接吻すると、女の子つてもものは、死んだ蛇のようにグッタリとなつてしまうもの。

それから、あとはもう、「お姉さま」の方の愛撫の上手下手一つで、きまることです。

レスボスの場合では、特に、おつばきが接吻のとき大事な役を果します。普通の男女の場合だと、おつばきは、大した意味はありません。他に大事なことがあるから。

でもレスボスの場合だと、それは、とても重い意味をもっているのです。お分りになりますか？

相手のからだのなかへ、何か送りこみたい、——自分のなにかを、相手の奥の方へ入れて相手のそれと混ぜたい——そういう欲望をもつことは、レスボスの場合だつて変りありません。いゝえ、それが不可能であると分つていればこそ、一層、狂ほしく、それを望むようになるの

です。

——そういう場合、おつばきをチュッと相手の口のなかへ送りこむことは、氣持の代謝になることです。それは、なにか、男女の愛と似た氣持を、私達におこさせます。受ける方は、ギセイと献身の氣持を、そして、注ぎ込む方は、相手を自分のもので汚すという、攻撃的な氣持を味わえるのです。

「おつばき頂戴」

「吞んでくれる？ 汚くない？」

「汚いなんて、そんな。……ね、頂かして」

こんな會話をするのは、レスボスの場合は特に多いのです。そして、このことに大事な意味をふくめるのです。おつばきを入れられた方は、

「あゝ……もう、このひとのおつばきを呑み込んでしまつたんだわ。もう、私は、このひとのもんだわ」

なんて、考えちゃうのです。

フィンガー・プレイ

最近、出て、ベストセラーになつた「女の兵舎」(鱒書房版)という本に、女の兵隊のレスボスのことが相当くわしく出ています。

そして、そのなかで、年上の女兵隊が、新しい若い子を愛撫する描写があります。よんでいても、顔が赤くなるような書きかたです。ちよつと、引用してみましようか。

レスボスが、どんな事をするのか、見えるようにかゝれていますから。――

「クロードの唇は、ユルスラの唇に火をつけたようだった。ユルスラは何もわからなくなり、体全体が燃え上つて、クロードの腕のなかで溶けて流れてしまうような気がする。何とかして意識を失わないようにつとめながらずるずるとクロードのベッドのなかへひきこまれてしまった。」

キッスによつて、弱くなつた娘の心と、つけはじめた肉体のうごきが、よく出てゐるではありませんか。二人はベッドへ入つて、――「クロードに抱かれてねると、ユルスラは自分が芥子粒のように小さくなつた感じだった。彼女は頬をクロードの乳房におしつけた。心臓ははげしく動悸をうっていたが、恐怖は感じなかつた。しかし、これから、どおいうことが起るのか、彼女には分らない。クロードは男ではないのだ。いつたいクロードは彼女に何をしようとしているのか。何という不思議な体の動き！ それは何を意味しているのか？ クロードは、ユルスラのパジャマのボタンをはずして彼女の小さな乳房を揉んだ。それから、静かに、非常に静かに、彼女の手は、ユルスラの体――彼女ののど、彼女の肩彼女のお腹を愛撫しはじめた。彼女はどうしていゝか分らず、眼をつむつて、体を硬くしていた。クロードはまたユルスラに接吻し、

愛撫しつづけてゆくのだつた」

読んでゐる私たちも、このユルスラという子と同じように、どうしていゝか分らなくなりますわ。二人の金髪のお嬢さんが床のなかで愛撫に狂うんですものね。

このときの、愛撫は、き

つとフィンガー・プレイですわ。それを上手にやつたに違いありません。上手にしさえすれば、その不思議な愛撫は

かたくとぎされた乙女の手入らずの扉をあけることが出来ますもの。

「クロードにとつて

自分のいゝなりになつてじつとしているこの少女が、どんなにいじらしく

思えたことか。ふるえる瞼、清

純な唇、そして子供の体をもつたユ

ルスラ！ どんなふうにかわり、よろこ

ばせ、陶醉させてやればいゝのだらう！ クロ

ードはこの子供の体にかくされている秘密を知りつくそうと、なほも愛撫の手をのばしていつた。それから、この小さな子供を驚ろかさいうに手をとめて、さゝやくのだつた。

「ユルスラ、あたしのいとしい赤ちゃん。あなたはなんて可愛いゝんだらう！」

手はまた動きはじめた。

こゝの所は、とくに、レスボスにと

つては大事なところですよ。フィ

ンガーのときは、赤ちゃん

とか、じつとして、と

か、お母さまにま

かせて、とか、

そういう言葉

をさゝやかな

くでは効果が

十分ではない

のです。フィ

ンガーは、相

手を抱きしめ

ながら、そし

て相手に愛の言

葉や、いたわりの言

葉をかけながら行える

という有利な点がありま

すけどなれた子にとつてはあま

り強い刺激ではないという缺点もあります。

でも、人によつては本當に魔物みたいにそ

れを働らせる事が出来ます。

これが指の働きなのかしらと疑ぐつてしま

うほど、うつとりさせられる事もあるのです

本當にそういうひとは、「レスボス」たら



しです。

花の露

「ね、花の露してあげようか」

「いや」

「なぜ、いやなの」

「だつて……お姉様に悪いんですもの」

「どうして？」

「だつて……私ばかり、何だか、楽しむみたいで。……悪いの」

「そんな事無いことよ。さア」

「恥かしいわ。お姉様」

「恥かしがつちやだめよ。お姉様が、させる通りにしてらつしやい。そのうちに、たまたまなくなるわ。……いゝこと、かたくしちやダメよ、じつとお姉様にまかせるのよ」

「あゝ、……恥かしいわ。」

そうして、お寝巻をかたく合わせているのですけど、それを無理にひらくのです。アスパラガスのくきのように、白くすんなりとのびたもゝ……それを、ひらかして、キスしてあげると、本當にアスパラカスを噛むみたいに、香ばしく、甘い味がするのです。水気も多い新鮮な莖です。

いつの日か、の美味を、あの、汚ないいやらしい男に捧げるかと思うと、一層切なく一層、おいしい心がこみあげてきて、……

「あ、お姉様。——私、なんだか……」

「どうしたの」

「軀がふるえるようなの。ふつと、どこかへ軀が行ちやうような気がして、怖くなるの」

「大丈夫よ。しつかり、お姉様につかまつていらつしやい」

「こういう風に？」

「そうよ。ぎゅつと……」

木馬にのつているような恰好になるのです。

一方は、全き犠牲の心。一方は、女王さまです。

この遊びは、そこに価値があるのですわ。愛は、ギセイですもの。自分がギセイになつて、愛するひとを、最高の夢の世界につれて行つてあげてる、と思うと、それだけで、グウツと、よろこびが、こみ上げてくるのです。

その報酬なのです。愛する可愛い子が自分のプレイに、身をもたえ、

「お姉さま、いや、いや」

つて、よろこびに泣いているのを見るのがうれしいの。

このタンゲ・プレイまで、もつて行けば、だれでも、レスボスの愛の、ダイゴ味を味わうことが出来るのよ。……これは、最高の神聖なプレイです。

これをしたら、もう二人は、離れられませんまた、離れようとしても、離してくれません。

男と女の、軀のまじわりが深まると、どんな支障があつても別れられなくなると云いますが

それと同じように、このタンゲ・プレイをした仲になると、別れられなくなつてしまします T という月丘夢路みたいなキレイな子がいました。あんまりきれいなので、男のひとにとられやしないかと心配で、一そ、もつとみにくい子だつたら、いゝのにと思つていました。が、あんの定、男の恋人が出来て、私から離れて行きました。

でも、会つて、

「今夜とまつていらつしやい。——いゝでしよ。たまには」

そ云つて、眼で、チラと知らせると、

「えゝ、……とめて頂くわ」

と、顔を伏せました。その意味が分つて、その誘惑に勝てなかつたのでしよう。ちゃんと、こつちは、それを計算に入れていたのですもの。果して、一緒にお床に入り、

「いや、お姉様、そこは」

「あのひとに操立てしようとするの？ ニクラシイ。それだつたら余計こうして上げる」

昔を思い出させるように、熱をこめて、愛の限りをつくして、してあげました。はじめは、きつちり、合わせて、こぼんでいましたが、そのうちに段々、軀の方が先に、昔を思い出したのか、

「あゝ、……お姉様。私」

とうわ言云いだして、キメの細かい肌に玉の汗を、ベツタリかいて、軀を、よけるよう

な、押しつけるような風にしてきて、狂ったように、何もわからなくなり、……それから肌を冷くして、ぐつたり、しほれた花のようになつて、手も足も、だらんと、延ばしたまゝ、眼を、半びらきにして、……口は、香ばしくひらき、その間から、もゝ色の舌が、のぞいて……放心のていでした。

「どうしたの？ ……うれしかった事？」

「何て云つたらいいか分らないわ。だつて……」

「彼のと、どつちがいい？」

「彼は、お姉様のようにして下さらないのよ……もつと乱暴なの。好きだから、それでもうれしいけど、お姉様のはもつと……」

「でしよう？ それがレスボスのよ。」

こうして、レスボスの良さを思知らせて上げてからと云うものは、T子は、時々、愛人のうでをすりぬけて、私のところへ、ダンゲプレイをしてもらいに、やつてくるようになり、……私は勝ほこつたような気になり、その度に、全力をつくして、よろこばしめてあげましたが、……そのうちに、ふつと来なくなり、……愛人に、それをしてもらえようになつたからでしようか？ ……私は寂しくて、そんなしつとめいた想像をして、なげきましたが、……

三人遊び

レスボスの面白いところは、三人遊びの出来ることです。

勿論、うぶな、恥かしがり屋の子は、いやがりますけど、少しなれて、刺戟がほしくなつてくると、たいてい、この三人遊びをいやがりません。

こゝが普通男女の恋愛とちがうところでしょう。

男女の間だつたら三人あそびなんてなり立たないでしよう？

なぜなら、男女は、二人で一組、それでびつたり合うので、たとえば、女一人に男二人でも、女二人に男一人でも、だれか一人はいつも仲間はずれ、うまく行きつこありませんわ。

そこへ行くと、レスボスは、みんな同性なのですもの。三人とも、軀も、もつている要求も同じようなものなのです。その時のプレイの仕方、男になつたり、攻められる方になつたりしますけど、本質においては三人同じものなのです。そこに三人遊びの成立する心理があるのです。

三人遊びは、二人で遊ぶよりずっと変化に富んだ、刺戟の強い遊びをすることが出来るのです。

心理も複雑になり、しつとがからみ、

「今度は私よ」

とか、

「いゝわ、……O子ばかり、そんなに上げてなら！」

なんて言葉も飛び出すようになります。

愛の言葉も、二人だけだつたら、とかく、しめつぽくなり勝ちなのですが、三人だと、わきから、茶々を入れたり、からかつたりしますから、ずつと華やかになるのです。

二人でひとりの子をいじめるのは、とくに面白いのよ。

「あゝ、止めて！ ねえ」

なんて、泣き出すのを、こつちは二人ですから、ぎゅうぎゅう押さえつけて、地獄のせめぎ合いに会わせるのです。

「ラ・ロンド」という遊びも三人なら出来ます。みんなが、みんなを愛するのです。でもこの遊びのくわしい事は書けません。

「そんなのダイハイスで、やだわ」つて云う子も居ますけど、そういう子でも一度、三人で遊ばせると面白くて、二人だけだと、物足りない顔をしようになる程です。

これはレスボスが女学校の寄宿舎や、女ばかりの家で生れた——という所からくる當然の宿命ではないのでしようか。

性毛蒐集放浪記

蒐集本数は既に三千本近い。私は本年内に三千本に達することを念願している

次第だ。しかし、そのうちの性毛の持主が判別しているのは、僅かに百七十人

私は、眞の意味のコレクションは、この百七十数本だけではないかと思う――

西澤 勉

何でも以前に物故した有名な外交官の中に、性毛を抜き取る名人がいたそうである。もちろん相手は生身の女性だった。

この大家は、この珍芸を、もっぱら座敷で芸者を相手にたのしんでいたらしい。つまり、ちやんと座敷着を着て坐つて、



酌なぞしている芸者の油断見すまして、いきなり猿臂を彼女の股ぐらにのびし、アツと云う間に抜取るのである。

それがもう名人芸に達していて、いくら芸者たちが用心をし、着物の前をキチンと締めていても無駄だった。どんなに自信のある芸者でも、必ずしてやられてしまう。名人は数本の陰毛を抜取つてニヤ／＼と盃をあげるし、女の方はキヤツと悲鳴をあげて取り乱す。内輪の酒宴なら、これほど興味深々たる余興はおそらく外にはあるまい。これは私が性毛フェティストだからと云うわけばかりではないと思う。

この話を聞いた時、私は非常に羨しいと思つた。その大家の名人芸である。若し私にそんな特技があつたなら、私がひそかに行つてゐる性毛蒐集は、どれほどか素晴らしい成果をあげることだろう。しかし、遺憾ながら、私にはそんな名人芸の持合せはない。だから蒐集の方法はひどく限られてしまう。

モノがモノだけに、このコレクションは、容易なことでは集まらない。それだけに又入手した時の喜びが大きいわけだとも云えるのだが――。

もちろん、女性と肉体交渉を持てば、その女性の性毛は必ず入手出来る。これは確実な方法である。

しかし、それは経済的にも体力的にも、私には無理が多いのである。殊に私は女性の性毛にあこがれる余り、房事そのものよりも、性毛の方に多く魅惑される、つまり一種の不能者に近い状態にまで来ている。いはば、性毛に憑かれ呪われた男だと云つてもよいかもしれない。

私は四十歳を過ぎた今日まで、平凡に生きて来た一公務員に過ぎない。もちろん、年功によつて、現在は係長級の職務については居るのだがこれと云つて、とり立てゝ有能な仕事をしたわけでもない。

格別仕事熱心でもないし、素晴らしい才能の持主でもない。いわば、何処にでも転がつているような、平々凡々たる一勤め人に過ぎないのだ。これはなんとも佗しいことだが、私の半生に於て、多少とも特徴を見出そうとするなら、性毛蒐集がそれである。

どうにも大きな声では云えない次第だが、実は役所の仕事よりも、このコレクシヨンの方に私はより多くのエネルギーを費して来たような気がする。どうも、公平に考えてそうのようである。

性毛蒐集を除いては、何の特徴もない平凡な男——それが私だ。甚だ不甲斐のない話だが有能な公務員を求めるなら、私の他にもいくらでも人材はあるだろう。しかし、これほど性毛蒐集に心魂を傾け得る人間は、まずあるまいと私は思う。

逆説的に云うなら、何事もなし得なかつた私

の半生に於て、この蒐集だけは誰にも劣らぬものだと信じている。現在でもそれだけが私の生甲斐なのである。

この蒐集に首をつゝこんだのは、私が地方の商業学校を卒業して上京してからのことだつた。当時二十三歳だつたと思うから、既に二十年に及ぶ性毛あさりと云うわけになる。尤もその間に戦争中の四年間は出征していたから、自然中止の状態だつた。念の爲に書き添えると、一口に性毛と云つても、私の場合は勿論女性のそれであり、男性のものには興味がないから、全然コレクシヨンには加えない。

蒐集本数は既に三千本近い。私は本年内に三千本に達することを念願している次第だ。しかし、そのうちその性毛の持主が判明しているものは、僅かに百七十人ばかりに過ぎない。私は真の意味のコレクシヨンは、この百七十数本の性毛だけではないかと思つてゐる。

私がこんなにも、他目には馬鹿々々しい性毛マニア、フェティストになつたのは、勿論原因がある。

私の郷里は広島市の近村だが、もの心ついた頃にはもう母親が亡くなつてゐた。父親は小学校の教師で貧乏な生活だつたから、雇人を使う余裕はないので、幼い私の面倒を見てくれたのは、九ツ年長の姉だつた。食事の世話はもとより、家の風呂に入れてくれるのも、みんなこの長姉だつた。

私が六歳の時に父親は後妻を迎えた。つまり

私にとつては継母である。そこで、私は始めて姉以外の女性の手で風呂に入れられたのである。

私はどう云うものか、その時のことよりも、むしろその夜、継母が父に向つて笑いながら話していたことの方を、よく覚えてゐる。床の中で聞いていたのだ。「大きな声を出すから、なんだと思つて吃驚したんですよ。そうしたらまあ、あの子つたら、皿のような眼をして、ジツとみつめていて、ウフフフ、いくら子供だつて、あんなに見られると……。だつて、「毛！ 毛！」つて大きな声で云いながら、指さすんだもの——」

晩酌をしていた父親は、苦笑ひしていたように覚えてゐる。

年若の姉にはまだないものを、私はその夜薄暗い湯殿で、継母に見たのだ。これが私が性毛を始めて見た記憶である。

今から思うと、この継母は九州の生れだが、ひどく多毛だつたように思う。

子供の頃から、その時の異様な記憶は、何時の間にかうすれた。そのため私は極く普通に成長した。ニキビが出来何時の間にかオナニーも覚えた。

それから商業を卒業後、二、三年田舎で暮してから上京したのである。二十三

歳だつたが、知人の紹介で某省關係の公務員となつた。その紹介者である知人の家の、二階に下宿させてもらつた。都の西部に當る落着いた住宅街だつた。

私はその二階で、青年らしい陰鬱と、うわついた氣持のまじり合つた毎日を過した。しかし臆病な私はまだ純潔だつた。

その真夏の或夜の事だ。急にひどい雷雨になつた。私は何気なく二階から下り、台所へ行こうとして、普段はあまり通らない廊下を通つた。多分水を飲みにくくつもりだつたのではなにかと思う。

私は廊下の曲角の手前まで来て、ハツと雷に打たれたように立止つた。その曲角を右に折れると台所、左側の角はこの家の一人娘、英子の部屋になつてゐる。私はその部屋の簾筒の前に裸体の英子を見た。

彼女は丁度下着を着替えようとしていたらしく、手に下着を持つたまゝ、何となく乳房のあたりをさわつてゐた。ひどい雷雨のために私の足音に気づかなかつたのだ。

電燈の下に輝くような、白い裸身。見事な乳房、丸みを帯びた美しい曲線。しかし、私が見たのは、白い下腹部に浮出してゐたものである。それが射るように、私の眼に飛び込んだ。白と黒との、あまりに鮮かなコントラスト。それは未だに私の網膜に焼付いてゐる。実に実に美しかった。

私はその夜、固い木綿布団の中で、英子のあ

のあざやかなデルタを思いながら激しい興奮で眠れなかつた。そして、グッタリと疲れてしまつた。

それ以来、英子の顔を見、声を聞く度に、いや役所で仕事をして居ても、彼女の美しい個所が思出される。私はそれを女体で最も美しいものだと思ひ込んだ。幼時の、継母のそれを見た時の驚きも甦えつたのである。

それから一月ばかりして、私は英子の性毛を二本手に入れた。それはひどく簡単に入手出来たのである。まつたく偶然のことだつたが、私が井戸端で顔を洗つてゐる傍で、彼女は洗濯物を入れた盥に水を注ぎかけた。その時、英子は母親に呼ばれてちよつと家の中に入つたのだ。

盥の中に、私は彼女のブロースらしいものを認めて、殆ど無意識にそれをひろげて見た。それには黒い性毛が二本も附着してゐたのである。私は有頂天だつた。それは正しく性毛だつた。少し縮れてはゐるが、艶々と光つて、非常に黒い。それは、私の眼にはまるで寶石のように美しい。私は長い間その匂いを嗅ぎ、それから口にくんで恍惚と我を忘れた。役所に行く時にもそれを手帖にはさみ、胸のポケットに納めた。何時間眺めても飽かないのだ。これが私のコレクション第一号である。

間もなく英子は地方の豪農に嫁いたが、私はそれから性毛蒐集を思ひつゝいた。スクラップ・ブックにこの第一の收穫を貼付した時、私はその下に次のように記入した。

姓名××英子。年齢二十一歳。入手場所本人宅。色漆黒。長サ $1\frac{1}{4}$ 吋。形状太くして艶多し極くゆるやかなる波状を呈す。

實際、今はもう色も香も失われたが、その後の多くの蒐集の中でも、英子のように漆黒の性毛は珍しいのである。黒と云つても多くの場合は赤黒い色になる。又、毛先の方は黒くても、根の色は茶色と云うのも多い。赤茶、金茶、トビ色、それからいやに白っぽい色の場合もある。褐色の場合には縮れ方が甚だしい。

それから、見た眼の感じによるのかも知れないが、性毛の色が濃い場合には、多毛で、英子の場合のように、黒々としてゐる。白い裸身だから、それはもう誠に蠱惑的なものである。

とにかく、こうして私は性毛に憑かれ寝ても覚めてもそのコレクションのことばかり考えるようになった。道や電車の中で美しい女性に会つと、私はまず「なんとかして、こんな女性のアレを手に入れたものだ」と思う。それから、着物の上から、彼女のその色、長さ、形状などを想像してたのしむ。最近では、もう恐ろしいもので、この豫想は百発百中と云つてもいい。

このコレクションも、金で商売女を買収すれば容易だが、私にはそんな余裕も

性毛マニアと判る。

この女中はひどく自分の性毛に関心を持つていて、頭髮にするように純椿油、オリーブ油などをすり込み、毛根に適度の刺激も心がけて、毎晩手入れを怠らないと云うのだ。

実物を見るに及んで、私はなるほど肯いた少しばかり褐色がかつてはいるが、艶々としたその毛の輝きの美しさと云つたらない。実に見事な逸品だったのである。この女中がこんなにも性毛に関心を持つのは、多分にナルシズム、性毛フェティシズム的傾向があつたのではないかと思う。

この道に入ると、案外同好の士が多いのに気がつく。御承知のように性毛は、花柳界などでは縁起物になつていて、価いもよいところから商売用を集める人もいるが、そんな欲得ずくではない、真実のマニアも非常に多い。名前をあげることははじかるが、現在の文壇画壇、又実業界にも相当蒐集家がいる。

私は北支に出征中、機会ある如くに支那の女性のその蒐集に心がけた。こんな夢中になると、朝から晩までそのことばかり考えているから、案外方法もあるもので、私は十四、五本の異邦の女性の性毛を入手して、手帖に貼りつけたのしんでいた。

ところが、それが小隊長の知るところとなり私は面罵と共に「軍人らしからぬ行動」として

手帖を強奪された。私にとつては、愛児を失つたほどの打撃である。飯も喰わずにふさぎこんで戦友から嘲われたが、後になつて例の手帖は面罵した小隊長自身が、ひそかに秘蔵していることを知つた。彼も又、一人の性毛マニアだつたのである。

しかし、他人のコレクションを強奪するような方法は邪道である。又、金にあかして、他人の手で集めさせるのも、真のマニアではないと私は信じている。

性毛は、実は信じられぬほど、始終脱毛してゐる。生え代るのである。自然にコスレて脱毛するそれを、人々は方々に落して歩いてゐる。だから、人の出入りの激しい場所、デパート、ダンスホール、銭湯、映画館などの床には無数の性毛が落ちるわけだ。だから、こんな場所の掃除人は、大抵これを集めて売る。相当な価格で、飛ぶように売れる。

私は閑さえあれば、虫眼鏡を持つて歩く。しかし、まさかダンスホールの床を這い廻つてコレクトするわけにもゆかない。私が狙うのはデパートや旅館の便所、待合室、旅館の夜具などである。女中や芸者など、ズロースをはかない人種なら、二、三度部屋に出入りするうちには、注意して見れば必ず落してゆく。

性毛は頭髮とは全然性質が異なるから一目で判然とする。但し脇毛とはよく似ているから、素人にはちよつと識別がむづかしい。始めのうちは、私にも性毛の男女別さえ分らなかつたが、

現在では、性毛の鑑別なら、専門家にも負けない自信がある。

性毛一本で、その性別から体質まで判る。精力の強弱、性格、容貌まで漠然と乍ら想像出来る。夜、一日の收穫を鑑別し、その持主の女性を空想しながらスクラップする時のたのしみは、何物にも代え難い。

そのために、私は囲碁将棋は元より、花札、マージャン、芝居、スポーツ、其他一切の娯楽を知らない。知る必要がないのである。現在も尙独身であることもこの道の喜びを証明出来るだろう。

しかし、なんと云つても、この蒐集の醍醐味は、生身の女性の裸身を見乍ら、抜取る瞬間にある。脱毛の場合は、自然の現象として、性毛は枯れ落ちる状態だから、非常に痩せ貧弱になつてゐるし、その持主も判明しない場合が多いからだ。だから、私が本当にあこがれるのは、生きたそれなのだ。女性の身から拔取られたばかりの、その色、長さ、縮れ方、太さ、匂ひが私を恍惚とさせる。殊に、まだ芽生え始めたばかりの、處女の柔毛の素晴らしさ。それは柔かく金茶色に輝き長さは半吋にも足りない。その柔毛の初々しい處女の表情――だが、この蒐集は極めて困難なのだ。



映画鉄禍史の一駒

映画に現はれたグロテスク

高橋 晋

「性典に次ぐグロテスク・シーン」

海の彼方でも「性典映画」が話題の中心になつてゐる。

「MPAA」（米国映画協会）の発表によると「最近の流行は、性典をタイトルに、内容はグロテスクに移行しつつあり」プロダクション・コード（映画倫理規定委員会）でも、「流行的風潮」と訴えている。

「グロテスク映画と云うものは存在しない、ストーリーの発展上、その表現がグロテスクと思はれているに過ぎない……」プロデューサーのアーサー・ランク氏はこう云つてゐる。

「何年目かに週期的に巡ぐつてくるのが、エロチシズムよりグロテスク……」

と、映画界では云はれている。その第一期が

第一次の世界大戦後であり、第二回目、今日の頃だと云うのである。

現に、ヨーロッパ（ドイツ、ハンガリー、オースタリー、イタリア）の諸国では、刺激の弱いストーリーでは、企業化されないと云はれ、健全娯楽をテーゼとする、スクリーン王国アメリカでさえ、MPAAの合格証拒否問題が少くないのである。

「ただ、一般に陽の目を見る機会が少くないから、グロテスク映画は一部の人達の話話を賑はしているに過ぎない……」

鉄禍の結果、観衆の前に現はれてくるのは氷山の頂上に過ぎない。

去年（一九五三年）の七月、F・ヒュー・ハーバートの戯曲「月蒼くして」が映画化された。

流行の性典映画と云う訳なのだがこれが全米の有識者から猛反撃を受けた、「性典映画にあらず」毒々しいグロテスク映画と云うのである。

封切後の反響も異常なもので、興行成績は近來まれにみるヒット、「続々とこの種作品が登場する危険がある」として、抗議文も山積する有様。

主演はウィリアム・ホールデン、マギー・マクマラ、デヴィット・ニーヴンという豪華キャストで、ストーリーは、よくある三角関係。

思春期の娘（マクマラ）が、若い建築家（ホールデン）と恋愛をする、その恋愛の情熱を眺めていた、娘の父親（ニーヴン）が。大いに刺激されて、奇妙な三角関係を現出する。云つてみれば、これだけのプロポーションだが、全篇にただよう妖気は不思議なまでに、グロ味万

点で、なかでも問題になつたのは、娘が青年とキッスをする、それを見た父親が嫉妬と慾情のあまり、その場に飛び込んで、娘の首を締めつける、娘の苦しそうな顔。床に落ちる血、「この血は、メンスの血である」と云うのが物議を生んだ。

「メンスの血」と云えば、チェッコの映画、「ブラグロート」では、股間から流れ出る血液を撮して問題になつたことさえある、「醜悪なる場面」として問題になつたのは当然かも知れない。

血を扱った映画は数多いが、メンスの血を画面に出したのは、めづらしい例で、フィルム、ラポラトリーのメモにも、この二作しか記録されてないし、将来も少ないだろう。

「最早や、エロを通り越して、人間の動物性だけがエグリ出されている感じ」で、グロと云うより仕方がない。

血と云うよりは腹綿をサラケ出したのが、吉村公三郎監督の「森の石松」で、戦後はじめて吾が国の映倫で注告をされた日付きのシーン。

石松が背後から竹槍で突き立てられ、背中から胸に竹槍が貫通、血潮がドクドクと流れだす、その竹槍を背中に、ヨロヨロと歩き、自分で抜き取って、ドッ！と倒れる。石松の腹部から臓物がハミ出し、目をギョロリと開けるシーン、陰惨を通り越して醜悪、その姿で、色女の名前を絶叫しながら死んで行く……。作り

物とは云え、血と臓物は嫌悪感を見る人に与え、封切つて、後、カットされた。

嘗つて、不朽の名作と謳はれた「西部戦線異常なし」では、地雷で両眼を吹き飛ばした兵隊が、両手で眼をおさえ、指の間から、タラタラと血潮を流しながら、情

婦のイリジュシヨニーにさまよい歩き、有針鉄線にからまつて死んで行くシーンは、当然カットされたが。

シルエットになつた、兵隊の眼から、ポタポタとしたたり落ちる血の影は、見る人を慄然とさせた、グロテスクの世界的光景。

「日の果て」では、島崎

雪子扮する土人の娘が脇腹を射たれて、血をダクダクと流しながら、情人の岡田英次扮する軍医と死んで行くシーン。

惨虐である云うのと、島崎の乳房が半分程現はれ、風紀的によくないという、二重のレツテルでカットされた。

裸体と血の臭い、血潮の流れは、映画ならではの光景で、今迄にも非常に多い。

中国映画には意外に、血の場面が多く、「流浪西太后」では、西太后の死骸から流れる血を

掌に受け、唇を真赤にして、嚙り込んでいる、淫虐的グロ味万点のシーンがあり。

この映画の中では、西太后の恋人龍王が、西太后の屍を墓場から掘り出して、啜らう場面がある。

四十年増の脂の乗り切つた尻の肉塊を、刀で切り取り、それをムシヤムシヤやる所は、とつてもこの世の物とは思はれない。

「最大の愛情表現……」と、云う訳で、中国では評判も良いし、第一美女の屍肉は不老不死の伝説のあるお国柄だけに、他国では通用しないシーンだが、淫靡なこの光景、中国では、もつとも新鮮な演出として買はれている。

「思い出のグロテスク・シーン」

第一次大戦後に擡頭した、表現派は獵奇的陰影激しく、その中で完成された「カリガリ博士」は、屍を歩行させ、気狂病院を舞台としている。それでも、「カリガリ博士」は、表徴的という救いがあつたが、次いで登場した「グリード」では、一糸まとはぬ美女（サス・ピッツ）が、





暴漢の手にかかつて浴槽で湯攻めに会い、お湯の中にただよ、金髪と白い肉塊が話題を呼んだ。湯攻めにあつて死んだ美女を、犯人が呆然と睨めながら自分の心臓を突き死んで行くという、不思議な無理心中で、艶情と殺気とのミックスが当時の観客を吃驚させたものである。

フランス映画「フアントマ」では、裸体に黒タイツをスツポリと着込んだ美女が、感能に狂う男女を次々に毒殺し、果ては自分も変質者の手にかかつて、砂の中に生きうめとなり死んで行くというストーリーで、クライマックスの生きうめのシーンは、「今でも思ひ出すよ」と、見た人の印象に強烈に焼き付いている程。

この映画の中で、黒タイツの美女が、愛情の幸福に浸っていた男女の屍体を、地下室に運びこんで、蠟浸けにして、二本の人形を拵えるシーンがあるが、最近、立体映画で登場した「謎の蠟人形」の比ではなく、並べられた、男女の屍の上に、煙をモクモクと上げる。

熱蠟をザツと浴びせるシーンは、トリックとは云え、ギョツとさせられた、その上、この黒タイツの美女が、頭部だけを露出しているだけで、後は身体全体を黒タイツで包んでいるのだから。

しやがみこんだりすると、尻に線が出来たり、陰部のあたりが、こんもりと丘をなしているたりで、エロと獵奇の純然たるミックスであり美女が、男女の蠟塗りされた屍を見ながら、乳房をユスリ、慟哭し、不思議な官能に満足感を味う光景は、「一寸、想像出来ぬ程、妖氣が流れていた」ものである。

「歩く屍」では、「フランケン・シュタイン」の名優ポリス・カローフが、間違つて電気椅子で死刑となり、真犯人の出現で、医者が、屍に真犯人の心臓を挿入して、感情のない人間を復活させるストーリーで、その屍が、本能の動き

廻るままに、次々と、殺人、強姦を犯して行く、陰惨な人間の空想の現実化で、中でも、白眉と云はれるのは、感情のない歩く屍と、狂女のラブ・シーンで、抱擁した御兩人が、遠く離れてニタニタと笑う裡に、屍の方が狂女の両足を持つや、狂女を倒し、両足を持つて、ズルズルと狂女を引きつて、街を歩いて行くラスト・シーンで、逆さに引きずられながら、ニタニタ笑う狂女、警官の射つピストルで、背中にボツ、ボツと穴を開けられながらも、倒れない屍のコントラストは、限りある人間性の到達点で作り物とはいえ、観る者一同は不快な気持ちに襲はれなかつた人は居なかつた。

狂人同志の恋愛、犯罪を表現した映画の代表に「ゴードン」と云う、古い、イタリヤ映画がある。

抱擁の直後、男が発作で倒れると、その上に馬乗りになつた女が、男の口を無理矢理に開き、棒切れだの土砂だのを押し込んで、神に祈るといふ風変りなラブシーン。

この映画の冒頭には、狂人同志の閨房に近い愛慾描写があり、キッスをする兩人の口辺から、タラタラと血が流れ、舌を噛み切られた女が、昏倒して行く光景は、生々しい淫慾シーンで、セリフも音楽もなく、息づかいだけのこの冒頭の光景は、文句なくカットされてしまい、一部の人達の目に止まつたに過ぎない。

気狂の男患者が異状性慾の衝動で、女医を拉



致して、高いコンクリートの望楼の上で、輪姦し、逆上した女医が望楼から投身する有様を眺めて、「奴は、気が狂ったゾ！」と、狂人が口を揃えて絶叫する光景は、心理的描写と云はれ、大いに買はれたものである。

それを着込み、フラフラと歩いて行くと、望楼で見ていた狂人共は、女医が蘇生したと、その女看者の前に、手を合せ、神様として、夕暮の丘を脱走して行く。「健全な自由」と云う人も居るが、錯倒された自由で、「ゴードン」は結局、陽の目を見ずにイタリヤに返却されてしまった。

狂女を犯すシーンは、ちよくちよく現はれたが、狂人同志の愛慾映画は「ゴードン」以外にまだ一本も出現していない。

狂女を犯し、その狂女を本当に愛するようになった男が、このままでは幸福になれないと、自分も気狂になり、気が狂った瞬間に、愛情を失い、マキ割りで、狂女をめつた打ちに切りつけ、惨殺し、山中深く逃げ込んで行くと云う、恋愛映画と云うには、あまりにもアクの強い映画に「霧の殺人」と云う、古いフランス映画がある。

この映画のホアスト・シーンで、うらぶれた孤独の男が、窓から流てくる灯を眺め、ヒョイツと覗くと、若い女が笑って手招きをしている。

狂女とは知らず、男はフラフラと灯のある室内に吸い込まれ、熱烈な抱擁、接吻、の最中にフト、女が気狂である事を知るが、愛と性慾にかられている男は、夢中で、狂女を愛撫し、陶然と慾望に溶け込んで行く。

ロマンチックだと云う人もあるが、寒む寒む

とした屋外の光景と、狂女と痴態を演ずる、薄幸な男のバランスは、グロの芸術化と云うより仕方がないだろう。

狂女を犯すと云えば、「慾望と云う名の電車」で、マールロン・ブランドの労働者が、妻の姉である、ヴヴァン・リイー扮する、精神薄弱の変質女性を強姦し、気狂にしようところは、流石に、強烈さを除けて、サラリと演じ事なきを得ているが。

「ラ・ルベーター」という、古いフランス映画では、激烈な手法で、処女が犯され、気狂になつてしまう所を、フル・シーンで描き大問題になった。

手足を縛られた娘が、暗闇の中で、ハサミで髪の毛を切り落され、呆然としている所を抱きつかれ、「無声映画だからこそ、あの程度……」で、あつて。

トイキー映画なら、ノイズで益々、気分を變態的に昂揚させたであろうことは。

最近の日本映画「刺青殺人事件」「砂絵呪縛」の、刺青シーンで、背中を針で突かれた女が、半裸の身をのけぞらせながら、うめき声を出し乳房を掻きむしりながら、七転八倒するに至つては、エロなんて生やさしいものではない。

刺青と云えば、「ペグリーの女」で、ロジィヌ・ドレアン扮する人妻が、暴漢に襲はれ、失心状態となり、気がついた時は、自分は暴行された後で、



「こうなつては、夫の所に帰られない……」
と、泣きくづれるや傍で静観していた男がそれじや俺の女房になれつ！と、いきなり、抱き寄せるや、女の額に、針で刺青をする所がある、もがく女、くづれる肢態男の頭文字を額に刺青され、放心して泣きくづれる女の目に映つた光景は、これも、刺青された別の女の顔

である云う、本能映画で、とつても日本映画が、刺青を道具立てに使用しても、到着出来ない脂切つたものである。

異常な昂奮状態を刺激する爲に、よく登場するのが、変質者より、片端者で、「肉体と悪魔」フランス映画の最近作ではなく、グレタ・ガルボとジョン・ギルバートが演じた、お古い作品で、この映画の中に、傍系人物で登場するのが醜惡な小人で、これが、女中頭の年増女と愛慾絵巻を繰り開ける訳だが、なんせ、女のヘソまで達しない背丈の男と、大柄で、淫蕩的な年増が、男不自由の果てに、「お前さん、背は小柄で、子供同然だけど、ちゃんとした大人なんだろう、それも、レッキとした男のサ——」

と、思はせぶりの肢態で接近する、女不自由で悶々としていた小人は、目をギラつかせて、女の唇めがけて飛び上る、女は、床にペタリと坐る、小人は立つたまま、女の唇に吸い付く。

小さな、シワの多い手が、彼女の背中に廻り、シュミーズを肩からズリ下げる。小さな手が脂肪でギラギラする女の背中を撫で廻す。抱かれた小人の足が宙でもがく、喜劇と云うよりは奇劇で、小人は益々夢中で、女の身体せましと、手を延ばす、ぐつたりと満足感のトバ口に佇んでいる女。

全身を精気に、あえぐ小人、それでも男である、女が満足しているかどうかを、こつそりと薄団を開けて覗き込む。

女も、小人とは云え、矢張り、男の本能を持

つているという、不思議さに薄目で小人を覗き込む……、女が仰向けに床に倒れる、上に乗つた小人が、足をよじり、腰を浮かせて、女の胴からスベリ落ちまいと、格闘する。お客さんは、異様な光景に、息をヒソめていたのがテレ臭くなつて、ドツと笑うが、焼きついたようにこの光景は脳裡から離れない。主人に呼ばれた女が慌ててドアから駆けて行く。

その後から、髪の毛を乱した小人が、ドアに握まつて、恨めしそうに女の後姿をジッと見て

こうして、性の神秘が、大女と小男で展開され、女に男が出来、嫉妬した小人がその男を毒殺するという、これは、ストーリーの主流ではないのだが、グレタ・ガルボの美貌よりも、見る者をして、ガツクリとその興味を、グロテスクに依つてキャッチしたもので。

「小人と女が出てこない、アキビが出たよ」と、見た連中が云つていた。

「放浪の果て」では、名優ルイ・ジューベと一緒に、小人の夫婦が出てくるが、その女房の方が、ジューベに恋をしたと云うので、小人の亭主が、女房の髪の毛を引きづつて、部屋中を歩き廻る所がある。

血相変えた小人の亭主、引きづられる女房。悲惨と云うには、可笑しいが、笑える程のクスグリでもない、結局のところ、グロテスクという、言葉がピッタリくるような雰囲気。

死んでしまった女房の前で、号泣しながら、



女房の小さな足に接吻する様は、因果物めいたパラフレイズであつた。

髪の毛を持つて引きづるというシーンは、日本映画にもよく登場する。「滝の白糸」「四谷怪談」「偽装」その底には、うもれた性慾の錯倒があるのだろうが外国映画の場合、その前後のしびれるような官能描写が関連して

くるから、サド、というより、グロになるのかも知れない。

錯倒と云うよりは、見間違いからくる、喜劇的なグロテスクに、古い日本映画に「妖魔奇談」と云う時代劇がある。

阪東壽之助扮する女形が、商家の主家と、人目を忍んで逢瀬を楽しんでいる、女形は半裸体、女の方は長じゆばん一枚と云う濡れ場。

窓に映る影は、女の姿が二つ、唇を吸い、胸に手を入れ、驚いたのは、窓越しに覗き込んでいた、泥棒で、「てつきりシロシロ」(当時そんな言葉はなかったが)

と、思い込み、こいつは悪くないと云うので座敷に上り込み、二人を物にしようとして、女形であるのに驚くという、フアースな場面だが。

女形と女と泥棒、その性の錯倒に可笑しさより、嫌な不快感の方が先きに立つたのは無理はない。

時代劇で時々こうした、期せずして生れたグロが散見している、「風雲將棋谷」で、サソリを使って女を口説く所。生首を包んだ血の滲み出ている布切れを恋人が抱きしめながら、メンメンとグチるなど云う所は、現代劇ではあまりにも時代離れがしてて手がつけれられない。「ポンペイ最後の日」「パシスバ」等に出てくる、生首と恋人、それに、王者が不義の恋人同志をライオンに喰はせてしまう光景、モンタージュで、作り物の人間を喰っている、動物の姿

は、それが、裸体の女であつても、矢張り刺激される部分が違いそうである。

生首を掻き抱くのが、平安朝のロマンスであり現代のグロと云うならば、「魔炎」で、ロナルド・コルマン、ヴィルマ・バンキーの恋人が、死んだコルマンの死骸と一緒に、ベットで一晩中幸福感に浸って行くというシーンは、サダリズムではないが、独専慾と性慾のミックスで、グロの香りが少くない。

MPPAの、N・ジョンソン代理が云うように、「グロを嫌悪する人間感情が、逆にグロを露出する」と、云つたところが、映画のグロかも知れないが、本当のグロは、「ストリート・コーナー」と云う、性教育映画に現れた、出産のシーンや、帝王切開のシーンで、見物していた兵隊が卒倒したと云うくらいだから、シュミーズを脱いだり、陰部が現れたりで不潔なエロ味をスクリーンから感じ取るうなんて、生やさしいものではない。

「巴里の空の下セーヌ川は流れる」の心臓手術等、医学が本当に入りこんでくると、矢張り見ているものにはグロとしか感じられない。

「美容教室」のシリーズ映画で、乳房の脂肪手術を見せるが、切り出された乳房の有様は、お色気を消失させる。

エロとグロの境界線をさまよっているのが現代映画のリアリズムであり、商魂というところだろう。

屍姦今昔譚

廣瀬晃一
牧祐一郎 画



屍姦と云うと、一般人とはよほど縁の遠い、おぞましいことのように思う人が多い。勿論それは異常な倒錯性慾には違いないのだが屍体愛好の心理は、決して極く限られた変質

者だけに現われる現象ではない。普通の健康な常識人であつても、一步誤れば、と云うことは、その環境によつては、屍体愛好に傾くことがあり得る、普通なら薄気味の悪い屍体も、それが愛する者である場合は、気味が悪いどころではない。かき抱いて悲嘆の涙にく

れるのが人情である。

このように、屍体愛好者には二つのタイプがあると思われる。その一つには、特定の者、つまり愛する者の屍体に対してのみ、愛着を感じる者、他の一つは屍でさえあれば、たとえ見ず知らずの他人であつても、それを愛撫せずには居られないと云う、屍体愛好者がある。

前者の場合は、我々もよく見かけることがある。亡児を抱きしめて、離そうとすると泣いてもだえる母親。それから死者が若い娘の場合には、その肉親たちが幾度も幾度も化粧をほどこし、美しい衣裳をつけて、美しく装わせる。これ等は明かに死体を愛惜する心理の現われである。

元より、これは愛情から発しているのだが、その心理をつきつめて見れば、自分の意のままになる去勢された屍を愛撫することの快感が発見される筈である。

浪花節の桃中軒雲右衛門は、その妻に先立たれた時、通夜の晩には愛妻の棺中に入つて、一夜を明かしたと云うことだが、これに似た実話がある。

戦前のことだが、甲府の旧家の主人がその愛妻に急死された。当主はその時既に五十歳をこえていたのだが、はた目もいたましいほど悲嘆にくれ、取乱した様子であつた。始めはこと切れたと云う医師の言も信ぜず、しきりに介抱につとめ、だんだん妻の体温が冷え

て来ると、自ら下帯一つになつて同衾し、屍をかき抱いて、自分の体温で妻を温めようとした。

遂にまったく死亡してしまつたことが判ると、一間を閉して一切の余人をよせつけず、亡骸を抱いては憑かれたように独言を云つてゐる。まるで生ける者に語るように喋つては、口うつしで、食事や水を与えているのである。

集つた親類の者たちも、この有様には弱り果てたが、何しろ当主がそんな風だから、何時になつても葬式が出せない。二目、三目と日が経過し、冬のことながら屍臭さえただよい始めたので、遂に親類たちが相談の上、力づくで棺に納めて埋葬をすませたが、この愛妻家は木が枯れるように衰えて、間もなく妻の後を追つたと云う。

聞くところによると、この主人は至つて内気で、律気な性格であつたらしく、子供は一人も居なかつたと云うことである。

愛する者の屍を惜しむのは、我々凡人の煩惱のしからしむる処だが、如何に夫婦の間とは云え、その屍体を愛撫し、姦する行爲にまで及ぶとなれば、それは明かに異常性欲の現われである。

これは東京近郊であつた事件だが、まだ三十にも満たぬ若妻が死んだ。自殺である。夫は有能な技術者だつたが、この妻には結婚前からの情人があり、夫に対して甚だ冷淡であ

つた。遂にはその情人と出奔した揚句心中してしまつたのである。

心中した妻の屍が家に戻つて来た時、この夫の瞳は妖しく燃えた。人々は「不貞の妻のことだから、かえつて好都合だ。一日も早く諦め忘れるよう」と慰めたが、夫はその通夜は自分一人で行いたいと主張した。

その夜、亡妻の棺辺に一人で通夜する彼を案じて、家人がひそかにその部屋をうかがつた時、其処に異様は光景を見たのである。彼は妻の屍をさんざんにいたぶつては夜もすがら犯していたと云う。

これは裏切られた愛情が復讐となつて現われたと見るべきであらう。生きていて冷たく、遂には情人と心中までした妻に対する愛情と憎悪の一切が、屍体に対してぶちまけられたのである。冷淡で高慢だつた妻も、今はもの云はぬ物体となつて、意のままに犯される、夫にとつては異様な、骨まで氷るような快感があつたのに違ひない。

こんな例にも見る通り、愛情から発した屍姦乃至愛好は古来しばしば見られる。秋成の「雨月物語」中にある名編「青頭巾」は、寵童に死なれた僧が、その亡骸が腐り爛れても尙離さず、遂には発狂して肉を吸い、骨を嘗めると云う鬼気迫る物語である。

これは恐ろしいほどの同性愛だが、病没した養子を惜しんで埋葬することを惜しんだ、老齡の農夫の話もある。これも同性愛から来た一つの

屍体愛好であらう。

犯罪史上にも稀れな、増淵倉吉の淫虐事件がある。四十四歳の彼が娘のような情婦ます江を殺したばかりでなく、その一部を持つて放浪した。一カ月後には彼女の屍体から剥ぎ取つた黒髪をついた頭髪をかぶり、彼女の屍体の一部を身につけて縊死していた。

彼は精神分析学者にとつては、絶好の研究材料であつた。とにかく、これだけ屍体に対して惨虐が加えられた例は珍しい。だが、彼の場合には憎悪からでなく、愛慾のきわみに於ける犯行である。生活能力もない彼は、二十五歳も歳下の恋人を擁して、遂にこの惨劇を行わずには居られなかつた。

その異常に激しい愛慾は、女の屍体を愛惜する余り、えぐり取らずには居られなかつたのである。彼にとつては尤も自然な行爲だつたのであらう。激しい屍体愛好の心理である。

以上のように、愛憎による屍姦、内至愛好の心理が起り得ることは我々にも理解され易い。熱愛の極に達すれば、相手がたとえ屍となつても、嫌悪感を覚えぬばかりか、その屍への愛惜の余り、生きているものと交るように、愛撫することはあり得る。

又、憎悪、復讐による屍姦も、前述の通りである。しかし、特別にその屍の主を愛したわけでもないのに、屍体を見ると犯さずには居られ

ないと云うのは、極度に病的な異常感覚である。

常人が感じる屍体への恐怖を飛びこえて、これを犯すのだから、ただごとではない。その欲望が如何に強いものであるかを、物語つてい

る。しかし「慾望」と云つても、普通の性交欲ではない。何故なら、この種の屍姦常習者は必ずしも性欲に飢えた揚句、止むなく屍を犯すわけではない。むしろ、どんな美しい異性でも、生きている者には欲望を感じず、冷え切つた屍体に対してのみ、性交の衝動を押え兼ねる場合が多いのであるから、問題は複雑である。

こうした骨の髄からの屍体愛好者には、老人が多いようである。

我が国の屍姦で有名なのは、例の坂田山心中事件の女の屍体に加えられた犯行であるが、これも老人夫が犯人だった。

彼は埋葬人夫だが晝間自分の手で埋葬したこの心中の女屍体の美しさに魅せられ、どうしても忘れ切れず、その夜月明りの中で、女屍を掘出して相当距離

を運び、さまざまに愛撫し、数度に亘つてこの屍体と交つたのである。

当局や遺族が再度の検死のために埋葬個所を掘返えしたところ、女屍のみが消えているので大騒ぎとなつた。

つたえ聞くとところによると、彼はこの女屍の性毛が非常に濃く、多毛であつたために魅されたと告白した由である。屍体とは云え若い女性の豊かな白い裸体に、黒々と密生した性毛が、たしかに蠱惑的であつたであらうことは肯ける。

殊にこの心中事件は、流行歌でも「二人の仲は清かつた」と謳はれているように、童貞と処



女のまま散つたとされている。又一説には、既に妊娠三ヶ月で、その処置に困つての結果死を選んだとも云はれる。どの説が真実であるかは判らないがどちらにしても興味深いことである。すなはち、処女ならば彼の老人夫は、処女屍の美しさに魅されたのであろうし、又妊娠説が正しいとしても若いしかも美しい女性の、妊娠した屍にも、又異常な刺激が感じられたであらうと、推察されるからである。

この事件のように、埋葬人夫、又は、火葬場の隠亡などに屍姦常習者が多いのは、その職業柄屍体に馴れる爲であらうか。又無意識の裡に異情性欲の者がこうした職業に就くためであらうか。恐らくはその二つながら原因となつているものと思われる。

埋葬人夫に屍姦常習者が多いのは、我が国ばかりのことではなく、エビングの報告の中にも度々例があげられている。

アルディッソンと云う埋葬人夫は、処女の屍体を見ると夢中になつて発掘し、首を自宅に持ち帰つたりして、母夜淫樂にふけつた。しばしば屍体を犯したり、寸断したりしている。その上屍臭が発すると、恍惚としてそれを嗅ぎ廻つたと云うのであるから、倒錯心理も、此処まで来ると、呪われたものとしか考えられない。

又、埋葬人夫でなくとも、同じく屍体をあつかう職業として、病院や医科大学などの屍体

室、解剖室、の小使があるが、こうした人々の中にも、多くの屍体愛好者を見出すのである。

何しろほの暗い部屋に並べられた、多くの屍体の番をするのであるから、夜など、普通の神経の人なら部屋に近づくことさえ躊躇される。しかし彼等は、夜も晝も、一年中屍体と共に暮すのであるから、まったく屍体愛好の傾向がある者でなくては、務まる道理があるまい。

これも戦前のことであるが、東京都下の某大学附属病院の屍体室の老小使の奇行が明るみに出て、問題になったことがある。彼は変り者として通つていたが、実は強烈な屍体愛好者であり、夜な夜な屍体室の蠟燭の炎の中で、さまざまに屍体とたわむれていたのである。

この老小使の場合は、あながち女屍ばかりとは限らず、解剖室のホルマリン漬になつた、若い同性の首にキスなどしていたと云うことである。

職業上から云えば、この他に外国では僧侶が女屍を犯す例が非常に多いのである。これは小説やドラマなどにも、しばしば用いられることから見ても、意外に多いことが理解される。

聖職にある者としては、実に不埒な行爲だが、江戸時代などに、坊主が通夜に処女屍を犯した例と全く軌を一にするもので、宗教

上の潜在的特権意識が働くものであろう。又、職業上禁欲を強いられる場合も多いから、反動的に屍姦となつて現われることも、考えられる。

ところで、以上にあげた如く、屍体、又は屍体愛好者には、老人、又はそれに近い年輩の者が、甚だ多いことは、どのようなわけであろうか？ 精力旺盛な者よりも、むしろ性的弱者にこの倒錯性欲を多く見るのである。

これは一種の去勢願望である。普通の健康な女性に対しては、無意識のうちに劣等感を感じている、又は全然不能状態にある男性が、生命を失つた屍、動かざる、もの云わざる女性を見ると、猛然とその性衝動を刺戟される。

つまり、拒絶も、抵抗もない屍である故に、彼の劣等感は一掃され、かえつて優越感にすり変る。その喜びの強さは、彼等に相手が無気味な屍体であることさえ、忘れさせるのである。いや、その冷めたい屍体の肌ざわりが、かえつて彼等の歪められた情欲を、妖しく燃え上らせるのである。

一世を震撼させた淫虐魔、吹上佐太郎、小平義雄等の屍姦も、実はこの去勢願望に外ならない。彼等は抵抗した女性だけを殺している。暴行中の絞殺の際には、激しく痙攣を呼ぶので、その快感から絞殺したと告白してはいるが、しかしその根底をなすものは、やはり、彼等の去勢願望に外ならない。

小平の如きは、犯行後に、再び現場を訪れて

いる。絞殺した女屍体を、うつ伏せにしたり、仰向けにしたりして、たのしんでいるのである。これは去勢し得たことの、自己満足である。

又、屍姦とは少し意味が異なるが、性交の際に、相手の女性に対して、終始「ねむつていよう」に注文をつける男がいる。ねむつたフリを要求するのである。常人から見れば滑稽の感を免れないが、当人にとっては真剣である。これも老境に近い人に多い。

これが昂じると、性交の相手に死人を装わせると云う手のこんだことになつてくる。

これは五十年輩の相当知名の実業家だが、さすがに家庭では憚かると見えて、その爲にわざわざ妾宅を一軒かまえてある。彼はこの妾宅に通つて、いざ床入となると、妾は蒼白の死面に見えるように化粧をほどこし、白装束などを着こんで横たわる。勿論彼の注文だが、何分生身のからだから、時には動いたり、声を洩したりしたくなるであらうに、かりそめにもそんな言動をすれば、彼は甚だしく不機嫌になると云う。

御苦労な話だが、彼にとつては笑いごとではあるまい。こうした行爲の動機が、屍姦に通じることとは論を待たない。こうした複雑怪奇な形をとつて現われる、我々の無意識な性衝動は、殊に興味深いものがある。

x

x



現代春本に登場：

……する変態趣味



「太一、裸になつて来いや、わしの背中を流してんか」呆んやり座っている太一に清兵衛が隣室から壁をかけた。今までにないやさしい壁である。裸になつた太一は、湯舟の中で老人と思へない清兵衛の美事なものに思はずウームと唸った。「ジツとしといでや。一寸いいことしたるで……」

稲田 誠

古正英生 畫

序

濃艶な閨房の描写と、春本特有の情痴会話から構成されている春本には、これといった變態的な場面は極めて少ないが、中にはサディストやマゾヒストの主人公が登場し、春本マニアをして欣喜雀躍させる場面を見せる春本もある。風俗草紙でよく取り上げているソドミー（男色）を扱っている「四季物語」という風變りな春本も登場したりしているが、いわば西鶴の「男色大鑑」の現代版というところであろう。スリ係の女刑事が自分の姉と姦曳している愛人との現場を目撃、嫉妬した女刑事が愛人を後手に手錠を嵌め、物尺で折檻

する「寝姿」、妊娠した人妻ばかりを狙っている夢の中の女達、美男の坊主がつぎつぎと人妻や處女を、祈禱又は禁厭と稱して好色の飼食にする「破戒」、この頃都會の各所にある秘密俱樂部を主題にした「KS俱樂部」、エロ映畫撮影の男女が、つぎつぎと女を交換している情痴繪卷の「蚤の散歩」、寶くじに當選した青年が、その金を懷中に瀆色行脚を演ずると共に、映畫館の中で女学生を誘惑する「女犯すべからず」、美人畫専門の画家が望遠鏡を片手に、情炎に狂う男女を窺視する「朧月情濡糸」、淫鬼の青年社長が美貌の女秘書、女給姉妹、未亡人、女優をつぎつぎとサドの飼食に供しながら淫虐殺人

を行う「人面鬼」、美貌の女按摩をいろ仕掛で責めながら虐待する「明暗草紙」一大獵奇犯罪の主人公である説教強盜の妻木松吉を主題にした「閨の盗人」等の他にも、獸姦、屍姦、輪姦、リンチ等、春本も變態的な情痴描写を扱っているが、ここには法の許す範囲内で幾つかの春本に登場している變態場面をダイゼストして見るつもりである。

四季物語

京の春、四條に在る古い歴史を持つ友染問屋の「角清」で下絵描きとして出入している太一は、美校中退の十八の青年というより

は、紅顔の美少年に近かった。仕事部屋に当てられている奥座敷で、浮世絵を掲げた太一がふとうめく様な声が隣座敷の主人部屋から洩れるので、何気なしに耳をすました。かすかな衣づれの音と共に、女の噛み殺した声と、男の小さな声がただごとではなかった。見ると細目に襖のすき間がある。膝の上の浮世絵をそつと脇へ押しやつた太一は、それとなく襖のすき間に顔を近づけた瞬間、

「あッ！」

思わず声を吞んだ。主人の清兵衛老が輝一枚の痩せ体で仁王立ちになつて、奥働きの女中お秋を一糸も纏わない裸身にさせ、紫檀の机に腹這ひに縛りつけておいていた。

次の部屋で何が演ぜられていたのか想像はついたが、終つたところらしく、主人の清兵衛は女中のお秋の縛りつけてあつた兩腕の細紐を解きながら、

「どうや、よかつたかい？ 大部こたへたんやないか」

ぐつたりと全身から力を抜いたお秋は、眞白い豊艶な肉体を紫檀の机に俯伏せたまゝ、パーマの黒髪を畳までだらツと垂し、紅い唇からは涎が一筋洩れていた。どろんと濁つた眼を細く開いたお秋は、

「だ……旦那さま……」

乱れた髪を横に振るのであるが、すぐ起上る気力もないらしく肩で大きく息をして

いる。主人の清兵衛老はまるで犬か何かのように老眼をキラキラと輝かせて、お秋の豊満な臀部の傷痕に粘薬を塗布してから、白い絆創膏を貼り終ると、女中のお秋をくるツと仰向にさせた。太一は裸身のお秋の太腿の邊りを見た瞬間、思わず顔をそ向ける拍手に、膝をがくんと折つたのがいけなかつた。膝が襖に当つたその音に、

「誰やッ！ そこにいるのは？」

いきなり清兵衛が襖を開けた。太一と清兵衛の二人は否應なしに顔を合せた。

「何や、太一やないか、お前そんなところで何して居たんや」

一件を見られた清兵衛は、照れかくしな笑を浮べると、
「誰にも言つたらあかんで……まあその口止賃に、わてが好いもの見せたる」

床の間の手文庫の中から一帖の本を出している間に、女中のお秋は素早く身仕度を終へると、亂れ髪を直しながら逃げる様に部屋を出て行つた。

「ああ、お前、こんな見せてもろたのは初めてやろ、何

なら写してもえゝで」

主人は今お秋と演じたであろう姿態を尙一層鮮やかに、色も美しく描かれた秘圖を太一の前に掲げるのであつた。「若衆と町娘」「坊主と年増女」「馬子と旅藝人」等々、巧妙な線と鮮やかな色彩によつて表現される極致の喜悅は、さすが絵を心ざした太一には常人以上の迫力を感じるのであつた。

「どや、えゝやろ……お前も十八、年頃や、ちツとは亢奮して来るか？」



下司な眼で覗込む主人に、
「えゝ、素晴らしいですね、こんな絵は私初めてです」

と胸をはずます太一の返事と共に、

「さよか。そんなら、女子を抱いたことあらへんか。どれどれ、わてが見たげる」

有無もなかつた。女はおろか、未だかつてオナニーさへ知らなかつた十八の太一は、否應もなしに清兵衛老人にそれを教えられた。

ジーンと痺れる五体に、××××××××××、それが男の本能の極致であると知つた。

主人の清兵衛老によつて男になつた太一には、二三日前に窃視したお秋の豊満な肉体が臉にチラついて離れなかつた。俯伏せになつたお秋をくるツと俯向けにした瞬間、女の太腿の辺り一パイに滲んでいる蚯蚓腫れの凄惨な有様である。

何で出来た傷痕か知らないが、焼火箸か何かの焼け傷に違いなかつた。紅く腫れ上つた太腿の膿汁の爛れた個所を、焼火箸でジーツと当てられる快感と苦痛に、お秋はあゝした悲鳴と嗚咽を洩していたのである。そういえばあの日、襖を開けた瞬間、異様な臭気が鼻をついたことが思出された。

「太一、裸になつて来いや、わしの背を流してんか」

呆んやり座っている太一に清兵衛が隣室か

ら声をかけた。今までにないやさしい声である。言われた通りに裸になつた太一は、湯舟の中で老人とは思えない清兵衛の、ダラリと下つたその美事なものに思わずウームと唸つた。

「何見てるんや、阿呆やな」

そう言う、清兵衛は太一の後に廻つた。

「じつとしといでや、一寸好いことしたるで」清兵衛はかつて神戸で経験した男色のよさを、まざまざと思い出した。女とは違う、異様な感じ……

窓の外に咲き亂れる八重櫻は、風もないのにハラハラと枝をはなれ、男の春知りそめた太一の春色にふりかゝるように、そのふつくらとした花片をふり亂していた。

古いし来りで初めは仲々勤めにくい店であつたが、主人清兵衛老の寵愛を得てからは、特に眼をかけて貰うばかりか、包皮であつた十八少年は、変態趣味の老主人によつて、日に日に異様な性愛に耽溺することが多くなつて来たが、やがて、本斗町の老主人が囲つてゐる妾宅を訪れる日がやつて来た。

以上は「四季物語」の主人公太一少年が、男色を仕込まれる一部分であるが、やがて太一が主人の二号君葉との密会する場景が春本特有の濃厚な描写によつて展開されるが、太一の運命は「お小姓」としての泥沼からは足を抜くことが出来ないでいた。

人面鬼(女秘書の巻)

青年社長の秋山と僕(鹿島)は並んで腰を下した。助手台に座つてゐる女秘書の慶子は、黒髪を内まきにしたパーマの波を、ハイヤーのゆれる毎に柔かくうねらせていた。流れて来る甘い体臭に僕はふるいつきたい迄の欲望を感じてゐた。

「鹿島、君は本当に童貞なんだな? よし、今日俺んところと一緒にいこう。面白い事があるぜ」

誘われるまゝ車に乗つたのである。僕は生れつき変質な男である。歩きながらも、すれ違ふ若い女の姿態を穴のあく程見つめたり、道路にしゃがんでゐる女のスカートの中を覗込んだりする。ズロース!僕は女のズロースに非常に興味を持つてゐた。白いすんなりした二本の太腿の附根の奥の辺りに、白い、ゴムの効いたズロースを見た時の僕の喜び!一種のフェチズムであろうか。

やがて車は大宮駅を離れた、一見別荘風の邸宅の前に止つた。老婆が出迎えに出た。

「さあ、奥の方へ行こう」

暗い廊下を通る時、慶子が温い掌でそつと僕の手を握つた。

「怖いわ、私。歸りに送つて下さいね」小さな声で囁きながら抱きついて来るのを、

「大丈夫、僕にお任せ下さい」

僕もそつと抱いて離れた。

夕食をご馳走になつた後、

「遅くなりますから、お仕事を……」

不安そうに慶子がそういったのをしおに、

秋山はいきなり手にしていたグラスを床に叩

きつけた。

「津村！ さつきは廊下で鹿島の手を握つた

ね！ それが僕に対するエチケットか！」

憎悪と得意の色が混然となつて、真正面か

ら慶子を睨みつけると、

「君は僕の秘書だぜ、先刻の行爲は、明かに

僕に對しての侮辱だ。俺は嫉妬深い男だ。君

は當然僕に謝罪をしなければならぬ。それ

とも罰を受けるかね」

芝居であつた。秋山は最初から女を責める

つもりでいた。

「罰つて貴方が私に？」

慶子は相手の気狂い染みた権威に肩を震わ

せていた。

「勿論！ この家はご覧の通り野中の一軒

家、どうにもならないぜ、さア、裸になるん

だ。言われた通りに早くせんか！ 生娘でも

あるまい。恥しいことはないだろう。おとな

しく裸になつて貰いたいね」

慶子は、余りの事に口惜しうに唇を歪め、

「ひどい社長ね、いゝわ、勝手になさい」

抵抗しても無駄なものを感じた彼女は、体

につけていたものを一枚々々脱いでいつた。ブ

ラウス、スカート、シユミーズ、裸の盛り上つ

た乳房の隆起、雪のような真白い雪肌、男の情

熱をかき立てる魅力に満ちた豊艶な女体であ

る。二人の男性の前で裸身になつた慶子は、上

氣した桃色の頬が燃えていた。

「ブローース、ブローースも脱れ？」

「お願いですわ。私……今メンスなのよ」

嘘ではなかつた。薄いブローースを通して、一

筋のメンスバンドの線がくつきり浮いていた。

が、秋山は容赦しなかつた。彼は乗馬用の鞭を

鳴らして威嚇した。慶子は絶望と恐怖のため、

美くしい顔を裸の腕に埋めてソファの上に泣き

崩れた。

「メンスの女は俺は大好きだ！ 血が見られる」

秋山は狂犬のように血走つた眼をして、内ま

きにした女の黒髪をむんずと掴むと、ぐつと慶

子の顔を引起した。すんなりと伸びた脚はしか

つと太腿のあたりで組まれ、ブローースの下の豊

かなお尻の肉が緊張していた。

「帰して！ 帰して！ 何で、あたしが貴方達

にこんな目に会わなければならないの？ 無茶

だわ！ 余りよ」

形相を変えて反抗する女に、秋山は、

「フン！ 何を言いやがる！ 女！」

ピシッ！ ピシッ！ と空中に大きな孤を描

いて鞭が飛んだ。女はその苦痛に軀全体を伸し

たり縮めたり海老のように動きを見せながら時

々白い手で臀を覆うた。情容赦もない鞭はつ

づけて鳴つた。美くしい顔は切なげに震えな

がら苦痛に堪え、無残な鞭の痕は、白い豊満

な肌の上に赤い糸を浮き上らせた。

「いや！ いや！ 畜生！ 悪魔！ やめて

エ！」

女は叫びつづけた。その叫声と共に秋山は

いつ層猛り狂うた。

「脱ぎます、脱ぎますわもう、もう打たない

で……脱ぎますわ」

慶子の叫声と罵声が哀願に変つた。二人の

視線はボタンで止められた長方形のゴム布の

上の脱糸綿に吸いつけられた。白い綿には、

少量の黒血が染んでいた。

秋山は一糸も纏わない慶子の軀に出来た鞭

の痕を満足そうに見廻してから、

「思いきりの悪い女だ。今更、隠したりした

つて始らないぞ」

そう言うとき椅子に慶子を座らせ、椅子の脚

に、女の兩脚を細紐で縛ると、椅子の背中凭

せに兩腕を廻してやはり縛つた。

凌辱の限りが盡された。全身不随の女の肉

体に、二人は可能な全ゆる手段を盡して、野

獸の血を噴出させた。女は恐怖から歡喜、歡

喜から絶望、絶望から死のどん底に陥落しな

がら、悲鳴と哀号と絶叫の助けを求めたが、

サデイズムの鬼と化した秋山は許さなかつ

た。

「秋山、死にやしないかね。氣絶しているぜ」

僕も秋山の進めで、何回か慶子の肉体を弄んだ。童貞を慶子に與えた。

「フン！それがどうした？死んだ女の味覚、それこそ絶対なんだぜ。屍姦！何て素晴らしいんだ！」

僕の豫感通り、數時間後慶子は冷い死骸となった。傷口からは赤い血が流れていた。惨酷な拷問……淫獸と化した秋山は、地獄の責苦で喘ぐ女を平然と見下しながら、手にした金属性の器具で若い娘の肉体を拷問しつづけていた。

こうして、僕の誤つた淫虐殺人癖が初つた。

以上の他に「女給の巻」「母娘の巻」「有閑マダム」の巻」と上、中、下の三巻になつていくが、先を急ぐ關係上以下は省略することにするが、

簡単に秋山が第二、第三、第四の女を如何な方法で、その野獸を遂げるかを書いて見ると、「女給の巻」では惠美という女給を例の大宮の野中の一軒家に誘込んで、ハッピーという猛犬を使つて十九歳の娘を言語に絶する方法で凌辱した後、鋼の帶で、娘の乳房を締めて圧迫したり、両足首を天井に釣上げて拷問、死に至らしめる。「母娘の巻」は手の込んだ筋であるが、女優の蘭子と西小路元男爵

夫人の万里の面前で、母親の芳枝とその娘の千代を凌辱の果てに、ここでは描写不可能な方法と器具で四人の女を責めつづけるが、登場するものに馬がある。翌朝、二人は四つの死骸を奥深い庭の片隅にある底無しの古井戸へ、充分な重しをつけた上で投込んだ。

やがて鬼畜の如き淫鬼の二青年は、惡事盡きて警官隊の銃口の前に立つと結んである。

現代春本には稀に見る責めと、変態味横溢の傑作である。

不死鳥

女劍劇の寵児とうたわれた浅川澄子は、一座と共に東海道の旅興行に出たが、当世流行のストリップショウに人気を奪われ、屋羽打枯した姿で、時には小屋主に身を任せたり、最負のお客のお座敷では枕代金を稼いで一座の運命を援けることもあつた。悲運の女盛りである座長の澄子は弟子のしづみと同性愛の仲であつたが、或夜、やはりしづみと千鳥で楽しんでいる最中に、一座では女蕩しで評判の島に現場を踏込まれた。

「何てバカな眞似をなさつていんです。座長ともあろう者が、こんな小娘を相手に薄見つともねえ眞似をしたりして、座長、このあつしが一ツ泣かしてあげますア」

理も何もなかつた。酒を呑んでいる島はその場で座長の澄子としづみを、その逞しい胸毛の

下で捻伏せていた。疼くような五体の痺れと、官能の陶酔が抵抗力を奪つた。

その翌日、小屋はやはり不入りであつた。「ところで座長、久しぶりで「蛇」をかけて見ませんか？」

苦肉の策で二枚目役者の文吉が言い出した。

「執念の蛇」といわれる名題であるが、本物の蛇を使う芝居で、悶死するところにエログロ味が濃厚なため、当局の忌憚にふれ禁止されたりした。

「大丈夫かね。うるさいよ。まだ呼び出されたりしちや、やれきれないからねえ」

背に腹はかえられなかつた。次の興行先では「執念の蛇」の看板をデカデカと出した。

赤や青に塗り潰した蛇に、体をまきつけられた女の看板絵が人気を呼んだ。

妖婦お雪が第一の男から次々と男を惑わして、飽きるとすげなく男を捨て、又次の男に渡つてゆき、遂には男の恨みが蛇に乗り移つたのか、哀れな最後をとげるといふ筋であつた。

舞台では座長の澄子がお雪で、新城が情婦役であつたが、女泣かせの新城は澄子の官能をゆさぶるような演技で、髪のはつれた、胸元の乱れから乳房を出し、着物のつまをはだけ、赤い腰巻をグツと引つぱり下げ、ふところ紙を帯にはさむなど、舞台は交合最中を思

わされた。すると、鴨居から仕かけで、だらりと蛇がたれ下った。客席から、キヤツ！と女の恐怖の声さえ聞える。ポトリと屏風の内へ蛇が落ちると、「あれッ！」と悲鳴をあげた澄子のお雪が、蛇を手にとり上げ首の辺りにのせ、まきつかせる段取りにしておき、ヨロヨロと屏風の外へ転がり出る。

眞青になつて恐れおのゝく姿態を、裾さばきも巧みに、チラつく脛も適当に見せ、煽情的な演技に客を酔わして行くのであつた。やがて首にすつかり捲付かれた蛇に苦悶しながら、ころころと転り落ちた縁先の下に、もう一匹の蛇が待ち設けたように、彼女の足元に這いよつて、忽ち腿にまきついた。もはや、息もたえぬのお雪は、最後の力で庭石によりかゝると力つきて、苦悶の色を見せ虚空を掴んで倒れかゝると、青い月光が女の乱れ裾の太腿の肌に冴えかゝつた。

幕が下りると、新城との演技が凄いと賞めるのであつた。その夜、前の興行先で知合つた青年祐作が執拗に、澄子の後を訪ねて來た。「何ですんねえ、バカくしい。あたしやアお医者じやないんですよ。胸が苦しかりうと、痛かりうと知つたことじやありませんよ」一度限りの約束で許した澄子の肉体が、祐

作には忘れなかつたのである。澄子は祐作を追拂つてから、新城を探して見たが、漁色家の彼は既に何処にもいなかった。風呂から上つた澄子はズロースを脱いだ



まゝ、赤い腰巻一ツで寢床に這入つた。寝乱れた姿のまゝうとうとしていた澄子は、そのまゝ寝込んだ。その時、部屋の片隅に於かれてある壺の中から舞台で使う、一匹の蛇が蓋を破つて這出した。

夢うつゝの中に澄子は、新城が戻つて来て悪戯をしていると思ひ、うつとりとして身悶えた。何回かそうしたことがあつた。眠つてゐる間に、悪戯の限りを盡すドンファンであつた。澄子は異様な触感に、ハッ！と頭を上げると、

蛇の尾であつた。あッ！と息を更んだ。畜生の浅ましき、出るにも入るにもそれまでだつた。

「これ、およしよ、もうおよし」毎日、一緒に演技に加わる蛇である。なでながら尾を引つぱつた。

「あッ！ そうだ！ これにしよう！」蛇の尾を引つぱりながら、澄子は、やがて蛇の淫に魂を奪われた。一度味つた味が忘れられなかつた。

やがて座長の澄子がすがた見の前で、蛇を愛撫する変態的な、数々の場面は省略するが、邪堅に扱われた祐作が、蝮を離して澄子を殺そうと企む。いつもの通り、舞台で使う蛇の悪戯だと思つてゐる澄子は、うとうとしている中に、蝮に噛まれて息を引取つた。駆けつけた医者は蛇に噛まれた場所が意外な個所であつたのに呆然となつた。

明暗草紙

日本橋で広島屋といへば金物問屋では名の通つた老舗ですが、わたしはその番頭でした。日に何万という札束が右から左へと出入するその豪勢な取引ぶりに、つくづく番頭が厭になり、店のお金を少しづつ拔出しては

吉原や洲崎の遊廓に行つて、遊女買いをしたのが悪へ転落する初步でした。何しろ十九といえどもまだ子供と同じような分別のなさでして、遊女がうまいことを言うといふその気になり、いゝ氣になつて物を買つてやつたりしたものです、洲崎の或る女郎屋で知合つた女がお夏という三十近い年増女でしたが、このお夏という女がそれやアもう、大した女郎蜘蛛でして、十一も齡下のわたしを大変可愛がつて呉れたものです。わたしも、どういふ訳か若い女なんかには全然興味がなく、十一も齡上のお夏にすつかり夢中になつて通いつめました、このお夏はどういうものですか、当り前のことでは情が湧かないという女でして、

「仙一さん。かんにんして……熱いでしようご免ねえ。ご免よ」

と謝りながら、後手に細紐で縛つたわたしを俯向けにさせ、腹といわず、太腿といわず、それこそ場所を選ばないで、昔の一銭銅貨大の薬草でお灸を据えては、熱くて、転々と悶えるわたしの全身をぐつと抑えつけては、苦悶する表情をぢつと見下しては楽しむという女でした。それこそ、お灸を据えられ、こつちこそはいゝ災難ですが、そうかと言つてわたしは別に嫌いではありませんでした。嫌いなところか、かえつて、一糸も纏わない裸にされた後、齡上の女から体中を舐め

るようにあつちこつちを柔い掌で撫で廻されたり、ところ場所を嫌わず、熱い唇で舐め廻される時の恍惚たる陶酔わたしはその快感と官能の痺れで、蛇のようにのた打ち廻りながら時には呆ツと氣を失ふことさえありました。齡上の女の熱い唇が首、胸、背中、腋の下、腹部、太腿、足の裏という風に、それはもう若い少年のわたしは耐えられるものではありませんでした。そうした愛撫が終ると、

「仙一さん、熱いでしようけれど、我慢してねえ、我慢して頂戴」

後手に縛られ、足首を縛られた後、大きな薬草を丸めて火を点じるお夏の目は、獲物を捕えた蛇の目のようにランランと輝き出すのでした。お灸に経験のあるお方はご存じでしょうが、あのお灸が段々に熱くなる時の、全身の血を蕩かすような快感、それはもうお灸をしたひととでないとはわからない陶酔でしょう。麻薬を注射している麻薬患者の陶酔三昧境に劣らないものがあります。ドロロンと眼を半眼に開けているわたしに、お夏はやはり愛撫の手を緩めないでいるのですから、わたしは二重の陶酔苦に眉眼を寄せ、

「お姉さん、お姉さん！ 死、死ぬ！ 死ぬ！」

と浮言のようなことを洩している中に、お灸の火はいよいよ短くなり、熱さの爲めに額からは脂汗が滲み出る時は、わたしはもう、夢中になつて暴れ廻るのです。何も彼も考えてはいま

せん。転々と身悶えながら、

「うーむ、うーむ」

と呻きますと、お夏さんは、獲物を前にした蛇が、獲物を嚙る時のそれと同じく、わたしの身悶えする裸身をぢつと抑えつけて、わたし以上に陶然となつて見つめるのです。それこそ血も涙もない人間が、死に悶えるさまを平然と見つめているばかりか、それを楽しむという変態的な女でした。

やがて、お灸の火がわたしの肉をジリジリと煙を立て、焼き盡し終ると、わたしはもう何をする氣力が抜けてしまい、額から、全身から脂汗を流したまゝぐつたりとなつて横臥していると、初めて、お夏は目が醒めたようになつて、

「許して！ 許して！ 仙一さん！」

言いながらわたしの手足の紐を解いて呉れると、いつもの通り、情痴が初まるのでした。

以下はこゝには再現出来ない情景の連続なので省略するが、仙一少年が店の多額の金を盗み出して関西に逃避、そこで、女按摩の娘と知合い、盲目の娘を裸体に縛上げて、お夏が彼にしたと同様にお灸を据える凄惨な物語がある。

愛染草

光浄院の尼僧翠蓮は、好平が遊びに行くと棋盤を出した。細川侯の領地であつたこの山間は、鬱蒼たる老樹の谷間にあつて、好平は街道筋の蔦屋の次男坊である。

光浄院の庵主は六十を過ぎた髪の白い無口な老人で、盲目であつた。

「よし、今日は負けませんよ。翠蓮さん」

静かな池の面にぽつかり咲いた水蓮を思わせる清浄、純真、清楚、そして気品のある尼姿の翠蓮の法衣の下には、やはり女らしい甘い体臭があつた。

「よくつてよ。あたしも加減しませんから」

微笑する翠蓮の白い指は、男を魅きつけるような透き通つた指であつた。

「一度お訊ねしようと思つていたんですが、ねえ翠蓮さん、一生涯尼さんで通すんですか？ どうも、僕にはわからないんですね。貴女のその纏綴で……」

笑えば唇の出来るその美しい頬が、憎らしい程可愛いばかりか、俗臭が漂つていて、法衣を脱捨て、ブラウスにスカートを穿けばそのまゝ都会の娘になりそうであつた。

「好平さん。そんなにあたしに興味をお持ちなの？ ふふふ。困つたひと……」

ちよつと睨んで見せてから

「隠したつて仕様がないわねえ。好平さん、あたしの部屋に来て頂戴。見せるものがあるわ。それであたしの生態がわかるわよ」

立上つた。好平は初めて翠蓮の室に案内されたが、部屋の片隅にはすがた見が置いてあるだけである。

「好平さん。あたしツて女はね、見かけは温順しように見えるけど、胸の中には蛇か鬼が棲んでいるのよ。さあ、よく見て頂戴！」

翠蓮はそういうと身に着けていた法衣の上半身を脱いで見せた。「あッ！」

思わず好平はさつと顔色を変えた。

「どうあたしはこんな女だつたのよ」

もろ肌脱いだ翠蓮の背中には美事な抜彫の刺青が両肩から臀部にかけて彫つてあつた。二匹の下り龍が天女を擁している凄い構圖の刺青が、雪肌の翠蓮の背中から腰部一パイに彫られた美事な抜彫であつた。

「ウーム」

好平は唸つた。遊女か遊び人の人妻ならいざ知らず、尼僧として法衣に身を包んでいる女の肌から、鮮やかに彫られた刺青を見た瞬間の彼は、暗闇の山道でダランと吊下つている首吊りの死人に出遭つたよりもびつくりしたが、

「わかつたでしょ？ あたしはこんな女なのよ。勿論、男遊びは散々し放題、その拳句が普通の男遊びでは満足出来なくなつたのよ。悪戯半分に刺青をしたのが病付きになつたのよ。刺青の施術には二通りあるの、突き針というのと、揆ね針というのがあるんだけど、あたしは揆ね針に夢中になつていたわ。男に責められ

る時、誰でもが死ぬ、死ぬと夢我夢中の中に洩らすわねえ。それ程、男女の体の交りは陶然となつて、死んでもいいと思うわね。普通の方法では満足しなかつたあたしが、刺青の針で刺されると、それやアもう、男女の関係以上の亢奮が全身にピリッ／＼と感じるの。我慢していると、身を刺される時の快感、それはもうこたえられない位……」

好平は聞いている中に、翠蓮の背中や肩、腰の辺りの彫絵や、むつちり盛り上つた胸の膨らみを眺めている中に、

「翠蓮さん。前はどんな女であつたか知らないが、僕は前から貴女に夢中なんだ！」

好平は裸身の上半身をぐつと抱き寄せると、そのまゝ、むつちり盛り上つた翠蓮の胸に顔を埋めた。

「いけない！ いけないわ！ 今のあたしは女じやないのよ。女を捨てた女なのよ。ねえ。わかつて頂戴！ あたしはみ佛につかえる尼僧なのよ」

翠蓮はそう言ひながら、好平の顔をその裸の乳房に力一パイ抱きしめると、法衣の衣の下に男の手が忍び込むのを拒ばなかつた。

刺青のした尼僧の翠蓮の法衣からは、抹香臭い匂いではなく、若い女體の甘い體臭がほのぼのと匂うばかりか、雪をあざむくような柔肌の、むつちり盛り上つた双の乳房に、すんなりと伸びた太股がすべすと柔かつた。



女性マゾヒストの手記

妓樓に蠢く

……このお客さんは噛むのです。噛むのは珍しくもないけれど、この人はその時ではなくて、済んでしまった跡で、私の全身を噛む。首筋、脇の下、腿のつけ根、それから足の裏……順序もちゃんと決つていて……

中野けい子

店に来て二年半近くなつて古顔の方だし、この商売をしていても、そう辛いと思うことはない。こう云えば、「それはお前が馬鹿で無教育だから、そんな生活を喜んでゐるのだ」と云はれるかもしれないけれど、私の体は正直です。今更堅気の処に嫁入りして、なまぬるく暮しても、始まらないと思つてゐる。

同じ商売の友達には

最近では私もなか／＼有名になつて、この間はわざ／＼岐阜県から尋ねて来た人もあつた。どうして私のことがそんな遠方まで知れるのか不思議だつたけれど、なにか連絡がつくらしい。グループで会報のようなものが出ていると云うことで、現に写真をのせたいと云つて、撮られたこともある。

私は、頼まれ／＼ば写真も苦にならないし、いくらでも撮らせるけれど、それはカメラマンがこの道の人でなければ絶対に嫌だ。エロ新聞やカストリ雑誌社の素人が、面白半分何人でも押掛けて来ても、埃つぽいばかりで癢にさわるから、一度でコリてしまった。

本当に責めが飯より好きと云う人なら、幾時間相手にしていても、少しも疲れないし、嬉しければ、素人は第一縛り方も知らない癖に、好奇心ばかりでアレコレ云はれても、ポーズする気にはなれない。これは当り前のことだろうと思う。

この道の人だと、写真の狙ひもちゃんと的にまづけているし、軽蔑されることもないから、ノビ／＼と好きなように出来る。私はもと／＼責めの写真をとられるのは、好きだと云つてもいい。

かくす気持もないから書くけれど、私は東京のある赤線区域と云はれる場所に居ます。今の

いろ／＼言はれることもある。「これ以上体を傷めることはないぢやないか」「ヘンタイ女郎」など／＼云う人もある。けれど、私にはきまつたお客がついてゐるし、噂を聞いてお名指しで来る人もあるから、店の主人たちは大事にしてくれる。私も、今とは違つた女になりたいとも、思つていないのだ。負惜しみではない。

お客もいろ／＼あるけれど、古い人は、私が前の土地に居た時から、続いている人もある。もう、身内みたいな気持がしてゐる。このお客さんは宇都宮の方にいる人で、商用で月に二度ほど上京して来ると、必ず来てくれる。私も顔を見ればやはりなつかしい。

女性マゾヒストの手記

このお客さんは咬むのです。咬むのは珍しくもないけれど、この人はアレの時ではなくて、済んでしまった跡で、私の全身を咬む。首筋、脇の下、腿のつけ根、それから足の裏。順序もちやんと決つていて、する通りにさせなければ気嫌が悪い。

一番痛いのも、一番気持がよいのも脇の下で、この人の首に両手を巻きつけて、私は足をバタ／＼させる。ズーンと惱天にこたえて、体中電気が流れるような気持になる。とてもこたえられないほどよくて、私は幾度も幾度もせがんで咬んで貰う。

「そうか、嬉しいか、本当に嬉しいのか？」

と云つて、向うも夢中になつて

いる。首筋はあまり感じないし、足の裏はくすぐつたい方が先に立つて、それほど嬉しくはない。それでも、咬まれた跡は眠たくなつて、商売が憶劫になるので、困ることもある。眠たい気持と云うのは、とてもいいもので、子供に戻つたような気持になるのだ。

一番多いのは縛りのお客だけれど、中には変つた人がいて、部屋に通るなり私の両手を後で合せて縛り上げ、その麻縄を自分のバンドに結びつける。まるで私は刑事

に連行される罪人のようだ。そして「お前は売春容疑でつかまつた、凄く毒婦だ」と云つて、

「旦那、煙草を一本のませて下さいな」

と、云え、と命令されるから、その通りに私が云うと、

「バカ、お前のような奴は、煙草も尻で喫え」

と云つて、火のついた煙草を臀部にちよつと押しつける。熱くて、縛られていても、一尺ぐらひは飛び上つてしまう。商売にさしつかえるから、これは二

る。

「女房でも、こんなことはさせてくれない……」

と云つて喜ばれると、私はつく／＼因果な体だと思ふけれど、先方もよし、こちらもいいのだから仕方がない。この人は軍隊で、戦友が、



「お前のような奴は、煙草も尻で喫え」
と云つて、上官から虐められるのを見てから、これがやりたくて仕方がないと、云つてゐる。

このお客がくると、部屋に入つてから、帰る時まで縛られっぱなし。しかも繩はこの人のバンドにつながれているから、とても不自由でヘンな氣持になるのだ。繩の長さは三尺ばかりだけれど、やつて見れば判るが、とても可笑なものなのだ。たとえば便所にゆく時でも離して貰えない。どうしても離してくれないから、仕方がなく人目をしのんで一緒にゆく。

私の方は他人から見られても、それほど嫌でもないけれど、その人は滑稽なほど人目を恐れる。大体がとても内気で、真面目な人だから無理もないけれど、私の処に来る人は、みんな自分のアブ・ノーマルな行爲を、とても恥ているのだ。私のことを「露出症的な傾向がある」と云つた若いお客さんもいるけれど、私はそんなものかと思つた。

そのためかどうか知らないけれど、私は縛られてそのお客さんと一緒に便所にゆくのがたのしみになつて、必要もないのに、便所行をせがむようになつた。狭い場所だから窮屈でとてもくすぐつたい。その上縛られているのだから、着物をまくるのも、ズロースを下げるのも、みんな自分では出来ないのだから……。

このお客さんとは、いろいろ遊びをして、私もとても気兼ねなしでたのしい思出があるけれど、

ど、この夏以来、パツタリ姿を見せなくなつてしまつた。徹底したサチストだから、急に普通に戻る筈はないし、この雑誌もきつと眼を通してゐると思うので、私の手記が眼にふれるかもしれないと思つて、たのしみにしている。

私の処に来るお客さんは、それこそ十八、九から六十すぎの人までいるけれど、御年よりでは、月に一、二度トランクを下げて来る方があつた。服装もキチンとした、上品な方です。

店でも皆に有名になつて「トランクさげたお客さん」と呼んでいる。

「あのお客さん、トランクなんか下げて、何の商売？」

と、友達に聞かれるけれど、トランクの中味は商売道具ではなくて、全部責めの道具なのだ。

おとしよりだから、縛りも、昔の無惨絵のような具合で、とてもひどくて大変だ。でもとても親切で（なんだか矛盾しているみたいだけれど）縛りの繩もとても吟味してある。繩はなるべく肌を傷めないように、ネル地のような布をほぐして、編んであるのです。

この方は棒を使つて、頭と足をそらせるだけそらして縛るのが好きです。つまり私は裸で疊の上に腹這いになつて、頭は足の方に、足は頭の方に、棒と紐でそらして結ばれるのです。手は後手。こうしておいて羽毛でくすぐり責めをされるのだから、とてもたまらない。苦しくて動くと、体の中心がとれなくて、グラ／＼と

ゆれる。はずみで、ちよつと動くと、何時までもゆれが止まらない。ちようど、赤ちやんを寝せてゆする、揺椅子のようなものだ。

これが、ちよつと口では云えないほど、むごたらしくて、いゝ氣持です。十分もそうされると、首から肩からしびれて感覚がなくなり、自分の体のような氣持がしない。まともに口なんかきけない。ガン／＼耳鳴りがして、その人の喋つてゐることも聞えなくなる。

この方は六十三と云うことだが、こうして責めるだけで、アレはしない。責めてたのしむだけで、結構いゝと云つて、チップまでとてもはずんでくれます。

「孫までゐるのに、因果なことだ」

と、笑つてゐるけれど、社会的な地位がある方らしく、店の出入りにはマスク、眼鏡で、とても嚴重に変装している。

この他にもいろいろなお客さんが居て、来る度に晒を一反も持つて来て、私を頭から足の先まで、グル／＼巻きつける人。関係する時に輕業師のような、とてもない姿態を要求する人。世の中は本当にさまざまなものだ。

私はお客がこの道の人だと、自分の体を傷めると判つていても、つい本氣になつて、客のいゝなりになる。それが、結局私もいゝからです。その時／＼、お客さんに惚れるような具合になつてしまふ。

私がお客さんの要求でも断るのは、刃物を使うことゝ、鞭打ち。嫌なのではないけれど、商

売に差支えるから……。お客さんは、皆紳士的で、約束を守ってくれます。

私自身の好みから云うと、やはり縛りが一番いい。海老責め、片足かけ、入れ首、股のぞき棒縛り、括り猿、股ひらき、なんでもいいのです。しかし、こんな縛りを要領よく、手早く出来る人は少いようだ。みんな殆ど我流で、縄ばかりを沢山使う。それでもいいようなものだけ

れど、手ぎわのいい人に逢うと、同じ縛りでも随分違ってくる。時にはジレつたくなつて、縛られながら、私の方で教えて上げることもあります。

そして、私は縛られながら、アレされるのがとてもいいのです。どんな形に縛られても、出来ぬと云うことはないから……。お客さんも、大抵の方はそれを喜んでくれる。

この道の人でない、私が素人と呼んでいる、何も知らない(私のことを)お客が来ると、勿論普通に相手はするけれど、やはりソツケなくなつてしまう。

お客さんの一人にすゝめられて、こんなことを書いたけれど、私のような女も、この土地には他にも二人ほどいるようです。

女性マゾヒストの手記

ある妻の告白

本當に魅のように魅を丸くするのは、魅を前かがみに小さく縮めて、丸くなつてころがります。それでも夫は打擲をつづけて背中臀部はすっかり血がにじんで、腫れ上がります。「ヒイツ」と言う聲も出なくなつた頃……



市瀬 紀子

夫が私を虐めるのは、お酒を頂いた時にかぎられて居ます。しらふの時には、大きな声一つ立てぬもの静かな人で、陰気なほどの、地味な性格でございます。

そのお酒も、日本酒でお銚子に三本程度です

めば、とても上気嫌で、いゝお酒なのです。非常にお喋りになつて、相手をしていても、愉快なほど賑かになるのです。それが、五合をこすと、うつて代つたように残忍になり、恐しいほど狂暴性を及びて参ります。このため、私の体

ですけれど、上気嫌の時には、夫は私を拜んだり、賺したりしてせがみます。それで、後になつて後悔するのですけれど、私はつい〱御銚子を運んでしまうのでございます。「後悔」と書きましたが、この前後の私の心境は複雑

には、文字通り生傷が絶える閑もございせん。夫も、そうノベツに御酒を頂くわけではありませんけれども、会社関係の宴会も、御友達との御交際もございしますから、週に二回ほどは、どうしても、私は、地獄のような苦しみを経験することになります。

家で頂きます場合には、お銚子に二本と云う約束になつてゐるの



で、ちよつと書き現すことが出来ません。「恐れながら待つ……」それが一番正直な表現のような、気持も致します。「お酌がおそい」「ふくれつ面をした」そんな些細な云いがかりから夫の酒乱は始ります。

先夜は、「お燗がぬるい」と怒り出して、いきなり大事にしていた、九谷焼のお銚子を食卓に叩きつけて割つてしまいました。吃驚して見て居りますと、それを更に十能でメッタ打ちして、粉々に割つて仕舞います。

「オイ、この上に坐つて見ろ！」

と、云うのでございます。逃げようとしみますと、衿首をグイとつかまれ、引き倒されてしまいます。酔つた時の力は物凄いです。それに、夫は大学時代は剣道二段だったのですから、小柄な私がどんなに藻掻いても、及ぶことではありません。

おのゝきながら、瀬戸のカケラの上に正座します。この時は和服を着て居りましたけれど、衣服を通して、膝の辺りがチク／＼痛みますか

ら、自然に及び腰になつて、体を浮かすような恰好になります。それだけではありません。夫はその私の膝の上に、手当り次第にいろ／＼なものを積み上げます。お櫃でも針箱でも、全集本でも、目につくものを乗せられるのですから、その痛さと云つたらございません。一つ上げられる度に、

「あッ、あッ、あッ……」

と、言葉にはならぬ悲鳴が、喰いしばつた歯の間から洩れるのです。

たか／＼お銚子一本の瀬戸カケと申しまして、更に夫が片足を乗せてグイ／＼と踏みにじつた時には、骨まで透る痛みに、私は後にのけぞつてしまいました。右スネに二箇所、左に一個所はまだ傷跡がひきつゝています。紬の袴の裏表、富士絹と紅絹の長襦袢の裏表、それからベンベルの裾よけは、前身だけ穴だらけになりもう使いものにはなりません。私も暫くの間は坐るのが苦痛で、お客様が見えますと、本当に辛うございました。

夫は私がギリ／＼まで耐えて悲鳴をあげますと、満足するらしく、未練気もなく止めて、すぐ眠つてしまいます。そして、翌朝は少しも自分の行爲を覚えて居りません。私の傷跡を見せると吃驚して、暗い顔をしてふさぎこんで居ります。少しも覚えがないのでございます。私がビッコをひいたり、顔が紫色のアザで腫れ上つたりしているのを見るのはたまらないらしく、顔をそむけて居ります。

女性マゾヒストの手記

口には出しませんが、自分の酒癖を激しく懊悩するらしく、私には内密で専門家を尋ねたり、いろいろ対策を考えているようございますが、私は夫のこんな悪癖が、簡単に癒えるとは思えません。

癒らない方がいゝのでございます。虐められる時は本当に恐しくて、震えて居ります。勿論その時も恐しいばかりではないのですけれど、私はどう云うものか、翌朝、夫が自分の所業を知り、暗い顔で、

「紀子、痛かつただろう？ すまないなあ」と申します時、ギョッと胸をゆすぶられるような、喜びを感じるのでございます。

「俺の酒癖は一生癒らないかもしれないなあ、お前も愛想がつきたら何時でもいゝから、実家に帰りなさい」

淋しそうに、ポツンとそんなことを申します。そんな時の夫が、私にはたまらなく愛しくて、全身がわなわな程なのです。

親類の間でも、夫の酒癖が問題になつて、離縁話が持ち上つたこともございました。私の母が、末娘の私をふびんがつて、連れ戻したいと、それは強硬だつたのです。でも、私は恐らく一生、この夫の傍で、虐行に甘んじて生きてゆ

くのではないかと、思つて居ります。

第一に、私は誰にも、本人の夫にも内緒にし ておりますけれど、夫のこの酒乱癖を知つていながら、嫁いだのですから……。

夫は再婚で、亡くなつた前妻は私の姉です。

私は義兄の許に嫁いで来たことになりました。姉は結婚後半年足らずで亡くなりました。肺炎で亡くなる一月ほど前に、私は姉と話していて、フト姉の二の腕に卵大の青アザがあるのに気がついて、吃驚しました。

「これはね、竹刀でぶたれたの、痛かつたわ。あの人、お酒呑んだら、とても乱暴するのよ。でも紀ちゃん、このこと、母さんにも内緒にしてゐね」

微笑しながら打明けてくれた話に、私は吃驚してしまいました。そして、姉の死後、その跡にと云う話があつた時、私はあの時の姉の微笑と、見る目も痛々しい青アザを、まぎ／＼と思出したのでございました。

それでも、私は現在の夫の処に嫁いでくる氣になつたのです。私の体の中には、姉と同じ、マゾの血が流れているのでしょうか……。私は夫を愛しています。

今では夫のどんな乱暴も、喜びでこそあれ、少しも怨む氣にはなりません。けれども、何分夫はお酒の上で正氣ではありませんから、時には私を縛つたまゝ、前後不覚に寝てしまうことがあります。

晩秋のある夜、十一時になつても帰宅致しま

せんで、針仕事も手につかず、オロ／＼待つて居りますと、案の定、乱れた足音がして、ガラリと玄関が明きました。私は夫の顔を一目見たゞけで、どの程度酔つてゐるか、すぐ判ります。

この時も「あゝ……」と、思いました。恐怖と欣びが、七分三分で、神経がピリ／＼と緊張いたします。夫は座敷に上るなり、引き裂くように、私の衣類をむしりとります。

「オイ、紀子、お前は俺に愛想がつきて、実家に逃げて帰るつもりだろう？ どうだ。正直に云つてみろ！」

座敷の角に追いつめて、凄い眼つきで、しつこく、それを繰返すのです。大きな手で裸の肩をつかまれてとても痛いのですけれど、酔つていても、夫は私が離れるのを心配しているのだと、思いますと、何とも云えず、嬉しいのです。

「いゝえ、そんなことございせん。一生この家にいます」

と、申ししても、夫は許してくれず、

「嘘をつけ、帰えるつもりだろ！」
そして、床の間の花瓶から、その朝、私が活けたばかりの高野杉の枝をひき抜いて、全身を打擲するのです。五十糎ばかりの長さで、直径四、五糎の木ですけれど、ピッシリ針のように剛い葉が生えているのです。

打たれる時の痛さと云つたら、ありません。肩も背も足も、ところ嫌はす打つのです。打た



れる度に悲鳴をあげて逃げ転び杉の葉が座敷中
バラ／＼飛びます。夫はもう正気ではないので
すから、少しも容赦なく、打ち続けます。とう
／＼私は夫の足許に毬のようになってころがり
ました。

本当に毬のように体を丸くするのです。顔、

胸、お腹、内股の
ように、皮膚が弱
く苦痛の激しい場
所を自然にかばい
ますから、体を前
か／＼に小さく縮
めて、丸くなつて
ころがります。
それでも夫は打擲
をつゞけて、背
中、臀部はすつか
り血がにじんで、
腫れ上ります。
「ヒイッ」と云う
声も出なくなつた
頃、夫はやつと葉
が落ちて、丸坊主
になつた枝を放り
出し、今度は私を
縛りにかゝりまし
た。縛られたのは
この時が始めてで
す。

行李を縛る麻縄を持ち出して、メチャ／＼に私
の体を縛り上げ、余つた縄尻りを鴨居の曲釘に
かけてしまつたのです。足はどうやら畳につい
ていましたが、本当に恐怖で一杯でした。

夫はそんな私をさも満足らしく眺めているう
ちに、ゴロリと横になつて、そのまゝ他愛なく

ねむつてしまつたのです。私は慌てゝ、
「あなた！ あなた！」と、必死に呼びかけま
すけれど、一向に眼が覚める気配もありませ
ん。何時も朝方まで起きないのでございます。

これが十二時半頃のことでした。朝まで、大
分時間がありますし、十月末のことでした。全
裸ですから次第に裸が冷えて来て、震え上つて
しまうのです。何とか縄から抜きたいと思いま
したけれど、男の力でガンヂガラメに縛りつけ
てあるのですから、どうにもならないのです。
私は身動きする力も盡きて、壁を背に縛られた
まゝ、ぼんやり夫の寝姿を見ていました。下半
身からだん／＼感覚がなくなつてくるのです。

夫が眼を覚ましたのは、暁方の五時でした。
寒さと咽喉の乾きで眼が覚めたのだそうでござ
います。縛られた私を発見した時の、夫の顔！
始めは信じられないような顔で、呆然と凝視し
ていました。それからガバと跳ね起きて、ぶつ
かるように飛んで参りました。

「すまない！ 紀子、許してくれ！」

夫は泣いていました。冷え切つた体に、その
熱い涙を感じた時、私は酬はれたと思いまし
た。何故か嬉しさで一杯でした。夫の横暴を耐
え抜いた喜びなのでしようか……。怨む気持は
さら／＼ございません。

夫は私を抱いて、男泣きに泣いて居りまし
た。後悔で一杯なのでしようけれど、こんなむ
ごい仕打ちをされる度に、私は何故か夫への愛
しさが募つてゆくばかりなのでございます。

私は四つん這いになつて腰を落し、あそこ下駄の鼻緒をひっかけた。彼女はそれを浴槽につかりながらぬくぬくと見ているのだつた。



マゾヒストの告白

牝犬になつた男

野 守 孫 市

淫夢 開 花

私のマゾ歴は三年前にはじまる、

正しく言えば、三年前の夏にはじまつたのだ。

× × ×

晝さがりから、一しきり降つた雨があがると、暑さにうだつた何もかもが生気を取りもどした思ひに、ほつとして、爽やかな微風が汗ばんだ三十男の肌までなぶつて行つた。

そんな、たあいのないことが私を異常な状態に追い込んでいたのかも知れない。

放心状態で、表通りに眼をやつてゐる私の視野の中を、突然、女性の塗り下駄と素足が横切つて行つた。

「あつ——」

私は思わず出した自分の声に、はじめて自分をとりもどした。

私は女神を見たのだ。

私の心の奥底で探しに探していた女神を見たのだ。

夢ではない、現実に此の眼で見たのだ。

だが、その女性が、どんな女性だつたか私は知らない。

その女性は、私の女神——塗り下駄をはいた素足の足首から切り離されて、私とは全く無関係に通過ぎてしまつたからだ。

黒塗りにエンジの鼻緒、その鼻緒の間から可愛い貝殻の様にのぞいた指先、まるで乳房のような足の甲、——

私のからだ中の血液は逆流する。

私は夢遊病者のように立ち上ると、雲の上を歩く錯覚を拂ひのけながら女神の姿を追つた。

× × ×

これが、ノートに書き込まれてある私のマゾ歴の第一頁なのだ。それから二年、私のマゾ昇進は完全に妻のサジ的面を昇揚させて、狂い咲きする淫花は私を悦虐の泥沼に蹴落してしまった。

強いられる懺悔^{さんげ}

「さ、何もかも言っておしまいッ、あらいざらい白状するんだよッ」

彼女の声は、まだ湯のわいていないさむざむとした湯殿にピン／＼響いた。

私はまる裸で両の手を後手に縛られ、足は膝から下をがんにがらめに縛られ、ゴワ／＼したズックの袋から首丈出して立たされているのだ。「いくじなしのお前が、どんな顔してあの女と乳繰り合ったか、その時の顔をしてお見せ——、して見せるんだよッ」

白いものが私の頬で

「ピシリッ」と鳴った。濡めりをくれた足袋が、小はぜをカチカチ鳴らして両の頬にぶつかって来る。

「強性もの——」

私の女神が私の腰を蹴上げた。

私はきりきり廻いをして、乾いたタイル張りの床の上に蹴転がさ



れてしまった。

うつ伏せに倒れた私の鼻からまづかな血が白いタイルに紅薔薇の模様を描いて行く。

私の女神は私の下半身をぐい／＼踏みにじつているのだ。

黒塗りの小間下駄、エンヂの鼻緒そして素足

！

私の心臓はガツ、ガツと耳のつけ根で鼓動しはじめ、汗ばんだ袋の中の全身は悦楽境をさまよいはじめる。

「出来なきやあ、出来るようにするだけさ」

首の処の袋のひもがほどかれて、そこから砂がばら／＼と投げ込まれた。ひもがぐい／＼と首をしめつけて前にも増して強く結ばれる。

そして彼女はさつさと湯殿から出て行つてしまった。

私は今迄の苦しい姿勢から、いくらかでも楽

な姿勢をとろうと身じろぎをした。

あッ、砂が動き始めた、身じろぎをしたせいではなく、砂が動いているのだ。

やがて、活潑に動き始めた砂は全身をはいずり廻つてチク／＼と刺しはじめる。

蟻だ！ 私は、蟻の塔に投げ込まれた、アフリカの罪人なのだ。

アフリカの裁判で自白を強いる唯一の拷問だと話しに聞いていた蟻責めで私は根も葉もない自白を虚偽の懺悔を強いられているのだ。

私が身じろぎする度に、蟻は恐怖を感じるのだらう、荒れに、荒れ狂つて、狂暴なまでに裸身をせめて来る。

その痛痒は私の未だ一度も経験したことのない痛痒さで、私を身もだえさせ、息苦しさで、かすれたのがぜい／＼音をたてる。

「フ、フ、フ、さぞ楽しかつたろうね、眉の根を

そんな風によせて、ぜいぜい息をして、夢中になつて楽しんだのかい。ハ、ハ、ハ、

、

いつの間にもどつて来たのか、彼女が小気味よさそうに私を見下していた。

「さ、もうそろ／＼白狀出来るだろ、よかつたのかい？ 私の時と、どつちがよかつたか言つてごらん——」

「ウムウ、そ、そんな……」

「呻けつて言ってるんぢやないよ、どつちだつて言ってるんぢやないか」

「そ、それは、うむッ言わなくたつて解ってるぢやないか、お前の方が——」

「生意気な口のきゝようするんぢやないよ。」

又足袋の筈が頬に飛んだ。

「そうかい、やつぱり私の方がよかつたのかい、ぢや御褒美だ、さ、爪をきりな」

ついッと眼の前に、私の女神が差し出された。

私は芋虫のように身体をくねらせて、塗下駄をはいた彼女の素足ににじり寄つて、御褒美にあずかるのだ。

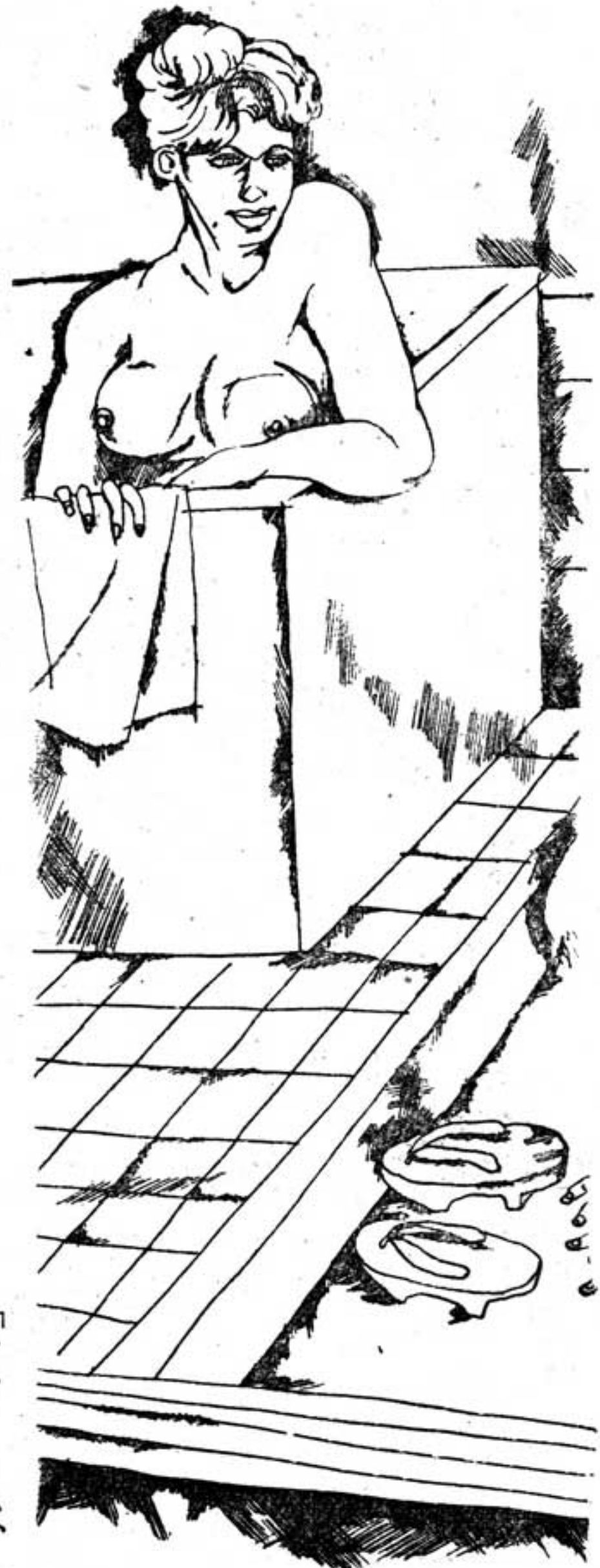
私は唇と舌と歯だけの触覚で、

彼女の足の爪を噛んで、女神への最高の喜悅の奉仕を始める。

この奉仕で噛み切つた爪は世にも尊い美味なものとして、蜂蜜で煮つめられた軟骨のように私の胃の腑におさめられてしまうのだ。

蟻責めはまだ続いて、ますます激しくなる痛痒に身をくねらせ全身で呼吸し呻きながら、私はダラダラと涎をたらして次々と爪を噛んで行くのだ。

その度に私の昂奮は絶頂に達して身振いす



る。

やつと責めから解放された私の全身は痛痒さに眞赤にはれ上つている。

節々の痛む、しびれた手がその痛痒さを追つてかき廻れば廻る程前にも増した痛痒さが全身をかけ廻るのだ。

「いつまで、もそく／＼してるのさ、早く持つといで——」

カラカランと音を立て、彼女の足から塗下駄が湯殿の隅に飛んだ。

私は手をのぼそうとする。

「誰が手で持つて来いつて言つたのよ」

私は野良犬の奉仕で口にくわえようとする。

「口じやない、お前の男の処で持つといで、ちやんと鼻緒をひつかけられるようになってるじやないのよ」

私は四つん這いになつて腰をおとして、ぶきような腰つきで、やつと鼻緒をひっかけて、ゴソ／＼と這つて下駄を運ぶのだ。

彼女は私のその格好がよほどお気に召したと見えて、ぬく／＼と浴槽につかりながら、幾度も幾度も下駄を投げ飛ばしては奇妙な下駄の運搬を私に強いるのだつた。

侵害される愛撫

今日も亦、私は呻く——
「ウウ……ム、ああッ、もう、もう勘弁、もう勘弁して——」

「シッ、静かにしてなきや駄目ぢやないのッ」
「ムウ、……し、静かにしてるんだ、ああッ
静かにしてるんだ、もう勘弁してくれ——」
「フ、……意気地なし、お黙りつたら、お黙りッ」

彼女は冷やかにせうら笑う。

私は両の手をおがみしばりにされたまゝ、まっすぐ上に、両の足もくるぶしの処でしばられて、恰度ハンモックの様に両端が湯殿の壁の鉤にしばりつけられ、ごろり——とタイルの床の上に転がされているのだ。

そして、今私に呻き声をあげさせているのは、まる裸の全身に、所きらわず、べつとりと塗りつけられたトロロ芋なのだ。

始のうちこそ、たかゞトロロ芋と簡単に考えていたが、それ処ではない、じわ／＼と全身を襲つて来るむずがゆさが加速度的に強烈なかゆ

あのたえられなかつた状景がチラと頭を擡げ始める。

「さ、今日はあんなことしないから安心して四つん這いになるのよ」

私は命ぜられるまゝに四つん這いになる。

そして、右の手首と左の足首と、左の手首と右の足が縄をXに交錯させて縛りつけられる。

彼女は例のサケの罐を持ち出して来た。

この犬はサケの罐詰のあの油ぎつた汁で馴らされて来た犬なのだ。

「約束が違うぢやないか」

私はまだいくら自由のきく体で彼女に体当たりして私にとつては魔の液体をタイルの床に流そうと企てたのだ。

「お黙リッ」

気配を察した彼女は体をかわし、私ははずみを喰つてぶざまに転つてしまった。

彼女は起上ろうとする私をねじふせる。

「お喋りするよ、こうされるのよ」

私の口には布きれがねじ込まれる、彼女のパンティだ。

彼女の肉体の縊てを、くわえ込んだ思いの私の前で、サケ罐汁で自由自在にされる犬が、彼女の御好みのまゝに動き廻っている。

尻つぽが私を揶揄するようにヒョイ／＼と振られている。

「ホ、ホ、心配しないで待つてなさいよ、今日はおれをやらないうわ、おれは、あんなにとつといたげるわよ、ホ、ホ、見て御覧よ、この犬

又頂けると思つて××してるわ、フ、フ、、、、擦つたいよ……」

彼女はもう昂奮に眉の根をよせて、犬が彼女を頂ける希望にもえている部分に手をやつて愛撫しはじめた。犬は妙な身体の動かし方をして全身で呼吸している。

私は彼女の間を見て体当りをくれた。今度の体当りはまんまと成功した。

「馬鹿ッ何するのよッ」

彼女は眉をつり上げておこつた。

「い、わ、あんながその気なら」

彼女は別の縄で両足を夫々縛るとそれを壁の鉤にしぼりつけた。

私はその縄の範囲内で横転、反転する丈の自由しかなくなつた。

「さ、私がやるのが嫌なのだったら、あんながやつてやるがよい」

彼女は私を仰向けに転がせて、彼女を頂ける希望にもえている犬の部分の口へ持つて来た。そして私の口におし込んであるパンティを引きずり出した。

「さ、可愛がつておやりなよ、切角あてにしてるんだから」

私は歯をくいしばつて、唇を固く結んだ。それは一寸のすき間からでも、口の中に入り込み兼ねない危険を感じさせたからだ。

犬は中途半端な愛撫に結末をつけるように私の口の廻りから、鼻の脇へ異様に熱っぽいものをこすりつけて来る。

私はせい一杯の動きをして、それをはね返した。犬はたあいなく私の上から転げ落ちてしまった。

「あんなどうかしてんのね、もう承知しないわよッ」

彼女は強引に低い四つんばいの姿勢をとらせると頭の方に背を向けて私の上に馬乗りになつた。

「さ、おいで、おいで、今度は大丈夫楽しませたげるわよ」

彼女は私の腰を犬に抱えさせるようにした。

そして犬のそれが、全く私の想像もしなかつた、全く防禦の出来ない部分に……

「そうよ、そうよ、上手にお楽しみよ、ホ、ホ、今度はすつかり御満足のていね……あら、随分慾張つてるのね、これも慾しいの、さあ、あげるわよ、……いやよ、そんなに乱暴しちゃう、駄目、駄目もつと、そつとしなきゃあ、擦

つたいじゃないのフ、フ、フ、」
犬の昂奮につれて彼女は私の腰の上で身もたえしている。

「ぐわあッ」

思わず私は叫び声をあげた。私の内臓が赫熱の何ものかで、ぐわんと突き上げられてくる。それつきり私は気をうしなつてしまった。

(おわり)

史實戮殺夷蝦

血の允沙具沙

ペチカは脂をふいて燃える松の太枝で、縛つた二人の男の手足の爪先を焼いた。炎が指先に觸れると、皮膚が焼け、皮が小さな音をたてて燃えた——色男を自慢した男の、眉毛や髪の毛が消え失せ、高い鼻はまるくふくらんで脂をたらした——

吉田 参 伍



「アッ、なにをなされます。お離し下さい。お許しを……」
 「どうか、お助けを、お離しを……」
 なにやら口々に喚き叫ぶ二人の女の口からそんな言葉がほとばしっているであろう。胴、小手、脛当てに身を固めた二人の軍兵の小腋に、それぞれ抱えられた女の、アイヌ紋様を織り込んだ厚子の裾がわれて、雪国のその初雪のように真白い、足が腿が、網に戴つた白魚のごとく挑ねる。
 「これ、静かにせぬか」
 「溫和しくしろ、殺しはせぬて」
 二人の軍兵は空いた片方の掌で女の口を蓋すると、その声を殺して言つて、一面に霜の降りている草原を、刃

物のように冷く光る二十三夜の月の下に、黒々と聳えている蝦夷松の林めがけて走った。

林のなかには暗かった。二人の軍兵はそれぞれ木の切り株を枕に女を轉がし下すと、ハアハア白い息を吐いた。そしてすぐさま、獲物を前にした獣ものの眼を輝かせて、袴の紐を解きにかかった。女たちは恐怖のために声こそ出さなかつたが、隙さえ見つければ、いまにも逃げ出すとする敏捷そうな身構えをしていた。

イヤア レンコー

イヤア レンコー

エン アイヤア

哀調を帯びたアイヌ・メノコ達の唄声が、平地の方から流れてくる。蝦夷征伐の先鋒隊の大將佐藤権左衛門とその松前藩の軍兵、志毘茶利の酋長沙具沙允とその郎党七十余人の、和議成立の酒宴がそこで酣なのだ。

大きな車座の中央には、赤々と焚火が二つも三つも燃え清濁二酒の樽から盛んに酒が配られ鮭、鯨の干物などを肴に軍兵達の合せる手拍子も賑かである。

座の中央には佐藤権左衛門と沙具沙允が向い合うように坐っている。沙具沙允は身長七尺にも及ぶ大男である。彼は容貌魁偉、年八十歳にもなるが腰も曲らず、常に鯨油を用いたものを食している故か血色艶やかで、その皮膚は青年をも思わせた。

そもそもこの和議の酒宴は、大將権左衛門の胸に一物ある謀で、この年の四月、松前家味方の蝦夷、及びその前年に日本人貿易の者四百有余人、蝦夷数千人、船三十余艘を襲い、殺害掠奪したことから、將軍家綱は蝦夷沙具沙允の平定の命を松前藩に下したのである。ところが権左衛門は真正面から沙具沙允と争うことを好まず、沙具沙允の居所、志毘茶利を距る一日ばかりの行程を前にして、ここに陣を敷いた。そして途中謀計と甘言とを用いて沿道の夷人を降して来たが、ここにおいても陣營建築を手伝った者には、その命を恕す。そうでない者は皆殺しにする。という布礼を出した。すると近隣の夷人は勿論、遠くの夷人どもまでこれを聞いて、柵材木を運び茅を持つて来て営舎の建築をし、柵を立て廻した。

そうやっておいて権左衛門は沙具沙允に使をやり降伏を促した。沙具沙允のもとにも近隣の降伏を知り、江戸から大軍が来るという噂も聞くと、流石の沙具沙允も降服を決心したのだ。そして助命を乞うて、千種の寶物も辞せずとばかり、それを持ち込んで権左衛門の軍門に降つたのである。

権左衛門はその中の寶物八百種も受取つた後に、本隊の総大將松前八左衛門泰広に援軍を促したのである。

「さて蝦夷の酋長沙具沙允よ。我方も汝等の和睦を許して、償品八百種も受入れたからには、もう大丈夫というものだ。今宵はその祝いの酒

宴を開こうではないか」

権左衛門の言葉に、沙具沙允とてなんの異論があろう。感激こそして、早速近隣の部落からアイヌ娘達を給仕女としてかり集めてくると、ここに盛大な和議の野宴が開かれたのである。

＊ ＊

権左衛門の輩下に、この夏江戸の浪人から召抱えられた川合三太兵衛、井田安衛門という若者がいた。二人とも江戸の蕩児で、ここ北の果ての松前藩に仕官したというのは、異国の女に接してみたいという彼等の女色趣味が多分にあつたのだ。

その頃、蝦夷は日本領土とされていても、松前以北は、まさに異国の感があつた。彼等日本人からすると、蝦夷は異人だ。若い三太兵衛と安左衛門は、蝦夷の美人娘は勿論、折あらば露国までも伸ばして、露国美人の肌にも觸れたいと悲願をたてているのだ。

三太兵衛と安左衛門は、先程から酒宴のさ中に、酋長沙具沙允の側に控えている二人のアイヌメノコに眼を奪われていた。美しい玉の髪飾り頸飾り。それに儀式用の厚子に着飾つて、唄に合せて可愛い小首を振っている彼女達は、他の娘達に較べて特に色白であつた。黒く房々とした髪を後ろで束ね、黒々とした眉と、その特長のくまどりの粗野な感じだが明確さが、いやが上にも江戸女などには飽きた彼等の嗜好そのままに、エキゾチックな物語つていた。

二人の娘は、いづれも腹違いだが沙具沙允の娘ペチカとコイトイだった。

「どうだ、三太」

「ウウーン」

これだけの会話で二人の企みは語り盡される。あの江戸の遊女の用いる裾襦のきらびやかさこそないが、粗朴な感じの大きな紋様の厚子が彼等にとつては又魅惑なのだ。

そして、そのうちに包まれた、がつしりした骨格と、都の女とまた違う白い肌。北国の太陽も溶かすばかりの旺盛な情念——二人は生唾を飲み込んだ。

蝦夷人たちは、滅多に口に出来ない内地酒の美味にすっかり酔つていた。酋長沙具沙允も酔つていた。ただ計を持つ松前藩の軍兵達には酔うほど酒が運ばれて来なかつた。だから兵士達は生酔いの眼を酒不足の不満も手伝つて、給仕女のアイヌ娘たちの腰つきなどにばかり向けていた。

一抱えの枯枝が投げ込まれると、炊火がピチパチと勢いよく燃えだした。酒に酔つた者達の顔を、それが一層赤く照らしていた。

安左衛門は三太兵衛の脇腹を肱でこ突いた。

「おい、三太、見ろ」

三太兵衛は言はれた方を見ると、酋長沙具沙允の側に坐つていたペチカが立上つた。そして隣のコイトイとなにやら話し合つていたが、やがて二人は酒宴の席を抜け出した。たぶんペチカが小用をたすのにコイトイと一緒に誘つたもの

のと思はれる。

安左衛門と三太兵衛は眼で示し合すと、これも同僚に気着かれぬように酒宴の席を抜け出したのである。

ペチカ、コイトイの二人は、後ろから、安左衛門と三太兵衛が尾行してくるのも知らず、陣屋の裏側に廻ると、熊笹の茂みに向つて、くると尻をまくり、顔をこちらに向けた。そしてその場に中腰になつて放尿した。

安左衛門、三太兵衛の二人は、ペチカ、コイトイの顔がこちらを向いているので、それ以上前へ進むことが出来ず、二人の娘が放尿し終るのを陣屋の蔭に隠れて待った。沢山の秋虫が草むらですだくような、シュシュシュという音と、厚子を着飾つたピリカ・メノコの月を仰いでの立小便を、異常な興奮に燃えて、眼のあたり、息をもつかず見守つていたのであつた。やがて、二人の娘は尻を二三回ぶるんと前後左右に振るつてつき出した腰を伸した。

「おい、いいか」

三太兵衛が安左衛門の耳もとで叫ぶと、前へ突進した。

「あつ！」

「あれつ！」

娘達は、それがつむじ風のような一瞬の出来事であつたので、逃げ騒ぐ暇もなかつた。三太兵衛がペチカを小脇に抱え込んで、一散に蝦夷松の林めがけて駆け出すと、続いて、安左衛門がコイトイをかき抱いて後を追つていった。

イヤア レンコー
イヤア レンコー
エン アイヤア

女達の唄声が流れてくる。その哀調は、今宵最後の乙女の姿を哀れむように、コイトイ、ペチカの胸に響いてくる。

安左衛門は木の切り株を枕にして、押し倒したコイトイの前に、袴の紐を解きほどこいて片膝つくくと、まじまじとその顔を見た。恐怖と忿怒に戦いた白い顔の皮膚が痙攣をおこしてぴりぴりと動いている。いまや猛獣をも前にした雌鹿のようなつぶらな眼をして、少しでも逃れようと、後へずろうとしてるのだ。

「これ、怖くはないというに。江戸一番の色男花川戸の浪人井田安左衛門。いまは松前藩の武士、安左衛門が、そちを可愛がつてやろうというのじゃ。靜かにせえよ」

安左衛門はコイトイに観念させるように、そういうと、コイトイの着ている厚子の前を膝で割つた。そして左手で頸をかき抱き、右手でぶつくりとふくらんだ十八乙女の胸に手を突込んだ。

コイトイはそうされると、くやしさに歯をキリキリと噛み鳴らし、身をよじつて安左衛門の肌から逃れようとした。

「これ、騒ぐでないぞ、これ溫和しくしておれ悪いことではないに」

安左衛門が一層コイトイのからだに重みをか



けてゆきながら言つた。

「こら、お前まで、あの娘の真似をせずともよいに。お前とて同じこと、毛むくじやらの夷人どもより、江戸つ子の俺の味も、また、よきというもんだらうよ」

すぐ側で三太兵衛も安左衛門と同様に、女を押えつけながら叫んでいる。

「あれつ、誰か助けて……」

二人の女はそんなことを喚き続ける。だが二

人の若者にとつては、そんな喚きなど一向に耳に入らぬ。それだけに又娘たちも必死の抵抗を試みるのだつた。彼女たちは熊に押えられた狼よりは遙かに可弱かつたが、それでも山野を跳び巡る羚羊のような脚で、野兎の生皮を剥ぐ爪で、蹴り、あばれ、男達の顔や頸に爪を立てた。脚で暴れるたびに、厚子の前がはだけて、彼女たちの太腿さえ現はになる。

「ややつ？……」

安左衛門と

三太兵衛は同時に、声ならぬ驚きの声をあげた。二人が期せずして声をあげた理由は、彼等の眼に異様な毛物が飛びかかつて来そうに見えたからだ。それは童女の頭をも思はせる、先頃の山狩りで射止めた鰐いさなのそれにも似ていたからだ。彼等二人は、さつ

と手を引きかけたが、すぐにその正体がなんであるかを突きとめていた。そこにこそ、自分達の悲願があつたことを知つた。だが、その彼等の攻撃がひるんだ隙にペチカの爪が三太兵衛の左眼に突き立つた。彼の眼尻から赤い血がたらたらと糸を引いて頬をつたつた。

安左衛門も、痛みも忘れた三太兵衛も、今は先陣の功を急ぐのをやめていた。敵の本陣を前にして、ぐつと馬の手綱をひき絞るようにして、丈なすかと思はれる草ならぬ草を靜かに両脇に分けるのだつた。そして、やつと道を拓くと今度は一気に攻めていつた。江戸の女には覚えないうい甘美な、それでいて荒々しい興奮の瞬間だつた。野性の女は憎惡に燃えた眼から異様な輝きをみせ、抵抗する氣持とはうらはらの呻き声をあげると、男の手首に深く噛みついた。それは痛みからくる快感か、そこにこそ、確かに北国の太陽をさえ焼き盡すばかりの炎が燃えた。三太兵衛の眼から血がたらたらとひたたり、安左衛門の手首に喰いつくコイトイの唇は血で真赤に染つていた。

* * *

日本人松前藩の佐藤権左衛門の軍営に降つた沙具沙允の輩下で、はぐか、かてんく、まかのすけの三人は、沙具沙允にすすめられるままに代々の寶物まで出して日本人に降服してしまつたことを、今更ながら悔いていた。そのため彼等は酒宴には出ず、陣屋の一隅で戸外の騒ぎを

苦い顔をして聞いていた。彼等は大酋長沙具沙允の身に、必ず危険がやってくることを予言出来た。それは蝦夷人を亡ぼすのに、いつも日本人が使用している、甘い汁を飲ませて皆殺しにする手に似ているからであつた。蝦夷人はシャモを怖れ、憎んでいるのだ。その酋長たるべき沙具沙允が、江戸から大軍が来ると聞いただけで、千種の寶物まで運んで降参してしまつたのだ。はぐか、かてんく、まかのすけの三人は、これ以上蝦夷の挽歌のような唄声を聞いていられなかつた。三人は陣屋の外に出た。野外の酒宴はますます盛大だつた。円陣の中央に赤々と火が幾つも燃えていた。彼等はそれらの騒ぎを横眼で見過しながら、陣屋の裏手の方に歩いていった。

すると、幾棟かの小屋の前からも、盛んに火の手が上つていた。それは焚火ではなくつて、飯を炊いている竈の火であつた。三人はその小屋の前に歩みよつていた。蝦夷語を話す炊事の雑兵が三人の姿を見て声をかけた。

「お前等は、酒盛りには加はらないのか」

すると、三人のうちで年嵩のかてんくが、

「そんなに、めし炊いて、どうするだい？」

と、それには答えずに問うた。かてんくにしてみれば、この陣営には百五十余人の軍兵しかいないのに、ここではいま五百余人もの分のめしが炊かれていたからであつた。

「これか、これはお前等と和議が出来たで、お前等一同に御馳走するめしだよ」

炊事の兵はそう無造作に応えた。かてんく、まかのすけ、はぐかの三人は、もうそれ以上の疑問は抱かなかつた。それでも三人はなぜかしら酒宴には加わる気持がおきぬま



ま、蝦夷松の林の方に歩いていった。真白に降りた霜で、草を踏む足が冷かつた。

「誰か助けて……」

苦しうに叫んでいる、蝦夷の女の言葉を、年若で耳ざといはぐかは聞いた。すると闇でも見える眼を持つたまかのすけが、林の中で争っている人影を見た。そして、それが酋長沙具沙允の娘の、ペチカ、コイトイであることもすぐ分つた、三人の蝦夷人の血は激昂した。

三人は高ぶる気持を压えた。ここは、他ならぬシャモの陣営内なのだ。彼等は霜の落ちた草に身を伏せて、靜かに進んだ。そしてすぐ眼の前で、酋長の娘達がシャモの兵士に犯されるのを見たのだ。年嵩のかてんくも、もう我慢が出来なかつた。だがシャモの軍門に降つたいまは、夷刀も矢も弓もなかつた。三人は合図とともに飛び出すと、娘達に重なつてゐる兵士の頸を締め

た。ペチカを抱きすくめている

三太兵衛は、またも恍惚境を、かけ登つていくさ中であつた。その時、彼は不意に後ろから頸を締められたのだ。

「ウウツ」

絶頂感がそれによつて早められた。彼は苦しみのためと、精気をはきだすために身を屈めた。鬱血した顔の血が、左眼の傷口からほとぼしり出て、黒い眸が異様に輝くペチカの白い顔に、ぼたぼたと赤黒い、牡丹のような花びらを散らした。

安左衛門も、三太兵衛も引き倒されて、息絶える前の苦悶に顔を歪めていた。

「かてんく、まかのすけ、お待ち」

救いの手に自由となつたペチカは、身を繕いながら素早く立上つた。髪を乱れた彼女の顔は三太兵衛の流した血を受けて、鬼女の如く凄味を帯び、これまた安左衛門の手首の肉を喰いとつたコイトイも、人を喰つたように顔中血だらけにしていた。声で止められて、二人の蝦夷は不屈者の頸を締める手を少し緩め、ペチカの顔を見守つた。

野性の者は血を見ると、その氣持が荒れてくる。

彼等はペチカが不屈者を一気に殺さぬ理由を知つて、知らず自分達のなかにも残忍な血が湧いてくるのを覚えるのだつた。

「私達二人は、この憎いシャモの兵士のために尊い沙具沙允の血を汚されました。ただ殺してしまつては氣が済みませぬ。よいことがある、

はぐか、お前そつと行つて陣屋の前から火を持つといで」

ペチカはそう言うのと、もうすつかり沙具沙允の娘の威厳をとり戻していた。

なかば氣を失いかけていた、三太兵衛と安左衛門は、前をはだけたあられもない恰好で、解いたままの袴の紐で、ぐるぐると後ろ手に縛られていた。脛には脛当を巻いているので、これはそのまま四肢を縛られた形になつた。口にはそれぞれの褌がおし込められた。

「はぐかが来た。火が来た」

コイトイが叫んだ。

「さ、お前達は、この人を動かぬように圧えつけておいで。コイトイ、私たちの怨みと、汚されたものを、これで焼いて、清め、はらすのじや」

ペチカは、はぐかから脂をふいて燃える松の太枝を受取ると、縛られた二人の手足の爪先の一本一本を焼いていつた。炎が指先に触れると皮膚が燃け、爪が小さな音をたてて燃えた。二人は苦悶に身をよじり呻きながら氣を失つた。

「今度は、コイトイ、あんたがおやり」

コイトイはペチカから火を貰うと、氣を失つている二人の男の顔に近づけた。江戸一番の色男と自慢した安左衛門の眉毛や髪の毛が、先に炎に舐められて、じゆうといつて焼き消された三太兵衛の高い鼻は皮膚が破れ、焼けてまろくなり、ふくらんで脂をたらした。二人の男はこの焦熱地獄の責苦に、ふたたび息をふきかえし

そして又、氣を失つた。

「今度はペチカの番よ。おやりよ」

ペチカは、コイトイから火の枝を受取ると、男達に命じて、いままで自分達が枕にして汚された切株に、二人の裸のままの股間を晒らすように、仰向けに据えさせた。

「この憎い奴め、これが私たちを汚し、苦しめ慰んだ悪ものじや。こうしてくれる。思い知れシャモの悪人め！」

ペチカは三太兵衛の股間に火を近づけた。先程からの責みに、あたり一面には、毛ものの肉を焼く時のような匂いが立ちこめていた。はぐかも、かてんくも、まかのすけも、顔中血だらけにしたペチカのもの凄顔、いまやうつとりとして眺めている。

ちりちりと陰毛が焼け、じゆうつと、生きもののような陰肉が焼けてのたうつた。

「さあ、どうじや、思い知つたか」

ペチカは一層火を近づける。三太兵衛は三度この思いもよらぬ責みに蘇生した。そして、その断末魔の苦しみのなかから、最後のなにかを叫ぼうとするが、口を閉じられているのでそれは全く無駄なあがきであつた、その時、火中の栗がはぜたような音が、一つしたかと思うと、三太兵衛はやつと息絶えてしまつた。

「さあ、今度はコイトイの番じや。早くしなされ」

ペチカは火をコイトイに渡すと、自分も安左衛門の前に立つた。安左衛門も、三太兵衛と同

じように責められて、氣を失つていた。それでもコイトイの差し出す炎を身に受けると、耳もとで割れ鐘を乱打されたように、焼痛が全身を駆け巡った。やがて、もう一つ栗のはぜる音がした。そして、安左衛門も動かなくなつた。「これで仇は打つた。シャモの番人に気づかれるといけませぬ早う火を消しましょう」

ペチカは、はぐかに火の始末を命じた。

と、その時であつた。俄かに怒濤の打寄せるような音が、蝦夷松の林を遠くから囲んできたかと思うと、わつという関の音が、あたり一面に轟いた。

酒宴の場では、蝦夷の大酋長沙具沙允をはじめ、一族郎党はすっかり酔のためにつぶれてしまい、熊や鹿の皮にくるまつて、いい気持で砂金取りの夢や、狩りの夢を見ていた。彼等はシャモの兵士が一人、二人減りして、彼等を撃つための軍装を整えていることに少しも氣着なかつたのだ。

いままでも賑かに運ばれていた酒宴が、次第に静まりかえつていったことは、酔のために夢路を急ぐ、蝦夷人たちには、かえつて心地よいことでもあつた。

ただ撃つ目印を失はないために焚火だけは一層勢いよく燃やされ続けていた。

沙具沙允は、遠くの方で海鳴りがしていると
も思つた。

又、志毘茶利川が大雨で繁乱した音かとも思えた。だが深い睡魔に襲われながらも兵馬の叫びに他の者よりも疾く、籠の敷物の上に身を起していた。

「者ども、起きれ、シャモ権左が、我等を誑かしおつたぞ！」

一族郎党の蝦夷たちが跳び起きた時は、既に
もう遅かつた。

本陣の総大將松前八左衛門を先頭に、五六百の兵士が完全に彼等を包囲して、その関の音が十重二十重に取囲んでいたのだ。

身に寸鉄も帯びぬ蝦夷たちにとつて、も早や逃げる術はなかつた。

槍襖を立てた軍勢はじわじわとその囲みを縮めていった。蝦夷たちはもう絶対絶命と知ると、やたらに驚起して、敵陣に突込んで我が身を進んで田楽刺しにする者、馬の蹄に脇腹をけ破られる者も出た。

「卑怯な権左め、甘言を以て我等を誑かしたるは、陋しい熊の糞にも劣る奴めだ！」

八十歳の沙具沙允が、七尺の身を青年のように力み、白髪を逆立てて切齒扼腕したが、いまは全く巨熊に豆鉄砲にも似た甲斐ないことであつた。

総大將八左衛門は、兵を督して槍襖の囲みを一段と縮めていった。そして、二十三夜の月光が、草原一面に降りた霜の上に消える頃、蝦夷の大方は自ら逃げ惑つて、槍襖の前に背中まで通して突き殺された。沙具沙允は捕えられると

衆人の目する前で、その熊のように毛の生えた裸を晒して、身は刺身のように寸断された。彼は最後まで、蝦夷の大酋長の面目を保つて、かつと敵を睨みながら泰然として殺された。

蝦夷松の林で、関の声を聞き、身を潜めていた、ペチカ、コイトイ、まかのすけ、かてんくはぐかも、捕えられる前に刀と槍で滅多突きにされて果てた。

総大將八左衛門は、なおも残る蝦夷たちを一挙に皆殺しにするため、陣屋にまで八方から火をかけた。

槍襖を巡らして蟻も洩らさぬように取巻いたその中では、深手を負つてもまだ死にきれぬ者、傷を受けながら逃げ惑うもの、まだ傷つかぬ者も、その火勢から逃れんものと、喚き、呪い、叫び、待ち構えている槍に突き刺されて悶絶していった。

風はなかつたが火勢は強まり、焼け落ちた陣屋の下敷になつて、重なり合つた幾十人の蝦夷の生き残つた者と死人は焼かれていった。その煙は高くゆらゆらと天に沖し、沢山の肉の焼ける臭いが、蝦夷地の平野一帯に何時までも低く漂つた。

寛文九年閏十月二十日の早曉の出来事である。

(結)

山中 青兒 画

 嗜虐マニヤの手記

黒髪地獄

洗髪にすると、殆ど腰まで垂れる見事な黒髪だった。安待合の奥で、私はR子と云うよりは、この黒髪を相手に耽溺の日々を過ごした。ネットリと手にまつわりつく女の髪の感触がどれほど私を喜ばせてくれたことだろう……。

安田富士夫

サチズムに遺伝性があるかどうか、私は知らない。私が知っているのは、父と私は、二代に亘るサチズムの愛好者であると云う、事実だけである。

私は別にこの病理に就て研究したわけではないけれど、多分こうした倒錯性欲は、遺伝には関係なく、むしろ環境に大きく左右されるものだと思う。つまり私の場合は、幼時、少年時に

受けた異常なシヨックが、決定的な原因となったもののようである。

そのシヨックとは、両親の寝室で見た、父に虐げられる母の姿であり、又鬼のように猛り立つて母を責める父の姿である。

その頃私の家は、ある中流都市で古いのれんをうたわれた染物屋だった。母はその家付娘で父は職人上りの養子だったのだから、少し趣が

変っている。養子に見込まれただけあつて、ひどく物固い、内気な性分だと世間からは見られていた。

私の家は間口は割に狭いが、奥行が深い家で、しかもそれが坂の上だから、家全体が傾斜していて、奥へ行くほど低くなっている。職人たちは店の二階、一人息子の私は女中と一緒に勝手につゞく居間、そして両親は其処から又三段ばかり階段を下りた、納戸部屋にやすむ習慣だった。

いくつも部屋は明いていたのに、どうして両親があんなに奥の、不便な納戸部屋を寝室にしていたのか、それは後で知ったことだった。

私が多分十二、三の頃のことだったと思う。どうして夜おそく、そんな処に行つたのか、その理由はもう思出せないが、とにかく、ある冬の一夜、私は納戸の前の廊下に、震えながら立っていた。

眼の前の板戸が、どうしたことか一寸ばかり隙いていて、内部からたゞならぬ気配が洩れてくるのだ。恐る／＼覗くと、パツと派手やかな

母の長襦袢の色が眼を射た。

「ひイツ、ひイツ……」

と、息づくように呻き声が洩れる。母は髻をつかまれながら、部屋中を引きずり廻されているのだ。

母はその頃、毎日丸髻に結っていた。その髻の根がガクリとくずれて、もう本結が切れた髻を、赤黒く逞しい父の手が巻きつけている。紫色の手絡が、今にも落ちそうにひつかうっているのが、子供心にも、何とも云えずなまめかしい印象を覚えた。

大力の父に髪毛をつかまれて、容赦なく引きずり廻されているのだから、細表の母の眼は吊り上つて、喰ひしばった唇元のあたりも、恐しく無惨な感じだった。

私はあつけにとられて、泣くのも忘れて、そんな両親の姿を見守った。驚きの余り、私は身動きも出来なかつたのだ。

華奢な母を引きずる時も、その肩や腰に竹の二尺指でメツタ打ちを浴びせる時も、父は何か声高に罵りつけていた。「長吉」と云う名前が度々洩れたようだった。長吉と云うのは、その頃店に居た、職人の一人の名前だったけれど、その長吉と母と、どんな関聯があつたのか、私は知らない。恐らくは何の関係もなく、父はたゞ責めの手段の一つとして、そんな身近な男の名前を利用したのかもしれない。

その夜見た、虐なまれる母の印象は、二十数年を経た今でも、鮮かに脳裡によみがえる。そ



れは思出す度に美しく淨化された。ましてその父も母も没した今では、私はまるで神聖な宗教画の一頁のような錯覚さえ覚える。

モダンなショート・カットばかりの当今でも、私は古風な日本髪の子だけが眼についた。手にあまるような黒髪の手主と云うことだけで、異様な憧憬の対象になり、どんなに素晴らしい美人でも、パーマされた短い頭には興覚めしてしま

う。

日、私は妻の島田姿に人知れず狂喜したけれど、それは御多分に洩れずカツラで、夜の床の彼女は、ひどく殺風景なパーマに過ぎなかつた。そのためかどうか、どう焦つて見ても、今日に至るまで妻とはしつくりゆかない。ピタリと密着した気持にはほど遠いのだ。

手にあまるほどの、豊かな黒髪の女……。それは、私の描く女性の絶対条件である。かつての母の面影を追いながら、こうして私の女性遍歴が始つた。こんな条件を具えていて、しかも

私のサジズムも甘受してくれる女性と云うのだから、容易なことではみつからない。R子は、その数少い一人だつた。

三流地の芸者だが、まだ歳は若い。その土地の若い芸者の中で、地毛でつぶし島田が結えるのは、「あたし一人よ。小さい時からこの子は髪が綺麗だつて云はれたから、惜しくつて、一寸でも切る気がしないの」と、云う。

洗髪にすると、殆ど腰まで垂れる見事な黒髪だつた。安待合の奥で、私はR子と云うよりは、この黒髪を相手に耽溺の日々を過した。

ネットリと手にまつわりつく女の髪の感触が、どれほど私を喜ばせてくれたことだろう。それを手に巻きつけてグイと引くと、眼を吊り上げてのけぞるR子は、私にとつてそつくりあの夜の母の再現とも思はれた。

まづ長留絆一枚にして、思う存分に部屋中を引きずり廻す。この時私は、かつての父のように、R子の他の客の名を、本当に嫉妬にかられては口走つた。それが何より、二人の興奮をかき立てゝくれるから……。

それからR子を裸にして、両足首をしつかり縛り、嚴重に柱にくくりつける。この時には床上二尺ばかりの場所に個定するように、柱に縄止めをつくる。これをしてないと、彼女は必死に藻掻くから、ズル／＼と縄がゆるんで、舐が下つてしまふ。但し、足首は直接柱に縛らず、五寸から一尺ほどは足首と柱の距離があるように、

縄を残す。これは舐の回転をよくするためである。

うまく説明が出来ないが、つまり、R子は頭を畳の上に、足首は揃えて縛られ、一尺ほどその縄を残して、床上二尺ばかりの位置に個定される。これで、私が彼女の髪をつかんで、グイと持ち上げると、R子の舐は横一文字に水平になるが、髪が長いから、八畳の部屋でもほゞ一杯になる。

この髪の方も縛つて、反対側の同じ高さの位置に個定して、眺めるのが私の理想だけれど、これは云うべくして不可能に近い。R子は三十秒と耐えられないからである。悶絶してしまふ。

そこで、私は足の方だけ前述のように高位置に個定し、髪の手をつかんで、ギリ／＼と縄をなうようによじる。と云つても、十三貫の体格だから簡単にはゆかない。畳にぶつかり、きしみながら、R子の舐が鈍く回転する。足首の縄がギリ／＼と音を立てながら、よぢれてくる。

この時は勿論手拭を三本も使つて、嚴重に猿ぐつわを咬ましてあるが、どんなしつかり咬ましていても、暴れ方がひどいから、はづれてしまふ。それに言葉にならない声が洩れる。食事をして直ぐだと、吐瀉することさえある。ずい分色気のない話のようだが、それほどひどい。

充分によじつてから手を離すと、R子は精魂つき果てゝ、グツタリと横たわつてゐる。背中、腰、胸などは、畳にこすれて、うすく血がにじんでいることもある。しかし、足首の縄が充分

によぢられて、強くよりががっているから、手を離すと、自然にそのよりがとけて、その力でR子の舐がひとりでに、鈍く、パタン、パタンと、ひつくりかえる。

反動と云うのは恐いものだ。私はR子の前に立ちだかつて、もう氣息奄々としている彼女が、自然にボタン／＼とゆつくり回転するのを見下す。鈍く動く女体と、その音が、なんとも云えず心地い。それに、R子のあの長い黒髪がサンバラになつて、舐が動く度に、パツと飛び散る、顔にかゝる、胸に背にからまる。絵にもない美しさで、私はもううつとりと見惚れてしまふ。

縄をといてやると、R子は乱れた髪の間から、うつとりと眼をあける。猿ぐつわをとると、布に水分をとられて、すつかり口の中がカラ／＼に乾いているから、すぐに氣付も兼ねて、酒をふくませてやる。

「因果な舐ねえ……」

人心地がつくと、R子は必ずそう云ふ。まつたく、これが嬉しいのだから、彼女も何かの業を負つて、生きてゐるのだろう。私とてその思ひは同じことだ。

こんな共感が、一層二人をびつたりと結びつけてくれる。私にしてみれば、自分の想ひ通り、さんざ酷く取扱つて、さて、グツタリ放心してゐる女ほど可愛いものはない。たとえ三流地の不見転芸者でも、私のサジズムを受入れてくれる、たつた一人の女なのだから……。

彼女の氣力が回復すると、部屋の真中に応接台を引出して、その上にR子を乗せる。待合のテーブルだから、おきまりの鎌倉彫りかなんかの、大ブリな奴だが、此の上に彼女を乗せて、首だけ卓の端からハミ出して、ダラリと下に垂れるような位置に置く。

髪の毛のは疊に届くのだが、私はこれをよい加減に束ねて、先の方にオモリをつける。急場なら床の間の置物や風鎮を利用するけれど、大抵は自宅を出る時から、コッソリ分銅なんぞを用意してゆく。

こんな風に、台から頭をのけぞらして、その髪にオモリをつけられた女の姿は、なんとも云えず、よいものだ。これはオモリが重いほど、それから疊と女の頭の距離が多いほど素晴らしい。つまり、台が高いほどいいことになる。しかし、これはなんと云つても、私の本来の欲求である、逆さ吊りの代用品に過ぎない。私は女を逆さに天井から吊り下げ、その長い黒髪の先に大きなオモリを下げることを空想する。これが私のサヂズムの窮極だと思つてゐる。

しかし、所詮これは絵に描いた餅で、実行は不可能だ。それに、代用品とは云つても、前述の台以上に女を乗せる方法は、利点もある。女の苦痛がそれほど激しくない。それにその恰好のまゝ、彼女の表情、下つた髪などをゆつくり眺めながら、関係を結ぶことが出来る。

高潮に達すると、女の眼は益々つり上る。それから、躰の動きによつて、オモリをつけた髪

毛が自然にゆれる。これが私にはたまらない興奮を呼ぶ。髪の毛がオモリと一緒に動くと、苦痛

が加はるから、のけぞつた女は、快樂と疼痛の中で、一層ゆれながら呻くのだ。

犬になつた秀才

ビシツビシツと、如何にも堅い、大きな手ごたえがハネかえつてくる。それが素晴らしい興奮を誘う。眼鏡が飛んで、Nは頭をかかえて倒れた。五、六度打つたと思う時に、棒は眞二つに割れて飛び……

衣川美佐子

この頃「風俗草紙」が、小氣味のいい編集ぶりを見せてくれるのは嬉しい。

でも、私は時々不思議でならないことがある。グラビアは勿論虐げられる女性ばかり。そして本文でもその殆どが、サヂズムは男性のものであり、女性是被虐にのたうつものと、相場が決つてゐる。

もし、その反対だつたら、それはとても奇妙なことなのかしら？ グラビアに挿絵に、責められる男性の、苦悶の表情を見たいと思うのは、私一人だけなのかしら？ だとすれば、私はとても御念の入つた倒錯心理の持主と云うことになる。私の感覚の中ではこんなに自然で、こんなに扱き差しならぬことが……

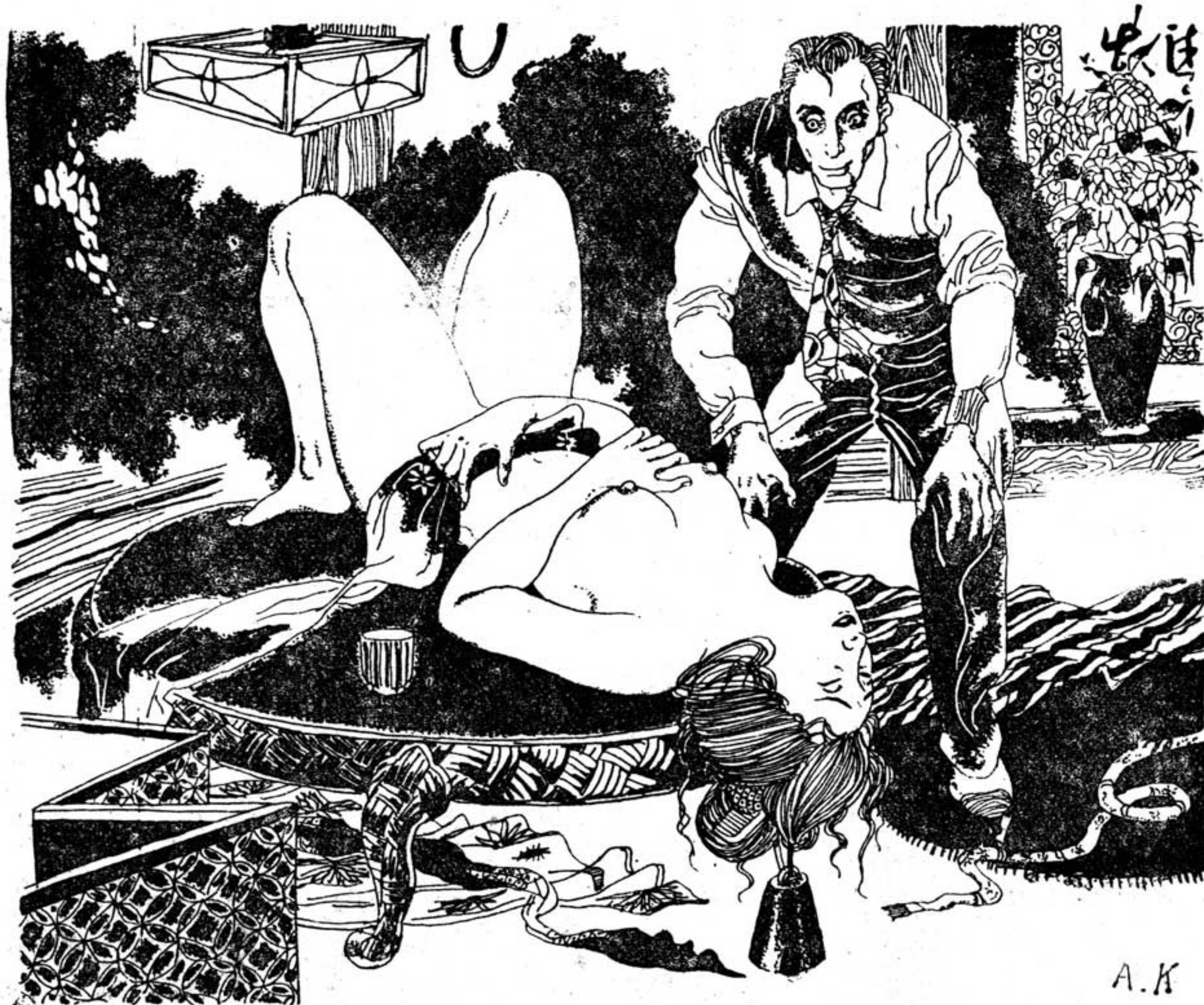
こんな私の秘密を、まだ家族の者が誰一人知

らぬ頃のこと、私は一人の男性に打明けたことがあつた。三年前の七月だつたと思う。

Nは父の郷里の村の秀才だと云うことで、大学在学中の一年ばかりを、私の家の書生部屋で暮してゐた。度の強い近眼で、その他にはこれと云つた特徴もない、平凡な人だつた。

その日は真夏のことで、東京の姉の一家も来ていたから、家中で海岸に泳ぎに出た。残つたのは女中一人と私だけ……。私はその日、海に入れない躰だつたから……。退屈だつたから本でも読もうと思つて、何気なく父の書庫に入つた。其処にはNがいて、熱心に何か巻物のようなものをひろげて、見入つてゐた。

私の姿に気がついた時の、彼の狼敗ぶりと云つたらなかつた。思出しても、可笑しくなるく



A.K

らい。Nはその巻物を私の眼からかくそうとして、オロ／＼しながら裏返したり、巻き返えしたりするのだけれど、その両手が滑稽なほど震えているのだから、私の方が驚いてしまった。

「どうしたのNさん、それ、なあに？」

「いや、なんでもないのです。お嬢さん、見ちやいけません」

それがあんまりムキな態度だったから、かえって私の興味をそゝつた。持前の勝気な性格も手伝って、私は高圧的に彼の手から巻物を奮ひ取つたのだ。

「いゝぢやないの、どうせあなた

のものぢやないのでせう？ この書庫にあつたものでせう？」

それは古めかしい絵巻物で、表には判り憎い書体で、たしか「七難七福」と書いてあつたように思う。Nが見ていたのはその七難に当る場面らしく、淡彩ながらさまざまの刑罰拷問の有様が、すさまじい筆致で現出されていた。火刑、逆さ吊り、車裂き、鋸引き、蛇責め、石子責め、釜茹で。とても七難どころではなくて、身の毛のよだつようなむごたらしい責めが幾十となく続いている。

どうしてこんな巻物が父の書庫にあつたのか、私は知らない。しかし、書画骨董が好きで道具屋にだまされては買いこんでいた父のことだから、やはり何処からか持込まれたものだろう。大層古びてはいたけれど、それが一流の名絵師の手に成つたのに違ひないことは、そのものの凄惨迫真力から私にも肯けた。

私はNの存在も忘れて、その地獄絵に見入つた。首だけ出して生埋めになり、その首を木の鋸で引かれていく男の、すさまじい苦悶の表情。それから廻る水車に縛りつけられた男！ みつめていると、私の耳にはその少年の悲鳴や、パリ／＼と骨が碎ける音まで、まぎ／＼と聞えてくる――。

「いや、まったく残酷なもんですね」

「Nさん、あなた、こんな絵がお好きなの？」

「いゝえ、そ、そんなことはありません。こんな残忍なもの、僕だつてゾツとしますよ」

慌て、打消すNの顔を凝視すると、何故か彼は視線をそらせた。那時、私は直感的にあることを覚った。

「残忍？　そう……。でもあたしは、こんな絵を見ると、嬉しくつて胸がドキ／＼するわ。だって男の人がこんな責められてるの、凄く痛快ぢやないこと？」

それから彼のひたがくしにする卑怯な態度が可笑しくつて、私は一層意地悪な口調で云ったのだ。

「ねえ、この車裂きにされてる男の顔、Nさんによく似てるわね」

彼はハッと顔色を変えた。それが小気味がよくて、私は胸が疼くような、思ひがけぬ快感を味った。そして、自分でも無意識のうちに、喋り出してしまっていた。それまで、誰にも話したことの無い、私のアブノーマルな性癖について……。

まだ小学生の二年生の頃、親類の赤ちやんをあやしていて、あんまり可愛くて、そのプクプク肥った頬を咬んでしまったこと。それから遊びに来た同級の男の子を、イキナリ池につき落したこともある。関西生れのその子の言葉のナマリが、なんとも云えず優しく、いとしかったから……。

女学校に入ってから、卒業までに四人の恋人を作つて、同性愛らしい遊びに熱中した。嫉妬から、その一人を象牙の紙切りナイフとプロイチでリンチしたこともあつた。それでもその



合間には、若い体操教師の毛むくじやらの肢を見て、彼の首に犬のように太い首環をはめ、鎖をつけて街中ひいて歩くことを幻想した。

この空想はたのしくて、私はその首環の色から、鎖の長さまでちゃんと決めてしまった。私はサモンピンクのブラウスに濃紺のショーツパ

ンツ。犬である彼に白のランニングシャツで黒革の首輪。銀の鎖でつながなければならぬ……。

私は窓にもたれてゆつくり喋つただけだけど、Nは書架の前に立つていて、額は気の毒なほど汗だつた。幾度も口をひらこうとしながら

その度にためらつて、それから又ハンカチで汗を拭ひ、遂にドモリながら云つたのだ。

「お嬢さん、実は、僕は……」

そして、へたく／＼と、私の前の床に坐りこんだ。勝ち誇つた、なんとも云えない気持だつた。彼の告白、聞かなくつても判つてゐる。はじめなNの様子を見ると、快感と、それにも増して新しい征服欲がムラ／＼とこみ上げてくるのだ。「ぢやあ、なぜ早く正直に云はないの。あんな絵、残忍で嫌だなんて嘘云つて……、私をごまかすつもりだつたのね。卑怯者！」

何時の間にか、私は長い棒を握りしめていた。書庫の窓のブラインドを下す時に使う、一米ばかりの細長い棒なのだ。

「あッ！」

と叫んで、Nが肩を押えたのを見て、私は始めて自分のしたことを知つた。それでも、彼の傾いた恰好を見ると、よけいに気持をそゝられたようになつて、私は夢中で棒をふり下した。ビシッ、ビシッと、如何にも堅い、大きな手ごたえがハネかえつてくる。それが素晴らしい昂奮を誘う。眼鏡が飛んで、Nは頭をかかえて倒れた。

五、六度打つたと思う時に、棒は真二つに割れて飛び、その一つは書架に当つて落ちた。そしてその時、私は内玄関の方に、ドヤ／＼と皆が帰つて来たらしい気配を知つた。

その翌日の早朝の四時。まだぼんやりと霧が立ちこめて夜が明け切れぬ頃、私は邸の裏門か

ら二町ばかり離れた、あるお寺の石垣にそつた裏道に愛用の自転車と一緒に立つていた。北鎌倉の拂曉は閑寂そのもので、人影はチラともしない。

「来るかしら、それとも……」

万一Nが来なかつたら恥かしいと思つた。私のプライドは粉微塵になる。その時はこのまゝ自転車走らせて、海の中に飛込んでしまはう……。その時は本当にそう思つた。

「明朝の散歩に、ルーキーの代りに、あなたを供させて上げます」

場所と時間と服装を指定して、昨夜私はNにそんな手紙を渡しておいた。ルーキーと云うのは私の愛犬で、十二貫もあるシェパードの牡なのだ。

私の腕時計が四時を五分過ぎた時、Nはやはり現われた。勝つた！

私は黙つてルーキーの首輪を、Nの首に巻きつけた。彼は顔色を変えて二、三步後ずさりしたけれど、そのまゝジツと踏止つた。唇をふるわせて、しかし黙つたまゝ、すがりつくように私を凝視する。

私はヒラリと自転車に乗る。片手に銀の鎖を握つた。

「ルーキー、さあ出発よ」

右側はずれかゝつたお寺の石垣、左手は暗い竹藪がつゞく。この晝でも人通りの少い道を私は選んだのだ。

ペダルを踏みながら、後をふりかえつた。真

白のランニングシャツとパンツの彼が、鎖にながれた彼が馳けてくる。今にも泣き出しそうに緊張した顔。——そして、彼はもう汗を光らせてゐる。

辺りが大分白んでくる。ひとりで口笛を吹いた。ペダルに力を入れる。ゆるい下り坂にかゝつた。

馳けてくる。彼は必死に馳けてくる。彼は今の完全な支配下にあるのだ。私は大声をあげて笑ひたくなる。速力を増した。鎖がピンと張る。こんな人間の表情を、誰か私の外に見た者があるだろうか……。秀才を謳はれた彼が、顎をつき出して、犬よりもみじめに喘いでゐる。転倒。反動でよろめくハンドルを、私は危く立て直した。重い、石ころよりぶざまなその彼をひきずつて、私はまたペダルを踏んだ。

海岸にも人氣がなかつた。未だ薄闇のたゆたう波打際に自転車を止めると、私は靴をぬいで、ポーンと力いっぱいほうつた。

「ホラ、ルーキー、とつておいで！」

Nは一瞬見るもみじめな眼でチラッと私の顔を見上げたがやがて四ッん這いになり、犬そつくりの恰好で私の靴の方え走つて行くのだつた。

それから三ヶ月後に、Nは神経衰弱が嵩じて学業半ばに郷里に帰つた。

私はそれ以来、彼の消息を知らない。

x

x

ソドミアにおける 交情の生態

ホモ同志の最初の交會においては、多くの場合、やはり男女のそれと同じように、甘美な囁きと、抱擁、接吻あたりから始まるようである。第一は精神的に、それから交合と……

かびや・かずひこ

小 田 明 男 画



A.K.

きまらぬ場合もあるが、最近の傾向は、概して後者の方が多いようである。
そしてその後者こそ、ヘテロの場合には見られぬ、ホモ独特の交合態度なのだ。
すなはち、男性と女性との閨房においては、

結論を先きにいうならば、ホモにおける交情の生態は、肉体的なテクニクなどの面では、ヘテロ・セクシュアリテ（異性愛）におけるそれと大差はないということである。これはむしろ当然なことだろう。
ただし、精神的な面から見た閨での生態は、ヘテロの場合とはちよつと異なる。否、大分異なる。否々、全然異うといつてもよい。
私はこれから、本誌編集部からあたえられた表題のごときテーマについて呶々を費そうとするのだが、ヘテロの場合と大差はないと冒頭した肉体的な面においても、なるべく、ホモだけがもつものともいえるその小差の例を拾い上げて、それに精神面を綯いませながら、私のカメラアイを働かしてみたいと思う。

A

男性は最初から最後まで能動的態度であり、女性は終始被動的態度を持する。だから、男は攻撃することの快しか感得できず、女は攻撃されることの快しか知るを得ないのだが、ホモにおける後者の交合態度では、双方が共に能動被動を兼ねているから、その両者の快を双方共に味得できるといふもので、それは同性同士だからこそでき得るのである。
快楽はできるだけ多くという、いわば戦後派的な交合態度ともいえよう。
こうした傾向は、最近におけるソドミアの「求交際」の面にも現れている。たとえば、
「能動被動共にOK、K.E.E. 自信あります」
「能動的30%被動的70%の者、その反対のパールセンテージの方と御交際を乞う」
「能動80%被動20%、体格、R、共に自信あり」
などというように、自己の能動被動のパーセンテージを明示し、たといウールニグにしても、或る程度、能被いずれも可能であることを明かにしている。
このような通信文面だけを抜書すると、ソドミアというものは、相手との肉交だけを望んでいるように、曲解する人もあるかも知れぬので、一言ことわっておくが、この他にも各自の性格、趣味なども記し、何よりもまず相手と精神的に結ばれることの希望を附記している者が少くない。
まず精神的に結合して、それから交合に移行



しようというのが、すべてのソドミアの意向であらうと思う。

B

ホモ同士の最初の交会においては、多くの場合、やはり男女のそれと同じように、甘美な囁き・抱擁・接吻あたりから始まるようである。

「ヴェルレエヌは最初から違っていた。僕（筆者註、ヴェルレエヌの第二の同性の愛人であるリュシアン・レティノワ青年）は始めて名を呼ばれてから五日目に、乾草小舎で彼に逢った。彼の唇からもれるものやわらかいこえ、僕の身体の端々まで宝石や花のように讃える音楽のような言葉、僕の髪をまさぐるなめらかな指は僕をうつとりさせた。そしてその自分がつくった天鵝絨のような雰囲気僕を酔っぱらわせながら、その時は、ほんの短い、軽い接吻の他何もせずに僕を家まで送ってかえつてしまった」（菱川紳氏の「リュシアン・レティノワ」より）

これは、同性愛者としても名の高い詩人ヴェルレエヌと美青年リュシアン・レティノワとの最初の逢瀬の場面で、さすがに詩人だけに、甘美なムードをいかにも自然に醸しだしている。又、最近におけるソドミアの手記から拾うとK・Aという人のものに、

「矢吹は片隅の板戸を開けて奥へ入った。そこには脱衣室になつている六畳ばかりの部屋がある。「おい」と呼ばれて、私もおっおっ中へ入り、板戸を閉めた。その途端、私の身体はいき

なりおどりかかつた矢吹に息も出来ない位抱きしめられた。私は反射的に何か叫んで身を交そうとしたが、脱ぎ散らしてある柔道着に足を這らせて仰向けさまに引っくり返つた。

重い矢吹のからだは私の上にのしかかり、私は呻いだ。矢吹は荒い息を吐きながら、上から私を固く抱きしめ、熱い唇を遮二無二私の唇におしつけた。齒と齒が触れてカチカチ鳴つた。——そうやって彼の唇に吸われているうち、甘美な、不思議な情感が私の全身を走り、彼の重い身体さえ次第に苦痛にならなくなつてくるのだつた」

最初は、ペデラスト傾向の男性から能動的態度に出ることは、この他のいずれのソドミアの例を見ても同様である。

ところが、これが、最初の交会においてもその中ごろからとか、二度目の逢瀬からとかになると、ペデ・ウール両者とも、能動被動を同時に、或は交互に反覆する態度に移移するのである。

そして、その交歓に用いられる Technik とか Jacc など、前言したように、ヘテロのそれと大差はみとめられないが、当事者の心理面から見て、ヘテロの場合と異うことは、その愛情のすべてが、それぞれ相手の Phallus 一つに集注し、凝結することである。

このことは、私の許え頻々と寄せられ、山と積まれているソドミアからの手記や書信の

そのいずれを見ても、実にけげやかに現れている。

高橋鉄氏も、このことを強張し、「同性愛の場合、精神的には男の『男性性』^{マシリティ}も、魅惑的であろうが、それにも増して、男性的肉体、殊にその中心をなすファルスは殆んど絶対のものである」

云々と言っている。

私は惟うに、ホモにおけるファルス・ナイドの裏側には、マンリツヒカイトえの畏敬・魅惑の念が潜在しているのではあるまいか。

すなはち、女性の男性に対する場合も同様だが、男同士でも、肉体的愛情の内側には、多くの場合、精神的愛情が裏付けされている。すくなくともそのことを望んでいる。とすると、その肉体的愛情の集注点であるファルスえの讃仰崇敬・愛慕の裏側には、精神的愛情、たとえばマンリツヒカイトえの敬愛が裏付けされている。或は裏付けされていることが



多い、と考えてよいのではあるまいか。

云うならば、「このように男らしい人の、このように立派なファルス！」ということになるのである。そして、かく裏付けされることによつて、ファルスえのナイドは一層熾烈さを増すのであらうと思われる。

なお、ホモにおけるファルス・ナイドについては、近く刊行する自著に詳述したから、併せ読んでいただければ幸甚である。

C

次にホモの交情の生態の一つとして、睡眠中の交合が挙げられる。

すなはち両者の一方が、相手の睡眠中に戯れることで、ホモの手記などの中にも、そうした例がときどき散見される。

ついききごろ、この雑誌で催したソドミアの

座談会においても、読者の杉田氏が、

「今つきあっている同性の一人が、私の眠っているときに愛撫したい」と云っていたというような意味のことを語っていた。

又、私の許え寄せて来たY・Mという青年の手記の中に、次のような体験が記されていた。

それは或る夏、彼が、かねて心を寄せていたところの近所の年下の一少年を誘つて海へいったときの三日目の夜のことで、ふと彼が目覚ますと、傍らの寢床で少年がスヤスヤと寝入っている。

濡れているように光る少年の長い睫毛とつやつやした桃色の唇が、彼の心をゆさぶつた。抱きしめたい、頬擦りしたい、しかしそんなことをしたら少年がびつくりして離れていつてしまふにちがいない——彼はソツと少年の唇に指をあて、その指をおのが唇にあてて、逸る胸をおさえながら眠つてしまった。

次の夜、また同じところに目を覚ましてしまふ、少年の寝顔に見入っていたが、そのうち、暑さのために少年が布団をはいでしまった。はだけた少年の下半身を見るや、彼は我を忘れて手を伸ばし、少年の若草を愛撫しはじめた——。

というのである。

次に又、A・Kというソドミアの手記に、「私はなんとかして彼（十七歳の店員）を自由にする方法はないものかと日夜悩んだ。そ



の頃古本屋

で何かの本に、

横浜の或る種の女が

お客のために薬を飲んで五分

間仮死の状態になつて、客の自由になると
いう記事を読んだ。私は彼に睡眠薬を飲ませよ
うと思つたが罪悪感がして出来そうもない」

そんなことをトッオイツ考えていたが、或る
公休日の日、その店員がA・Kの部屋を遊びに
来たので、A・Kは彼にウイスキーを馳走し
た。彼は酔つて睡気を催し、自分の部屋えいつ
て眠つてしまった。

しばらくしてA・Kが彼の部屋え入つていく
と、蒸し暑い晩なので、彼は寝巻をはいで、大
の字なりに太腿を出し、いびきをたてて熟睡し
ている。そこでA・Kは、前のY・Mが少年に
したと同じような愛撫の仕方、眠入っている
店員を愛撫したのである。

このような睡眠中の戯れは、前記二例のよう
に、年長者から年少者に対して行われることが
多い。

それがどんな嚴つい顔の人間であろうと、寝

顔というものは、どこか
罪のないものである。まして、それが
美しい少年の寝顔であれば、仇気なく可憐らし
く、見る者をして愛撫欲をそそらしめようとい
うもの。

また一つには、相手が知らぬ間に、相手の身
体に対して自分ひとりが楽しんでいっている秘
密的の悦び。

そんなところから、睡眠中の戯れが行われるの
である。

八木義徳氏の小説「青頭巾」は、同性愛の少
年を扱った作品であるが、その中に、次のよう
な一節がある。

「そのままだらけにして、一彦がそつと蒲団を
あけて横の邦夫をうかがふと、邦夫も素直に眼
を閉ぢてゐた。一彦はその横顔をしみじみと眺
めた。強く張つた黒く太い眉、さきのそり返つ
た長い睫毛、強情らしい団子鼻、生々しく濡れ
た赤い下唇、柔らかい生毛のはえた血色のいい
頬、可愛らしい耳朶、しかし一彦のもつとも強
く惹かれたのは、その耳朶の蔭からしなやかな
うなじへかけての襟足の美しさだつた。一彦は
そこに強烈な魅力を感じた。と同時に彼の手は
無意識に胸や腹をすべつて股間に下つて行つ
た。彼は呼吸を殺して彼自身を漬しはじめた。
その彼の目は快感に恍惚としながらも、邦夫の

横顔を喰い入るやうに凝視めてゐた。邦夫は
おとなしく動かなかつた。可愛い団子鼻か
らは軽い寝息さへ洩れてゐた。

この偶然な経験が一彦を大膽にした。彼は
邦夫を家へつれてくるごとに、何か手当り次
第の用事をいひつけては母を外へ追ひ出し、
臥かしつけた邦夫の横でこの秘密な快樂に耽
つた」

D

サディズムとマゾヒズムは、ホモの交情に
おいても屢々見られる。それはホモにおいて
どのような形で現れるだろうか。まず実例を
見てみよう。

ここにN・Oというソドミアがいる。彼は
自家え夕刊の配達に来る十五、六歳の一少年
をはじめて見た瞬間から、その美しさ、初々
しさに、完全に魅惑されてしまった。

彼は少年にキヤラメルやチューインガムな
どをあたえることによつて、少年と親近する
に成功した。

或日彼は少年を誘つて、多摩川川畔えつれ
だした。そして、その川原で、少年を愛撫す
ることにも成功したのである。

ところが、そこまで進んだとき、少年の態
度がガラリと豹変した。少年は血走つた眼付
で、彼に、「縛らせてくれ」と云うのだ。

彼はふと好奇心を覚え、少年の云うままに
手拭と釣竿袋で縛りあげられた。すると、少

年は、彼の禪を荒々しく引剝すや、彼を仰向けに突き倒した。

そして、彼の身体を釣竿で打擲しはじめたのである。

このようなサディズム行爲は、それからずっと続けられたが、そのうちに、彼は、縛りつけられ、撲たれることの苦痛のなかに、得も云えぬ快感を覚えるようになった。

少年は、彼を緊縛し、鞭打ちをした後は、いつでも柔順に彼の要求を入れた。少年は、こんなことは生れてはじめての経験だが、彼との最初の愛撫行爲の後で彼の Phallus を見た瞬間に、彼を縛り上げて殴りつけたい衝動にかられたのだと彼に告白した。どんな愛撫行爲より、少年にとつて縛りつけた彼を鞭打つてい



ろが彼は、この苦痛の倍加された行爲に、いままでになく快感し、引きずりまわされながら、遂情したのである。

少年はまた、或るとき、彼の anus に入墨をさせると云つた。彼は、ほんとうの入墨は困る

すでに読者も気付かれていまするだろうが、この例における少年のサディズムは Phallus-anus に由因するものなのである。

弱小な自分のそれより、遙かにすぐれた大人の Phallus に対する嫉妬・憎悪・憧憬・愛慕などがいりまじつて少年をしてサディズムに駆りたてたのだ。

だから、少年のサディズム行爲は、いつも O・N の Phallus を中心に行われている。少年は O・N を、そして O・N のファルスを、憎みながら愛し、愛しながら憎んでいる。それが少年のサディズムとなつて現れたのである。

一方 O・N は、愛する少年から縛られ殴られることに、被虐の快感を覚えてい

から真似だけにしてくれと、それを許した。すると少年は、左手で彼のファルスを握み、右手に持った二、三本の本綿針を、プスリとその先端に突き立てた。彼は悲鳴に似た呻きをたてて身を振りながら、全身を苦痛と快感が走るのを覚えた、ということである。

少年は或るとき、鞭打ち以外に、彼の Phallus を風糸で緊縛し、その糸の先を持つて彼を引張り廻す行爲を始めた。

後手も縛られるので、引張り廻されると、彼は転げ廻つたり、でんぐりかえつたりする。そうした彼え、少年は烈しく答を加えるのだ。とこ

（O・N の手記に拠る）

E

A.k

も一つ、ソドミアの交情におけるアブノーマルな生態に、汚物狂崇がある。

たとえば、Aというソドミアは、相手の尿を飲むことにエクスタシーを感じる。

Bという男は、愛する同性のスペルマを好んで飲む。ホモにおける汚物狂崇の中では、この例が最も多い。彼らは相手との Fellatio において、或は Soixante-neuf の際に、それを嚥下するのである。

またCという同性愛者は同性の愛人が脱糞の際に、トイレまでついていつて糞便を口にしている。これらは汚物狂崇者は、性的被虐狂の一種なのである。

汚物狂崇症は元来恋慕する人の肉体からの分泌物、又は産出物に対して魅力と蠱惑を感じるもので、汗・唾液・耳垢、或は前記のような糞尿精液などが、彼らには極度の恍惚状態を起す原因となるのだ。

ホモにおける尿憧憬には、興味ある実例が沢山あるが、与えられたスペースがなくなつたので、次の機会に稿をあらためて記すとして、ただ一つ、イナガキ・タルホ氏の初期の作品で、「WC」という小説の中に、便所の汲取口から忍びこんで、少年の温かい汚物をかけられて歡喜したり、それを口にうけて法悦する男のことが書かれてあつたことを挙げておこう。

普通人の醜怪と思われるような事柄を、詩人的感覚で捉えて、いかにも美しく、生き生きと描きだされてあつた。

◇ファロス・ナルシシズム

ソドミニストの中には化粧を施し、女装をするのを好む者がいる。

これは決して珍しいことではない。いわゆる男娼はみんなそうだし、晝は常人の如く会社づとめをして、夜だけ美しく女装しては、夜の街を彷徨する者もいる。

彼等にはなか／＼むつかしい、着物や化粧品好みなどもなつて、その辺りの不精な女性など、足元にもよれぬほどのレディが多い。

ところでその化粧の話だが、それは敢て顔だけとは限らない。

つまりちよつと外からは判らぬ場所に化粧するのである。性器化粧——本誌一月号に高橋鉄氏も書いていたが、彼等はそうせずには居られないのだ。そして、朝から晩までそのことばかり気にしている。

あるクラブのボーイだが、彼は顔の化粧よりも、そちらの方の化粧に熱心だ。何時でもシヤレたバッグを携行していて、パトロンや愛人と泊る時など、非常に神経を使うらしい。バッグの中は沢山の化粧品がゴ／＼入っている。

彼に聞いて見ると、まづ化粧水をひたした脱脂綿で丹念に拭きあげ、次いで乳液、クリーム

の順に塗りつける。

それから粉白粉をはたくと云うのだから、普通の女性の顔より丁寧なくらいだ。

とにかく奇妙な印象だ。ちよつとこれを見た時の感じは、他に比較するものがない。顔を近づけると、プーンと妙なる芳香がたゞよっている。感心してその旨を告げると、「そりやあそうよ。あたし、化粧品は一流のものばかり使ってるんですもの」

ちよつと、女の子と話しているような、按配である。

彼はそれほどこの化粧に神経を使っているくらいだから、愛人たちと寝た後など、すぐゴソ／＼起き上つて、すぐさま化粧くづれを直しにかゝる。それをしてからでなければ、寝つかれないそうさ。愛人たちは、その特異な化粧風景を、ベッドの中から、ニヤ／＼と鑑賞するわけだ。

性器化粧なんて、グロで見るに耐えないと、知らずして云うなかれ。一度見参に及ぶと、とても奇妙に気持が後をひく。その証拠にこの化粧少年の周囲には、常にパトロン、愛人の群がひしめいているくらいなのだ。

こんな性癖は、結局ナルシシズムの変型だと云つてもいいのさ。それが知らず知らずの裡に、自分の性器を美しく装はせるのである。

最近、この少年の姿がクラブから見えないが、このナルシストはやはりこの東京の何処かで、熱心にその性器化粧を続けていることだろう。

心理の

うしても望遠鏡による窃視を、行は
ポーズ、行爲にぶつかり、覗きな
夜に何度も射精するのだ—

悠 介



特異変態性癖の中でも、窃視症と云うのはど
ことなく愛嬌があつて、ユーモア味さえおびて
いる。

たとえば、例の女の内股を見て神通力を失い
雲上から落ちた久米の仙人にしても、天女の羽
衣を奪つた漁夫。それから軽犯罪史に艶名(?)
のたかい出歯龜氏にしても、我々はなんとなく
擦つたい滑稽感を覚える。なぜともなく、微苦
笑を禁じ得ないのである。

この心理は面白い。強いて云うなれば、テレ
臭い共通感である。つまり、同じような窃視の
欲求が、多かれ少かれ、我々の気持の底に眠つ
ているからである。こんなことを云うと、世の
ピュウリタン諸士から、甚だしい御叱りを蒙る
かもしれないが、我々が異性の肉体とか、性交
爲などを見て昂奮するのは必然的な性本能であ
る。

る。

その本能的な性的昂奮、内至快感がある以上
は、誰でも窃視願望があるのは当然であつて、
決して変態行爲とは云えない。むしろ、「けが
らわしい」「見たくない」「窃視行爲による昂
奮など、全然感じない」と称する道徳家たちこ
そ、偽善者か、性的不具者に違いないのだ。

性的な意味に限らず、かくされれば、かえつ
てそれを見たいと思うのは、当然の願望であ
る。これは、かくさねばならぬと強いられる故
に、かえつて露呈したいと云う欲求にかられる
露出症の場合と、表裏一体を成している。露出
症と窃視症は、だから全く同じ人間の性的弱点
から出発したものと云えるのである。

性的実体がすべて蔽いかくされるようになつ
てから、その隠蔽思想の圧迫は、我々を程度の

差こそあれ、滑稽な窃視症に仕立上げた。隠蔽
された性に対する、極度の好奇心である。

窃視症が、比較的都会人に多く、又きびしい
禁圧教育を受けた者にかえつて甚しいとする説
は、この間の事情を明白に物語っている。本能
を無理に歪められるのだから、それは不自然に
蓄積されざるを得ない。性的欲求は、高圧的に
押えつけられても、決してそれで消失してしま
うものでないからである。その蓄積された性本
能は、衝動的に当然幾多の窃視行爲となつて現
われる。これが窃視症である。これには罪惡感
が伴うから、一層事態を暗くしてしまふ。

若し、我々が幼児の時代から、性に就て開放
的に教育されたとしたら、このように卑劣な窃
視行爲はあり得ない筈である。ドイツなどで行
われた裸体運動なども、こうした理念から出発
している。「少年少女時代から異性の裸体に馴
れさせておけば、性犯罪は激減する」と、エリ
スはその著書中で述べているが、あまりに強圧
に過ぎた誤れる性教育の悲劇を、我々は窃視症
患者の中にも、事実数多く見出すのである。

しかし、一面窃視症は、人間が衣服を身にま
とうようになると同時に、宿命的に発生したと
云つてもよく、これは諸国の神話傳説が雄辯に
物語っている。日本神話中にもさまざまの窃視
症男神が現われるが、西歐の神話にもこの類
が非常に多いのである。

西歐傳説上の窃視症としては、圧倒的に入浴
の窃視が多い。有名な「スザンヌの入浴」を始

窃視症

—彼は夜になると、理性を失い、ど
ずにはいられない。そして、露はな
がら激しい快感に我れを忘れて、—

秋 山



め、聖書中のダヴィッド王にしても、美女入浴を窃視している。

これに対して、我が国の浮世絵などでは、性行為の窃視がしばしば、畫題に採り上げられている。

「危な絵」にも、圧倒的にこれが多いように思われる。

これは絵ではないが、永井荷風の名作「ひかげの花」には、売春婦である女主人公とその夫が、ある夏の一夜、灯が消えた座敷から、隣家の男女の性行為を盗視て、次第に昂奮してゆく有様が、かなり克明に描かれている。この二人は、そのあまりに激しい性行為に刺戟されて遂には同じようにヒシと抱き合うのだが、さすがに心憎いまでの、性本能の描写であろう。

荷風に限らず、内外の小説にこうした場面が

多いことは御承知の通りである。中には甚だ出色の文章も多く、我々を魅了する。つまり、我々が無意識のうちに抱いている、窃視願望を満足せしめてくれるのである。

又、艶書まがひの擬人文に「蚤のうかれ噺」「豆男物語」と云つた類いの読物があつて、一部の人々の窃視感を唆っているらしい。つまり自ら行い難い行動を小さな蚤などに托することによつて、女体の秘密、情事をさぐる喜びである以上に述べたように、さまざまの窃視行為は、絵画や小説にまで、或は露骨に、或は美しく、或は芸術にまで浄化されているが、現実に我々の社会で行われている窃視欲求は、どのような相貌を呈しているものであろうか。

★

露出症や窃視症と云つた、軽度の異常性欲がきわめて無邪気に發揮されるのは、当然のことながら、酒席に於て多いようである。

アルコールの攝取によつて、窮屈なヴェールを一枚かなぐり捨てた彼等は、芸者を見ると、歡声をあげて、「浅い川」「雨しよぼ」を連呼要求する。これ等の踊りが、どのような仕掛けをもつて、窃視症たちの、はかない欲求を満たしてくれるかは、周知のことである。

ある商社の重役は、もう孫さえある年輩だが宴会に出て酔うと、ダンスと称して、一座の美女と手を組んで踊り出す。踊りながら音楽に合わせて、その芸者の着物の裾をサツとばかり、巧みに捲くり上げるのである。彼はこれを一座に対する、座興のサービスと称してはいたが、彼自身が窃視の願望を抑え難い爲の行為であることは明白であらう。

芸者の話が出たが、昔から座敷で酔客たちが行う遊戲に「唐八拳」がある。客と芸者が相對して拳を打ち、負けた者が、一枚づつ、身につけたものを剝いでゆく。遂には湯文字や下帶一つになつて争うのだが、これも遊びにことよせた、窃視の喜びであらうか。この場合には同時に露出の昂奮も伴うわけで、遊び飽きた道楽者の善びそうな遊戲であらう。

次に、窃視を語るには缺くべからざるものに街の洗湯がある。昔から洗湯は窃視症のメッカだが、湯屋の番台越しにチラリと女湯を覗くスリルは、誰しも覚えのあることだ。しかし、こ

ところが両親が結婚させようと躍起になつてゐるのに、一向にその意志がない。と云つて別段不品行するでもなく、それどころか自分の部屋に一日中引こもつていて、殆ど外出をしたこともない。顔色も悪く、性質もますます陰鬱になり沈みこんで、家人とさえ口をきくのを嫌うようになった。

思い当たる原因もないままに、両親の頭痛の種類となつていたのだが、やがて神経症状が悪化し始めて原因が判明した。この青年は夜になると自室に内から鍵をかけ、一晩中望遠鏡を覗いて暮らしていたのである。

自宅は町の中央の坂の上にあつて、しかも二階だつたから、青年の精巧な望遠鏡は、夜な夜なさまざまの性の秘密をとらえていた。折から真夏の夜のことで、この童貞青年の性感を異常に刺激したのであることは、容易に想像出来る。

彼は夜になると、理性を失い、どうしても望遠鏡による窃視を、行わずには居られない。そして、露わなポーズ、行為にぶつかると、覗きながら激しい快感に我を忘れて射精する。一夜に数度もそんなことを繰返した。しかも内気な青年だから、晝になると非常に後悔して、甚だしい自己嫌惡に陥入つてしまふ。この罪惡感と快美感の繰返しが、遂に彼を廢人の一步手前まで押込んでしまつたのである。

★

青年時代の神経衰弱、陰鬱症の類は、このように、自分の異常性欲に対する、過重な罪惡感から出發することが多いと云われている。

目下盛んに流行していると云われる、クロシロ、シロ／＼などの見世物は、勿論視姦の昂奮だが、これもタイプがあつて、こうした見物を意識した見世物では、少しもよろしくないと言ふ向もある。

全然当人たちに氣取られぬよう、コッソリ覗きたいと云うのである。

もちろん需要供給の世の中だから、こうした欲求をちゃんと満す商売がある。浅草、上野あたりの温泉マークの中には、ちゃんと仕掛があつて、何も知らぬアベックが、見も知らぬ他人の窃視願望を、ゆかりなくも、十二分に満足させたりすると云うことである。

赤線区域の女たちの話によると、客の中にはわざ／＼金を拂つて上つたくせに、隣りの部屋を一心に覗きこんで、一人で昂奮して帰つて行く者があると云う。こんな場合には、金を拂つた当の相手の女には、手一つ握るでもないのだから變つてゐる。

産婦人科を開業している友人の話によると、知人の中には、用事もないのに、しば／＼診察室に尋ねてくる男がいる。

冗談にことよせて「ついでに見学させてくれ」と、厚かましく申出るそうである。勿論断るが、ある知名人が「金はいくらでも出すから……」と、執拗に懇願されて始末に困つた

と、述懐している。この男は、出産か妊娠中絶を見たいと云うのであつた。

「始めの妻が、難産で亡くなつたので……」と、語つたとき云うことだが、眞疑はともかく窃視の心理的遠因として、興味深く思われる。

女性の窃視症も決して少くはない。

ある織物工場の女工寮の話だが、一人の女工の許に、十四、五才になるその弟が面会に来た。たま／＼それが愛らしい美少年であつた爲に、大勢の女工たちが可愛がつていたが、とう／＼皆で卑猥な冗談を口にして揶揄した揚句、集団で半ば強制的に、少年の性器を露出せしめあれこれと取沙汰したと云う。

関西生れの三十五才になるある女性は、十七才の時から、下宿、旅館、待合などの女中を續けて居て、結婚の経験もない。旅館などの男客の裸体を窃視するのが、飯よりも好きで、どうしても覗かずには居られない。

時には窃視しながら自慰にふけるのだが、その時は他人が後を通つても、声をかけても氣がつかないと言ふ。

その窃視癖のために暇が出て、何時もこうした旅館、待合などを、転々と渡り歩いているのだと云うから、窃視願望のために限定されてしまつた、氣の毒な人生だと云えよう。

×

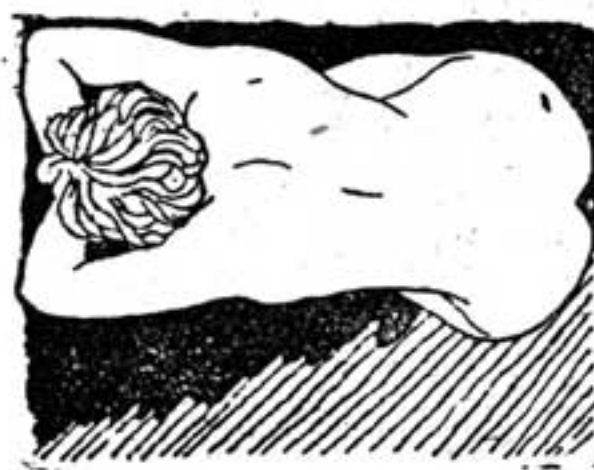
×

×

×

×

鞭打ち実験記



……それでも、この中では直經五耗ほどの丸いゴムテープが一番いいことが判りました。長さにして、三寸おきぐらいに結び節をこしらえておくと、大分力が入ります……

高野利夫

滝川

共画

私が鞭打ちを実行しはじめてから、まだ半年にもなりません。それに私の好みもありますので、大変片よつて、貧しい記録にすぎませんが、私の経験を書いてみます。専門のサヂスト方から見れば、児戯に属するかも知れませんが、初心者のお参考になれば幸いです。

私が病みつきになつたのは、偶然の機会からです。と、自分では思っているのです。——一番始めは、百合子が傍に投げ出していた、赤い腰巻をたくつて三重にして、その一方を持つて彼女の臀部を、冗談半分に二、三度打ちました。情事の直後で、彼女は素裸のまゝ床の上うつ伏せに



なつていました。

房事直後に、百合子が他の男の話をはじめたので、私はちよつと腹を立て、その見事な臀部が、憎くらしくなつたからです。百合子は首だけ上げて私を見て、

「なあんだ、あんたの力、それつぼちち？」

と云うので、私はカツとのぼせて傍の鏡台の上にあつた、ヘアブラシをとりあげて臀部の一番肉付のよい場所をめがけて、ふり下しました。白いナイロンの毛が植えてある、普通のヘア・ブラシです。

打つた場所はサツと白くなり、今度は見る／＼うちに、ブラシの形に赤くなつた。彼女は怒るかと思うと、うつ伏せになつて、しつかり枕を胸の下にかゝえこんだまゝ、やはり顔だけ上げて、ジツと私を見て「フ、フ」と笑っているのです。

私はなんだかぼんやりした気持ちになつて床の上に坐ると、百合子は投出したブラシを、又私の手に持たせて、ちよつと恥かしそうな顔で、

「もう一度、ぶつて……」と、云ひました。

私は夢中で、しかし今度は力を加減しながら打つた。百合子は途中でゴロリと仰向きになつたので、乳房の廻り、太腿などを何回も／＼も軽くぶつてやりました。彼女はその間中、私の顔から眼を離さず、ジツとみつめているのです。それから百合子は、

「こんなに、お尻が熱くなつたわ」

と云つて、私の手を自分の臀部にのせた。本当に恰好よく盛上つた其処は赤くなつて、ずい分熱を及びているのです。痛むのかと思つたが、百合子は少しテレ臭そうに笑つて、私の首に両手をまきつけて来た。

私たちの間では、それまではこんなことは殆どなかったのです。彼女は房事を嫌がると云うほどではなかったが、大して反応を示したことがなかった。それがこの夜は再度……。そして、その二度目は、今までの彼女とは、まるで



違つた女になつたのです。私はまだ若く、殆どこの道の経験などありませんので、非常な驚きでした。まるで眼から鱗が落ちたような想ひでした。

すぐ夢中になり、二人でいろ／＼相談しました。しかし、私は二十四歳、百合子は二つ歳下で共稼ぎの間借生活なので、いろ／＼な障害があります。離れの部屋ですから、少々物音なら母屋に聞える心配はありませんが、やはりビク／＼ものでした。

それから百合子は勤めがあるので、それに支障がないように、決して手荒な、向う見ずなことは出来ません。私もあまり残酷な、血が流れるような鞭打ちは好まないのです。私たちの場合は、あくまで情事の前戯としての、たのしみながらの責めなのですから――。

「こんなこと、本当にする人いるのかしら？」と、百合子は、責めの鞭打ちの写真などを見て云うのです。それは西洋の女が両手を縛つて

天井から下げられ、裸の大きな臀部が正面向きになつて、シルクハットの紳士が、猛獣に使うような鞭をふるつてゐる図でした。

「とても残酷すぎて、僕には出来ないな」と答えましたが、百合子が幾度も／＼その写真を眺めているので、私はハツと気がついた。彼女は明かに、そんな鞭打ちを夢見ていたので

翌日勤めの帰りに、私はゴムテープを沢山買つて来ました。どんなのがいゝか判らず、丸いの、細いの、巾の広いのと、いろ／＼買つて来て、四尺ばかりの長さに切り、古団扇の丸い竹の柄を利用して、とりつけました。

このとりつけ方は難しく、ずい分しつかりつけたつもりでも、最初の一撃で飛んでしまうなど、なか／＼苦心しました。

真夏のことで、百合子は素裸、私もパンツ一枚ですが、窓も雨戸も締切つてゐるので、汗ビツシヨリです。私は竹の柄を持つて、複雑な表

情で立っている、百合子の太腿を一打ちしましたが、ゴムは飛んでしまふし、軽すぎてなんの手ごたえもないので、案に相違して、真剣な顔をしていた二人とも、とうとう笑ひ出してしまひました。

それでも、この中では直径五耗ほどの丸いゴムテープが、一番いゝことが判りました。長さも四尺では力が入らず、二尺少々位の長さにして、三寸おきぐらいに結び節をこしらえておくと、大分力が入ります。広いゴムの方が、肌に当たった時にピシヤリと音がいゝのですが、力が入らず、全然感じないのでした。

私はこの丸ゴムの鞭が、白いのはつまらないので、一晚赤インクにつけて真紅に染め、竹の柄には黒く漆を塗り、すべり止めに黄色い絹糸を巻いたりしました。私はコリ性なので、こんなことをするのには大好きで、如何にも由緒あり気な鞭に見えるように、一生懸命でした。

しかし、これでは如何にも力がもの足りないので、工夫して一つの柄に三本の丸ゴムをつけて、三又の鞭にしたのです。後には更にオモリとして、ゴムの先にパチンコの玉を一つくくりつけたり、金の輪（カー

テンのカン）をつけたりしました。

これですと、大分力が入ります。音もよくありません。始めは床の上に寝ている百合子を打つたのですが、彼女が藻掻くと、顔や手に当りそうなので、壁にとりつけてある帽子掛を利用して縛ります。百合子は五尺二寸ほどの中肉中背ですが、壁に向つて立ち、両手を上にのばすと、丁度手首が帽子掛の金具のところに届くのです。まるで万歳した形に両手の間隔を一尺ほどあけて、金具に手首をしつかり個定します。私は背後から、百合子の背、臀部、太腿をめぐって打ちおろします。殊に彼女も私も、臀部を打つのが一番よいのです。こゝですと、少々強く打つてもそれほど痛さは感ぜず、打つた瞬間



間の豊かな双丘の動きの素晴しさは、なんとも云えませんが。百合子は両手を上げて縛られたまゝ、顔は思ひつきり後にのけぞらして、私を見えています。彼女は、打たれる時、必ず私が見えなければ嫌だと云うのです。それで多少ポーズに制限されますが、私達はお互の瞳をみつめ合つて、相手の昂奮を見ると、ますます欣びが強くなるのです。

十度ほど鞭をふるうと、こんな弱い鞭でも、百合子の軀はベツトリと汗ばんで、自由な下半身をクネくねとよじらせ、全身ピンク色に染まつて喘ぎます。打つた跡は赤い線が走つて、その場所が私にはとりわけ愛しく、思はず唇をつけたくなるのです。

しかし、この遊戯はせいぜい二十分ほどしか行はれません、それ以上になると、百合子があまり藻掻くので、手首を傷めてしまうのです。このため、手首の縛り方にはずい分注意して、真綿を当てたり、毛糸で編んだ紐を工夫したりしましたが、暫くは手首が曲らないほどです。よく天井から吊つて長時間責める話や絵がありますが、私には絵空事とは思えません。すぐ失神してしまう筈です。

責めの跡の百合子ほど、私にとつて貴重なものはありません。私の打擲に耐えてくれた愛しさ。彼女の全身をくまなく所有する、独占感の誇らしい昂奮。私はもう責めなしでは、房事が考えられなくなつたのです。

始めは、百合子のメンズ中では避けていたのですが、彼女の告白で、メンズ中こそ、最も百合子の被虐の欣びが激しいことを知って、愕然としました。それ以来は、毎月、その日が来るのを待兼ねている有様です。始めのうちはメンズバンドショートパンツを使用したまゝでしたが、或る一夜、昂奮にかられて、私はそれも剥ぎ取ってしまったのです。

その時は、百合子を踏台に乗せて後手に縛り、天井から縄を下げて手首を縛った紐と結び、ちょうど吊られたような恰好でした。但し、手首だけで、舐には縄をかけません。私はどう云うものか、百合子の胸や腹に縄をかけるのは嫌なのです。

このポーズで責めると、打たれる度に百合子の舐は甚しく左右に動いて、足が踏台からズレると宙吊りになつてしまひます。前に書いたように宙吊りになるととても苦痛が甚しく、一度行つたところ、蒼白になつて五分も経たぬうちに、彼女は氣絶してしまつたのです。

そこで、打たれる度に百合子は踏台の上で激しく身もだえしながら、台から落ちぬよう必死に舐をよじります。其処を反対側から又一打ち



するのです。鞭打ちの場所はウエストから、膝頭までの間です。腹部はやゝ軽く打ちます。それに比べると、臀部はそれの約五倍ほどの強さでも、百合子は耐えます。

こうして狭い台の上で妖しくのたうつ、百合子の美しさは想像を絶します。この時は、猿ぐつわはあまり好みませんが、私は彼女が舌を噛むのを恐れて、ピンク色のハンカチを咬ませておきます。髪は長いパーマを乱したまゝで、ピン類は一切抜き、時によつてネックレスや、イヤリングをつけます。

この時はメンズ時で、百合子はショートパンツをつけていましたが、台の上で身もだえしている彼女を見ているうちに、私はたまたまなくな

つて、パンツに手をかけました。

「いや、嫌ッ！ よして！」

そう云はれると、もう止められませんが、両手で藻掻く下半身を抱くようにしながら、パンツも、メンズバンドもはづしてしまつたのです。

その時の百合子の羞恥と欣びの表情の美しさ私は夢中で鞭を振るひました。一打ちごとに彼女は台の上で無惨な踊りを踊ります。そしてその太腿から内股、膝とつたわる、真赤な××！鞭が鳴る度に、百合子が身もだえするほどに、それは勢ひを増して、台の上にしたゞり落ちるのです。

私の狂氣的な打擲と、それから半身を染めるそれに氣を奪はれて、百合子は遂にもがきながら自ら台を蹴飛ばし、ダラリと宙吊りになつてしまひました。宙吊りと云つても後手だけです。棒のように吊られるのではなく、頭が下り、への字のような曲線を描いて、その美しさと云つたらありません。

私は彼女を助けるのも忘れて見惚れました。そして、内股からつたつて来た××が、百合子の足をつたわり、そらした足の指の先からポタリ、ポタリと、畳の上に落ちるのを見た時、夢中でその彼女の足指に接吻していました。百合子の足は冷めたかつたが、その血はまだほのかに暖か味を残していたのです。

この時も四、五分間のことですが、百合子は失神一步手前でした。全身冷めたく、私は吃驚して彼女をバスタオルで包んで床に入れ、ブド



ウ酒を飲ませました。それから蒸タオルで全身をマッサージです。百合子の頬にだんだん赤味がさして、微笑を浮かべると激しく私を求めます。さすがに私もまだ彼女の心臓に悪いと思つて拒むのですが、百合子は承知しないのです。しかし、それだからこそ、私の幸福感はたえようがありません。

それから三日ほどは、上膊部と肩が痛むらしく、とうとう百合子は勤めを休みました。心配

く、エキゾチックな百合子の美貌には似つかわしくないような気がして、好きになれません。私は百合子の、ちよつと日本人ばなれのした容貌に、激しくひかれて居りましたから――。

子供が縄飛びに使う、赤いビニールの紐、ナイロンのベルト、柳の枝。さまざまに考案しましたがなか／＼思はしいものがありません。百合子には、やはりよく写真で見る、細く長いしなやかな鞭が一番似つかわしく思うのですが、

で私も休み、マッサージしてやりましたが、二人揃つてこうしていますと、又々遊び始める始末です。

この頃は鞭として、竹を使用していました。

竹の二尺指の先を幾本にも、サ、ラのように先だけ割つて用ひます。音は凄くよいし、吸ひつく感じもあります。しかし、なんとなく物指には美的感覚がなく、エキゾチックな百合子の美貌には似つかわしくないような気がして、好きになれません。

そんなおあつらえ向きのものは、私にはちよつと手に入らないのです。

古くなつたカメラのケースの、革紐がありましたので、これを柄にとりつけて使つてみました。巻きつく感じはともいゝのですが、その傷跡があまり痛々しいので、私は驚いて止めたのです。私は、傷がせい／＼二、三日で消える程度の鞭でなければ、使う気になれません。それに美的感覚を満足させてくれるものでないと困ります。

なお、これは鞭打ちではありませんが、その後折に觸れて私が行つた、女体研究の報告を一ツ二ツ。

女性の体は痛覚が鈍い、というのは定説のようですが全くだと思ひます。それは、百合子もそうですが、今年の秋のある夜、取引会社の社員に招待されて三流花街の待合に泊りました。その夜相手の芸者と遊びながら、鞭打ちの出来ぬ物足りなさに、彼女の乳房をギユツと握つてやりましたが、何も言いません。それで益々力をこめてギユウギユウ握み、揉みひねるようになりましたが、彼女は痛がるどころか、返つて歡んでいるのです。これには驚きました。肛門なども、女性に餘り痛がらないようですが、そんなものかナアと、一人疑問に思つています。

誰方か、こんな点に就て、御教示頂ければ嬉しいのですが……。その後工夫を加えた縛りと鞭打ちに就ては、又機会を改めて、書いてみたいと思つています。



監獄の変態性慾

山 本 作 馬

まえがき

犯罪者は、監獄に入れられる前から、すでにサチズムの男だつたのだらうか。

小娘を強姦し、もつと発情的な犯罪をおかし、アルコール中毒が、結核患者が、梅毒患者が——皆が皆一種の狂人だつたのだらうか、いや、本物中の本物の犯罪者はそう簡単には、つかまれるものではない。
貧に迫まられて盗みをする。そこえ人が来

た、驚いて、手当り次第のもので打ちのめした、犯罪にはずぶの素人の彼は、至極簡単に殺人罪を犯してしまふのだ。

このような、何でもないう普通の人間が投獄され、十年も不自然な貞潔の日を送らねばならない時、彼等の性的執念は普通の形で現れる筈がない。

性的抑制がどの程度迄人間に、心理的に、生理的錯倒を起こさせるかは云うまでもないことなのだ。

性の進行

囚人は一監房に一人又は三人が入れられる。決して二人はいれないのだ。

二は、自然の性的数字だからだ。

人間は極めて自然的なものだし三は根本的に反夫婦的、反俗衆的な数だからである。

然し、この反夫婦的三の数が無意味なものになつてしまう場合がないでもない。

だが三人の間に關係が結ばれるには二人の者が合意するより、多くの曲折と時間が必要になる。監房内では、多くの曲折や時間は許されない。たとえ許される範囲内で三人の結びつきが得られようとしても、すぐ、ばらばらに切り離されてしまふのだ。

だから唯一の性的瞬間と言えるのは面会時間に限られているのだ。

雑居房では、共同生活、身体に触れあい、老若混淆が、二人の秘密や、夢をつくり出す。

そして空想が展つて行く。

監獄では、恋を想うより他に何もすることがない。

空想・遺精・自慰の時代

先ず最初は、想い出だ、そして乳、腿、其の他の部分をさえ露わす面会時間に鉄格子の間からかいま見た女に刺戟されて、意識的に無意識的に遺精と自慰をする時代である。

囚人の夢の時代だ。刑期を四分の一に減らし

て貰えても、一週に二度ずつも例外の御馳走を食べることが出来るとしても、大多数の囚人が雑居房をえらぶと言う現象を笑つてはいけない。

孤独の恐ろしさを考えずに独房をえらんだ囚人は、日ならずして雑居房へ移転を願ひ出るようになる。

さもなければ狂人になるのである。世界にたつた一人になるということは、最悪の迷妄だからなのだ。

孤独に一番よく堪えるのは、完全な野蠻人か、優秀な知識人だ。

野蠻人は彼を苦しめる空想の持ち合せがないし、知識人は、空想を豊富に持つて居り、それで自分の不幸をいやすことが出来るからだ。

空想は素晴らしい力を持つているものだ。その証拠に、空想は監獄の中に、酒でも御馳走でも、女さえも持ち込み、連れ込むことが出来るからだ。

落書・隠語

空想の段階の次に来るものは、落書と隠語だ。

幻想型の男は、孤独の中で、朝から晩まで女のシルエットを描き続ける。その絵は全くあからさまなもので、大きなバラ色の女性の性器を四方の壁に踊らせてい

る。

或るものは壁に胸の思いを書きつける、女囚は自分の愛人のことを、センチメンタルに落書きする。

男囚は、不思議なことに自分の名を壁にはりつけるのだ。

さもなければ猥褻そのものの文句を壁が黒くなるまで落書きされる。

隠語は彼等仲間同志の必要から生れたもの

等の前で彼等に解らずに奴等の悪口雑言が仲間同志交わされることに、せめてもの腹いせをする武器である。

だから、この隠語は絶えず新しいものに変えられて、同じ意味の言葉が同じ言葉で通用する期間は極く短時間である。

そうしなければ、感のいゝ奴等にもう隠語の役をしなくなるからだ。

だから、隠語は世の中で一番生きた言葉でなければならぬのだ。

獄中のサジ・マゾ詩人

監獄の画家、落書文人、の次は詩人だ。性的空想は囚人を詩人にしてしまふのだ。

だが、これ等の詩人はいつもきまり切つた一つの詩しか作らない。

性的抑制でマゾ的になつた囚人詩人はこんな詩を作る。

生きてあらば妖婦とならんかの女に
黙示によりて見し愛敬すべき未知の

一女性に、

おゝ！ スフィックス、お前の条件
はすでに容れられた

お前は進んで、妖婦に、背徳の女に
なることが出来る。

俺は、お前の奴隷、お前の感覚の奴隷
見苦しい貧食のムク犬、何でもお前の望むものになろう



征服された俺は、お前の激情、お前の悪徳をおとなしく受けよう。

それが数重なれば重なる程、俺は幸福になるだろう。

それが無理であればある程、俺はお前を祝福しよう

それが賤しければ賤しい程、俺はお前の命によく従おう

おまけに、恋に関することなら何一つ下賤なものはない。

我々が理解し得ないのは、小ざかしい頭だけだ

お前の悖徳よ、魅惑的であれ、激しかれ、純なれ、不純なれ

お前がそういうものを愛するなら、俺はそれを満ち足らせてやろう

残酷な、兇暴な女王になれ

そしてお前の全自由を奢侈逸楽に捧げよ

奴隷に対して遠慮気兼ねは一切無用

俺は、お前の膝下に半裸の奴隷となろう

そして俺の眼は、お前の望み、お前の命令をさぐり出そう

俺の口はお前のヨニの御用に立つ用意を整えていよう

俺は一つの希望しか持たない、お前の膝下に膝まずき

お前の夢見る夢を実現させることだ。

監獄生活でサチ的になつた囚人詩人はこん

な詩をつくる。

私が夢見る未知の女に

何時私は、私の生活の夢を実在させることが出来よう？

私は愛する、私と趣味を同じくし

厳しい鞭の下、足に鉄鎖をひきずることをこ

よなき喜びとし

陶酔三昧境に気を失う女を

私は欲する、私と同じほど真剣になり

何事も考えず、私に身をゆだね

私を主人として迎え、私の謙虚な奴隷に彼女

がなつてくれることを

かくて私の夢は生きる。そしてその時こそ私

は、かずくの夢をことごとく呼びさます

私は、法を嘲弄する、私は悖徳を崇める、

そして愛のしるしとして

私は永遠にお前のあの小さな可愛いヨニを

貪る

獄中フェティシズム

このようにサジ派、マゾ派の詩人が誕生する段階が終ると、実行派が現出する。

この段階の実行派は圧倒的にフェティシズムが多い。

その男は、たくみに買収政策を敢行して、愛人の匂いの浸み込んだハンケチを一打監房内に持ち込んだ。

夜、看守の足音が、沈黙の中に消えてしまふと、彼はハンケチに鼻を埋めて魔酔三昧におち

いる。

たゞ生きているのは、愛人の匂いと、彼の夢を、そして夢のようにふくらんだ彼の前だけだ。

彼は妖術師が霊をよびよせるように、恋人をよびよせる。

彼の肉体は恋人の来訪を信じ切つて、何時恋人が現れようと手落ちのないように準備されている。

彼の頭の中は恋人の事ではち切れそうになつてゐるのだ。

彼に言わせれば、もし彼女がそこに現れなければ、世界は世界でないのだ。

彼は昂奮の極限に胸を心臓をふくらませるそして空間に地上の恋人を完全によびよせた

彼は一枚のハンケチを鼻に、一枚のハンケチを胸に、おしあて、一枚のハンケチは彼の外形的に最も昂奮をあらわにしている部分におゝいかぶせる。

そして、彼は恋人の肉体を抱きかゝえて幸福を満喫する。

だが幸福が急激に消え去ると、彼はまざまざと現実を見せつけられる。

恋人の匂うハンケチが汚されて、ふぬけ状態の彼の手にサクパクとして残されているからだ。

だから、このような、淋しい享樂は、かつて生々しい肉体を自由に扱いつけた囚人にはもう満足を与えなくなつてしまふのだ。

満足を与えなくなつてしまふのだ。

こんな時期が最も危険な時だ、この沈鬱から逃れ出す事の出来ない者は去勢することを経験して貰いたいと歎願する程になるのだ。

健全な人間が、去勢された人間を羨むとはその苦惱がどんなにはげしいものか想像に難くない。

欺瞞の獄中同性愛(男色)

次の段階は同性愛だ、しかし、獄中の同性愛は欺瞞の同性愛である。

身体の強い者はその性的要求が強く、誰でもかまわぬ、何でもかまわぬ、たゞその性的なものを満足させてくれるものが欲しい、だから真実であろうとなからうと彼等は期会さえあれば関係してしまうのだ。

一方身体の弱いものは、仕事之余りつらいので、誰でもかまわぬ、何でもかまわぬ、とにかく自分に力添えをしてくれ、自分に課せられた仕事の手助をしてくれて、仕事をやりおゝせなくて受ける罰から救ってくれるものが欲しいのだ。

弱い者はまるで箱入娘が、良家の処女のように、強い者の跳梁に身をまかせてしまう。そして又、彼は他の仲間から自分を守つて貰うためにも強いものが欲しいのだ。

この結合がたとえ真実のものでなくとも、一方が守つてやりたい要求を持つ、一方が守つてもらいたい要求を持つているとすれば、この一組は一応正常な感情で作られたと言えるのである。

だが、監獄での罰役は身体の高い弱いに比例せずに、又身体の大小を問わずに同じ仕事を与えられる、強い者は楽々と与えられた仕事を片付けてしまうが、女の様に細い手をした生白い弱い男は、手の下しようもなく、仕事の下に、おしひしがれてしまう。

しかし、この仕事をすまざないと、身体が弱いからと言うのではなく、怠け者だとして責められ、絶食の罰を受けなければならぬ。こうなると強い男の要求を何でも聞き入れるより仕方が無くなる。

この弱味につけ込んで出来上る関係は決して感心したものではない。

又ずるい男は、看守の目をごまかし、買収して手に入れた金と、煙草の力で、これと言う相手を楽々と入手する。

そして、この関係は夜であらうと晝間であらうと、看守の眼をぬすんで僅かの間に片づけられてしまうのだ。

それ以外の時は、情熱の恋文が、いろいろな眼を逃れて、たくみに乙される。

監獄で彼等を楽しませ、夢中にさせる一つのものはやはり愛の火花なのだ。

女囚雑居房の同性愛(レスボス)

雑居房——寝室は共同だ。夜が来ると直ぐさま、寝室の空気は、それと知られる空気に満たされてしまう。

紙きれに書き込んだ恋文をそつと手渡そうと

する、その紙きれは、固くなつて眠っている女達の間に滑り落ちる。

くすぐられた女のため息、愛の匂い、重苦しい喜びの声を漏らして、そこばくの情熱が片隅の方で息づく。

この雑居房で、たつた一晩中に行われる愛の交歓は世界中に点在する大小あまたのレスボス・クラブでさゝやき交される情事の集計よりもつと数多くの情事が行われるのだ。

このレスボスは情緒的な現象だ、この関係の愛人が別れの時の最も美しい挨拶は男との関係で、相手の女に背く事だ。

他の女と結びつくことは不貞極まることがあり、不道徳とされている。

そして、この美しさは、男女間の最も美しいとされているプラトニックな恋愛などもの数ではない。

花柳病を持ち、硬性下疳を持っている娼婦同志のレスボスの純情でさえ、プラトニックな恋愛よりは、はるかに清純な最も尊い温情が見られるのである。

女囚の性愛

女囚の方が男囚より、禁慾に堪え得ないことは事実だ。

しかし、このことが、女性がより好色だと言うことにはならない。

男性は事業に夢中になり娑婆にいる時でも、半禁慾的な生活を送ることになれている。



しかし女性にはこの種のものが無い、夢中になる対象は常に男に限られている。

それが突然、完全な禁慾を強いられれば、物足りなさを感じるのが当然だ。

このことが女囚が男囚より多く性愛に悩むかの原因をなすものだ。

女囚の自慰

女囚性進行の第一段階は自慰にはじまる女囚に出される賜詰は、男囚にそれがまるのまゝに出されるまでも、必ず酢で和えた切れ肉としてしか出されない。

箒も男囚の使用するものは柄がついているが女囚の使用するものは柄が取り除いてあるのだ。

この様に女囚の自慰に対しての細心の注意が拂われていても、そんな事は何の役にも立たない。

彼女等は自由、奔放に目的を果しているのだ。

女囚のレスボス

性進行の第二段階は同性愛だ。

監獄での同性愛で女の役に廻された女程みじめな者はあるまい。

女が男の役目をして、旦那振りを発揮する時

彼女等は男の横暴振りまで猿真似するのだ。一人の女囚が罰を喰つて十日間の土牢入りを

することになる。するとこの女囚は自分の土牢入りの後のことに気が揉めてならないばかりに、自分の可愛がついている女にも、わざ／＼手

落ちを仕出かさせて同じく十日間の土牢入りをさせるようにせずにはおかないのだ。

女囚同志が知り合う絶好の場所は獄内の病室だ。

女囚等が、假病を使い、ランデブーするため用いる巧みな方法は、想像も及ばぬ程多種多様だ。

彼女等は瞼の中にこい、うを少し吹き込む、すると翌日は充血がひどくなつて入院せねばならなくなる。

彼女等は彼女の可愛い、女にも同じ方法で入院するよう手筈をとゝのえ、ランデブーに成功するのだ。

又、石油か、人糞に浸した針を突き刺して急性結締炎を起させたり、

踵を敷物でこすつて傷つけ、ふくらませる。又、暖めたスプーンを顔の軟い部分にあてゝまぎれもない丹毒になりおゝせてしまうのだ。

診察の僅かな時間、お互が顔を見せ合うためは、これ程の危険、これ程の病をさえ女囚達は敢ておかすのだ。

それ丈彼女等の性愛へのあこがれが大きいのだ。

このように抑制された性慾が禁慾を強いられる鉄窓の中で如何に錯倒して行くか、娑婆ではかり知ること出来ぬ数多くの事がひそんでいるのだ。

女子同性愛の断層

その二人の接觸が抱擁に移つたとしても、それは彼女たちにとつては、極く自然な成行なのだ。片方が既に肉體的な同性愛の経験者だったり、それできなくとも、オナニーの體驗がある場合には、油紙に火がつくように、彼女たちの若い肉體が燃え上る……

堀 内 得 郎



白衣の天使の生態

病院の朝は清潔に明ける。それは消毒されたメスのように、ひんやりと冷めたいが、まず、清々しい朝の活動を開始すると云つてもいいだろう。

しかし、この大きな機構の中には、疲れ、倦んだ表情もあるのだ。

朝の八時、美子は当直日誌を引継して、やつと十二時間勤務から解放された。馴れてはいいても、夜勤の苦勞はまつたく並大抵のことではない。

昨夜は急患がかつぎ込まれるし、それでなくとも、胃潰瘍で四、五日前に手術した、仰々しい中年男の患者に、一晚中手こずらされた。外科と産科は夜勤が忙しいから、看護婦たちは始終ブツクサ不平を鳴らす。

美子は動き始めた院内の活動に逆流するように、内庭を横切つて看護婦宿舎に戻ってくる。

クリーム色の二階建だが、どう云うものか恐しく風通しが悪い上に、冬はまるで倉庫のようにひんやりと濕氣が漂っている。

西向に窓が二つある十疊の部屋は、定員七人。

始終誰かが当直、夜勤だから、寝る分にはそう窮屈ではないけれど、何しろ壁と云う壁には白衣、セーター、はては寝巻までがタランとぶら下つてゐる有様で、その乱雑さと云つたらない。

美子は壁より床を敷いて、つめたい布団に横になつた。勤務中には、早く床に入ることばかり考えていたけれど、こうしてやつと解放されてみると、なんとなく疳が立つて眠れない。

普段は快活で、勤務熱心の美子だけれど、どう云うものか彼女は、毎月あれの二、三日前になると、腰がなんとなく張るようで重苦しいし、

気分が沈んでくる。

「丁度あれの前ぶれのように、可笑しいんですけど、その時にはなんだかイラ／＼して、ほんのちよつとの事でも、とても感情的になつて仕舞うんです」

と、彼女は述懐する。

その窓の外が、丁度看護婦たちの洗濯場になつてゐる。やはり非番の彼女たちが、太い腕をむき出しにして、どうやら洗濯よりも、お喋りの方に身が入つてゐるらしい。「白衣の天使」などと呼ばれる彼女たちだが、その会話は現代娘に共通のものでしかない。

いや、限られた狭い世界に閉じこめられた彼女たちだから、話題はひどく泥臭く排他的になる。しかも無意識の裡に、彼女たちはその旺盛な潜在性欲を發散させるのだ。

「ねえ、岡本さんつたら、昨夜も堺先生と、裏



門の処を歩いてたんだつて……」

「堺先生つて？」

「ホラ、泌尿科のインターン。背が高くつて、眼鏡かけた……」

「あッ、そうか！ あの先生、まだ坊つちやんくしてたのにねえ——。男つて、岡本さんみたいなのに、ベタベタする人がいゝのかしらん？」

「そうよ、あの人つたら、色情狂みたいなのに、どの先生にも甘えるんだから……」

「かげで嫉つかんでも駄目さ。万事体当りでいかなくつちやあ」

「キヤア、あんた今日の外出、その体当りの恋人に会いに行くんでしょ？」

喋ること、そのこと自体に、まるで生理的な快感を感じても、いるように、彼女たちの饒舌は果てしない。

それは又一面、無理もないことかもしれない。この病院の看護婦の平均年齢は

二十一才と十ヶ月だと云う。

それが朝は八時からもうリノリュームの床に立っている。午前中は外来の診察、治療。午後からは院内の回診、手術。その合間には器具の消毒、カルテの整理から、患者への配膳までも看護婦の仕事である。自分の時間になるのは、午後六時の夕食時からだけれど、週に二回の夜勤、他にも時間外勤務がある。たのしみと云えば、月に二度の休暇に、映画館とデパートを廻るくらいのこと。

だから、彼女たちの青春は、必然的に病院と云う名の建物の中に押込められる。しかも、彼女たちの対象となる男性は、あまりにも限られている。医師たちは殆どが妻子持ちだし、患者と看護婦のロマンスなるものは、実際は極めて珍しいと云う。

従つてあり余つた娘たちの潜在性欲のハケ口は、一つ建物の中の、数多い同性に対して向けられる。嫉妬、羨望、同情、そして、その中から狂おしい同性愛の一群が生れ出たとしても、彼女たちにとっては決して不自然なことではないのだ。

美子は、自然に窓の外の同僚たちの会話が耳について、何故かイラ／＼と疳が立つてくるのだつた。疲れているのに神経が尖ぎすまされて、そのくせなにか満たされぬ空白感にとらわれる。

同僚たちの、結婚や恋愛の噂がその原因だとは、自分では気がついてはいない。なんとなく

佗しい、つき離されたような孤獨感に、胸をしめつけられるのだ。

眠れなくつて、腹這いになつて雑誌をひきよせていると、戸が明いた。

「あら、あんたも夜勤だつたの？」

エツ子はニッゴリと背いてから、箱包らしいものを抱えて、イッ／＼と美子の枕元に坐つた。「家から送つて来た干柿なんですけれど、よかつたら上つて……」

二、三ヶ月前に配属されて来たばかりのまだ少女のように頬の赤い看護婦見習。清潔な皮膚をしたそのエツ子の、初々しい態度がフツと美子の氣持を暖める。白桃のように生毛が光つてゐるのだ。

「エツちゃん、どう？ あんたの科の人たち？……」

「まだ、馴れないものですから……」

「怖つかないんでしょ？ 婦人科の看護婦なんて、凄いなたちが揃つてゐるんだから……。いゝわ、そのうち婦長さんに話して、あんた、うちの科に引つ張つて上げるわ」

素直なエツ子を見ると、美子は自然にそんな先輩ぶつた口がきゝたくなつてくる。今迄の空白感が埋められてゆくようで、彼女は次第に饒舌になつていつた。

「エツちゃん、あんた早く寝なさい、又明日辛いわよ。この横に床を敷きなさい。お喋りしながら、一緒に寝ようよ」

カーテンを引いた部屋はほの暗い。床を二つ

並べて横になると、手の届く処に、お互の顔が白く見える。

「エツちゃん、布団がふめたいでしょう。あたしの方が暖いよ。こつちに来ない？」

「……」

「馬鹿ねえ、遠慮しなくてもいいのよ。一緒の方が暖いぢやないの」

「こんなにつめたい足して……。あんた、ほんとにまだ子供みたいねえ、——どうしたの？」

「だつて、くすぐりたい……」

「ふゝゝ、あたしのお乳、ほら！」

「……！」

「エツちゃん！」

不意に、美子の語尾が震える。

はにかんだエツ子の表情を見ると、征服欲めいた情感に、彼女の全身は我知らず大きく喘いでゐるのだ。

學園の思春期

凡そ女学生々活の経験がある女性なら、程度の差こそあれ、同性愛の洗礼を受けなかつたものは稀だろう。

いわゆる彼女たちが「S」「デベン」と称するところの、御親友なのだ。尤も同性愛と云つても、戦前の女学生たちは、もっぱら心理的な遊戯だつたから、肉体的な面は伴はなかつた。なんとなく思春期の、モヤ／＼した感情過多的傾向を、御親友相手に発散させていたのに過ぎない。

それがどぎつい体臭を伴い、肉体の愛撫にまで発展したのは、殆ど戦後のことである。なまぬるい刺戟では満足しなくなつたと云う次第でこれも露骨な世相の影響だろう。

現在では、彼女たちの肉体的交渉は、相当どぎつい、深刻なところまで来ているらしい。一部の仲間では、その真相が鉄面皮の大人たちさえ瞠若たらしめている。昔の、なんとなく泣いたり笑つたりしていた女学生とは大違いなのだ。

そうした同性愛にふける彼女たちと云うのは、最も多いのが、新制高校一、二年生と云うところ。満で十六、七才。つまり初潮後二、三年を経過したと云う娘たちである。いわゆる「春の目ざめ」から、いよいよ本格的成長期に入る過渡期である。

初潮、恥毛、乳房の隆起と、目ざましい肉体の変化に、彼女たちの関心は否応なしに自分自身の内部に向けられる。性に対する好奇心にとられぬ筈はないのだ。これが思春期である。

この時分の乙女たちにとつては、学校の身体検査は大問題になる。友達や先生、校医などの前に上半身とは云え、裸体を見せるのがたまらなく恥かしい。殊にふくらみを増して来た乳房を晒らすのが——。

「ねえ……」

「なあに？ へんな顔して——」

「あたし、どうしてだか、この頃、お乳んころが、痛いよ」

「あなた、そこんところ、始終さわつてゐるんじゃない？」

「だつて……」

と、彼女は顔を赤くする。

「なんだか、とても気になつて仕方がないんですもの。だから、ついさわつちやうの」

「お乳つて、いぢるとよけい大きくなつてしまうのよ。」

お姉さんがそう云つたわ」

風呂に入つて

も、夜、床の中に入つても、ふくらみを増してくる乳房が不安で、なんとなくいぢつていた娘は、それを聞くと暗い顔色になる。

乳房の隆起が羞か

しくて、制服の下にキ

リ／＼と晒布を巻いた娘

がいる。脂肪のついて来た臀部

や、足のスタイルを必要以上に気にす

る。「大根足」と云われて、三日も食事がすま

まない、云うのもこの頃だ。

この時代は、自分自身の肉体の変化が目ざましいだけに、異性よりも、自分と比較すべき手

近の同性の方が気になる。仲間の裡でも、性的にひどく成熟した娘、或はひどく發育のおくれ

た娘が印象的に写つてくるのだ。

これは別段肉体的な意味ばかりではない。才能、又は性格の面でも、自分自身にないものを

持つている同性

に對

性愛にふける乙女たちが相当数を示しているのは何を物語っているのだろうか？

「だつて——」

と、彼女たちは云う。

「男の御友達とどん／＼遊んでる人たちもいるわ。でも、私たちはそんな勇氣はないのよ。勇氣と云うより、必要がないつて、云うのかな——」

「男の人つて、なんだか不潔で、生臭いような

気がするもの」

「つまりね、男のお友達と遊んでると、世

間からも不良のように見られるし、家の

ママなんか心配するでしょう？。そ

んな悪條件を犯してまで、男の人と

つき合う必要はないんですもの」

そうなのだ。彼女たちの性的関心

は、まだ殊更に異性を必要とはしな

い。デリケートな思春期の動搖の渦

は、こうして手近な彼女たちの周囲で

ぶつかり合う。

だから、この時期にある乙女たちにとつ

ては、どんな些細なことでも、同性愛の動

機になる。

昌恵は校庭の一隅で、ふいに町子に話かけら

れた。

「このあいだ、バレエの公演にお出になつたん

ですつて？」

「ええ。——でも、公演つたつて、とてもチャ

チなの。まあ、研究会みたいなものよ」

「江沢さんに伺つたわ。切符頂いて観に行つた



強い憧憬を抱

して

くのである。

男女共学の高校では、女子ばかりの高校より

も同性愛が少いのは事実のようだ。しかし、そ

れは比較的と云う意味で、共学の場合でも、同

つて、とても自慢してるの。羨しくつて……」
「あら、だつたら、仰言つて下されば、切符差上げたのに……」

「でも、あたし、江沢さんのように、お親しくないんですもの……」

伏眼がちに、制服のリボンをなぶりながらそんなことを云う町子を、昌恵は軽い驚きを感じながらみつめた。

同じ文芸部だけれど、一級下の町子とは、それ程親しく話合つたこともない。

「江沢さんだつて、そんなに親しいわけでもないのよ」

「あら、だつて、江沢さんはあなたのベットだつてみんな噂してますわ」

「まあ、そんなことデマだわ！ あたし、そんな特別なお友達なんて居なくつてよ！」

「ほんとう？」

熱つぽく、訴えるように見上げる町子を見ると、昌恵は思はずムキになつて否定せずには居られない。

「絶対にそんなことないわ。——今日、帰りにあたしん家に来ない？ バレーの写真なんか、御見せするわ」

「まあ、嬉しい！」

校門の外で、口さがない友達たちには内緒の、二人だけのひそやかな待合せ。それだけでもう彼女たちの鼓動はときめいてくる。如何にも秘密の情事めいた、あやしい亢奮に包まれるのだ。だから、二人つぎりの昌恵の部屋で、ぴつた

りとよりそつてアルバムに見入つている時、その二人の接触が抱擁に移つたとしても、それは彼女たちにとつては、極く自然な成行なのだ。片方が既に肉体的な同性愛の経験者だつたり、それでなくとも、オナニーの体験がある場合には、油紙に火がつくように、彼女たちの若い肉体が燃え上る。

娘たちが何時間部屋にこもつて居ようとも、それが女友達である限り、親たちは何の危惧も抱かずに放任する。彼女たちの交際は正当であり、自由なのだ。

まつたく、この同性愛猖獗の最大原因は、女同志でどんなに激しい肉体の快楽にふけろうとも、少しも素行上の非難を浴びることがないと云う点にあるらしい。彼女たちは道徳上、なんのやましさも感じてはいない。対男性との関係の場合のような、罪の意識は何処にも存在しないのだ。第一、妊娠の心配もないではないか……

だから、異性と二人つきりでは、映画にも行かないような内気な娘でも、その御親友との場合には、思いつきり大膽な遊戯にもふける。

この道の消息通であるT子に聞くと、
「そうね、まあ始めは大抵キスを覚えるわ。それからだん／＼……。だつていろんな写真だの絵だの、持つてる人もいるんですもの。え、シロ／＼なんて見世物があることも知つてるわ。結局はみんな、殆ど同じようなことをしてるのよ。でも、中には、何処から手に入れるんだか、

凄い道具なんか使う人もいるわ。そんなのを覚えると、とても普通じや刺戟がなくなつて、つまんなくなるのね」

制服のウェストを小粹に締めて、前髪を綺麗に揃えた、十七才の少女の話である。

職場のレスビアンたち

今ベスト・セラーになつているテレスカ・トリースの「女の兵舎」は、第二次大戦の際に英国で結成された、ド・ゴール將軍の婦人部隊の生態が描かれている。これが米国でも日本でもベスト・セラーにのし上つたのは、この女の兵舎に於ける同性愛の描写が、大衆の興味をそそつたものに違いない。

まつたく、この著書は、全巻これ同性愛の書と云つてもいいが、著者は篇中で隊員たちの同性愛を、二種類に區別している。

その一つは殆ど先天的と云つてもよいほどの、真の意味のレスビアンである。彼女たちにとつては、女同士の愛と云うものは、決して遊戯ではない。これ等のレスビアンたちは、異性に対して、殆ど何の関心も抱いてはいないのである。そして彼女たちは、同性に対してのみ、身心をすりへらすような、激しい恋をする。それ自身実を結ばない奇型の恋、まるで猫が自分の尻尾を追いつながら、自分の周囲をかけめぐむような恋である。次に少し引用すると、
「アンは恋人なしには、一日も生きてはいられない女である。愛というよりも、情事のもつあ

らゆる手練手管と、そこからくる快樂が必要だったのだ。一人でいると、彼女は人と変つたところはなかつたが、仲間がみつかる普通ではなくなつてしまふ。しかし、この普通でなくなるといふことが、彼女にとつては必要だつた。そうせずには生きていられなかつた。相手がなると、何か自分から切りはなされてゆくように感じるのである。彼女は肉體の上に、暗い宿命を背負つて生れてきた女なのだ」

もう一つのタイプは、一時的、或は環境的なレスビアンと云つてもいい。彼女たちは女同士の生活の摩擦から、一時の好奇心から、又はきまぐれな接欲から同性愛に走る。絶對的な肉體の要求からではなく、一つの昂奮剤のように、同性愛にふけるのである。こゝでは、それはあきらかに遊戯である。だから、環境が変れば自然消滅することになる。

現在の日本では、この後者の意味の同性愛が大半である。女ばかりの生活の中で、自然に生れた遊戯的同性愛なのだ。つまり第二義的なものだといふ。

男女間の恋愛にしても、往々従兄妹同志間に恋愛が成立するように、人々は手近な対象に対して愛情を抱き易い。だから周囲に適當な異性がない場合には、止なく同性に対してでも、恋愛に似た感情が芽生えるのだ。

女ばかりの寄宿舍、職場に同性愛が生れるのは、だから自然現象だと云つてもいいのかもしれない。女工同志、或は洋裁学校、美粧院、ウ

エトレス、お針子同志と、女ばかりの職場に狂おしい、だが空しい火花が散る。

昨年晩秋、静かな十和田湖で無理心中未遂事件があつた。それが女二人だつたから、物好きな世間を驚かせた。

彼女たちは二人とも、都内某官庁の交換手だつた。星の数ほどの男性たちがゴツタがえすビル街の勤めとは云つても、彼女たちが一日中閉じこめられているのは、女ばかりの交換室である。この部屋の中で同性愛の幾組か出来上つたとしても、異とするには足りない。

二十九才の初子は親も兄妹もない一人暮らしだつた。十七才の頃から交換手として女ばかりの職場に馴れ、異性とは口を利くのも嫌惡を覚える程のレスビアンだつた。十数年に亘るこの交換室で、彼女は常に同性を愛し、手なづけ、肉體的な交渉を続けて来たのである。

しかし、初子が愛した女たちは、ある時期がくると、それ／＼同性愛を卒業して、初子から離れてゆく。自然に異性との恋愛や結婚に結びついてゆくのである。初子は恋人を失う度に焦燥を重ねていつた。彼女自身だけが取り残されるのだ。

そんな時に新しくこの交換室に入つて来たのが和美だつた。女優の若山セツ子によく似た、十九才の愛くるしい処女だつた。初子は一見した時から、この和美に激しくひきつけられていたのだ。

骨の髄からのレスビアンである初子には、も

う見栄も外聞もない。ひたむきな、異常な愛情を一途に和美に対して殺倒させた。三十近い女の妖しいまでに変質的な愛情——。初々しい和美は苦もなく初子の虜になつた。

それはまるで毒蜘蛛の巣にかゝつた蝶々のように——。しかし、二人の交情は日に／＼深まつていつた。世間知らずの和美にとつては、初子のすべてが驚異だつた。熟練したテクニックが、和美の若い肉體を魅了したと云つてもいい。

初子はしば／＼その愛人を自分の下宿に泊めた。五日も一週間も二人つきりで同棲することあつたが、女同士のことだから、和美の肉親たちは、とりたて／＼心配することもなかつた。「和美ちゃん、ほんとうに一生離れない？」

「お姉さん、そんなこと……」

二人は狭い床の中で、うわづ／＼たように抱擁を重ねたのだ。

しかし、その誓いが空しくなる日が来た。一時的、環境的に初子の激情にひきづられていた和美だから、やがて覚める時がくる。それが異性の出現、婚約と云う形をとつた。

その和美を静かな山中の湖に連れ出し、ボートの上から無理強いに抱きしめて飛びこんだのは、初子のもの狂おしいまでの執念である。

女の同性愛は、その性質上、比較的に世人の耳目をひくことなく陰蔽されているが、実は私たちの集団の中で、昨日も今日も彼女たちの血を燃え上らせているのだ。



舌代

はじめに言葉ありき、を真似るのではないが、まず最初に用語を簡単に説明しておく。このほうが、これから述べるのがよく解ると思う。なぜなら、日本、大きく言うと東洋には西洋にくらべて女子同性愛についての文献が非常に少なく、その用語がまだ一般に理解されていないからだ。

ところが、西洋では、ギリシャ以来、この道が実に盛んで、非常に多くの文芸作品が残され、同時に女子同性愛についての性科学の業績がある。艶本や春本（春画や好色映画も然り）に至

女子同性愛艶本めぐり

實らざる逸楽

ジュリアは、いらいらした身ぶりて、妹が付けていた黒いキッド草の胸當をはずした。かたくて白い、なんとも非の打ちどころのない形をした二つの乳房がむきだしになった。ジュリアは、思わず感嘆の叫びをあげた。「お前」……

柴田 敏

つては、女子同性愛の一場面がないものとは不具みたいなくらい、これを扱うのが定石になっている。

サフィズム。女子同性愛の通称である。ギリシャの女詩人サッポオから由来した言葉で、もちろん、彼女は、その実践者であり、女子同性愛を讃えた詩を残した。

レスビアンヌ・サッポオの生れたエーゲ海にあるレスボス島では、女子同性愛が盛んだつたと伝えられたところから、「レスボス島の女」という意味から転じて「同性愛の女」という意味になった。

トリバディズム。本格的な女子同性愛を言う。つまり、といちはいち、まで行くことを意

味する。その個人を指すときはトリバードと呼ぶ。これにたいしてサフィストという。もつとも、トリバードだけが吸陰舐陰をするとは限らないが、厳格にいうと以上のような観念で用いられている。

その他の言葉の説明は省いて、いきなり女子同性愛についての名作(?)に移ろう。

二人のグウニヨット

アンリ・モニエ（一八〇五—一八七七）の『二人のグウニヨット』は、一幕ものの対話劇であるが、典型的なトリバディズム芝居である。グウニヨットというのは「おひきずり」女とも呼ぶ粹なフランス語である。こ

の大膽な芝居は、じつさいに上演されたのであつて、そのセリフの素晴らしさは、とうてい日本語で捉えられないが、一八六三年に写本にされたものから伝わっているテキストによつて少し紹介してみよう。モニエについては書くことが多いが、この他に、やはり戯曲の『グリゼットと学生』小説では『ローザの処女膜』が有名である。

『二人のグウニョット』は、一八六〇年、ロアル河畔の、とある館内での話ということになつている。幕が開くと、館の女主人クロアジイ夫人が、その二人の友ルイズ・ド・ラヴヌール夫人とアンリエット・ド・フレミクール夫人を寢室に案内する。この二人はクロワジイ夫人邸を訪れ、遅くなつたから泊つて行くのである。女中のジュリイは、二人のお客様のサービスに忙しい。

やがて、家の人たちは引き退り、二人の女友だちは一緒にベッドに入る。ここまでに相当なお喋舌りがあつて第一場が終り、いよいよ第二場からは、二人の女がベッドに入つたまま進行する。

まず、この家の女主人の噂から世間話、それからあれ、あれからそれと二人の女のお喋舌りはつづき、そのうちにローソクを消して真ッ暗のまま話し声だけが聞える。

アンリエット

それや、どんなにか、ご存知だつたらねエ。結婚以来、あたくし、おいてきぼりになりッぱ

なしなのよ。

ルイズ

ほんとう？

アンリエット

主人たら一言も言わせませんの。

ルイズ

おやさしそうな方ぢやないの。

アンリエット

あれでね、とても

冷たいのよ！

ルイズ

まさか！

アンリエット

氷だわ。

などと話はつづき

やがてルイズの良人

こそ一週間も良人の

務めをしない怖るべ

き男であることなど

が告白され、かつて

の女学校の寄宿舎友

だちのことになる。

このへんから、そろ

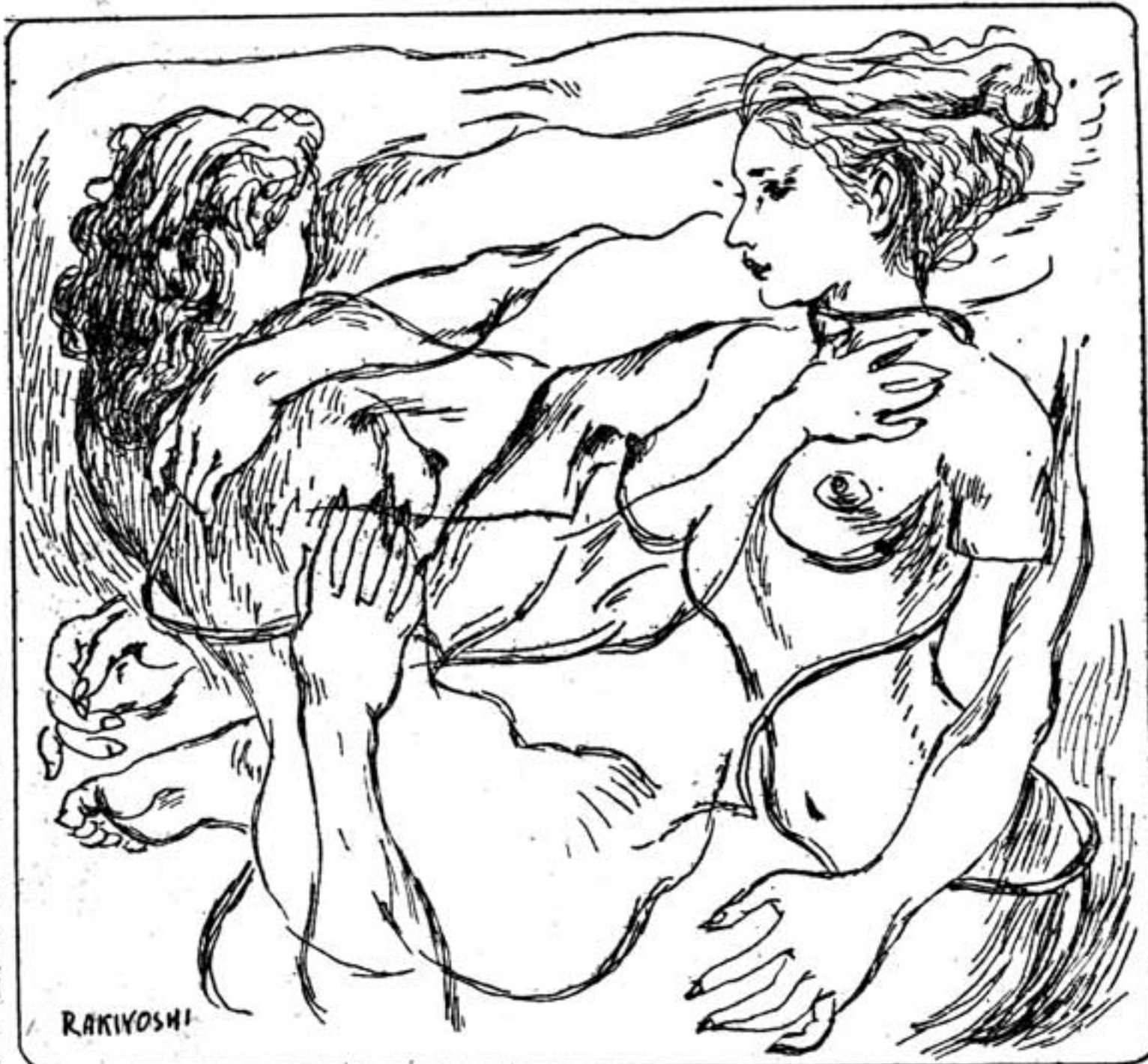
／＼話が怪しくなり

女学生時代の経験談

から次第に二人はコー

ルイズ

んなふうによ。唇をあなたの唇に近づけてどう？



アンリエット

ああ おくさま！

ルイズ

おやりになつたことあつて？

アンリエット

なんて、あなたは嬉しくしちやうんでせう？

う？

ルイズ

おくちを、あたしの天使。かわいい、あなたのお口。もつと、もつと、どう？

アンリエット

え、ええ、いつまでも、いつまでも！

などと宜しくあつて、とう／＼、二人

は、またローソクをつける。はては、寢

巻を脱いで、おたがいの裸を見せあひだ

す。しかし、まだトリバディズムまでは

行かない。

ルイズ

ね、かわいいお猫ちゃん、あたし、欲しい

ものがあるんですけど。

アンリエット

なんですの、あたくしが出来ることつて？

あたしが持つているものはみんなでも。あたくしがして上げなかつたことつて何かしら？

ルイズ

あの、おねがいつて言うのは、ある物なんですけど。

アンリエット

なによ？

ルイズ

なんて言おうかしら。

アンリエット

なんて言つたらいいの？

ルイズ

いやな言葉なのよ。

アンリエット

あたくし知らないわ。

ルイズ

知つててよ。知つててよ！ おねがい！ おねがい！

メン／＼と会話がつつぎ、とう／＼ルイズは禁断の言葉を自ら発する境地にコーフンを盛り上げて行く。

アンリエット

そうよ、あなたの可愛いキユキユ。

ルイズ

あなたが指でさわつてゐるのは、あたしの可愛いキユキユぢやないわ。あなたが触つてるのは何よ？

アンリエット

知らないわ。

ルイズ

きつと？

アンリエット

ほんとに知らないわ。

ルイズ

あたしの可愛いコンよ、あなた、あたしのコン——あなたのコンといつて頂戴、ね、あなたのコン！

アンリエット

あなたのコン

以下は御想像に委せるが、けつきよく、二人は、聞くも惱ましい女同士の愛に溶ける。

跨がつた娘

『パンデユラ・ヴェニユス』（ヴィナス懸垂）という一流の艶本がある。一名『跨がつた娘』というのだが、これは、ラテン語の『セマ・ヴェネリス』から名付けたもので、まだ日本には紹介されていない。この本には、何かイワクありげに女子同性愛のことが述べられている。本文の一部を紹介する紙数がないので、その序文の大半を直訳しておこう。「著者は、通常のトリバディズム、つまり女が女に乗ること（オヤ面黒い、だが、どうやら等閑に付されがちな快楽であつて、そんぢよそらのもののように玉石混淆すべからず）並びにサフィズムのよく知られた悪徳を取扱う。

女主人公エセルは、たくましくて美しい娘でいろ／＼な方法で他の人々を健康な欲望で満足

さす。

あるときは、本篇の語り手ジャックであり彼女は、森はずれの淋しい場所に連れて行く。あるときは他の娘であり、彼女は同性愛を楽しむ。中でも変つてゐるのは烈しい淫慾で無邪気な少女をギセイにし、またあるときは、ぼちや／＼した捲毛の少年を己がガニメードにして空しく藻掻かせ、やす／＼と彼女の強い四肢に締めつけてしまう。

この美しい淫乱なジュノーが、みずからを満足さすために行う特殊な方法こそ、本書の主調をなすものである。『ヴィナスの懸垂』なる古典を知る者にとつては先刻御承知の筈だが、爾余の人々には一言するに十分である。つまり、彼女は、情熱的に乗馬術に打ちこみ、その学問を二人の年少の少女に教える。彼女たちは生徒であり、先生の方法を互いに用いて、やがて師に服従するようになる。

服従する！ 然り、なぜなら彼女はトリバードであるからだ。サフィストではなく正規のトリバードであり、女の愛人になり、同じ位置で彼女らを楽しむ。もちろん、男子にするのと同じ様式ではない」云々

まだ／＼この序文は続くが、ちよいとフザけていて面白い文章である。本文は、とても公表できないと考える。もちろん、本書は、前に述べたモニエの作品にくらべると程度が落ちるが、単なるポルノグラフィとも言えな

いものを持つている。

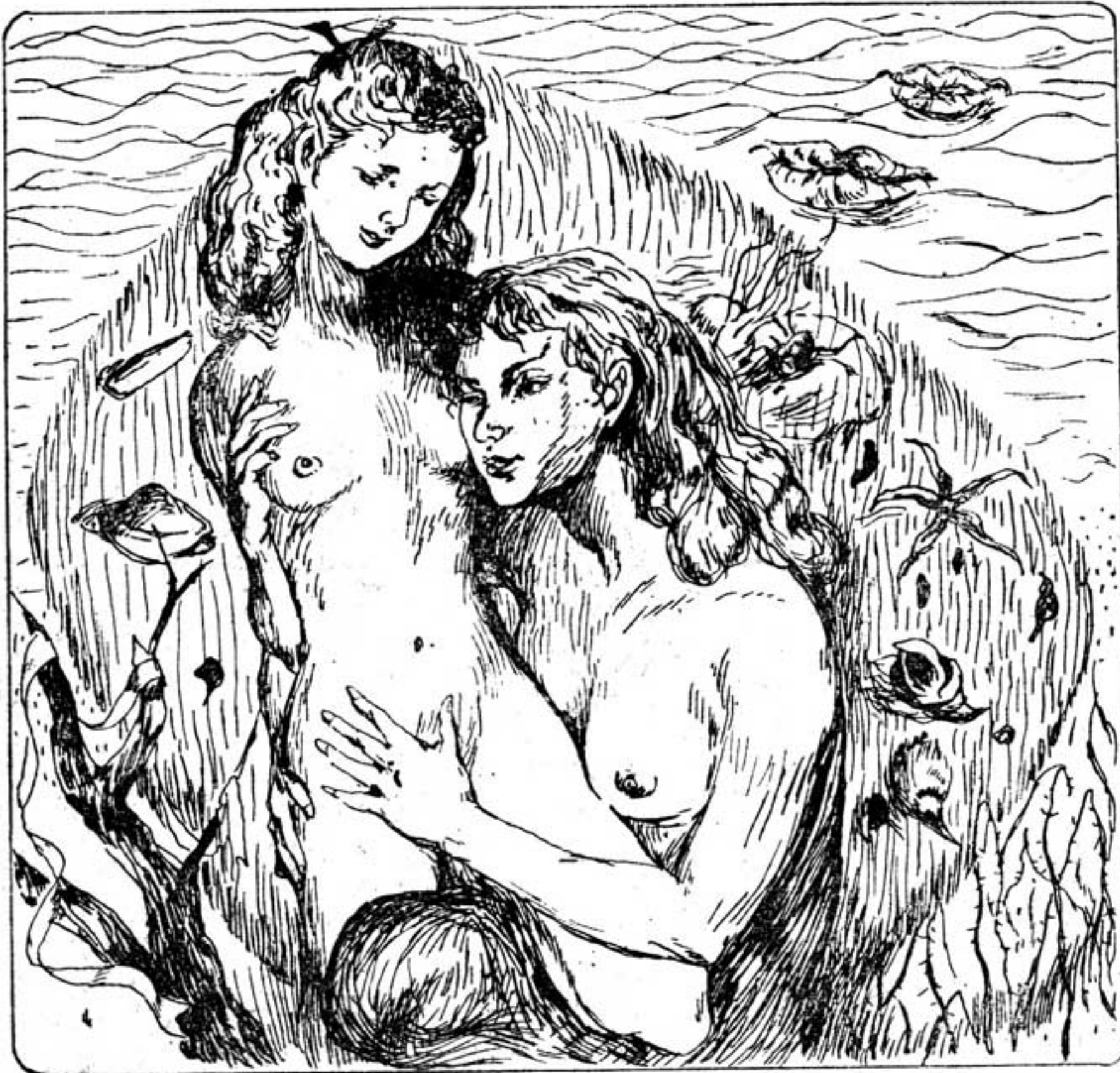
その他、女子同性愛を強く扱っているものに『ブリジット物語』、『学園ヴィナス』、『樺の枝美人マルゴ』、『ニューヨークの鞭打美人』、『女教師マギイ』、『女の夏遊び』

などがある。これらは、どれもポルノグラフィだが、何といつても、ミユツセ作といわれる『ガミアニ』には及ばない。『ガミアニ』は、女子同性愛艶本の白眉である。私が『ガミアニ』の完訳をして以来、多くのニセ本が現われ、本書はあまりにも有名であり知られているから、あえてこの世界的な艶本のことには書かないでおく。

ピエール・ルイスは、ギリシヤ出土の瓦に刻されたものを翻訳したといつて『ビリチスの唄』といふ女子同性愛の翻訳詩集を出した。そのサツポオの弟子であつたビリチスといふ女詩人の多くの詩は、なるほどルイスの訳文から見ても美事なものであり、いかにもギリシヤ的である。ところが、後年、たしかブリュンチエールだつたが、『ビリチスの唄』は、ルイスの創作であつたことを見破つた。

ルイスは、それほどギリシヤ的なものに溶け

得た芸術家だつた。彼はサフィズムの讃美者でその名作『アフロヂット』でも二人の笛吹き娘ミルトクレイアとロデイスの美しい同性愛を描いている。



ミルトクレイアは言う。

「あんたは、あたしの探しだした、たつた一つの宝！ あんたを眺め、あんたを見つめると、どうして、あたしを愛しかえすのかわからなく

なるわ。あんたの髪は麦の穂のように茶色、あたしの髪は牛の毛のように黒い。あんたの肌は、羊飼いのチーズのように白く、あたしの肌は浜辺の砂のように焦げている。あんたのやわらかい胸はオレンヂの木のように綺麗で、あたしの胸は岩のあいだの松のように痩せている。もし、あたしの顔が美しくなっているとしたら、あんたを愛しているせいだわ。おお、ロデイス。あたしの妙な処女のものは、あんたも知つてるでしょ、天人花を少し食べているパンの神の唇に似ていて、あんたのは、子供の口のようにバラ色で可愛い」

ルイスは、この娘の口をかりて、古代ギリシヤ時代には女子同性愛が社会的に認められていたことを書いている。つまり、エペスス（小アジアにあつたイオニアの一都、聖書の「エペソ」）では、年頃の娘たちが愛しあうと法律で結婚が許された。女と女だが、どちらかが良人になり他が妻とされ、夫婦としての権利ができて世帯をもち、子供が欲しいと女の子を養女にしたという。

レスボスの女

ボオドレエルは、もともと『レ・レスビアヌヌ』（レスボスの女たち）という詩集を計画していたが、これが成長して後年の『悪の華』になつた。だから、この不朽の詩集の中には多くの女子同性愛を歌つたものがある。

レスボスよ、暑きものうき夜の国よ、
深き眼の乙女らは恋に燃ゆその身を
鏡に映し、あだ花の空しき快樂！
熟れたる果実を撫づ妙齡の女体。
レスボスよ、暑きものうき夜の国よ。

これは『レスボス』の一節であるが、デルフ
イヌとイポリットの同性愛を歌った『呪われた
女たち』で次のように叫んでいる。

なんぢらの厳しき不妊の快樂
渴きを強め肌をこわばらす。
欲情の颼風ふきすさび
古き旗のごとく肉をはためかす。

しかし、女子同性愛の大詩人はヴェルレ
エヌである。彼は、ランボオとの男色でも
有名であるが、女子同性愛者はヴェルレ
ヌを詩神として崇める。その中でも『女友
たち』が特に著名で、この詩集は当時禁止され
た。いづれ機会をみて訳文を発表するつもりで
ある。

フランク・ハリスは、その『わが生涯と恋
愛』の第四巻第四章で同性愛女の手記を発表
している。

「あたしは少し身をもたげ、こんどは優しく軽
いキッスをあたえる。脚に、お尻に、乳房のほ
うへ上り、ノドを超えて唇へ、感謝している眼
に戻る。彼女はじつとしている——大理石の女

のようだ。あたしに腕をまきつけて、『かわい
いひと！ かわいい、わたしを焼いてしまおうひ
と！』とささ
やかれて、
やつ



たしは、彼女のそばに跪いて、その手にキッ
スする。(中略)

マルグリットは起き上る。行つて、何か棄
てて戻つてくる。そばにうずくまつて
小さなグラスをうツとりとやさし
くあたしの唇に捧げる。

それから、あたしたちはベッ
ドに行つて横になる。ヴェ
ルレヌを持つて来て読
む。頬をあたしの乳房
の上に置き、あたしの
からだをなでる。

もしも、ヴェルレ
エヌの霊が部屋のだ
こかにひそんでいる
なら、きつとその雲
霧の心で喜したでせ
う……

モオパッサン作といわ
れる『大佐夫人の従妹た
ち』も女子同性愛で有名で
ある。しかし、トリバディズ
ムの描写は、その第一部にはな
くて、むしろ第二部のほうにあ
る。ちかごろ出た訳書は第一部だけ
あるから、以下すこし第二部の同性愛的な
ところを紹介しよう。

と彼
女である
ことを知る。
あたしは彼女の名を呼ぼうとは思わぬ。あた
したちが楽しんだ強い快樂と彼女の美しさに、
尊敬の念にあふれたあたしに調和した彼女。あ

(第二部第一章)

彼女らは姿見に向いあつた。

「ごらんなさいな、ジュリア、あなたの黒い髪が、わたくしの金色の髪にとてもよく似合っているぢやないの」

とフロランティヌがいつた。

「ほんとね」

とジュリアは答え、かるく片方の手でフロランティヌの髪をとめていた櫛と留針をとりのけ、そのあいだ妹は、姉の長い編髪を解きほぐして両方の肩に散らした。

その二色の絹のような髪の波は、たがいに反対のニュアンスをまじえ、かぐわしい香りを発して混りあい、恋にもだえる二人の女のほれぼれする頭とはこうだと、人が夢みることできる一幅の構図を、いやが上にも可愛いく、なまめかしく引きたてるのであつた。

「この頸のところにある小さなアトは」

とフロランティヌは、もつとよく見ようととして、ひよいと伸び上りながらいつた。「きつとお姉さまの胴着のボタンだわ」

でも、なんて綺麗なんでしょう！ 若い女は相手を抱きしめた。

「お前が、そこに持つているものにとてもよく似ていると思うわ。その着物をムリに持ち上げている可愛い円いものの上にあるもの」

「そうね。くらべるのはワケないわ」

ジュリアは、いら／＼した身ぶりで、妹が付けていた黒いキッド革の胸当をはずした。その仕草で、けつきよく、かたくて白い、なんとも

非の打ちどころのない形をした二つの乳房がムキだしになつた。

それを見ると、ジュリアは、思わず感嘆の叫びをあげた。

「お前」

と彼女はいつた。

「美の女神のようなお前をつく／＼見たことがなかつたわ。お前は世に言う、あたしたちの母イヴのようなブロードね。ほんの少し何かつけただけの姿を見せてくれないか。蛇を負かしたときみたいに見えると思うわ」

「ぢや、かわりばんこに愛嬌を見せましょうか？」

「もちろんよ。鏡の前へ行つて活人画を作つて遊びましょう。ラタヂス夫人のところの人たちよりも着ないでね」

「だつたら、その上さらに、あの夫人の庭で作られる造形美術の美では感じられないものを感じることにしましょう」

こうして、どちらも未亡人になつた二人の若い姉妹は、しぜん欲望のハケ口をお互いに求めてトリバディズムにまで進む。これに利口な女中が一枚加わつて、それこそ文字どおりの「三人」(トリ)「茶番」(パティ)に化し、物語は佳境に入るが、肝心なところで紙数がなくなつてしまつた。

(おわり)

◇レスボス愛の種々相◇

一口にレスボスと云つても、下級女学生がコッソリ靴箱に手紙を忍ばせるような、極めて他愛ないものから、男性が顔負けするような深刻なものまである。

獵奇家に聞くと、今やシロクロでは刺戟が少く、かえつてシロ／＼の方がズンと結構だと云う位だ。見世物商売でもそうだから、いはんやこの道に精進する彼女たちの生憎がどんなに濃厚を極めるかは想像に難くない。

レスボス愛は女性間で互に肉体を愛撫し合つて、異様な満足を味うのだが、この際主に唇によつて快感に至る方法がとられる。これはサツフィズムと呼ばれる。すなわち古代ギリシャの詩聖サッフオの名から転じた。又レスボスの命名も、彼女がレスボス島に生れたところによる。

又、唇によらず、指でなされる愛撫を相擦淫と云う。背後から抱締めて刺戟する方法を匙重ね、これはまつたく云ひ得て妙だ。

次に人工肉体である張形を用ひる法。これも西歐では相当古くから行はれていたらしい。日本でも古い絵巻や鳥羽絵が残つているところを見ると、室町時代以前から、いろいろ工夫していたようだ。又、アフリカなどの蠻地でも、ちゃんとこの張形が使はれていると云ふから、レスボスなるもの、とても一筋縄でゆく代物ではない。

Ⅱ 外國人の男色 Ⅱ

異國衆道談義

柳生 巨

正木 丘陵 画

とうとう、フェリックス君は、デユラーさんの奥さんとねんごろになつてしまつた。いやそれはむしろ、熱烈で深刻な同性愛のため、デユラーさんが、戀人を他の男にとられまいとして、自然に妻を押しつけた形だつた。

Ⅰ ヨーロッパ男色大鑑

日本人以外の男色というと、支那人もインド人もアフリカにいる諸人種についても、つまり世界中の色々な人種間にある男色について述べねばならないが、ここでは、俗に言う外国人、ヨーロッパやアメリカの諸

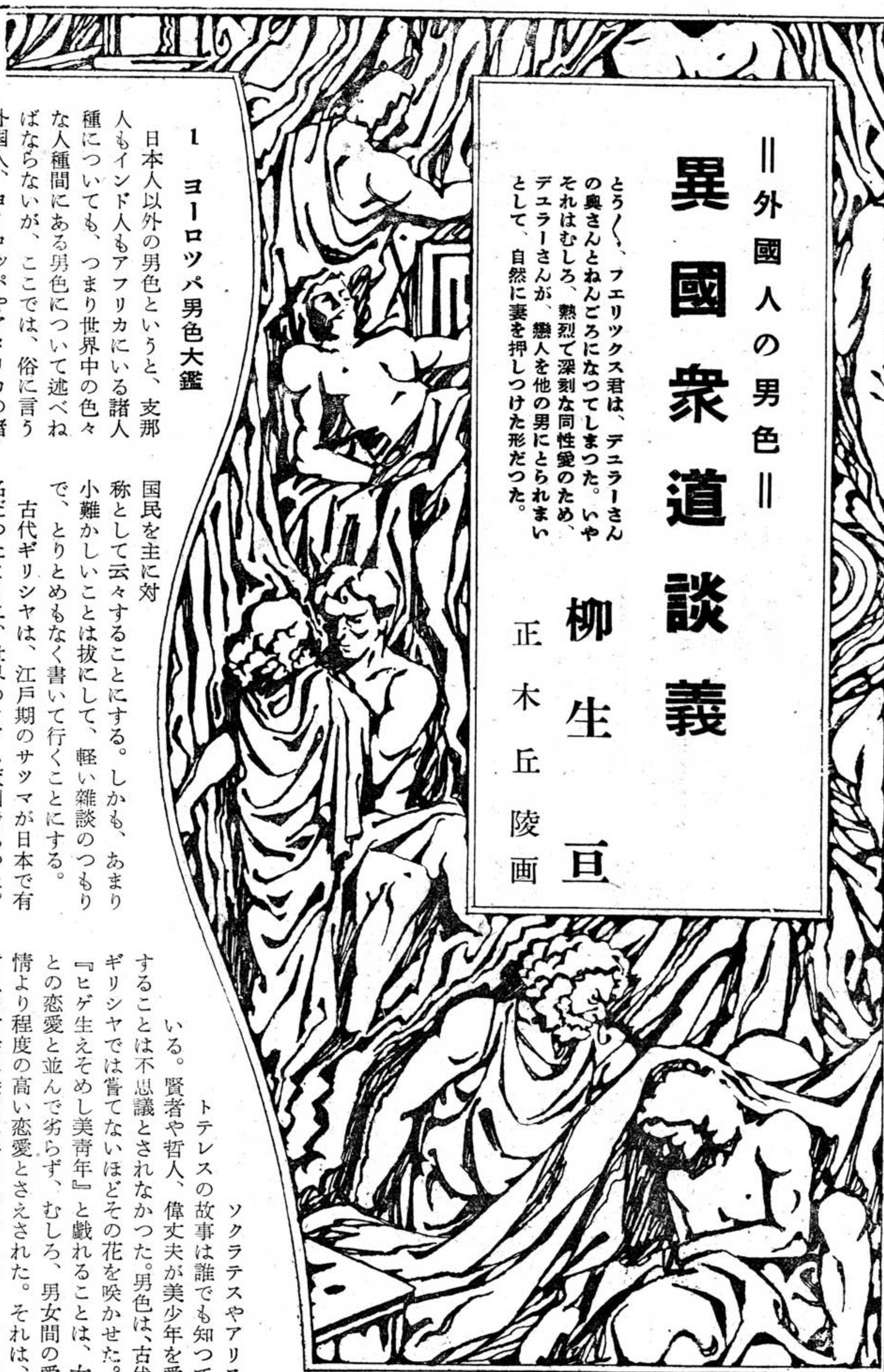
国民を主に對

称として云々することにする。しかも、あまり小難かしいことは抜にして、軽い雑談のつもりで、とりとめもなく書いて行くことにする。

古代ギリシヤは、江戸期のサツマが日本で有名だつたように、世界のソドム天国であつた。

ソクラテスやアリス

トテレスの故事は誰でも知つてゐる。賢者や哲人、偉丈夫が美少年を愛することは不思議とされなかつた。男色は、古代ギリシヤでは嘗てないほどその花を咲かせた。『ヒゲ生えそめし美青年』と戯れることは、女との恋愛と並んで劣らず、むしろ、男女間の愛情より程度の高い恋愛とさえされた。それは、哲人の對話に絵画に彫刻に、どんなことでも古





代ギリシヤのことに一步はいると、すぐにぶつかる事象である。有名なハンス・リヒトの『ギリシヤ性的風俗史』を一見すると、いかに当時は衆道が盛んであつたかが、その豊富な絵画彫刻の証據だけでもうなずける。

ギリシヤに次いで、ローマも盛んであつた。ここでは西洋の男色史を書くのが目的ではないから詳しいことは一切はぶく。だいたい、ソドミイという語が、旧約聖書のソドムという町の名から出来たように、古エダヤ人間には相当この道が盛んであつたことがわかる。ソドムの町は、神の怒りによつて灰燼に帰したことになるが、爾来幾千年、エダヤ人の男色が衰えたとは考えられない。

こういうふうに、昔から近東は男色が大きいに行われた。ペルシヤやアラビヤの説話などにそれが反映している。『千夜一夜』にも可なり多くの箇処がある。ことに、アラビヤ人は男色が好きらしい。『千夜一夜』を翻訳編集したバートンは、その終末論文やその他の論考でアラビヤ人の男色について述べ、世界男色地帯なるものを唱えている。バートンに

よると、ちようど地震地帯の世界地図が作れるように男色地帯図が作れる。あの有名なアラビヤの性典『匂える園』には男色についての章がない。そこで、識者は、『アラビヤでは、それがあまり日常行爲であり普通化しているのので、特に述べる必要がなかつたのではあるまいか』とさえ解釈しているほどだ。日本の浮世絵には多く男色を扱つたものがあるが、古ギリシヤやローマなどの絵画を除いて、外国には男色を扱つた画が少ない。近代になつてからのエロ写真にも、じつにソドミイのものは少ない。ところが近東や北アフリカなどでは、割合に簡単にソドミイの写真が手に入る。ほとんどがアラビヤ人である。

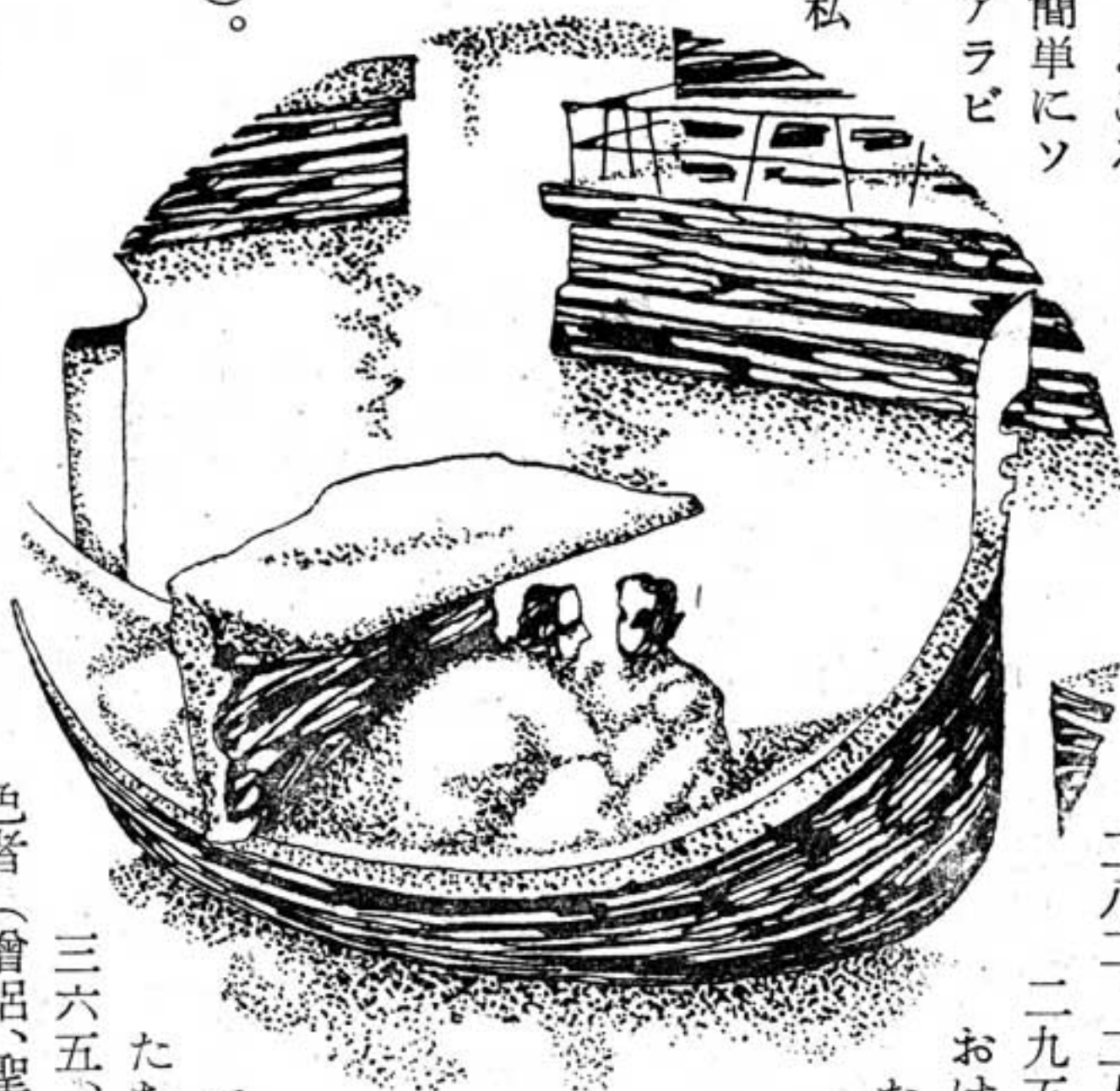
すこし話が横にそれた観があるが、私がついていけるエロ写真のカタログから拾つてみよう(ゼネラルカタログ第二十六号による)

- 九〇四、父と子(雞姦者たち)。
- 九〇八、アラビヤ少年と男。
- 九一二、女装せる二人の男色者。
- 九三八、男色青年たちと楽しむ。
- 九五二、僧侶と黒人少年(雞姦者たち)。
- 九九〇、近代青年(雞姦者たち)。
- 九九四、おかま掘り。
- 一二七一、衆道狂乱。

これは第九〇一番から第一二八四番までの間にあるものであり、いかに男色写真が少なくないかが解ろう。この題名は、私が付けたのではなく、

ちやんとそう書いてあるのを訳したのである。こういうことを紹介する機会はなかなかないしもののついでに第一番から拾つてみよう。

- 七一、移民と土人青年。
- 七二、七三、七四、男性間の愛(雞姦者)。
- 七五、七六、女装せる頽廢男子たち。
- 一一六、一一七、宣教師と黒人。
- 二三三、二人の水夫。
- 二四八、男色道における二人の男。
- 二八一、三人の肥つた坊主。
- 二八二、二人の青年。
- 二九五、支那における雞姦者たち。



- 三七三、ソドムの子ら(女装せる三人の男)。
- 三七四、古代ローマの男色者たち(三人)。
- 三六五、僧服の男色者(僧侶、聖女、侍童)。
- 三六六、エジプト人とイギリス人男色者。
- 三七七、男色兵たち。
- 三七八、パリ人の男色者たち。



三七九エチプト人の男色者たち。
四七二、ソドムの終末（男色二人）。
四九二、四九六、イタリヤの男色者たち。

右のとおりであつて、一見、沢山あるように思われるが、約千三百に近い数のうちでこれだけである。このほかに、左の別の六種がある。これは男色だけを組にしたもの。

頽廢のパリ人—低いコルセットをつけた二人の青年（二十二枚）。
オリンパスの快樂—海岸、全裸の二人（二十二枚）。

二人の稚児（二十四枚）
近代男色者（二十二枚）

船室ボーイと高級船員（二十二枚）
掃除夫と船長（二十枚）

エロ写真の種類は無限で、どしどし新しいものが出来るのだが、長い歳月に淘汰され、世男市場に残るものは、たいてい一定のものになる。

これらが次々とプリントされて、上海でもパリでもニューヨークでも同じものが流れているのである。

だが、この目録から推察して、およそヨーロッパにおける男色というものについて何かしらの概念が得られることと思う。

男色専門の春本は写真よりもつと

少ない。近代においては、低級なものも高級なものも殆ど見当らないくらいで、詩歌はローマ時代のものが残っている。男色を部分として扱った対話や寓話などはちよいちよいあり、古ギリシヤやローマのものに見られ、中世のイタリヤの諷刺詩や説話にも残っている。
これらは比較的に高度のものであり、近世になつてからのピカ一は、何といつてもサードの『ソドムの百二十日』であろう。

2 實踐男色批判

ヒルシュフェルトは、古来からの男色大家の一覽表を作っているが、日本でも然り、昔から英雄豪傑は男色を好んだ人が多い。要するに、彼らは、男の中の男であり、ワイニンゲルの言う男性要素のパーセンテージの多い連中で、相手の男を女性視できるほどの精神力がある、と言えらるのではなからうか？

芸術家のなかでは、ホイットマン、ジイド、ワイルド、ヴェルレエヌなどが有名である。ジイドの文学を解く鍵は男色にある、とさえ言う人がある。ワイルドとヴェルレエヌの二人は、そのために投獄された。ヴェルレエヌの相手は天才詩人アルチュール・ランボオであつたことは世界的な話である。ここに面白いのは、ヴェルレエヌで、彼は女子同性愛の讃美者でもあつた。さいきん、その秘詩『女友たち』の邦訳が出版された。

『草の葉』の詩人ホイットマンは、そのために

当時のアメリカ社会から非難を浴びせられた。彼は生存中は自分の男色趣味を否定しつづけた。しかし、彼はエマソンが半日がかりで忠告したが、セックスポエムの出版は止めなかつた。ここに、J・A・サイモンズという学識の深い才人がいた。彼は男色の肯定者であり、ギリシヤの衆道についても多くの論文を書いている。彼は、ホイットマンに宛ててイギリスから手紙を出した。貴方のこれこれの詩はこういう性的な意味のことを歌っているのではないでしょうか？ なぜなら、云々と、その手紙は長々と学のあることを示し、ウンチクを傾けて解明してあつた。しかも、非常に礼儀正しい敬意に満ちたものであつた。

ホイットマンは弱つた。弱つたが、おそらくアメリカの偽善者どもが作りだした世論を慮つてか、「そうではありません」一点張りの返事を送つた。ところが、サイモンズ先生、そのくらしいでは閉口たれない。また確証を挙げ、東西の文献を引用し、丁重だがマトに当つている質問の手紙を出す。また否定してくる。また出す。ノオと言う。これを、サイモンズは約十年間、ホイットマンが死ぬまで続けた。ホイットマンも、あのイギリスのサイモンズという男にはほとほと困つた、と言つたと伝えられている。今日では、『草の葉』の詩人が、男色家であつたことは世界の定説だが、サイモンズのような面白い人もいたことを紹介しておく。ところで、前にも述べた『千夜一夜』のバートンも、青い



ボタンをかけたお猿青袖のゴンドラの船頭と気まぐれをやらかすに客かではなかつたらしい。

ヴェルレエヌはランボオを射つて投獄されたが、ワイルバはクインスベリイ侯爵の息子と恋愛し、その他のロンドンの蔭間と交渉があつた科で投獄されたのだつた。つまり男色は違法だつたワケだ。

今日のアメリカ合衆国でも男色は重罪視された観念で取扱われている。そのくせ、都会を中心として相当に多くの愛好者がいるらしい。戦後、とくに増した傾向だという。これは、どの国でも同じことで、軍隊生活中に男色愛好者になつた者が多いからだ。

対日平和條約が締結される前、たしか昭和二十一年頃だつたと思うが



日本占領米軍当局が、日本では男色の悪徒が盛んになつてきたから之を除去せねばならない、というよう談話が何か発表したことがある。

そのころ、占領軍の一米兵が、東京上野附近で女装の男娼を買い（女だと信じて）、いよいよとなつて男だとわかつて、「サギだ」と警察へ訴え出したこともあつた。さいきんでは、米軍属のジェームス・ピアーズ君という御仁が、芝の増上寺の前で女装の男娼に刺された事件があ

つた。「ひどいよ、ひどいよ、女だと思つたら男だつた」

と片言の日本語で苦しい息の下から怨み言を言つたと新聞は報じている。

こうしたことは、彼らアメリカ人の青年が、男娼について余り知識がないことを示すが、おそらく、こうした連中は田舎者なのではあるまいか。米軍は、男色を禁止し嚴罰を加えると言われている。それでも、わざわざ日本の男娼を求める者があちよいちよいいたり、銀座あたりの男娼の巢の常連もあるというからには、やはり軍当局が心配するだけの事実があるものと考えてよからう。

アラビヤ人などセム族やハム族系の人種はさにおいて、どうもラテン系の人種に男色が多いらしい、ラテンアメリカ、つまり南米は昔から非常に盛んだと言われている。一昔前のリオデジャネイロの紅燈街には、オカマとバイバクが



付きものと言われたものだ。だからラテン族の老家であるイタリヤではそれこそ青袖のゴンドラの船頭が、古代ローマの風を真似るのは仕方ないところである。ゴンドラの美しい青年船頭には、男色者も多いが、旅の婦人客に媚を売る男のパン助も多い。

スペインの闘牛師も似たようなものである。キャバレーで踊る美青年もそうだ。映画『キリマンジエロの雪』で、青年ダンサーを人妻が買うシーンがある。同じように、彼らは男の客にも買われる。

フランス人は、人間の快楽は個人の責任において大抵のことは是認する民族で、花弁切り、つまりソドミイは相当に行われている。この花弁切りという言葉は、日本の「菊の花」とか「菊座」とかに比較して面白い言葉である。モンマルトンあたりに巢喰っているヤクザで男色専門の連中がいる。もちろん、にやけた女性型の男で受身の役をするほうだが、これが、その情婦にはなかなかもつてサジストになるから奇妙である。

デュラーさんは、今次大戦に従軍した電気器具屋さんだったが、兵隊

生活中彼は下士官だつたふと覚えた花仙の味が病みつきになり、若い兵士と遊ぶほうが、そこらの汚らしい慰安婦と戯れるよりずっと清潔だと思ふようになった。

戦争が終つた。彼は、幸福にも負傷もせず復員した。

彼の家はベルギーとの国境に接した小さな町にあつて、早くからアメリカ軍が占領していたので、だいたいの昔のままだった。妻も二人の子供も無事だった。

だが、そのほかは戦前の面影はなかった。すぐ眼と鼻の先にある国境の向うベルギー側では、豊富とは言えないが大抵の物、とくに食糧があつた。こちらは、ドイツであるばかりに、それこそ黒パン一つが貴重な有様。

デュラーさんは、国境を密かに往復するヤミ屋になつた、詳しいことは省いて、彼は、ベルギー側の食糧やお菓子のヤミ屋だつた当時十八歳のフリックス君と気脈を通ずるようになり、すぐにホモセクシュアルな恋仲になつてしまった。

今年四十歳になるドイツ男のベルギー青年にたいする愛情は深刻だった。多感な青年は我儘を言ひだした。勝手な真似をした。彼は両刀を使つた。デュラーさんは、ひどい嫉妬をした。が、青年がどんな女と巫山戯ても平気だった。ところがちよつと狎れ狎れしく誰か男性と、しかも年上の男と立話をして、狂気のように妬いた。

とうとう、フリックス君は、デュラーさんの奥さんとねんごろになつてしまった。

いや、それは、むしろ、デュラーさんが、恋人を他の男にとられまいとして、自然に妻を押しつけた形だった。

あるとき、ベルギー側で、フリックス君が酒場のマスターと冗談を言つて話していた。

その前、デュラーさんは、約一カ月、どうしても青年と会えなかつた。彼はその原因を青年の恋がさめたものと曲解していた。だからやつとその姿を見たとき、他の男と楽しそうに話をしてる姿を見たとき、前後を忘れて逆上してしまつた。

デュラーさんはフリックス君を刺した。結果、青年は死にはしなかつたが、デュラーさんのヤミ商賣がバレてしまつた。

こんな話は無数にある。外国人も、ふつうの男女の恋愛より同性愛のほうが深刻であり熱烈であるようだ。

女と男との愛情なんて小さな浅薄なもの、男と男との愛情こそ恋愛の至高のかたちであるかどうか？ ボオドレエルはいみじくも言う、知的な女を愛することは一種のペデラスティである。……と。

×

×

×

×

×

×

獸 姦 記

……のそれは、非常に吸引力があり、括約力が強いからだとされている。

……或る浮浪者が、共同便所に犬を連れこんで……

納 田 千 之



獸 姦 禮 讃

獸姦は相手が小動物である場合は、動物虐待ということになるが小動物でなければ罪業だとは言えない。

それは、性慾衝動の病的錯乱の中で一番害のない形式だからだ。

だが、これはただ一見、如何にも恐るべき厭うべきものだというので犯罪と見做されているだけの事である。

そして又、この獸姦を行うのは、内気な者が非常に多い。もちろん、変質者も亦性的衝動を普通の方法で満足するチャンスのない者も行すが、この変質者も必ず内気な変質者であり、チャンスのない者は内気な爲にチャンスを作り得ない者の場合が多いのだ。

仲間はずれにされ、女には馬鹿にされ只自

分を相手にしてくれるのは、いつも可愛がつて
いる犬だけだ。

世の中の人間共より、女より、どれ程犬の方
かいゝか知れない——というのでその犬に慰め
て貰う結果になるのだ。

このような獸姦者は、まさに「可憐なる悪魔」
の呼び名にふさわしいものだ。

ところが、或る独身の馬子が、山道で性昂奮
に耐えかねて、自分の牝馬を侵した。すると翌
日、その同じ場所に差しかゝると、馬が尻を向
けて動かなかつたと言う話、あひるを姦したと
ころ、味をしめた、あひるが、その男の姿を見
るたびに追つかけて来るので、大いに困つたと
いう話や、旧日本軍の兵隊が、山羊を姦し、何
くわぬ顔で、いかめしい上官の号令で整列して
いる処へ、メエ、メエと如何にもいとしそうに
山羊がその兵隊の彼氏の処へやつて来たという
実話があるが、これ等は姦す時の審美感、その
風景等は別として、その後日物語はにく気のな
い滑稽そのものである。

それは四足の動物は、嗅覚や視覚で、人間様
の男女さえ識別出来るからだ。その上馬子と馬
の場合のように非常に性的興奮を受けやすいも
のなのだ。

又、女性の月経時等は性的に非常な興奮を彼
等を感じるといわれている。

こうなると、只単にオナニーの代替物とし動
物を虐待した、けしからぬ行爲だと人間の立場
からばかりは言えなくなる。

四足の動物ではなくて相手は蛇だが蛇と情を通じていた娘が蛇と別れて狂気になった。という記事が昭和二年三月三日の都新聞に掲載されていた。

私はその記事をスクラップしてあるから次にそれを紹介しよう。

下の関市中町蛇商山田大助の長女花子(二三) 仮名は家業を手伝っているうちに、二匹の小さな蛇を可愛がつて夜は寝床に入れていたが此程二匹が前後して死んだので花子は裏山に手厚く葬つたが、それから精神に異状を呈し、裏山に登つて死んだ蛇を持ち帰り、抱いて寝ていたのを二度までも両親が発見し、心配して同市田中町陸軍火薬庫附近に蛇を埋めてしまった。

それ以来花子は家出して行方不明になったので八方捜査中のところ、同火薬庫の蛇を埋めた所に座っているのを発見し、直ちに連れ帰つたが、花子と蛇とは性的関係があつたと言われている。(下関電話)

蛇と女性との伝説は、世界共通で数多くあるが、それ等は皆蛇がその形状から男性性器のシンボルとされ又、強精と好色のシンボルとされている処から、蛇となつて、愛する女の性器へ這い込みたいと切望する男性共の願いと、本能が、でつち上げたものとされているがこれとも一方的な結論ではないだろうか。

獣姦の對照になる動物

さて、獣姦礼讃は程々にしておくことにしよう、余りに礼讃が過ぎると、疑念を持たれる恐れがあるからだ。

私がこゝで疑念の文字を使い、誤解の文字を使用しない理由は、私も亦獣姦の経験なしと言ひ切れないからだ。

現在では、性慾解決のチャンスがないので獣姦するのではなく、獣姦するチャンスがないので獣姦出来ないでいる訳だ。

余談はさておき、獣姦の對照になる動物は、犬、猫、羊、山羊、狐、鶏、鷺鳥、牛、馬、ろ馬、猿、狸々、蛇等と言われている。

昔、ギリシヤの羊飼は自分の羊を犯かす習しがあつたと言われている。

ギリシヤのクリート島の王ミノスの后パシファエは白牡牛を愛した余り、青銅の牡牛像を作りその中に身をひそめて、その牡牛と交つて、顔が牛で身体が人間のミノトールを生んだというが、仲々大がかりな世界一の獣姦である。そして、牛首人身の怪物まで産んでいる処は、「子を取る氣山師している犬の××」

の古川柳のように犬首人体でもよし人首犬体でもよし、見せ物にして一儲け出来るネタ欲しさに犬を姦したと言う涙ぐましいまでに商魂たくましい山師には垂涎万丈のものに違いない。

エジプトのメンデスの婦人は不妊症を治すために神廟に飼われている聖なる山羊と交際した。

この場合の獣姦は迷信による獣姦だがペルシ

ヤの獣姦はコーランの教義なのだ。

その教義は

「見よ、おゝ汝等のコーランの示す教義を信ずる者達し、こゝにわれの語らうとするものは――」にはじまつて、大きな胴体の獸類すなわち、牝山羊、牝驢馬等との獣姦は許されると言うのである。

だがそれは、純良な医学上の範囲にのみ限られるもので、平凡な治療や好奇的療養の爲のものには許されない、そしてそれは、必ず女性の獸類に対して丈許されるもので、淋病、梅毒、陰莖の極度に炎症した場合にのみ限られているのだ。

潰瘍、下疳、傷痛などの者はこの獣姦は許されない。

この獣姦は相手の獸に病毒を感染させないで、しかも人間の男性は自分の病毒を根治することが出来る、それは、その病毒が牝獸の陰内でその高熱と分泌する非常に強い酸性の精液と合して、たちまち全滅するからだという教義だ。

そして、病気が治れば、たとえどの様に情がうつらうと、人間を相手にした時以上に楽しいものであつたにしても、もう絶対に獣姦してはならないのだ。

それはコーランの教義にそむく事になるからだという。

我国でも赤犬を姦すれば淋疾が根治するといふ迷信がある。

これは牝犬のそれは非常に吸引力と括約力が強い処から出た事だとされている。

或る浮浪者が共同便所に犬を連れ込んで獸姦中を發見され取調べの係官に、淋疾に悩んで居るが、治療するにも

金はなし、この外に病気を治す方法がないのでやつた事なので何卒御目こぼしをというので調べて見ると淋疾でも何でもなかつたので大目玉をくわされたというのがあつたが、これ等はさしずめ迷信悪用の詐称獸姦である。

イスラエルの女性は神牛と交つたと言われるがこれは、自分のあがめる神聖なものに総てを捧げるという崇教的獸姦である。

中国では漢時代に宮女を犬に犯させてこれを見物して楽しんだ皇帝があり、日本紀には武烈帝が宮女と馬を交らせて楽しんだとあるが、これ等はサヂストの悦虐の具にされた獸姦で、邪道の獸姦である。淨瑠璃の「芦屋道満大内鑑」の葛の葉の狐との交接や、伏姫と牡犬八房との八大伝等とは全く別物の獸姦である。



南イタリア、シシリアでは羊飼や農民の間で獸姦は民族的風習になつて居る。

ローマカトリックの或る寺院では、院内に牝動物を飼うことが禁ぜられているが、これはお

そらく獸姦が行われる事実を裏付けするものであらう。

パリーの上流社会の女性はブルドッグと交接するものがある云う。

日本でも未亡人や、お妾さんが独り寝のさみしさからチンと関係する話がある。

女性の相手は不思議に犬が非常に多い。

昭和の始め頃だつたか、東京の龜井戸の私娼窟で、秋田犬と交接するのを客に見せて商売している女がいた。

秘密映画にも女性と犬とのそれがあり、現在でも女性と犬との見せもの、いわゆるシロ・ワンがあるということだ。

イルカ・女郎グモ・鶴

男ばかりの貨物船などで、海女郎イルカを生けどると船員はクジで順番をきめて、イルカのお世話になる。

このイルカの性器は人間のそれに似て居り、体温も亦同じだということである。

そして役済みになつたイルカは船員達に御礼を言われて海へ返されるのだ。

船員達は決してイルカは生け取りのまゝにはしないということだ。

又赤いもその対象になると言われている。

狐、狸は直接獸姦の場合もあるが、これが化けると妖婚ということになる。

女の姿に化け、男の姿に化けて人間と交る伝説も数多い。

妖婚の相手は狐、狸、むじな、蛇、猫があるが変つた処では女郎ぐもがある。

これは女郎ぐもが老母を救つて貰つた恩返しにオハチと言う名の娘になつて青年直次と結婚するが、覗いてはいけなと言われている機室をのぞくと、そこに恐ろしい姿をした女郎ぐもが八本の足で八つのお櫃の飯をすくい上げながら、食べては糸をはき、糸を吐いては食べている醜惡な光景を見てしまう。

妻は正体を見られて織つた反物を遺して去つてしまう。

夫直次がこの反物を売つて大金持になると言う話だ。

この女郎ぐもが鶴になつて居る話もある。

—おわり—

×

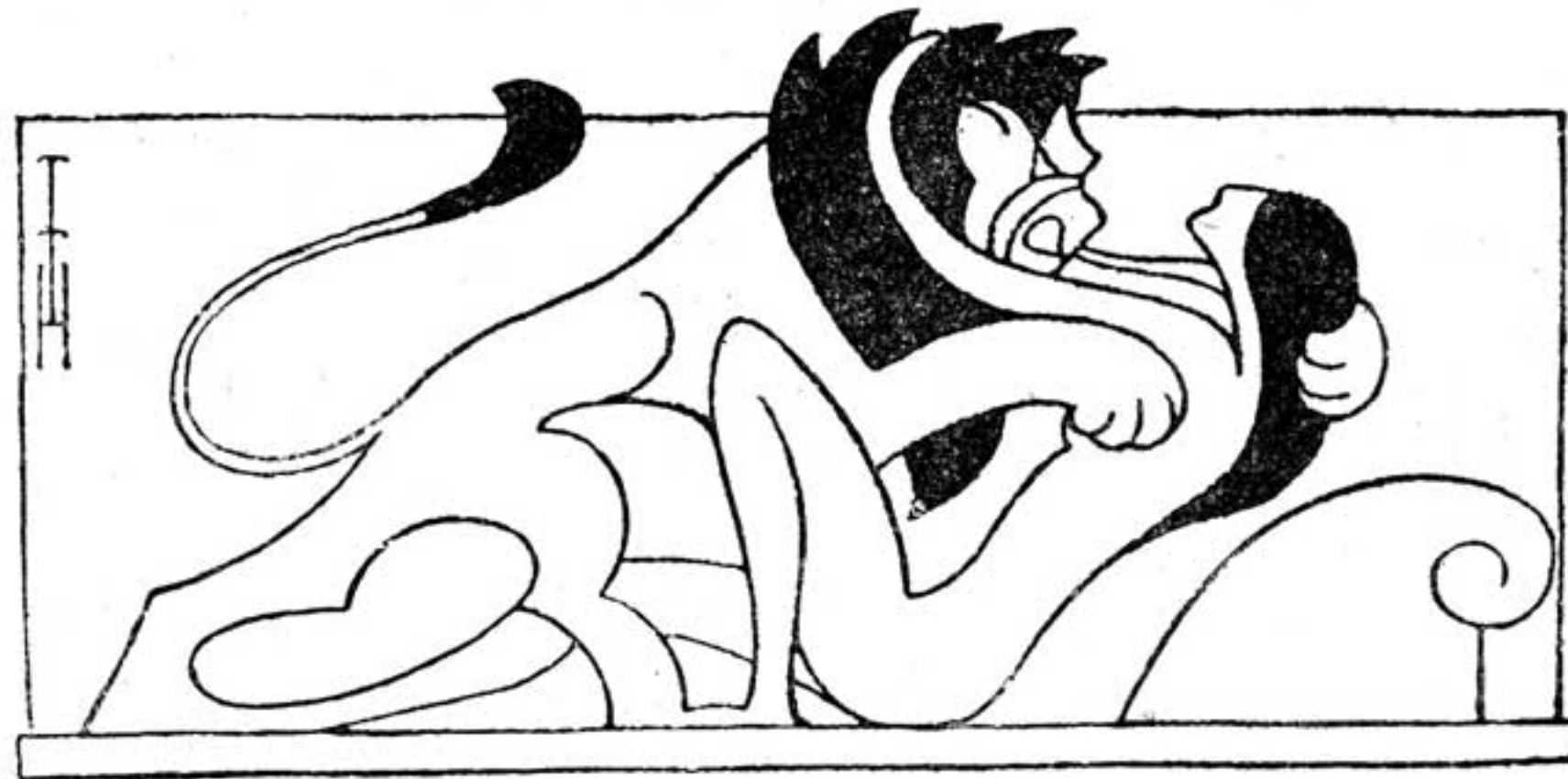
×

×

変態迷信諸国

めぐり

……そこで昔は自分の妻をまもる目的で、父は自分の息子を去勢した。だが人間の親としての愛情に目醒めて来るようになると、息子の性器を切り取るような殘忍な行爲を敢行するにしのびなくなり、單に差しつかえのない包皮だけを除去する割禮の行爲となつた。



近 藤 欣 也

包莖切りとり、クリトリス 切りとりのサヂ的迷信

空想と性現象との葛藤から誕生した性に関する迷信は枚挙に遑がないといつていゝ程沢山で、全く驚くの外はない。

その中から変態的迷信で興味のあるものを選び出して見ることにしよう。

× × ×

まず変態的迷信で非常に大がかりなものは、太古から全世界のあちこちで行なわれて来た、包莖の包皮の切りとり、クリトリスの先端切りとりの盛大な儀式「割禮」があげられるだらう。

この割禮は悪魔よけの迷信で地球上の全人類の七分の一がこの礼を受けたもので、全世界に散在するユダヤ人の外に回々教徒も行つていた。

そこで、この割禮は北アフリカ全体、バルカン半島の一部、小アジア、イラン、トルキスタン、印度の一部、マレー群島にも行われていたことになる。その外西アフリカ、東アフリカ、オーストラリア、散在的にはメキシコ、南アメリカでも行われた。

その方法はまちまちだが、最も広範囲に行われていた方法は、單純な環狀切開で、包皮の一部を切りとるか、或はコ罗纳・グランデイスまで切りとるものだった。

南オーストラリアの諸民族ではペニスの下部に

切開を加えて尿道にまでも及ばせていたものもある。

その切開の道具は、石メス、貝殻、竹などが使用されていたが、後には鉄製の器具が用いられるようになった。

この割礼の儀式を行う年令は各民族によつて一定していない、三、四歳のものもあれば四五歳のものもあるが、割礼を成年の式として思春期になつて行く民族が多かつたようである。

ニグロもやはり思春期の男女に割礼を行つていた。

男は大体十四歳から十九歳までの間に、女は男よりも幾分早目に行はれた。

その様式も部落部落で多少異つてはいるが、女の割礼には定つた期日というものがなくいつでも、両親や未来の夫の都合のいい日を選んで行われていた。が男の割礼は四年半毎に行われることになつていて、その期日はずつと前から定められていて、大勢の男達と一緒に割礼をうけたのである。

そして、男も女もこの割礼を受けないものは、永久に結婚出来ないことになつていたので、年頃になると青年男女はこれを待ちこがれていた。

男になる式に女装して参加する

割礼の前日になると夕方から大勢の人々が集まつて来て大舞踏会が演ぜられる。男の場合はこの大舞踏会に、女と割礼のすんでいない未成年

年者は一切参加することが出来ない。

服装にも一定の規則があつて、この日は特にあでやかに化粧をこらして、割礼を受ける男達はこの日は特に女装しなければならぬのだ。

男達は知りあいの女達から耳飾りや、首輪胸飾り等を借り集めてグロテスクな身仕度をする。

そして舞踏会の夜があけると、いよいよ割礼の当日で、男達はその朝早く河へ行つて包皮を引きのばしてよく洗つて、森の中の式場で、たき火をして集つて大勢の老人や成人達の処へ行くのである。

すると、その中の一人の老人が立ち上つて男達の一人一人に今までに女と関係があつたかどうかを聞いたのである。

この質問の間は一座に異常な緊張がみなぎる、それはこの質問の際に往々有夫の女がその男と不義をしたことが明らかになるからで、不義が明白となつた女は当然ひどい折檻を受けるか、ぶち殺されてしまうからである。

さて、たき火の中では、ノミに似た細い鉄棒がまづかに焼かれている、主長はおもむろにその灼熱した鉄棒をとり上げて、男の包莖を焼き切るのである。

その傷口へは牛の脂が塗りつけられる。

手術中に泣いたり、叫び声をあげたりすることとは堅く禁じられている。万一我慢出来ずに声をあげたりすると、男になる資格のない者として、即座に槍で突き殺されてしまうのである。

手術がすむと男達は「少年小屋」とよばれる特設の離れ小屋に引きあげて、そこで三ヶ月、或は六ヶ月傷のなをるまで他人との交渉を絶つて引きこもるのである。

この期間中は女の姿を見たり、話をする等が厳禁されている。もし傷のなをらぬうちに女に逢つたりすると、その男のペニスはいよいよ腐り落ちてしまふと信じられていたからだ。

傷がなおつて小屋を引き上げる時も又大舞踏会が開かれ、これがすむといよいよ一人前の男となつて彼等は待望の妻選びをはじめるのである。

× × ×

女の場合も男の場合と同様に大舞踏会が開かれ、きらびやかに着飾るのである。

手術の前に、先ず処女か非処女かの検査が大勢の前で行われる。

処女であることがわかると、女の父親はそれを最大の誇りとして人々に大ふるまいをするのである。

そして陰毛を焼きとり、クリトリスの先端を焼き切つて式は終るのである。

手術後離れ小屋に引籠つて謹慎する事も男の場合と同様で、この期間中は大きな三角形の革頭巾をかぶつて、他人に見られないようにしているのである。

腕には藁や皮で作つた奇妙な腕輪をはめ、手には嫩枝を二三本束ねて作つた棒を持つのである。

話は小声でしなければならぬし、他人に呼びかける時は声を出してはいけぬので棒で相手の着物をたいて合図をしなければならぬ。

食物も、其の他の器具もぢかに手で持つことを禁じられているので、棒でつかみ上げなければならぬとされている。

隔離生活が終つた時に大舞踏会をすることも男の場合と同様である。

骨肉相妾抑制の迷信

この様なサジ的迷信がどうして行われていたかはなかく、むずかしい問題で、一面では、性慾の促進と性器の美化のためだとされているが、精神分析の面から見られた「息子去勢する」意味で行われたものだとその解釈がその本来のものであるとされている。

それは、骨肉相妾を抑止し、或は罰するために行う去勢と同じ意味で、息子は自分の母を姦するかも知れぬ、自分の妻を息子によつて姦される事は父として我慢のならぬことである。

父となつた男の心の中には無意識的な復讐恐怖がある。彼の心の中には自分の親に対して抱いた近親姦的発情慾への無意識回顧がなを生きている。

そして、自分自身の息子によつて、この慾望が実現されて自分を悩ませはしないかと怖れるのである。

そこで昔は自分の妻をまもる目的で父は自分

の息子を去勢した。だが人間の親としての愛情に目醒めて来るようになると、息子の性器を切り取るような残忍な行爲を敢行するにしのびなくなり、息子を去勢する行爲は象徴的、形式的となり、單に差しつかえない包皮だけを除去する割礼の行爲となつたというのである。

が又切り取られた包皮の埋葬形式が「子殺し」の処理と同じ点から、去勢のシンボルではなく、人体全部を殺す「子殺し」のシンボルだと言う解釈もある。

それは切り取つた包皮を砂を盛つたツボに受け取り、又は包皮をトートムの樹、トートムの岩等に大切に保管するのはすべて埋葬を意味するものである。

父親が包皮をバナナと一緒に食べてしまふ又、バナナの葉に包んで轆に食べさせてしまふのはとにかく、母がこれを食べてしまふのは、息子が死んで再び母の胎内に帰る意味でいづれも包皮を屍体と同一視しているからだといふのである。

睪丸切りのサジ的迷信

睪丸切りの迷信は、南洋にも阿佛利加にもある迷信で成熟期に達した男は睪丸を片一方だけ必ず除去しなければならないと言ふのである。

南アフリカのホツテントツト族の男は、成人の仲間入りをする前に、必ず左の睪丸を除去しなければならぬ。

これは睪丸が二つあると双児が生れるからだ

とされている。

万一双児が産れると、このホツテントツト族では、直ぐさまこの双生児を瓶の中に入れて、河の岸に生き埋めにしてしまふのである。

そして、法術士を呼んで来て、二度と再びこのような不祥事が起らないように頼むのである。

すると、法術士は、恰度疫病患者の家におはらいをするように、一切の衣服をことごとく没收して、家の正面からの出入りを禁じるのである。

その代り家の裏に出入口を作つて、出入りはそこからするように強制されるのである。

この双生児に關しての迷信は、野蠻、未開文明人間にこれ又沢山ある。

例えば独逸の農民の間では、若し双生児が生れれば、産んだ女は「妊娠中に二股大根を食つたからだ」と、さんざ悪口を言われる。

日本でも、男女の双生児を生むと、畜生腹だと非難されたものである。

性器手術の私刑的迷信

又、スマトラのバタック人の間で行われているものはペニスの皮膚を切開して、皮膚の下へ、小石や、貝殻を挿入して悪魔よけの迷信としていた。

この手術は傷の治るのを早めるために流れの中で行われた。

挿入するものとしてはトバ湖産の貝殻が最もよく用いられていたが、ブルジョワは金や銀の

小塊を用いた。

そして各人のペニスにこうした挿入物が螺旋状に沢山はめ込まれていたということである。

又鼻や、口唇、耳な

どにつくつた穴に棒や輪を通しておくようにペニスにも穴をあけ、それに棒を通していった。

ボルネオでは数日間ペニスを冷罨法しながら竹べらでペニスを平たく圧しつぶしておいて、尿道の上方に側方から竹針を通して穴を開け、その穴には油を塗って鳩の羽を通していった。

この鳩の羽は、労働や旅行の時は差しておくので、交接の前になると金属の棒の一端に小さな球の束のついたものを鳩の羽の代りに通した。

鞭で打たれて

始めて花嫁に

これは処女の破爪血を恐るべき悪魔として花



嫁の肉体からこの悪魔を叩き出さねば結婚出来ないという迷信から、花嫁は裸になつて坊さんから山羊皮の革紐で鞭打たれなければならなかつた。

つた。

鞭で打たれることは未開人の成年式にも行われた事で、これ等は皆体内から悪魔を追い出すために行われたことである。

ところが、鞭打ちでは悪魔即ち破爪血を追い出せないというので、結婚前に人工破爪を行つたり、又僧侶や酋長に破爪して貰つていた。

カムチャツカでも処女のまま結婚することは悪害をもつたまゝ結婚することだというので、それを恥として娘の母親が指で局

部をひろげ又破爪していた。

南米のインデアンも同様で、人工破爪に用いた道具は小枝を用いていた。

又燧石の破片を用いる地方もあつた。

印度では神像のファロスで破爪した。ローマでも同じく花嫁は男性受胎の神像のファロスの上に座らねばならなかつた。

× × ×

この外悪霊、悪魔追い出しの迷信から女が成年式の時に頭の毛を焼き、又は丸坊主にそり落してしまい、前歯を折つたり、黒く染めたりした。

又鼻、耳、口唇、頬等に穴をあけたり、入づみをせねばならなかつたり、身体中に傷をつけその傷あとを悪魔が追い出された証拠とした等この種の変態迷信は数多く又、全世界広範囲に行われていたものである。

月経の拷問的迷信

月経についての迷信には拷問的なものが非常に多いのが特徴である。それはこの奇異に見える現象に人間達がどんなに、その現象を恐れ、如何にして人力でその現象を征服しようとしたかが窺見るに充分なものである。

濠洲の土人の女は、初経を見ると祝の印？

として極めて残酷な手術を受けたものである。

これは「チリンチリ」と言つて、初経を見た女の歯を二本だけ打ちこわすのである。

そして、その女は三日間誰にも、その背中を見せてはならないのである。

だから女は二本の歯を打ちこわされて三日間動きもならず背を壁や床につけて他人に見られ

ないようにしていなければならなかつたのだ。
 もしも、この禁を犯して、他人に背を見せると、その女の口は塞つてしまつて、餓死してしまふと言ふのである。

又、打ちこわした二本の齒は駝鳥の羽でつくつた箱の中に入れておかねばならない。そうしておかないと、大きな二本の齒がその女の頭の中に生えて来て、女は死んでしまふと言ふのである。

ベーリング海峡附近に住んでいたコルユージュ族の娘は、初経があると高さ六尺から八尺の格子をはめた籠の中に一年間も押しこめられるのである。

南洋のニューブリタニア島の土人の女は五年間以上も寂しい森の中に閉じこめられてしまふのである。

全く以つて「私刑」「拷問」である。

このように、この奇異と見られた現象は恐怖であり怪異であつて、決して女子の生殖機能の成熟を示した喜ぶべき現象だとは解釈されなかつたのである。

そして、只月経期の女を見るだけでさえ、剃刀は錆びてしまい、妊娠した牝牛は早産してしまい、その血をなめた犬は発狂し、その女が木の下に座れば、その木の実が腐れて落ちてしまい、接木は枯れてしまふとされていたのである。

現在でも伊太利では月経中の女が歩いた野原の草は全部枯れてしまつて二度と生えないとい

う迷信が行われている地方がある。

戀の異嗜症的迷信

居守の黒焼恋の妙薬として有難がつていたのは日本人だが、これに類似した迷信は古今東西



物も日本の居守の黒焼と同じ効果のあるものとされていたのである。
 中央ヨーロッパでも今なを此の種の迷信が盛んに行われている。

独逸のスプレーワルドの運河の青年船頭は、つれない恋人の心をとらえる妙薬として蛙の足を後生大事にしているのである。

この蛙の足というのは、先ず一匹の蛙をつかまえて、それを蟻の巣の中に埋め、一二時間たつて一本の足だけをもぎとつたものでなければ効きめがないのである。

そして、その足を、思う女と握手する時に手早く握らせると大願成就、うたがいなしと

いうのである。

ところが、同じく、独逸のシュワーベン若い農夫になると、仲々念の入つた方法で妙薬を作つていた。

その方法は、まず壺の中に蛙を入れて、これをそのまゝ蟻の巣の中に埋めて置いて、一年後にこれを掘り出すのである。

すると蛙の身は蟻に喰われて骨ばかりになつ

何処の国にも例外なしにあるのである。

愛人の血一滴と、龍骨木を溶いた汁と新らしく生れた馬の額の上に出来た、無花果の実位の大きさの皮膚を焼いて粉にしたものが最大の恋の妙薬とされていた等はまさに異嗜症的迷信の最たるものである。

又、アスパラガス、蝦の尾、魚の卵、葡萄の汁、イヨープの舌（空想的な鳥）をまぜた飲み

ている、そこでその足の骨だけをとつて、これを相手の女に触れるとすべての目的が達せられるというのである。

同じく東部のザムランドの獵師は、鼻をつかまえて、夜中に料理し、其の頭の中から、熊手とシヤベルに似た形の骨を二本引き出して、他の部分は家の庭の下に埋めてしまう。

この熊手に似た骨で女に触れると其の女を手に入れることが出来るし、又厭になれば、シヤベルに似た骨で触れると別れる事が出来るという誠に便利な迷信である。

一方女の方は蝙蝠の爪を持つていて、この爪で引張られると男はどうしてもその女から逃げられないとされていた。

伊太利のクラブリアの女は喫煙草の箱の中に、葡萄酒に浸した蜥蜴の体を干して粉にしたものを入れておいて、これを相手の男にふりかけると、その男はその女を愛せずには居られなくなるというのがあるが、これは全く我国の居守の黒焼と同じである。

一般にヨーロッパでの恋の妙薬として賞用されているのは、月桂樹の枝、雀の脳、蟻に食われた蛙の左体部の骨、驢馬、馬、雞の卵丸、又は経血である。がしかし何と言つても蛙が恋愛の媒介物となつている場合が多い。

これは蛙が子宮のシムボルであるということから来ていると言われている。

それは、子宮は女の体内に宿つてゐる生きた動物で、その動物は蛙だという民間の迷信から

である。

この迷信は随分古くからあつたもので、子宮に食物を与えなければ怒り狂つて噛み付くと信じられていた。

子宮の食物というのは精子であり妊娠であることは勿論である。

マライ族には「子宮は生きているもので、唯女の体内にだけ住んでいる、これを丈夫にしようと思えば精子を食おせねばならぬ」という嚴とした迷信がある。

又子宮が家出をすれば、これに食物を与える外にいゝ方法がないと言われていた。この食物もやはり精子のことだが、精子の外に空想が生んだ食物がある。

それは、薄荷、牝鹿の角の精分、密肉、荳冠及び猫の脂肪を混ぜて丸薬としたもので之を胡桃の殻の中に入れ、燭台に四本の蠟燭を立て、火をともし、その中央に其の殻をおいて、それを女の臍の上に乗せる。

すると、間もなく子宮は此の光を見て其の家へ帰り、女は漸く気が落ちつくというのである。

蛙が子宮のシンボルとされているものは前にも述べたように子宮が動物であるという觀念から出發したものだが、それを蛙に形取つたもう一つの理由はその形が似ているからだともいわれている。

斜視治療の陰部露出の迷信

女性が陰部を露出すると斜視が治るといふこの迷信は女陰は悪魔や害虫が何ものよりも恐れるものであるから、これを露出すれば彼等はすぐ様退散するという迷信からである。

神社の鳥居はこの迷信がまことしやかに信じられて變化したものだと言われている。

斜視に強くにらまれると火災が起るので、その目を女陰のシンボルである鳥居で受けとめようと考えたものであると言う。

また南米未開民族の家屋の上部には裸の女が股を開いて陰部を露出した美術品が飾りつけてある。

これも悪魔退散の迷信から来たものだといわれている。

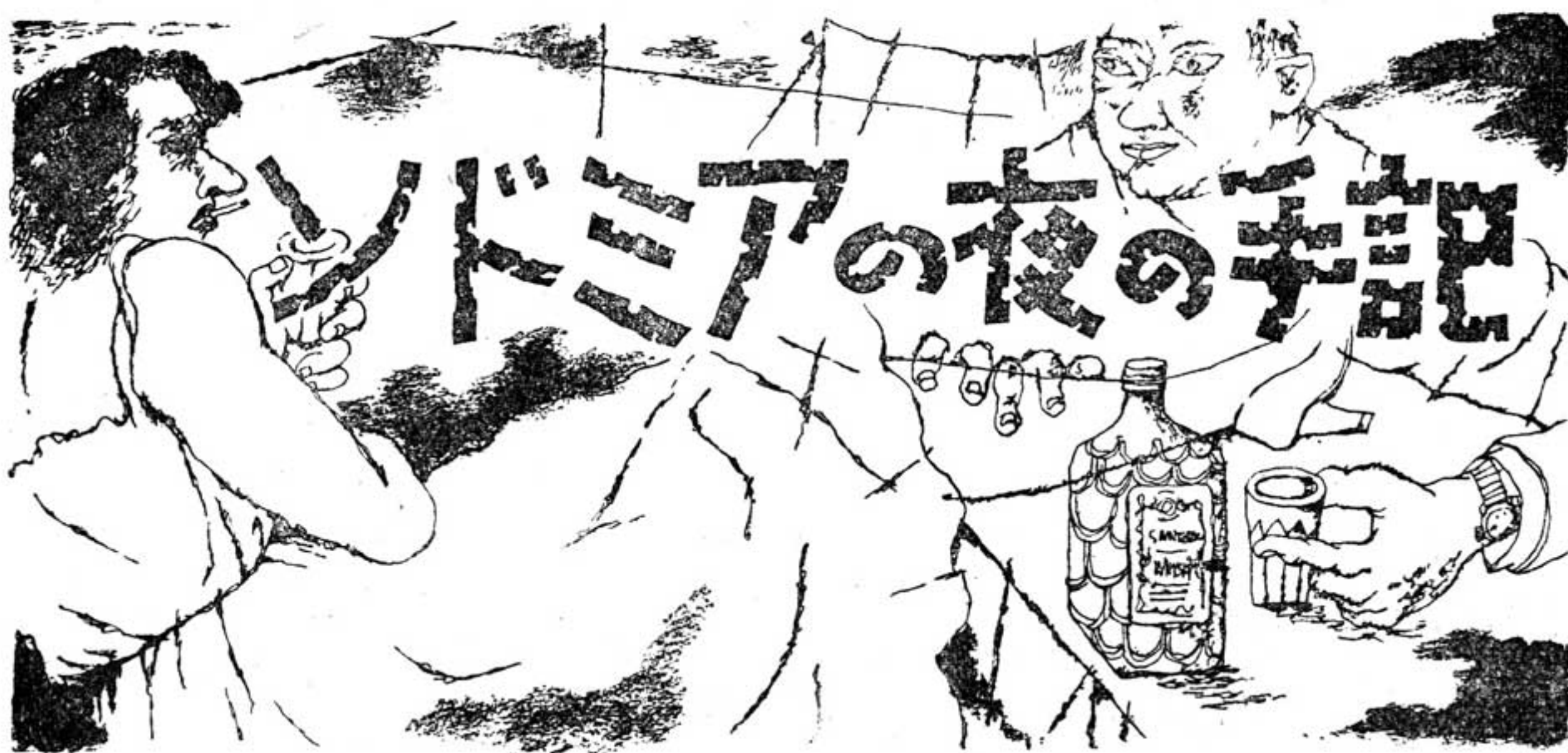
この種の陰部露出の迷信で日本の売春社会で盛んに行われたものに、陰部叩きというのがある。

これは、売春婦が深夜の夜辻で陰部を露出し平手で三回外陰部を叩き、三回手招きするとそのなじみ客が数日中に必ず来るという迷信である。

これ等は、客よせのねずみ泣きと同様、まことしやかに信じ込まれて、今以つて盛んに行われているそうである。

如何に文化が発達してもこの種の迷信は後を断たない。それどころか、文化が発達すればその發達の程度で新しい迷信が生れて来ているのである。

(おわり)



夜の女装男

……ワケ知りの方なら、部屋に落着くと「いゝな、その着物、とてもよく君に似合うよ」などと讃めて下さるのです。御世辭だとは思つてもやつぱり嬉しくつて、胸がドキドキして來ます……

澤本芳男

二重人格という言葉は、私のために作られているような気がします。自分ではその二つが、あまり無理なく、きちんと整理されていると思うのですが、こうして書く段になれば、まったく奇妙なものには違いありません。

私はあるデパートの店員です。自分の時間になるのは普通午後六時、それから一人者のことです。外で食事をすませて、上野の高ちやんの部屋に行きます。高ちやんと云うのは、この道の仲間ではいゝ顔で、商売に似合はず、男気もある人です。

この高ちやんの部屋に、私は衣裳其他、一切を置かせて貰っているのですから、背広のまゝ手ぶらで行けばいゝわけです。しかし、四、五日に一度ぐらいは、高ちやんのパトロンや彼氏などが居合はせて、御睦じい最中と云うことが

あるから、そんな時はまさか部屋にも入れず、外でイラ／＼して、本当に辛い思いをすることがあります。

すぐ近所の風呂に行つてから、鏡台の前で化粧。こんなたのしいことはありません。こればかりは、普通の男が知らない楽しみなのでしよう。私は化粧品はみんな、一流品ばかり使っています、特に匂いのいゝものを――。勿論香水も使いますけれど。これは評判のシヤネル五番と云うのを使っています。

実はこんなものは、一切合切、勤め先の店で割引で買うんです。故郷の妹に送ると云えばいゝんですから……。もちろん、衣裳だつて、足袋、ハンドバッグ、すべてそうです。だから、こんな自慢をするのも妙なものです。上野界限にいる仲間では、私なんぞ、衣裳持物は飛拔

けていゝのではないでしょうか……。本当のバイ人、つまり男娼と云われる人達の殆どが、衣裳など吊し物のセコハンが多いのですから――

可笑しな話ですが、私は勤先のデパートでも閑さえあれば呉服売場をウロ／＼しています。今は結婚シーズンで花嫁衣裳がずい分展示されているんです。絞りと刺繍で、重いようなピンク地の振袖が二十数万円なんて、途方もない正札がついているのを見ると、自然に溜息が出ます。あんな振袖を着て、好きな男の処にお嫁に行くんだつたら、どんなに嬉しいだろうって、そう思うんです。

高ちやんたちと違つて、私には晝の仕事があつて、本当にこの道は道楽兼ヨルバイト。だから頭だけはどうしてもカツラ。これは仕方がないです。どうしても地毛のようににはゆかないんですが、諦めているから、それほど気になりません。

もちろんパンツはとつて腰巻。長襦袢も着物も固い着地は避けて、柔かなものを使うのです。たとえば、お召などはゴワ／＼しているから、私たちが着るとよけいに肩の辺りなど、堅い線が出てダメです。なるべく柔かな錦紗などがいい。

ちやんと衣裳をつけて鏡の前に立つと、毎晩のことながら、やはりゾク／＼するほど嬉しいのです。いくら鏡を見ても、見飽くと云うことはありません。実際、自分の眼には、惚れ／＼

するようないゝ女に見えます。同時に、すべてのしぐさが、自然に女らしくなつて来るのです。

私は祖母つ子で、小さな時から祖母の手で育てられ、その祖母が私をつく／＼見ては「本当に女の子のように可愛い／＼顔をしている」「この子が女の子なら、どんなに美しかる」と云われて、大きくなつたのです。云われる度に、本当に女に生れ／＼ばよかつたと思つたものでした。

よく／＼お客がない時には街にも出ますが、大抵はこの高ちやんの部屋で待つていると、知らせがくるのです。この辺は、軒並小さな呑み屋ばかりですが、ほとんど、私たちとアタリがついているのです。やはり場所柄、一杯気嫌のお客さん方の中には、オカマなるものと一度遊んで見ようか



と、どう気持になる方があるわけです。

もちろん、中には、この道の方が、わざわざそのつもりでいらつしやることもあります。私だつて、この界限に出るようになって、まだ一年足らずですけど、もう御馴染さんがあります。そんな方が呼んで下さると、本当に嬉しいですね。よけいな

氣を使わなくてもいいし、のび／＼遊べます。私は、なんと云つても商売ではなくて、遊びですから。

しかし、バイ人たちは、つまりこの界限の男娼の人たちに悪いから、タダと云うわけにはゆきません。この点、私はとても辛いのですけれど。私はこの他には道楽もなく、扶養家族もないのだから勤先のサラリーだ

けで、充分暮せます。つまり、この道で稼ぐ必要はないのです。それに、好きなお客さんからお金を貰うのは、私はとても嫌なのです。

しかし、これが商売の人たちの手前、私だけ

が金をとらずに客をとるわけにはゆかないのです。まあ仁義です。仲間に入れて貰っている以上、こんな統制を破るとリンチですから……。

でも、お客の中には、私のこともよく理解して下さる方もあるし、始めての方でも、とても好いたらしい方に逢うことがあつて、商売はともたのしいのです。こんなプロの世界に入らず、一人で悶々としてゐる時分には、相手になつてくれる方つて、なかなか見つかるものぢやないし、私は思い切つて本当によかつたと思つてゐるのです。

呑み屋やリntax、其他の仲介さんから紹介されてお客に逢うと、すぐこれも特約している宿屋に行きます。これは気兼ねのない、それで清潔な宿屋を選ぶことが肝心です。お客さん方は殆どの方がとても奇麗好きなんですから……。私もそうですけれど、これは不思議のようで、当り前のことも知れません。

ワケ知りの方なら、部屋に落着くと、

「いゝな、その着物、とてもよく君に似合うよ」

「ルージュの色がいゝね、とてもチャーミングだよ」

など、讚めて下さるのです。御世辞だとは思つても、やつぱり嬉しくつて、胸がドキ／＼して来ます。私にすれば、こんな嬉しいことは他にないのですからね。

私は、お客の要求なさることなら、なんでもします。それは勿論中には意地悪な方や、感じ

の悪い方もあるのですけれど、二人きりで床の中となると、やはり何時の間にか一生懸命になつてしまふのです。私は本当に生れつき、男の人の体にさわつたり、又、さわられたりするのが、好きなんです。

だから、お尺でもバックでも、お客のいゝなりです。殊に無骨なお客さんから、手荒にあつかわれるのが、とても嬉しいのです。こちらもつい夢中でサービスしてしまいます。

本当のプロのように、一晩に幾人も客をとるわけではないし、こつちの道楽が先なんですけれど、こちらが夢中になると、先方にもそれが何よりのサービスになるし、本当に喜んでもら

えるのです。

そんな中でも、特別に好きな人もいて、その人となら私も同棲してもいゝと思つてゐるのですが、皮肉なことに、そんな人に限つて奥さんがいるんです。めつたにないことですが、その人が家庭の話をちよつと口にした時、私は口惜しくてカツとなつて、その人の口に咬みついたことがあるのです。

それから、悩みと云えば、何時までこんな生活が続けられるか、と云うことですけれど、考えたつて仕方がないことですから……。それより、美容や流行の本でも読んでた方が、陽気といゝのです。

愛慾通信

……君はまつたく、見けよりか、ずつと體が締つて見事だつた。恥らいながら、前をかくして立つた君の姿を、僕は今でも夢のように思出すよ。幸ちゃん！君はあの時、震えていたね。

檜原幸彦

とかくの世評はあるけれど、三島由紀夫氏の「禁色」「秘楽」は僕たちにとつて、バイブルに等しい。

勿論、あれはあまりに安易に問題の焦点から脱出しているし、僕たちの悩みを何一つ解決してはくれないのだが、確かに一つの慰めとはな

るからだ。

僕には愛人がいる。映画館で知合いになった

Tさん。たま／＼上京していた、岡山の若い本屋の主人で、今でもずつと文通している。

肉体的に接触したのは三度。もう一人は都内のHさんと云う中老の人。こ

の人はとても用心深く、身分をひたがくしにしている、僕

から連絡する手紙なども全部局止めなのだ。それだけに何

処か冷めたい処もあつて、打解け合うと云うほどには、精

神的な交流はない。

僕自身の気持から云えば、

こんなHさんとの交際は断絶すべきだと思ふのだが、今の

ところ他に相手もない寂しさもあつて、やはり約束の日が

くれば、僕は自然に出かけてゆく。純粹に考えれば、愛情

のない交りは唾棄すべきなのだ、やはり言葉通りにはゆ

かない、何かが存在するのだ。

精神的な結びつきはなくとも、肉体を透した何かなのだ。テクニク？ 肉体的親愛感？

岡山のTさんとの文通の一部を紹介する。或は彼も誌上でこれを読むかもしれないのだが、許してくれると思う。



「あの時の、幸ちゃんの初々しい裸体を見た時の異常な感激と昂奮！ 幸ちゃん、僕は実際戦慄したよ。初心な君を、あまり驚かすまいと思つて、僕はつい自制したのだが、やはり君は吃驚してしまつたようだね。しかし、君の羞恥

と困惑は一層僕の欲情をそゝつたのだ。

まつたく、僕は遠い昔から、美しい青年を、あんな風にして眺めたいと、思いつめて来たのだからね。のぼせてしまつて、自分でもつい夢中になつてしまつたのだ。

だつてそうだろう？ 下らない女の、ブヨブ

ヨした汚い裸のヌード写真なんぞ、嫌になるほど巷に氾濫しているけど、同性の、それも君のように美しい青年の、あんなに美しい、清潔な裸像に接する機会は、殆どなかつたのだから……

君はサッカー部に首をつゝこんだことがあるつて云つたけれど、まつたく、見かけよりか、ずつと体が締つて見事だつた。恥らいながら、前をかくして立つた君の姿を、僕は今でも夢のように思出すよ。幸ちゃん！ 君はあの時、震えていたね。君の体は新鮮で匂い立つようだつた。

それでも、君はよく、映画館で逢つたばかりの僕に、君の童貞を与えてくれたと思つて、心から感謝している。

そして、あんなに激情に駆られながらも、よく君の体を傷つけなかつたと思つて、今になつてホツとしているのだ。実際、あの時は夢中だつたからね。結局、幸ちゃんの体が素直で、柔かつたからだ。怪我する人だつてあるんだからね、始めは……

よかつた。とてもよかつた。精神的にも、肉体的にも……。あんな満足を味うことは、僕にはもうないかもしれない。その点、君はこれくらい／＼な経験を味うだろう。君を愛する人は多いだろうから……。それを思うと、僕は焦燥にかられて、苦しくなる。嫉妬だ、なまじ童貞を貰つたゞけに、想いが残つて、とてもたまらない。東京と岡山とは、あんまり遠いから

ね。

そう／＼上京も出来ないし、僕の毎日は索莫たるものだ。妻は妊娠している。二人目の子供なんだ。まったく、我ながら滑稽だと云うよりほか、仕方がないね。まるで、豚のような女なんだ。亭主たる僕の本質の、片鱗すら知らないんだから、気は楽だけれどね。しかし、鈍感なものだ。僕は時々感嘆することがあるよ。同じ人間だろうか、と思うんだ。異邦人が言葉が通じないように、肉体が通じないと云うこともあり得るね。

実際、僕は妻との時だつて、本質的には、幸ちやん、君なんだ。もちろん、真つ暗の中ですね。あの時を再現しようとして、僕は夢中になるよ。汗を流してね。しかし、どうしても失敗することがある。君と妻とは、あんまり違ひすぎるんだ。

君から手紙が来た日には、とても興奮する。もつと手紙をくれ給え」

Tさんと逢つたのは、新宿の映画館だ。僕はその時背広を着ていたのだが、不意に隣の人から、

「あなた、学生さんでしよう？」

と、話かけられて、飛上るほど吃驚した。やゝ小柄だが、三十そこ／＼のガッシリした、眼鏡の人。それがTさんだつた。

Tさんは、僕を一目見て、同じ仲間だと判つたと、後で話してくれたが、それを聞いた時、

僕は本当に恥かしかつた。その道の人には、僕の飢えた様子が、手にとるように判つたのだらうか――。

そのまゝTさんに伴われて、始めて行つたホテルで、僕はまるで赤ん坊のようだつた。まったく、手も足も出なくなつて、Tさんの思い通りにされてしまつたのだ。本当はそれが嬉しかつたのだ。

Tさんは聰明で、もの柔かなタイプのようにだが、本当はとても強引で、僕をすっかり自由にしてしまつた。素裸にされて、しかもいろ／＼ポーズに注文をつけられた。僕はそれだけで興奮の極に達していたから、その場所にTさんの視線を感じると、もうとんでもないことになりそうで、オロ／＼した。あの人の微笑は、何も彼も知りつくしているように、僕の全身を包んでいた。

Tさんの体は浅黒く引締つた筋肉質で、肌が触れ合つた時の快感は、ちよつと説明し難い。次に同じTさんの、最近の便りを引用する。

「御便り、複雑な思ひで読んだ。苦しかつたよ。現在だつてこの苦しさには変りない。

しかし、Hさんのこと、正直に告白してくれて、有難とう。かくし通されるよりは、どれだけ救われるか知れやしない。君はやはり、いい人だつた。

こんなに遠く離れて、逢えないまゝに、永久に幸ちやんを僕につなぎ止めていられるなんてそんな虫のいゝことは考えていなかった。君は

東京にいるんだ。何時かはライバルが現われると、覚悟はしていたんだ。君だつて、そんな孤独には耐えられないのは、判つているんだから……。

しかし、H氏とは何者だ如何なる人物だ？君はその点、とても曖昧にしか書いていないね。僕を焦立たせるつもりなのか？ 身分のある人だつて、そんな抽象的なことはどうでもいゝ。

精神的に喜びはないけれど、と、君は書いている。テクニクだつて？ ひどいことを、君は書くね。僕はどうしてか「愛している」と書かれるより、辛かつたよ。H氏の肉体的なテクニクつて、一体どんなことだ？ 具体的に、詳しく書いてくれ。直ぐにだ。

いや、幸ちやん、君はH氏との交渉を、詳細に逐一僕に報告する義務がある。逢引きの始めから別れる時までの、君たち二人の言動、細大洩らさず、すべて書いてくれ。全部だ。H氏なる者の容貌、身長、体重、声音、それから彼のPhallusのサイズは勿論、特徴、趣好、みんな知らせてくれ。写真もたのむ。写真を見れば、大体見当がつくからね。

僕は未知のそのH氏に自由になつてゐる幸ちやんをさま／＼に想像して、そうして、一人で猛り狂つてゐるんだよ。君の、あの美しい可愛い体を自由にするなんて……、そして、君は一体、どんな顔をしているんだ。まさか……、そうだ。あり得ることだからね。

少年裸像

……大抵は柱に縛りつけるのだが、下半身がグイと前につき出るように、柱と腰の間に、ちちつとした本箱などをあてがって縛る。私は縛ると云つても慮めるよりは、騷るのが目的だから、こんな姿勢がいゝのだ……

加賀正治

二年前に妻が病死した時、私はまったくホツとした。とてつもなく重い、大きな鎖から解放されたような気持だった。

そして、現在は自分の思い通りに、自由に暮している。私は随分若くなつたと、何も知らぬ知人から云われる。そうかも知れない。いや、

以前が老け過ぎていたのだろう。私のアウトラインだけ御紹介すると、三十六才。職業は図案家。女たちの訪問着や振袖などの下絵をかく。もう二十年来、この仕事をしている。

女たちが虚栄を競う、あの絢爛たる衣裳の考案が、私のような男の手で成されると云うのは

「肉体的に酔わされる——」なんて、そんな云い方をしないで、どうぞハッキリ、正直に書いてくれたまえ。僕は何を知つても、きつと大丈夫だから……。

現在の僕の気持、これは幸ちやん。嫉妬なんて云う、生優しいものぢやないよ。正しく業なんだね。無限地獄だよ。僕たちは此処を、命ある限り彷徨するんだ——

Tさんの手紙は、まだく続いている。しかし、それは僕の悩みを増すばかりなのだ。

僕たちの関係には何の解決もない。僕があの人から得たものは、束の間の喜びと、永遠の苦惱なのだ。

Hさんからも、例のように事務的な連絡が来た。Tさんのこんな切々たる手紙をよそに、僕はやはりHさんの指定通り、逢びきに出かけるだろう。それは、僕が何時も、誰かに抱かれていたいからなのだ。

僕自身でも、この気持は抑制出来ないのだ。

なんとなく皮肉にも感じられる。

とにかく、私は二人の弟子と三人で、女つ気なしの共同生活を営んでいる。弟子と云うのは二人とも十代の少年、それも美しい少年たちだ。

私がこの少年たちにまず行うのは、全裸にしての縛りだ。二人の少年を裸にして荒縄で縛る。素つ裸にされた二人は、ヒイ／＼声をあげながら、広い板の間の仕事場を逃げ廻る。私がそんな風に教育したのだ。私は縄を手にして、二人を追いかける。この時間は永い方がいゝ。縛ると云つても、近頃よく雑誌に出ている、縛られた女たちのような、間拔けた縛り方はない。第一男の子はあんな縛り方では困る。大抵は柱に縛りつけるのだが、下半身がグイと前につき出るように、柱と腰の間に、ちちつとした本箱などをあてがって縛る。私は縛ると云つても、慮めるよりは、騷るのが目的だから、こんな姿勢がいゝのだ。

普通の場合、私は一人は前向き、もう一人は後向きにする。或は仕事机の上に、仰向き、うつ伏せと云うように、必ず反対のポーズをとらせる。私は肉体と同じように、少年のアイナスに憧憬を抱いているからだ、これを同時に騷ることに、とても強い心理的な欲びを覚える。時には縦に、股間縛りをすることもある。私の我流だが、肉体を中心に、菱形に縄をかける方法もある。この時には麻縄か、ゴム縄を使うのだが、これをやると、必ず×××××するも

のなのだ。

少年の××したそれは実に可愛い。愛撫してやると、恥しそうな微笑を見せる。その時の彼等の表情もいゝものだ。

又、片方にそうしていると、もう一人の方も必ず××して、嫉妬の表情を見せる。私にはそれが又、たまらなく愉快なのだ。こんなことは、私はすべて計算してやつていく。何故なら、私の男色歴は既に三十年来のことなのだから。

私が今の少年たちのように、京都の師匠の許に徒弟奉公に入つた時からのことだ。見習に入つて三日目の晩には、もう兄弟子の一人が、私に蔽いかぶさつた。

「静かにしろ！」その一言で、私は一生懸命苦痛をこらえた。数え年で十五才だつた。それから、辛いばかりの奉公生活の中でも、夜のことだけは、不思議なたのしさがあつた。他の兄弟子や朋輩たちは、それを奉公中の一つの過程として、其処からドン／＼卒業していったのに、私は執念深くこの世界を這いずり廻つた。



独立してからは、仕事と同程度に、この方にも熱心で、念頭から離れたことがない。手許に來た弟子たちには、みんな一度手を出したのだ。みんな好奇心が強い頃の少年ばかりだから一応は成功する。しかし、あまり執拗に追い廻して、逃げられたこともあつた。

そんな者たちの口から洩れて、私の性癖は相当知人間にも知れた。しかし、私は氣にもとめないで相変らず少年を、しかもなるべく美しい少年を求めて止まなかつた。世間態など氣にはしていられな

いほど、異常な欲求が強かつたのだ。しかし、その私の好みにはとても強情なところがあつて、少年から、青年と云

われるほどの年齢になると、もういけない。欲望を感じるのは、まづ声變りのする頃から、十七才ぐらいまで。どんなに愛した少年でも、それ以上に成長すると、愛撫する氣持にはならない。逆に嫌悪を感じるのだ。そこで、再び新しい少年を求める。

こんな私の我儘は、仕事の上では随分マイナ

スになるのだが、どうにもならない。

現在も私はこうして、仕事とこの道とに、五分々々の精魂を注ぎこんでいる。仕事以外のことはめつたに外出もしない。だから噂に聞くソドミア社交場も、映画館も知らないが、又必要もないと思つてゐる。性癖と云うのは、実に抜き差しならぬほど強いもので、私にも私なりの流儀があるのだから、それを満喫すればいいと思つてゐる。

前に述べた縛りも、観念的なもので、決して虐待、懲罰を意味しない。強いて云うなら、前戯的な遊びで、私は唯、そうして、存分に美しい少年の裸体をたのしみたいからなのだ。相手の裸体、表情、昂奮状態の詳細を、解剖するやうに一々確かめたいのだ。この春から夏にかけて、東京の山手方面で、少年ばかりを追いかけた変質者があつたそうだ。言葉巧みに良家の少年ばかりを誘い出し、立木に縛りつけて、陰部を露出せしめ、煙草の火で焼いたり、異物を捜入したりしたのである。私は新聞で知つたのだが、まだ犯人は検挙されないらしい。

相手が極く玩是でない少年だけに、世人の怒りを買つたのだが、私も今一步自制力を失えば、こんなことを仕出來すのではないかと、内心怖れている。現在のように、愛撫する少年が得られるうちはまだいい。しかし、その相手が得られなかつたとしたら……。私は自分でも無意識のうちに、少年を求めて街にさまよい出るのではないだろうか――？

長篇讀切殘虐小説

ダイナマイトとマドレーヌ

鏡の前に一糸もまとわず立たされ、たえず革紐で——まさつされ、血がにじんでくると、油をぬり、どす黒い足首がすつかり見えなくなるまで突き入れられ、——足首の力で、體中をこづきあげられた——廻轉する人形の様に——

松戸淳譯 E J バ タ イ ュ



ジュリアン・ポールは、この町の文科大學に通つてゐる。運河の前の古風な、れんが造りのアパートの二階に、ひっそりと、暮している。一年近くになるが、となりの部屋は空いたまま、二階は彼一人だつた。

パリ生れの、二十二になる、きやしやな青年で、ゆたかな詩想につれて、十二音律の美しい詩をつくる。音楽にも趣味が深く、作曲など

も、興にまかせて、こころみるのだった。

が、女ツ気のない孤独な生活は、単調だった。ポールは、いわば教養のあるまじめな、女にもまがう美青年である。漆黒の髪は心もちちぢれて、品のよい額に垂れ、指は細く、眼は魅力的である。

寄宿舎にいた頃は、同性愛を強要され、すでにホモに陥るところだったが、知性の高いポールには、そんな汚らしいことはできなかった。

色のない運河の水と、淡々とした日常に、ポールは人生の味気なさを、やや感じはじめていた。所が、こうした単一さを破る、あるか、なしの、波紋が、ある日、音もなく、さやさやと、かれの生活にひだを起そうとして、やつてきた。

二室しかないこのアパートの二階の一室に、一人の女性が、住むようになったからである。

物静かな、寂寞たる朝夕なので、はじめはどんな女性なのか、見当がつかなかった。

かけちがつて、顔は見えていない。

ところが、何ということもなく、妙に新鮮な、味わい深い微風が、かれの心の底にただよってくるのを、感ぜずにいられた。と、いうのは、隣室の女性が洗面室に、おき忘れて行つたクリームや、高級な石けん、香水のしみこんだレースのハンカチーフなどが、ふくいくとして、春の夜の夢よりもあえかな香気を、あたりにまきちらしているからである。

ポールの若い胸は、艶麗なイメージを抱いて見ぬ恋のはかなさに、もたえずにいられた。と、

「どんな人なのかしら……」

ポールは、じつときき耳をたてて、となりの気配をうかがうのだが、よほど、たしなみ深い女性とみえて、物音一つたてず、やすらかな寢息だけを一日のおきみやげとして、わずかに壁越しに伝えるだけだった。

が、間もなく、最初の土曜日がきた。

定息日をあすにひかえて、学生たちにとつては、何というわけもなく、心のびらな宵なのである。隣の窓から、お人形のように真白な手が、腕が、ちらつと見えた。その手は白魚のようにはひらひらと朝の日ざしの中で泳いでいた。ピンク色のエプロンやアラベスクの美しい布類を干しているのだった。

ついで、すみ通るようなハミングがきこえてきた。シェヘラザードの舞曲の一部を、階調正しく歌っているのだ。

「一体、どういう女性なのだろう……若い娘さんらしいな」ポールは、労働で、みにくく歪んだ太い指を無意識にいそいでズボンにつつこんで、小首をかしげた。

さつと軟かい春風が流れてきた。何ともいえない花の香り……ジャスミンかヘリオトロップの花束だろう……となりの部屋から、流れてきた。二十二歳の青年ポールは、なやましい、切ない気もちというものを初めて味わった。

衣ずれの音がそれにつづいた。柔かな手の平で、肌をマッセージしているらしい、ピタピタという、水々しい音がそれにつづいた。

ポールは胸苦しくなってきた。

と、とつぜん、コツコツコツ……二、三度、ドアを軽くノックする音に、はつとして、思わず、はじかれたように立ち上り、ドアのハンドルを静かにひいた。

眼さきがくらくらつとした。濃厚な香料の香りがまず鼻孔を刺戟し、ついで、花のような装いが眼をくらませ、最後に、かあいらしい小さな唇と、淡い褐色の眼と見ごとな身体つきがせまつてきた。

「お邪魔でしようか」少女は、眼もとに微笑をたたえながら、ささやくように云った。

「いいえ。どうぞ……」ポールは乱雑な独り者の巢箱に、まごついたが、ていねいに身をすさつて少女を招じ入れた。

もちろん、隣室の女性であつた。初対面のそして新人者としての挨拶の爲めに来たのであつた。

都会に住む両親の反対を押しきつて、この町の女子美術学校の専科に入学したのだという。

マドレーヌ・ド・ノアイユという名が示す通り、封建時代には名だたる貴族の一門で、国が共和制となつてからは巴里郊外に広大な邸と莊園をかまえて、金利生活を送つて今日に至つたという、まことにフランス貴族らしい経緯を過去に持った家庭に生れた令嬢、というか、姫君

といふか、とにかく深窓の処女なのである。

父親のフィリップ・ド・ノアイユは、考古学を専攻し、パリ大学で道楽半分教えるかたわら好きな園芸趣味から、広大な庭園を花壇に仕立てて悠々自適の生活をおくり、夫人のスザンヌ・ド・ノアイユは、天生の美貌をうたわれた同族の出で、一粒だねのマドレーヌの薫育に過去十年余を専心してきたが、マドレーヌがまれに見る画才にめぐまれ、フランスでも入学至難といわれるこの町のアカデミ・デ・ボザールという女子芸術院に入学してからは、もっぱら福祉事業のために私財をおし、つくしている。実に典型的な『志操高く恵まれた』家門なのである。

可愛い子には旅をさせる——という諺のとおり、名門の令嬢マドレーヌは、学校生活のため家をはなれ、庶民のアパート住いをする事になったのである。

「道理で、何となく、見ぬ前から、清らかな、魅きつける高貴性が漂っていた」とポールはうなづいた。

マドレーヌは十八歳、成熟した胸の線……小柄でしとやかな、申し分のない令嬢である。

「近かつきになれて光栄です」仕事で荒れた大きな掌を揉み揉みポールはやつとこれだけ言うことができた。こんな清らかで澄んだ感じの新鮮な女性を、今日までかれは想像した事もなかった。

彼が今まで見てきた女の一人のこらずが、せ

いぜい艶つぽさとか肉的に魅力があるとかいった事だけで、存在価値を辛うじて占めていたのに……まさしく、マドレーヌは、天から突然降りきたアンジュ（天女）にちがいない。とても、そばへも近づけない。ましてや、その肌その香、その声などに直接、接すること自体がすでに冒瀆のような気がした。

その夜、ポールは一晚中、甘美な夢を見つづけた。のびのびと、海のほとりを蝶のように舞っているマドレーヌの姿、古壁に咲きみだれた紅ばらのつづらな花びらの一つをつみとれば、それが、マドレーヌの露じめりしたルビーのような唇だった……やがて、黒い大きな手がかの女の四肢にからみつくかと思えば、無残や、あらわな下腹部が、血のにじむまで、赭黒い爪でむしられてゆく……うーうーうー……うなされて、ポールは眼をさました。

目は高かった。音を立てないように、カタコトと、器物のふれ合う気配がした。マドレーヌさんは、まだ外出しなかつたのか……と思うと、早くも胸はあやしくも時めくのだった。

「お邪魔だつたら遠慮なくそう仰云つて下さい」おそろおそろ、ポールは隣の部屋に侵入した。マドレーヌは、可愛いエプロン姿で絵布にむかつていた。「あら……邪魔なんて……そんなこと……下手な絵ごらんになつちやいや……」上品な嬌笑をみせ乍ら、手早くキャンヴァスを裏がえす。そのむつちりとしたまっ白な肌につやつやとしたえくぼがあらわれた。ポール

は、もう、むせぼつたい恍惚にとらわれて、足をがたがた小刻みにふるわせている。

「お嬢さん、ぼくのような者ときき合つて下さいますか」小心な大学生は、言葉を選択するゆとりがなかつた。

「はあ……私こそ」短かく尖つたやえ歯を見せて、乙女はやさしく椅子を近づけた。

「ときどき、来てもいいですか」

「まあ……どうぞ……私の方からも……よろしくつて？」上目使いに澄んだ瞳が、頬骨の張出したポールをにらむ。

なんという、あどけない美しさだろう……煙りのようなブロードの捲毛が、ひたいにかかり、ギリシヤ彫像のような上品な鼻、丸いふらはぎの可愛いふくらみ、すんなりとした形のよい指、乳房が二つ固い球のように盛り上つている胸……

その日は時の経つのも忘れて、マドレーヌの無邪気な少女時代の思い出や、修道院女学校の頃のお友達のはなしなどを、うつとりと、きいていた。

ますます近より難い高貴さが、かの女の輝くばかりの美貌とこまやかな肌から滲み出てくるので、ポールは、いく度か、淋しくもなり、絶望的にもなつて行つた。

それから……数週がすぎた。ああ……あんなに熟し切っている果実を……と、思い乍らも、神聖なものに思えて、ただ惱ましい日夜がつづいていた。が、マドレーヌの方では全然、そん

な事は気づかぬ様子で、こだわりのない、うちとけた、無邪気さで、口をきき、一つの卓をかねて、お茶をのむのだった。青年にとつては、はじめて覚えた恋心なのである。とかく言葉も、しぶり勝ちで心臓だけが雄弁に、すべての感情を羽搏きしていた。

時として、食料品を買っているかの女の花のような姿を、薄汚ない主婦たちの雑踏の中から、ちらつと見出すことがある。けれども、あえて、近よつたり、かえり道に待ちうけたりする勇氣も出ない。

たまさか、何かの用でかえりが一しよになつて肩をならべて歩くこと

だ胸がわくわくして、かの女の衣物や持ち物や髪などから発散する惱ましい香りに

あつとうされて、その手に觸れることさえで

きない……ほんの、何かの拍子に、二人の小指がふれ合つたことがある

……小指の先きだつた……

そつと觸つたか觸らないかわからぬ位だつた……それ

なのに、ポールは、その無限にひろがつてゆく、しめり

つけのある柔軟な肌の感觸に息がとまるほど興奮した。

いやこんな事もあつた。二人は、音楽会へ行つた。ステージ丈けがまばゆい明るさで座席は薄暗かつた。むつちりとした膝の上に、まっ白なやさしい手が、晝顔の花のようになよなよと、浮んでみえた。二人の眼が会つた。ポールのはげしい視線の愛撫に、マドレーヌは頭のとつぺんから足の先まで身震いした。ポールの眼は、誘うようにたわんでいる小さな手に吸いついてはなれなかつた。はでなスカートのひだを弄んでいる、いじらしいような桜色のなめらかな指を握りたい、がむしやら願いが、どうにもならない気持ちがじみた氣持がわき上つてきた。思ふかぎり握りしめて、その中にこめることのできる限りの事を云いたい氣もちだつた。

「いいわね……シヨパンは、

やつぱり……」



乙女の小さな肩が波打つ、かの女は、ポールの燃えるような情慾を意識しているのだからかかれのズボンとすれずれに、むつちりとした手の平をすべらせた。それから、よくそろつた指をゆるやかに開いたまま、上向けにした。ポールは、もう、ねつとりと汗ばんできた指をそつと、その方へ動かしていった。相手を求める交尾期の動物のように……と、二人の指がふれた……かの女は、はつとしてひつこめた。それから、また出会つた。愛撫し合う唇のようにこの、かすかな接觸は、かの女からだにはげしくつたわつて入りこみ、まるで、男の毛深い頑丈な胸で体のくだけるほど抱きしめでもされたような氣がして、氣が遠くなつた……ポールも、息がつまつてきた。

が、清純なものへの虔しみといった殊勝な感情に負けて、ポールは、それ以上の事は、できなかった。

※※※

「マドレーヌのお嬢さん、今日はどうしたのでしょうか。随分、おそいようですが」

アパートの管理者（コンシエールジュ）がその夜、十時すぎに、ポールの部屋へ来て、心配そうに云つた。ポールは、うつかりしていた。彼自身も、今しがた帰つてきた

はかりなので、気がつかなくつた。

「どんなにおそくても、五時をすぎた事はないのに、あんな綺麗な娘さんが、こんな夜ふけに独りで帰ってくるのは心配です」コンシエールジュは六十あまりの親切な老爺である。ポールは、この時、「ああ！ もしや」と、はじかれたように利倒する不安の翳に脅かされた。まざまざと、眼に浮んできた。白い肉体、もつれ、くだける線、ずたずたに裂かれた飛びちるスカート……そして、あの美術学校への道に横たわる忌わしい難所の状況……。ポールは、起ち上り、部屋を飛び出した。

「いつてみてきます」と、云いのこして。

五三三

やつぱり、不安には根拠があつた。

運河ぞいに坂路へ出ると、左は山地になる。

月光がひるまのように照つていたので、草も木も通る人の顔もはつきり見えた。

山地にかかる所に小さな喫茶小屋があつた。

マドレーヌが毎日かよつていた学校は、この小さな切通しを下りればすぐ眼の下にある。道のりも僅かで、晝間なら、眺望を楽しみながら歩けるので、かえつて心地がいい。

喫茶小屋のうしろは岩山になつていて、この岩山からは工業用の鉱石がとれるので、採鉱会



社の飯場ができ、終日、地面がつき上げられるような振動をとまなう、どーんという凄じい音が土地全体をゆり動かし、そのたびに、たつぷり一分間ぐらい、こだまというこだまを呼びさまして、それだけの数の大砲を打つたように、山の中に鳴りひびくのだつた。ダイナマイト工夫の群れが、終日、このあたりで、いそがしうにはたらいていた。

「今晚は」ポールは、喫茶小屋のガラス戸を明けて入つた。エプロンでぬれた手をふきふき出てきた主婦に、

「今日、なにかこのへんで、変つたことはありませんでしたか」と、きいた。

はじめのうちは、なかなか口をわらなかつたが、次第に、ポールの人柄に好意を感じたとみえて、主婦は、あたりの様子を見まわしながら、声をおとして、

「じつは……」と語り出した。

「じつは……今日の夕暮……四時ごろでした。

ちようどダイナマイトを仕掛けて、下の方に待避してい工夫さんたちの前を、若い娘さんが一人、学校のかえりでしょう、赤いベレーをかぶつた可愛い年頃のお嬢さんでした……通りかかつたのです。工夫

夫たちは、いつも現場ちかくを通るアベックの女の人たちに、猥らな言葉でからかつたり、時には大手をひろげて通せんぼしたりしますので、私は、今日も又、かあいそうに、あの娘さんも、何か、いやな目にあわされはしないだろうか、こわごわ、家の中から見ていますと、『あッ！ そこを通つちやアブナイよ——』と、工夫の一人がよびかけました。娘さんは、はつと、驚いたように大きな、くりくりした瞳をあけて、声のする方をふりむきました。ダイナマイトのことだということ、は、いつも通つていたのでよく知つていたようでした。娘さんはいそいで、路の反対がわの藪の中に逃げていきました。すると、藪の中には、七八人の別働隊らしい工夫がひそんでいて、ここまで云うと、主婦は、もう之以上のことは口では云えないと、うつむいてしまつた。ポールは、赤いベレー帽の美しい娘さんときいただけで、ピンと来た。藪の中でどんな事が行われたのかと、真剣に問いつめられて主婦は大体、次のような事実を、ぼつりぼつりと打ち明けたのであつた。

あたり一面に降りかかる石の雨と、足もとへ吸い込まれるように崩れる細かい土くれの柱が立った。濠々として、草も林も土手も、白く黄味がかつた砂塵で見えなくなつた。

と、たちまち、藪の中から、ヒーツという、娘さんの悲鳴が起つた。つづいて、四方八方から工夫たちの、だみ声が鋭く、怒濤のように、藪をめぐり集つてきた。ほこりも轟音もおさまり、再び静まりかえつた山地になつた。藪の中から、わいわい争う声がづく。まつ白な股が二本、つき上げられたように、あらわな肌をみせて、藪の中から現われた。

凡そ十二三人の工夫だつた。一人の娘をかこんで、胴上げをするようなかたちで、わつしよわつしよと、飯場の方へと、かついで行つた……それつきり、娘さんの姿は二度と見えなくなつた……。

主婦の話は、そこまでであつた。

ああ！ 不吉な予感があつたのだ！ と思うと、ポールは、足下の土が崩れてゆくような気がした。

五五五

これは最初から全く偶然がさせた事であつた。かの女に爆破の危険を知らせた工夫たちも、また、藪の中で、待避していた工夫たちも、はじめから、何も計画していたのではなかつたのだ。泥と土と垢まみれの工夫たちの集団は異様な汗臭さにまじつて、お互い同志でも、



時としては、うんざりする事があつた。そして何か、新鮮なものをと求めていた。路傍の花の一輪、水々しいすかんぼの葉緑素の香りにも妖しい『異性への接近』感といったものを感じていた。ことに、飯場生活は、殺風景で、女を求めるにも、都会の裏町へでかけてゆくか、めんどろな手つづきでやつと、田舎くさい農家の娘つ子を手に入れるか、しなければ、ならなかつ

た。そんなことから、逞しい本能に疼き切つた工夫たちは、生まやさいいちやつきや、情交一点ばりの方法では、満足ができなくなつていた。

そこへ、单身、雛蝶のような、ぞつとするほど美しい令嬢マドレーヌが、とびこんできたのである。もう、かれらは打ち合せも、互いの妥協もなかつた。ダイナマイトの反響が静まつた

頃には、多くの荒々しい手がマドレーヌのスカートをはひんめくり、脚をさわり、胸を吸い、髪をひきずり、てんやわんやの、争奪がはじまっていたのだ。

「つれてつて、順をきめようぜ。」と、一人が提案すれば、「それがいい」と、胴上げになったのである。

飯場の板敷きはかなり広く、四方がガラス窓になつていた。

飯場頭のゴーシェという男は、会社から特別の待遇をうけていた。腕ぶしが強いのと、部下への威令が完全に行われていること、などが、仕事をし易くするからである。ゴーシェだけは、別室をあてがわれ、町から仇つぽいバーの女給風の若い女を連れて来て、毎晩、時としては白晝公開と、弄戯に興じていた。以前は大西洋航路のボースンをしていたとかで、五十前後の大男である。いつも粗い毛の生えた大きな胸をはだけ、片手に女を抱いて、強酒を呻りながら、乾分を叱りとばしている。女は観念してゴーシェの弄ぶがままになつていたが、ゴーシェは、そろそろ、この商売女にあきがきていた。ねろといえねる、開けといえねる、吸わせろといえねる。たてつづけにせめてもおとなしくしている。こんなのでは、もう面白くない。手入らずの、良家の処女——そんな夢を描いて、まんざら不可能とも思えぬ享樂のチャンスをとねらつていた。

そこへ、思いがけない工夫どもの奪略品の到

来た。

「手荒い真似はよせ」ゴーシェは、舌なめずりをしながら、どなつた。

マドレーヌは、いそいで身づくろいをした。

が、スカートは剥ぎとられていた。白蠟のようにすんなりとした足の柔かな線が、黄昏の窓明りに、ほんのりと、浮いてみえた。

「すげえ上玉だぞ……チェッ！」ひげだらけの大きな口をゆがめて、ゴーシェは舌打ちした。

「かえしてちようだい……おうちへ、かへして……」

マドレーヌは、ゴーシェの前に、あらわな膝をつき、花片のような手を合わせて云つた。

「かえしてやるとも……おとなしくしていさえすればかえしてやるよ」ゴーシェは今まで握つていた女給風の女の手をはなすと、つかつかとマドレーヌの前に立ちあはだかり、黒い丸太のような手で、彼女の心もちくびれた品のいいあごをもちあげ、「うーん」と、感嘆するように唸り、

「野郎ども、こいつは寶石だぞ。みる、この見事な乳房をよ！ 白くて固くて円くて！ 畜生、おれは食いたくなつたよ」と、云いざま、

「よし！ 放して！ いや！ いや！ いやです！」と、たえだえに叫ぶマドレーヌの口に

分厚な紫色に反つた唇をおつかふせ、まめだらけの手で、両の乳房を一つかみにつかみよせ、

片手でその滑らかな全身をなでまわした。乾分共は、早く親分が用をすましてこつちへ下げ

てくれればいいが……とそのまわりをかこんで、情慾にふるえている。

「おい！ お嬢さん、いずれは帰してやるが、しばらくここで、つき合つてもらうぜ」

あまりのおそろしさに、マドレーヌは、小雀のようにちぢみ上り、胸を両手できつくまもり、部屋のすみ、あとずさりして行く。

「おい、お嬢さん、まず、一同に、お前のきれいな裸をみせてもらおうじゃねえか」

ゴーシェは、ニッカーのだぶだぶしたポケットから、捕縄の結びをとり出して、それを頑丈な指さきでくるくるまわしてみせながら一歩一歩迫ってきた。

「いや……いやです……いや……」

「いやかい……そうかい……じゃあ、まあ、やつてみよう」

とつぜん、さつとほどいた縄をふりあげ、ピューンと威嚇的に宙にうならせた。

「これでもかね」マドレーヌは、朱唇をかんてうつむいたまま、答えなかつた。そして、さげすみと恐怖にみちた眼で、彼を見つめた。

ヒューツと、縄は唸りを立てたかと思うと、パチツと音立てて、乙女の肩にあたつた。見る見るその白い肌にはみみずばれが走つた。

「ごめん下さいませ……ゆるして……ゆるして……」第二の打撃は右肩に血のすじをつけた。痛さのあまり、かの女はヒーツとさげんだ。

「よし、これでもまだ云うことをきかないのか。野郎ども、ふんじばつちまえ」

命令一下、荒くれ男共は面白半分必要もないのにかの女の手を吸つたり、胸をかきまわしたり、×××××手をつつこんだりしながら、弱い手首を逆にねじり、うしろ手にかたくしばつてしまつた。そして、むりやりかたい木の椅子の上へのせた。丸るい脛や、さらに美しい白絹のような両足や、絹のパンツが見え出した——それから、むつちりとしたお尻もみえた。まだ、裸にはされなかつた。が、それは一そう、いけなかつた。ゴシエは、ただ、パンツをきつくひつぽつて××××××××××だけだつた。一言も云わないで、めつた打ちする前に、乙女を自分の意に従うかどうかを、もう一度、目顔で問うてみた。が、何の答えもなかつた。ピューンと、今度は革鞭が宙に鳴つた。飯場の仕置きに使う、巾の広い、すでに、幾百回となく用いられ、多くの坑夫の血のりで、べたついてゐる鞭だつた。ぽつてりした可愛い尻に、パツと、鮮紅の筋がひかれた……マドレーヌはこの時半ばかりかすれた声で何か云つた。まわりの工夫達の耳にも、そばで、面白そうに眺めている女の耳にも、それが「はだかになります」と、きこえたが、親分は、きこえないふりをしてゐる。

「さあ、もう可愛い肩と尻は、あきるほどのしんだからこんどは、だんだんに……」

彼女はぶるぶるとふるえた、目の前には血のついた鞭が……白い手はおそろおそろ着物を高くまくしあげていつた。が、途中でぎくりとし

て止めた。あまりにもみじめな、あまりにも浅ましい姿に総身の力がぬけそうになつたのである。この時、いつも親切にくれる隣室のポール青年の事が、ふと頭に浮んできた。なつかしい何とも云えず頼母しい人にも思えて……処女をつつましきから、ろくにやさしい言葉もかわさずにくたこと……そして、今のこの、いまはしい虜われの身を我が罪でもないのにポール様に知れたら……という、気が遠くなるような恥かしさに、おののかずにいられなかつた。

「なにをぐずぐずしてゐるんだ……早くしろ」

彼女はついに体の下の方がくまなく示されるようになる迄上げつづけなければならなかつた。が、たとえ、この股のあたり、ふつくらとした下腹のあたりが、どのように美しくとも、まだ、男たちは、それだけでは満足しなかつた。

「ぐずぐずしないで、早く着物をぬぐんだ」

ヒューンと鞭はうなり、ふつくらとした、真白な二の腕にあたつた。みるみる赤くはれ上る。あッ！と、うめいてかの女はくたくたと、くず折れてしまつた。ゴシエは荷物を扱うように片手で無造作に細い腰を抱くと、むりやり引き起し、うしろから羽がいじめにした。

乙女は、相手のすえた様な口の臭をさけて、雪花石膏のような顔を左に右にかしげたが、だめだつた。いきなり髪をつかまれ、ぐつと顔をあおむかされ、パクリと厚い口唇で、息もならぬほど口を吸われ舌をかみひき出された。

「もがくな。しぼるぞ」片手でヒューツと鞭ををならし、乳房をなめまわし、腹から胸へと×××××××いつた。

「よし、これで、はだかに近づいたな——もう一息だ、下着をぬげ、もう一息だ！」

すばらしい両の乳房が、とび出した。

「うーむ」と、親分はあまりの美しさにうなり出した。「さあ、野郎共、はだかにしてしまえ……そして、テーブルに立たせろ」

よつてたかつて後ろ手にしばつたマドレーヌのまばゆい裸身を卓上にむりやりすえると、工夫どもは、そのまわりをぐるぐるとりまき、てんでに、この比類ないほどはり切つた乳房をいじつたり、××××指を××××××××××かきまわしたり、体のあらゆる部分をいじりまわした。

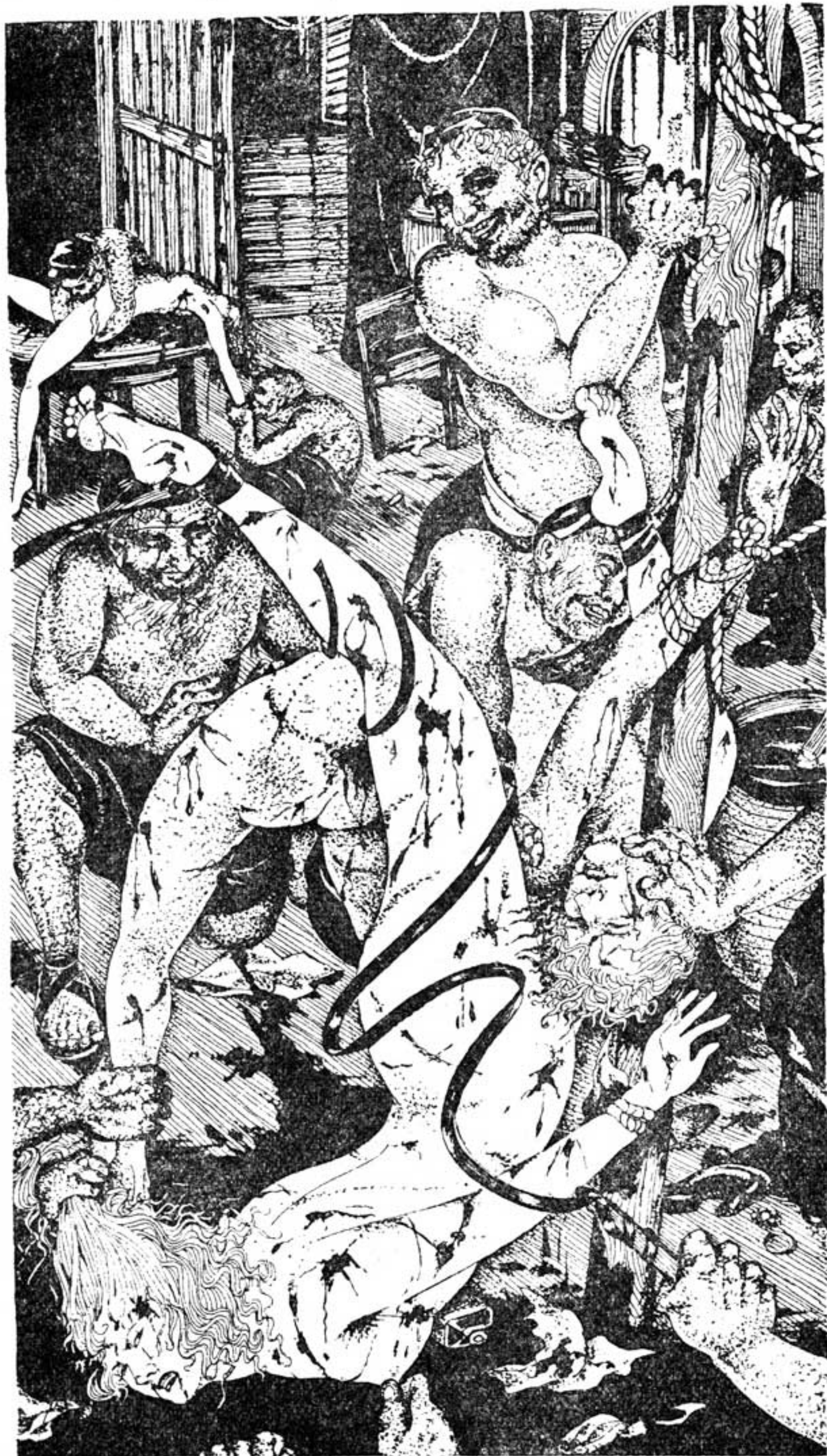
「たしかにこいつは大したものですぞ親分！ おほこもおほこ……すげえものさ」

一人が、××××××××××××××××、さらさら音をさせて××××××××××云う。

「ようし、わかつた。おめえたちが、せつかくさらつてきたこの上玉をそっくりおれがとりあげてしまうのもかあいそうだからな。よし、この娘が、おとなしく、おれの云うことをきく氣にさせてくれ……どんなことをしてもいいぞ……」

……ただ、おれがお毒見するまえは、ぜつたいに、ゆるさない。それ丈けしなければ、どう自由にしてもかまわねえ。抱こうと、いじくろうと、どんなにひどい目にあわせてもいい」

「するてえと……けつきよく……どうすりや、



いいんですえ？」

工夫たちは、声をはずませ乍ら、つめ寄つてきた。

ゴージェは、「さあ、どんなにでもして、可愛がつてやんな」と云いのこすと、傍にひかえていた若い妾の手をつかんで、奥へ消えて行つた。

あまりの痛みと、恐怖にふるえて、卓上に立つたまま、マドレーヌは、死ぬ思いで待つていた……誰にも見せた事のない裸体を、じつとこ

わばらせて、頬を涙にぬらしたまま……工夫の数は十三人だった。いづれも泥まみれの、逞しい兇暴な面がまえの男ばかりだった。

中の一人がつかつかと、近よつてきて、「さあ、くじはおれがイの一だぜ。おれがどんなに、やさしい男か、これからみせてやる」と、いいさま、後ろ手に縛られていたマドレーヌの手を千切れるほど握りしめ、そのやわやわした指さきを、ぎゅつとつかんで、「うーん」といきばつたかと思うと、樂々とかの女の体を

宙につるさげ、部屋をひとまわりまわり、時々、かみつくように、顔に歯を立て、びろろどこの頬を食い切るほどあんぐりとかみ、「いたい かよお……いたい かよお」と、いい乍ら、軀をいじりつづけ、ポーンとソファに押したおし、こんどは、しばつてあつた縄をとき、むつちりとした胸から肩にかけて、肉がくびれるほど強く、ソファにしばりつけた。

「さあ、お嬢さん、すこし、がまんしなよ」やおら立ち上ると、くぎぬきをとり出して、まづ、マドレーヌの乳房をねじ上げ、おもしろそうに、ひっぱつた。かの女は、ヒーツと、悶絶した。

「泣くなよ、かあいいいやねえか……もう一声きかしてもらうかな」なき叫ぶ顔を二倍もある両手にはさんで、左右から、ぎゅつとおしつける、美しい顔けたはゆがみ、いびつになつた。

と、この時、二番、三番——と、四番までのくじに当つた工夫たちが、待ち切れずどやどやと、あつまつてきて、てんでに、四方八方から、もたえる乙女の花のような肉体をむさぼりはじめた。

マドレーヌは、こうして、およそ二時間あまり、あらゆる辱かしめをうけつづけた。

白魚のような指は、深紅の内出血で斑

点に埋まり、大きな爪あと、齒痕が肉をくいやぶり、胸には革バンドの強打の血筋が縦横に走り、頬は、乳房は、残酷にもくぎぬきの、はげしい振り加減で、ずたずたに裂け、見るも無惨な恰好になつてしまつた。

「おい、やつつけちやおうじやねえか。これまたやつたんだから、あとは、おなじことだぜ」
一人が言い出した。

「よし、早いところ、いただいちゃおうか」

「あッ！ それだけは！ それだけは！ ゆるして！ ああ！ 神様……ポール様」

あまりの汚辱にのたうちまわり、思わず口走つた。ボールの名……マドレーヌは、男の指が体中をなでまわすごとに身をふるわせ、声となつてはきこえない声をもらした。

「うるせえ、猿ぐつわをかますべえ」かたわらに
来た一人が足をふく雑布をまるめていきなり
マドレーヌの鼻をつまむと、かあいい唇が開
く、と、と同時に雑布をぐんぐん、おしこん
だ。

「早くしてしまえや……じらすなよ」云われて
当りくじの一番が、××××××××、あおむけ
に無抵抗状態にある乙女の上にぴつたりと××
×××、乳房を頬ばりながら、横目で傍の仲間
に指示した。

仲間は連れを手まねき、総勢五人で、マドレーヌの四肢、唇、耳、乳首、内股、手首、指と、思い思いの部分をいじくりまわし、あるいはピンで刺したり、タバコの火をおしつけた

り。

「さあ……いくぞ！」この夥しい多数の暴力に恍惚と亢奮を味い乍ら、マドレーヌの上に乗つた、毛むくじやらな脛で、××××××××××××××××××××××××、あわや！ というその刹那、

「野郎共！　そこまではゆるしていなかつたはずだぞ！」と、奥の部屋からゴーシェの荒々しい声がして、同時に、その巨大な銅色の裸体が、まっ白な例の女の体を横抱きにかかえながら、大股で、やつてきた。

おそらく、他の室で、思う存分、弄ばれ、嗜好の限りをなめさせられたと思われる女は、全身から骨という骨が溶けたように、遅しいゴシエの腕の中で、くらげのように、ぐつたりと、なつていた。

「そこまで楽しんだら、もう、あとは、しんぼうしろ……さあ……その可愛いお嬢さんは、こつちえよこせ。そのかわり、さあ、この別品を、お前たちの自由にさせてやる。責め殺すとも、いじり殺すとも、好きにしろ」

そう云つて、腕の中の女体を情け容赦もなく、いきなり床の上へ放り投げた。

もう、生きている氣力はないとしか見えない。艶やかな女であつた。軀中××××××××××××××、見るも無慘な裂傷を呈し、血がかたまつてこびりついている。唇は、たてつづけに嚙まれたらしく、紫に反りかえり、体一面に火傷の生ま生ましい赤斑……でも、妖しいまでに艶厚

な女体の香りと柔かな肌の線は、工夫たちの劣情を煽り立てた。

「よし、いただいこうぜ。おれ達は今日までさんざん親分にこの別品とのいいところを見せつけられてきたんだ。なあ兄弟……今日から当分は、たんのうでござるぜ」

「そうとも……チェッ！ 食いつきたくなるぜ……ほつてりしてやがる……」何本かの手や指が、死んだように横はる裸女の肌や感觸を、ためすように一せいにおそいかかつた。中には××を××××××者もいた。

さんさん揉みしだいた後、あわれな女は手とり足とり、工夫達の部屋へかつがれて行つた。

マドレーヌは、いつかゴーシェの万力のような指に両の手をわしづかみにねじ上げられ、軽々とその膝の上に抱かれていた。

工夫達は、一人の女を争っているらしい。

「さあ今度はおれだ」「ヒーツ!」「生きてたんだな……よし……こうして殺してやる」

「ウーン……イヤ……イヤ……」 「さあ、こんどは俺だ……どうでえ、こんなすべすべな膝つ小僧で、親分さんざん締めらせたんだな。」

「とけやい……こんどは俺だよ……チエツ……
こてえられねえな」……「ヴィナスの神様、洪
水とごさい……やつぱり、わるくねえとみえら
あ……どうでえ……」

「いたい！ いたい！ いや！ はなして」
「その口で、痛いっていつたのか……それ……
チュッ！ チュッ！」 「そう噛むなよ、かあい

二才だつたのか」

むらむらと嫉妬の怒りがみみずのような動脈となり、眼尻をさか立て、マドレーヌの髪をぐるぐると手にかからませ、いきなり床の上を、ずるずる引きずつて、ボールの前につれてきた。

ボールは眼をあいてはいられなかつた。見る事自身が冒瀆だ——と、知つていた。

「やい、小僧！」いきなりボールの顔をまともから足で蹴りあげ、壁に立てかけてあつた棍棒で、めつたやたらに打ちすえた。

ボールは、もろくも氣絶してしまつた。

女人のように、きやしやなつくりのボールの体には、こんなお仕置きは、あまりにも重荷だつた。

するとこの時、三人の工夫がゴーシエの前に進み出て、何かヒソヒソと耳打ちをした。

この三人は、口口とガラとビーシエであつた。いずれも、一くせありきな面がまえ、一段と筋骨たくましく、一見巨人の俤があつた。ボクサーのように、四肢の筋骨が隆々としていて、屈強不敵の労働者だ。

「ふふふ……そうか……なるほど……ふん……」

……「ゴーシエは、耳うちされると、急に眼を細めて、うなづいた。片足のかかとは依然として、マドレーヌのいたましい肉体をとこときらわず、ふみにじっている。」

「そうか……そんなら、お前たちにくれてや

る。好きにしな」ゴーシエは、ボール青年を、なめるようにして、じいつと見つ

巨漢は満足そうに一礼すると、つかつかとボールのそばにやつてきて、「おめえは、おれたちが可愛がつてやるぞ」と云つて、手早く、繩を解くと、

左右からむしり取るように、

ボールの着物をすつかり剥ぎ取つてしまい、またたく間に、全裸体にしてしまつた。

かなりはげしく

抵抗したが、赤ん坊をあしらうよりも造

作なく、三人の怪物は、ポ

ールをテーブルの上にあお

むけにねかし

てまつた。

「女よりきめがこまかいぞ」一人が

青年のまつ白な腕をつねつてみた。

「どれ、どれ、おいら

が、ためしてやる」

他の一人が、ボールの手をとつて、うらがえしたり、にぎつたり、はなしたり、ひげづらにおしつけたりし乍ら、肌のたわみを味わい乍ら「すんば



三人の
いた。
めて

二人は、ピュンピュンピュンとたえず打ちお

ろされる鞭に血まみれになつて、ぐんぐんと、洞の中へ引きずりこまれていった。

ダイナマイトの山がほの白く、洞の奥にひかえている。

冷たい地下水の風が、裸体の二人に鳥肌をふかした。

が、うずきまわる痛みに二人の肌は、ほてつていた。

二人は、最後を覚悟しているように、もう、さからわなかつた。

汲みつくせる愛情のまなざし丈けが、ゆるされた二人の間の交りだつたのである。

二人は、燃えるような眼で、ほほえみかわした。

「ポール様」乙女は、ついに告白することのできなかつた一言の前で、とまどうようであつた。「ああ……ぼくの女神……」ポールも口の中、祈るように、つぶやいた、しかも、二人は、ずたずたに裂かれ、汚され、傷みつけられた、言いつくせぬ羞らにみちた肉体しか、のこされていないのだ。

二人は心と心とで、手をかたく、にぎり合つた。二人は互いの肉体から、眼をそむけようと、努力した。

「さあ、野郎ども！」

ゴーシェのだみ声が、暗示的な顫えをまじえてきこえてきた。

火繩のくすぶる臭いがする。ヂリヂリと赤い玉がころがつてくる。

二人は心と心で抱き合つた。

「野郎ども、おれには、もう、この娘は用はない。いいか、だから、ほしい奴にはくれてやる。そのかわり……火薬の火が、洞穴の二米前へくるまで、うごいちゃいけねえぞ。二米のところへ火がきたら、誰でも勇氣のある奴は、とんでいつて、女を抱いてこい。爆発がききか、抱いてくるのが早いのか、とんだ冒険だ。青二歳の方も、ほしい奴がいたら、くれてやる。ロロとガラとピーシュ……だれでもいい。ポールがほしかつたら、煙といつしよに吹つ消えないうちに、抱いてこい！」

ゴーシェは、猛り狂つた虎のように、一段と高い岩の上から、手を振り上げて号令した。今しも、この世で一番怖ろしい、そして悲しい出来事が起ろうとしているのに、彼はまるで愉悅に充ちた表情をしてゐた。

午前の光は、何事もないように、風光美しい岩山をてらしている。

杉の落ち葉が、かすかな音を立てる。

一同は、緊張の極にあつた。洞穴の中で死を待つ芳麗な女体が、ライラックの花びらのように匂つてゐる。

ポール青年の純情は、そして二人の純潔は、悪者達にずたずたに汚され、傷みつけられた青春を最後に、それらの汚れを、天国で二人を幸せにするかのように、いま、この時、一瞬の間に硝煙のかたに昇華するのだ。

「来たッ！」

一せいに、わめく声。

つづいて、ドヤドヤツと、とんでくる足音。工夫一人のこらずが、洞穴めがけて、とんで走つた。

火薬の火は、すでに、中途でもみ消されていった。

いや、とんでもない方角——ゴーシェの立ち方はだかつている小高い岩の根元に誰がおきかえたか。一つの樽がころがつていた。それも導火線の白い煙さえ吹いて。

ガーン・ドーン！ 耳をつんざく轟音、そしてキナクさい煙……

煙がおさまつた時にあれほど傲慢に構えて、鬼畜のようにみだらに振るまい、ど鳴つていたゴーシェの姿はどこへ飛んでしまつたものか全くなかつた。

洞穴の犠牲者ポールとマドレーヌは、ぼろぼろになつた肉体をいたわり合い乍ら、ひくと抱き合つて山を下つていつた。

二人にとつて、心こそ、この純潔こそ肉体に優先する寶のすべてだつた。うしろから工夫たちの、涙にうるんだ声援が潮騒のように聞えてきた。

(おわり)

×

×

×

×